東京外国語大学記述言語学論集

思言

第 20 号

論文

モンゴル語において授与物を道具格で表す動詞……青木　隆浩 (3)
フィンランド語の内部格・外部格の教授法についての一考察…… 石井 (坂田)　晴奈 (19)
現代モンゴル語の相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の用法の違い
……エンフアムガラン　オノン (37)
ティディム・チン語におけるビルマ語由来の借用語……大塚　行誠 (47)
フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合……岡本　進 (73)
南琉球宮古語伊良部島方言における音節構造とモーラ構造……下地　理則 (87)
デジタルヒューマニティーズにおける『元朝秘史』全文検索システムの構築とその応用
……金罡 (117)
外国語としてのインドネシア語―専攻語ではない言語科目としての教育実践からの提案―
…… スリ　ブディ　ルスタリ (125)
平江影絵上演台本の分析……張　盛開 (143)
モンゴル語の副動詞に後続する 3 人称所有小詞 n’ について
…… ナムダグ　ハグバジャブ (163)
韓国語の-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する名詞述語について
―認識モダリティと証拠性に注目して―……韓　必南 (177)
ソロン語の奪格接辞 -dUxI の機能について……バイカル (199)
現代モンゴル語の名詞型の場所語が要求する格とその意味
―ömnö「南/前」、urd「南/前」を対象として― …… バスバヤル　ムンフダラム (213)
サマルカンド・タジク語における 2 つの所有構造について
…… 菱山　湧人・ファイズエワ　ザリナ (233)
ウズベク語における時間的連続と条件を表す節連結の意味的連続性…… 日髙　晋介 (245)
モンゴル語の動詞形式 -xAAr―節連結の意味とその形態的特徴から―…… 山田　洋平 (263)
パキスタン北部の基本味覚語彙……吉岡　乾 (283)
三角関係標示の広域類型論…… 小林　剛士 (301)
アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史…… 宮川　寛人 (313)
南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向……小林　颯 (323)
ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因…… 石橋　雄大 (333)

修士論文　要旨

インドネシア語における談話小辞機能研究の再検証
―インターネット上のテキストコミュニケーションを例に―…… 菅原　宜優 (345)
サマルカンド・タジク語の動詞体系…… ファイズエワ　ザリナ (355)
チェコ語の関係節における代名詞残留…… 松山　芳瑛 (365)

卒業論文　要旨

韓国の建設現場で使用される日本語系借用語の現状について……李　承容 (377)
ベトナム語の自称詞と対称詞について…… 大西　奈実 (385)
条件表現の日独対照…… 荻田　絢香 (393)
日本語・ヒンディー語のオノマトペの音象徴対照
―日本語で「キラキラ」な星はヒンディー語でも「キラキラ」なのか―…… 早田　仁知 (401)
広東語における“VV 吓”と共起する動詞及び言い換え可能な構造…… 津野　華穂 (409)
ウチナーヤマトゥグチにおける程度表現…… 照喜名　ももこ (417)
文語イナリ・サーミ語における定動詞と双数名詞句の一致について…… 長谷川　朝香 (425)
現代ロシア語における他動詞の否定生格と名詞句階層理論について…… 服部　壮留 (433)
スロヴェニア語の双数
―「両親」「双子」を表す語および方言で見られる特徴を中心に― …… 播磨　のぞみ (441)
ルーマニア語の時制の一致について―コーパスに基づく量的な分析―…… 山﨑　晴太 (449)
13 世紀の中高ドイツ語における否定表現“ne / en” “niht”の統語論的特徴 …… 湯澤　奏音 (457)
ドイツ語中間構文における動詞の制約…… 吉岡　亜哉 (465)
既刊号掲載論文一覧……(473)

2025 年

東京外国語大学　総合国際学研究科・言語文化学部

記述言語学研究室

序文

『思言』の第 20 号をお届けする。修論要旨は 3 本、卒論要旨は 12 本を収録している。今号の内容とレベルがどの程度のものかはわからないが、読んで下さる方々の評価を俟つ。広く御批判御叱正を賜りたい。言語学の進展に寄与するところがあれば幸いである。

10 号記念号の「まえがき」の時点では、10 年間に送り出した卒論は 114 本、修論は 30 本、主任指導で博士学位取得に至った博士論文は 7 本であった。今回の 20 号で 11 号から 20 号までを集計してみると、修論が 24 本、卒論が 136 本、博士論文は 10 本であった。学部生を 10 数人指導するとその中から 2, 3 人修士に進む者が現れ、さらにその中から 1 人 2 人博士に進む者が現れるように感じているが、ほぼそのような数字になっていることがわかる。

数字そのものはそれほど変わっていないが、自身の指導方法や、論文自体の質は前の 10 年より格段に上がっていると思いたい。しかし同時に一方で、各言語のコーパスや記述、WALS や Grambank などの類型的研究のためのデータベースをはじめ、世界の言語学の知識の蓄積も大きく進み、ネットをはじめとする技術の革新によりデータや論文へのアクセスも容易になり、言語学自体も大きく進展した。風間ゼミにおける言語研究が果たして世界の言語研究のスピードについて行けているのかどうか不明である。

10 号記念号でも記したが、外大の学生諸君の知的関心と誠実な取り組みはすばらしく、このような学生の教育に携わっている自分は全くもって幸せ者である。教員ともなると、雑事も多くなかなか論文に全力投球することが難しい。羨ましく思うと共に、学生の取り組んでいる姿勢とその大きな成果に反省させられることも多い。自分のポジションに深く感謝の念を抱きつつ、学生・院生たちの先頭に立ってやって行けるよう、自分自身がなお一層精進していきたいと思う。

本 20 号では、10 号記念号と同様に、ゼミの OBOG の方々に声をかけて、記念号への投稿をお願いした。とりまとめには山田洋平さん・岡本進さん・小林剛士さんに担当していただいた。お二人と御寄稿下さった諸氏に深くお礼申し上げたい。OBOG 諸氏のさらなるご活躍を期待したい。今号ではさらにゼミの有志が言語学会のワークショップで発表した「三角関係表示の広域類型論」の成果も寄稿してくれた。なおネット上の『思言』も利用していただければ幸いである。なおキーワード検索も可能である（http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kazama/Journal.html）。HP の整理・更新にはいつもながら山田怜央さんにお世話になっている。この場を借りて深くお礼申しあげたい。今号の編集にあたっては、長谷川朝香さん・宮川寛人さんが中心になって尽力してくださった。ゼミの院生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。前号に御意見を下さった方にもこの場を借りて深くお礼申し述べたい。

現状維持は退化と考え、新しいことにもチャレンジしていく一方で、今後もこうした継続的な形での成果も変わらぬ形で出し続けて行けるようでありたいと考えている。

2025 年 2 月 22 日

風間 伸次郎

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

思言 第 20 号 目次：

論文

モンゴル語において授与物を道具格で表す動詞
The Donatory Verbs That Require the Instrumental Case to Express Given Objects in Mongolian
……青木　隆浩 (3)

フィンランド語の内部格・外部格の教授法についての一考察
A Study on the Teaching Method for Finnish Locative Cases…… 石井 (坂田)　晴奈 (19)

現代モンゴル語の相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の用法の違い
Differences in Usage of the Modern Mongolian Reciprocal Pronouns “neg negnee and neg n’ negnee”
……エンフアムガラン　オノン (37)

ティディム・チン語におけるビルマ語由来の借用語
Burmese Loanwords in Tiddim Chin …… 大塚　行誠 (47)

フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合
Classifying Noun Incorporation in Vatulele Fijian …… 岡本　進 (73)

南琉球宮古語伊良部島方言における音節構造とモーラ構造
The Syllable Structure and Moraic Structure of Irabu Ryukyuan…… 下地　理則 (87)

デジタルヒューマニティーズにおける『元朝秘史』全文検索システムの構築とその応用
Construction and Application of the Full-Text Retrieval System for The Secret History of the Mongols in Digital Humanities……金罡 (117)

外国語としてのインドネシア語―専攻語ではない言語科目としての教育実践からの提案―
Indonesian as a Foreign Language: Suggestions from Educational Practice in Non-Major Language Courses…… スリ　ブディ　ルスタリ (125)

平江影戏演出剧本分析 / 平江影絵上演台本の分析
An analysis on the Performance script of Pingjiang Shadow Puppet Theater……張　盛開 (143)

モンゴル語の副動詞に後続する 3 人称所有小詞 n’ について
On the 3rd Person Possessive n' Following a Converb in Mongolian
…… ナムダグ　ハグバジャブ (163)

韓国語の-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する名詞述語について―認識モダリティと証拠性に注目して―
Evidentiality of Nominal predicates following epistemic modality -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta in Korean……韓　必南 (177)

ソロン語の奪格接辞 -dUxI の機能について
The Function of the Ablative Affix -dUxI in Solon……バイカル (199)

現代モンゴル語の名詞型の場所語が要求する格とその意味―ömnö「南/前」、urd「南/前」を対象として―
The Cases Required by Locative Nouns in Modern Mongolian and Their Meanings -Focusing on ömnö “south/front” and urd “south/front”-…… バスバヤル　ムンフダラム (213)

Two Possessive Constructions in Samarkand Tajik
サマルカンド・タジク語における 2 つの所有構造について
……菱山　湧人・ファイズエワ　ザリナ (233)

ウズベク語における時間的連続と条件を表す節連結の意味的連続性
Semantic Continuity of Clause Linkage between Temporal Succession and the Conditional in Uzbek……日髙　晋介 (245)

モンゴル語の動詞形式-xAAr―節連結の意味とその形態的特徴から―
Mongolian Verbal Form -xAAr -From a Perspective of Meaning and Formal Characteristics of Clause Linking-……山田　洋平 (263)

パキスタン北部の基本味覚語彙
Basic Taste Vocabulary in Northern Pakistan ……吉岡　乾 (283)

三角関係標示の広域類型論
A Global Typology of Triangular Relationship Markings……小林　剛士 (301)

アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史
Triangular Relationship Markings in Arabic Languages and Their Variation and History
……宮川　寛人 (313)

南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向
Triangular Relationship Markings in South Asian Languages and Their Super-Genealogical Trends ……小林　颯 (323)

ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因
Triangular Relationship Markings in European Languages and Their Motivation…石橋　雄大 (333)

修士論文　要旨

インドネシア語における談話小辞機能研究の再検証―インターネット上のテキストコミュニケーションを例に―
A Revalidation of Research Articles on Indonesian Discourse Particles: for Usage in Internet Text Communications ……菅原　宜優 (345)

The Verb System of Samarkand Tajik
サマルカンド・タジク語の動詞体系 …… ファイズエワ　ザリナ (355)

チェコ語の関係節における代名詞残留
Resumption in Czech Relative Clauses……松山　芳瑛 (365)

卒業論文　要旨

韓国の建設現場で使用される日本語系借用語の現状について
Current Status of Japanese Loanwords Used at Construction Sites in South Korea ‥‥李　承容 (377)

ベトナム語の自称詞と対称詞について
Self and Address Terms in Vietnamese……大西　奈実 (385)

条件表現の日独対照
A Contrastive Study on Conditional Expressions in Japanese and German ……荻田　絢香 (393)

日本語・ヒンディー語のオノマトペの音象徴対照―日本語で「キラキラ」な星はヒンディー語でも「キラキラ」なのか―
A Contrastive Study of Sound Symbolism in Japanese and Hindi……早田　仁知 (401)

広東語における“VV 吓”と共起する動詞及び言い換え可能な構造
Verbal Co-occurrence and Alternative Structures of The Aspectual Functions of “VV 吓” in Cantonese ……津野　華穂 (409)

ウチナーヤマトゥグチにおける程度表現
A Study on Degree Expressions in Okinawan Japanese ……照喜名　ももこ (417)

文語イナリ・サーミ語における定動詞と双数名詞句の一致について
Agreement System between Finite Verb and Dual Nominal Phrases in Literary Inari Saami ……長谷川　朝香 (425)

現代ロシア語における他動詞の否定生格と名詞句階層理論について
The Genitive of Negation in Russian and the Silverstein's Hierarchy of Feature of Noun Phrase
……服部　壮留 (433)

スロヴェニア語の双数―「両親」「双子」を表す語および方言で見られる特徴を中心に―
Slovenian Dual: Focusing on the Words "Parents" and "Twins", and the Features Observed in Slovenian Dialects ……播磨　のぞみ (441)

ルーマニア語の時制の一致について―コーパスに基づく量的な分析―
Sequence of Tenses in Romanian: A Corpus-based Quantitative Analysis ……山﨑　晴太 (449)

13 世紀の中高ドイツ語における否定表現"ne / en" "niht"の統語論的特徴
The Syntactic Features of the Negative Expressions "ne/en" and "niht" in Middle High German in the 13th Century ……湯澤　奏音 (457)

ドイツ語中間構文における動詞の制約
Verb Constraints on German Middle Constructions……吉岡　亜哉 (465)

既刊号掲載論文一覧……(473)

論文

モンゴル語において授与物を道具格で表す動詞

青木　隆浩
（昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校）

キーワード：授受動詞，道具格支配，複他動詞

1. はじめに

モンゴル語の動詞 šagnax (授与する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) は「受益先[1]- Yg [2] (対格・～を) ＋授与物- AAr [3] (道具格・～で) ＋šagnax (授与する) ／nerlex (名付ける) ／collox (称号を与える) 」の構文を取り、受益先 (授与物の移動先／与える相手) を対格、授与物を道具格で表す。šagnax (授与する) については橋本 (2015: 88) にて「具格が名詞句に THEME を付与する例」として取り上げられている。一方、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) が授与物を道具格で表すことについて明記してある先行研究は、管見では見当たらない。そのため、本稿では šagnax (授与する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) について道具格を用いずに他の格、構文で表現することが可能か否かを、コーパス調査およびネイティブコンサルタントへの調査で明らかにする。

なお、本稿で扱うモンゴル語は、原則としてモンゴル国で使用されているハルハ方言とする。例文中の番号、グロス表記は特に断りのない限り筆者による。本稿での例文の表記は、キリル文字による正書法に従い、これをローマ字転写したものを用いる。転写は以下の方式による：а=a, б=b, в=v, г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, л=l, м=m, н=n, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ш=š, ъ=”, ы=y, ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja.

2. 本稿におけるモンゴル語の「授受動詞」の定義

授与物を主語 (授与元) から受け手 (受益先) に移動させることを表す動詞は、一般的に「授受動詞」と呼ばれる。徳永 (2015: 254) によると、日本語の授受動詞には「あげる」「くれる」「もらう」という 3 系列およびその待遇的変異形である「やる」「さしあげる」「くださる」「いただく」の 3 系列 7 形式が存在すると述べられている。本稿ではモンゴル語の動詞のうち、授与元から受益先に授与物を与えることを表す動詞を「授受動詞」と定義し、ögöx (あげる、くれる) 、beleglex (プレゼントする) 、örgöx (捧げる) 、xürteex (授与する) 、olgox (与える) 、šagnax (賞を授与する、表彰する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) を「授受動詞」に含めることとする。これらの動詞を構文ごとに分類すると以下の表 1 のようになる。

[1] 以下、本稿では「授与元」「受益先」「授与物」の用語で統一する。「授与者」「受益者」でなく「授与元」「受益先」とするのは、「授与元」「受益先」が人間とは限らないためである。
[2] 形態素における大文字表記は母音調和などによる異形態のあることを示す。対格語尾には -yg / -ijg の 2 つの異形態が存在する。
[3] 道具格語尾には -aar / -oor / -eer / -öör の 4 つの異形態が存在する。

表 1：構文ごとの授受動詞一覧

構文	動詞
受益先-D[4] (与位格) ＋授与物-Yg (対格) ＋動詞[5] (受益先 (に) 授与物 (を) ～する)	ögöx (あげる、くれる) 、beleglex (プレゼントする) 、örgöx (捧げる) 、xürteex (授与する) 、olgox (与える)
受益先-Yg (対格) ＋授与物-AAr (道具格) ＋動詞[6] (受益先 (に) 授与物 (を) ～する) (直訳：受益先 (を) 授与物 (で) ～する)	šagnax (賞を授与する、表彰する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える)

(筆者作成)

上記のうち、「受益先-Yg (対格) ＋授与物-AAr (道具格) ＋動詞 (受益先 (に) 授与物 (を) ～する) 」の構文を取るものは「目上の立場 (権威ある立場) から目下の者に対して授与 (下賜) する」意味を持つ傾向にあると言えそうである。本稿ではこの構文を取る動詞 šagnax (賞を授与する、表彰する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) に焦点を当てて取り上げることとする。

3. 先行研究におけるモンゴル語の授受動詞の構文

本節では授受動詞のうち最も使用頻度が高いことが予測される ögöx (あげる、くれる) および授与物を道具格で表す šagnax (賞を授与する、表彰する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) の構文に関する先行研究の記述をまとめる。

3.1. ögöx（あげる、くれる）の構文

山田・山田 (2016) は複他動詞についての研究であるが、授受動詞である ögöx (あげる、くれる) を用いた例を取り上げている。下記は山田・山田 (2016: 12) の引用である。例文番号、グロス[7]、日本語訳と下線は出典に基づく。

[4] 与位格語尾には -d/ -t の 2 つの異形態が存在する。

[5] Malchukov et al. (2010: 3) では、このように受益先を与位格、授与物を対格で表す (Dative case on the R and Accusative on the P and the T) ものを indirective alignment と呼んでいる。

[6] Malchukov et al. (2010: 4) では、Fortescue (1984: 88) に掲載されている西グリーンランド語の例を挙げ、受益先を授与物を道具格、受益先を絶対格で表す (instrumental case on the T and Absolutive on the R and the P) ものを secundative alignment と呼んでいる。例文については 7 節で取り上げる。

[7] グロスは巻末のグロス一覧を参照。なお、原文中の PERF は perfect (完了) を表す。

1)	Би	дүүд$_R$[8]	тэр	номыг$_T$[9]	өгсөн.
	bi	düü-***d***	ter	nom-iig	ög-sön
	1SG	younger.brother-DAT	that	book-ACC	to.give-PERF

「私は弟に本をあげた」[recipient]

山田・山田 (2016: 12)

上記を見ると、受益先を与位格、授与物を対格で表していることがわかる。

3. 2. šagnax（賞を授与する、表彰する）の構文

次に、šagnax (賞を授与する、表彰する) についての先行研究を見ていく。モンゴル国で出版されているモンゴル語の辞書である Цэвэл (2013: 830) には、šagnax (賞を授与する、表彰する) の例文として以下を挙げている。下記は Цэвэл (2013: 830) の引用である。キリル文字は原文のままで、ローマ字転写したものを以下斜字体にして併記する。例文の格語尾に引いた下線およびグロス、日本語訳は筆者による。

онц бүтээл зүтгэл гаргаж гавьяа байгуулагчдад олгох хөхүүлэл, урамшлын зүйл; Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын хөдөлмөрийн баатар цол шагнах; мөнгө эд шагнах; одон тэмдэг шагнах; үнэмлэхээр шагнах.

onc büteel zütgel gargaž gav'jaa bajguulagčdad olgox xöxüülel, uramšlyn züjl; Bügd Najramdax Mongol Ard Ulsyn xödölmörijn baatar col šagnax; möngö ed šagnax; odon temdeg šagnax; ünemlexeer šagnax.

成果を上げて功績を残した人に与える励まし、奨励 ; モンゴル人民共和国の労働英雄の称号を与える ; 金品を与える ; 勲章を授与する ; 免許状を交付 (授与) する (直訳 : 免許状で授与する) 。

＜例文のグロス＞

Bügd	*Najramdax*	*Mongol*	*Ard*	*Uls-yn*	*xödölmör-ijn*	*baatar*	*col*	*šagna-x*
all	get along well with	Mongolia	people	nation-GEN	labor-GEN	hero	title	award-VN.NP

モンゴル人民共和国の労働英雄の称号を与える

möngö	*ed*	*šagna-x*
money	property	award-VN.NP

金品を与える

[8] Malchukov et al. (2010: 2) では、複他動詞構文 (ditransitive construction) は 複他動詞 (ditransitive verb)、A 項 (agent argument (A))、R 項 (recipient-like argument (R))、T 項 (theme argument (T)) からなると定義している (用語の日本語訳は山田 (2016: 3) による)。原文中の $_R$ は recipient-like argument すなわち「受け手 (受益先) 」を表す。

[9] 同上。原文中の $_T$ は theme argument すなわち「授与物」を表す。

od-o-n　　*temdeg*　　*šagna-x*
order-E-N　decoration　award-VN.NP
勲章を授与する

ünemlex-eer　　*šagna-x.*
license-INS　　award-VN.NP
免許状を交付 (授与) する (直訳：免許状で授与する)

Цэвэл　(2013: 830)

上記を見ると、何もついていない名詞を動詞の直前に置くことによって (ゼロ形式の不定対格[10]) 授与物を表している例と、道具格を用いて表している例がある。

《新蒙汉词典》编委会 (2002) は中国で出版されたモンゴル語―中国語辞書である。この辞書は対象言語を明記していないが、付録資料としてモンゴル国の機関の略称一覧なども掲載されており、モンゴル語の形式および例文はキリル文字で書かれているため、少なくともその対象にハルハ方言を含んでいると考えられる。この辞書では個々の動詞の記述部分に、意味と共にその動詞がどのような格と共起するかについての記述がある。ただ、šagnax (賞を授与する、表彰する) については授与物をどの格で表すかについての明記はない。しかし例文には道具格を用いた例が挙がっている。下記は《新蒙汉词典》编委会 (2002: 1608) の引用である。中国語とキリル文字は原文のままで、例文の格語尾に引いた下線およびグロス、日本語訳は筆者による。

❶奖赏，奖励，授奖，赏赐：одонгоор~ 奖以励章；мөнгө эд~ 物质奖励；❷授予：ард түмнээ халамжилсан үлгэр жишээч гэдэг цол ~в 授予爱民模范称号.
❶表彰する、褒賞する：*odongoor*~ 勲章で表彰する；*möngö ed*~ 金品で表彰する；❷授与する：*ard tümnee xalamžilsan ülger žišeeč gedeg col ~v* 人民を愛する模範国民という称号を授与する。

＜例文のグロス＞
od-o-n-g-oor　　*šagna-x*
order-E-N-E-INS　award-VN.NP
勲章で表彰する

[10] ここで「何もついていない名詞」の格が何の格であるのかという問題が出てくる。今回取り上げている動詞は授与物を道具格で表す動詞であることから、「道具格が省略されている」という見方も可能であり、「ゼロ形式の不定対格」という名称には議論の余地がある。しかし、現時点で定着した名称が確立できていないことから、本稿では風間 (1999: 60-70) の用語に従って「ゼロ形式」「不定対格」という言葉を用い、以下「ゼロ形式の不定対格」で統一する。

möngö *ed* *šagna-x*
money property award-VN.NP
金品で表彰する

ard *tümn-ee* *xalamžil-san* *ülger* *žišeeč* *gedeg* *col* *šagna-v*
people people-REFL love-VN.PST model example QT title award-TV.PST
人民を愛する模範国民という称号を授与する。

《新蒙汉词典》编委会 (2002: 1608)

中国語の解説を見ると、❶「～で表彰する」、❷「授与する」と 2 つの意味解釈がなされていることがわかる。しかし、❶の例文を見ると、「odongoor ~ 奖以励章 (勲章で表彰する＝勲章を授与する) 」では道具格が用いられているのに対し、「möngö ed~ 物质奖励 (金品を授与する) 」のように道具格を用いていない例もあることがわかる。❷は日本語の「～を授与する」に該当するが、例文はゼロ形式の不定対格で表していることがわかる。

なお、《新蒙汉词典》编委会 (2002: 1608) の「möngö ed~ 物质奖励 (金品を授与する) 」や、Цэвэл (2013: 830) の Bügd Najramdax Mongol Ard Ulsyn xödölmörijn baatar col šagnax (モンゴル人民共和国の労働英雄の称号を与える) 、möngö ed šagnax (金品を与える) 、odon temdeg šagnax (勲章を授与する) のような道具格を用いない例についてコンサルタント (6 節参照) に確認したところ、やはり道具格がないと不自然に感じるとのことである。上記の用例はいずれも辞書の例文であり、動詞が辞書形[11]になっている。その場合には、道具格がない例文も許容されるという。いわば「モンゴル人民共和国労働英雄称号授与」のような語感に近いと思われる。

3. 3. nerlex (名付ける) の構文

次に nerlex (名付ける) の先行研究における記述を見る。下記は Цэвэл (2013: 399) の引用である。道具格が用いられている箇所の下線およびグロス、日本語訳は筆者による。

1. хүн, юмны нэрийг хэлэх, нэрээр нь нэрлэх; 2. юманд нэр өгөх.
1. xün, jumny nerijg xelex, nereer n'nerlex; 2. jumand ner ögöx.
1. 人、物の名前を言う。その名前で名付ける ; 2. 物に名前を与える。

＜例文のグロス＞
ner-eer=n' *nerl-e-x*
name-INS=3.POSS name-E-VN.NP
その名前で名付ける

Цэвэл (2013: 399)

[11] モンゴル語学では、いわゆる辞書に掲載されている動詞の形を「形動詞形」と呼ぶことがあるが、ここでは辞書の表記という特性に注目し便宜上「辞書形」と呼ぶことにする。

日本語では「名前を付ける」と表現するところを、モンゴル語では「名前で付ける」のように道具格が用いられていることがわかる。

下記は nerlex (名付ける) に関する《新蒙汉词典》编委会 (2002: 777) の引用である。グロスおよび日本語訳は筆者による。

> 〔动〕①定名，称谓[12]，起名，命名：чи хэн гэж ~в? 你叫什么名字？怎么称呼你？~ийн тийн ялгал 〈语〉主格；②叫名字，称呼.
>
> ［動詞］①名付ける、命名する：*či xen gež ~v?*君はなんていう名前なんだ？君のことをどう呼べばいいんだい？*~ijn tijn jalgal*＜文法＞主格；②名前を呼ぶ、～と呼ぶ。
>
> ＜例文のグロス＞
>
> *či* *xen* *gež* *nerl-e-v?*
>
> 2.SG who QT name-E-TV.PST
>
> 君はなんていう名前なんだ？君のことをどう呼べばいいんだい？
>
> 《新蒙汉词典》编委会 (2002: 777)

上記では授与物を道具格で表す例は見られない。

3.4. collox（称号を与える）の構文

続いて collox (称号を与える) の先行研究における記載を見る。下記は Цэвэл (2013: 789) の引用である。グロス、日本語訳は筆者による。

> хүчит бөх, хурдан морь зэрэгт олгосон цолыг олны дунд өндөр дуугаар хэлэх ба цол олгох; бөх цоллох; морь цоллох.
>
> *xüčit böx, xurdan mor' zeregt olgoson colyg olny dund öndör duugaar xelex ba col olgox; böx collox; mor' collox.*
>
> 強い力士、駿馬などに与えた称号を大勢の前で高らかに言うことおよび称号を与えること；力士に称号を与える；馬に称号を与える。
>
> ＜例文のグロス＞
>
> *böx* *collox*
>
> wrestler confer title
>
> 力士に称号を与える

[12] “称谓”（親族・身分・職務などの名称、呼称）の品詞について、中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2012: 163) では「名詞」の記載のみである。したがって、ここでは訳出しないこととする。

mor’ collox.
horse confer title
馬に称号を与える

Цэвэл (2013: 789)

上記では授与物を道具格で表した例は見られず、いずれの例文もゼロ形式の不定対格で表している。

下記は collox（称号を与える）に関する《新蒙汉词典》编委会 (2002: 1531) の引用である。日本語訳は筆者による。

〔动〕❶赞扬，称赞；❷授予称号，宣告称号；授衔，授学位，授学衔.
［動詞］❶称賛する；❷称号を授与する；職位を与える、学位を授与する。

《新蒙汉词典》编委会 (2002: 1531)

上記は中国語による解説のみであり、モンゴル語の例文は取り上げられていない。

4. コーパス調査の方法

授与物を道具格で表す動詞にどのようなものがあるかを調べるため、コーパス調査を行う。コーパスは、Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスである Mongolian National Corpus (http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/) (総語数 1,160,000 語) を使用する。検索手順は以下のとおりである。

①道具格語尾を、その母音調和による異形態のすべてでもって検索する。
②検索できたすべての例文を Excel により整理する。
③格語尾の直後に動詞が来ていて、その動詞が単独かつ終止形 (文末の形動詞形含む) である例のみを残す。
④③の述語動詞が授受動詞である例のみを抽出する。

上記の③の手順を踏む理由としては、まず一つ目に、モンゴル語の連用形語尾が豊富で、複文においてはしばしば格語尾がどの動詞にかかっているのかが判断しがたいためである。単独かつ終止形で終わる動詞のみを抽出することで、格語尾に直接関係する動詞が判断しやすいようにした。二つ目に、道具格語尾をそのまま検索すると本研究に関係のないデータが大量にヒットするため、ある程度範囲を絞ることで調査の効率化を図った。

5. コーパス調査において得られた道具格支配の授受動詞

4 節で述べた方法でコーパス検索を行った結果、道具格語尾と共起した例は 458 例中 7 例得られた。その内訳は、ögöx (あげる) が 1 例、šagnax (賞を授与する、表彰する) が 4 例、nerlex (名付ける) が 2 例であった。ただし、ögöx (あげる) の 1 例については授与物を道具格で表しているわけではないため、本稿では割愛する。以下、コーパスで得られた例文を抜粋して取り上げる。出典は特に断りのない限りは Mongolian National Corpus からの引用である。

次の (1) は šagnax (賞を授与する、表彰する) の例である。“受益先-Yg (対格・〜を) ＋授与物-AAr (道具格・〜で) ＋šagnax (賞を授与する、表彰する)” (受益先 (に) 授与物 (を) 授与する) の構文になっている。

(1) *Esergüü nar ix jalalt-yn bajar xij-ž Xongor-yg ded žanžin*
anti PL.NOM big victory-GEN festival do-CV.IMPF PN-ACC deputy soldier
örgömžil-ž «Xatan zorig-t bürged baatar» {col-oor} šagna-v.
award-CV.IMPF strong courage-PROP hawk hero title-INS award-TV.PST
反対者たちは大勝利の祭りを開催し、ホンゴルを副将校に昇格させ、「勇猛果敢な鷹の英雄」の称号を与えた。

次に、nerlex (名付ける) の例を見ていく。下記の (2) は “受益先-Yg (対格) ＋授与物-AAr (道具格) ＋nerlex (名付ける)” (受益先 (に) 授与物 (を) 名付ける) の構文となっている。

(2) *Xerev namajg sana-val daxin av-san gergij-g*
if 1.SG.ACC remember-CV.COND again get-VN.PST wife-ACC
minij {ner-eer} nerle-gtün.
1.SG.GEN name-INS name-TV.OPT
もし私を恋しく思ったら、再婚で娶った夫人に私の名前を授けたまえ。

4 節で述べたコーパスの検索方法で例文を抽出した結果、得られた道具格支配の授受動詞は以上の 2 つのみであった。道具格と共起する授受動詞が他にもあるかどうかを調べるため、次の方法で再度検索を行った。

① šagnax (賞を授与する) と共起した名詞の多くは šagnal (賞) 、col (称号) であったことから、šagnal (賞) 、col (称号) で検索をかけ、共起する動詞のコロケーションを調べる。
② šagnal (賞) 、col (称号) のキリル文字表記にアスタリスク[13]を付けた шагнал* および цол* で検索をかけ、これらの名詞がどのような格やどのような動詞と共起するのかを調べる。

[13] アスタリスク (*) は情報処理における「ワイルドカード文字」で、任意の文字列を表す特殊文字である。そのため、例えば “шагнал*” で検索すると、 “шагналтай” や “шагналд” などを一度に抽出することが可能である。

上記①の方法で検索したところ、šagnal (賞) は 50 例、col (称号) は 51 例がヒットしたが、授与物を道具格で表す動詞は見当たらなかった。

上記②の方法で検索したところ、本調査と関係のない単語も含め шагнал* は 50 例、цол* は 74 例がヒットしたが、道具格、対格、再帰語尾およびゼロ形式の不定対格以外の格で授与物を表す例は見当たらなかった。しかし、цол* で検索した結果、col (称号) に動詞派生接辞が付いた動詞 collox (称号を与える) 、さらに使役接辞が付いた動詞 colluulax (称号を与えられる＝直訳：称号を与えさせる) を用いた例が計 13 例ヒットした。そのうちから 3 つの例文を抜粋して以下 (3)~(5) に示す。

下記 (3) は “授与元 (主格 無語尾・～が) ＋授与物-AAr (道具格・～で) ＋collox (称号を与える)” (授与元 (が) 授与物＝称号 (を) 与える) の構文で、受益先は明示されていない。なお、後続の例文が nerlex (名付ける) を用いた例であるため、参考までに掲載する。

(3) *Colmon* *ix* *{col-oor}=čin'* *coll-o-ž*
PN.NOM large title-INS=2.SG.POSS award-E-CV.IMPF
Comcoj-n *suu-ž* *ajltga-n* *duud-nam*
cross-legged-CV.ASS sit-CV.IMPF report-CV.ASS call-TV.NP
Nerlem *ix* *ner-eer=čin'* *nerl-e-ž*
PN.NOM large name-INS=2.SG.POSS name-E-CV.IMPF
Nevsij-n *suu-ž* *duud-nam*
disheveled-CV.ASS sit-CV.IMPF call-TV.NP
ツォルモンは偉大なる称号を与え
胡坐をかいて呼ぶ
ネルレムは偉大なる名前を付け
偉そうに座って呼ぶ

次の (4) は “授与物＋xemeen (引用・～と) ＋collox (称号を与える)” (授与物 (という) 称号を与える) の構文である。ここでは受益先となる人物は明示されていないが、文脈から文頭の Damdin (ダムディン (人名)) を指していると思われる。

(4) *Damdin* *neg* *oroj* *sanamsargüj* *genet* *xür-eed* *ir-e-x* *šig*
PN.NOM one evening by chance suddenly reach-CV.PA come-E-VN.NP like
suuri-n-y *ajl* *bür-ijn* *zuragt-aar* *jaria* *delge-n* *böön*
residence -N-GEN family every-GEN television-INS talk expand-CV.ASS very
šuugian *xačirxal* *bol-ž* *nevtrüülg-ijn* *xötlögč=n'*
noisy humor become-CV.IMPF broadcasting-GEN anchorperson.NOM=3.POSS

örgöö-n-ij-x-öö *xojmor* *zavil-san* *xödöö-n-ij* *erdemtd-ijn*
palace-N-GEN-E-REFL north sit-VN.PST countryside-N-GEN scholar.PL-GEN
neg-e-n *xemeen* *{coll-o-v}.*
one-E-N QT award-E-TV.PST
ダムディンはある日の晩、突然やって来たかのように住宅街の家々のテレビを通じて喋りだすと盛り上がり、番組司会者は (ダムディンに対し) 「宮殿の上座に胡坐をかく田舎学者の一人」という称号を与えた。

次の (5) は collox (称号を与える) に使役接辞が付いた colluulax (称号を与えられる＝直訳: 称号を与えさせる) の例である。"受益先-AA (再帰語尾・自分の (を)) ＋授与物 (ゼロ形式 無語尾) ＋colluulax (称号を与えられる)" (受益先 (が) 授与物 (を) 与えられる) という構文で、再帰語尾が「称号を授与される相手」を表している。

(5) *Šonxoloj* *xüü-g-ee* *col* *{coll-uul-ž},* *ner* *nerl-üül-ž*
PN.NOM son-E-REFL title award-CAUS-CV.IMPF name name-CAUS-CV.IMPF
baj-x-yg *üz-eed* *bajarl-a-ž,* (後略) .
be-VN.NP-ACC see-CV.PA glad-E-CV.IMPF
ションホロイは子供が称号を与えられ、名前を授けられているのを見て喜び、 (後略) 。

なお、モンゴル語の使役文では一般的に動作主を道具格で表すが、そもそも道具格支配の授受動詞においては授与元となる動作主をどの格で表すのだろうか。一文中に 2 つ道具格を取った名詞が現れるのだろうか。そこで、その構文を調べるため、šagnax (授与する) に使役接辞が付いた šagnuulax (賞を授与される＝直訳: 賞を授与させる) に、さらに過去形の形動詞形語尾 -san (〜た) を付けた形でコーパス検索を行った。また、šagnax (授与する) に受身接辞が付いた šagnagdax (賞を授与される) についても同様の方法で検索を行った。その結果、下記 (6) (7) のような例が得られた。下記 (6) は "授与元-AAs[14] (奪格・〜から) ＋授与物-AAr (道具格・〜で) ＋šagnuulax (賞を授与される)" (授与元 (から) 授与物 (を) 授与される) の構文であり、動作主 (授与元) を奪格で表していることがわかる。

(6) *Šonxoloj-g-oos* *num-aar* *{šagn-uul-san}* *Dülxižjeg,* *ter* *xarval*
PN-E-ABL bow-INS award-CAUS-VN.PST PN.NOM 3.SG firing
üz-eed *devxc-e-n* *bajarl-a-ž,* (後略) .
see-CV.PA junp-E-CV.ASS glad-E-CV.IMPF
ションホロイから褒美として弓を与えられたドゥルヒジェグは、その弓矢の飛び具合を見てぴょんぴょん飛び跳ねて喜び、 (後略) 。

[14] 奪格語尾には - aas / -oos / -ees / -öös の 4 つの異形態が存在する。

下記 (7) は “授与元-AAs (奪格・～から) ＋授与物-AAr (道具格・～で) ＋šagnagdax (賞を授与される)”(授与元 (から) 授与物 (を) 授与される) の構文であるが、ここでも使役文の場合と同様に動作主 (授与元) を奪格で表している。

(7) *ard-yn* *cerg-ijn* *alba-n-aas* *xal-a-gd-a-n* *tavi-n*
people-GEN army-GEN service-N-ABL expunge-E-PASS-E-CV.ASS fifty-N
lan *möngö,* *deel-ijn* *xojor* *čisčüüi,* *bjardaan* *buu-g-aar*
counter suffix silver clothes-GEN two silk gun gun-E-INS
{šagna-gd-san} *tuxaj-g-aa* *bajartaj* *jari-v.*
award-PASS-VN.PST about-E-REFL glad speak-TV.PST
人民軍を退役し (直訳: 軍から除隊され) 、銀 50 両、絹の服を 2 着、銃を与えられたことについて嬉しそうに話した。

上記 (7) の奪格は xalagdan (除隊され) と šagnagdsan (賞を授与された) の 2 つの動詞にかかっていると解釈できる。なお、šagnagdsan (賞を授与された) で検索して得られた例は合計 7 例であったが、授与物を道具格で表したものが 5 例、残りの 2 例はゼロ形式の不定対格で表していた。

6. 道具格支配の授受動詞に関するコンサルタント調査による検証

本節ではコーパス調査で得られた授受動詞について、モンゴル語母語話者であるコンサルタントに対し、他の格を用いた表現に置き換えが可能か否かを尋ねる。コンサルタントはモンゴル国ウヴルハンガイ県出身で 1989 年生まれの女性である。

まず、šagnax (授与する) について、授与する相手 (受益先) を与位格で、授与物を対格もしくはゼロ形式の不定対格で表した例 (8a) と、授与する相手 (受益先) を対格で、授与物をゼロ形式の不定対格で表した例 (8b) が発話可能かどうかを尋ねたが、いずれも非文になるとのことであった。

(8a) * *Bi* *Xongor-t* *《Baatar》* *{col / col-yg}* *šagna-san.*
1.SG.NOM PN-DAT hero title title-ACC award-TV.PST
私はホンゴルに「英雄」賞を授与した。
(筆者とコンサルタントの共同作例)

(8b) * *Bi* *Xongor-yg* *《Baatar》* *col* *šagna-san.*
1.SG.NOM PN-ACC hero title award-TV.PST
私はホンゴルに「英雄」賞を授与した。
(筆者とコンサルタントの共同作例)

次に、nerlex (名付ける) についても授与する相手 (受益先) を対格のほか再帰語尾でも表現することが可能か否かを尋ねた。下記 (9a) (9b) に例を挙げる。

(9a)*Bi* *{xüüxd-yg* / *xüüxd-ee}* *övöö-g-ijn* *ner-eer* *nerl-e-sen.*
1.SG.NOM child-ACC child-REFL grandpa-E-GEN name-INS name-E-VN.PST
私は子供に祖父の名前を名付けた。
(筆者とコンサルタントの共同作例)

(9b)*Bi* *{xüüxd-yg* / *xüüxd-ee}* *Baatar* *gež* *nerl-e-sen.*
1.SG.NOM child-ACC child-REFL PN QT name-E-VN.PST
私は子供にバータルと名付けた。
(筆者とコンサルタントの共同作例)

コンサルタントによると、(9a) (9b) の例は、対格名詞もしくは再帰語尾を取った名詞のいずれでも自然な文であるという。

次に、3.3 節で取り上げた《新蒙汉词典》编委会 (2002: 777) の例文を再掲する。

【再掲】
či *xen* *gež* *nerl-e-v?*
2.SG.NOM who QT name-E-TV.PST
你叫什么名字? 怎么称呼你?
君はなんていう名前なんだ？君のことをどう呼べばいいんだい？
《新蒙汉词典》编委会 (2002: 777)

上記の中国語訳を参考にモンゴル語原文を分析すると、2 人称単数を表す či (君) は nerlex (名付ける) の目的語 (ゼロ形式の不定対格) であることがわかる。それを証明するため、či (君) を対格にしたものが成立可能か否かをコンサルタントに尋ねたところ、対格も可能とのことであった。下記 (10) に例を示す。

(10)*Čamajg* *xen* *gež* *nerl-e-v?*
2.SG.ACC who QT name-E-TV.PST
君はなんていう名前なんだ？君のことをどう呼べばいいんだい？
《新蒙汉词典》编委会 (2002: 777) をもとに作例

さらに、collox (称号を与える) についても受益先を与位格、授与物を対格で表した構文に置き換えが可能か否かを尋ねた。下記 (11) に例を示す。

(11) *Bi* *{tüünijg* *《Baatar》* *col-oor* / **tüünd* *《Baatar》* *col-yg}*
1.SG.NOM 3.SG.ACC hero title-INS 3.SG.DAT hero title-ACC
coll-o-son.
award-E-TV.PST
私は彼に「英雄」の称号を授けた。

(筆者とコンサルタントの共同作例)

コンサルタントによると上記 (11) では「受益先を与位格、授与物を対格」で表した場合は非文となり、「なんとなく意味はわかるが違和感を覚える」という。

以上、授受動詞 šagnax (授与する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) は “授与元 (主格無語尾・〜が) ＋受益先-Yg (対格・〜を) ＋授与物-AAr (道具格・〜で) ＋動詞” の構文を取り、表 1 および 3.1 節で見た動詞 ögöx (あげる) に代表される一般的な授受動詞のように受益先を与位格、授与物を対格で表すことはできず、そのような表現では「誰が誰に何を」という関係性が不明瞭になるということが明らかになった。さらに、使役文と受身文においては授与物を道具格 (もしくはゼロ形式の不定対格) で表し、授与元は奪格で表すことがわかった。モンゴル語の授受動詞は「目上の立場 (権威ある立場) から目下の者に対して授与 (下賜) する」意味を持つ動詞においてこの構文が見られる傾向にあると言えそうである。

7. 他言語における「授与物を道具格で表す授受動詞」の例

本節では他言語における道具格支配の授受動詞の例を先行研究に基づいて見ていく。

Fortescue (1984: 88)、Malchukov (2010: 4)、山田 (2016: 4) では西グリーンランド語において授与物を道具格で表す例が取り上げられている。下記は Fortescue (1984: 88) の引用である。日本語訳は山田 (2016: 4) による。

(Uuma) Niisi aningaasa-nik tuni-vaa.
(that.ERG) PN money-INSTR.PL give-IND.3SG->3SG
‘He geve Nisi money.’
彼はニーシにお金をあげた。

Fortescue (1984: 88)

次に中国語の例を見ていく。依藤他 (2016: 1862) は現代中国語の “以” (〜で以って) について、「“给以、予以、借以、用以、加以、难以” などは、現代中国語においては、すでに固定した一つの複合動詞になっている。これらの動詞は必ず動詞を目的語に取る。」とし、以下の例を挙げている。ピンインとグロスは筆者による。文中の “-” は一語扱いの語を形態素で分けたことを表す。

予-以　解决。
Yǔ-yǐ　jiějué.
give-by　solution
解決を与える。

借-以　教育　大家。
Jiè-yǐ　jiàoyù　dàjiā.
borrow-by　educate　everyone
みんなを教育する手だてとする。

依藤他 (2016: 1862)

以上、極めて簡単にではあるが、授与物を道具格もしくはそれに準ずる形式で表す例について見てきた。西グリーンランド語では授受動詞の対象物となる「授与物」を道具格で表し、中国語では道具格に準ずる形式である介詞 (前置詞) で授与物を表すことがわかった。

8. まとめと今後の展望

今回はコーパス調査およびコンサルタントへの調査によって、モンゴル語の授受動詞 šagnax (授与する) 、nerlex (名付ける) 、collox (称号を与える) の構文を明らかにした。一方で、これら以外にも受益先を対格、授受物を道具格で表す授受動詞が存在するのか否かについては確認ができていない。また、今回はハルハ方言に対象を限定して調査を行ったが、内モンゴルをはじめとした各方言でも果たして同じ構文を用いるのかという疑問点は残ったままである。今後は調査対象とする方言を増やし、より多くの母語話者からデータを集めたいと考えている。さらに他言語でも同様の例が見られるのか否かについては、今後より多くの言語の記述を参照することによって考察を進めていきたいと考えている。

略号一覧

-:	suffix boundary	接辞境界	E :	epenthesis	音添加
=:	clitic boundary	接語境界	GEN :	genitive	属格
1:	first person	一人称	IMPF :	imperfective	未完了
2:	second person	二人称	INS :	instrumental	造格
3:	third person	三人称	N :	hidden N	隠れた N
ABL:	ablative	奪格	NOM :	nominative	主格
ACC:	accusative	対格	NP :	non past	非過去
ASS:	associative	連合	OPT :	optative	希求
CAUS :	causative	使役	PA :	perfect action	完結
COND :	conditional	仮定	PASS :	passive	受身
CV :	converb	副動詞語尾	PL :	plural	複数
DAT :	dative-locative	与位格	PN :	personal name	人名

POSS :	possessive	人称所属	REFL :	reflexive possessive	再帰所属
PROP :	proprietive	所有	SG :	singular	単数
PST :	past	過去	TV :	terminating verbal	終止語尾
QT :	quotation	引用	VN :	verbal nominal	形動詞語尾

参考文献

＜日本語文献＞

風間伸次郎 (1999) 「ツングース諸語における指定格について」『語学研究所論集』4. 51-79.

徳永千枝子 (2015) 「授受動詞の分類について: ヤルとアゲルの意味的差異を中心に」『九州大学言語学論集』35. 254-265.

橋本邦彦 (2015) 「モンゴル語の補語の意味論 - 格と述語との意味役割の一致について - 」『北海道言語文化研究』13. 49-102.

山田洋平 (2016) 「複他動詞構文 (Ditransitive construction) とその周辺に存在する問題点—Malchukov et al. (2010) の枠組みをもとにして—」『思言: 東京外国語大学記述言語学論集』12. 3-8.

山田洋平・山田怜央 (2016)「複他動詞の意味地図」『思言: 東京外国語大学記述言語学論集』12. 9-22.

依藤淳・呉川・三宅登之・加藤晴子・植村麻紀子 (2016) 『中日辞典　第 3 版』東京: 小学館.

＜モンゴル語文献＞

Цэвэл, Я. (2013) *Монгол хэлний товч тайлбар толь 2-дугаар хэвлэл.* Улаанбаатар: Мөнхийн Үсэг.

＜英語文献＞

Fortescue, Michael D. (1984) *West Greenlandic*. London: Croom Helm.

Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) Ditransitive constructions: a typological overview. In: *Studies in Ditransitive Constructions A Comparative Handbook*. 1-64. Berlin/New York: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG.

＜中国語文献＞

《新蒙汉词典》编委会 (2002) 『新蒙汉词典』北京: 商务印书馆.

中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2012)『现代汉语词典 (第 6 版)』北京: 商务印书馆.

調査資料

＜使用したコーパス＞

Mongolian National Corpus. http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/ (最終閲覧日: 2024 年 9 月 30 日)

謝辞

本稿の執筆に当たり、東京外国語大学大学院博士後期課程の N. Lkhagvajav 様には、モンゴル語母語話者として多くの貴重なアドバイスをいただきました。株式会社アンビシャスにてコンテンツ制作、また教材の編集および校正に従事されている林屋啓子様には、校閲を丁寧に行っていただきました。さらに、二名の査読者の方からは多くの建設的な助言をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

ただし、本稿における誤謬はすべて筆者の責に帰するものといたします。

The Donatory Verbs That Require the Instrumental Case to Express Given Objects in Mongolian

AOKI Takahiro
(Showa Women's University Junior-Senior High School)

The Mongolian common donatory verbs require the construction "giver (nominative case) + receiver-D (dative case) + given object-IJg (accusative case) + verb", however the donatory verbs such as šagnax (*шагнах* / award), nerlex (*нэрлэх* / name), collox (*цоллох* / award) require the construction "giver (nominative case) + receiver-IJg (accusative case) + given object-AAr (instrumental case) + verb".

In this paper, I demonstrated that this construction is mandatory and cannot be replaced by other constructions by conducting a corpus survey and a survey of native speakers.

I also examined examples of West Greenlandic and Chinese donatory verbs. It turned out that some donatory verbs in those languages use the instrumental case to express the given object. As a result, it became evident that donatory verbs expressing "given from authority to subordinate" tend to require this kind of construction.

フィンランド語の内部格・外部格の教授法についての一考察

石井（坂田）　晴奈
（東京外国語大学非常勤講師）

キーワード：フィンランド語，場所格，内部格と外部格，外国語教育

1. はじめに

本稿の目的は、フィンランド語[1]の場所格、特に内部格と外部格の使い分けを学習者にどのように教えるのが効果的かを考え、教授法の一案を提示することである。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で前提となる知識を概観したのち、3 節で現在出版されている教材における場所格の教授実態をまとめる。4 節で問題提起をし、5 節で場所格の教授法を検討・考察する。最後に 6 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿における例文と図表の番号、グロス、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 背景知識

フィンランド語には、場所を表す格語尾が 6 種類存在する。フィンランド語の最も大規模な文法書 *Iso suomen kielioppi* (Hakulinen et al. (2004)、以下 ISK とする) を基に、場所格の名称と略号、格形、およびその意味を表 1 に示す。イタリック体の語は ISK によるフィンランド語である。

表 1: 場所格の体系

	内部格	**外部格**
存在 *olosija* **「～で」**	内格 (inessive) [INE] -ssa/ssä	接格 (adessive) [ADE] -lla/llä
分離 *erosija* **「～から」**	出格 (elative) [ELA] -sta/stä	離格 (ablative) [ABL] -lta/ltä
着地 *tulosija* **「～へ」**	入格 (illative) [ILL] -Vn, -hVn, -seen	向格 (allative) [ALL] -lle

(ISK: 1190 を基に筆者作成)

[1] フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する膠着語である。音声特徴としては母音調和がある。名詞の格変化が 15 種あり、動詞は人称 (単数、複数の 1～3 人称の他に受動形という不定人称形がある)、時制 (現在、過去、現在完了、過去完了)、法 (直説法、条件法、可能法、命令法) によって語形変化する。また否定動詞という人称活用を伴う否定形を持つのが特徴である。基本語順は SVO、修飾部先行型で、概ね後置詞型である。表記は全て正書法に基づく。

6 つの場所格のうち、内格、出格、入格は内部格に、接格、離格、向格は外部格に分類される。それぞれの区分内では、存在、分離、着地の意味を持つ格に分かれる。表中の「〜で」などの日本語は、日本人学習者に教える際によく使われる訳語である。母音調和による異形態はスラッシュ (/) で表している。入格については、名詞語幹の音節構造による異形態があり、V は語幹末の母音を表す。また、入格には複数標識-i-との融合があるため、表 1 の入格は単数形のみ示した (複数入格：-in, -hin, -siin)。

ISK (1190-1191) は、内部格と外部格が典型的に表すものをまとめている。それによると、内部格が典型的に表すのは「境界 (制限) のあるスペースの内側」という位置であり、外部格が典型的に表すのは「外側もしくは上面」という位置である。さらに、外部格に関しては「境界 (制限) のない場所、近隣」を表すとも記述している。 (1) は内部格の典型例、 (2) は外部格の典型例である。以下、例文中のイタリック体の語は場所格を伴う語である。

(1)　*Yhde-ssä*　*laatiko-ssa*　ol-i　merkin=anto=lippu-j-a.
one-INE　box-INE　be-PST.3SG　mark=giving=flag-PL-PART
「1 つの箱の中に合図をするための旗が (数枚) 入っていた。」

(ISK: 1190)

(2)　*Ava-tu-lla*　*kämmene-llä*　ol-i　onki=mato.
open-PASS.PTCP-ADE　palm-ADE　be-PST.3SG　fishing=worm
「開かれた手のひらの上に釣り用の虫がいた。」

(ISK: 1191)

学習者、特に初級者には「基本的に、内部格は建物など中に入れる場所に使い、外部格は表面にしか接しないなど中に入れない場所に使う」と教えるのが一般的である。しかし、実際の使用においては、この説明だけでは不十分である。ISK (1191) は外部格が「境界 (制限) のない場所、近隣」を表す場合もあるとして、以下のような例を挙げている。

(3)　Kuul-i-n　*kirko-lla*　tei-stä.
hear-PST-1SG　church-ADE　you.PL-ELA
「私は教会の辺りであなたたちのことを聞いた。」

(ISK: 1191)

(4)　Nä-i-t-kö　häne-n　myös　palaa-va-n　*ranta=sauna-lta*?
see-PST-2SG-Q　he/she-GEN　also　return-PRS.PTCP-GEN　shore=sauna-ABL
「あなたは彼/彼女が岸辺のサウナ近くから戻るのも見たのか？」

(ISK: 1191)

上記の例における kirkolla, rantasaunalta は、教会や岸辺のサウナの上や表面を表すのではなく、当該施設の周辺や近隣を意味している。また、ISK (1192) は以下のようにも述べている。引用部分とその例を示す。

> ある程度広範な場所については、その場所にいる物/者がより制限された内部にいる場合は内部格が用いられ、制限なくその範囲にいる場合は外部格が用いられる。
>
> (ISK: 1192)

(5a) *Piha-ssa* saa siis periaattee-ssa ajaa korti-tta.
yard-INE may.PRS.3SG namely principle-INE drive card-ABE
「つまり庭の中では原則として、免許証なしで運転してもよい。」

(ISK: 1192)

(5b) Alle 15-vuotias ei saa ajaa *koti=piha-lla-an* (...)
under 15_years_old NEG.3SG may drive home=yard-ADE-POSS.3
ruohonleikkuri-a.
lawnmower-PART
「15 歳未満は、自分の家の庭で (中略) 芝刈り機を運転してはいけない。」

(ISK: 1192)

(5a) と (5b) は、名詞 piha「庭」および piha を用いた複合語が場所格を伴っている。(5a) では「免許証なしで運転できる範囲」という制限されたエリアが内部格で表されていると解釈できる。一方 (5b) では「家の庭のどこであっても芝刈り機を運転してはいけない」ことを示すため、制限がやや弱い外部格を用いたと考えられる。

さらに、ISK (1192) では施設を表す名詞について話す場合に「内部格は施設での業務など何らかの目的があることを表しうるが、外部格は施設とは直接関係ない目的があることを表しうる」として以下の 2 例を挙げている。

(6a) Lapse-ni ei ole vielä *koulu-ssa*.
child-POSS.1SG NEG.3SG be.PRS yet school-INE
「私の子供はまだ学校にいない (＝学校に通っていない)。」

(ISK: 1192)

(6b) Tytö-t men-i-vät pelaa-ma-an lentopallo-a *koulu-lle*.
girl-PL go-PST-3PL play-3INF-ILL volleyball-PART school-ALL
「少女たちはバレーボールをしに学校へ行った。」

(ISK: 1192)

(6a), (6b) の例ではいずれも名詞 koulu「学校」が場所格を伴っている。学校は本来勉学を目的とする施設である。 (6a) では koulussa という内部格を用いることによって「学校に通う」つまり勉学を目的として施設にいることを表している。一方 (6b) で koululle という外部格を用いるのは、学校での主たる目的ではないバレーボールをしに行くためと考えられる。同様の例は吉田 (2010: 40) にも見られる。吉田 (2010) は、近年日本で刊行された文法書としては最も詳細な記述があるもので、その大部分は ISK の記述を参考にしている。

(7a) Poika　　on　　*koulu-ssa*.
　　boy　　be.PRS.3SG　　school-INE
「少年は (生徒として勉強するために) 学校にいる／通っている。」
(吉田 2010: 40)

(7b) Isä　　on　　*koulu-lla*.
　　father　　be.PRS.3SG　　school-ADE
「父は (何かの用事で) 学校にいる。」
(吉田 2010: 40)

第二言語としてフィンランド語を教授する現場では、 (6a) 〜 (7b) のような例は学習者に教えきれていない、あるいは教えにくい傾向にある。

3. 場所格の教授実態

本節では、フィンランドと日本で出版された入門書 4 冊ずつについて、場所格の解説を確認する。3.1 節ではフィンランドでの教授実態を、3.2 節では日本での教授実態をまとめる。比較する入門書は以下の通りである (初版年順、版数は上付き文字で示す) 。以降、それぞれのタイトルを【】内の略称で示す。

［フィンランドで出版された入門書］

Nuutinen, Olli (2005[15] [1978]) *Suomea suomeksi 1*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.【SS】

White, Leila (2017[13] [1998]) *From Start to Finnish*. Helsinki: Finn Lectura.【FS】

Heikkilä, Satu and Pirkko Majakangas (2007[6] [2002]) *Hyvin menee! –suomea aikuisille*. Helsinki: Otava.【HM】

Kuparinen, Kristiina and Terhi Tapaninen (2019[7] [2015]) *Oma Suomi 1*. Helsinki: Otava.【OS】

［日本で出版された入門書］

栗原薫、マルユットゥ・コウリ (2002) 『フィンランド語が面白いほど身につく本』東京: 中経出版.【面白い】

佐久間淳一 (2004) 『フィンランド語のすすめ　初級編』東京: 研究社.【すすめ】

千葉庄寿 (2018[4] [2007]) 『ゼロから話せるフィンランド語』東京: 三修社.【ゼロ】

山川亜古 (2018) 『ニューエクスプレスプラス　フィンランド語』
東京: 白水社【エクスプレス】

各教材の記述は以下のような点に注目してまとめる。
(A) 内部格と外部格の違いについての解説があるか
(B) 同じ語でも内部格と外部格を使い分けることで意味が変わる例が示されているか
(C) (6a)〜(7b) のような違い、つまり施設で果たす目的が関わる場合の説明はあるか

なお、場所格が手段など場所以外を意味する場合もあるが、本稿では考察対象から外す。

3.1. フィンランド

フィンランドで出版された入門書 4 冊について、場所格の記述をまとめると以下のようになる。 (A)〜(C) は先述の注目点である。

表 2: フィンランドの教材における場所格の記述

注目点 / 入門書	(A)	(B)	(C)
【SS】	○	×	×
【FS】	○	○	×
【HM】	○	×	×
【OS】	○	○	×

全ての教材で、内部格と外部格の違いがイラストを添えて解説されていた。したがって、(A) に関する内容はどの教材にも言及があったと言える。

一方、【SS】と【HM】、【FS】と【OS】とで (B) の○×の分布が分かれているのがわかる。同じ語で内部格と外部格を使い分ける例は【FS】と【OS】にのみ言及があった。その理由は推測の域を出ないが、【HM】は英語で書かれた教材であること、【OS】は比較的近年に出版された教材であることが関連している可能性がある。

(C) に関する内容、つまり施設で果たす目的による場所格の使い分けはどの教材でも言及されていない。

次ページより、教材ごとに場所格の説明で使用されたイラストと解説の概要を示す。イラストはいずれも、内部格が「内側」を、外部格が「外側あるいは表面」を表すという印象を与えるものである。

3.1.1. 【SS】の場合

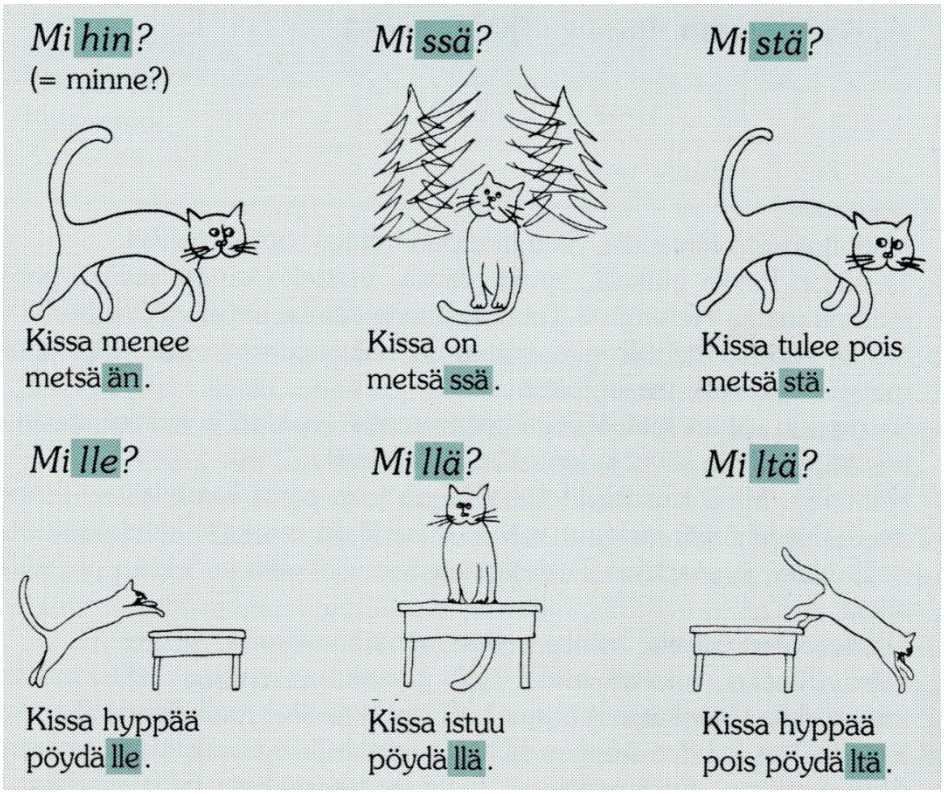


図 1: 【SS】の場所格解説イラスト (Nuutinen 2005[15]: 93)

内部格と外部格の違いをイラスト (図 1) で説明している。内部格を使う例として metsä「森」を、外部格を使う例として pöytä[2]「テーブル」を挙げ、それぞれの格形を示しているが、文章による説明がほとんどない。 (B) や (C) のような内容は記述されていない。

[2] pöytä のように、語幹の末尾子音が k, p, t のいずれかである場合、格変化の際に語幹の末尾子音には有声化、短音化、消失などの変化が起こる場合がある (この現象を子音階程交替という)。そのため、図 1 における場所格の形式では pöydä-と変化している。

3.1.2. 【FS】の場合

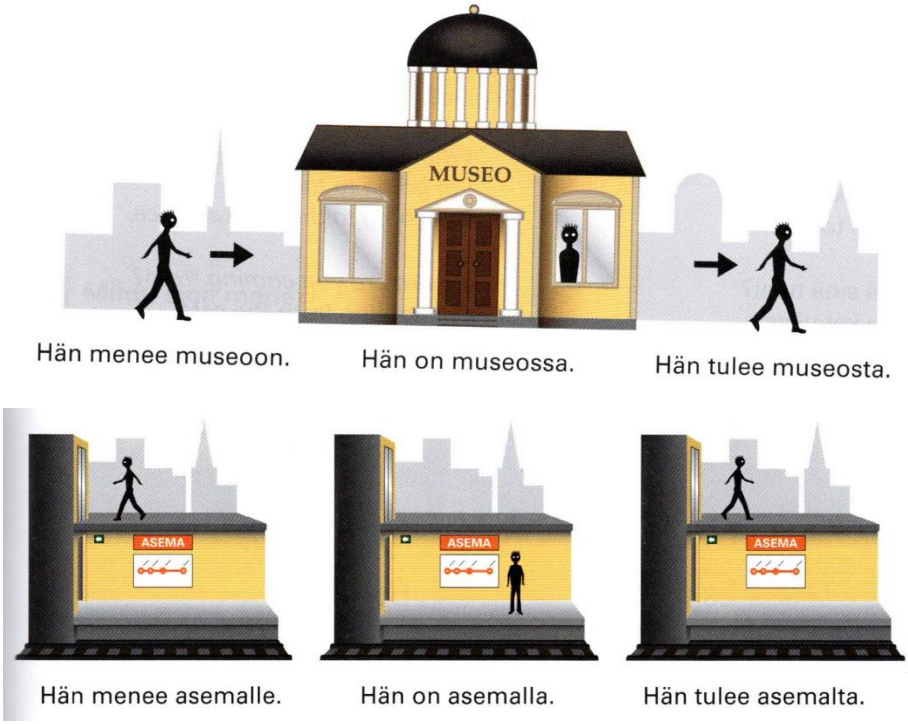


図 2: 【FS】の場所格解説イラスト (White 2017[13]: 120-121)

内部格と外部格の違いをイラスト (図 2) で説明している。内部格を使う例として museo「博物館」を、外部格を使う例として asema「駅」を挙げ、それぞれの格形を示している。文章による説明が若干あるが、図の補足にとどまっている。

(B) については、内部格と外部格の両方を使い分ける語の例が出ている ((8a)〜(8c) に示す) 。なお、(C) のような内容は記述されていない。

(8a)	maa	maa-han	maa-lle
	country/ground	country/ground-ILL	country/ground-ALL
	「国、土地」	「国へ、地面 (の中) へ」	「郊外へ」

(8b)	taivas	taivaa-seen	taivaa-lle
	sky/heaven	sky/heaven-ILL	sky/heaven-ALL
	「空、天国」	「天国へ」	「空へ」

(8c)	katto	katto-on	kato-lle
	ceiling/roof	ceiling/roof-ILL	ceiling/roof-ALL
	「天井、屋根」	「天井へ」	「屋根へ」

(White 2017[13]: 121 を一部改変)

3.1.3. 【HM】の場合

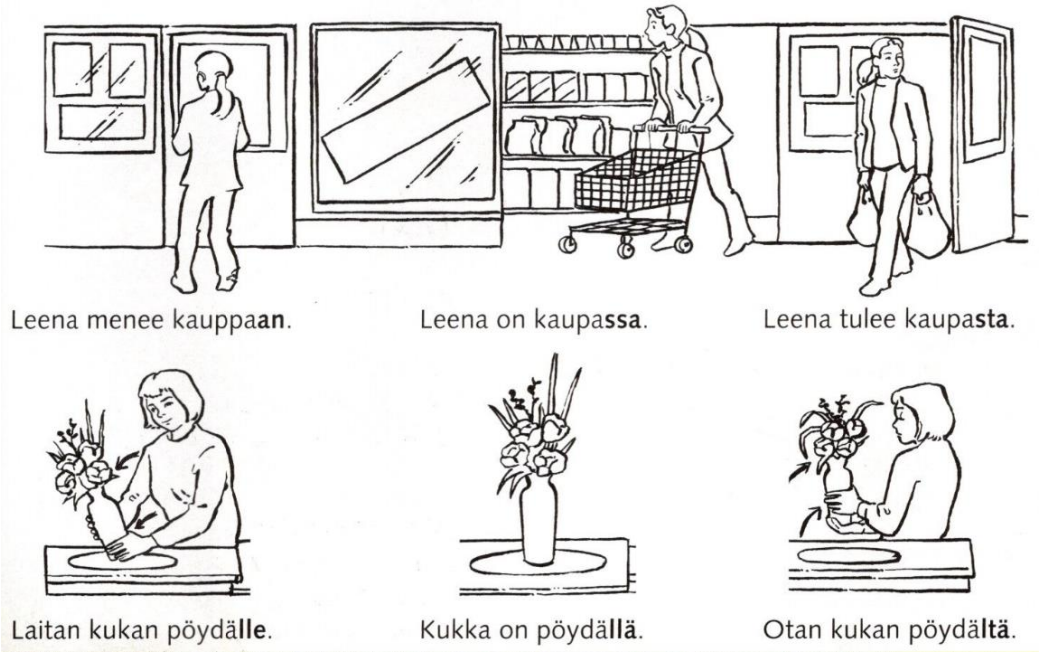


図 3: 【HM】の場所格解説イラスト (Heikkilä and Majakangas 2007[6]: 100)

内部格と外部格の違いをイラスト (図 3) で説明している。内部格を使う例として kauppa「店」を、外部格を使う例として pöytä「テーブル」を挙げ、それぞれの格形を示している。内部格は「内側」、外部格は「外側、表面」という表現を用いて使い分けを説明している。(B) や (C) のような内容は記述されていない。

3.1.4. 【OS】の場合

図 4: 【OS】の場所格解説イラスト (Kuparinen and Tapaninen 2019[7]: 119)

内部格と外部格の違いをイラスト (図 4) で説明している。内部格を使う例として laukku「かばん」を、外部格を使う例として pöytä「テーブル」を挙げ、それぞれの格形を示している。内部格と外部格の使い分けについて、文章による説明は見られない。一方、(B) については、内部格と外部格の両方を使い分ける例として名詞 ovi「ドア」を用いた文が示されている ((9a), (9b) に示す)。なお、(C) のような内容は記述されていない。

(9a)	Missä	lappu	on?	Se	on	*ove-ssa*.
	where	label	be.PRS.3SG	it	be.PRS.3SG	door-INE

「紙切れはどこか？それはドアに貼ってある。」

(9b)	Missä	mies	on?	Hän	on	*ove-lla*.
	where	man	be.PRS.3SG	he	be.PRS.3SG	door-ADE

「男性はどこか？彼はドアのそばにいる。」

(Kuparinen and Tapaninen 2019[7]: 120)

(9a) の文は、ドアに小さな紙切れがテープで貼り付けられている写真とともに掲載されている。(9b) の文は、半開きのドアのそばに男性が立っている写真とともに掲載されている。例文の説明はない。(9a) の紙切れはドアにめり込んでいるわけではないが、(9b) の男

性と比べればドアへの密着度が高いと解釈でき、そのため (9a) では内部格が使われていると考えられる。

3.2. 日本

日本で出版された入門書 4 冊について、場所格の記述をまとめると以下のようになる。

表 3: 日本の教材における場所格の記述

注目点 / 入門書	(A)	(B)	(C)
【面白い】	○	×	×
【すすめ】	○	○	×
【ゼロ】	○	×	×
【エクスプレス】	○	○	×

全ての教材で内部格と外部格の違いが解説されていた。フィンランドの教材同様、(A) に関する内容はどの教材にも言及があったと言える。しかし、フィンランドの教材のようなイラストはなく、【エクスプレス】に位置関係を示す図があるのみであった。

(B) については、日本の教材においても○×の分布が分かれている。同じ語で内部格と外部格を用いる意味の違いは【すすめ】と【エクスプレス】にのみ言及があった。これら 2 つの教材は、文法書としてはかなり詳細な記述がある。一方【面白い】と【ゼロ】は会話表現を中心とした教材であり、(B) のような細かい内容は省かれたと、筆者は推察する。

(C) に関する内容、つまり施設で果たす目的による場所格の使い分けはどの教材でも言及されていない。

以下より、各教材の場所格についての記述を紹介する。

3.2.1. 【面白い】の場合

会話文の解説として、地名に用いる内部格と外部格の違いに言及している。さらに巻末の文法編では、内部格を「～の中」、外部格を「～の上、表面」というイメージで解説している。(B) や (C) のような内容は記述されていない。

3.2.2. 【すすめ】の場合

会話文の解説として、場所格の基本的な用法に言及している。さらに、内部格が「中」、外部格が「外」という解説では説明できない例として、【FS】にあった (8a), (8c) と同じ例を示している。加えて【すすめ】ではもう一つ、以下の例を提示している。

(10) kioski　　kioski-ssa　　kioski-lla
　　kiosk　　kiosk-INE　　kiosk-ADE
「キオスク」　「キオスクの中に」　「キオスクのそばに」

(佐久間 2004: 193)

(10) は名詞 kioski が伴う場所格の使い分けを示しているが、kioski は外部格を伴うことが多い。「キオスクで働いている」のような、常にキオスクに出入りすることを含意する表現でなければ内部格は使われにくい。よって学習者には、「kioski には通常外部格を用いる」と教えるのが普通である。

なお、【すすめ】は以下のような例も示している。(11) は、【OS】で示していた (9a) の例に近い。

(11) Poja-lla[3]　on　reppu　*selä-ssä*.
　　boy-ADE　be.PRS.3SG　backpack　back-INE
「男の子は背中にリュックをしょっている。」

(佐久間 2004: 193)

3.2.3. 【ゼロ】の場合

会話文の解説として、地名に用いる内部格と外部格の違いに言及している。さらに巻末の文法編では、内部格を「〜の中」、外部格を「〜の上、表面」というイメージで解説している。以上の点は【面白い】と同様である。(B) や (C) のような内容は記述されていない。

3.2.4. 【エクスプレス】の場合

会話文の解説として、場所格の基本的な用法に言及している。また、次ページの図 5 によって、内部格と外部格の違いを解説している。

[3] 文頭の pojalla は名詞 poika「少年」の接格形である。これは所有文 (「A が B を持つ」という意味の構文) の構成要素として現れたもので、場所格としての意味はない。フィンランド語の所有文は「所有者-接格＋動詞 olla「ある、いる」＋所有物」で表される。

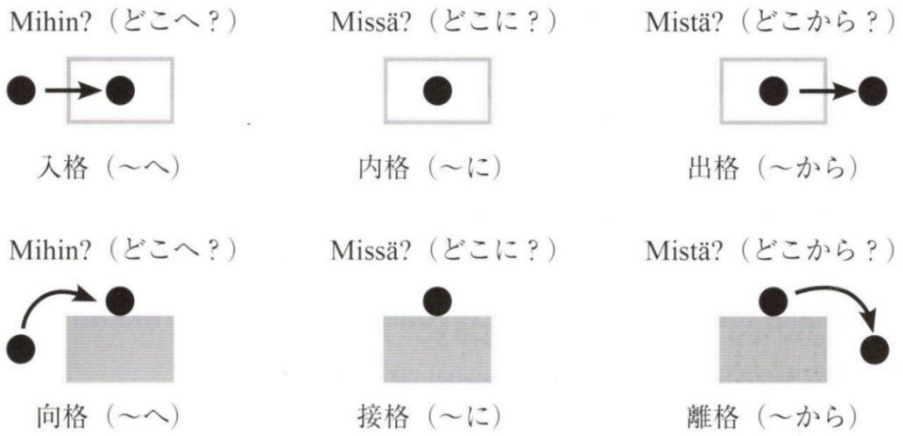


図 5: 【エクスプレス】の場所格解説図 (山川 2018: 101)[4]

(B) については (8a) と同様の例 (maa「国」の意味について) が示されているものの、それ以上の記述はない。(C) のような内容も記述されていない。

日本で出版された教材にイラストがない理由は不明であるが、学習者としては視覚教材があった方が理解がしやすいと筆者は考え、拙著 (石井 (2019: 40)) では以下のようなイラストを入れた。イラスト使用による学習効果は客観的には考察していないが、一定の効果はあると考える。

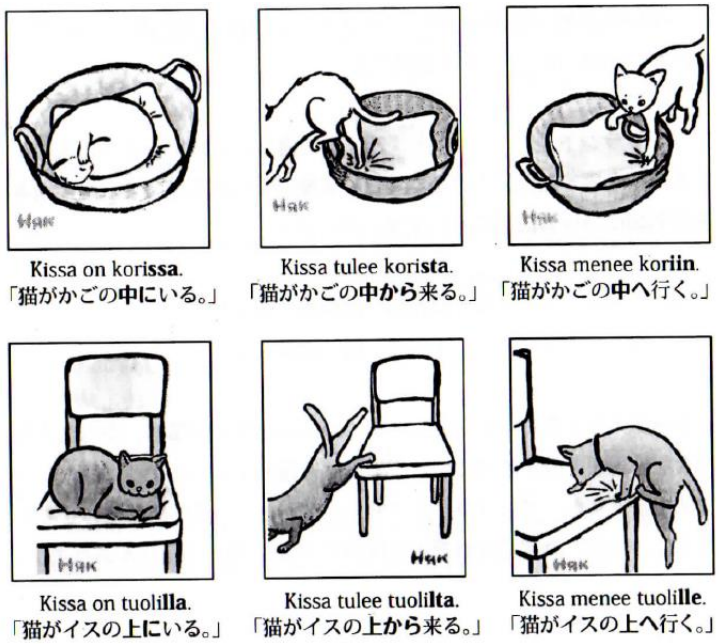


図 6: 石井 (2019: 40) における場所格解説図

[4] 図 5 において、内部格と外部格についての疑問表現がそれぞれ mihin, missä, mistä という内部格の疑問詞で統一されている。外部格の疑問詞が存在する (mille, millä, miltä) のに図 5 に載せていない理由は、著者に確認していないので不明である。ただし、答えとなる名詞が内部格と外部格のどちらを伴うかわからない場合は内部格の疑問詞を用いるのが普通である。そのため、図 5 では疑問表現が内部格で統一されていると考えられる。

4. 問題提起

3 節では、フィンランドと日本の教材における場所格の教授法をまとめた。ここで、一つの問題点を提起したい。

内部格は「中」を、外部格は「外/表面」を表すと基本的には言えるのだが、これだけを学習者に教えると、内部格と外部格の違いに関する理解が不正確になる懸念がある。

内部格と外部格の違いを具体例で説明する時、「建物など中に入ることができるものには内部格しか使わない」、そして「道路など中に入ることができないものには外部格しか使わない」という印象が学習者に与えられる。3 節で示した図 1〜図 5 のような視覚教材を用いると、そういった印象はなおさら強められる。「中に入れるものには内部格、中に入れず接することしかできないものには外部格を使う」という認識ができあがった後、(6b), (7b), (9a) のような、学校に外部格が用いられる例、あるいはドアに内部格が用いられる例に出会った時に多くの学習者は疑問を抱く。

場所格の教授法の全体像を考察するには、 (9a), (9b) のような密着度の違いや、そもそも外部格しかほぼ用いられない asema「駅」のような語を考慮する必要がある。しかし本稿では、施設を表す名詞が場所格を伴う場合に特化して、3 節に挙げた (B), (C) の注目点をもとに考察を行う。

5. 場所格の教授法を考える

施設を表す名詞が場所格を伴う場合、下記の 2 点を考慮しなければならない。

［1］施設内にいるか、そうでないか
［2］施設の本来の目的を果たすか、それ以外の目的があるか

内部格と外部格の基本的な違いについては、ISK にあった「境界 (制限) 」という概念がキーワードになる。「何らかの境界や制限のある場所ならば内部格を用い、特に境界や制限がない場所ならば外部格を用いる」という説明は簡潔である。しかし、「境界 (制限) 」という概念だけでは、上記［1］、［2］を過不足なく説明するのは難しい。

［1］は物理的な位置関係を問題にしている。一方［2］は動作主の目的を問題にしており、この 2 点は観点が異なる。しかし実例を見ると、どちらの点が問題になっているのか判断が難しいこともある。

以下の (12a) は Yle uutiset「フィンランド国営放送ニュース」の記事の見出しである。学校での事件に衝撃を受けた市民が、祈りをささげるため教会に集まったという記事である。この例で名詞 kirkko「教会」は内部格を伴っている。祈りをささげるのは教会の内部で行われることなので、物理的に教会の中に入ることが想定される、つまり［1］の観点から内部格を選択しているように見える。しかし同時に、教会の本来の目的 (祈りをささげること) を果たす、つまり［2］の観点から内部格が用いられていると解釈することもできる。

(12b) も Yle uutiset の記事中の文である。夏季休暇の平和宣言を聞きに人々が集まったという記事である。この例では名詞 kirkko が外部格を伴っている。［2］の観点から、教会の本

来の目的を果たすため、つまり祈りをささげるために集まったわけではないので外部格が用いられていると考えることもできる。しかし一方で、[1]の観点からも解釈が可能である。市民が平和宣言を聞くのは教会の内部ではなく、入口の扉に近い教会の外側で、つまり物理的には教会の中に入ってはいない。そのため、kirkko には外部格が用いられているとも考えられるのである。

(12a)	Tikkurila-n	*kirkko-on*	kokoontu-i	koulu=surma-sta	
	Tikkurila-GEN	church-ILL	gather-PST.3SG	school=murder-ELA	
	järkytty-ne-i-tä		vantaalais-i-a		
	be.shocked-PST.PTCP-PL-PART		citizen_of_Vantaa-PL-PART		

「学校での殺人事件に衝撃を受けたヴァンター市民がティックリラ教会に集まった」

(Yle uutiset: 2.4.2024)

(12b)	Kerimäe-n	*kirko-lle*	kokoontu-i	runsaasti	ihmis-i-ä
	Kerimäki-GEN	church-ALL	gather-PST.3SG	profusely	person-PL-PART
	kuule-ma-an	julistus-ta.			
	hear-3INF-ILL	declaration-PART			

「宣言を聞きに、ケリマキ教会には大勢の人が集まった。」

(Yle uutiset: 13.6.2015)

さらに、学習者の混乱を招きかねない例として (13a), (13b) の例を示す。この2例はKirkko Vantaalla「ヴァンターにある教会」というウェブサイトからの引用である。いずれも教会への行き方を説明した文で内容も似通っているが、名詞 kirkko「教会」が内部格と外部格のどちらも伴うことができるのがわかる。(13a) の内部格の例では saapua (>saavutaan) 「到着する」、(13b) の外部格の例では päästä (>pääsee) 「行ける」という異なる動詞が用いられているが、これらの動詞は内部格と外部格の選択に影響しない。

(13a), (13b) は動作主の目的が何であっても良いので、［2］の観点では考えにくい。したがって［1］の観点から解釈をする必要があるが、いずれも教会への交通手段を述べているので、物理的な位置関係は関係ないはずである。(13b) で外部格を用いているのは、教会の建物に到達するというよりも、教会がある敷地に到達する、というニュアンスを含ませるためと考えられるが、両者の違いは学習者に説明しにくい。

(13a)	Tikkurila-n	*kirkko-on*	saavu-taan	julkis-i-lla	
	Tikkurila-GEN	church-ILL	arrive-PASS.PRS	public-PL-ADE	
	kulku=neuvo-i-lla,		polkupyörä-llä	tai	kävell-e-n.
	traffic=institution-PL-ADE		bicycle-ADE	or	walk-2INF-INS

「ティックリラ教会へは、公共交通機関、自転車、徒歩で行ける。」

(Kirkko Vantaalla - Tikkurilan kirkko - Saapuminen)

(13b) Tikkurila-n *kirko-lle* pääse-e hyvin julkis-i-lla
Tikkurila-GEN church-ALL reach-PRS.3SG well public-PL-ADE
kulku=väline-i-llä.
traffic=means-PL-ADE
「ティックリラ教会へは、公共交通手段を使って行ける。」
(Kirkko Vantaalla - Tikkurilan kirkko - Saapuminen kirkolle)

(12a), (12b) の違いおよび (13a), (13b) の違いは学習者にとって理解しにくいが、日常ではよくある使い方である。一般化したルールではなく、個別の施設を例として説明するのがわかりやすい教授法ではある。一方で、内部格と外部格の違いを説明する際には［1］と［2］の区別に言及すべきである。現行の教材ではそのような説明をしているものはほとんどないと見受けられるが、筆者は［1］と［2］の区別を重視したいと考えている。

6. おわりに

本稿では、フィンランド語の内部格と外部格の違いを学習者に教授する際の留意点として、以下のような点を挙げる。

まず、内部格と外部格の違いは ISK の記述にある「境界 (制限) 」という概念が非常に重要である。

そして、同じ語で内部格と外部格を使い分ける場合は、［1］施設内にいるか、そうでないか、［2］施設の本来の目的を果たすか、それ以外の目的があるか、という 2 つの観点が必要である。［1］と［2］のどちらが関わるかは文脈によるところもあるが、具体例を示しつつ教授するべきである。

今後の課題としては、以下のような点が挙げられる。

- 外部格のみを伴う名詞についての説明
- (9a), (11) のような密着度の違いによる内部格と外部格の使い分けをどう教授するか
- 観点［1］と観点［2］の両方が考えられる例の教授

上記の 3 点は、本稿では考察が不十分である。今後は実例を分析する他、ネイティブへのアンケートなどを基に、効果的な教授法を提案したい。その教授法を現場で実践し、教育効果を考えることも必要である。また、英語の前置詞や日本語の格助詞の教授法で参考にできることはないか、考察したい。

略号一覧

1:	1st person	ELA:	Elative	POSS:	Possessive suffix
2:	2nd person	GEN:	Genitive	PRS:	Present tense
3:	3rd person	ILL:	Illative	PST:	Past tense
2INF:	2nd infinitive	INE:	Inessive	PTCP:	Participle
3INF:	3rd infinitive	INS:	Instructive	Q:	Question particle
ABE:	Abessive	NEG:	Negative verb	SG:	Singular
ABL:	Ablative	PART:	Partitive		
ADE:	Adessive	PASS:	Passive		
ALL:	Allative	PL:	Plural		

参考文献

Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen and Irja Alho (2004) *Iso suomen kielioppi.* Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Heikkilä, Satu and Pirkko Majakangas (2007[6] [2002]) *Hyvin menee! –suomea aikuisille*. Helsinki: Otava.

Kuparinen, Kristiina and Terhi Tapaninen (2019[7] [2015]) *Oma Suomi 1*. Helsinki: Otava.

Nuutinen, Olli (2005[15] [1978]) *Suomea suomeksi 1*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

White, Leila (2017[13] [1998]) *From Start to Finnish*. Helsinki: Finn Lectura.

石井晴奈 (2019) 『Moi からはじめよう　フィンランド語の手ほどき』東京: ビネバル出版.

栗原薫、マルユットゥ・コウリ (2002) 『フィンランド語が面白いほど身につく本』東京: 中経出版.

佐久間淳一 (2004) 『フィンランド語のすすめ　初級編』東京: 研究社.

千葉庄寿 (2018[4] [2007]) 『ゼロから話せるフィンランド語』東京: 三修社.

山川亜古 (2018) 『ニューエクスプレスプラス　フィンランド語』東京: 白水社.

吉田欣吾 (2010) 『フィンランド語文法ハンドブック』東京: 白水社.

参照ウェブサイト

Kirkko Vantaalla – Tikkurilan kirkko - Saapuminen (https://www.vantaanseurakunnat.fi/kirkot-ja-tilat/kirkot-ja-kappelit/tikkurilan-kirkko) 最終アクセス: 2025 年 1 月 9 日

Kirkko Vantaalla – Tikkurilan kirkko – Saapuminen kirkolle (https://www.vantaanseurakunnat.fi/kirkot-ja-tilat/kirkot-ja-kappelit/tikkurilan-kirkko/saapuminen-kirkolle) 最終アクセス日: 2025 年 1 月 9 日

Yle uutiset: 13.6.2015 (https://yle.fi/a/3-8072779) 最終アクセス日: 2025 年 1 月 9 日

Yle uutiset: 2.4.2024 (https://yle.fi/a/74-20081766) 最終アクセス日: 2025 年 1 月 9 日

A Study on the Teaching Method for Finnish Locative Cases

Haruna Ishii (Sakata)
(part-time lecturer at Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Finnish, locative case, internal case and external case, foreign language education

The purpose of this study is to propose the effective teaching method for Finnish locative cases. There are 6 locative cases in Finnish and they are divided into 2 types; internal case and external case. The inessive, the elative, and the illative belong to internal case and the adessive, the ablative, and the allative belong to external case. The internal cases and the external cases are used depending on the property of location or the manner of action. However, there are many examples which cannot explain simply. On this study I compared the teaching method for locative cases on grammar textbooks published in Finland and in Japan. Through this comparison I propose the teaching method for locative cases, considering the purpose and the situation.

現代モンゴル語の相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の用法の違い

エンフアムガラン　オノン
（博士後期課程　世界言語社会専攻）

キーワード：現代モンゴル語，相互代名詞，neg negnee，neg n' negnee

1. はじめに

本稿では、現代モンゴル語の相互代名詞である neg negnee と neg n’ negnee の使い方の違いやその特徴を明らかにする。モンゴル語には、相互代名詞は二種類あり、その一つである bije bije の研究はあるものの、neg negnee と neg n’ negnee の研究は少ない。さらに、neg n’ negnee と人称代名詞複数形の特徴も紹介する。日本語訳にする際は「一、一」と訳す。なお、本文中の例文番号、図表番号、グロス、外国語文献の日本語への訳出は、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 先行研究

Nedjalkov et al. (2007: 1332) は、相互代名詞 neg negnee に関して、以下のように述べている。なお、先行研究の引用文の表記は先行研究のままにする。

> *Reduplication of non-spatial components*
> *‘This pattern used to refer to the participants themselves is represented by numerous items, some of which are very close in meaning to* ***beye beye-*** *and compete with it, like the phrase* ***nege neg-iig-ee****, and others are less commonly used and differ from the reciprocal pronoun in meaning to a greater or lesser degree.’*
>
> Nedjalkov et al. (2007: 1332)

「非」空間的構成要素の重複

このパターンは参与者自身を指すために用いられる。このパターンは多数の項目で表され、中には nege neg-iig-ee、というフレーズのように beye beye- と意味において非常に近く、競合するものもあれば、あまり使われず相互代名詞とは大なり小なり意味を異にするものもある。

(1) bide nege neg-iig-ee xamgaala-xa üüreg-tee yum.
we one one-ACC-REFL defend-PART duty-ADJ AUX
‘We must defend each other.’

(2) Xoyor büsgui neg negen-d-ee yum xašgira-dža bai-na.
two girl one another-DAT-REFL something shout-CONV AUX-PRS
‘Two girls are shouting something to each other.’

neg neg-eer (INS) ‘one after another’

3. 先行研究のまとめと問題提起

Nedjalkov et al. (2007) は、モンゴル語の相互代名詞である neg negnee について述べているが、もう一つの形である neg n’ negnee については述べていない。モンゴル語の相互代名詞 neg negnee に関する調査は、かなり少なく、同じ意味で使われている bije bije との違い、使い分けに関しても記述は見当たらない。本稿では、[相互代名詞 neg negnee + 再帰 + 諸格形] と [相互代名詞 neg n’ negnee + 再帰 + 諸格形] について、さらに相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の違い、人物名詞 + 複数接尾辞 + neg negnee、人称代名詞複数形 + neg negnee / negnee について調査を行う。

4. 調査方法

Mongolian National Corpus と Google を用いて調査を行う。コーパスと Google を用いて、相互代名詞 neg negnee の用法及び特徴を明らかにする。最初に、[neg negnee + 再帰 + 諸格形]といった形で検索する。同じ方法で、[neg n’ negnee + 再帰 + 諸格形] で検索して表にまとめる。neg negnee と neg n’ negnee の違いを探るため検索結果で得た例文を目視で観察し、それらの特徴を示す。さらに、人物名詞 + 複数接尾辞 + neg negnee の形で検索する。以下に、調査結果を示す。

5. 調査結果

5.1. 相互代名詞 neg negnee + 諸格形 + 再帰

本稿では、相互代名詞 neg negnee の諸格形と再帰の共起の結果を表と例文で示す。以下、表 1 でまとめる。

表 1: 相互代名詞 neg negnee + 諸格形 + 再帰のコーパス / Google による検索結果

主格 + 再帰	neg negnee	2 / 886,000
属格 + 再帰	neg negnijxee	7 / 276,000
対格 + 再帰	neg negnijgee	3 / 264,000
与格 + 再帰	neg negendee	7 / 815,000
道具格 + 再帰	neg negeeree	0 / 26,500
起点格 + 再帰	neg negneesee	1 / 302,000
共同格 + 再帰	neg negentejgee	1 / 68,500
方向格 + 再帰	neg negen rüügee	0 / 748,000

現代モンゴル語の相互代名詞 neg negnee「互い」は、格を取る場合には再帰が共起する。なお以下に示した例文で、特に “Google より” と記したもの以外はコーパスからの例文であ

る。neg negnee は、日本語訳にすると「一、一」と訳す。以下、neg negnee を例文中のグロスでは「一 一」の表記で記す。

I. [一 一 - 主格 ＋ 再帰]

(3) taxi xad ruu neg neg-n-ee tülx-e-n unag-a-v.
馬 岩 DIR 一 一-E-REFL 押す-E-CVB.MOD 落とす-E-PST
「(野生の) 馬が岩に互いを押し落とした。」

(4) xojor xurga n’ neg neg-n-ee derl-e-n
二 子羊 3. POSS 一 一-E-REFL 枕に頭を置く-E-CVB.MOD
xevt-deg jum.
横になる-VN.HBT MDL
「二匹の子羊が互いに互いを枕にし、横になっているのだ。」

II. [一 一 - 属格 ＋ 再帰]

(5) žil bolgon xojor toglolt xij-deg bag-uud neg neg-nij-x-ee
年 毎 二 試合 する-VN.HBT チーム-PL 一 一-GEN-ADJVLZ-REFL
arga ev-ijg med-e-x-ijn caaguur med-e-ž baj-g-aa.
方法 調整-ACC 知る-E-VN.NPST-GEN 向こう 知る-E-CVB.IPFV いる-E-VN.PRS
「毎年、年に二回の試合をしている各チームは互いのやり方、プレイをよく認識している。」

III. [一 一 - 対格 ＋ 再帰]

(6) dajn-ij talbar-t neg neg-nij-g-ee üür-e-x.
戦争-GEN 戦場-DAT 一 一-GEN-E-REFL 背負う-E-VN.NPST
「戦争の場で互いを背負う。」

(7) ijm üülder-ijn noxoj neg neg-nij-g-ee barag l id-e-ž,
この 犬種-GEN 犬 一 一-GEN-E-REFL MDL EMPH 食べる-E-CVB.IPFV
al-ž, daxiž xezee č sergee-x-güj
殺す-CVB.IPFV 二度と いつ EMPH 元に戻す-VN.NPST-NEG
bol-tol bertee-deg.
なる-LIM ケガをさせる-VN.HBT
「この種の犬は互いを食べて、殺して、二度と元に戻らないくらいにケガをさせるものだ。」

IV. [一 一 - 与格 ＋ 再帰]

(8) bije　bijen-d-ee　tusla-lca-ž,　neg　n'　negen-d-ee　tüšig
体　体-DAT-REFL　手伝う-RCP-CVB.IPFV　一　3.POSS　一-DAT-REFL　頼り
bol-ž　yav-san-y　ač-aar　l　bas　ta　bügd-ijn
なる-CVB.IPFV　行く-PST-GEN　お陰-INS　EMPH　そして　2SG.HON　全部-GEN
tenxer-üül-sen-ij　ač-aar　ger-t-ee　esen　mend　ir-lee.
元気になる-CAUS-PST-GEN　お陰-INS　家-DAT-REFL　無事　健康　来る-PST
「お互いに助け合って、互いに頼りにしていたお陰で、さらにみなさんのお陰で家に無事に帰ることができました。」

V. [一 一 - 道具格 ＋ 再帰]

(9) zaluu-s　bügd　inee-ld-seer　neg　negn-eer-ee　doog toxuu　xij-cgee-ž
若い-PL　皆　笑う-RCP-CVB.DUR　一　一-INS-REFL　冗談　する-COLL-CVB.IPFV
baj-v.
いる-PST
「若者たちは皆、笑い合ってお互いに冗談を言っていた。」

Google

VI. [一 一 - 起点格 ＋ 再帰]

(10) ixenx　xos-uud　neg　negn-ees-ee　zalx-a-ž　xöndijr-č
多く　カップル-PL　一　一-ABL-REFL　飽きる-E-CVB.IPFV　距離をとる-CVB.IPFV
baj-gaa　medremž-ijg　tödijlön　anzaar-dag-güj.
いる-VN.PRS　感覚-ACC　それほど　気づく-VN.HBT-NEG
「多くのカップルたちは、お互いに飽きて、距離を置くようになっていることをそれほど気付いていないものだ。」

VII. [一 一 - 共同格 ＋ 再帰]

(11) jum-s　üzegdel　neg　negen-tej-g-ee　ujaldaa-taj　baj-dag.
物-PL　物事　一　一-COM-E-REFL　繋がり-PROP　ある-VN.HBT
「物事は他の物事とお互いに繋がりがあるのだ。」

VIII. [一 一 - 方向格 ＋ 再帰]

(12) xümüüs　jagaad　neg　negen-rüü-g-ee　bodlogo-güj　dajsagna-san
人.PL　なぜ　一　一-DIR-E-REFL　計算-NEG　敵にする-PST
üg-s-ijg　čuluud-dag　jum　bol?
言葉-PL-ACC　投げる-VN.HBT　物　MDL
「人々はなぜ、互いに何も考えずに敵対するような言葉を投げているのだろうか？」

Google

5.2. 相互代名詞 neg n’ negnee

相互代名詞 neg n’ negnee は、 [neg ＋三人称所属語尾 n’ neg + 諸格 + 再帰] という形で表現される。この三人称所属語尾である n’ は、同じ相互代名詞である bije bije には現れない形であり、相互代名詞 neg negnee の一つの特徴であるといえるだろう。

筆者の内省によれば、neg negnee と neg n’negnee の違いについては、neg negnee は「互いに〜」に当たり二人とも動作や行為をしたことになるが、neg n’ negnee は「互いに〜」という意味合いは薄く、一人だけの行為が主に行われることが予想され、もう一人が続けて行為を行ったかは明らかではないように感じられる。

neg negnee と neg n’ negnee の違いについて 2 人のモンゴル語母語話者に聞き取り調査を行った。インフォーマントは、U 氏 (女性、1963 年生まれ、ウランバートル市出身) と M 氏 (男性、1998 年生まれ、ウランバートル市出身) である。

U 氏は、neg negnee は、お互い平等に何かを行っているという感じがするのに対し、neg n’ negnee は、主に誰か一人が、より積極的に行為を行なっている感じがすると答えた。
M 氏は同じく、neg negnee はお互いに同じ体力や行動力を出しているのに対し、neg n’ negnee は、片方がそれほど力を出していない、積極的ではないように感じると答えた。これらの答えは、筆者の内省と一致している。

以下、相互代名詞 neg n’ negnee の諸格形のコーパスと Google による検索結果を示す。

表 2: 相互代名詞 neg n’ negnee の諸格形のコーパス / Google による検索結果

一 n’ 主格 + 再帰	neg n’ negnee	0 / 528,000
一 n’ 属格 + 再帰	neg n’ negnijxee	0 / 263,000
一 n’ 対格 + 再帰	neg n’ negnijgee	0 / 252,000
一 n’ 与格 + 再帰	neg n’ negendee	1 / 719,000
一 n’ 道具格 + 再帰	neg n’ negneeree	0 / 31,500
一 n’ 起点格 + 再帰	neg n’ negneesee	0 / 300,000
一 n’ 共同格 + 再帰	neg n’ negentejgee	0 / 76,300
一 n’ 方向格 + 再帰	neg n’ negen rüügee	0 / 823,000

ただし Google による検索では近い形式もヒットしてしまうため、実際には n’ のない形 (例えば属格であれば neg negnijxee のような形) もヒット数に含まれてしまっている。それは共同格などで著しく、共同格では全例が neg negentejgee であった。

I. [一 3.POSS 一-主格＋再帰]

(13) neg n’ negn-ee nöx-ö-ž, xüxer-ijn xüčil-ijn
一 3.POSS 一-REFL 補充する-E-CVB.IPFV 硫-GEN 酸-GEN
asuudal-yg šiid-e-ž bol-no.
問題-ACC 解決-E-CVB.IPFV なる-NPST
「互いに補充し合い、硫酸の問題を解決することはできる。」

この用例のように人間の行動／動作のみならず物質に対しても用いることができる。

II. [一 3.POSS 一 属格＋再帰]

(14) sajn sajxan-ijg bije-d-ee xüs-č neg n’ negn-ij-x-ee
良い 美しい-ACC 体-DAT-REFL 願う-CVB.IPFV 一 3. POSS 一-GEN-ADJVLZ-REFL
tölöö am’dar-č baj-san altan üje bij.
ため 暮らす-CVB.IPFV いる-PST 金 時代 ある
「互いに良いことを願い、互いのために生きていた黄金の時代があった。」

Google

III. [一 3.POSS 一-対格＋再帰]

(15) neg n’ negn-ijg-ee galzuu-g-ijn emneleg-t üz-üül ge-ž
一 3.POSS 一-ACC-REFL 気違い-E-GEN 病院-DAT 見る-CAUS.IMP いう-CVB.IPFV
baj-san daa
いる-PST MDL
「一人がもう一人を精神科の病院に診察してもらいに行きなさいと言っていた。」

現代モンゴル語の口語で「精神科の病院へ行きなさい」という言葉は人を侮辱する表現である。(あなたはバカですかと同じような意味になる。)

IV. [一 3.POSS 一-与格＋再帰]

(16) neg n’ negen-d-ee tüšigbol-ž jav-san-ij ač-aar
一 3.POSS 一-DAT-REFL 頼り なる-CVB.IPFV 行く-VN.PST-GEN お陰-INS
amid üld-e-v.
生きている 残る-E-PST
「互いに頼りにしていたお陰で生き延びることができた。」

V. [一 3.POSS 一-起点格＋再帰]

(17) neg n’ negn-ees-ee öör baj-x-ijg ojlg-o-ž
一 3.POSS 一-ABL-REFL 違う いる-VN.NPST-ACC 理解する-E-CVB.IPFV
čad-dag-güj, Bügd neg ex-ees tör-sön met adilxan
できる-VN.HBT.NEG 皆 一 母-ABL 生まれる-VN.PST みたい 同じ
baj-na ge-ž baj-x-güj štee.
いる-NPST いう- CVB.IPFV いる-VN.NPST-NEG MDL
「(あの人は) 一人一人が異なっているということを理解できないんだね、皆一人の母から生まれたように同じじゃないんだよ。」

起点格を用いると、一人がもう一人より先に〜を行う、先に行動を取る、競うというニュアンスが生じる場合がある。このような起点格による用例を以下に示す。

(18) neg n’ negn-ees-ee örs-ö-ž negen-d-ee öör-ijn-x-öö
一 3.POSS 一-ABL-REFL 競う-E-CVB.IMPF 一-DAT-REFL 自分-GEN-ADJVLZ-REFL
tuxaj jari-x ge-ž döröld-ö-x xümüüs.
について 話す-VN.NPST という-CVB.IPFV 喧嘩する-E-VN.NPST 人.PL
「互いに競い合いながら、一人がもう一人に自分について話そうとしたりして競う人たちだ。」

VI. [一 3.POSS 一-共同格＋再帰]

neg n’ negentejgee を検索した結果 Google では 76,300 例が出現したが、最初の 100 例に目を通した結果、neg n’ negentejgee は 1 例も含まれておらず、全てが neg negentejgee の用例であった。この理由としては、誰か一人が積極的に行動をとるというニュアンスがある neg n’ negnee とある動作／行為を一緒に行うという共同格の機能が矛盾していることから [neg n’ negentejgee] が使われていないものと考える。

VII. [一 3.POSS 一-方向格＋再帰]

neg n’ negen rüügee も検索の結果 823,000 例出現したが、最初の 100 例を目視した結果、neg n’ negenrüügee は 1 例も含まれていなかった。しかし筆者の内省によれば、neg n’negen rüügee も可能であると思われる。筆者による作例を次に示す。なおこの例については上記の他の話者にも確認したが、使用可能であると判断された。

(19) xojor xüüxed toglo-ž baj-g-aad neg n’ negen-rüü-g-ee
二 子供たち 遊ぶ-CVB.IPFV いる-E-CVB.PFV 一 3.POSS 一-DUR-E-REFL
tom čülüü šid-e-v.
大きい 石 投げる-E-PST
「二人の子供が遊んでいて一人がもう一人に大きな石を投げた。」

neg n’ negenruugee のこの用例は一人がもう一人に対し、大きな石を投げたという意味になり、この文の範囲では、もう一人の石を投げられた子供は、投げた子に石を投げ返したかは不明である。

相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の用例を観察した結果、動詞複数接尾辞である相互態接尾辞 -lda, 協同態接尾辞 -lca と共起した例は 1 例も見いだされなかった。一方、同じく相互代名詞である bije bije は、動詞複数接尾辞 -lda, -lca と共起することが分かった。これらの結果から、neg negnee と bije bije には、それぞれの特徴があり、全く同じ機能を持っているわけではなく、互いに重ならない部分のあることがわかる。

5.3. 人物名詞＋複数形＋negnee

相互代名詞の中には neg negnee, neg n’ negnee の他に [人物名詞の複数形＋negnee] の形で「それら人物たちがお互いに～」の意味になる表現がある。例えば、「先生たちがお互いに」という場合は bagš nar negnee になる。一方で、*bagš negnee の場合は非文になる。インフォーマントの U 氏に聞いたところ「人物名詞 (単数)＋negnee」とは言えない、違和感がある、必ず複数の形態素をつけると答えた。Google で検索した結果、emč nar negnee「医者たち互いを～」、bagš nar negnee「教員たち互いを～」、suragčid neg negnee「生徒たちは互いを～」uls törčid neg negnee「政治家たちは互いを～」という人物名詞が出現した。

一方、同じく相互代名詞である bije bije には [bije n’ bijee] という形はなく、単に bije bije という形のみが存在する。bije bije と neg negnee は、「お互いに同じ体力で同じ行動力で何かを行う」のに対し、neg n’ negnee は、「一人が積極的に行動を取り、もう一人がついて行く、同じく行動をする」という意味があると言える。bije bije と neg negnee は同じ意味を持ち、一見、違いは感じにくいが、それぞれの役割があることがわかった。

6. おわりに

本稿では、現代モンゴル語の相互代名詞 neg negnee と neg n’ negnee の使い方の違いとその特徴を調査で明らかにすることを目的とした。最初に、[相互代名詞 neg negnee + 諸格形 + 再帰] 形式で調査を行い、諸格と再帰と共起する際にどのような特徴があるかを示した。最も出現数が多かったのが neg neg + 主格 + 再帰と neg neg + 方向格 +再帰で、出現数が少なかったのが neg neg + 道具格 + 再帰であった。neg neg + 方向格 + 再帰の特徴として A ⇄ B のように A と B が互いに方向を向けることを意味する。例文を観察すると多くはカップルや恋愛に関する例文が多かった。

次は、[neg 三人称所属語尾 n’ negnee の諸格形]で調査を行った。ここでは、出現数が多かったのは、neg n’ neg 方向格 + 再帰と neg n’ neg + 与格 + 再帰であった。

相互代名詞 neg n’ negnee は、 [neg＋三人称所属語尾 n’ neg＋ 諸格 + 再帰] という形で表現される。この三人称所属語尾である n’ は、同じ相互代名詞である bije bije には現れない形であり、相互代名詞 neg negnee の一つの特徴であるといえるだろう。

筆者の内省によれば、neg negnee と neg n’ negnee の違いについては、neg negnee は「互いに～」に当たり二人とも動作や行為をしたことになるが、neg n’ negnee は「互いに～」とい

う意味合いは薄く、一人だけの行為が主に行われることが予想され、もう一人が同じ行為を行ったかは明らかではでないように感じられる。

略号一覧

-: 接辞境界 / 2, 3: 人称 / ABL: 奪格 / ACC: 対格 / ADJ: 形容詞 / ADJVLZ: 形容詞化接辞 / AUX 助動詞 / CAUS: 使役 / COM: 共同格 / COLL: 衆動 / CVB: 副動詞 / DAT: 与位格 / DIR: 方向格 / DUR: 継続 / E: 挿入音 / EMPH: 強調 / GEN: 属格 / HBT: 習慣 / HON: 敬称 / INS: 具格 / IPFV: 不完了 / LIM 限界 / MOD: 非分離 / MDL: モダリティ / NEG: 否定 / NOM: 主格 / NPST: 非過去 /PART: 分詞 / PFV: 完了 / PL: 複数 / POSS: 所有 / PROP: ～持ちの / PRS: 現在 / PSN: 人名 / PST: 過去 / Q: 疑問 / RCP: 相互態 / REFL: 再帰所有 / SG: 単数 / VN: 形動詞

参考文献

Nedjalkov, V. P., E. K. Skribnik, E. A. Kuzmenkov and N.S. Yakhontova (2007) Chapter 29: Reciprocal, sociative, comitative, and assistive constructions in Buryat and Khalkha-Mongol. *Reciprocal construction.* Volume 3. 1281-1350. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Mongolian National Corpus. http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/(最終閲覧日 2023 年 8 月 30 日)

Differences in Usage of the Modern Mongolian Reciprocal Pronouns "neg negnee and neg n' negnee"

Onon Enkh-Amgalan

This paper will clarify the differences in usage of the Modern Mongolian reciprocal pronouns neg negnee and neg n' negnee and their characteristics. Mongolian has two types of reciprocal pronouns, and although there are studies on one of them, bije bije, there are few studies on neg negnee and neg n' negnee. In addition, the characteristics of neg n' negnee and personal pronoun plurals are also presented. According to the author's introspection, the difference between neg neg negnee and neg n' negnee is that neg negnee means that both of them performed an action or deed per “each other ~,” while neg n' negnee means that both of them performed an action or deed per “each other ~.” However, the meaning of “to each other” in “neg n' negnee” is not so clear, and it seems that only one person's action is expected to be the main one, and it is not clear whether the other person did the next one or not.

Onon Enkh-Amgalan
onon.sor2013@gmail.com

ティディム・チン語におけるビルマ語由来の借用語

大塚　行誠
（大阪大学）

キーワード：ミャンマー，チベット・ビルマ語派，チン語支，言語接触，語彙借用

1. はじめに

1.1. 目的

本研究の目的は，ミャンマーのティディム・チン語 (ISO 639-3: ctd) におけるビルマ語 (ISO 639-3: mya) 由来の借用語をその借用元であるビルマ語の形式と比較しながら，借用の過程で見られるティディム・チン語の音韻的特徴を明らかにすることである。

ティディム・チン語は，アショー・チン語[1]などの他のチン語支諸言語と比べ，ビルマ語からの音韻的・文法的影響は限定的だが，語彙借用は一定程度見られる。大野 (1969) は，チン州北部で現地住民が標準的なビルマ語とは異なる発音でビルマ語を話していたことを指摘し，「チン族の話すビルマ語には妙な訛りがあって聞き取りにくい」と述べている (大野 1969: 428)。この発音の特徴は，ティディム・チン語の話者がビルマ語の語彙を借用する過程を反映していると考えられ，本稿で取り上げる借用語音韻論にも通じる部分がある。

本研究では，具体的な語彙借用の例を通して，ビルマ語由来の語彙がティディム・チン語の中においてどのような形式で定着しているかを探る。

1.2. 概要

本節では，まずティディム・チン語とビルマ語の概要を示した上で，現在のティディム・チン語話者を取り巻く言語接触の状況について述べる。

[1] ティディム・チン語

ティディム・チン語は，シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のチン語支に属する (西田 1989: 995)[2]。話者数は約 41 万 1,000 人と推定され，その多くはミャンマーのチン州北部およびザガイン地方域西部，インドのアッサム州，マニプル州南部およびミゾラム州北部に居住している (Eberhard et al. 2022: 127, 285)。本稿では，ミャンマー国内で話されているティディム・チン語を考察の対象とする。

かつてチン州北部では，シザン・チン語 (ISO 639-3: csy) が通商語として使用されていたが，1977 年のティディム・チン語による聖書の出版以降，ティディム・チン語が地域の共通語として使われるようになった (Davis 2017: 3–4)。そして，2010 年代後半からは，一部の

[1] アショー・チン語におけるビルマ語からの借用についての詳細は Otsuka (2023) を参照のこと。

[2] ビルマ語の {khyang':} *chíɴ*「チン」という呼称は，ビルマ族などの他民族によって付けられたビルマ語の外名 (exonym) である。テディム周辺の山岳地帯に住むチン族自身は，自らをティディム・チン語で *zou²*「ゾ」または *zou²mi:¹*「ゾの人」と呼ぶ。

学校でティディム・チン語の読み書きが正式な授業科目として採用されている (Salem-Gervais & Lian 2020)。

近年，ティディム・チン語は，ミャンマー最大の都市であるヤンゴンをはじめ，ミャンマー国内各地の移民コミュニティでも話されている。さらに，マレーシア，日本，アメリカ合衆国など，海外のチン族コミュニティにおいても民族の共通語として機能し，文化的・言語的アイデンティティの維持や伝統文化の継承において重要な役割を果たしている。

ティディム・チン語の音韻，形態，統語に関する基本的な記述は，Henderson (1965) や Otsuka (2014) などに見られ，本稿でもこれらの先行研究を基に記述を行う。

[2] ビルマ語

ビルマ語は，チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語群に属する言語である (藪 1992: 567)。2019 年の推計によれば，ミャンマーの人口は約 5,114 万人であり，その約 7 割をビルマ語を母語とするビルマ族が占める (外務省)。ミャンマーの独立以降，ビルマ語は教育やメディアにおいて主要な言語とされ，2008 年制定の憲法では唯一の公用語と定められた。

一方，ミャンマーは多民族国家であり，ビルマ語を母語としない民族も多く存在する。ミャンマー政府は国内に 135 の民族がいると発表しており，Ethnologue の報告によると，現在 115 もの先住民言語が話されている (Eberhard et al. 2022)。ビルマ族の多くはビルマ語を第一言語とするが，少数民族の言語状況は多様であり，民族と言語が必ずしも一対一で対応するわけではない (加藤 2016: 22)。例えば，チン族が話す言語は 50 以上存在し，同じ民族内でもビルマ語が共通語として使用されることがある。このように，ビルマ語は国家全体の言語統合において中心的な役割を果たすと同時に，言語的に多様な民族内のコミュニケーションを支える共通言語としても機能している。ミャンマー国内に暮らすティディム・チン語話者にも，高度なビルマ語の能力を持つ者が多い。

[3] 言語接触

チン州の北部に住むチン族は，ティディム・チン語に加え，行政，教育，ビジネスの場面でビルマ語を使う機会が多い。その結果，ミャンマー側のティディム・チン語には，ビルマ語からの借用語が多く取り入れられている。筆者が収集したビルマ語由来の借用語には，ビルマ族の慣習にまつわる語，度量衡を表す語，社会的な身分に関する語，新技術や抽象的な概念を表す語などが含まれる。しかし，地域差も大きく，ミャンマー側では一般的に使われているビルマ語由来の借用語が，インド側のティディム・チン語話者に通じないこともある。

2. 音素表記

本節では，ティディム・チン語とビルマ語の音韻体系を示すとともに，それぞれの言語の表記法について概説する。なお，本稿における音声表記は大かっこの [　]，正書法による表記および文字転写は中かっこの {　} で囲んで示し，音素表記はすべて斜体で示す。

2.1. ティディム・チン語

ティディム・チン語には，ラテン文字を用いた正書法があり，母語話者の間でも広く普及している (藪 2001: 619)。しかし，この正書法では声調を表すことができず，母音の長短も必ずしも区別されない。例えば，{hai} という正書法表記は，以下の例 (1) から (6) に示すように，異なる 6 つの語を表す可能性があり，文字表記と音声の間に一対多の対応が生じている。

	正書法表記	音素表記	音声表記	意味	引用元
(1)	{hai}	*haːi¹*	[haːi˥˩]	“basket-tray”	(Henderson 1965: 149)
(2)	{hai}	*haːi²*	[haːi˧]	“mango”	(Henderson 1965: 149)
(3)	{hai}	*haːi³*	[haːi˨]	“cup”	(Henderson 1965: 149)
(4)	{hai}	*hai¹*	[hai˥˩]	“foolish”	(Henderson 1965: 149)
(5)	{hai}	*hai²*	[hai˧]	“greedy”	(Henderson 1965: 149)
(6)	{haina}	*hai³naːˀ²*	[hai˨naːˀ˧]	“madness”	(V&J 1975: 35)

本稿では，ティディム・チン語の音韻を正確に記述するため，以下の音素表記を用いる。

[1] 音節構造

ティディム・チン語には，*an¹*「ご飯」や *neː¹*「食べる」のような単音節語が多い。一方，*saˀ¹kol¹*「馬」や *nuˀ¹siaˀ³*「去る」のように，2 音節以上から成る複音節語もある。

音節構造は，子音を C，母音を V，T を音節全体にかかる声調とすると，(C1) V (C2) / T と表すことができる。このうち，頭子音 (C1) と末子音 (C2) は音韻上の必須要素ではない。

音節は，「短音節」と「長音節」の 2 種類に分類できる。「短音節」は，(a) 短母音で終わる開音節，(b) 短母音に続き *-p*，*-t*，*-k* のいずれかの末子音で終わる閉音節，(c) 末子音 *-ʔ* または *-lˀ* [lʔ] で終わる閉音節である。その他のタイプの音節が「長音節」にあたる。

声調には第 1 声調 ¹，第 2 声調 ²，第 3 声調 ³ の 3 種類があり，音節の末尾に番号を付けて声調を表記する (Henderson 1965: 19–20)。長音節では第 1 声調が上昇調 [˥˩]，第 2 声調が中平調 [˧]，第 3 声調が下降調 [˨] の音調曲線を持つ。一方，短音節では第 1 声調が高音 [˥]，第 2 声調が中音 [˧]，第 3 声調が低音 [˩] で発音される。

語や句の内部ではしばしば連読変調が生じる。例えば，第 2 声調に続く第 3 声調の長音節は高音から下降する音調 [˥˨] で発音され，第 2 声調に続く第 3 声調の短音節は高音 [˥] で発音される。さらに，上昇音調が続くと後続の音節が高く平らな音調 [˥]（高平調）になり，下降音調が続く場合は後続の音節が低く平らな音調 [˩]（低平調）になる傾向がある。その他の声調交替やイントネーションについては，Henderson (1965) に詳細な記述がある。

以下，音節中の頭子音を [2] オンセット，それに続く母音と末子音の部分を [3] ライムとして，それぞれの詳細について述べる。

[2] オンセット

頭子音音素には，*p*, *ph* [pʰ], *b*, *t*, *th* [tʰ], *d*, *c* [tɕ], *k*, *g*, *m*, *n*, *ŋ*, *v*, *s*, *z*, *x*, *h*, *l* がある。このうち，音象徴語以外の一般的な語において，頭子音 *c* には母音 *i* のみが後続し，他の母音とは共起しない。一方，頭子音 *t* は *i* 以外の全ての母音と共起しうるが，原則として母音 *i* とは共起しないという相補分布が見られる。しかし，音象徴語においては *tilˡtelˡ*「細かく」のように，子音 *t* と母音 *i* の組み合わせも見られるため，本稿では *t* と *c* を別個の音素として扱う。さらに，借用語や音象徴語には，*f*, *ch* [tɕʰ], *j* [dʑ] などの特殊な頭子音も見られる。

[3] ライム

以下の**表 1** に，ティディム・チン語におけるライムのパターンを示す。

表 1　ティディム・チン語におけるライム (Henderson 1965 の記述をもとに筆者作成)

i:		*i*	*iʔ*	*ia*	*iaʔ*
i:ŋ	*i:k*	*iŋ*		*iaŋ*	*iak*
i:n		*in*	*it*	*ian*	*iat*
i:m	*i:p*	*im*	*ip*	*iam*	*iap*
		il	*ilˀ* [ilʔ]	*ial*	
				iai	
i:u		*iu*	*iuʔ*	*iau*	
e: [ɛ:]		*e* [ɛ]	*eʔ* [ɛʔ]		
e:ŋ [ɛ:ŋ]	*e:k* [ɛ:k]	*eŋ*	*ek*		
e:n [ɛ:n]	*e:t* [ɛ:t]	*en*	*et*		
e:m [ɛ:m]	*e:p* [ɛ:p]	*em*	*ep*		
e:l [ɛ:l]		*el*	*elˀ* [elʔ]		
e:i [ɛ:i]		*ei*	*eiʔ*		
e:u [ɛ:u]		*eu*	*euʔ*		
a:		*a*	*aʔ*		
a:ŋ	*a:k*	*aŋ*	*ak*		
a:n	*a:t*	*an*	*at*		
a:m	*a:p*	*am*	*ap*		
a:l		*al*	*alˀ* [alʔ]		
a:i		*ai*	*aiʔ*		
a:u		*au*	*auʔ*		
o: [ɔ:]		*o* [ɔ]	*oʔ* [ɔʔ]		
o:ŋ [ɔ:ŋ]	*o:k* [ɔ:k]	*oŋ*	*ok*		
o:n [ɔ:n]	*o:t* [ɔ:t]		*ot*		
o:m [ɔ:m]	*o:p* [ɔ:p]	*om*	*op*		
o:l [ɔ:l]		*ol*	*olˀ* [olʔ]		
o:i [ɔ:i]		*oi*	*oiʔ*		
		ou	*ouʔ*		
u:		*u*	*uʔ*	*ua*	*uaʔ*
u:ŋ	*u:k*	*uŋ*	*uk*	*uaŋ*	*uak*
u:n	*u:t*	*un*	*ut*	*uan*	*uat*
	u:p	*um*		*uam*	
u:l		*ul*	*ulˀ* [ulʔ]	*ual*	
u:i		*ui*	*uiʔ*	*uai*	*uaiʔ*
				uau	

単独母音には *i*, *iː*, *e* [e/ɛ], *eː* [ɛː], *a*, *aː*, *o* [o/ɔ], *oː* [ɔː], *u*, *uː* がある。短母音の *e* と *o* は，音節末や声門閉鎖音の末子音 *ʔ* の前で，それぞれ [ɛ] と [ɔ] という音声で実現する。二重母音には *ia*, *ua*, *iu*, *iːu*, *ei*, *eːi* [ɛːi], *eu*, *eːu* [ɛːu], *ai*, *aːi*, *au*, *aːu*, *oi*, *oːi* [ɔːi], *ou*, *ui*, *uːi*，三重母音には *iai*, *uai*, *iau*, *uau* がある。また，末子音の音素には *p*, *t*, *k*, *ʔ*, *m*, *n*, *ŋ*, *l*, *lˀ* [lʔ] がある。

2.2. ビルマ語

ビルマ語では，ビルマ文字が標準的な表記体系として確立しており，学校教育やマスメディアを通じて広く普及している (藪 1992)。本稿では，以下に示す加藤 (2019) のビルマ語の音素表記に加え，澤田 (2024) のローマ字転写方式に従ったビルマ文字の転写でビルマ語を表記する。

[1] 音節構造

現代ビルマ語の形態素の大部分は単音節で構成されている。しかし，パーリ語をはじめとするインド・アーリア系諸語から多くの借用語を受容したために，複音節語も存在する。

子音を C，母音を V，音節全体にかかる声調を T とすると，ビルマ語の音節構造は C1 (C2) V (C3) / T と表すことができる。括弧で示された要素は，音節構成において必須要素ではないことを表す。本稿では，頭子音と介子音の部分をオンセットと呼び，オンセットに続く母音と末子音の部分をライムと呼ぶことにする。ビルマ語の母音には，単独母音の *i* [i/ɪ], *e*, *ɛ*, *a* [ä], *ɔ*, *o*, *u* [u/ʊ] のほか，二重母音 *ei* [eɪ], *ai* [aɪ], *au* [ɑʊ], *ou* [oʊ] がある。声調には，下降調 ˆ，低平調 ˋ，高平調 ˊ の 3 種類がある。この他に，「軽声音節」という，声調を伴わずに軽く発音される音節がある (加藤 2019: 21)。

[2] オンセット

ビルマ語の頭子音音素には *p*, *ph* [pʰ], *b*, *d̪*, *ɖ*, *t*, *th* [tʰ], *d*, *k*, *kh* [kʰ], *g*, *ʔ*, *c* [tɕ], *ch* [tɕʰ], *j* [dʑ], *s*, *sh* [sʰ], *z*, *ɛ*, *h*, *m*, *hm* [m̥m], *n*, *hn* [n̥n], *ɲ*, *hɲ* [ɲ̊ɲ], *ŋ*, *hŋ* [ŋ̊ŋ], *w*, *hw* [w̥w], *y* [j], *l*, *hl* [l̥l], *r* [ɹ] がある。このうち，子音音素 *r* は英語やパーリ語などからの借用語のみに現れる。介子音として現れる子音音素には，*w* と *y* [j] の 2 種類がある。

[3] ライム

軽声音節は開音節であり，ライムは *-ă* である。その他の開音節は *i*, *e*, *ɛ*, *a*, *ɔ*, *o*, *u* の 7 つのいずれかの母音で終わる。末子音音素には *ɴ* と *ʔ* の 2 種類がある。現代ビルマ語におけるライムのパターンは，開音節の場合 7 通り，末子音 *ɴ* の閉音節の場合 7 通り，末子音 *ʔ* の閉音節の場合は 8 通りある。ビルマ語におけるライムのパターンを以下の**表 2** に示す。

表 2　ビルマ語におけるライム（加藤 (2019) の記述を基に筆者作成）

i	*e*		*ɛ*	*a*	*ɔ*		*o*	*u*
[i]	[e]		[ɛ]	[a~ä]	[ɔ]		[o]	[u]
iɴ	*eiɴ*	*aiɴ*		*aɴ*		*auɴ*	*ouɴ*	*uɴ*
[ɪɴ]	[eɪɴ~eĩ]	[aɪɴ~aĩ]		[aɴ~ã]		[ɑʊɴ~ɑʊ̃]	[oʊɴ~oʊ̃]	[ʊɴ~ʊ̃]
iʔ	*eiʔ*	*aiʔ*	*ɛʔ*	*aʔ*		*auʔ*	*ouʔ*	*uʔ*
[ɪʔ]	[eɪʔ]	[aɪʔ]	[ɛʔ]	[aʔ]		[ɑʊʔ]	[oʊʔ]	[ʊʔ]
				ă				
				[ă~ə]				

2.3. 調査方法

ミャンマーに住むティディム・チン語話者の多くはビルマ語とのバイリンガルであり，日常会話においてビルマ語の単語やフレーズが一時的に挿入されることがある。しかし，このようなコードスイッチングは一過性の言語現象に過ぎず，ティディム・チン語の語彙として定着した借用語とはみなせないため，本稿では考察の対象としない。

本研究では，ティディム・チン語の辞書を用いた調査および母語話者へのインタビューを通して，ティディム・チン語におけるビルマ語由来の借用語を可能な限り収集し，各借用語の音韻的特徴および借用元の形式との音韻的な対応関係を調べた。

借用語データの収集に際しては，まず，V&J (1974, 1975)，Dal Lian Haokip (2012)，Gin En Cin (2016) の辞書からビルマ語由来の借用語と明記されている語を抽出した。その後，調査協力者の MNH 氏 (1950 年代生まれ，チン州北部のトンザーン市出身の女性) に聞き取りを行い，それぞれの借用語の声調や母音の長短を記録した。聞き取り調査では，調査協力者の知らない借用語は考察の対象から除外したが，調査協力者が日常的に使用しているという借用語が他にあれば，随時考察の対象に加えた。

ティディム・チン語とビルマ語は共にチベット・ビルマ語派に属するため，語彙借用の分析には比較言語学的な視点も必要である。両言語の語が形態的に似ている場合，それが近現代の借用ではなく，共通祖語からの継承による可能性も考えられるからである。例えば，**表 3** に示したティディム・チン語の例はビルマ語の形式と似ているが，VanBik (2009) によるクキ・チン祖語 (Proto-Kuki-Chin, PKC) の再構により，これらの語が同源であることが分かっている。そのため，明らかな同根語であり，共通の祖語に遡れると判断できるものについては考察の対象から外してある。ただし，ティディム・チン語の{tuat} *tuat³*「数える」（cf. ビルマ語の{twak'} *twɛʔ*「数える」，PKC *tuak “CALCULATE”）などのように，VanBik (2009) が同根語と指摘しているものであっても，上述の辞書にビルマ語由来の借用語と明記してある場合は考察の対象に含める。

表 3　クキ・チン祖語（PKC），ティディム・チン語，ビルマ語のワードリスト

PKC (VanBik 2009)	ティディム・チン語	ビルマ語
*kang “FRY/ROAST”	*kaŋ²* “to fry”	{kang’} *kìɴ* “to roast”
*paa “THIN”	*pa:¹* “be thin”	{paa:} *pá* “be thin”
*thii “DIE”	*si:²* “to die”	{se} *ɻè* “to die”
*naŋ “YOU”	*naŋ¹* “you”	{nang’} *nìɴ* “you”
*ŋaa “FIVE”	*ŋa:²* “five”	{ngaa:} *ŋá* “five”
*θaa “CHILD”	*ta:¹* “child”	{saa:} *ɻá* “child”
*s^{h}um “MORTAR”	*sum¹* “mortar”	{chuM} *shòuɴ* “mortar”
*wok “PIG”	*vok³* “pig”	{wak’} *wɛʔ* “pig”
*yaap “FAN”	*za:p¹* “to fan”	{yap’} *yaʔ* “fan”
*lam “ROAD”	*lam¹* “road”	{lam’:} *láɴ* “road”
*ʔim “HOUSE”	*in¹* “house”	{@im’} *ʔèiɴ* “house”

ティディム・チン語には，ビルマ語以外にも英語やインド諸語からの借用語が多く存在する。インド諸語からの借用語には，*mo:²za:²*「靴下」（cf. ヒンディー語の *mozā*「靴下」）や *go:²bi:²*「キャベツ」（cf. ヒンディー語の *gobhī*「キャベツ」），*ta:²la:³*「錠前」（cf. ヒンディー語の *tālā*「錠前」），*be¹san²*「ひよこ豆粉」（cf. ヒンディー語の *besan*「ベサン」）などがあり，英語からの借用語には *mu:²vi:²*「映画」（cf. 英語の *movie*「映画」）や *ep¹pel³*「りんご」（cf. 英語の *apple*「りんご」），*li:²diu²*「ラジオ」（cf. 英語の *radio*「ラジオ」），*vi:²diu²*「ビデオ」（cf. 英語の *video*「ビデオ」）などがある。ただし，*a:²lu:³*「じゃがいも」（cf. ヒンディー語の *ālū*「じゃがいも」，ビルマ語の {@aa_luu:} *ʔàlú*「じゃがいも」）や *kom²piu²ta:²*「コンピュータ」（cf. 英語の *computer*「コンピュータ」，ビルマ語の {kwan’pyuu_taa} *kùɴpyùtà*「コンピュータ」），*paiʔ³*「パイプ」（cf. 英語の *pipe*「パイプ」，ビルマ語の {puik’} *paiʔ*「パイプ」）のように，ビルマ語にも類似の形態がある場合は，それがビルマ語を経由して借用されたものかどうかを現段階で特定することは難しい。そこで，今回は辞書でビルマ語由来と明記されているもの，あるいは調査協力者がビルマ語からの借用語であると認識しているものを暫定的にビルマ語借用語として扱う。

以上のように，コードスイッチングや比較言語学上の問題，ビルマ語以外の言語との接触により，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語を厳密に定義することは難しい。本稿では，できる限り上記の問題も考慮に入れつつ，ティディム・チン語の語彙の一部として定着し，母語話者である調査協力者もビルマ語からの借用と認めている語をビルマ語借用語として分析を進めることにする。

なお，ビルマ語借用語における音韻的特徴を分析するにあたり，今回は分節音素に焦点を絞り，子音と母音の対応関係のみを検討する。声調などの超分節的要素は考察の対象としないが，今後，十分なデータが揃い次第，声調の分析も行いたいと考えている。

3. 考察

本章では，筆者が収集したデータに基づき，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語と借用元の形式との間に見られる音韻対応を記述する。しかし，現時点のデータでは用例数が少なく，対応パターンに関して詳細な議論を行うことは難しい。本考察は現段階で確認されている事例に基づくものであり，網羅的な調査の結果ではないことを付記しておく。なお，借用元であるビルマ語の形式自体が他言語からの借用である場合は，必要に応じて，MLC (2011) の記述をもとに，その借用元に関する情報を脚注に記載する。

3.1. ビルマ語借用語のバリエーション

ティディム・チン語の辞書にビルマ語借用語として記載されている語には，現在では使用されていないものや，地域・世代によって使用頻度が異なるものも含まれている。例えば，調査協力者は，ティディム・チン語の辞書にビルマ語借用語として載っている {angki}「上着」(V&J 1974: 112)（cf. {@ang^kyii} *ʔíɴjì~ʔéiɴjì*「上着」[3]）や {gai}「派閥」(V&J 1975: 27)（cf. {guiN':} *gáiɴ*「派閥」）などの語を聞いたことがないと回答したため，声調や母音の長短などを確認することができなかった。このように，発音が確認できない借用語や，借用元のビルマ語の形式が不明の借用語については，調査の対象から除外した。

但し，{pe} *pe:³*「アンナ（英領時代の補助貨幣の単位）」(V&J 1975: 96) のように，現在は使用されていないものの，調査協力者が過去に聞いたことがあり，声調や母音の長短を含めた正確な発音も知っていると述べた借用語については，今回の考察の対象に含めている。

なお，一部のビルマ語借用語の発音には個人差も見られる。例えば，調査協力者は果物の「ライム」のことをティディム・チン語のビルマ語借用語で {tampaza} *tam²pa²za:²* と呼んでいるが，Dal Lian Haokip (2012) には {taampaya}「ライム」(Dal Lian Haokip 2012: 533) という，ビルマ語の音形 {saM_pa_raa} *ʨàɴbǎyà*「ライム」に近い形式が掲載されている。この場合，本稿では調査協力者の発音のほうを優先して取り上げる。

3.2. 音節構造に見られる特徴

ビルマ語の頭子音が必須要素であるのに対し，ティディム・チン語の頭子音は非必須要素であるため，ティディム・チン語では以下の例 (7) のような母音始まりの音節も現れうる。

(7)　T *oŋ³*「ココヤシ」　　B {@un':} *ʔóuɴ*「ココヤシ」

ビルマ語におけるオンセットには頭子音と介子音の 2 つがあるのに対し，ティディム・チン語のオンセットは頭子音 1 つのみである。ビルマ語における介子音 *-y-* は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において，ライム中の母音部分の *i*（例 (8) – (11) 参照）に対応する。一方，ビルマ語の介子音 *-w-* は，ビルマ語借用語において，ライム中の母音部分の *-u-*（例 (12) – (20) 参照）に対応する。

[3] cf. *aṅgiyā* “bodice” in Hindi

(8) T *pi**a**ŋ³*「変わる」 B {p**r**ong':} *pyáuɴ*「変わる」
(9) T *ph**i**at³*「消す」 B {ph**y**ak'} *phyɛʔ*「消す」
(10) T *ph**i**:²*「解答する」 B {ph**r**e} *phyè*「解答する」
(11) T *m**i**uʔ³*「～町」 B {m**r**ui.} *myô*「町」
(12) T *sa³b**u**ai³*「テーブル」 B {caa:p**w**aY} *zăbwé*「テーブル」
(13) T *s**u**ai³*「描く」 B {ch**w**aY} *shwé*「描く」
(14) T *t**u**at³*「数える」 B {t**w**ak'} *twɛʔ*「数える」
(15) T *th**u**at³*「（職場を）出る」 B {th**w**ak'} *thwɛʔ*「出る」
(16) T *p**u**ai³sa:·³*「仲買人」 B {p**w**aY_caa:} *pwézá*「仲買人」
(17) T *ph**u**an³*「開く」 B {ph**w**ang'.} *phwîɴ*「開く」
(18) T *b**u**aiʔ³*「学位」 B {bh**w**aY.} *bwê*「学位」
(19) T *s**u**ai²/s**u**i²*「金」 B {rh**we**} *ɕwè*「金」
(20) T *siauʔ³l**u**a²*「申請書」 B {lhyok'lh**w**aa} *ɕauʔhlwà*「申請書」

以下の例 (21) と (22) に示したとおり，ビルマ語における複音節語がティディム・チン語のビルマ語借用語では単音節語になる場合がある。

(21) T ***sia²***「教師」 B {ch**a_raa**} ***shǎyà***「教師」[4]
(22) T ***nai²***「時間」 B {n**aa_rii**} ***nàyì***「時間」

ビルマ語において開音節から成る一部の語は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において，末子音 *-ʔ* を伴う閉音節（例 (23) – (26) 参照），もしくは末子音 *-k*（例 (27) 参照）や末子音 *-t*（例 (28) 参照）を伴う閉音節として現れる。このように，ビルマ語における下降調の音節が，ティディム・チン語のビルマ語借用語において無声末子音を伴う閉音節，いわゆる促音節に対応しているという例はよく見られる。

加藤 (2006) は，ビルマ語の固有語において，声門閉鎖音で終わる促音節に下降調が現れると述べ，ビルマ語では下降調と促音節に密接な関係があることを指摘している。この特徴は，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語にも反映されているようである。但し，以下の (29) や (30) のような例外もある。この 2 例は，借用元の形式が高平調であるにも関わらず，ティディム・チン語のビルマ語借用語では促音節で現れている。

(23) T ***suʔ¹***「賞」 B {ch**u**} ***shû***「賞」
(24) T ***buaiʔ³***「学位」 B {bhw**aY.**} ***bwê***「学位」
(25) T ***miuʔ³***「～町」 B {mr**ui.**} ***myô***「町」
(26) T ***toʔ³***「鍵」 B {s**o.**} ***ʨô***「鍵」

[4] cf. *ācārya* “religious teacher” in Sanskrit or *ācariya* “teacher” in Pali

(27)　T *ŋa¹**pik**³*「魚醤」　　B {ngaa:**p**i} *ŋăpî*「魚醤」
(28)　T *let³**ma:t**³*「インチ」　　B {lak'm**a**} *lɛʔm**â***「インチ」
(29)　T *b**o**ʔ³luŋ¹*「ボール」　　B {bh**o**_luM:} *bɔ́lóuɴ*「ボール」[5]
(30)　T *th**o**ʔ³bat³*「バター」　　B {th**o**_pat'} *thɔ́baʔ*「バター」

3.3. オンセットに見られる特徴

筆者による調査で得られたデータには，借用元のビルマ語の形式において *ch-*, *hn-*, *hŋ-*, *hŋ-*, *h-*, *hw-*, *r-* を頭子音に持つビルマ語借用語の例が無く，その対応関係が確認できなかった。その他の頭子音の対応をまとめたものが，以下の**表 4**，**表 5** および**表 6** である。

表 4　破裂音の対応

B	*p-*	*ph-*	*b-*	*t-*	*th-*	*d-*	*k-*	*kh-*	*g-*	*ʈ-*	*ɖ-*	*ʔ-*
T	*p-*	*ph-*	*b-/p-*	*t-*	*th-*	*t-/d-*	*k-*	*x-*	*k-/g-*	*t-*	*t-*	*ϕ*

表 5　破擦音及び摩擦音の対応

B	*c-*	*j-*	*s-*	*sh-*	*z-*	*ɕ-*
T	*ci-*	*z-*	*s-*	*sh-*	*s-/z-*	*si-/s-*

表 6　鼻音及び接近音の対応

B	*m-*	*hm-*	*n-*	*ɲ-*	*ŋ-*	*w-*	*y-*	*l-*	*hl-*
T	*m-*	*m-*	*n-*	*ni-/ŋi-*	*ŋ-*	*v-*	*z-*	*l-*	*l-*

ティディム・チン語におけるビルマ語借用語の頭子音の多くは，借用元の形式の頭子音と概ね一対一の対応関係を持つ。ビルマ語借用語と借用元の形式との間で頭子音が異なるのは次の場合である。

ビルマ語における有声頭子音 *b-*, *d-*, *g-*, *z-*が，ティディム・チン語のビルマ語借用語では，以下の例のように，それぞれ無声の *p-*（例 (31)，(32) 参照），*t-*（例 (32) 参照），*k-*（例 (31)，(33) 参照），*s-*（例 (34) 参照）と対応している場合がある。

(31)　T ***p**a²**k**a:n²*「皿」　　B {**p**an':**k**an'} ***b**ă**g**àɴ*「皿」
(32)　T ***t**a²**p**i:¹do:²*「キリスト教徒」[6]　　B {**t**a_**p**aN~'.to'} ***dăbyî**dɔ̀*
「在家信者が出家者に対して用いる自称」
(33)　T *daŋ³**k**a:³*「コイン」　　B {dang^**g**aa:} *díɴ**g**á*「コイン」[7]
(34)　T ***s**a³buai³*「テーブル」　　B {**c**aa:pwaY} ***z**ăbwé*「テーブル」

[5] cf. *ball* in English + {luM:} *lóuɴ* "round" in Burmese
[6] "Christian" in Dal Lian Haokip (2012: 534)
[7] cf. *ṭaṅka* "stamped coin" in Sanskrit

ビルマ語の一部の頭子音は，ティディム・チン語に同等の頭子音が無いことから，ティディム・チン語のビルマ語借用語では別の音素で代用される。たとえば，ビルマ語の頭子音 *kh-*, *t̠-*/*d̠-*, *sh-*, *j-* は，ティディム・チン語において調音点や調音法の類似した *x-*, *t-*, *s-*, *z-* の子音にそれぞれ対応する。以下の (35) から (39) にその具体例を示すが，ビルマ語を流暢に話すことができる若年層のティディム・チン語話者は，ビルマ語の標準的な発音に従って発音する傾向がある。

(35) T *a¹**x**uan³*「許可，休暇」　B {@a_**kh**wang'.} *ʔă**kh**wîɴ*「許可，休暇」
(36) T ***t**am²pa²za:²*「ライム」　B {**s**aM_pa_raa} ***t̠**ànbăyà*「ライム」[8]
(37) T ***t**a²de:n³sa:²*「新聞紙」[9]　B {**s**a_tang':caa} ***d̠**ădíɴzà*「新聞紙」
(38) T ***s**ai²*「店」　B {**ch**uing'} ***sh**àiɴ*「店」
(39) T *za²pa:n²*「日本」　B {**gy**a_pan'} ***j**ăpàɴ*「日本」[10]

ティディム・チン語には，ビルマ語の無声化鼻音や無声化接近音に相当する子音音素が無い。そのため，例えば，ビルマ語における無声化鼻音の *hm-* と無声化接近音の *hl-* は，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *m-*（例 (40) 参照）と *l-*（例 (41) 参照）にそれぞれ置き換わる。ただし，筆者による借用語データには，ビルマ語において無声化子音の *hn-*, *hɲ-*, *hŋ-*, *hw-* を頭子音に持つティディム・チン語のビルマ語借用語が無いため，それらの音韻対応は現時点では分からない。

(40) T ***m**a:n²*「正しい」　B {**mh**an'} ***hm**àɴ*「正しい」
(41) T *siauʔ³**l**ua²*「申請書」　B {lhyok'**lh**waa} *ɕauʔ**hl**wà*「申請書」

ビルマ語の子音 *ɲ-* と *ɕ-* も，ティディム・チン語の子音音素には存在しない。これらの子音は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において，母音 *i* の前を除き，歯茎音と高母音 *i* の組み合わせで対応する。すなわち，ビルマ語の頭子音 *ɲ-* は子音 *n*（または *ŋ*）と母音 *i* の組み合わせ（例 (42) 参照），*ɕ-* は子音 *s* と母音 *i* の組み合わせ（例 (43) 参照）にティディム・チン語のビルマ語借用語ではそれぞれ対応している。ただし，例 (44) のように，ビルマ語の頭子音 *ɕ-* がティディム・チン語のビルマ語借用語で *s-* に対応するものもあった。さらに，§2.1 [2] で既に述べた通り，ティディム・チン語には，音象徴語の場合を除き，子音 *c* が *i* 以外の母音には接続しないという音韻規則がある。そのため，ビルマ語の頭子音 *c-* も，ティディム・チン語のビルマ語借用語では子音 *c* と母音 *i* の組み合わせで現れる（例 (45) 参照）。

[8] cf. *jambīra* "citron" in Sanskrit
[9] cf. {tadeen} *ta²de:n³* "news" in Dal Lian Haokip (2012: 533)
[10] cf. *Japan* in English

(42)　T ***ni**an²/**ŋ**ian²*「知恵」　　B {**n**~aaN'} ***ɲ**àN*「知恵」[11]
(43)　T ***si**au³*「申請する」　　B {**lhy**ok'} ***ɛ**au?*「申請する」
(44)　T *zei²**s**u:³*「イエス（キリスト）」　　B {ye_**rh**u} *yè**ɛ**û*「イエス（キリスト）」[12]
(45)　T ***ci**an²*「残る」　　B {**ky**an'} ***c**àN*「残る」

以下の例 (46) と (47) に示した通り，ビルマ語の頭子音 *y-* はティディム・チン語のビルマ語借用語において頭子音 *z-* に対応する。なお，ビルマ文字の {r} の通常の音価が *y* または *r* であるにもかかわらず，現代ビルマ語では，例 (48) の {r} を，例外的に子音 *d* で発音する。しかし，この場合でも，ティディム・チン語のビルマ語借用語では，規則通り *y-* に対応する形で *z-* が現れている。

例 (51) と例 (52) に示す通り，ビルマ語の頭子音 *w-* はティディム・チン語のビルマ語借用語において *v(u)-* に対応する。

VanBik (2009) によると，PKC における頭子音 *y- と *w- も，ティディム・チン語の頭子音 *z-*（例 (49), (50) 参照）と *v-*（例 (53), (54) 参照）にそれぞれ対応している (VanBik 2009: 271–290)。

(46)　T ***z**ai?³*「（写真を）撮る」　　B {**r**uik'} ***y**ai?*「（写真を）撮る」
(47)　T ***z**um³*「オフィス」　　B {**r**uM:} ***y**óuN*「オフィス」
(48)　T *bi:²**z**u:²*「衣装箪笥」　　B {bii_**r**ui} *bì**d**ò*「衣装箪笥」[13]
(49)　T ***z**u:²*「酒」　　cf. PKC ***y**uu* "BEER"
(50)　T ***z**um²*「鋭い」　　cf. PKC ***y**um* "SHARP"

(51)　T *sia²**v**uan²*「医者」　　B {cha_raa_**w**an'} *săyà**w**ùN*「医者」
(52)　T *ta:²**v**uan²*「任務」　　B {taa_**w**an'} *tà**w**ùN*「任務」
(53)　T ***v**om²pi:¹*「熊」　　cf. PKC ***w**om* "BEAR"[14]
(54)　T ***v**ua³*「打つ」　　cf. PKC ***w**ua* "BEAT"

3.4. ライムに見られる特徴

ビルマ語の末子音は *-N* または *-?* の 2 種類のみであり, §2.2 [3] の **表 2** に示した通り，軽声音節を含めても，ライムの組み合わせは 23 通りしかない。一方，ティディム・チン語には 9 種類の末子音があり，ビルマ語に比べるとライムの種類も豊富にある（**表 1** 参照）。本稿では，筆者の収集した借用語のデータからライムの部分を抽出し，ビルマ語のライムのパターンに従って分類した上で，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語とその借用元の形式との対応関係を示す。

[11] cf. *ñāṇa* "wisdom; insight" in Pali
[12] cf. *Jesus* in English
[13] cf. *bureau* "desk" in French or "a chest of drawers for clothes" in English
[14] cf. Cognate to Burmese {waM} *wùN* "bear"

[1] 開音節

ビルマ語の開音節におけるライムが，ティディム・チン語のビルマ語借用語でどのようなライムに対応しているかについて，以下の (1-a) から (1-h) で具体例を挙げながら考察する。

(1-a) ビルマ語のライム *-i*

以下の例 (55) から (62) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-iː* に概ね対応する。

(55)	T *kat³ci꞉³*「鋏」	B {kat'kr**e:**} *kaʔcí*「鋏」[15]
(56)	T *kap¹pa²li꞉²*「黒人」[16]	B {kap=pa_l**ii**} *kaʔpǎlì*「黒人」[17]
(57)	T *ta²pi꞉¹do꞉²*「キリスト教徒」	B {ta_p**aN~'.**to'} *dǎbyîdɔ* 「在家信者が出家者に対して用いる自称」
(58)	T *bi꞉²zu꞉²*「衣装箪笥」	B {b**ii**_rui} *bìdô*「衣装箪笥」
(59)	T *bom¹bi꞉²*「ズボン」	B {bhong':bh**ii**} *báuɴbì*「ズボン」
(60)	T *phuŋ¹zi꞉³*「僧侶」	B {bhun':kr**ii:**} *phóuɴjí*「僧侶」[18]
(61)	T *lo꞉¹ki꞉²*「現世」	B {lo_k**ii**} *lɔ́kì*「現世」[19]
(62)	T *oŋ³si꞉²*「椰子油」	B {@un':ch**ii**} *ʔóuɴzì*「椰子油」

§3.2 で既に述べたとおり，ビルマ語における下降調の音節は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において促音節に対応することがある。以下の (63) では，借用元の形式 *-î* がティディム・チン語の *-ik* に対応している例を挙げる。

(63)	T *ŋa¹pik³*「魚醤」	B {ngaa:p**i**} *ŋǎpî*「魚醤」

(1-b) ビルマ語のライム *-e*

以下の例 (64) から (71) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-iː* に概ね対応する。すなわち，借用の過程で *e* が *i* へと高母音化している。

なお，例 (69) に見られるティディム・チン語の頭子音 *c-* は，ビルマ語の頭子音 *ʧ-* に対する本来の対応音 *t-*（**表 4** 参照）ではない。これは，§2.1 [2] でも述べたとおり，ティディム・チン語において子音 *t* と母音 *i* の組み合わせである *ti* が音象徴語以外では許容されないという音韻的制約により生じた音形である。

---

[15] cf. *kattarikā* "scissors" in Pali
[16] {Katpali} "African" in Dal Lian Haokip (2012: 502)
[17] cf. *kāfir* "denier" in Arabic
[18] cf. *bhaga* "prosperity" in Sanskrit
[19] cf. *lokiya* "mundane" in Pali

(64)　T ***zi꞉³***「市場」　　B {jh**e:**} ***zé***「市場」
(65)　T ***pi꞉²***「フィート」　　B {p**e**} ***pè***「フィート」[20]
(66)　T ***phi꞉²***「答える」　　B {phr**e**} ***phyè***「答える」
(67)　T ***li꞉²***la꞉n²「競売」　　B {l**e**_laM} ***lèlàɴ***「競売」[21]
(68)　T *liŋ¹**si꞉²***「軟膏」　　B {lim':ch**e:**} *léiɴ**zé***「軟膏」
(69)　T *te꞉²**ci꞉²***「証拠」　　B {sak's**e**} ***ʈɛʔʈè***「証拠」[22]
(70)　T *u(ʔ)¹pa²**di꞉²***「法律」　　B {u_pa_d**e**} ***ʔûbădè***「法律」[23]
(71)　T *oŋ²ba꞉²**li꞉²***「宝くじ」　　B {@ong'bhaa_l**e**} ***ʔàuɴbàlè***「富籤」

但し，以下の例 (72) に示したように，ビルマ語において音節末が介子音 *-w-* を伴う *-we* である場合，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-uai*（または *-ui*）に対応することがある。

(72)　T ***suai²***/***sui²***「黄金」　　B {rh**we**} ***ɕwè***「黄金」

また，以下の例 (73) に示したように，ティディム・チン語のビルマ語借用語で *-ei* に対応することもある。

(73)　T ***zei²***su꞉³「イエス」　　B {y**e**_rhu} ***yèɕû***「イエス」

(1-c) ビルマ語のライム *-ɛ*

例 (74) から (77) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-e꞉* に概ね対応する。ただし，介子音 *-w-* を伴う *-wɛ* は，ビルマ語借用語では *-uai*（例 (78) から (80) 参照）または *-o꞉i*（例 (81) 参照）に対応する。さらに，筆者のデータには，例 (82) のような *-ia* に対応するビルマ語借用語もあった。

(74)　T ***pe꞉³***「アンナ」　　B {p**aY**} ***pé***「アンナ」
(75)　T ***phe꞉²***「トランプ（賭博）」　　B {ph**aY**} ***phé***「トランプ（賭博）」[24]
(76)　T ***me꞉³***「投票」　　B {m**aY**} ***mé***「投票」
(77)　T ***le꞉²***「賢い」　　B {l**aN~'**} ***lè***「賢い，頭の回転が速い」
(78)　T *sa³**buai³***「テーブル」　　B {caa:pw**aY**} *zăb**wé***「テーブル」
(79)　T ***suai³***「（絵を）描く」　　B {chw**aY**} ***shwé***「（絵を）描く」

[20] cf. *pé* “foot” in Portuguese
[21] cf. *nīlām* “auction” in Hindi
[22] cf. *sākṣin* “witness” in Sanskrit
[23] cf. *upadeśa* “advice; indication; instruction” in Sanskrit
[24] cf. 牌 *pái* “playing card” in Chinese

(80) T ***puai³saː³***「仲買人」　　B {pw**aY**_caa:} *pwézá*「仲買人」
(81) T ***poːi³***「祭り」　　B {pw**aY**} ***pwé***「祭り」
(82) T ***soːt³cia²***「（男性用の）下着」　　B {cwap'ky**ay'**} *suʔcè*「（男性用の）下着」

(1-d) ビルマ語のライム *-a*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では，*-a(:)* に概ね対応する。以下の (83) から (96) にその具体例を示す。

(83) T ***ka²laː²***「インド（人）の」　　B {ku_l**aa:**} *kălá*「インド」[25]
(84) T ***koː²laː²***「襟」　　B {ko'l**aa**} *kòlà*「襟」[26]
(85) T ***kun³zaː²***「キンマ」　　B {kwam':y**aa**} *kúɴyà*「キンマ」
(86) T ***taː²vuan²***「責務」　　B {t**aa**_wan'} *tàwùɴ*「責務」
(87) T ***toːˡtaː³***「田舎者だ」　　B {to_s**aa:**} *tɔ́d̠á*「田舎者」
(88) T ***daŋ³kaː³***「コイン」　　B {dang^g**aa:**} *díŋgá*「コイン」
(89) T ***paː²***「参加する」　　B {p**aa**} *pà*「参加する」
(90) T ***paŋ²kaː²***「扇風機」　　B {pan'k**aa**} *pàɴkà*「扇風機」[27]
(91) T ***puai³saː³***「仲買人」　　B {pwaY_c**aa:**} *pwézá*「仲買人」
(92) T ***let³ta²maː³***「大工」　　B {lak'sa_m**aa:**} *lɛʔt̠ămá*「大工」
(93) T ***siauʔ³luaˀ²***「申請書」　　B {lhyok'lhw**aa**} *ɕauʔhlwà*「申請書」
(94) T ***ta²deːn³saː²***「新聞紙」　　B {sa_tang':c**aa**} *d̠ădíɴzà*「新聞紙」
(95) T ***tam²pa²zaː²***「ライム」　　B {saM_pa_r**aa**} *t̠àɴbăyà*「ライム」
(96) T ***oŋ²baː²liː²***「宝くじ」　　B {@ong'bh**aa**_le} *ʔàuɴbàlè*「富籤」

但し，§3.2 で述べたとおり，ビルマ語における下降調の音節は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において促音節になることがある（例 (97)，(98) 参照）。

(97) T ***oŋ²saʔ³***「オンス」　　B {@ong'c**a**} *ʔàuɴsâ*「オンス」[28]
(98) T ***let³maːt³***「インチ」　　B {lak'm**a**} *lɛʔmâ*「インチ」

(1-e) ビルマ語の軽声音節におけるライム *-ă*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-a* に対応する（例 (99) ― (122) 参照）。

(99) T ***kaˀlai²***「ハンドベル」　　B {k**a**_luing'} *kălàiɴ*「ハンドベル」
(100) T ***kaˀlaː²***「インド（人）の」　　B {k**u**_laa:} *kălá*「インド」

[25] cf. *kula* "clan" in Pali
[26] cf. *collar* in English
[27] cf. *paṅkhā* "fan" in Hindi
[28] cf. *ounce* in English

(101) T *ka²la²ʔou²³*「ラクダ」　B {k**u**_l**aa:**@ut'} *kălăʔou²³*「ラクダ」[29]
(102) T *kap¹pa²li:²*「黒人」　B {kap=p**a**_lii} *kaʔpălì*「黒人」
(103) T *za²pa:n²*「日本」　B {gy**a**_pan'} *jăpàɴ*「日本」
(104) T *ŋa¹pik³*「魚醤」　B {ng**aa:**pi} *ŋăpî*「魚醤」
(105) T *sa²zian³*「統計」　B {c**aa**_rang':} *săyíɴ*「統計」
(106) T *sa³buai³*「テーブル」　B {c**aa:**pwaY} *zăbwé*「テーブル」
(107) T *ta²pi:¹do:²*「キリスト教徒」　B {t**a**_paN~'.to'} *dăbyîdɔ̀*「在家信者が出家者に対して用いる自称」
(108) T *pa³lik³*「警察」　B {p**u**_lip'} *pălei?*「警官」[30]
(109) T *pa²ka:n²*「皿」　B {p**an':**kan'} *băgàɴ*「皿」
(110) T *pa²de:n³pau?³*「窓」　B {pr**a**_tang':pok'} *bădíɴbauʔ*「窓」
(111) T *let³ta²ma:³*「大工」　B {lak's**a**_maa:} *lɛʔṭămá*「大工」
(112) T *ta²de:n³sa:²*「新聞紙」　B {s**a**_tang':caa} *ḍădíɴzà*「新聞紙」
(113) T *ta²poŋ²*「叛徒」　B {s**uu**_pun'} *ḍăbòuɴ*「叛徒」
(114) T *tam²pa²za:²*「ライム」　B {saM_p**a**_raa} *ṭàɴbăyà*「ライム」
(115) T *a²cian²*「考え」　B {**@a**_kraM} *ʔăcàɴ*「考え」
(116) T *a¹xuan³*「許可，休暇」　B {**@a**_khwang'.} *ʔăkhwîɴ*「許可，休暇」
(117) T *a¹xa:n³*「部屋」　B {**@a**_khan':} *ʔăkháɴ*「部屋」
(118) T *a²xo:n²*「税」　B {**@a**_khwan'} *ʔăkhùɴ*「税」
(119) T *a²me:t²*「利益」　B {**@a**_mrat'} *ʔămyaʔ*「利益」
(120) T *a¹mat³*「点数」　B {**@a**_mhat'} *ʔăhmaʔ*「点数」
(121) T *a²la:n²*「旗」　B {**@a**_laM} *ʔălàɴ*「旗」[31]
(122) T *u(ʔ)¹pa²di:²*「法律」　B {u_p**a**_de} *ʔûbădè*「法律」

(1-f) ビルマ語のライム *-ɔ*

以下の例 (123) から (130) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では概ね *-o:* に対応する。

(123) T *ko:²*「糊」　B {k**o'**} *kɔ̀*「糊」
(124) T *ko:²zo:³*「絨毯」　B {k**o'**j**o**} *kɔ̀zɔ́*「絨毯」[32]
(125) T *ko:²la:²*「襟」　B {k**o'**laa} *kɔ̀là*「襟」
(126) T *ta²pi:¹do:²*「キリスト教徒」　B {ta_paN~'.t**o'**} *dăbyîdɔ̀*「在家信者が出家者に対して用いる自称」
(127) T *to:¹ta:³*「田舎者だ」　B {t**o**_saa:} *tɔ́ḍá*「田舎者」

[29] cf. *kula* "clan; Indian" + *oṭṭha* "camel" in Pali
[30] cf. *police* in English
[31] cf. *ʕalam* "flag" in Arabic
[32] cf. *kojava* "carpet" in Pali

(128) T *lo:¹ki:²*「現世」　　B {l**o**_kii} *lɔ́kì*「現世」
(129) T *leŋ²mo:²*「ダイダイ」　　B {lim=m**o'**} *lèiɴmɔ̀*「ダイダイ」[33]
(130) T *te:m¹bo:¹*「船舶」　　B {sang^bh**o**} *ʨíɴbɔ́*「船舶」[34]

但し，促音節 *-oʔ* に対応する場合もある。以下の (131) から (133) に例を示す。このうち，例 (133) の借用元の形式は下降調であり，§3.2 で述べたように，ビルマ語における下降調の音節がティディム・チン語のビルマ語借用語において促音節になる傾向があることからこの形式をとっているものと考えられる。

(131) T *thoʔ³bat³*「バター」　　B {th**o**_pat'} *thɔ́baʔ*「バター」
(132) T *boʔ³luŋ¹*「ボール」　　B {bh**o**_luM:} *bɔ́lóuɴ*「ボール」
(133) T *toʔ³*「鍵」　　B {s**o.**} *ʨɔ̂*「鍵」

(1-g) ビルマ語のライム *-o*

以下の例 (134) と (135) で示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では概ね *-u:* に対応する。ティディム・チン語におけるビルマ語借用語と借用元の形式との対応を見ると，借用の過程で *o* が *u* に高母音化していることが分かる。

(134) T *bi:²zu:²*「衣装箪笥」　　B {bii_r**ui**} *bìdò*「衣装箪笥」
(135) T *bu:²*「将校」　　B {b**uil'**} *bò*「将校」[35]

但し，§3.2 で述べたように，ビルマ語における下降調の音節は，ティディム・チン語のビルマ語借用語において促音節になる傾向があり，例 (136) でも *-uʔ* に対応している。

(136) T *miuʔ³*「～町」　　B {mr**ui.**} *myô*「町」

(1-h) ビルマ語のライム *-u*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-u(:)* に対応する。以下の (137) から (139) に例を示す。

(137) T *ku:¹*「コピーする」[36]　　B {k**uu:**} *kú*「コピーする」
(138) T *zei²su:³*「イエス」　　B {ye_rh**u**} *yèɛû*「イエス」
(139) T *u(ʔ)¹pa²di:²*「法律」　　B {**u**_pa_de} *ʔûbădè*「法律」

[33] cf. *limpāka* "a citron or lime tree (n. its fruit)" in Sanskrit
[34] cf. *pota* "ship" in Sanskrit
[35] cf. *bala* "strength" in Pali
[36] 最近では，コピーすることをティディム・チン語で *tei¹* という動詞を使って表現することのほうが多い。

[2] 末子音 *-N* の閉音節

(2-a) ビルマ語のライム *-iN*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では，ビルマ語の綴字 {-ang'} に近い形の *-a(:)ŋ*（例 (140) – (141) 参照）または *-e:n*（例 (142) – (145) 参照）に対応する。

(140) T ***ta:ŋ³***「緬斗」　　B {t**ang':**} ***tíN***「緬斗」
(141) T ***daŋ³***ka:³「コイン」　　B {d**ang**^gaa:} ***díNgá***「コイン」
(142) T ***te:n²***「置く」　　B {t**ang'**} ***tìN***「置く」
(143) T *po:ŋ¹**de:n³***「竹筒飯」　　B {pong':t**ang':**} *páuNdíN*「竹筒飯」
(144) T *pa²**de:n³**pauʔ³*「窓」　　B {pra_t**ang':**pok'} *bădíNbauʔ*「窓」
(145) T *ta²**de:n³**sa:²*「新聞紙」　　B {sa_t**ang':**caa} *ɻ̀ădíNzà*「新聞紙」

例 (146) のように，後続の子音 *b* に同化する形で *-e:m* に対応している場合もある。

(146) T ***te:m¹**bo:¹*「船舶」　　B {s**ang**^bho} ***ɻ̀íNbɔ́***「船舶」

但し, 例 (147) と例 (148) に示したとおり, ビルマ語において介子音 *-w-* を伴う *-wiN* は, ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-uan* に対応する。

(147) T *ph**uan³***「開く」　　B {ph**wang'.**} *phwîN*「開く」
(148) T *a¹kh**uan³***「許可，休暇」　　B {@a_kh**wang'.**} *ʔăkhwîN*「許可，休暇」

さらに，借用語のデータでは，以下の例 (149) のように，ビルマ語の *yiN* がティディム・チン語の *zian* に対応する例も確認された。

(149) T *sa²**zian³***「統計」　　B {caa_**rang':**} *săyíN*「統計」

(2-b) ビルマ語のライム *-eiN*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では，*-eŋ*（例 (150) と (151) 参照）または *-iŋ*（例 (152) 参照）に対応する。

(150) T ***seŋ²***「ダイヤモンド」　　B {c**in'**} ***sèiN***「ダイヤモンド」[37]
(151) T ***leŋ²**mo:²*「ダイダイ」　　B {l**im**=mo'} ***lèiNmɔ̀***「ダイダイ」
(152) T ***liŋ¹**si:²*「軟膏」　　B {l**im':**che:} ***léiNzé***「軟膏」

(2-c) ビルマ語のライム *-aiN*

[37] cf. *vajira* "diamond; thunderbolt" in Pali

ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-ai* に対応する。ティディム・チン語には二重母音 *ai* の後に *ʔ* 以外の末子音を置くことができないという音韻的制約がある（**表 1** 参照)。そのため，借用の過程で末子音の部分が脱落し，ティディム・チン語のビルマ語借用語では，以下の例 (153) から (156) に示すような開音節になったと考えられる。

(153) T *ka²**lai²*「ハンドベル」　B {ka_l**uing'**} *kălài**N*「ハンドベル」
(154) T *s**ai²*「店」　B {ch**uing'**} *shài**N*「店」
(155) T *t**ai²*「柱，マイル」　B {t**uing'**} *tài**N*「柱，マイル」
(156) T *t**ai²*「報告する」　B {t**uing'**} *tài**N*「報告する」

(2-d) ビルマ語のライム *-aN*

以下の (157) から (169) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-a(:)n* に概ね対応する。

(157) T *ci**an²*「残る」　B {ky**an'**} *cà**N*「残る」
(158) T *za²p**a:n²*「日本」　B {gya_p**an'**} *jăpà**N*「日本」
(159) T *ni**an²/ŋian²*「知恵」　B {n~**aaN'**} *nà**N*「知恵」
(160) T *thauʔ¹x**a:n²*「支持する」　B {thok'kh**aM**} *thauʔkhà**N*「支持する」
(161) T *d**a:n²*「罰」　B {d**aN'**} *dà**N*「罰」[38]
(162) T *pa²k**a:n²*「皿」　B {pan':k**an'**} *băgà**N*「皿」
(163) T *b**a:n²*「銀行」　B {b**aN'**} *bà**N*「銀行」[39]
(164) T *m**a:n²*「正しい」　B {mh**an'**} *hmà**N*「正しい」
(165) T *li:²l**a:n²*「競売」　B {le_l**aM**} *lèlà**N*「競売」
(166) T *a²ci**an²*「考え」　B {@a_kr**aM**} *ʔăcà**N*「考え」
(167) T *a¹x**a:n³*「部屋」　B {@a_kh**an':**} *ʔăkhá**N*「部屋」
(168) T *t**a:n¹*「学年」　B {@a_t**an':**} *ʔătá**N*「学年」
(169) T *a²l**a:n²*「旗」　B {@a_l**aM**} *ʔălà**N*「旗」

さらに，一部の語では以下の例 (170) と例 (171) のように後続の子音 *k* に同化する形で *-a(:)ŋ* と対応しているほか，例 (172) や例 (173) のようなビルマ語の綴字 {-aM} を持つ借用語では，*-a(:)m* に対応することもある。

(170) T *pa**ŋ²**ka:²*「扇風機」　B {p**an'**kaa} *pà**N**kà*「扇風機」
(171) T *za:**ŋ²**koŋ²*「ヤンゴン」　B {r**an'**kun'} *yà**N**gòu**N*「ヤンゴン」
(172) T *k**a:m¹*「運」　B {k**aM**} *kà**N*「運」[40]

[38] cf. *daṇḍa* "punishment" in Pali or Sanskrit
[39] cf. *bank* in English
[40] cf. *kamma* "deed" in Pali

(173) T ***tam²***pa²za:²「ライム」　　B {s**aM**_pa_raa} *ṭànbǎyà*「ライム」

(2-e) ビルマ語のライム *-aun*

以下の (174) から (183) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-o(:)ŋ* に概ね対応している。

(174) T ***thoŋ¹***「刑務所」　　B {th**ong'**} ***thàuN***「刑務所」
(175) T ***poŋ²***「ポンド」　　B {p**ong'**} ***pàuN***「ポンド」[41]
(176) T ***poŋ²***「抵当に入れる」　　B {p**ong'**} ***pàuN***「抵当に入れる」
(177) T ***po:ŋ¹***de:n³「竹筒飯」　　B {p**ong':**tang':} ***páuNdíN***「竹筒飯」
(178) T ***poŋ²***mouʔ³「パン」　　B {p**ong'**mun'.} ***pàuNmôuN***「パン」
(179) T ***phoŋ²***「筏」　　B {ph**ong'**} ***phàuN***「筏」
(180) T ***let¹soŋ²***「贈物」　　B {lak'ch**ong'**} *lɛʔshàuN*「贈物」
(181) T ***oŋ²***「合格する」　　B {@**ong'**} ***ʔàuN***「合格する」
(182) T ***oŋ²***saʔ³「オンス」　　B {@**ong'**ca} ***ʔàuNsâ***「オンス」
(183) T ***oŋ²***ba:²li:²「宝くじ」　　B {@**ong'**bhaa_le} ***ʔàuNbàlè***「富籤」

例 (184) のように，後続の子音 *b* に同化し，*-om* の形式で対応する場合もある。

(184) T ***bom¹***bi:²「ズボン」　　B {bh**ong':**bhii} ***báuNbì***「ズボン」

但し，以下の例 (185) に示したとおり，ビルマ語のライム *-auN* により発音の近い *-auŋ* に対応する例も辞書の調査で一例見つかった。しかし，*-auŋ* は **表 1** に示したティディム・チン語のライムに含まれないという音韻的な制約もあり，調査協力者は *piauŋ³* (Dal Lian Haokip 2012: 527) よりも母音の *u* が脱落した *piaŋ³* (Gin En Cin 2016: 76) と言うことのほうが多いと述べている。

(185) T ***piauŋ³***/***piaŋ³***「変わる」　　B {pr**ong':**} ***pyáuN***「変わる」

(2-f) ビルマ語のライム *-oun*

以下に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では，*-oŋ*（例 (186) – (190) 参照），*-uŋ*（例 (191) – (193) 参照），または *-um*（例 (194) 参照）に対応している。

(186) T ***poŋ²***「格好良い」　　B {p**uM**} ***pòuN***「姿」
(187) T ***za:ŋ²koŋ²***「ヤンゴン」　　B {ran'k**un'**} *yàNgòuN*「ヤンゴン」
(188) T ***ta²poŋ²***「叛徒」　　B {suu_p**un'**} *ɖǎbòuN*「叛徒」

[41] cf. *pound* in English

(189) T ***oŋ³***「ココヤシ」　　B {@**un':**} *ʔóuɴ*「ココヤシ」
(190) T ***oŋ³****si:²*「椰子油」　　B {@**un':**chii} *ʔóuɴzì*「椰子油」

(191) T *se:t³****zuŋ²***「工場」　　B {cak'r**uM**} *sɛʔyòuɴ*「工場」
(192) T *boʔ³****luŋ¹***「ボール」　　B {bho_l**uM:**} *bɔ́lóuɴ*「ボール」
(193) T *phuŋ¹zi:³*「僧侶」　　B {bh**un':**krii:} *phóuɴjí*「僧侶」

(194) T ***zum³***「事務所」　　B {r**uM:**} *yóuɴ*「事務所」

以下の例 (195) と例 (196) に示したとおり，ビルマ語における下降調のライム *-ôuɴ* が，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-ouʔ* に対応している例も見られる。これは，§3.2 で述べたように，ビルマ語の下降調を伴う音節がティディム・チン語のビルマ語借用語において促音節に対応する傾向があることと関係する。

(195) T *poŋ²****mouʔ³***「パン」　　B {pong'm**un'.**} *pàuɴmôuɴ*「パン」
(196) T ***mouʔ³***「菓子」　　B {m**un'.**} *môuɴ*「菓子」

(2-g) ビルマ語のライム *-uɴ*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では，*-un* に対応する例（例 (197) 参照）と *-oːn* に対応する例（例 (198) 参照）がそれぞれ 1 例ずつ筆者の調査で見つかった。

(197) T ***kun³****za:²*「キンマ」　　B {k**wam':**yaa} ***kúɴ****yà*「キンマ」
(198) T *a²****xoːn²***「税」　　B {@a_kh**wan'**} *ʔăkhùɴ*「税」

但し，以下の (199) と (200) の例に示したとおり，ビルマ語における {wan'} *wuɴ* は，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *vuan* に対応する。

(199) T *sia²****vuan²***「医者」　　B {cha_raa_w**an'**} *shăyàwùɴ*「医者」
(200) T *ta:²****vuan²***「責務」　　B {taa_w**an'**} *tàwùɴ*「責務」

[3] 末子音 *-ʔ* の閉音節

(3-a) ビルマ語のライム *-iʔ*

筆者による調査では，例 (201) の 1 例のみ見つかっている。この例によれば，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-it* に対応する。

(201) T ***sit³***「調べる」　　B {c**ac'**} ***siʔ***「調べる」

(3-b) ビルマ語のライム *-eiʔ*

筆者による調査では，例 (202) の 1 例のみ見つかっている。この例によれば，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-ik* に対応する。

(202) T *pa³**lik**³*「警察」　　B {pu_l**ip'**} *pă**lei**ʔ*「警察」

(3-c) ビルマ語のライム *-aiʔ*

借用元の形式と同様，ティディム・チン語のビルマ語借用語でも *-aiʔ* に対応する。以下の (203) から (207) にその例を示す。

(203) T *k**ai**ʔ³*「ヤード」　　B {k**uik'**} *k**ai**ʔ*「ヤード」[42]
(204) T *s**ai**ʔ³*「立て替える」　　B {c**uik'**} *s**ai**ʔ*「立て替える」
(205) T *t**ai**ʔ³*「建物」　　B {t**uik'**} *t**ai**ʔ*「建物」
(206) T *t**ai**ʔ³*「磨く」　　B {t**uik'**} *t**ai**ʔ*「磨く」
(207) T *z**ai**ʔ³*「（写真を）撮る」　　B {r**uik'**} *y**ai**ʔ*「（写真を）撮る」

(3-d) ビルマ語のライム *-ɛʔ*

以下の (208) から (213) の例に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では，*-e(:)t* に概ね対応している。

(208) T *s**e:t**³*「機械」　　B {c**ak'**} *s**ɛʔ***「機械」[43]
(209) T *s**e:t**³zuŋ²*「工場」　　B {c**ak'**ruM} *s**ɛʔ**yòuɴ*「工場」
(210) T *s**e:t**³*「（電話を）繋げる」　　B {ch**ak'**} *sh**ɛʔ***「（電話を）繋げる」
(211) T *l**et**¹soŋ²*「贈物」　　B {l**ak'**chong'} *l**ɛʔ**shàuɴ*「贈物」
(212) T *l**et**³ta²ma:³*「大工」　　B {l**ak'**sa_maa:} *l**ɛʔ**ɻămá*「大工」
(213) T *l**et**³ma:t³*「インチ」　　B {l**ak'**ma} *l**ɛʔ**mâ*「インチ」

但し，例 (214) に示したように，ティディム・チン語のビルマ語借用語で *-e:* に対応するものもある。

(214) T *t**e:²ci:²***「証拠」　　B {s**ak'**se} *ɻ**ɛʔ**ɻè*「証拠」

また，以下の例 (215) に示したように，ビルマ語において介子音 *-y-* を伴う *-yɛʔ* は，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-iat* に対応している。

(215) T *ph**iat**³*「消す」　　B {ph**yak'**} *ph**yɛʔ***「消す」

---

[42] cf. *gaz* “yard” in Hindi
[43] cf. *cakka* “wheel” in Pali

さらに，以下の (216) と (217) の例を見ると，ビルマ語において介子音 *-w-* を伴う *-wɛʔ* は，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-uat* に対応している。

(216) T ***tuat³***「数える」　　B {t**wak'**} ***twɛʔ***「数える」
(217) T ***thuat³***「（職場を）出る」　　B {th**wak'**} ***thwɛʔ***「出る」

(3-e) ビルマ語のライム *-aʔ*

以下の例 (218) から例 (224) に示したとおり，ティディム・チン語のビルマ語借用語では概ね *-a(:)t* に対応する。

(218) T ***kat³***ci:³「鋏」　　B {k**at'**kre:} ***kaʔcí***「鋏」
(219) T ***ka:t³***「警察署」　　B {g**aat'**} ***gaʔ***「警察署」[44]
(220) T ***thoʔ³bat³***「バター」　　B {tho_p**at'**} ***thɔ́baʔ***「バター」
(221) T ***tha:t³***「（家，建物の）階」　　B {th**ap'**} ***thaʔ***「（家，建物の）階」
(222) T ***da:t³***(mei¹)「電（灯）」　　B {dh**aat'**(mii:)} ***daʔ(mí)***「電（灯）」[45]
(223) T ***ma:t²***「４分の１ルピー」　　B {m**at'**} ***maʔ***「４分の１ルピー」[46]
(224) T ***a¹mat³***「点数」　　B {@a_mh**at'**} ***ʔămaʔ***「点数」

また，例 (225) のように，後続の子音 *p* に同化する形で *-ap* に対応する例もあった。

(225) T ***kap¹***pa²li:²「黒人」　　B {k**ap**=pa_lii} ***kaʔpălì***「黒人」

但し，ビルマ語において介子音 *-y-* を含む例 (226) のビルマ語借用語ではビルマ語の *-yaʔ* がティディム・チン語の *-e:t* に対応している。

(226) T ***a²me:t²***「利益」　　B {@a_m**rat'**} ***ʔămyaʔ***「利益」

(3-f) ビルマ語のライム *-auʔ*

ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-au(ʔ)* に対応する。以下の (227) から (230) に挙げるビルマ語借用語の例のように，音節末の声門閉鎖音 *ʔ* が維持されているものもある一方，以下の (231) と (232) の各例に示したように，借用の過程で末子音 *ʔ* が脱落したと見られる例もある。

(227) T ***thauʔ³***「支える」　　B {th**ok'**} ***thauʔ***「支える」

---

[44] cf. *guard* in English
[45] cf. *dhātu* “element” in Pali + *mí* “light” in Burmese
[46] cf. *māṣa* “bean” in Sanskrit

(228) T *th**au**ʔ¹xa:n²*「支持する」　　B {th**ok’**khaM} *th**au**ʔkhàɴ*「支持する」
(229) T *pa²de:n³p**au**ʔ³*「窓」　　B {pra_tang’:p**ok’**} *bădíɴb**au**ʔ*「窓」
(230) T *si**au**ʔ³lua²*「申請書」　　B {lhy**ok’**lhwaa} *ɛ**au**ʔhlwà*「申請書」

(231) T *si**au**³*「申請する」　　B {lhy**ok’**} *ɛ**au**ʔ*「申請する」
(232) T (*lam¹*) *si**au**³*「（道を）歩く」　　B {(lam’:) lhy**ok’**} (*láɴ*) *ɛ**au**ʔ*「歩く」

(3-g) ビルマ語のライム *-ouʔ*

以下の (233) から (235) に示す例から，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-ouʔ* に対応すると考えられる。

(233) T *ka²la²**ou**ʔ³*「ラクダ」　　B {ku_laa:@**ut’**} *kălăʔ**ou**ʔ*「ラクダ」
(234) T *th**ou**ʔ³*「出版する」　　B {th**ut’**} *th**ou**ʔ*「出版する」
(235) T *th**ou**ʔ³*「包み」　　B {@a_th**up’**} *ʔăth**ou**ʔ*「包み」

(3-h) ビルマ語のライム *-uʔ*

筆者による調査では，以下の例 (236) の 1 例のみ見つかった。この例によると，ティディム・チン語のビルマ語借用語では *-o:t* に対応すると考えられる。

(236) T *s**o:t**³cia²*「（男性用）下着」　　B {c**wap’**kyay’} *s**uʔ**cè*「（男性用）下着」

4. おわりに

本稿では，辞書の調査および調査協力者へのインタビューを通じて，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語を収集し，音韻論的な観点から分析を行った。具体例を用いた考察により，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語の形式とその借用元であるビルマ語の形式との間にはさまざまな音韻対応のパターンが存在することが明らかになった。しかし，今回使用したビルマ語借用語のデータは用例数が限られており，ティディム・チン語におけるビルマ語借用語全体を体系的に検討するまでには至らなかった。また，一部の借用語ではビルマ文字の綴りを反映していると思われるものもあったが，データが不足していたため，ビルマ文字の綴りとの関連性について深い議論をすることはできなかった。さらに，今回は分節音素に焦点を当てており，声調などの超分節音素については分析を行うことができなかった。今後はデータをさらに拡充し，ビルマ文字の綴りや超分節音素も考慮に入れた上で，より包括的な記述を行いたいと考えている。

ティディム・チン語話者によれば，{phiau} *phiau³*「まっすぐだ」(cf. ビルマ語の {phrong’.} *phyâuɴ*「まっすぐだ」）や {pongman} *poŋ²ma:n²*「並の」（cf. ビルマ語の {puM_mhan’} *pòuɴhmàɴ*「正常」）など，さらに多くのビルマ語借用語が現代ティディム・チン語で使われている。その中には，{kattaya} *kat¹ta²ya:²*「アスファルト舗装の」（cf. ビルマ語の {kat=ta_raa_ce:} *kaʔtăyàzí*「タール」）の子音 *y* や {welahnga} *we:²laʔ³ŋa:¹*「鯨」（cf. ビルマ

語の {we_la_ngaa:} *wèlâŋá*「鯨」）の子音 *w* など，§2.1 [2] で挙げた音素以外の子音も含まれている。近年は，特に若年層を中心としてビルマ語を流暢に話すティディム・チン語話者が増え，借用語の発音もビルマ語により近くなる傾向が見られると調査協力者は語っている。今後も，ビルマ語がティディム・チン語にどのような影響を与え，借用語がどのように変化していくかを注視していく必要があるだろう。

略号一覧

PKC:	Proto-Kuki-Chin	B:	Burmese	T:	Tiddim Chin

参考文献

Dal Lian Haokip (2012) *The New English-Zomi & Zomi-English Dictionary: In Tedim Zomi Language.* Second Edition. Guwahati: Dal Lian Haokip.

Davis, Tyler (2017) *Verb stem alternation in Sizang Chin narrative discourse.* M.A. thesis, Payap University.

Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2022) *Ethnologue: Languages of Asia.* Twenty-Fifth Edition. Dallas: SIL International.

外務省「ミャンマー連邦共和国 (Republic of the Union of Myanmar) 基礎データ」https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html［2024 年 9 月 30 日アクセス］

Gin En Cin, H. (2016) *Tongdot (Dictionary): ZOKAM PAN ZOKAM*. Glen Ellyn, IL: Zokam Bible Press of Myanmar Center for World Misson.

Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin, A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press.

加藤昌彦 (2006)「現代ビルマ語の借用語に見られる低い促音節」加藤重広・吉田浩美(編)『言語研究の射程』103-126. 東京: ひつじ書房.

_____ (2016)「ミャンマーの諸民族と諸言語」『ICD news: 法務省法務総合研究所国際協力部報』69: 8-26. 東京: 法務省法務総合研究所国際協力部.

_____ (2019)『ニューエクスプレスプラス ビルマ語』東京：白水社.

Myanmar Language Commission (2011) *Myanmar-English Dictionary.* Yangon: Myanmar Language Commission, Ministry of Education.（本文中では，MLC と略している。）

西田龍雄 (1989)「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典 世界言語編（中）』2: 995-1008. 東京：三省堂.

大野徹 (1969) 「インド・ビルマの国境“チン丘陵”への旅」『東南アジア研究』7 (3):425-428 京都: 京都大学東南アジア研究所.

_____ (2000)『ビルマ（ミャンマー）語辞典』東京: 大学書林.

Otsuka, Kosei (2014) Tiddim Chin. In: Toshihide Nakayama, Noboru Yoshioka and Kosei Otsuka (eds.) *Grammatical sketches from the field* 2: 109-141. Tokyo: Research Institute for Languages

and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

_____ (2023) Linguistic similarities between Asho Chin and Burmese. In: Alexander R. Coupe, Randy J. LaPolla and Hideo Sawada (eds.) *Asian Languages and Linguistics* 4(2): 136–166.

Salem-Gervais, N. & Lian, S. V. (2020) How many Chin languages should be taught in government schools?: Ongoing developments and structural challenges of language-in-education policy in Chin State. *Parami Journal of Education* 1(1): 122-140.

澤田英夫 (2024)「ビルマ文字のローマ字転写方式（澤田式） Ver. 2.03」 http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman2.pdf［2025 年 1 月 15 日アクセス］.

VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages.* (STEDT Monograph Series #8). Berkeley: University of California.

Vul Za Thang & J. Gin Za Twang (1974) *How to spell, pronounce, and learn Tiddim-Chin words* (Second and Revised Edition). Tiddim: s.n.（本文中では，V&J と略している。）

_____ (1975) *Chin-English Dictionary (Tiddim Chin)*. Tiddim: s.n.

藪司郎 (1992)「ビルマ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典 世界言語編（下－１）』3: 567-610. 東京: 三省堂.

_____ (2001)「チン文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄（編著）『言語学大辞典 別巻　世界文字辞典』619-620. 東京: 三省堂.

謝辞

本研究の遂行にあたり，調査にご協力くださり，貴重なデータを提供してくださったティディム・チン語話者の友人の皆さまに，心より感謝を申し上げます。

また，本研究は，大阪大学を 2022 年に卒業された西馬陽奈子氏への卒業研究指導をきっかけに始まりました。西馬氏との活発な議論や貴重な助言は，本研究の進展に大いに貢献しました。ここに改めて，西馬氏にも深く感謝いたします。

なお，本稿に誤りや不備があった場合，その責任はすべて筆者にあります。

本研究に関する言語調査は，JSPS 科研費（17K13442，20H01256，21K00480）の助成を受けて実施されました。

Burmese Loanwords in Tiddim Chin

OTSUKA, Kosei
(Osaka University)

Abstract

The purpose of this study is to examine the phonological characteristics of Burmese (ISO 639-3: mya) loanwords in Tiddim Chin (ISO 639-3: ctd). The analysis reveals consistent phonological correspondences between the source language, Burmese, and the borrowed forms in Tiddim Chin. By analyzing specific examples of loanwords, this study explores how Burmese loanwords are integrated and adapted into the phonological system of Tiddim Chin.

フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合

岡本　進
（東京外国語大学／国立民族学博物館）

キーワード：フィジー語，記述言語学，ヴォイス，名詞抱合

1. はじめに

フィジー語の名詞抱合は従来自動詞化プロセスとして記述されてきた (Dixon 1988 など)。すなわち、他動詞節の目的語が動詞に抱合され、自動詞節を派生するというプロセスである。一方、フィジー語バトゥレレ方言では、自動詞化としての名詞抱合だけでなく (1)、名詞抱合が目的語を取る例が報告されている (2)。(1) では *here*「歌」が動詞 *laga*「歌う」に抱合され、全体として一つの自動詞として機能している。一方 (2) においては、*domo*「首」が動詞 *kata*「噛む」に抱合されている。さらに他動詞接尾辞が付加され、新しい目的語として *na tamata*「男」が現れている。本稿では、先行研究の例を含め、名詞抱合の動詞と名詞の境界を + に統一し、非文法的であることを * によって示す。

(1)　*Ai*　　*laga+here*
　　3SG.NPST　sing+song
　　「彼は歌歌いする」　(Okamoto 2023: 121)

(2)　*Hā*　*kata+domo-ni-a*　*na*　*tamata*　*na*　*gwata*
　　ASP　bite+neck-TR-3SG　ART　man　ART　snake
　　「蛇が男の首を噛んだ (lit. 男を首噛みした)」　(Okamoto 2023: 130)

本稿の目的はフィジー語バトゥレレ方言における (2) のような名詞抱合、すなわち「類別抱合」を記述することである。本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で前提となる知識を概観したのち、3 節で先行研究を見る。4 節でフィジー語バトゥレレ方言の類別抱合の記述を行う。5 節で通時的観点から類別抱合の考察をする。最後に 6 節で全体のまとめを述べる。本稿における例文・図表番号、グロス、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。出典の明記していない例文は、すべて筆者が 2024 年 9 月に行ったフィールド調査で得たものである。

2. 背景知識

フィジー語はオーストロネシア語族、東マラヨ・ポリネシア語派、オセアニア諸語に属す。さらにフィジー語は大きく東方言と西方言に分けられ (Pawley and Sayaba 1971)、フィジー語バトゥレレ方言 (Vatulele Fijian, *na voha vāvahilele*) は西方言に属す。図 1 の円で示した島がバトゥレレ島である。

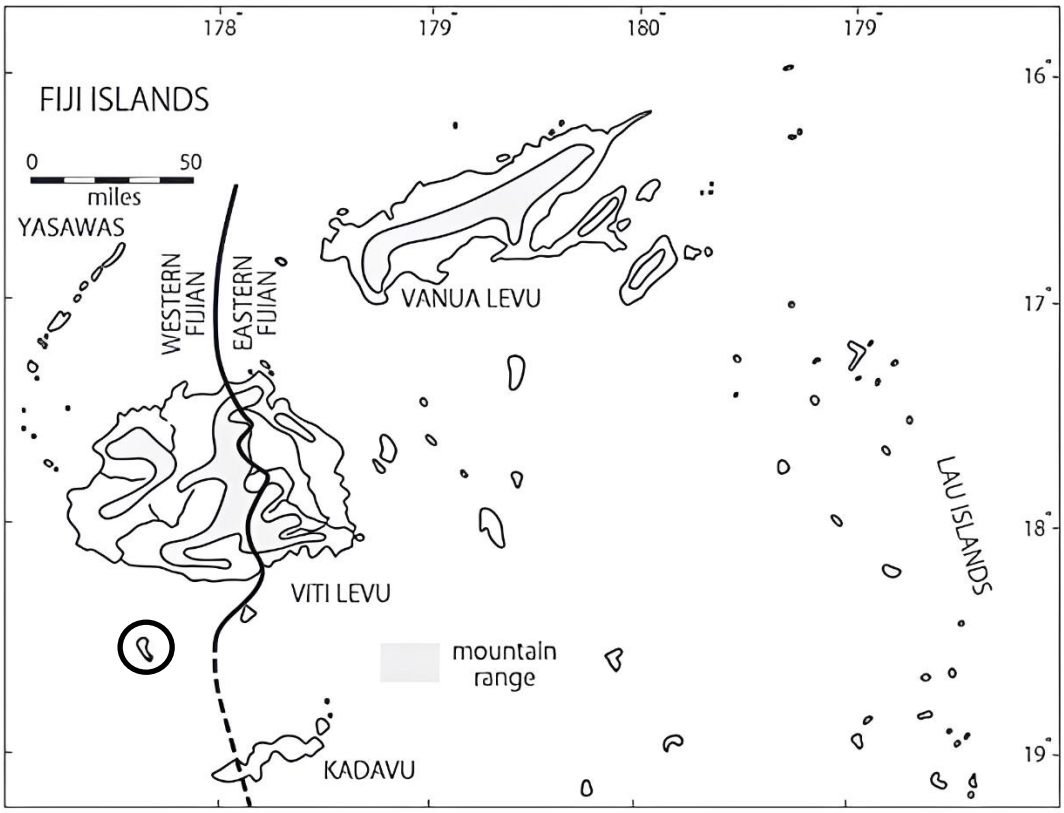


図 1: 東西フィジー語とバトゥレレ島 (Pawley and Sayaba 1971: 408)

2017 年のデータ[1]に基づけば、バトゥレレ島の人口は 775 人である。島内に 4 つの集落があり、話者によれば方言差はないという。本稿のデータはタウノボ村で得たものである。

フィジー語バトゥレレ方言の音素目録は表 1 と表 2 の通りであり、注意を要する音素については [ ] で音声を記す。

表 1: フィジー語バトゥレレ方言の子音

	bilabial	dental	alveolar	postalveolar	velar	glottal
Nasal	*m*	*n*			*g* [ŋ], *gw* [ŋ^{w}]	
Plosive	*b* [^{m}b]	*t, d* [^{n}d]			*k, q* [^{ŋ}g]	
					kw [k^{w}], *gw* [^{ŋ}g^{w}]	
Fricative	*v* [β]	*c* [ð]	*s*			*h*
Affricative				*j* [tʃ], *z* [^{n}dʒ]		
Trill			*r, dr* [^{n}r]			
Lateral			*l*			
Approximant			*y*		*w*	

[1] https://www.citypopulation.de/en/fiji/admin/nadroga_navosa/0808__vatulele/ [Accessed 2024-09-22].

表 2: フィジー語バトゥレレ方言の母音

i				*u*
	e		*o*	
		a		

強勢は語末から二つ目の音節に置かれる。長母音 (マクロンで示す) および二重母音 (*ai*, *au*, *ei*, *oi*, *ou*, *ui*) はその語内の位置に関わらず強勢が付与される。

基本語順は VS/VPA である。V (動詞句あるいは述語) は複数の音韻語から成り、主語・目的語と一致する要素や副詞的な要素などが含まれる。中核項である主語と目的語には、名詞句側に明示的な標識は付かない。

3. 先行研究

3.1 節と 3.2 節で名詞抱合に関する通言語的研究として Mithun (1984) と Gerdts (1998) を概観する。3.3 節でフィジー語ボウマー方言の名詞抱合について Dixon (1988) を扱う。3.4 節でフィジー語バトゥレレ方言の名詞抱合について Okamoto (2023) の記述をまとめる。

3.1. Mithun (1984)

Mithun (1984) は名詞抱合を 4 つのタイプに分類している (Aikhenvald 2007 もほぼ同様の類型を示している)。それぞれのタイプの特徴は表 3 のようにまとめられる。

表 3: Mithun (1984) の名詞抱合の分類

I	語彙的複合	動詞の表す範囲を狭める (Mithun 1984: 856)
II	格の操作	項を減らすだけでなく、別の項をとりうる (Mithun 1984: 859)
III	談話構造の操作	談話において、既知あるいは付随的な情報を背景化する (Mithun 1984: 859)
IV	類別的名詞抱合	抱合された名詞によって表される項を同定するような、より特定的な外的名詞句を伴う (Mithun 1984: 863)

これらの名詞抱合のタイプには階層性があるという。すなわち、ある言語で生産的なタイプ IV の名詞抱合が観察されればタイプ III が観察され、さらに、タイプ III があればタイプ II があり、タイプ II があればタイプ I がある、という含意的な普遍性がある。このことから Mithun (1984) は、通時的に名詞抱合はタイプ I から IV へ発展していくと結論づけている。以下では本稿に関わるタイプ I と II を概観する。

オセアニア諸語の名詞抱合はタイプ I の語彙的複合に分類される。その特徴は (3) のようにまとめられる。

(3)　タイプ I の名詞抱合の特徴 (Mithun 1984: 849)
a. 動詞と名詞は音韻的に独立した語である
b. 名詞は文の項としての統語的地位を持たない
c. 複合体は自動詞述語として機能する
d. 意味的にはまとまった活動 (unitary activity) を表す

Mithun (1984) はタイプ I の名詞抱合の例としてトンガ語を挙げている (4)。(4)a は他動詞文で、主語は能格で目的語は絶対格でそれぞれ標示されている。一方 (4)b の名詞抱合では、主語が絶対格標示であることから自動詞文であることがわかる。

(4)　a. *Na 'e*　*inu*　*'a*　*e*　*kavá*　*'e*　*Sione*
PST　drink　ABS　ART　kava　ERG　Sione
「シオネはカバを飲んだ」
b. *Na 'e*　*inu+kava*　*'a*　*Sione*
PST　drink+kava　ABS　Sione
「シオネはカバ飲みした」　(Churchward 1953: 76)

上述のとおり、生産的なタイプ II を持つ言語ではタイプ I も有することが予想される。Mithun (1984) はそのような言語の例として、トゥピナンバ語 (ブラジル、トゥピ語族) を挙げている。(5) はタイプ I、すなわち「語彙的複合」で、自動詞として機能している。

(5)　*a-pisd+eytik*
I-fishnet+throw
「私は網投げした」　(Rodrigues n.d., グロスは Mithun 1984: 856)

次にトゥピナンバ語のタイプ II「格の操作」を見る。(6)a は他動詞文、(6)b はタイプ II の例である。(6)b は目的語の「顔」が抱合され、全体で他動詞として機能している。新しい目的語「彼」は接頭辞 *s-* で標示されている。

(6)　a. *s-opd*　*a-yos-ey*
his-face　I-it-wash
「私は彼の顔を洗った」
b. *a-s-oad+ey*
I-him-face+wash
「私は彼の顔を洗った (lit. 彼を顔洗いした)」
(Rodrigues n.d., グロスは Mithun 1984: 857)

3.2. Gerdts (1998)

Gerdts (1998) は名詞抱合の特徴を (7) のように規定している。

(7) 名詞抱合の特徴 (Gerdts 1998: 92-3)

a. 名詞語幹として存在しうる要素と動詞語幹として存在しうる要素が 1 つの語に複合される。

b. この語は節の述部として機能し、抱合された名詞語幹は動詞の項の 1 つに対応する。

c. 原型的には、抱合された名詞語幹は他動詞述部の目的語か非活動自動詞述部の主語に対応する。

d. 通言語的に (時には一言語内において) 2 種の抱合がある: 複合抱合 (compounding incorporation) は節の結合価を減少させ、類別抱合 (classifying incorporation) は節の結合価を減少させない。

e. 類別抱合のある言語は抱合された要素の修飾や重複が可能である。

f. どちらの種類の抱合も、抱合された名詞が所有句の主要部に対応する場合、所有者は節内の文法的機能 (主語もしくは目的語) を担う。

本稿ではこれ以降 (7)d の Gerdts (1998) の術語に従い、自動詞の名詞抱合を**複合抱合**と他動詞の名詞抱合を**類別抱合**とそれぞれ呼ぶ[2]。前者は Mithun (1984) のいうタイプ I に、後者はタイプ II〜IV に対応する。

(7)f について、Gerdts (1998) はブラックフット語 (北米、アルゴンキン語族) の例を挙げている (8)。ここでは所有句の主要部である *o'kakín*「背中」が抱合され、所有者名詞句の *óma nínaawa*「その男」が目的語として現れている。

(8) *Nít-ssik+o'kakín-aw* *óma* *nínaawa*
I-break+back-him that man
「私はその男の背中を折った (lit. その男を背中折りした)」
(Frantz 1971: 72, グロスは Gerdts 1998: 91)

Gerdts (1998) は (4) のトンガ語のような現象を名詞抱合とは認めず、名詞剝離 (noun stripping) と呼んでいる。その理由は、名詞抱合が音韻的に 1 語と認められるのに対し、名詞剝離は、音韻的基準から見れば独立した 2 語であるためである。(3)a で見たように、トンガ語のような名詞抱合が音韻的に 2 語であることは、Mithun (1984) も指摘している。バトゥレレ方言を含むフィジー語の当該現象も音韻的基準に則れば 1 語とはいえない。しかし文法的には 1 語といえるため、本稿では名詞抱合として扱う。

3.3. Dixon (1988)

Dixon (1988) はフィジー語ボウマー方言の記述文法である。ボウマー方言はバヌアレブ (Vanua Levu) 島で話されており (図 1 参照)、バトゥレレ方言と異なり東方言に属す。

[2] Gerdts (1998) のいう類別抱合は、Mithun (1984) のタイプ IV の類別的名詞抱合 (classificatory noun incorporation) とは別であることに注意されたい (表 3 を参照せよ)。

Dixon (1988) はボウマー方言の名詞抱合の特徴を (9) のようにまとめており、これはバトゥレレ方言にも当てはまる。

(9) フィジー語ボウマー方言の名詞抱合の特徴 (Dixon 1988: 50)
a. 目的語抱合した動詞は常に自動詞である
b. 名詞的目的語 (nominal object) が他動詞接尾辞に取って代わる
c. 元の他動詞主語名詞句が派生自動詞主語となる

(10)a はボウマー方言の名詞抱合、(10)b はそれに対応する他動詞文である。

(10) a. *E ʔana+dalo*
3SG eat+taro
「彼はタロイモ食べする」

b. *E ʔani-a a dalo*
3SG eat:TR-3SG ART taro
「彼はタロイモを食べる」 (Dixon 1988: 49)

(9) に示したように、Dixon (1988) はボウマー方言の名詞抱合を一種の自動詞化とみなしている。つまり、Dixon (1988) が触れているのは複合抱合だけであり、類別抱合、すなわち目的語を取る名詞抱合は記述していない。

3.4. Okamoto (2023)

本節ではフィジー語バトゥレレ方言の記述的研究である Okamoto (2023) から、名詞抱合に関する記述をまとめる。Okamoto (2023) で扱っているのはもっぱら複合抱合で、類別抱合については前掲の (2) を挙げているだけである。

まず音韻的には、動詞語根と抱合名詞とが音韻語を形成することはない。例えば、(11) の *kanaika*「魚食べする」において、*kana*「食べる」と *ika*「魚」の間で母音が連続するものの、二重母音 *ai* が形成されることはなく (12)a、強勢は /i/ に付与される (12)b。音韻語境界で二重母音が形成されることはないため (Dixon 1988: 24, Okamoto 2023: 52)、それぞれ別個の音韻語である。なお、(12) の音声表記においてピリオドは音節境界を示す。

(11) *kana+ika*
eat+fish
「魚食べする」 (Okamoto 2023: 125)

(12) a. * [ka.nai̯.ka]
b. [ka.na.i.ka] (Okamoto 2023: 125)

形態統語的には、(9) で示した特徴を持つ。抱合されるのは目的語相当の名詞句に限られる。動詞は他動詞接尾辞を取らず、目的語名詞句は冠詞と共起しない。(13)a は名詞抱合、(13)b はそれに対応する他動詞文である。

(13) a. *Ai* *laga+here*
3SG.NPST sing+song
「彼は歌歌いする」

b. *Ai* *laga-ji-a* *na* *here*
3SG.NPST sing-TR-3SG ART song
「彼は歌を歌う」
(Okamoto 2023: 125)

単一の音韻語とはならないものの、動詞と抱合名詞とは統語的に隣接しなければならない。例えば、(13)a の *laga*「歌う」と *here*「歌」の間に副詞的要素などの語が現れることはない。ゆえに (14) は非文となる。継続相標識 *nō* は *laga here nō* のように名詞抱合構造のあとに現れる。

(14) * *Ai* *laga* *nō* *here*
3SG.NPST sing CNT song
(Okamoto 2023: 128)

語根だけでなく、句も抱合されうる。(15) では *lewe ni manumanu*「動物の肉」({ } で示す) が抱合されている。

(15) *Ai* *tamu* *kana+{lewe* *ni* *manumanu}*
3SG.NPST NEG eat+{flesh of animal}
「彼は動物の肉を食べない (lit. 動物肉食べしない)」
(Okamoto 2023: 125)

4. フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合の記述

本節では類別抱合を音韻・形態統語・意味のそれぞれの観点から記述する。4.1 節で音韻的特徴、4.2 節で形態統語的特徴、4.3 節で意味的特徴をそれぞれ記述する。

4.1. 音韻的特徴

類別抱合において、動詞と抱合名詞の間で音韻的に一つの単位を成すことはない。これは複合抱合と同様である。例えば (16) の *havaulunia*「頭洗いする」において、*hava*「洗う」と *ulu*「頭」の間で母音が連続するものの、*au* という二重母音が形成されることはない (17)a。それぞれ別個の音韻語のままである (17)b。3.4 節で先述したように、音韻語境界で二重母音が形成されることはない。

(16) *hava+ulu-ni-a*
wash+head-TR-3SG
「彼の頭を洗う (lit. 彼を頭洗いする)」

(17)　a. *　[ha.βaɻ̩.lu.ɲi.a]
　　b.　[ha.βa.u.lu.ɲi.a]

あるコンサルタントによれば、*havaulunia* は *hava ulu nia* のように 3 語に分かち書きするべきだという。他動詞接尾辞と目的語一致標識の *nia* も別個の音韻語とみなしている点が興味深い。このことはフィジー語バトゥレレ方言の類別抱合は音韻語を形成しないことを示唆する。

4.2. 形態統語的特徴

類別抱合は動詞、抱合名詞、他動詞接尾辞、目的語一致の順で生起し、それぞれの間にほかの要素が挿入されることはない (18)。

(18)　*A*　*kata+domo-ni-a*　*na*　*kwāhewa*　*na*　*gwata*
　　3SG　bite+neck-TR-3SG　ART　child　　ART　snake
　　「蛇が子供の首を噛んだ (lit. 子どもを首噛みした)」

類別抱合は他動詞接尾辞が現れるため、形態的に他動詞であることがわかる。他動詞接尾辞がなければ、すなわち (18) が *katadomonia* ではなく *katadomo* であったなら、目的語名詞句は現れることはできない。そのような場合、それは類別抱合ではなく自動詞の複合抱合である。加えて、複合抱合である *katadomo* に他動詞接尾辞が付与されるということは、複合抱合全体で自動詞として機能することを意味する。よって *domo*「首」は統語的に独立した単位とはいえない。

付加される他動詞接尾辞は *-(taki)ni* のみである。フィジー語バトゥレレ方言には 2 種類の他動詞接尾辞があり、それぞれ *-Ci* と *-(taki)ni* と一般化できる。*C* は語彙的に定められた子音を表し、歴史的には動詞語根の末子音に由来する (Lynch et al. 2002: 44)。伝統的にこれらの接尾辞はそれぞれ短接尾辞 (short suffix) と長接尾辞 (long suffix) と呼ばれる。短接尾辞はもっぱら動詞に現れる (19)。

(19)　*hava-ji-a*
　　wash-TR-3SG
　　「洗う」

一方、長接尾辞は、形容詞 (20)a や借用語 (20)b など生得的に他動詞接尾辞を取らない語に付いて他動詞を派生する。類別抱合で *-(taki)ni* のみ現れるのは、形容詞や借用語と同様、抱合名詞も生得的に他動詞接尾辞を取らないためであると説明できる。

(20) a. *vā-sewa-takini-a*
CAUS-small-TR-3SG
「小さくする」
b. *on-takini-a*
switch_on-TR-3SG
「スイッチを入れる」

長接尾辞 *-(taki)ni* は *-takini* と *-ni* という 2 つの異形態が存在し、どちらが出てきても構わない場合もある。例えば、(20)a の *vāsewatakinia*「小さくする」は *vāsewania* でも許容される。一方、類別抱合に現れる長接尾辞は *-ni* のみであり、(18) の *katadomonia*「首噛みする」に対し *katadomotakinia* のような形式は観察されていない。*-(taki)ni* の 2 つの異形態の選択に音韻的な条件がある可能性がある。

類別抱合で抱合される要素は語根に限られる。すなわち、所有接頭辞を伴った形式や形容詞を含んだ句は許容されない (21)。これは複合抱合が句も抱合されるのと対照的である (3.4 節の (15) を見よ)。

(21) a. * *kata+{domo balavu}-ni-a*
bite+{neck long}-TR-3SG
(「長い首を噛む (lit. 長い首噛みする)」)
b. * *mahi+{qu-baji}-ni-au*
brush+{1SG.POSS-tooth}-TR-1SG
(「私の歯を磨く (lit. 私を私の歯磨きする)」)

(7)c で述べたように、通言語的に抱合される名詞は他動詞目的語か非活動自動詞の主語に対応する傾向がある。フィジー語バトゥレレ方言の場合、抱合される名詞は目的語に限られ、主語等ほかの名詞は抱合されない。つまり、「私の首を噛む」から「私を首噛みする」を派生することはできても、「私の足が痒い」から「私が足痒い」は派生されない (22)。

(22) a. *Ai milamila qu-lā*
3SG.NPST itchy 1SG.POSS-leg
「私の足が痒い」
b. * *Au milamila+lā*
1SG.NPST itchy+leg
(「私が足痒い」)

4.3. 意味的特徴

類別抱合において抱合される名詞は所有句の主要部に相当し、所有者名詞句は目的語となる。これは Gerdts (1998) の主張と合致する (3.2 節の (7)f を見よ)。さらに、抱合される

名詞は所有物のうち身体部位に限られる。(23)a の類別抱合は、所有句[3]を目的語とする (23)b のような他動詞文から派生したと考えることができる。(23)a は (8) で挙げたブラックフット語と同様の現象であるといえる。

(23) a. *Qu hava+ulu-ni-a* [*o Emosi*]目的語＝所有者
1SG wash+head-TR-3SG PRP Emosi
「私はエモシの頭を洗った (lit. エモシを頭洗いした)」
b. *Qu hava-ji-a* [*e-ulu o Emosi*]目的語＝所有句全体
1SG wash-TR-3SG 3SG.POSS-head PRP Emosi
「私はエモシの頭を洗った」

フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合は、一種の所有者昇格 (possessor rising) あるいは外部的所有構造 (external possession) である。Payne and Barshi (1999) は外部的所有構造を以下 (24) のように定義している。

(24) 外部的所有構造 (Payne and Barshi 1999: 3)
意味上の所有者-所有物関係が、所有者を動詞の中核的な文法関係として、所有物を含む構成要素とは別の構成要素にコード化することで表現される構造

フィジー語バトゥレレ方言の類別抱合では、(23) で示したように、所有者が目的語という中核項として現れ、所有物とは別個の項として機能している。よって (24) の外部的所有構造の定義に合致する。Haspelmath (1999) も名詞抱合を外部的所有構造の一種とみなし、ヨーロッパ以外で観察されることを指摘している。

所有関係があったとしても、所有物が譲渡可能所有関係の場合類別抱合は許容されない。(25)a は抱合名詞が *taku*「背中」であるため許容される一方、(25)b は *volo*「ボール」であるため非文である。なお、目的語を取らない複合抱合の *caqevolo* は問題なく許容される。

(25) a. *A caqe+taku-ni-au*
3SG kick+back-TR-1SG
「彼は私の背中を蹴った (lit. 私を背中蹴りした)」
b. * *A caqe+volo-ni-au*
3SG kick+ball-TR-1SG
(「彼は私のボールを蹴った (lit. 私をボール蹴りした)」)

[3] フィジー語バトゥレレ方言の所有句について補足する。今回問題としている身体部位名詞の場合、所有者は所有接頭辞で表される。例えば、所有者が 3 人称単数である場合 *e-* で標示される。所有者名詞句を所有物名詞句の後ろに並置することで、(23)b の *eulu o Emosi*「エモシの頭」のように所有者を明示的に表すことができる。

譲渡不可能所有の身体部位であっても、全体部分関係とは言えない場合、許容度が下がる。(26) は *lala*「体」が抱合された例であるが、話者によっては違和感を覚える者もいる。

(26) ? *A hava+lala-ni-au*
3SG wash+body-TR-1SG
「彼は私の体を洗った (lit. 私を体洗いした)」

抱合名詞に対して、動詞についての意味的制約はないようである。(27) の「歯磨き」のような慣習化された動作だけでなく、前掲の (25) の「背中蹴り」のような、必ずしも習慣化されていないような動作についても類別抱合も観察される。

(27) *A mahi+baji-ni-ko*
3SG brush+tooth-TR-2SG
「彼はお前の歯を磨いた (lit. お前を歯磨きした)」

類別抱合は再帰的な文脈でも用いられる (28)。なお、フィジー語バトゥレレ方言には再帰代名詞がないため、通常の目的語一致標識が現れる。

(28) *Qu hava+lima-ni-au*
1SG wash+hand-TR-1SG
「私は自分の手を洗った (lit. 私は私を手洗いした)」

5. 通時的考察

3.1 節で述べたように、Mithun (1984) は名詞抱合が通時的にタイプ I (語彙的複合) からタイプ II (格の操作)、さらにタイプ III (談話構造の操作) を経てタイプ IV (類別的名詞抱合) へと発展していくと主張している。これに従えば、フィジー語バトゥレレ方言の名詞抱合はタイプ I からタイプ II へと機能を拡張している可能性がある。

ただし、タイプ II は決して生産的とは言えず、4.3 節で記述したように抱合名詞の意味的制約が大きい。4.3 節で記述したように、類別抱合で抱合される名詞は身体部位に限られる。今後身体部位以外の抱合名詞も許容されるようになるかもしれない。そうなれば、フィジー語バトゥレレ方言の名詞抱合はタイプ II へと完全にその機能を拡大することになる。

6. おわりに

本稿はフィジー語バトゥレレ方言の類別抱合の記述を行った。類別抱合において抱合されるのは目的語相当の名詞句に限られ、さらに意味的には身体部位に限られる。身体部位の所有者が新たな目的語として機能する。これは一種の所有者昇格あるいは外部的所有構造として分析できる。本稿で記述した現象は、Mithun (1984) の名詞抱合の通時的仮説がこの言語にも当てはまる可能性があることを示唆しており、類型論的に価値がある。

本稿で扱わなかった形式として、 (29) のようなものがある。

(29)　*vā-kana+ika-ni-a*　　*na*　*kwāhewa*
　　CAUS-eat+fish-TR-3SG　ART child
　　「子どもに魚を食べさせる (lit. 子どもに魚食べさせる)」

このような形式は名詞抱合が新しい目的語を取っているという点で、本稿で扱った類別抱合と類似している。しかし、形態的に (29) は使役接頭辞を伴っている点が異なる。さらに、(29) の目的語は被使役者 (causee) である点でも、目的語が所有者かつ被動者 (patient) である類別抱合と異なる。このような「名詞抱合の使役」(あるいは「使役の名詞抱合」) とも呼べそうな形式については稿を改めて論じる。

今後の課題として以下の点があげられる。まず、標準フィジー語を含むフィジー語諸方言や、オセアニア諸語の名詞抱合にも類別抱合が観察されるかという問題である。Gerdts (1998) にしろ Mithun (1984) にしろ、オセアニア諸語の当該現象を名詞抱合の原始的段階とみなしている。近隣の言語でも名詞抱合が目的語をとるように発展している可能性がある。加えて、外部的所有構造として当該現象を分析した場合、類型論的にどのように位置づけられるかについても、今後考察する必要がある。

本稿で扱った類別抱合が「語」といえるか否かも残された大きな問題である。3.2 節で述べたように、Gerdts (1998) がオセアニア諸語で名詞抱合を認めず名詞剥離としたのは、それらが音韻的に語を形成しないからである。従来観察されてきた複合抱合と同様、類別抱合も音韻的には単一の単位を形成しない。一方、目的語を取る他動詞という点では単一の文法語である。本稿は「語」の通言語的な定義に関する議論に一石を投じる研究である。

略号一覧

1, 2, 3	1st, 2nd, 3rd person 1・2・3 人称	NPST	nonpast 非過去
ABS	absolitive 絶対格	SG	singular 単数
ART	article 冠詞	POSS	possessive 所有
ASP	aspect アスペクト	PRP	proper 固有冠詞
CAUS	causative 使役	PST	past 過去
CNT	continuous 継続相	TR	transitivizer 他動化
ERG	ergative 能格		

参考文献

Aikhenvavld, A. Y. (2007) Typological distinctions in word-Formation. In: Timothy Shopen (ed.) *Laguage typology and syntactic description. grammatical categories and the lexicon.* Volume 3. Second edition, 1-65. Cambridge: Cambridge University Press.

Churchward, C. M. (1953) *Tongan grammar.* Oxford: Oxford University Press.

Dixon, R. M. W. (1988) *A grammar of Boumaa Fijian.* Chicago: The University of Chicago Press.

Frantz, D. G. (1971) *Toward a generative grammar of Blackfoot*. Norman, Okla.: Summer Institute of Linguistics.

Gerdts, D. B. (1998) Incorporation. In: A. Spencer and M. A. Zwicky (eds.) *The handbook of morphology*, 84-100. Oxford: Blackwell.

Haspelmath, M. (1999) External possession in a European areal perspective. In: D. L. Payne and I. Barshi (eds.) *External possession*, 109-135. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Lynch, J., M. Ross, and T. Crowley (2002) *The Oceanic languages*. Richmond, UK: Curzon.

Mithun, M. (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60, 847-895.

Okamoto, S. (2023) *Predicate structure and valency changing processes of Vatulele Fijian*. Doctoral dissertation, Tokyo University of Foreign Studies.

Payne, D. L. and I. Barshi (1999) External possession: what, where, how and why. In: D. L. Payne and I. Barshi (eds.) *External possession*, 3-29. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Rodrigues, A. D. (n.d.) *Estrutura do Tupinambá*. MS, Universidade Estadual de Campinas, Brazil.

Vatulele (Tikina, Fiji) - Population Statistics, Charts, Map and Location [Accessed 2024-09-22] https://www.citypopulation.de/en/fiji/admin/nadroga_navosa/0808__vatulele/

Classifying Noun Incorporation in Vatulele Fijian

OKAMOTO Susumu
(Tokyo University of Foreign Studies / National Museum of Ethnology)

Keywords: Fijian, Descriptive linguistics, Voice, Noun incorporation

This study describes and analyzes classifying noun incorporation (NI) in Vatulele Fijian. Traditionally, NI in Fijian has been considered a process of deriving intransitive verbs by incorporating the direct object of a transitive clause into the verb. In addition to this type of NI, Vatulele Fijian also exhibits examples of NI where the incorporated noun retains an object. This construction can be referred to as "classifying incorporation." This paper provides a detailed description of such structures, examining their phonological, morphological, syntactic, and semantic properties. The study further explores diachronic developments of this NI type from a typological perspective. This work provides valuable insights into broader linguistic typology concerning NI.

南琉球宮古語伊良部島方言における音節構造とモーラ構造

下地理則
（九州大学）

キーワード：琉球諸語，音韻論，音節とモーラ，Moraic Theory

1. はじめに

伊良部島方言を含む宮古語全般において、言語体系全体の記述の鍵を握る急所の 1 つは音節構造・モーラ構造の記述である。これをどう記述するかによって、単音の音素論的問題から形態音韻規則の記述にまで極めて大きな影響が生じ、分析の違いによって全く違った言語体系が描かれることになる。本稿の目的は、筆者のこれまでの記述（Shimoji 2008, 2017, 下地 2018）を大胆に更新する形で、伊良部島方言の言語体系全体を説明する上で最も合理的な音節構造とモーラ構造の記述を示すことである。この記述は、本稿で示すのと同様の記述上の問題を共有する他の宮古語全般に対しても、少なくとも根本的な部分において有効であり、その意味で宮古語の記述研究においても一定の貢献がある。

本稿の構成は以下の通りである。まず、一般言語学的な観点から音節構造・モーラ構造に関する 2 つの対立する考え方を整理し（2 節）、本稿がどの立場に立つかを明確にする。その上で、本稿が示す伊良部島方言の音節構造・モーラ構造の概要を提示する（3 節）。これを前提として、これまでの伊良部島方言のいくつかの未解決の問題点、あるいは整合性の取れない先行記述がどのように解決できるかを実証する（4 節）。そこでは、Moraic Theory (Hyman 1985, Hayes 1989) を援用したモデル（Moraic モデル）の有効性が主張される。このようにして M モデルの有効性について伊良部島方言に関して一定の結論を示したのち、宮古語全般における適用可能性について論じる（5 節）。

2. 音節とモーラ：一般言語理論における 2 つの立場

2.1. Onset-Rime モデルと Moraic モデル

音節を Onset と Rime という 2 つの構成素に分割するモデル（Pike and Pike 1947 以降、多数）を Onset-Rime (OR) モデルと呼ぶことにする。Onset vs. Rime という構成素の対立は個別言語の記述研究ではもはや自明とされることも多いが、それを経験的に支える事実も古くから注目されてきた。例えば、多くの言語の韻律現象において、軽音節（CV）vs. 重音節（CVV/CVC）という区別が有効になる[*1]。これは当該の現象が V の右側（すなわち Rime）の構造を参照しているという一般化につながる。Rime が 1 単位（すなわち V）であれば軽音節、2 単位（VV あるいは VC）であれば重音節と規定する。この「単位」を今、モー

[*1] よく知られるラテン語のストレス規則がそうである。ラテン語では、後ろから 2 音節目をストレスの基準位置とし、これが重音節ならそこへ（Rō.mā.nī「ローマ人」、pu.el.la「少女」）、軽音節なら、後ろから 3 音節目にずれる（ci.ce.rō「キケロ」）。この軽 vs. 重の音節量の計測において関与的なのは Rime であって Onset ではない。

ラと呼べば、OR モデルにおけるモーラは「長さ」と置き換えることで理解される。モーラをシンタグマティックに捉えようとする立場である（図 1）。

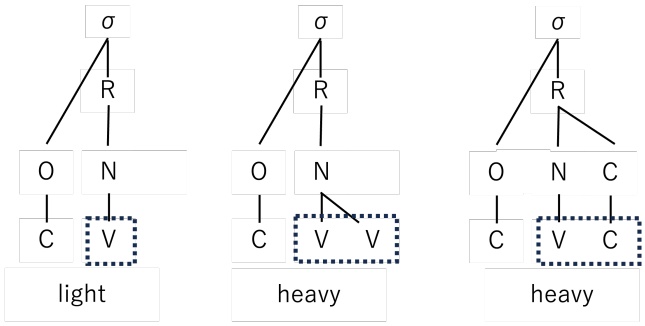


図 1. OR モデルにおける音節構造。O は Onset、N は Nucleus、C は Coda。R は Rime。破線は軽音節と重音節の区別に関わる部分。

一方、音節におけるモーラ構造をよりダイレクトに規定するモデルが Moraic モデル (M モデル）である（Hyman 1985、Hayes 1989）。これは、Onset, Nucleus, Coda という 3 つのパートをシンプルに並列させ、Rime という上位の構成素（Nucleus + Coda）を不要とする立場である。Nucleus と Coda それぞれに対してモーラが指定されると考えれば、OR モデルが Rime の「長さ」の違いを使って表現しようとしたモーラの違いをより直接的に表現できる。音節の 3 つのパートそれぞれについて、モーラを「持つか否か」で捉えることになり、これはモーラをパラディグマティックに捉える立場とも言える。

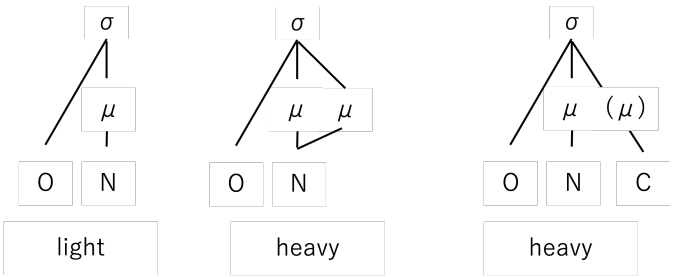


図 2. M モデルにおける音節構造。μ はモーラ素性。

図 2 で Coda のモーラ指定が (μ) となっている点について説明する。M モデルの利点の 1 つは、モーラ指定の有無についての言語個別性に柔軟に対応できる点にある。すでに述べたとおり、OR モデルでは CVC と CVV がどちらも重音節扱いされるという想定に立つが、これは言語によっては成り立たないことがわかっている。すなわち、モーラを担えるかどうかについて、OR モデルでは全て Rime に属するとされる要素間において「モーラの担いやすさ」に CVV > CVC (CVR > CVO) という序列が発見されている（Gordon 2006；R は共鳴音、O は阻害音）。

この場合、CVX の X のモーラ指定を言語個別性に任せると考えれば、理論的想定の根幹を変えずにこの言語間バリエーションに対応できる。一方、OR モデルでは、モーラを「長さ」で規定する以上、CVX（いずれも 2 単位分の「長さ」）の中でモーラ指定の有無を

区別する手立てはない[*2]。

2.2. 重子音の捉え方

OR モデルと M モデルの本質的な違いは、モーラ構造を音節構造の横並びの「長さ」で捉えるか、音節の各パーツが持つ「重さ」として捉えるかである（Davis 2011）。この違いが最も大きく表れるのは重子音 C_iC_i（例：日本語の「作家」/sakka/における/kk/）の扱いである。

図 3 に示すように、OR モデルによれば重子音は子音連続の一種とされ、非重子音連続 C_iC_j と同じ構造（スロット 2 つ分）を持つ。一方、M モデルでは、重子音は 1 モーラを持つ子音、と規定され、非重子音連続とは全く異なった構造を持つと解釈される。

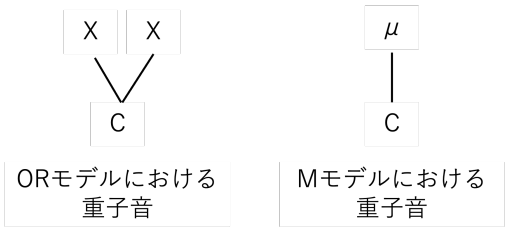


図 3. OR モデルと M モデルにおける重子音の表示

今、日本語の/saka/「坂」と/sakka/「作家」の音節構造・モーラ構造の違いを OR モデルで捉えたものを図 4 に示す。なお、非重子音連続構造を例示するために、仮想の語形/sakta/も同時に示す。図から明らかなように、OR モデルでは、単子音（Onset のみ）vs. 子音連続（/kk/および/kt/、いずれも Coda-Onset の連続）という構造的な対立が明確である。

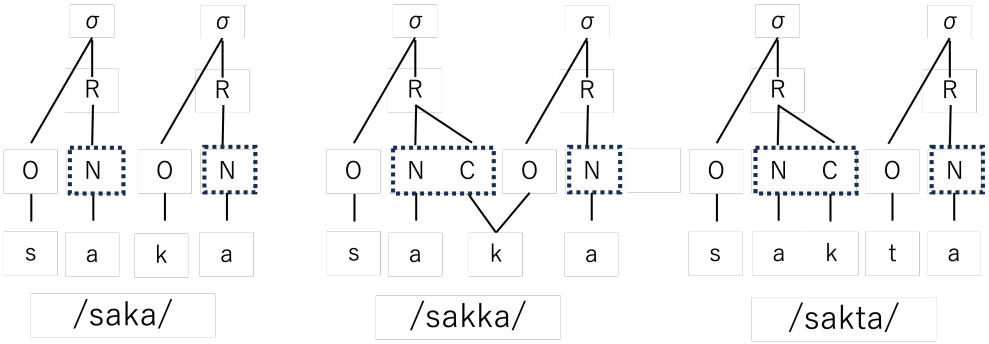


図 4. OR モデルにおける単子音、重子音、子音連続の比較（モーラを持つ部分に破線）

一方、M モデルでは、単子音 vs. 重子音の対立はあくまでパラディグマティックなものであって、単子音 C はモーラをもたず、重子音はモーラを持つ、という基底の対立がある

[*2] ある言語では Rime 全体を参照して軽音節と重音節を決め、別の言語では Rime という構成素ではなく、それが支配する Nucleus のみの構造を参照して軽音節と重音節を決める、などという特殊な想定をすれば、OR モデルでもこの言語間変異を乗り切れるが、これは Rime を否定するような解決策で、それを前提とする OR モデルにとっては解決策にならない。

と解釈する（図 5）。重子音の音声的な長さは、モーラ性という音韻素性から間接的に生み出されると考える[*3]。

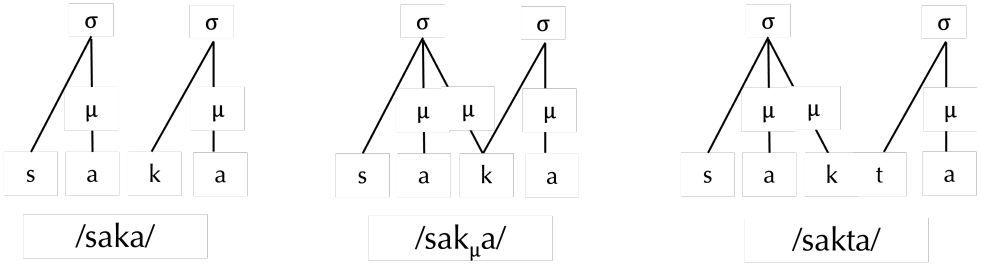


図 5. M モデルにおける重子音の音節構造・/saka/ vs. /sakka/

M モデルの重要なポイントは、重子音が子音連続と異なる構造を持つという点である。重子音であることは、音素 C が 2 つあるという構造の問題ではなく音素 C の特性で表現されるからである。重子音が CC と異なるということは、OR モデルが/kk/として捉える 2 番目の/k/は音素として存在しない、と考えることである。図 6 に示すように、/sak$_\mu$a/における/k$_\mu$/は前半の音節の Coda として、そして同時に後半の音節の Onset としても機能していることが表現されている（説明の便のためにそれぞれ実線と破線で表示）。/saka/、/sak$_\mu$a/のいずれも音素の配列としては/saka/として表示されている点に注意されたい。このように、M モデルでは、重子音の ambisyllabic な特徴、すなわち 1 つの C が 2 つの音節に対して同時に別々の役割を持つ点をうまく表現できる。

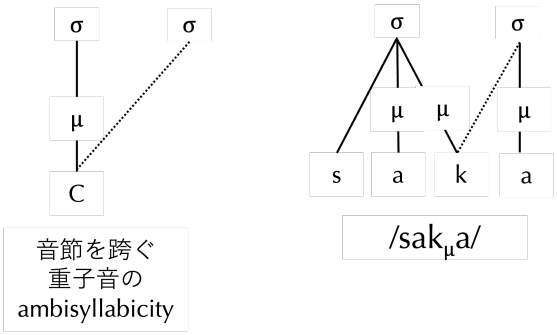


図 6. 音節を跨ぐ重子音の ambisyllabicity の表現

上記のように、OR モデルと M モデルとでは音節構造とモーラ構造に対する捉え方が

[*3] このように、M モデルでは、音韻表示（モーラあり）と、その音声的帰結とを区別する。これは、重子音すなわち C$_\mu$ が、必ずしも「長さ」として実現しないことを理論的に許容・予測する。これは、単子音と重子音の対立に関する柔軟な分析を可能にする。例えば東北方言では一般に、母音間の無声阻害音は有声化するが、重子音の際は無声のままである（例：青森県野辺地方言の/ototto/ [odot:o]「弟」）。しかし、重子音は音声的に、必ずしも閉鎖区間が長くなるというわけでもない（Max Monson 氏、私信）。Monson 氏が提示してくれた例を使うと、津軽方言の「音」/oto/ [odo] と「夫」/ot$_\mu$o/ [ot(:)o] の対立について、これを OR モデルで捉えようとすると/tt/が/t/よりも「長い」とは必ずしも言えず、言語事実に反する場合がある。しかし、これを M モデルで捉えれば、重子音/t$_\mu$/は有声化に抗うという音声的な帰結として確認できる、と考えることができるだろう。

大きく異なるため、個別言語の記述を進める際、どちらを採用すべきかを慎重に考えなければならない。例えば、ハンガリー語では語末の子音連続は 2 つまでで、3 子音連続になるときに母音挿入が生じることで知られる (Ringen and Vago 2011)。図 7 の最上段において、/kap/ “receive” は 2 人称単数形の形成において/-s/を取って/kaps/となるが、この場合、そのまま適格な構造として出力される。一方、図の中段における/aːld/ “bless” は、/-s/をとることで語末に 3 子音連続を生じるため、母音挿入を必要とする。

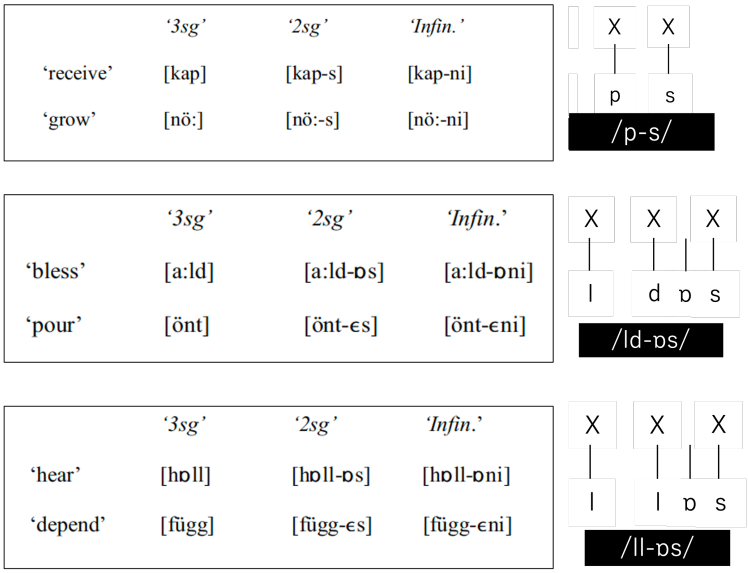


図 7. OR モデルを支持する言語データ：ハンガリー語の語末子音連続と母音挿入規則 (Ringen and Vago 2011)

ここで、図の最下段の/hɑll/ ”hear” の振る舞いが注目される。これは重子音/ll/を語末に持っている。これは 2 子音連続構造とみなされており、したがって母音挿入を必要とすると考えることができる。つまり、ハンガリー語の重子音は OR モデルのように子音連続構造で捉えることが妥当、ということになる。もし M モデルが想定するように、重子音を音素 C1 つとして捉えようとすると、/hal$_{\mu}$/は CVC 構造とみなされ、母音挿入は起こらなかったはずである。

アラビア語のハドラミー方言では逆に、重子音が子音連続と異なる振る舞いをすることで知られる (Davis 2011)。この方言では、語末の C_iC_j に対して母音挿入が適用されるが、語末の重子音に対しては生じない。OR モデルではいずれの構造も母音挿入に関して同じ振る舞いが期待される。しかし M モデルで考えれば、重子音は音素として 1 つの/C/であり、母音挿入が生じないことが予測される。

(1) gird → 母音挿入 → gi**r**i**d** “monkey”

(2) rabb (M モデルでは rab$_{\mu}$) “lord”

このように、OR モデルと M モデルのいずれが妥当かという問題は必ずしも記述の好みの問題ではなく、ある理論的立場によってしか当該言語の実証データを説明できない、と

いう可能性もある。その場合、積極的にその理論的立場を採用するべきである。本稿では、4 節において伊良部島方言の音節構造・モーラ構造を記述するモデルとして M モデルが最適であることを実証していく。

2.3.　M モデルにおけるオンセットの構造

M モデルは Onset, Nucleus, Coda それぞれにモーラの有無を指定するという考え方により、上記の Coda に関する言語間変異に柔軟に対応できることを見た。一方、Onset については、OR モデルと全く同様に、多くの言語の経験的事実から、モーラが**指定されない**とする考え方が一般的であり、これは図 8 の (a) と (b) に対応する。

(a) と (b) には大きな違いがある。(a) は現在最も広く受け入れられている M モデルであり、Onset はモーラを持たないとの考え方に立つ (Hayes 1989)。(b) は、(a) と違って Onset と Nucleus が一旦まとまりをなし、それがモーラを共有するとする (Hyman 1985)。(c) は Topinzi (2008) が一貫して主張する新しい考え方であり、これは Onset がモーラを持つと考えるべき言語、特に Onset に重子音を許す言語がわずかに実証されていることから提案された考え方である。すでに前節で述べたように、M モデルにおける重子音は「モーラを持つ（モーラ素性に支配される）C」として定義されるから、Onset に重子音があるなら、それを図 8(a) のようにするわけにはいかない。また、Nucleus も必ずモーラを持つから、そのモーラを「取り合う」(b) のようにするわけにもいかない。

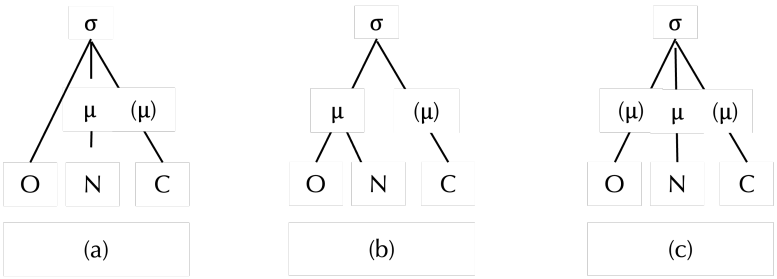


図 8. M モデルにおける音節構造。μ はモーラ素性。

後述するように、伊良部島方言（および宮古語全般）にも語頭重子音が広く認められ、これは 1 モーラをもち、かつ同一音節の Onset を構成すると見る様々な証拠がある。よって、本稿では (c) の構造を想定して記述を進めていく。

なお、図 8 の (b) を用いても、Onset が 1 モーラを持つ構造に対応できるように見える。例えば、この O+N を支配するモーラが 2 モーラを持つと指定すれば、伊良部島方言の/nna/「貝」は図 9(a) のように分析できるであろう。

しかし、O+N 全体で 2 モーラという点で、/naa/「名前」もまた同じ構造を仮定せざるを得ず、(a) では/n_{μ}a/と/naa/の区別ができない。これら 2 つを区別するには (b) と (c) のように別々にモーラを振り分けるモデルが必要になる。なお、/n_{μ}a/と/naa/は確かに 2 モーラという点では同じだが、後続する主題助詞が異なる形を取るため、音韻表示において区別されていなければならない。

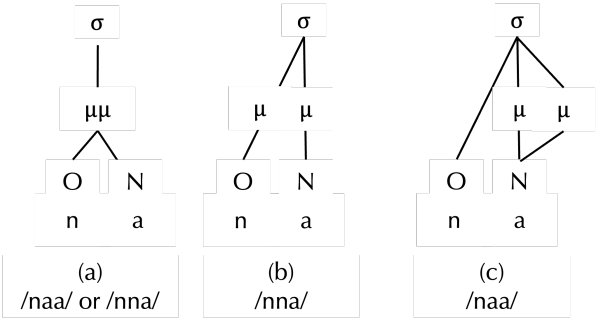


図 9. O+N がモーラを共有するモデル（左端）と O, N にそれぞれモーラが指定されるモデル（真ん中と右端）

(3) /nna/ + /a/ → /nnaa/「貝は」

(4) /naa/ + /a/ → /naaja/「名前は」

主題助詞/a/が異形態/ja/をとるのは、2 モーラの Nucleus に 1 モーラの/a/が後続して 3 モーラの Nucleus を形成するのを回避するための/j/挿入として一般化できる。この一般化は図 9 の左端のように O+N 全体にモーラを指定するやり方では不可能である。

よって、本稿では、伊良部島方言の音節構造・モーラ構造を記述する際、O+N が一度まとまりを作るという図 8(b) の立場を取らない[*4]。

3. 伊良部島方言の音節構造とモーラ構造：これまでの記述の整理

本稿では、伊良部島方言の音節構造とモーラ構造が M モデル、特に前節の図 8(c) を用いることで適切に記述できることを示していく。その前に、本節ではひとまず筆者自身がこれまで示してきた記述を概観することで、分析に先立つ言語事実の部分を確認する。この記述は、特定のモデルに依拠しない構造主義的な記述として意図され、その意味で当該言語体系を、そしてそれのみを適切に記述するように工夫されているが、整合性や体系性の点で様々な問題を残している。さらに、この記述は構造主義的でありながら、部分的に OR モデルを前提としたものであり（例えば重子音を CC の連続とする点など；後述）、一方で OR モデルの考え方とは相容れない部分もあるなど、理論的一貫性にも欠ける。このような諸問題について 4 節で 1 つ 1 つ取り上げていき、それぞれに対して M モデルを採用することで一貫して問題が解消されることを示す、という形で、M モデルの有効性を実証する。

[*4] O+N がまとまりを作るという考え方は一般に Body-Coda モデルとも言われ、OR モデルに対する代替の考え方の 1 つである（Bosch 2011:787）。図 1 における O vs. NC を ON vs. C のように構成素を組み替えた考え方である。モーラは、OR モデルと同じく、「長さ」として捉えることになり、Body (O+N) が 1 モーラ、Coda が 1 モーラとして計測する。よって、モーラの捉え方において M モデルとは一線を画す。

3.1.　音素

3.2.　音素体系の概観

音素は子音、母音、半母音の 3 つのクラスに分けられ、これらは音節における振る舞いで定義される（3.5 節で詳しく述べる）。子音は阻害音と共鳴音からなり、阻害音には有声 (+vd) と無声 (-vd) の素性をもつ。連濁において、非語頭の語根に +vd 素性をもつ阻害音が含まれる時、連濁をブロックする（いわゆるライマンの法則が成り立つ）。(5), (6) のいずれも形容詞語根 + 名詞語根の複合名詞であるが、(5) では非語頭語根/kan/の Onset /k/が連濁し、(6) では非語頭語根/kazi/の Onset /k/が連濁を阻止される。後者において阻害音/z/（+vd）が含まれるからである*5。

(5)　/uku/「大きい」+ /kan/「カニ」→ /ukugan/「大きいカニ」

(6)　/uku/「大きい」+ /kazi/「風」→ /ukukazi/「台風」（*/ukugazi/）

/c/は [ts]、/z/は [dz] を基底にもち、それぞれ/i/, /j/の前で口蓋化する。/f/と/v/は音韻的にはペアをなさず、/v/と/ž/は接近音（[ʋ] および [ʐ̞]）を基底にもち、音節における振る舞いからも共鳴音クラスに位置付けられる（3.5 節で後述）。/r/は単子音 Onset で [ɾ]、それ以外でそり舌接近音 [ɭ̆] となる。/n/は基底では [n] であるが、同器官的に後続子音の調音位置に同化する。

表 1. 伊良部島方言の子音音素

		唇	歯茎	軟口蓋	声門
阻害音	**閉鎖 (+vd/-vd)**	p/b	t/d	k/g	
	破擦(+vd/-vd)		c/z		
	摩擦(+vd/-vd)	f	s		(h)
共鳴音	**鼻音**	m	n		
	接近音	v	ž		
	流音		r		

半母音音素/w/と/j/は、子音音素と違って Onset 位置にしか立たない。/j/はすべての子音と結びついて複合 Onset（CG）を形成するが、/w/は/k/, /g/とのみ結合し、その際の Nucleus は/a/のみである。/kw/、/gw/は基礎語彙には見られず、借用語（例 : /kwaasi/「菓子」、/saugwaci/「正月」）、あるいは基底の/u/が代償延長によって/w/に再編成される形で生じる（例 : /uku-ani/（大きい-姉）→ /ukwaani/「長女」）。

基底の母音音素は 5 つ（/i, e, a, o, u/）であり，/i/は規則で挿入される挿入母音である*6。

*5 共鳴音は音声的には有声であるが、音韻的に +vd 素性を持たない。(5) において、/kan/の/n/は共鳴音であり、+vd 素性を持たないため、連濁が生じうる。

*6 /e/と/o/は基礎語彙には見られないが、/e/は文法形態素にはごくわずかに見られる。例えば/e/は発話疑問助詞/e/が存在し（/partar=re/（帰った=Q）「帰った（って言った）？」）。

長母音は短母音の連続と解釈する。これは特定の形態素が絡む形態音韻交替、特に特性名詞化辞/ja/「〜という特性を持つ人」が絡む形態音韻交替から実証できる。(7) に示すように、/ja/は、接続先の語基末母音を脱落させる。これを踏まえると、(8) において、/mii/の長母音のうち 1 モーラ分の母音のみ脱落することから、これが/i/ + /i/の構造をしていると解釈すべきであることがわかる。

(7) 語基末が短母音の場合

a. /fau/「食べる」+ /ja/ → /faja/「食べる人」(e.g. /gacifaja/「餓鬼のように食べる人（食いしん坊）」)

b. /idi/「出る」+ /ja/ → 語基末母音削除 → /idja/「出る人」(e.g. /asiidja/「汗がよく出る人；汗かき」)

(8) 語基末が長母音の場合

/mii/「見る」+ /ja/ → 語基末母音削除 → /mija/「見る人」(e.g. /munumija/「ものをよく見る人」)

3.3. 挿入音素

/ɨ/は摩擦性のある阻害音 (/f, s, c, z/) の後に挿入される。挿入母音であることから、/ɨ/の音声実体は前に生じる子音（すなわち/f, s, c, z/）の調音位置によって大きく変わる。特に、coronal の/s, c, z/に後続する場合は [i̱] や [ẕ] のような平唇の狭母音あるいは摩擦母音として、labio-dental の/f/に後続する場合は当該調音位置を保つ接近音（labio-dental approximant [ʋ] のような音声）として生じる。/ɨ/が基底では存在しないことは次に示す事実からわかる。主題助詞/a/の異形態は、名詞の末尾の音節構造によって変わるが、CV で終わる (9) は基底の/a/のままであるのに対し、C で終わる (10) では C のコピーが Onset に出現し、/ra/となっている。これを Geminate Copy Insertion 規則という (Shimoji 2008)。今、「蜂」を意味する/pacɨ/ [patsɨ] について、語末の/ɨ/が基底には存在せず、/pac/であることが (11a) の振る舞いからわかる。仮に基底に/ɨ/が存在したのならば、CV 終わりの名詞として (9) と同様、主題助詞は/a/となると予測されるが、そうなっていない。こうして、基底が/pac/である「蜂」は、助詞を伴わずに出現する場合は (11b) のように、/ɨ/挿入によって/pacɨ/となる。これは、後述するように、語末 C が共鳴音に限られるという制限があるためである、と解釈する。

(9) /pana/「鼻」+ /a/ → /panaa/「鼻は」

(10) /par/「針」+ /a/ → /parra/「針は」

(11) /pac/「蜂」

a. /pac/ + /a/ → /pacca/「蜂は」

b. /pac/ → /ɨ/挿入 → /pacɨ/「蜂」(名詞単独)

/ɨ/は、単なる音声的な渡り音 (transitional vocoid) ではなく、音韻的に母音として機能する挿入母音音素 (epenthetic vowel phoneme) である。例えば、「蜂」を意味する/pacɨ/ [patsɨ]

は/CVCV/構造であり、挿入音素を無視して/CVC/構造と見ることはできない。伊良部島方言では、2 モーラ語で CVC の場合は必ず/C/でピッチ下降が生じるが（HL）、/paci̍/（すなわち CVCV) はそうならず、HH となる。韻律規則が音韻構造に対して働くという前提で考えれば、/CVC/か/CVCV/かが決まったのちに、ピッチのパターンが付与されると考えるべきである（伊良部島方言の韻律については Shimoji 2009 参照）。

3.4.　音節構造のテンプレート

伊良部島方言の音節構造は、Onset + Nucleus + Coda の構造を持つ**正音節**と、成節子音の Nucleus のみで語頭にしかたたない**準音節**（sesquisyllable）に区分される（下地 2018）。準音節は共鳴音 (Resonant) のみ立ちうる点から、図 10 では準音節を R としている。正音節は語における位置によって構造が異なる。語頭位置では Onset に立つ C が 2 つ許され、それは常に重子音である。非語頭音節の Onset C は 1 つまでである。語末に許される Coda は共鳴音（/m, n, v, ž, r/）のみである。長音は 2 つのスロットを埋めると捉え、準音節は長子音 RR が可能であり、母音は長母音あるいは二重母音として VV が可能である。G は渡り音（/w, j/）で、C とともに複合 Onset を形成する。

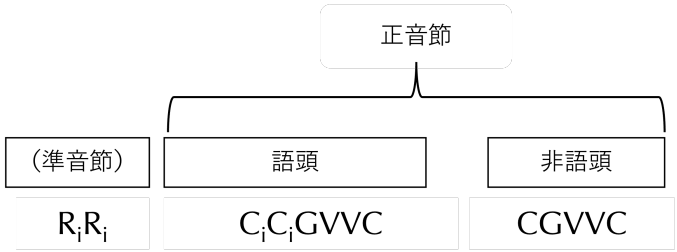


図 10. 伊良部島方言の音節構造（下地 2018）: V は必須。それ以外はオプショナル。

以下に、具体例を用いて解説していく。(12) は準音節 + 正音節構造を持つ単語の例である。これらから分かるように準音節は共鳴音に限られる。(b)(e)(f) は準音節が長子音の例、(d) は準音節に続く正音節が語頭音節 C_iC_i を持つ例である。(d) からわかるように、正音節の「語頭」音節の特徴は、その前に準音節を伴っていても成立する。

(12)　準音節を持つ単語の例

a. /mta/ [m̩ta]「土」(R.CV)

b. /mmta/ [m̩ːta]「ンータ（木の一種）」(RR.CV)

c. /nsi̍/ [z̩si̍]「北」(R.CV)

d. /vcca/ [ʊ̩ttsa]「うずら」(R.CCV)

e. /žžkuja/ [z̩ːkʊja]「乞食」(RR.CV.GV)

f. /rrtar/ [l̩ːta⌋]「入った」(RR.CVC)

(13) は正音節の構造、特に語頭音節の構造を例示したものである。(e) に示すように語頭 Onset の CC は重子音であり、これは (f) に示すように G とも結びついて CCG の Onset を形成することができる。

(13) 正音節の例：特に語頭音節のバリエーションに着目したもの

a. /macja/ [matɕa]「軍鶏」(CV.CGV)

b. /maada/ [maːda]「とても」(CVV.CV)

c. /maicja/ [maiɕa]「懐」(CVV.CGV)

d. /mаž/ [maʐ]「米」(CVC)

e. /mma/ [mːa]「母」(CCV)

f. /mmja/ [mːʲa]「もう」(CCGV)

今 (13(e)) で取り上げた語頭重子音は阻害音・共鳴音ともに幅広く見られ、基礎語彙にも多数見つかる（(14)-(16)）。

(14) 共鳴音

a. /mmi/ [mːi]「群れ」

b. /nnuciɨ/ [nːʊtsɨ]「命」

c. /vva/ [ʊva]「あなた・お前」（2 人称単数）

d. /žža/ [ʐzʊ]「魚」

e. /rra/ [l̪ːa]「胎盤」

(15) 摩擦音

a. /ffa/ [fːa]「子」

b. /ssu/ [sːʊ]「白」

c. /ssja/ [ɕːa]「物知り」

(16) 破擦音・閉鎖音

a. /ttjaa/ [tˀʲaː]「すると」

b. /ccir/ [tˀɕi̥]「キセル」

重子音は語頭にも語中にも見られ、単子音と対立する。

語頭重子音が（C.CV のような成節子音 +CV ではなく）同一音節の Onset を構成する証拠は、例えば連濁において明らかである（Shimoji 2008）。伊良部島方言では、他の日琉諸語と同様、連濁は複合語における後部要素の語根頭音節 Onset C に対して適用される。例えば (17a) では、/sata/「砂糖」の Onset /s/が/z/に交替する。これに照らすと、例えば語頭重子音を含む/ffa/「子」を後部要素にとる複合語/miivva/「娘」は、重子音全体が連濁することから、これが同一音節のオンセットになっていることがわかる。/ssam/「シラミ」も同様であるが、この場合、まず連濁規則に従って（音素配列上許されない有声阻害音の/zz/を含む）/zzam/となり、これが一般的な音韻規則である無声化によって/ccam/になっている（連濁で生じる/zz/は破擦音であるから、その無声化は/cc/となる）。

(17) 連濁にみる語頭重子音の振る舞い

a. ffu-「黒い」+ sata「砂糖」→ ffu**z**ata「黒砂糖」

表 2. 単子音と重子音の対立

	単子音	重子音
語中	/ba.ta/ [bata]「腹」 CV.CV /ba.si/ [baʃi]「間」CV.CV /a.ca/ [atsa]「明日」V.CV /pa.ma/ [pama]「浜」CV.CV /a.na/ [ana]「穴」V.CV	/bat.ta/ [bat:a]「腋の下」CVC.CV /bas.sir/ [baʃ:iɭ]「忘れる」CVC.CVC /ac.ca/ [at:sa]「向こう」VC.CV /pam.mai/ [pam:ai]「ご飯」CVC.CV /an.na/ [an:a]「母親」VC.CV
語頭	/fau/ [fau]「食べる」CV /sa.gir/ [sagʲiɭ]「下げる」CV.CV /ci.bi/ [tʃibi]「尻」CV.CV /maa.su/ [ma:su]「塩」CVV.CV /na.ma/ [nama]「生」CV.CV	/ffa/ [f:a] 「子」CCV /ssa.gi/ [s:agi]「結婚（式）」CCV.CV /ccir/ [tˀtʃiɭ]「キセル」CCVC /mmaa/ [m:a:]「いやだ」CCVV /nna.ma/ [n:ama]「今」CCV.CV

b. mii-「女」+ ffa「子」→ mii**vv**a「娘」

c. uku-「大きい」+ ssam「シラミ」→ *uku**zz**am → uku**cc**am「大ジラミ」

語中の子音連続は 2 子音まで（便宜的に C_1.C_2、C_1 は前半音節の Coda、C_2 は後半音節の Onset）許される。表 3 に示すように、重子音、鼻音 + 同器官的子音（部分重子音）、そして非重子音連続のいずれも許されるが、非重子音連続には強い制限があり、C_1 が共鳴音でなければならない。

表 3. 語中の子音連続のバリエーション

重子音	
a.	u**pp**i「それだけ」
b.	u**tt**u「年下の兄弟」
c.	u**kk**a「借金」
d.	ma**ff**a「枕」
e.	ba**ss**ir「忘れる」
f.	ma**cc**ja「店」
g.	pa**mm**ai「ご飯」
h.	a**nn**a「母親」
i.	a**vv**a「油」
j.	ta**žž**as-「束ねる」
k.	ju**rr**u（魚の名前）

部分重子音（同器官的）	
a.	juu**n.p**uu「蛍」
b.	ba**n.t**i「1PL.EXCL」
c.	mi**n.k**u「耳が聞こえない人」
d.	ba**n.cɨ**.ki.ra「グァバ」

非重子音連続	
a.	a**m.d**ir 「手提げ籠」
b.	ka**m.n**ar「雷」
c.	ki**v.sɨ**「煙」
d.	pa**ž.g**i「おでき」
e.	u**r.zɨ**n「4-6月くらいの季節」

3.5.　音素配列

母音は正音節の Nucleus としてのみ機能する。二重母音 VV の組み合わせは、/ai/, /au/, /ui/の 3 パターン（つまり falling diphthong）である。基底で/ia/ないし/iu/の組み合わせが生じた場合、表層でそれぞれ/jaa/, /juu/として再音節化される。これは/i/ → /j/の交替（1 モーラ分の消失）に伴う母音/a/および/u/の延長（1 モーラ分の延長）という代償延長として分

析できる。

(18) /kuri/「これ」+ /a/ (TOP) → /kuria/ → /kurjaa/「これは」

(19) /jum-i-ar/ (読む-THM-RSL) → /jumiar/ → /jumjaar/「読んである」

(20) /jum-i-ur/ (読む-THM-PROG) → /jumiur/ → /jumjuur/「読んでいる」

子音のうち、阻害音は正音節の Onset と Coda として機能しうる。共鳴音はこれに加えて準音節の Nucleus としても機能しうる。さらに、共鳴音のうち/ž/と/r/は正音節の Nucleus としても機能できる。母音も含めた音素種別と、それらの音節形成に関する分布特性を表 4 にまとめる[*7]。

表 4. 音素種別と音節における分布特性

		Onset	Coda	準音節 Nucleus	正音節 Nucleus
母音 (V)		-	-	-	+
渡り音 (G)		+	-	-	-
子音 (C)	阻害音	+	+	-	-
	共鳴音	+	+	+	-
	共鳴音(ž, r)	+	+	+	+

最も多機能な子音音素は/ž/と/r/であることがわかる。これらは通常の子音と違って正音節の Nucleus の位置に立ちうるが、その際、Onset は両唇音に限られ、また Coda も取れない。

(21) /ž/が正音節 Nucleus に立つ例

a. /pžtu/ [pʂtʊ]「人」(CV.CV)

b. /bžž/ [bʐ̩ː]「座る」(CVV)

c. /mžtaa/ [mʐ̩taː]「3 人」(CV.CVV)

(22) /r/が正音節 Nucleus に立つ例

a. /prrma/ [p l̩ːma]「昼」(CVV.CV)

b. /brbrrgassa/ [b l̩b l̩ːgasːa]「クワズイモ」(CV.CVV.CVC.CV)

c. /mrrna/ [m l̩ːna]「みる（海藻の一種）」(CVV.CV)

3.6. モーラ構造

モーラは、すでに規定した音節構造をもとに、以下の図 11 のように指定される。Onset のうち左端の重子音の第一要素が 1 モーラを持ち、Nucleus、Coda のすべての要素がそれぞれ 1 モーラ分に数えられる。

[*7] 下地 (2018) では、逆にこの分布特性をもとに、母音・子音・渡り音の 3 種別を定義している。

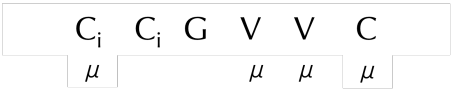


図 11. 伊良部島方言のモーラ構造

音節の各要素（C, G, V）に対するモーラの有無は最小語制約の観点から証明できる。伊良部島方言の自立語は最小で 2 モーラ分なければならない (Shimoji 2008)。(C)(G)V は許容されず、これは 1 モーラであると考えられる（図 12 (a)-(d)）。すなわち、単子音 Onset の C および渡り音 G はモーラを持たない。これに対し、Rime に属する V, VV, VC はそれぞれモーラを持ち、VV, VC は 2 モーラにカウントされ、最小語制約をクリアする（図 12(e)(f)）。図 12(c) に示されるように、単子音 Onset の C はモーラを持たない一方、この左側にさらに C がくる C_iC_iV（図 12(g)）は最小語制約をクリアする適格な語である。つまり、この左側の C_i は、（図 12(e)(f) における Nucleus および Coda と同様）1 モーラ分としてカウントされていることがわかる。

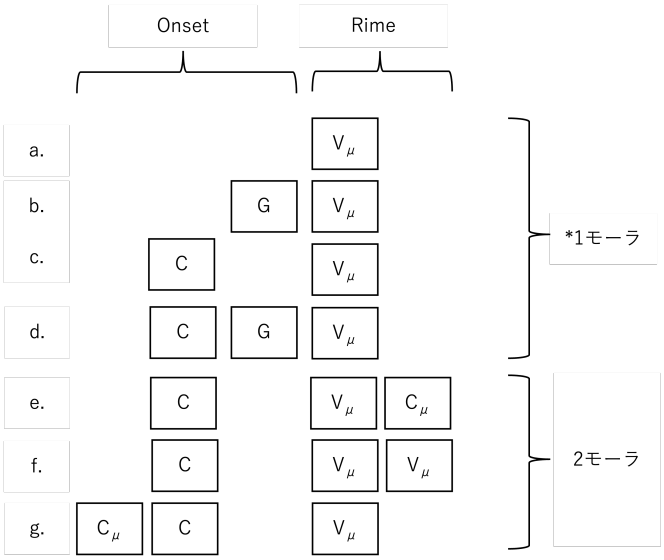


図 12. 最小語制約からみる Onset のモーラ性

正音節における短母音 vs. 長母音の対立、準音節における短子音 vs. 長子音の対立、正音節における単子音 vs. 重子音の対立はモーラを使って 1 モーラ vs. 2 モーラの対立として解釈できる。

伊良部島方言の形態音韻交替を特徴づけるものの 1 つに代償延長があるが、これもモーラを使って、モーラを保持した音節の再形成として捉える。(23) と (24) は、共に/ia/および/iu/のモーラ数を保ったまま、/i/が渡り音化するという現象であり、これは/i/ → /j/に伴う 1 モーラ分の減少を、後続母音/a/および/u/の 1 モーラ分の延長で補う現象である。(25) は、重子音を語幹末にもつ動詞語幹が関与するものである。/ff/「噛む」は、母音/a/や/i/で始まる屈折接辞の後続によって、当該母音は基底の重子音に後続する Nucleus となる。こ

の場合、重子音はそのまま保持される。一方、/ff/が屈折接辞を伴わない場合、このままでは音節形成ができないため、/i̵/挿入で一度*/ffi̵/を形成することになる。しかし、*/OOi̵/（Oは阻害音）もまた伊良部島方言の音節構造として適格ではない。これは、/OOi̵/におけるsonorityの低さによるためと考えられる（下地 2018）。そこで、母音を延長することでこの制限を回避することになるが、モーラ数（この例では2モーラ）をそのままにするために重子音は単子音化する（*/ffi̵/ → /fii̵/）。

(23) 母音始まりの助詞の接続

a. /puni/「骨」+ /a/（主題）→ /punia/ (CVCVV) → /punjaa/ (CVCGVV)「骨は」

b. /puni/「骨」+ /u/（対格）→ /puniu/ (CVCVV) → /punjuu/「骨を」(CVCVV)

(24) 母音始まりの補助動詞の接続

a. /kaki/「書き」+ /ur/（継続相）→ /kakiur/ (CVCVVC) → /kakjuur/ (CVCGVVC)「書いている」

b. /kaki/「書き」+ /ar/（結果相）→ /kakiar/ (CVCVVC) → /kakjaar/ (CVCGVVC)「書いてある」

(25) 語根末重子音の単子音化と母音延長

a. /ff/「噛む」（語幹）

b. /ffa/「噛もう」（意志勧誘形 /a/）: /ff-a/

c. /ffi/「噛め」（命令形 /i/）/ff-i/

d. /fii̵/「噛む」（基本形現在、語幹のみ）: /ff/ → /i̵/挿入 → */ffi̵/ → 重子音の単子音化と母音延長 /fii̵/

4. これまでの記述の問題点と未解決の事項

本節では、前節で示した既存の音節構造・モーラ構造の記述を踏まえ、この既存の記述の矛盾点や未解決の問題点を3つあげ、それぞれに対して、Mモデルの適用が有効であることを示していく。本稿で挙げる3つは、瑣末な現象ではなく音韻構造の根幹に関わる問題を厳選したものであり、それらは概ね、宮古語全般に当てはまると考えられる（関連する学説はそれぞれの問題点に関して適宜、紹介していく）。よって、宮古語の音韻構造の根幹を捉える上では、Mモデルを採用した方が良い、というのが本節および本稿全体の主張である。

4.1. 音節構造とモーラ構造の関係

4.1.1. 問題点

前節で示した伊良部島方言の音節構造の記述は、重子音をCCという横並びの構造で捉える点、同様に長母音や長子音もVV, RRというふうに横並びで捉えてこれらを2モーラ

と計測する点で、OR モデルを前提としたものになっている[*8]。しかし、音節構造とモーラの関係を OR モデルで記述しようとすると、いくつかの重大な問題が生じる。

まず、OR モデルでは、モーラを Rime の構造（長さ）で規定するから、Onset についてはC でも CC でもモーラは「なし」になるはずである。しかし、実際には、図 13 に示すように、Onset の一部がモーラを持つことは確実である。

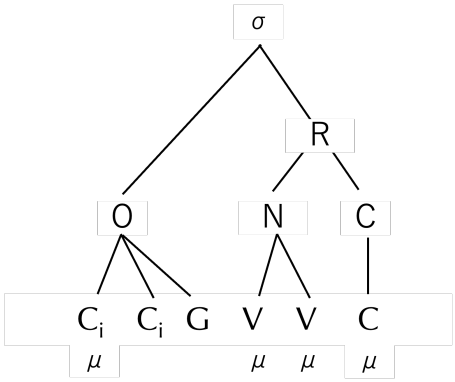


図 13. OR モデルを用いた伊良部島方言の音節構造とモーラの関係

OR モデルを適用する上で直面する問題の 2 点目は、渡り音 G の音節構造における位置付けについてである。現状では、モーラを持たないという点に鑑みて、これを Onset の要素として位置付けている（図 13 参照）。G がモーラを持たない点は、例えば最小語制約の点から実証できる。/CV/が最小語として不適格であるように、/CGV/もまた不適格である。つまり、G の有無はモーラに貢献しないことがわかる。さらに、韻律規則の点からもわかる。3.3 節で述べたように、伊良部島方言は 3 モーラ語は常に H トーンが指定される一方、4 モーラ語は 2 つの 2 モーラフットに分割されて、それぞれのフットに H と L のトーンが指定される。この点から/maaku/「丸い」も/mjaaku/「宮古」も同様に下り目がなく、3 モーラの 1 フット構造で H トーンを持つことがわかる。つまり、/j/はモーラに寄与しないことがわかる。

一方で、渡り音が **Onset に属していない**と見るべき証拠もある。伊良部島方言には、Coda を伴う音節に後続する音節は Onset が必須であるという音節構造上の強い制限がある。これは音韻語（語あるいは語 + 接語）に働く制限である[*9]。単純語の音節構造に

[*8] 宮古語の研究一般に目を向けると、OR モデルであることを明示している記述は少なく、多良間島方言を扱った青井 (2016) くらいである。しかし、ほとんどの研究が音節構造の記述において長母音や重子音を横並びで捉え、それを元にモーラを計測している点から、OR モデルの前提が共有されていることがわかる。大神島方言を扱った Pellard (2009) は、代償延長現象に関して M モデルの適用を一部積極的に取り入れているが（Pellard 2009:71）、音節構造の記述は OR モデルに準じた、音節の各要素を横並びに捉えるモデルを提示している。なお、ペラール (2007) は、宮古語全体の音韻論上の問題を議論する中で、M モデルの適用を試論的に論じた先駆的研究であり、これについては 5 節で触れる。

[*9] 音韻語は韻律の振る舞いで定義でき、フット構造をベースにした H トーンと L トーンの交替のドメインとして規定される。1 フットの音韻語なら H、2 フットなら HL、3 フットなら HLL、4 フットなら HLHL、5 フットなら HLHLL、6 フットなら HLHLHL というふうに、1 つの音韻語内部では H と L が交替する。L が 2 つ続けば、そこで音韻語が切れることがわかる（H と L の交替により、HLLL は許されず HLHL になることから）。語に接語が連接した構造体は 1 つの音韻語を構成し、例えば

おいて、V**C.CV** は存在するが***V.V**（Coda+Nucleus）は見つからないのである。共通語の/oN.iN/「音韻」（V**C.V**C）のような構造が許されないということである。重子音/anna/「母親」(VC.CV) や非重子音連続/pažgi/「おでき」(CV.CV) など、単純語に関する限りいかなる場合でも Coda-Onset の組み合わせとなる。語根が子音で終わっているとき、これに母音始まりの形態素が後続すると、同じ音韻語内部である限り、*C.V 構造を避けるために重子音化が生じる。

(26) /paž/「ハエ」+ /=a/ (TOP) → /pažža/「ハエは」

(27) /kiban/「貧乏」+ /-asii/ (VLZ) → /kibannasii/「貧乏であって」

ここで重要な点は、音韻語内では Coda-G の連続（G は渡り音）は認められないという点である[*10]。G が Onset に支配されるとする OR モデルの構造図式（図 13）では、G もまた Onset であるとみなされるはずだから、Coda-G の連続は Coda-Onset の連続の一種として適格になるはずである。しかし、実際は認められないから、G は Onset に属しているのではない、という分析が妥当であることになる。

しかし、すでに上で述べたように、これを Rime に属しているとするわけにもいかない。なぜなら、OR モデルでは Rime の要素は全てモーラを持つ（だからこそ Rime に属すると言える）はずだからである。仮にこの制限を緩め、Rime のある特定の要素（G）がモーラの計測において無視されるのだ、という規定を追加すれば、OR モデルの根幹をなす理論的前提から離れることになり、結局 OR モデルを離れることになる。一方、G が Onset でも Rime でもない第 3 の構成素である、とした場合、渡り音がモーラを持たない点と Coda-G の連続が認められない点（G が Onset ではない点）は説明できるが、これもまた、OR モデルの根幹である Onset-Rime の２分割に反することになる (この点について Yip 2003 も参照)。このように、渡り音の振る舞いは OR モデルの適用を困難にすることがわかる。

4.1.2. 解決策

今、M モデルによって伊良部島方言の音節構造・モーラ構造を規定し直す。図 14 は語頭音節のうち、正音節の構造をまとめたものである。

準音節は以下のような構造を持つ。成節子音であることは音節に支配されていることによって表現され、これが 1 モーラを持つことはモーラに支配されていることによって表現される。

M モデルでは、モーラを持たない音素は音節に直接支配され、モーラを持つ音素はモーラ表示を介して音節に支配されるとするモデルであるから、OR モデルにおける Onset（モーラなし）-Rime（モーラあり）の構成素の別は不要になる。

---

paž=kara=mai「ハエからも」は (paž)(kara)(mai) で 3 フットの HLL パターンとなる（詳しくは Shimoji 2009 参照）。

[*10] 一部の接語は音韻語の外にあり（韻律面でそれが確認できる）、このような音韻語境界をまたぐ接語の場合、その接語が G 始まりであるならば、あるときは重子音化を誘発し、あるときはそのまま Coda-G の連接となる。例えば、対比格助詞=jarruu「より」は名詞と同一の音韻語を形成せず、/paž/「ハエ」+ /=jarruu/ → /pažžjarruu/ [paʒːa lːʊː]「ハエよりも」というふうに重子音化することもあれば、/kan/「カニ」+ /=jarruu/ → /kan.jarruu/ [kaŋ.ja lːʊː]「カニよりも」というふうに Coda-Glide の連接を許す場合がある。

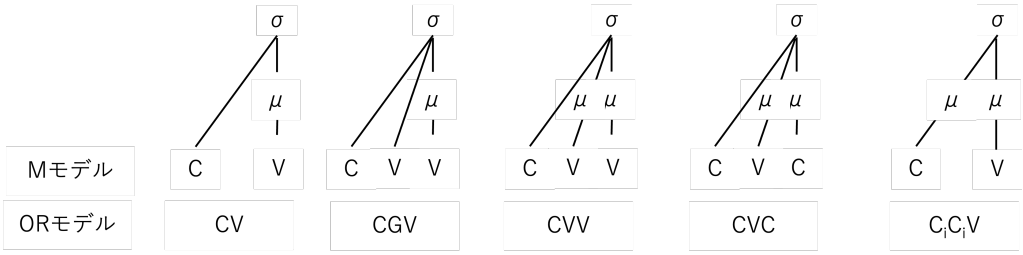


図 14. M モデルによる音節構造・モーラ構造（語頭の正音節）

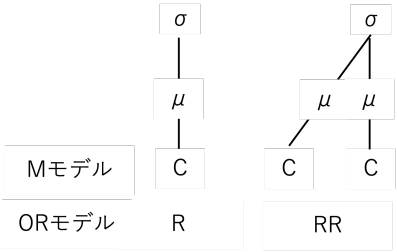


図 15. M モデルによる音節構造・モーラ構造（準音節）

G という、C でも V でもない音節位置を設定する必要もない。これは V (-moraic) として規定すれば良いからである（Hayes 1989: 256；図 16 の左から 2 番目と 3 番目）。OR モデルにおける/kja/は M モデルでは/kia/として捉えられ、モーラは/a/だけが持つと考えることで、その 1 モーラ性も表現できる。/kua/も同様である。二重母音は/kui/のように、それぞれの V にモーラ指定があると見れば良い。

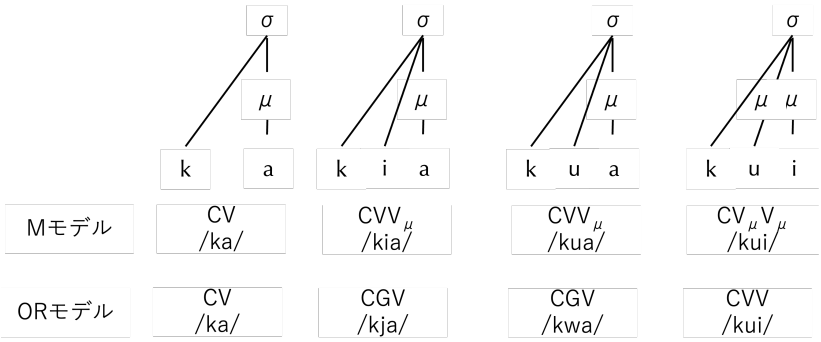


図 16. M モデルにおける Glide の再解釈

この図式をもとにすると、OR モデルの適用において問題となった 2 点は即座に解決することになる。まず、重子音 Onset（CCV の CC）の最初の C のモーラ性は、単に C にモーラが指定されているとすればそれで良い（図 14 の右端）。モーラは Rime の長さではなく、音素に対するモーラ表示で直接指定されるからである。次に、G の音節における位置付けについて、これはモーラ指定のない V として、すなわち音節に直接支配される V として位置付けられるようになるから、OR モデルのように Onset に属するか Rime に属するかという問題は消滅する。*C.V および*C.GV という制限は、結局*C.V（V のモーラ性はとわ

ず）として一般化できることとなる。

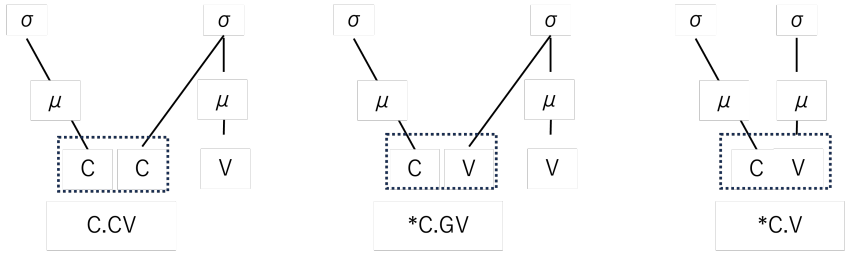


図 17. Coda-Onset 制限に対する M モデルの再解釈

4.2. 子音連続と重子音

4.2.1. 問題点

伊良部島方言では/ž/（摩擦母音的子音）と/v/が、単子音オンセットとして生じる事ができない一方、重子音としては生じうるという特徴がある。これは宮古語一般に広く見られる現象である（ペラール 2007:15-16）。

筆者の既存の記述も含め、重子音を子音連続とする OR モデルにおいては、より単純な/C/を元に、それを横に並べたものが重子音なのであるから、重子音 Onset が存在するなら単子音 Onset も存在するはずである。よって、/ž/と/v/に見られる単子音 Onset の欠如は記述における矛盾として認めざるを得ない。

(28) 単子音 Onset: */ža/, */va/, etc.

(29) 重子音 Onset：/žža/「父親」, /vva/「あなた」, etc.

上記の問題とセットで考えねばならない別の問題がある。宮古語、さらに八重山語においても（原田 2016、Shinohara and Fujimoto 2011）、一般に語頭重子音 Onset がかなり豊富に見られ、伊良部島方言はその極にあると言えるが、そのような方言でも、非重子音連続 Onset(C_iC_jV) は全く認められない。C_iC_i も C_iC_j も同様に子音連続とする OR モデルにおいては、この音素配列制限は予想外のことであり、偶発的な追加規定 (stipulation) によって処理するしかない。

この問題を最初に指摘した先駆的研究は青井 (2016) である。多良間島方言において語頭の子音連続が重子音に限られることに関して、多良間島方言の音節構造を図 18 のように想定することで、この制限を説明しようとする。

図 18. 青井 (2016: 72) による語頭子音連続の音韻表示：/ffa/「子」と/ssu/「白」

すなわち、多良間島方言の語頭には Onset スロット（C）が 2 つまで許され、それが 1 つの子音音素と結びつくと考えることで、語頭が重子音に限定されることが説明されるとする。この考え方が重子音を子音の連続と捉える OR モデルを前提としたものであることは明らかである。

今のべた制限は厳密には 2 つの部分、すなわち (i)「Onset スロットは 2 つまで」と (ii)「Onset スロットと音素は 2 対 1 対応になる」に分かれている。音節構造において Onset スロットが 2 つ許されるなら、図 19[b] のようなパターン（1 対 1 対応）も可能になるはずである。これが排除され、[a] のみに絞られる点はモデルから自明ではなく、青井は (ii) を追加規定とすることで解決する。

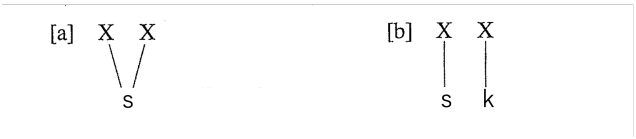


図 19. 青井のモデルから予測される可能な音節構造

しかし、これは「語頭が重子音に限られる」ことを、「ただし語頭は重子音に限られる」という同語反復的方法で解決していることになる。青井 (2016) は、それまでの方言研究が問うてこなかった、「重子音の音韻解釈はいかにあるべきか」を明示的に問うた点で研究史的価値が高いが、ここで述べた問題点が残る。

青井のモデルを仮定したとき、/ž/と/v/が、すでに見た図 19 の [a] のように基底で指定されているとすると、確かにこれによって単子音 Onset が存在しないことは説明できる。この場合、/ž/と/v/は重子音としてしか出現しないという強い制限が課されることになる。ところが、実際はこれらの音素は単子音の Coda としても出現でき、さらに音節核としても出現できる。

(30)　重子音として

a. 語頭：/žža/「父親」、/vva/「あなた」

b. 語中：/tažžasɨ/「束ねる」、/avva/「油」

(31)　単子音 Coda として

a. 語末：/paž/「ハエ」、/pav/「蛇」

b. 語中：/pažgi/「おでき」、/kavsɨ/「被せる」

(32)　Nucleus として

a. 正音節：/pždar/「左」、/bžž/「座る」

b. 準音節：/vcca/ (R.CCV)「うずら」

よって、青井のモデルを採用しても、本節で提示した伊良部島方言における 2 つの問題点、すなわち/ž/と/v/が単子音 Onset を欠く点と、語頭の子音連続が重子音に限定される点は説明できないことになる。

4.2.2. 解決策

まず、/ž/と/v/に関して、これらが重子音、Coda、Nucleus として出現でき、単子音オンセットとして出現できないという分布特徴は、/ž/と/v/に基底でモーラが指定されていると考えればよい[*11]。例えば/v/は、図 20 の左端のような音素の基底表示を持つと考える。

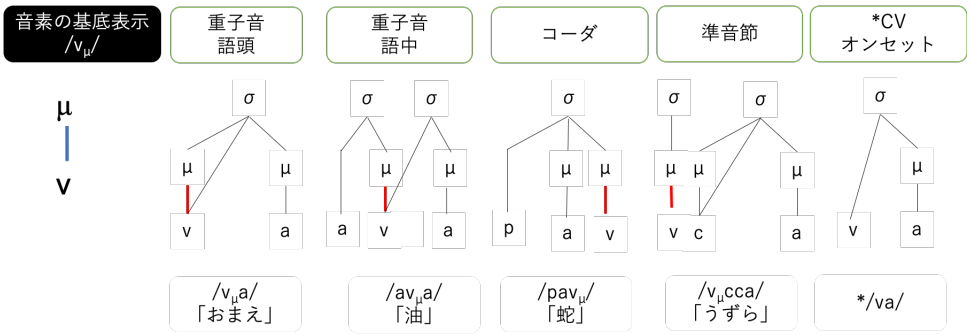


図 20. M モデルによる/v/の音韻表示

/v/というセグメントの特徴の指定に加え、これがモーラに支配される（モーラを持つ）という情報もまた、基底に存在すると考えることで、/v/を含む音節のうち、この制限に反する単子音 Onset 構造の*/va/は自動的に排除される。

/ž/の場合も同様である（図 21）。ただ、/ž/は/v/と違って、正音節の Nucleus にも立てる点が特徴的だが、これもまた/ž/がモーラに支配されているという点から、十分に成立する音節パターンである。

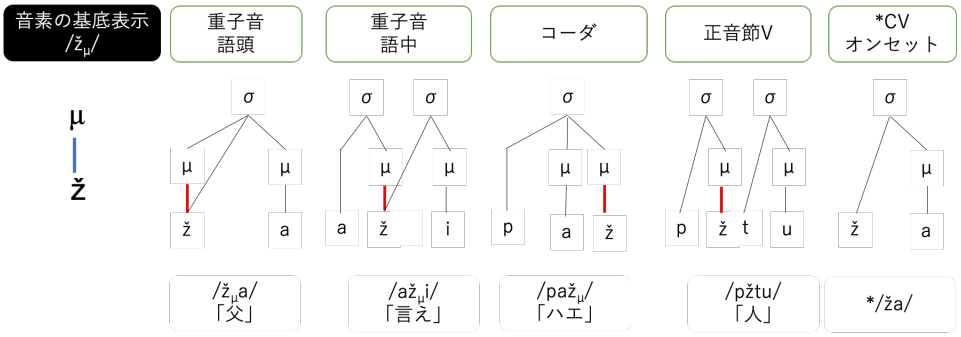


図 21. M モデルによる/ž/の音韻表示

次に、語頭 CC が重子音に限られる点について、すでに規定した語頭の正音節の構造からは、図 22 (a) あるいは (b) しか生じず、(c) のような非重子音連続が生じ得ないことにな

[*11] ペラール (2007) は、宮古語一般に見られる同様の制限について、いち早くこの分析の可能性を指摘しているが、議論は語頭重子音に限られている。ここで示すように、/ž/と/v/のすべての出現環境に関して、基底にモーラが指定されていると考えることができる。Myhre (2021) は、筆者の記述データ (Shimoji 2008) をもとに、M モデルと OT の立場から、/ž/と/v/が基底でモーラ指定されていると分析するが（p. 56）、これらを語頭重子音とせず、/ž.žV/、/v.vV/のように、つまり 2 音節の Nucleus+CV（3 節の記述における R.CV）のようにとらえる分析を示している点で、筆者の分析 (図 20, 図 21 と異なっている。

る。青井 (2016) の一般化で問題となった追加規定は不要となる。

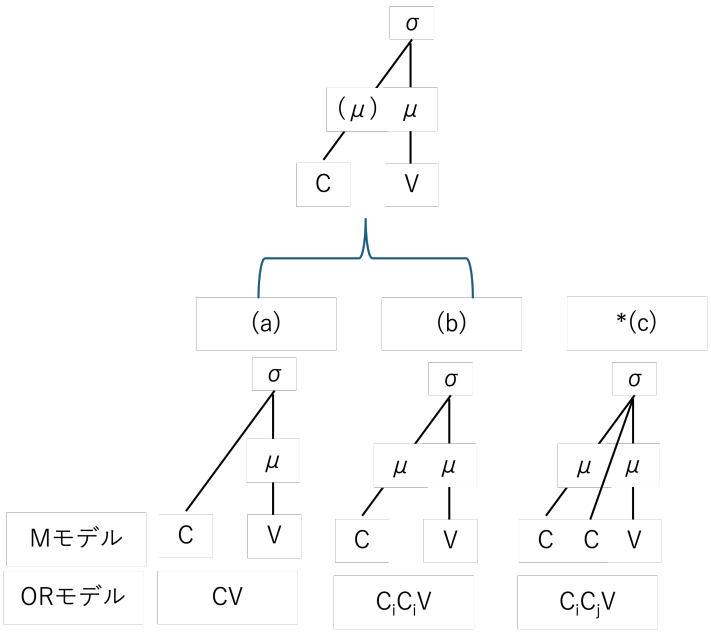


図 22. M モデルによる語頭 Onset の構造の規定

なお、伝統的な方言学の記述における/QCV/のような重子音の表示もまた OR モデルと同様に、重子音を子音の連続構造とみなす点では同じであるが、青井が取り組んだ問題、すなわち「なぜ語頭は（CCV のうち）重子音構造だけが許されるのか」は、通常の/CCV/分析よりも明示的な答えを提供するであろう。すなわち、Onset の構造を/QC/と仮定すれば、許される子音連続は自動的に重子音となる。この点では M モデルと同様の説明力を持つ。しかし、/QCV/モデルは、もう 1 つの問題点、すなわち「なぜ/ž/と/v/が単子音 Onset 構造を許さないか？」という点に応えられず、より単純な構造の欠如という矛盾を抱えたままとなる[*12]。

柴田 (1972) は、伝統的な方言学的記述とは異なる特殊な解釈を示し、一部 M モデルに類似したモデルを示している。例えば平良西里方言の解説（pp. 35-38）において、[f:a] を/f'a/として、すなわち音素として/f/、/'/（緩やかな声だて）、/a/からなると解釈する[*13]。/CCV/分析も/QCV/分析も同様に音韻的であるとみなす 2 番目の/f/が音声的な渡り要素（transitional contoid）にすぎず、重子音で真に音韻的な部分はモーラを持つ 1 番目の/f/（モーラあり）とする点は、M モデルとほぼ同じである。M モデルと柴田のモデルの違いは、後者ではこの/f/に母音が直接後続するとせず、/'/を立てて CCV 構造としている点である。この意味で、やはり重子音を子音連続構造と同様の構造的複雑さを持っているとする。よって、こ

[*12] 沢木 (2000:40) は、宮古語の重子音について「[ffa] (「子供」) は/Qfa/ とも /ffa/とも解釈することができ，どちらか一方の解釈 を積極的に排除する理由が見つからない。」と述べるが、ここで述べた問題を解決できない以上、どちらの解釈も適切ではないということになろう。

[*13] /'/は、当時の方言学でよく見られた音素解釈に基づき、母音のみで始まるモーラ/V/を認めず、他の CV 構造と体系的になるよう、有声声門摩擦音を母音直前に想定するものである。よって、柴田の解釈は CCV 構造となる。

れまで述べてきた問題点は解決できない。

4.3. Onset を伴う重子音：ambisyllabicity の問題

4.3.1. 問題点

伊良部島方言には、[**pʂ:**aɾa]「平良」のような語形がある。注目すべき部分を太字にしてある。前半部分 [pʂ] は/p/を Onset とし、/ž/を Nucleus とする CV 構造と見ることができる(/ž/は/p/の後で無声化して [s] として実現 ; 3.5 節の (21) 参照)。一方、後半部分 [ʂ:a] は重子音/ss/を Onset とし、/a/を Nucleus とする CCV 構造を含むように見える（図 23)。

[pʂ:aɾa]
/pž/
/ssa/

図 23.「平良」の音節構造と ambisyllabicity

このように、[ʂ] は、/p/の Nucleus として、そして/a/の重子音 Onset の一部として同時に機能している、すなわち ambisyllabic に機能しているように見える。ところが、OR モデルを含むこれまでの記述では、音節における要素を横並びで捉え、ある要素が同時に 2 つの音節に属するような状況にうまく対応できない。筆者のこれまでの記述案は (33) に示すようなものであった。なお、対比するために重子音 Onset 構造を持つ/ssam/「シラミ」も示す。

(33) [**pʂ:**aɾa]「平良」
  a. 音韻表示：/pžsara/「平良」
  b. 音節構造：CV.CV.CV

(34) [**s:**am]「シラミ」
  a. 音韻表示：/ssam/
  b. 音節構造：CCVC

(33) の太字部分は、音韻的に/ž/の異音としての [ʂ] と、後続音節の Onset としての/s/として分析している。これによって、音声的には (34) の重子音と区別できない [ʂ:] を、/p/に対する Nucleus としての/ž/と、それと無関係の、後続音節の Onset としての/s/に分けて分析している。しかし、このような処理の仕方は、ambisyllabic な状況に弱いという記述モデルの側の事情に起因するものであり、必ずしも言語事実に適した処理ではない。

今、別の例/bžža/「座ろう」という動詞意志・勧誘形を取り上げてこの問題を考えてみたい。この語形は、語幹/bžž/「座る」が屈折接辞/a/（意志勧誘接辞）を取ったものである。現行の記述では、/bžža/もまた、/pžsara/と同様、/bž.ža/という CV.CV 構造として処理することになる。2 番目の音節/ža/は、単子音 Onset の/ž/が切り出されている。すでに 4.2.1 節で示したように、/ž/は単子音 Onset としては出現できない（モーラに支配されていなければならない）という強固な一般特性があるが、この例の処理においてのみ、その一般特

性に反した特例を認めることになる。しかし、もし ambisyllabicity が言語実態として正しいのなら、/ž/は/p/の Nucleus として、そして/a/の重子音 Onset として機能することになるから、いずれの場合に関しても、これまで明らかにした/ž/の一般特性に反しないことになる。ambisyllabicity に柔軟に対応できる音節構造の記述モデルを採用していれば、上記の特例をわざわざ見出す必要はないのである。

さらに、ambisyllabicity を積極的に支持する形態論的な証拠もある。この動詞語形の活用パターンは、重子音 Onset を持つ別の動詞とパラレルになっているのである（図 5）。図では、活用パターンとして意志勧誘形（-a）、命令形（-i）、基本形現在（接辞なし）の 3 つを挙げ、動詞語幹の例として上で見た/bžž/「座る」の他に、/žž/「叱る」、/ff/「かむ」、/rr/「入る」という語頭重子音 Onset を持つ語幹の例を挙げている*14。

表 5.「座る」および関連語形の活用パターン

	語幹	意志勧誘形	命令形	基本形現在
座る	bžž	bžža	bžži	bžž
叱る	žž	žža	žži	žž
噛む	ff	ffa	ffi	ff (→ ffɨ → fɨɨ)
入る	rr	rra	rri	rr

図からわかるように、「座る」の活用は、語頭重子音 Onset を持つ語幹と全く同じであり、/bžž/が、重子音 Onset /žž/を確実に含んでいることが示されている。現状の/bž.ža/「座ろう」の分析は、現行の記述の限界によって恣意的に引いた音節境界の存在により、この点を捉えられない。

上記をまとめる。Onset を伴う成節的子音/ž/が、かたや Onset を伴う Nucleus として振る舞い、かたや後続母音の重子音 Onset として振る舞うという Ambisyllabic な状況に対して、そのいずれも無視せずに、いずれの特徴も捉えられるモデルが求められる。しかし、これは現行のモデルを採用する限り不可能である。

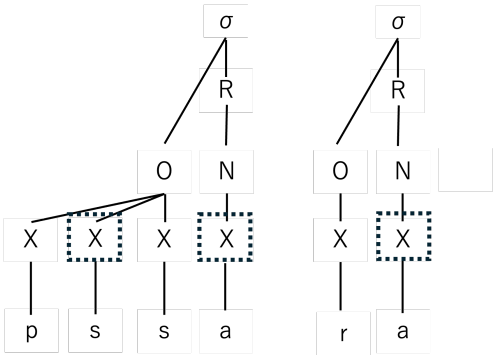


図 24. OR モデルにおける「平良」の構造とモーラ（破線は 1 モーラ）

*14 /ff/の基本形現在の形態音韻交替については (25) を参照されたい。

[psːara]「平良」の例に戻ると、もしこの例について、ambisyllabic な状況を正確に捉えようとすれば、CCV 音節の/žža/（あるいは/ssa/）が例外的に/p/という Onset をさらに左に取るという構造を認める必要がある*15。しかしこれでは、OR モデルの根底にある、構造（長さ）でモーラを計測するという考え方と相容れなくなる。今問題になっている音節は/pssa/（2 モーラ）であるが、OR モデルでは/pss/ の部分を Onset、/a/が Rime とすることになるだろう。Onset が 1 モーラ分を有することがある、という追加規定を行っても、Onset の中でモーラに貢献する部分としない部分が生じてしまい、「長さ」でモーラを規定するという考え方に矛盾する。

4.3.2. 解決策

上記の ambisyllabicity の問題は、M モデルで全く問題なく解決できる。すでに 2.2 節で見たように、M モデルでは重子音の ambisyllabicity を正確に表現可能なモデルであり、音節を跨ぐ重子音の場合、モーラを持つ 1 つの C が、先行音節と後続音節の両方に、異なった役割で、同時に帰属すると表現することになる（図 25 左端）。

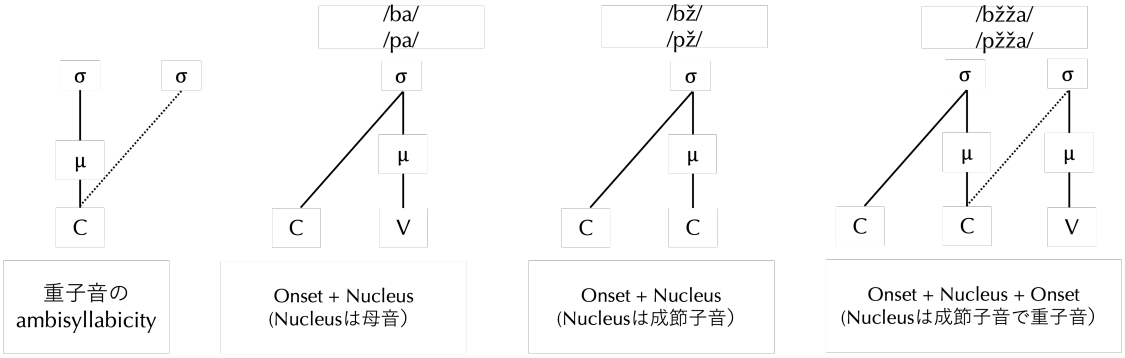


図 25. 重子音の ambisyllabicity

このモデルによれば、上で見た [psːara]「平良」や [bz̬ːa]「座ろう」における [sːˌ] および [z̬ːˌ] の ambisyllabic な性質、すなわち先行音節における Nucleus としての機能と、後続音節に対する Onset としての機能を、理論的前提を一切変えることなく適切に表現できる。まず、図 25 の左端に示すように、音節を跨ぐ重子音は、モーラを持つ C が先行音節における適切な役割を担い、通常、それは Coda である。しかし、伊良部島方言のように、モーラを持つ C が Nucleus にも立てる、すなわち成節子音を豊富に持つ言語であれば、重子音は先行音節における Nucleus と後続音節の Onset として機能する、すなわち（Coda-Onset ambisyllabicity ではなく）Nucleus-Onset ambisyllabicity を示すことは十分に予測可能で、これはモデルが許容する状況である。これを具現化したのが図の左端である。ambisyllabic

*15 当該音声を/pžža/から導き出すのは、まず/p/に後続する/ž/の無声化と、それが同化によって次の/ž/をも無声化するというプロセスを想定すればよい。このほかにも、より単純に考えて/p/に/ssa/が後続する/pssa/という分析も可能であり、/pžž/と/pss/のどちらで表示すべきか決め難い。なお、後述する M モデルを用いれば、この曖昧性は解消する。すなわち、/pž/の/ž/が、Nucleus としての機能を持つ以外に、同時に後続音節の Onset としても機能すると考えることになるからである。仮に/ps/を想定してしまうと、Nucleus に立てない/s/を/p/に後続させることになり、記述に矛盾が生じる。

な音素すなわち/ž/は、成節子音が Nucleus に立つ通常の構造（図の左から 3 番目/bž/、/pž/の例）と同様、Onset を伴って Nucleus の位置に生じるが、この成節子音はモーラを持つ C であることから、通常の重子音と同様、後続音節の Onset にリンクしていくことができる。これが、我々が前節でその解決に困っていた/bžža/と/pžža/の ambisyllabic な構造である。

4.4.　まとめ

本節で明らかにしたように、伊良部島方言の音節構造・モーラ構造の記述において、M モデルの有効性は明らかであり、既存の構造主義的な記述（かつ OR モデルを前提とした記述）では説明できないさまざまな事象が適切に説明される。

本節では取り上げなかったが、M モデルを採用することで初めて適切に解決できる現象は他にもたくさんある。例えば、代償延長現象は M モデルの理論的な動機の 1 つになっているほどであり（Hayes 1989）、宮古語に関してもすでにペラール (2007) が M モデルの有効性を指摘している。すでに 3.6 節で見たように、伊良部島方言にも代償延長現象は豊富に存在し、これらはすべて、M モデルの根幹にある発想、すなわちモーラ指定の層とセグメントの層が別にある（自律分節になっている）ということから有効に説明される。特に、既存の記述における/i/→ /j/の交替は、M モデルでは同じセグメント/i/からモーラ指定を解除する、という観点で記述でき、解除されて「浮いた」モーラを後続母音に再指定し、全体のモーラを保持する、という代償延長現象が説明できる（宮古語について詳しくはペラール 2007）。/kakiur/（/kaki/「書き」+ /ur/（継続層））→ /kakjuur/「書いている」の代償延長は、M モデルによって、/i/のモーラ指定解除と、それに伴うモーラの再結合というプロセスとして再定義される。

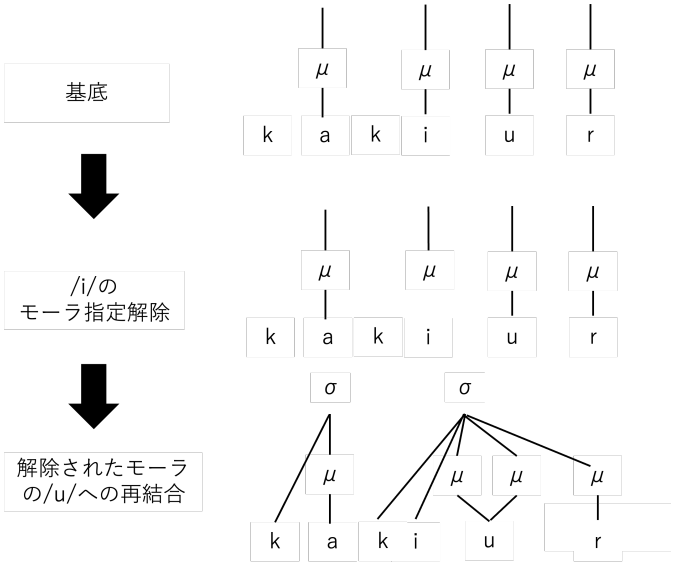


図 26. M モデルによる代償延長の記述：/kakiur/ → /kakjuur/「書いている」を例に

もう 1 つ、既存の記述で解決できなかった重要な問題について言及しておく。それは「知る」と「すす」の基底表示に関する問題である（Lawrence 2018）。筆者は、既存の記述

において、「知る」も「すす」も/ss/という基底を設定し、そこに/ɨ/挿入が異なる位置に生じるという記述を行っていた (Shimoji 2017)。

(35) /ss/ → /ɨ/挿入 → /ssɨ/ → 代償延長 → /sɨɨ/「知る」

(36) /ss/ → /ɨ/挿入 → /sɨsɨ/「すす」

Lawrence (2018:56) が正しく指摘するように、この処理の仕方には明らかな問題がある。すなわち、/ɨ/挿入の位置について適格な予測ができないという問題である。「知る」が、2つあるそれぞれの/s/の後に/ɨ/挿入を生じさせることは十分に可能なはずであるから、/sɨsɨ/にならないのはなぜかという問題に答えられない記述になっている。しかし今、M モデルを採用すれば、この問題は生じ得ないことになる。すなわち、「知る」は/s_{μ}/という 1 つの C のみの構造であるから、そこに生じる/ɨ/挿入は/s/のあとの一箇所に定まる。一方、「煤」は/ss/と考えれば、挿入箇所は 2 箇所ということになる。

5. M モデルと宮古語の記述研究

宮古語の記述研究において、M モデルを積極的に取り入れた研究は皆無ではない。ペラール (2007) は、宮古語全般の音韻論の問題点を総括する中で、M モデルを援用した記述の試論を展開しており、研究史において特筆される。代償延長現象と語頭重子音の解釈において M モデルによる解決が有効であることを明確に指摘している。ただし、これを引き継いで、具体的に個別方言の音韻の体系的な記述で M モデルを実践した研究は管見の限り存在しない（Pellard 2009 は大神方言の記述であるが、M モデルの適用は限定的で、おそらくあえて意図的に、全般に渡って OR モデルに準じた伝統的な記述を行っていることはすでに述べたとおりである）。

現在のところ、M モデルを用いた宮古語の分析はすべて語頭重子音の問題に焦点を当てた、あるいはその問題を中心に議論したものであり、これはすでに 2.3 節で見たように、M モデルにおいて語頭重子音のモーラ性が理論的に問題となるからである。例えば、Shinohara and Fujimoto (2018) および Shinohara et al. (forthcoming) は、池間島方言の語頭重子音に関して、M モデルを前提とした記述を行っている[*16]。Myhre (2021) は伊良部島方言の語頭重子音の構造に特化し、M モデルを援用しつつ、Optimality Theory の立場からこれらの構造の可能なパターンを記述・予測しようと試みている。その中で、/žža/「父親」や/vva/「あなた」のような/ž/と/v/が関与する語頭重子音を、結局 2 音節の Nucleus + CV の構造と捉える。OT の制約同士の辻褄を合わせるような形でこのアイデアを「捻り出し」ているが、これは形態音韻交替を含む体系全体を見た時に支持されない考え方である。例えば、/midumv_{μ}a/ (旧来の記述で/midumvva/)「娘」という語は、/midum/「女」+ /f_{μ}a/「子」の複合で生じる形式であるが、これは Myhre の考え方では/mi.dum.v.va/という音節構造となる。/f_{μ}a/が語頭 Onset 重子音であると分析しながら、それが連濁した Onset に相当するものを/v/ + /va/の 2 音節とするのは、無声と有声で Onset 同士が対応するという連濁規則

[*16] 宮古語以外にも、Shinohara and Fujimoto (2011) は八重山語の竹富島方言の語頭重子音のモーラ性を分析する論考において、M モデルを積極的に採用している。

の例外にもなり、また再音節化という不要な規則まで絡み、明らかな問題である。

本稿では、筆者のこれまでの記述の経験とデータを踏まえ、伊良部島方言の言語体系全体を考えた時、M モデルが最も優れた記述モデルであることを論じた。これまでの研究が注目してきた語頭重子音の問題に限らず、他にも様々な観点から実証されることを示した。前節で扱った 3 つの論点、すなわち Onset-Rime の分割に伴う問題点（4.1 節）、/ž/と/v/の基底モーラ性（4.2 節）、そして Nucleus かつ重子音という ambisyllabicity の問題（4.3 節）は、いずれも宮古語に広く見られ、その意味で本稿の結論はこれらを共有する個別方言でも成り立つ可能性が高い。

しかし、宮古語の現在の記述研究において、M モデルが記述モデルとして一般的になっているとは言い難い。本稿執筆時点で宮古語における最新の記述研究である Jarosz (2024) もまた、来間島方言の音節構造の記述に際して、OR モデルに準じた、各要素を横並びに捉え、それを元にモーラを計測するという方法をとっている (Jarosz 2024:34)。来間島方言にも、伊良部島方言やその他多くの宮古語同様、本稿で扱った ambisyllabicity の問題がある。例えば、伊良部島方言で扱ったのと同じ「平良」は [pˌsːara] である。Jarosz は、これを/psara/（CCVCV）と解釈する。CCV 構造の/psa/における/p/（C1）が 1 モーラをもち、後続する/s/(C2) はモーラを持たないという分析である。一方、音声的に同じように重子音を含む/pɕɕi/ [pˌɕːi]「寒い」は、その重子音を音韻構造に反映させた解釈となっており、C1C2V の C2 の位置を埋める/ɕɕ/がモーラを持つという分析になっている*[17]。すなわち、来間島方言の語頭 Onset のモーラ性は、C1 がモーラを持つことも C2 がモーラを持つこともある。

しかし、この記述には解釈の一貫性の点で問題がある。/psara/「平良」にも/pɕɕi/「寒い」にも、音声的な事実として重子音 [sˌː] および [ɕˌː] が含まれているにもかかわらず、前者ではそれが無視され、後者ではそれが音韻的なものとして解釈されている。Onset C1C2 のモーラが一定しないという点も、一貫性の点で問題がある。特に、「平良」の例で継続音ではない閉鎖音/p/が、摩擦音/s/よりも優先してモーラを担うという点が音声的にも奇妙である。一方、本稿で論じたように、M モデルの採用によって、来間島方言の「平良」と「寒い」はそれぞれ/pž$_{\mu}$ara/、/pž$_{\mu}$i/として、同一の構造で記述できる。モーラを担うのは Onset の/p/ではなく Nucleus の/ž/であり、かつこれは重子音として、後続の音節の Onset としても機能すると考えれば良い。

このように、今後、宮古語の個別方言の記述において、M モデルを採用することで当該方言の音韻体系を正確に記述できる可能性が高く、また既存の記述を見直して、これに代わって M モデルを採用することで、未解決であった問題を解決できる可能性は非常に高い。

*[17] Jarosz の分析では、1 つの C および V スロットに重子音や長母音が入ることを許す。/pɕɕi/は、/ɕɕ/が、1 つの C2 スロットに入るという分析である。この考え方は、要素の横並びでモーラを計測する OR モデルと違い、1 つのスロットが 1 モーラや 2 モーラとして解釈可能なモデル（すなわち M モデル）を要求することになるが、Jarosz (2024) はその点について明示的ではない。

6. おわりに

本稿では、伊良部島方言の音節構造・モーラ構造に関して、既存の記述を大幅に見直し、旧来の記述モデルである OR モデルに準じたものから、それと対立するモデルである M モデルを採用することによって、これまでの記述の未解決の問題や矛盾点を解消できることを示した。

体系的記述（特に記述文法書における記述）が、なるべく保守的で、すなわち理論の変遷に影響を受けにくく、かつ言語個別性に適合した方法でなされることは当然であり、当該言語の類型特徴に応じて、それまで伝統的に用いられてきた記述の慣習を採用することには合理性がある。しかし、言語個別性に適合した記述を行う際にも、記述の**モデル**が必要であることは言うまでもない。記述文法における素朴な音素論にはアメリカ構造主義的なモデルがあり、アクセント記述には日琉方言アクセントのモデルがある。同様に、音節構造とモーラ構造の記述にもモデルがあり、それはこれまで OR モデルに準じたものであった。しかし、日琉諸語の場合、M モデルの適用がより合理的で、体系性を損なわないものである可能性が極めて高い。M モデルは Moraic Phonology という特定の理論的枠組みであるが、それは OR モデルと同様、すでに記述文法の執筆を行う者が採用を検討すべき基礎言語理論（Basic Linguistic Theory; Dixon 2009）の一部になっていると考えて良いだろう。

参考文献

青井隼人 (2016)「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」，博士論文，東京外国語大学.

Bosch, Anna R.K. (2011) “Syllable-internal structure,” in van Oostendorp, Marc, Colin J Ewen, Elizabeth Hume, and Keren Rice eds. *The Blackwell Companion to Phonology*, Vol. 2, pp. 781–798: Wiley Blackwell.

Davis, Stuart (2011) “Geminates,” in van Oostendorp, Marc, Colin J Ewen, Elizabeth Hume, and Keren Rice eds. *The Blackwell Companion to Phonology*, Vol. 2, pp. 873–897: Wiley Blackwell.

Dixon, R.M.W. (2009) *Basic Linguistic Theory (Volume 1: Methodology)*: Oxford University Press.

Gordon, Matthew Kelly (2006) *Syllable weight*: Routledge.

原田走一郎 (2016)「南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音」，『日本語の研究』，第 12 巻，第 4 号，103–117 頁.

Hayes, Bruce (1989) “Compensatory lengthening in moraic phonology,” *Linguistic Inquiry*, Vol. 20, pp. 253–306.

Hyman, Larry (1985) *A theory of phonogical weight*, Dordrecht: Foris.

Jarosz, Aleksandra (2024) *Descriptive Grammar and Diachrony of Kurima*: Brill.

Lawrence, Wayne P. (2018) “Book revew: A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language,” *International Journal of Okinawan Studies*, Vol. 8, pp. 55–60.

Myhre, Matias (2021) “The weight and representation of Ryukyuan Miyako onsets: Initial geminate

moraicity, markedness, and sonority," Master's thesis, The Arctic University of Norway.

ペラールトマ (2007)「宮古諸方言の音韻の問題点」，第二回琉球語ワークショップ ― 2007/09/09 京都大学.

Pellard, Thomas (2009) "Ogami: Éléments de description d'un parler du sud des Ryukyus," Ph.D. dissertation, EÉcole des Hautes Études en Sciences Sociales.

Pike, Kenneth and Eunice V. Pike (1947) "Immediate constituents of Mazateco syllables," *International Journal of American Linguistics*, Vol. 13, pp. 78–91.

沢木幹栄 (2000)「宮古方言の問題点」，『音声研究』，第 4 巻，第 1 号，36–41 頁.

Shimoji, Michinori (2008) "A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language," Ph.D. dissertation, Australian National University.

——— (2009) "Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan," *Gengo Kenkyu*, Vol. 135, pp. 85–122.

——— (2017) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*: Kyushu University Press.

下地理則 (2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』，くろしお出版，東京.

Shinohara, Shigeko and Masako Fujimoto (2011) "Moraicity of initial geminates in the Tedumuni dialect of Okinawa,", pp. 1826–1829, International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS).

——— (2018) "Acoustic characteristics of the obstruent and nasal geminates in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan," in Babatsouli, Elena ed. *Crosslinguistic research in monolingual and bilingual speech*, pp. 253–270: Institute of monolingual and bilingual speech.

Shinohara, Shigeko, Qandeel Hussain, and Angelique Amelot (forthcoming) "Aerodynamic and acoustic correlates of word-initial voiceless nasal geminates in Ikema Miyako Ryukyuan," in Kuznetsova, Natalia, Cormac Anderson, and Shelece Easterday eds. *Rarities in phonetics and phonology: Structural, typological, evolutionary, and social dimensions*: Language Science Press.

柴田武 (1972)「琉球方言の特徴」，柴田武（編）『全国方言資料』，第 11 巻，24–60 頁，日本放送協会.

Topinzi, Nina (2008) "On the existence of moraic onsets," *Natural Language and Linguistic Theory*, Vol. 26, pp. 147–184.

Yip, Moira (2003) "Casting doubt on the Onset–Rime distinction," *Lingua*, Vol. 113, pp. 779–816.

デジタルヒューマニティーズにおける『元朝秘史』全文検索システムの構築とその応用

金罡
（呼和浩特民族学院コンピュータ・情報技術学院）

キーワード：元朝秘史，デジタルヒューマニティーズ，全文検索システム，データベース

1. はじめに

1.1. 研究背景

『元朝秘史』は、13 世紀のモンゴル民族の歴史と文化を詳述した貴重な文献であり、特に成吉思汗（チンギス・カン）の生涯と彼の祖先の系譜を描写している。この文献は、モンゴル語を漢字音写で表記しており、その特殊な書写形式と内容により、言語学、歴史学、文化研究において非常に重要な資料とされている（図 1）。

しかし、従来の文献研究は主に手動での読み取りと分析に依存しており、大量の情報を含む『元朝秘史』のような文献を扱うには多大な労力と時間が必要となる。これにより、文献全体の深い理解や分析が困難となり、研究の効率と精度に限界が生じる。

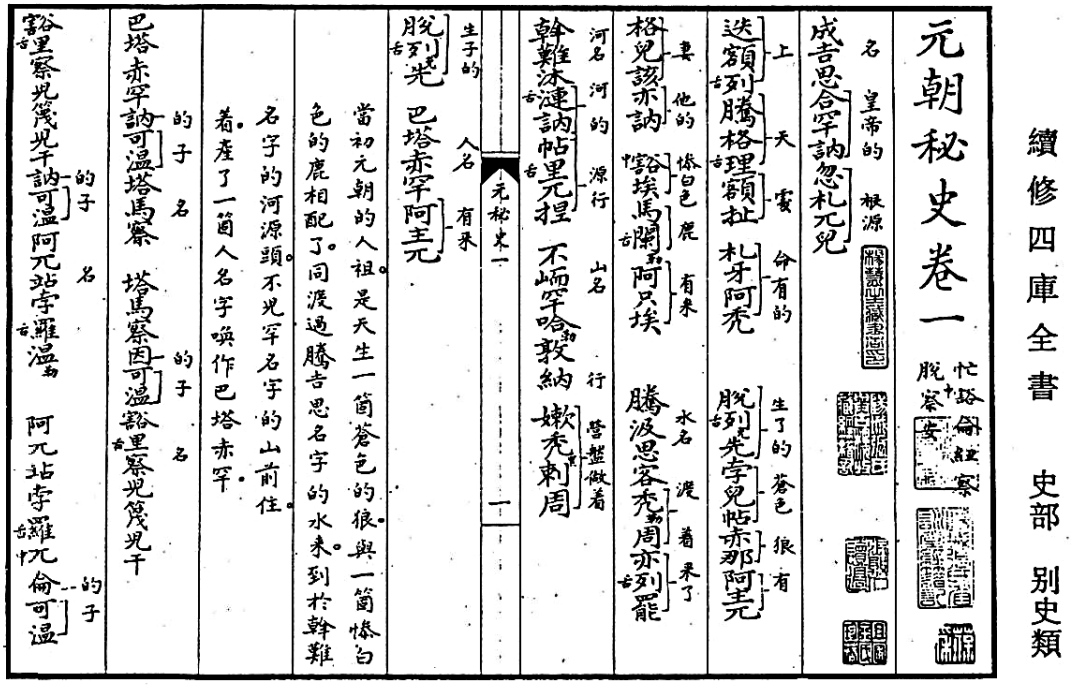


図 1：『元朝秘史』のテキスト

1.2. 研究目的

デジタルヒューマニティーズの発展に伴い、伝統的な人文学研究に新たな手法とツールが導入されつつある。本研究の目的は、『元朝秘史』の全文検索システムを構築し、これを通じて文献研究の効率と精度を向上させることである。このシステムは、多様な検索方法と可視化機能を組み合わせ、ユーザーが『元朝秘史』のテキストを迅速かつ正確に検索・

分析できるように設計されている。

2. 先行研究

『元朝秘史』に関する研究は長い歴史を持つが、そのデジタル化とシステム開発に関する取り組みは比較的新しい。1972 年、オーストラリアの学者 Igor de Rachewiltz が最初に『元朝秘史』の単語電子索引を制作したことが、コンピュータ技術を用いた『元朝秘史』研究の先駆けとなった。Igor de Rachewiltz の研究の影響で多数の国の学者が『元朝秘史』あるいはモンゴル語文献をコンピュータで処理する研究の波を立てた。その中で代表的な学者は日本の栗林均であり、数多くのモンゴル語古籍の電子索引とオンライン検索システムを開発した。

中国では内蒙古大学が 1983 年に『元朝秘史』の電子テキストと検索システムを開発したが、当時はラテン文字による検索しか対応していなかった。2006 年には江荻、斯欽朝克図らがこれを改善し、漢字音写形式での検索を可能にした。近年では、私たちのチームが『元朝秘史』のデジタル化とそのためのデータベース構築に取り組んでおり、これまでに多数の研究成果を発表した。

3. 『元朝秘史』全文検索システムの設計

3.1 システム概要

本研究で開発した『元朝秘史』全文検索システムは、多機能性を備えた高度な検索ツールである。このシステムは、文献研究における検索と分析の効率を向上させるために設計しており、以下のような主要な機能を備えている。

システム全体は、データ層、分析層、展示層の三つの主要な部分で構成されている（図 2）。データ層は、オリジナルテキストの様々なタグ付けしたコーパスあるいはノーレッジベース（Knowledge base）の保存、管理を担うところである。分析層では、データの検索結果、統計、並び替えなどの機能が集約されており、ユーザーのクエリに基づいて有用な情報を抽出する。展示層は、可視化ツールを使用して、ユーザーに検索結果や分析結果を視覚的に提供する役割を果たす。

図 2：検索システムのユーザーインターフェース

3.2 主な機能

（1）文字列マッチングと正規表現

システムは、基本的な文字列マッチングに加えて、正規表現を用いた高度な検索をサポートしている。これにより、ユーザーは『元朝秘史』のテキストを細かい条件に基づいて検索することができ、複雑なクエリに対しても正確な検索結果を得ることが可能である。また、本システムは文字列に基づく検査だけではなく品詞や文法要素のタグで検索することもできる。これ以外に、『元朝秘史』のテキストに語彙類のタグ付けもしてあるので、品詞や文法要素の検索だけではなく、語彙の意味範疇による検索も可能となった。

検索結果は、KWIC（Keyword in Context）形式で表示され、キーワードが文脈内でどのように使用されているかを容易に把握できる。この表示形式により、ユーザーが検索語の周囲の文脈を容易に理解し、原文の意味をより深く掘り下げることができるようになる。KWIC 行をクリックすると、ラテン文字、漢字、モンゴル文字の三つの文字で表示されたテキスト原文にジャンプするのでユーザーがより大きい範囲の文脈で当該文字列あるいは語句の意味、使用を把握できるようになる（図 3）。

図 3：KWIC 行をクリックすると、テキスト原文にジャンプする

（2）語彙セマンティックツリーと実体ネットワーク

本システムは、上述の語彙の意味範疇をセマンティックツリーで表示する機能を備えており、検索された語彙の上位概念や下位概念を視覚的に示すことができる（図 4）。さらに、テキスト中に登場する実体（例えば人物、場所、事件など）の間の関係をネットワーク図として可視化する機能も提供しており、文献内の複雑な関係性を容易に理解できるようにする（図 5）。

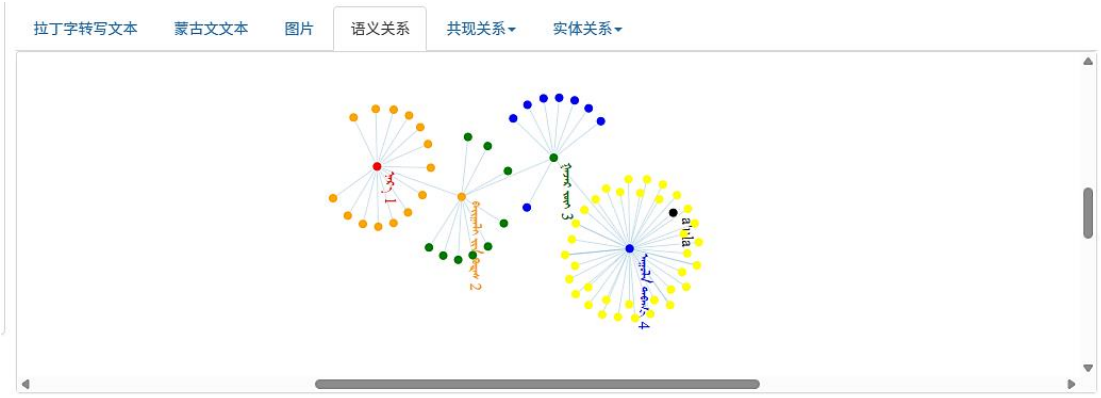


図 4：語彙セマンティックツリー

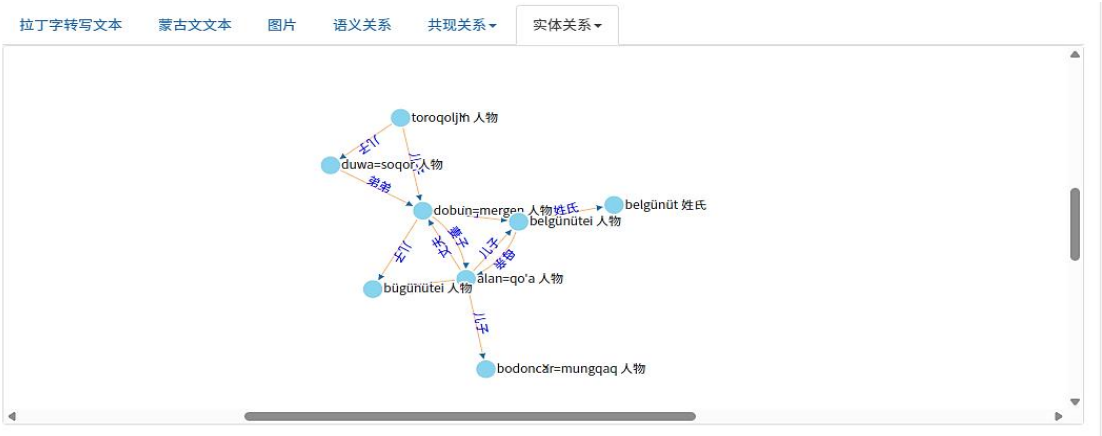


図 5：実体ネットワーク

（3）地理情報データベース

『元朝秘史』に登場する地名や地理的要素を視覚化するための地理情報データベースもシステムに組み込まれている（図 6）。これにより、文献中の地理情報を地図上で直感的に確認することができ、歴史的背景や文化的文脈の理解が一層深まることが可能となる。

図 6：『元朝秘史』の地名の視覚化

4. 機能実現と応用

4.1 データベースの統合

本システムでは、『元朝秘史』言語コーパス、語彙セマンティックツリー、実体ネットワーク、地理データベースを一体化すること（図 7）で、複数のデータセット間の統合的な検索と分析を可能にする。これにより、ユーザーが複数の視点から『元朝秘史』のテキストを探究し、より豊富な情報を引き出すことができるようになる。

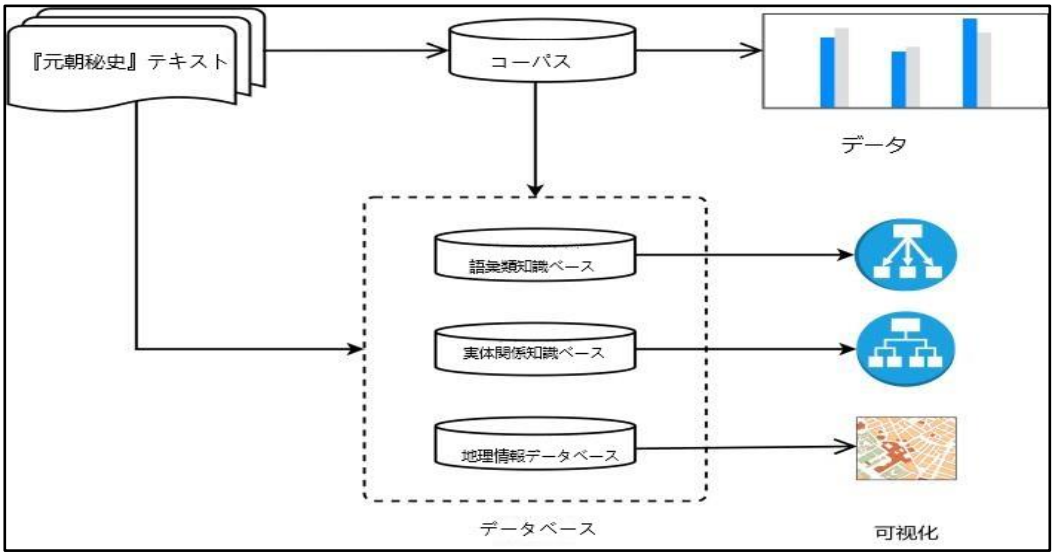


図 7：データベースの統合

『元朝秘史』言語コーパスは、テキストの全文をデジタル化し、検索可能な形式で保存している。これにより、従来の手動での文献分析に比べ、格段に効率的かつ正確なテキスト検索が可能になる。また、語彙セマンティックツリーは、テキスト内の単語が持つ意味的な関係を視覚的に表示し、ユーザーが語彙の意味構造をより深く理解できるように支援する。さらに、実体ネットワークは、人物や場所、事件などの実体間の関係を整理し、ユーザーが文献内の複雑な関係性を把握しやすくするための重要な役割を果たす。地理情報データベースは、テキストに記載されている地理的情報を地図上に表示することで、文献の歴史的および文化的背景をより鮮明に理解するための補完的なツールとして機能する。

4.2 応用

本研究で開発された全文検索システムは、デジタルヒューマニティーズの視点から『元朝秘史』文献を研究するに適した多くの機能を備え、その応用できる範囲は比較的広いものである。以下は応用の例として二つの研究テーマを挙げて、本システムの有効性と応用可能性を見せる。

（1）音訳漢字のクラスター分析

『元朝秘史』は漢字音訳を用いたモンゴル語の文献であり、その中で使用される漢字は 1000 種類以上にも及ぶ。本システムの検索機能を使えばこれらの漢字がどこでどのように、何回出現したなど基本統計数値を容易に得ることができる。これを基本に音訳漢字のクラスター分析など高度な統計学的テクニクスが使えることに繋がる（図 7）。このよう

な研究によって異なる発音や意味を持つ漢字がどのようにモンゴル語の音韻や文脈に関連付けられているかを解明することが可能となるばかりではなく、13 世紀のモンゴル語の音声学研究や漢字の発音体系の歴史的変遷を理解するための重要な手がかりを提供する。

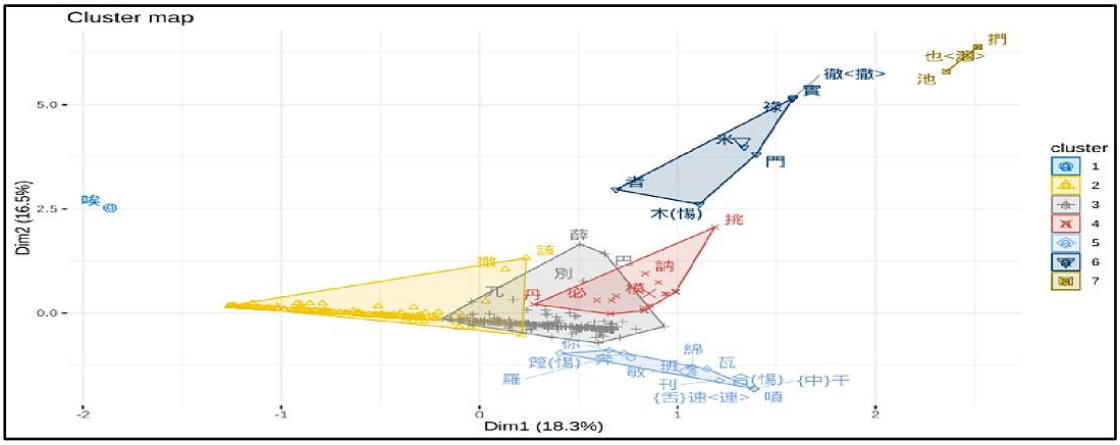


図 8：『元朝秘史』音訳漢字のクラスター分析

（2）地理実体と人物ネットワーク分析

システム内に統合された地理情報データベースを活用し、文献に記載されている地理的要素と人物の間の関係をネットワーク分析することができる（図 9)。このような分析により、地理的背景が人物の行動や歴史的事件にどのように影響を与えたか、また、異なる人物や事件が特定の地理的要素とどのように結びついているかを明らかにすることの研究が行える。

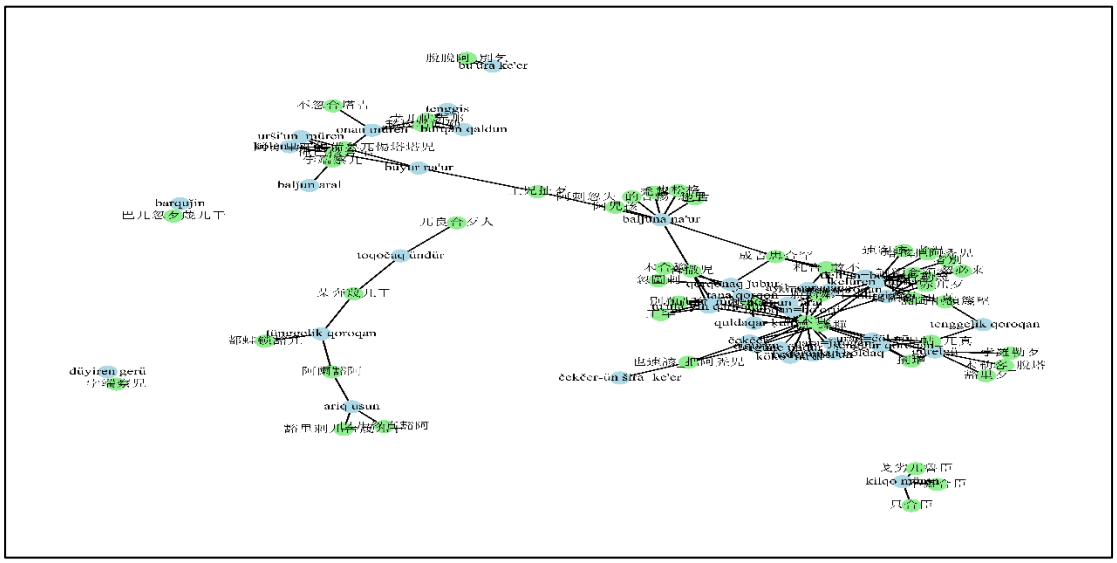


図 9：地理実体と人物ネットワーク分析

5. 結論と展望

5.1 全文検索システムの学際的意義

本研究で開発した『元朝秘史』全文検索システムは、デジタルヒューマニティーズにお

ける新たなツールとして、多機能性と高い柔軟性を備えたものであり、従来の文献研究に対して大きな革新をもたらす。従来の文献研究では、膨大なテキストを手作業で分析することが主流であり、その結果、研究の効率と正確性に限界がある。しかし、本システムは、テキストの高速検索と多次元分析を可能にし、ユーザーが短時間で深い洞察を得られるよう支援する。

さらに、このシステムは、言語コーパス、語彙セマンティックツリー、実体ネットワーク、地理情報データベースといった複数のデータベースを統合しており、ユーザーが異なる視点から文献を総合的に分析することを可能にしている。このような機能は、従来の単一の分析手法では得られなかった新たな知見を引き出す助けとなり、特に歴史学、言語学、文化研究の分野で重要な貢献を果たす。

また、本システムの可視化機能により、テキストデータが視覚的に表示され、ユーザーが文献中の複雑な関係性や地理的背景などを直感的に理解することができる。このようなデジタル技術の導入は、従来の人文学研究における限界を超え、新たな研究方法論の確立に寄与すると期待される。

5.2 将来の研究展望

今後、本システムのさらなる高度化と発展が期待される。特に、人工知能（AI）や機械学習技術を活用した機能の追加により、システムはさらに強力なツールとなる可能性がある。例えば、RAG（Retrieval-Augmented Generation）技術を導入することで、文献に基づく自動質問応答システムを構築し、ユーザーが自然言語で質問を行い、システムが『元朝秘史』および関連文献のデータベースから適切な情報を引き出し、解答を生成することが可能となる。

また、システムのデータベースを拡張し、他の歴史文献や文化的資料を含む形で統合することで、研究の対象がさらに広がり、『元朝秘史』と関わる異なる文献間の比較研究が可能にする。これにより、歴史的な文脈や文化的背景の異なる文献間での関連性を探る新たな研究が促進される。

参考文献

E. Rabdan (2021) *Ikh Mongol Gürnii Tüükh-gazarzüin Nebterkhii Toli*, Monkhiin Üseg.

Igor de Rachewiltz (1972) Index to The Secret History of the Mongols， Indiana University Publications Uralic and Altaic Series, Vol. 121.

华沙宝，巴达玛敖德斯尔（2003）蒙古语语料库建设现状分析和完善策略，语言计算与基于内容的文本处理——全国第七届计算语言学联合学术会议论文集.

张蒙等编（1990）《蒙古地名译名手册》，内蒙古人民出版社.

施世杰（1978）《元秘史山川地名考》，广文书局.

栗林均（2009）『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳傍訳漢語対照語彙』，東北大学東北アジア研究センター.

栗林均（2012）『「元朝秘史」傍訳漢語索引』，東北大学東北アジア研究センター.

江荻，严海林，孙伯君，斯钦朝克图，孟达来（2006）《蒙古秘史》电子文本检索系统的研制，中文信息学报，第 3 期，pp. 36-42.

莫喜格（2014）《蒙古秘史山水地名考究》，内蒙古文化出版社.

金罡(2019) 《蒙古秘史》词汇语义树库构建研究，中国蒙古学，47(1)，pp. 211-215.

金罡(2022a) 面向信息处理的《蒙古秘史》语块自动识别研究，中国蒙古学，50(1)，pp. 13-17.
金罡(2022b) 《蒙古秘史》语义网络的构建与应用，内蒙古师范大学学报，51(2)，pp. 1-9.
陈智超主编（2009）《陈垣全集》（第十一册），北京师范大学出版集团.
陈智超主编（2009）《陈垣全集》（第十二册），北京师范大学出版集团.
额尔登泰、阿尔达扎布（1986）《蒙古秘史还远注释》，内蒙古教育出版社.

Abstract

This study developed a full-text search system for *The Secret History of the Mongols* and explored its applications in digital humanities research. The system aims to enhance the efficiency and accuracy of research on *The Secret History of the Mongols*, addressing the limitations of traditional manual analysis methods. The system architecture is divided into three layers: data, analysis, and presentation. It supports functions such as string matching, regular expressions, lexical semantic trees, and entity relationship visualization, and integrates a geographical information database. The multifunctionality of the system enables users to conduct multidimensional analyses of the text, achieving a deeper understanding of the content.

Additionally, the paper demonstrates the system's effectiveness through case studies on phonetic Chinese character clustering and the analysis of geographical entities and character networks. The study concludes with a discussion of the academic value of the system in the digital humanities field and proposes future developments, including the integration of artificial intelligence and the expansion of the database to enable automated question-answering and comparative studies across multiple texts.

外国語としてのインドネシア語
―専攻語ではない言語科目としての教育実践からの提案―

Sri Budi Lestari
（立命館アジア太平洋大学言語教育センター）

キーワード：外国語教育，CEFR，シラバス，基本文法

1. はじめに

本稿の目的は外国語としてのインドネシア語教育分野におけるインドネシア語学習向けレベル別の語彙・文法項目を整理し、レベル分けの参照基準を作成する提案を行う。主に先行研究に挙げられているインドネシア語の基本文法を参考にしながら、筆者が所属している機関で教えられるものを基準とする。筆者はこれまで段階別の読み物 (Greaded Readers: GR) の開発を試みてきている。その開発を行なっている際に、より幅広い学習者に読んでもらえるように様々な教育機関の学習範囲を把握する必要があることに気づいた。しかし、実際のところ、外国語としてのインドネシア語の正式な学習要領[1]というものはあるものの実践現場では活かしにくく、後述するように、日本国内の場合では、教育機関によって内容が統一されていないことが現状である。筆者は、GR を開発するための基礎的な調査を行なっており、その第一歩として、この機会をお借りして現在所属している機関のカリキュラム内容を整理し、報告する。とりわけインドネシア語教育におけるレベル分けを整理することが急務だと強調したい。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で前提となるインドネシア語の知識、日本におけるインドネシア語の教育について概観したのち、3 節で先行研究を述べながらインドネシア語教育の現状を見る。4 節で問題提起をし (筆者の所属機関で教授されるカリキュラムの特徴、学習者の特徴、シラバス内容 (I〜IV) を述べ) 、5 節では考察 (レベル分けの基準をどのように策定すればいいか、レベル分けの基準を何に活用するかなど) を行う。

2. 背景知識

2.1. 日本におけるインドネシア語教育

まず、日本におけるインドネシア語教育が行われている機関とその歴史について概観する。現在、日本でインドネシア語のカリキュラムがある大学は、いくつかの報告をまとめると、およそ 23 校ある (日本インドネシア学会 (2017) [2]。インドネシア語が日本で初めて教えられたのは、1908 年に、現在の東京外国語大学の前身である東京外国語学校で馬来語学

[1] 簡単にいうと、CFER、JAPAN FOUNDATION 日本語教育スタンダード、日本能力試験公式問題集に出るようなレベル別の出題範囲等といったもの。
[2] 浦野 (2017) によると 54 校、また日本インドネシア語検定協会のウェブサイトによると大学と高校を合わせると、24 校あるという。

科が設置された時である (井口 2007) [3]。筆者の所属大学でのインドネシア語のカリキュラムのあり方について、その設立経緯を中心に以下に井口 (2007) と Lestari (2023) 引用して述べる。

立命館アジア太平洋大学 (以下 APU) は 2000 年に大分県別府市に開校した。インドネシア語は、カリキュラムの編成と共に、科目の名称が 2 回変更になった。APU 開校当時は「マレー語・インドネシア語」という科目名であり、2023 年の新カリキュラムが作られた際に、「マレー・インドネシア語」に変わった。本稿では、便宜上、現在の科目名を用いる。「マレー・インドネシア語」は、中国語、韓国語、スペイン語、タイ語、ベトナム語とならんでアジア太平洋言語として位置付けられている。科目数とそれぞれの単位数は、次のとおりである。「マレー・インドネシア語 I」 (4 単位) 、「マレー・インドネシア語 II」 (4 単位) 、「マレー・インドネシア語 III」 (4 単位) 、「マレー・インドネシア語 IV」 (2 単位) となっている[4]。段階的に入門、初級、中級に上がっていくイメージである。名称は「マレー語」や「マレー」がついているが、基本的にインドネシア語の文法だけ扱う科目になっている。基本文法項目は、「マレー・インドネシア語 I」と「マレー・インドネシア語 II」において終了させていたが、専任教員や言語主任の方針に伴い、少々の変更が加えられた。開校当時しばらくの間、「マレー・インドネシア語 III」以降では、これまで指摘に留まっているマレーシア語との文法・語彙・例文が、紹介・導入され、読解のセッションにおいてマレーシア語の資料も利用されていた。現在の「マレー・インドネシア語」はすべてのレベルにおいて、インドネシア語の文法だけ扱っている。

以下の表は、Lestari (2023) がまとめた科目名、単位数、及び CFER の基準で測れる場合のおよその言語能力である。表中の詳細は 2017 年カリキュラムのものである。また、三列目にある BIPA とは **B**ahasa **I**ndonesia untuk **P**enutur **A**sing (外国人話者のためのインドネシア語) の略である[5]。

表 1: 2017 年カリキュラムのマレー・インドネシア語の科目

科目名	単位数	CEFR&BIPA
Malay/Indonesian I	4	A1 (BIPA 1)
Malay/Indonesian II	4	A2 (BIPA 2-3)
Malay/Indonesian III	4	A2～B1 (BIPA 3-4)
Malay/Indonesian IV	2	B1 (BIPA 4-5)

[3] 東京外国語大学各語学科・専攻語の歴史については次の URL (https://www.tufs.ac.jp/common/archives/TUFShistory-southeast-asia-2.pdf) や東京外国語大学のホームページ (https://www.tufs.ac.jp/abouttufs/pr/history.html) にて確認できる。

[4] 2023 年カリキュラムでは、「マレー・インドネシア語 III」は 2 単位ずつの III A と III B という 2 つの科目に分かれて、「マレー・インドネシア語 IV」は単位数は 2 のままで、名称は「言語グローバルラーニング・マレー・インドネシア語」に変わった。

[5] BIPA の測定目安について次章で述べる。

2.2. インドネシア語の概説

インドネシア語の特徴について簡単に紹介する。インドネシア語の特徴についてわかりやすいものとしては、降幡 (2017) があるので、これを参照されたい。以下に、降幡 (2017) 、原 (2020) 、小笠原 (2016) を参考にしながら、インドネシア語の特徴についてまとめる[6]。

1. 語順について

名詞句は、「修飾される語-修飾する語」、文は基本的に主語のあとに動詞などの述語が続く。目的語は動詞の後に置く。さらに、動作が行われる場所や後述する時制の代わりに多用される語彙類を使う場合、基本的に文の先頭か末尾に置く。降幡 (2017) は kemarin「昨日」や ke Jakarta「ジャカルタへ」などの文構成要素は文法的なものではなく、プラスアルファの要素であると見なす。

2. 敬語法なし

インドネシア語は敬語の仕組みを持っていない。日本語のように、目上や社会的な地位が高い人、初対面で初めて会った人、いわゆる敬意を表す必要がある人、距離を置きたい人と話す際に、言語の構造に体系的にその敬意や距離を表す方法はない。そのかわり、人称代名詞、特に二人称の代名詞またはその代わりの使い方に非常に注意が必要な言語である。以下の表でインドネシア語の人称代名詞を示す。二人称の単語はいくつかあるが、anda 以外はどれも日本語の「あなた」に相当する意味・ニュアンスを持っているため、親しい間柄、同等の人にしか使えない。

表 2: インドネシア語の人称代名詞

人称	単数	複数
1st	saya, aku	kami (*exclusive*) , kita (*inclusive*)
2nd	kamu, anda, engkau, kau	kalian
3rd	dia, ia, beliau　(*honorific*)	mereka

表中の anda は、不特定多数の人々を指す場合によく用いられる。例えば、公共交通機関のアナウンス、テレビのニュース放送、ラジオ番組、テレビコマーシャルなどである。目の前にいる個々人に使うと、逆に無礼な印象を与えてしまうので、初対面の会話などに使わない方が無難である。しかし、残念ながら、多くのインドネシア語の教科書に、この anda を自己紹介の例文に導入している本が多い。anda が使われる一対一の会話例としては、非常にフォーマルな場で、初めて話しかける相手の名前を知らず、何と呼べばいいかわからないというシチュエーションである。多くの場合、名前が分かったら、同年代であれば名前で呼ぶか、以下の代名詞代用語を使う。名前を使う場合、年齢や距離によって敬称をつけることが多い。また、初対面の時に、「どのように呼べばいいか」と聞くのが当たり前になっている。

[6] 例文は出典がないものは筆者の作例である。

一方で、上述したようにkamuは日本語の「あなた」と同じぐらいの感覚で覚えてもいい。先生が学生に、親が子供に、恋人同士、夫婦同士といった上下関係や親密度がはっきりした関係で使われている。教科書によって、二人称代名詞の代わりに用いられる普通名詞 (表3) の語彙を二人称と書いている教科書・参考書もある (深尾・ハフサリ (2021); 小笠原 (2016)) 。本稿は、これらの名詞を人称代名詞と呼ぶと誤解を招く恐れがあると考え、代名詞代用語と呼ぶ。また一人称も、慎重に選ぶ必要があり、場合によってsayaやakuではなく、代名詞代用語を使う。以下の表3 には、性別 (男性に使うか女性に使うか) 、代用語の語彙、元の意味を示し、人称代名詞の代用としても使用可能である語があることを示した。いずれも一人称 (私) としても二人称 (あなた) としても使用可能であるが、紙幅の都合上、表3には、二人称としての使用のみ提示した。

表3: インドネシア語の一般的な代名詞の代用語

	代名詞代用語の語彙	元の意味	使用相手 (二人称として)
男性	kakek	祖父	年配の男性に、話者の親族・非親族
	bapak	父	目上の男性に、話者の親族・非親族
	om	叔父、伯父	目上の男性に、話者の親族・非親族*
	mas, abang	兄	若い男性に、話者の親族・非親族
女性	nenek	祖母	年配の女性に、話者の親族・非親族
	ibu	母	目上の女性に、話者の親族・非親族
	tante	叔母、伯母	目上の女性に、話者の親族・非親族**
	mbak	姉	若い女性に、話者の親族・非親族
共通	mbah	祖母、祖父	年配の男女、話者の親族・非親族
	kakak	年上の兄弟	若い男女、話者の親族・非親族
	adik	年下の兄弟	若い男女、話者の親族・非親族***
	dokter	医者	医者に使う
	suster	看護師	看護師に使う
	sayang	愛しい、好き	恋人同士、夫婦同士、親友同士

*非親族の男性に用いる場合は、自分の父親より年齢が若い人、知り合いの父親、見知らぬ人、関係がない人に限定される。日本語の、「おじさん」と似た感覚で使用される。
**omと同様で、女性に使うバージョンである。
***kakakが使用される対象より年下の人に使う。

1) Saya ingin bertemu **Bapak** sore ini, boleh?
「私は今日の午後あなたにお会いしたいが、よろしいですか」

*上記の1) にある太字の語bapak「父」は、「あなた」kamuの二人称代名詞の代わりに使われていて、職場の上司や学校の先生に使う例としてよく聞く。

以下の例文は、一人称の saya の代わりに tante「伯母」が使われている例文である。

2)　**Tante** ambilkan minum dulu ya. Silakan duduk.
　「おばさん (私) は飲み物を取ってくる。どうぞ座ってください」

子供の友達が家に遊びに来た際に、女性が自分のことを指すときによく使う tante「叔母、伯母」を使う。
　また、表 3 の語彙は、sayang 以外、全て呼びかけと敬称としても使える。

Bapak Nakamura「中村さん」「中村様」「中村先生」
Tante Mia「ミアさん」「ミアおばさん」
Mbak Susi「スシさん」「スシ姉さん」

kakek (kek) 、nenek (nek) 、bapak (pak) 、ibu (bu) 、kakak (kak) 、adik (dik) は、それぞれ短縮形 (括弧内の形式) を持ってるが、敬称と呼びかけとしてのみ使える。

3.　格変化なし
　もっともわかりやすい説明方法として、英語の「私」I が I、 me、 my のように格変化によって形式が変わるのに対し、インドネシア語はこのような変化がないことが挙げられる。「私」を意味する saya は、どの格であっても全て saya になる (小笠原: 2016 等) 。

4.　借用語が多い
　外国語からの借用語については、詳細に記述する先行研究はないが、インドネシア語の単語には、サンスクリット語、オランダ語、スペイン語、アラビア語、中国語、英語からのものが多い。これらの一部の語彙については、何語から来ているか、Kamus Besar Bahasa Indonesia (KBBI) 「インドネシア語大辞典」にて調べることができる。例えば、以下の単語である。

istri (妻) → サンスクリット語の stri：女性、妻、フェミニン
utara 「北」→ サンスクリット語の uttara：北、左、後ろ
mi 「麺」→ 中国福建省の厦門語の ***mī***^{n} ：麺

　また、東南アジア島嶼部の言語の間に、さまざまな共通点があり、数詞だけでなく、一人称複数の包括形は、インドネシアとマレーシア (kami) だけでなく、フィリピンのタガログ語 (kami, namin, amin) でも使われている[7]。筆者の教育機関には、在籍性の半数を国際学生

[7] 今井 (編) (2020) 『東南アジアを知るための 50 章』第 IV 章「言語」。

[8]が占めており、インドネシア語の授業には南アジア出身の学生、フィリピンの学生、タイの学生、スペイン、メキシコの学生、などさまざまな言語背景を持っている人がいる。語彙の導入の際に (特に南アジアの学生には) 、同じか似ている単語も母語に使われているから喜ばれている。

5. 発音

概ね全ての単語は、日本語のカタカナで表すことができ、またカタカナ読みができる。ただし、教科書にカタカナ読みを併記すると、日本語話者の学習者はいつまでも上手に発音できないだろうとカタカナ併記を嫌う先生もいる。e の発音には、シュワの e と日本語の「エ」と発音が同じ e、の 2 つの発音がある。この 2 式の発音で意味の区別になることはあまりないため、あまり気にしなくてもよい。しかし、日本語では全て「ん」で表記される n, m, ng が、それぞれ発音が異なり、意味の区別もあるので、注意が必要である。l と r もそうである。

makan「食べる」　makam「墓地」
lulus「卒業する」　lurus「まっすぐ」

インドネシア語は、声調がなく、アクセントも意味の区別をしない。また、インドネシア語の各地変種においてストレスはあるものの、ヴァリエーションとしてしか扱われない。

3. 先行研究

本節では、日本国内のインドネシア語教育現場がどのような状況であるかを、先行研究をまとめて述べる。

外国語としてのインドネシア語が、どのように教えられているか、つまりいわゆる初級や中級といったレベルの中でそれぞれどれぐらいの範囲のものを教えているかについてまとまった調査がなされていない (3 ではこれについて述べる) 。なお、文法書や参考書など日本語で書かれているものは近年、数はそれほど多くはないが、以前と比べると種類が多く出版されるようになってきている。しかし、教育現場での様々な学習ニーズに応えられるものは少ない。例えば、文法の説明について詳しく説明がなされているものの、練習問題が少なく、和訳の練習に留まっているものがほとんどである。学習するニーズは様々ではあるが、4 技能を伸ばせるための練習にはほど遠く、応用練習、コミュニカティブアプローチで会話活動を中心とした練習 (場面によってすぐ使える練習) を掲載する教科書は少ない。各レベルで何を教えるべきかの手引きや規範的なガイドラインは存在しない。

3.1 節で日本国内のインドネシア語教育の現状についてまとめたものを、3.2 節ではインドネシア語の基本文法の記述研究、3.3 節では現在確認できる学習要領 (基本文法の概要、CFER にもとづいた学習内容) *Badan Bahasa cakupan BIPA* を扱う。

[8] APU では外国人留学生のことを「国際学生」と呼ぶ。

3.1. 日本国内におけるインドネシア語教育の現状

原・森山・降幡 (2012) では 2000 年以降日本の教育機関においてインドネシア語の学習者が減少していることが懸念されている。この減少に伴い、教えている教育機関の数も減ってきており、同時に教員の数も減少した。その結果、限られた教員だけでは独自の教材などを開発し、教育する「体力」がなくなってきていると述べられている。具体的には以下のような問題をインドネシア語の教育現場が抱えていると述べている。しかし、これらの状況をもたらした原因は、特に 2000 年以前からも既に現れているのではないかと考えられる。

1. 教材整備の遅れ
   まず、「教材」を「教える/学ぶ項目」と「それを教える/学ぶ時に用いる教科書や問題集等」と定義して、この 2 つの意味でのインドネシア語の現状は、初級と中・上級のいずれも十分な教材がないと指摘している。どのような内容が教えられ、学ばれるべきか、そしてその教育のために用いられる教科書などは用意されているのか。
2. 初級教材のばらつき
   教育現場で使われている初級の教材には、私家版のものもあり、一般向けの市販のものも使われていると述べている。この 2 種類の教材・テキストにおいて設定されている「教える/学ぶ内容項目」およびそれがどのような解釈や用語で記述されているかを見ると、さまざまであり、統一的とは言い難い。そのばらつきを解消するために、あるいはインドネシア語教育のあるべき姿を目指すためには日本の大学レベルのインドネシア語教育全体で用いる規範的なモデルが作られるのが望ましいと論じている[9]。
3. 中・上級教材の開発遅れ
   生きたインドネシア語 (ニュース、小説など) がそのまま用いられることが多く、使うメリットはもちろんあるが、何がタスクか何が目標であるのかが不明となりがちである。具体的に、それらの生の教材を使う際に、「教える/学ぶ内容」が示され、「教える/学ぶ時に用いる教科書等」が用意されるべきであると提案した。
4. 会話教材の不整備
   特に専攻語教育では、技能別 (文法、読解、作文、会話) で、それぞれに焦点を当てた授業設計であり、会話の授業はネイティブが担当することが多い。会話授業のその内容は担当教員にお任せというパターンの大学が多いという。もっとも問題点として挙げているのは、会話と会話以外の授業 (読解、作文、文法) との間にうまくリンクがされていないことである。

筆者も日々のインドネシア語の授業を実践している中で、独自の教材を作りながら様々な教科書 (文法書や参考書) を手にする。特に上記 2 の「ばらつき」に関しては、

[9] さらに、次のように明記されている。「インドネシア語専攻のような体系的なインドネシア語教育がなされるべき教育機関においても、1 つの機関内においてさえ統一的ではなく、そのような規範的なモデルの重要性と必要性を教員が常々感じながらも昨今の大学業務の多忙さ等で実現できない状態である」

様々な教科書を見ている際に同じ感想を抱く。上記 3 に関しては、体系的に初級から中級、上級へ上がっていくための段階的なものが欠けているところは多いのではないかと懸念する必要もあると思う。新聞や小説などの生きたインドネシア語を使用する際に、学習者への負担の大きさを考慮しなければならない。生きたインドネシア語をそのまま利用するのではなく、上級とはいえ、これまでの既習語彙に合わせてリライトしたり、語彙・表現や文型の解説の提供があると望ましいと考える。現在、上記の指摘の通り、生きたインドネシア語を活用し編集された教科書は極めて少ないのである。

3.2. インドネシア語の基本文法の記述研究

本節では、原・森山・降幡 (2017) に報告されている文法記述研究について概観する。報告書は、概ね 2012 年の上記の報告を踏まえたものであり、遅れていると指摘されている教材開発の中で特に文法教材に焦点を当てて「インドネシア語の基本文法の記述」[10]の研究成果の一部がまとめられている。その文法の記述の中で、以下の 31 の文法項目をインドネシア語の基本文法として挙げている。基本文法の記述の本来の目的は、学生のための基本文法の記述ではなく、教育的観点から記述した基本文法である。例えば、ある教員または教育機関がそれぞれの学習者のニーズや、授業時間数、開講する学部や学科の特徴に合わせて、教科書を編集する、またはカリキュラムの編成をする際に、何をどのように教えるべきかについて考える際に参照できる、そういったものを目指した文法項目リストである。それぞれの文法項目の記述については、1 つの項目に 1 章をあて、基本的には「概要」、「形態」、「機能」 (文法的機能及意味的機能) 、「補足」の 4 つの節に分けて行われている。

これらの基本文法の内容・構成は次のリンクからもアクセスできるようになっている。(https://www.tufs.ac.jp/ts/personal/furihata/ind_kyozai_bank/)

表 4: インドネシア語基本文法の文法項目リスト

	項目		項目
1	文の基本構造	16	共接辞 ber-an
2	人称代名詞、親族名称、指示代名詞	17	共接辞 ber-kan
3	疑問詞	18	接頭辞 meN-
4	基語動詞	19	接尾辞 -kan
5	助動詞	20	接尾辞 -i
6	形容詞	21	接頭辞 memper-
7	前置詞	22	接頭辞 ter-
8	接続詞	23	共接辞 ke-an
9	数詞、数量、時間の表現	24	接頭辞 pe-と peN

[10] 具体的には、「日本におけるインドネシア語の教材の分析と教材バンクの創設」という科学研究費の基盤研究である。

10	命令の表現	25	共接辞 per-an と peN-an
11	比較の表現	26	接尾辞 -an
12	受動文	27	接頭辞 se-
13	yang	28	接頭辞 ke-
14	-nya の用法	29	重複
15	接頭辞 -ber	30	複合語、略語とアクロニム
		31	情報構造

3.3. 外国語としてのインドネシア語の学習範囲（要領）

以下に述べる項目がインドネシア共和国教育文化省の管轄にある言語育成振興局が考案した外国語としてのインドネシア語 (Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing=BIPA) 学習者の、各レベルにおける修了基準 (スタンダード) である。これとは別に、学習到達基準も掲載されいるが、具体的な学習目標の記載がなく、本稿では省略する。以下の修了基準は、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CFER) および同局が監督しているインドネシア語能力試験 (UKBI) に準拠しているという。言語スキル、言語学的側面と文化的側面の 3 つの区分に分かれているが、以下の表は言語学的側面のみをまとめたものである。それぞれのレベル (BIPA 1-BIPA 7) において学習者が言語学的知識 (項目) を理解・習得できることが望ましいとされる (それぞれの知識をクリアできればそのレベルの修了者である)。

表 5: インドネシア言語育成振興局が教案した学習基準

レベル	言語学的側面における修了基準
BIPA 1	発音、人称代名詞、人称代名詞の接辞形 (-ku, -mu, -nya) 、名詞句の語順、序数詞、否定詞 (tidak, bukan) 、基本文型、疑問詞、指示代名詞、存在動詞 ada、位置表現、前置詞 (di, ke, dari, pada, kepada) 、動作・所有・使用を表す ber-動詞、〜することを表す me 動詞、結果・産出を表す接尾辞-an、アスペクト関連の助動詞、時を表す単語、接続詞 (dan, atau, lalu)
BIPA 2	疑問詞 (bagaimana, mengapa) 、様々な比較表現、最上級を表す接頭辞 ter-、命令表現、否定命令・禁止表現、誘いの表現、接続詞 (理由、結果、逆説) 、時間・回数を表す副詞・助動詞、程度を表す副詞、産出・用いる・方向を表す me-接頭辞、産出・状態・乗る・人数を表す接頭辞 ber-、接頭辞 pe-、共接辞 ber-an と ber-kan、道具・場所を表す接尾辞 -an、助数詞、感嘆詞 (wow, aduh, astaga) 、重複形
BIPA 3	前置詞 (bagi, dalam, terhadap) 、-lah/-kah の particle、接尾辞-nya、様々な接尾辞 (ketika, sebelum, sehingga, bukan hanya, melainkan, tidak... tetapi, baik ... maupun, entah...entah, supaya, kalau, seandainya) 、感嘆詞 (alangkah, betapa, bukan main) 、願望・期待表現、di-受動とゼロ形受動、adalah, merupakan を使う説明文、接辞

	を伴う重複、～になるを意味する接頭辞 me-、causative, locative の共接辞 me-i、causative, instrumentative の共接辞 me-kan、意見を表す表現
BIPA 4	複合名詞句、yang を使う修飾関係、ter, ke-an を使う受動文、回数・受益を表す me-i、 (動作や行為の結果、道具、場所) 名詞を作る pe-と-an、原因と結果、逆説を表す接続詞、意味の変化を伴う重複形、慣用句、メタファーなどの figure of speech
BIPA 5	yang を使う受動文、yang を使う疑問文、様々な接続詞、可能と無意識動作を表す ter-、抽象名詞を作る ke-an、共接辞 se-nya、口語と標準変種の相違、丁寧表現
BIPA 6	共接辞 per-an、peN-an と per-an の比較、接辞 memper-, memper-kan, memper-i、共接辞 member-kan、行為者と動作対象を強調するための yang、～によると menurut, berdasarkan
BIPA 7	言語学側面の項目について記述なし (ディベートで使う表現や言い回し、文脈によって意味が異なってくる表現のみ記述あり)

表 5 の中にまとめらている内容は、細かく整理されており、シラバス編集や設計に活用できるであろう。しかし、それぞれの項目をこのレベルで教える基準やその選定理由については明確にされていない。また、いくつかの項目 (関係代名詞 yang、受動文、接頭辞 me-と ber-など) は、いくつかのレベルであえて分けられて教える意味はあるのであろうか。特に、yang は多機能であり、yang を使った受動文や疑問文は、日常会話でよく使う表現であり、早い段階で教える必要があると考えられるが、上記の表では、後半 (BIPA 5) に組み込まれている。

3.4. 日本インドネシア語検定協会のレベル基準

日本の主要地域、ジャカルタ、バリで実施されるインドネシア語技能検定試験は日本インドネシア語検定協会が運営をするもので、E 級から特 A 級まで 5 つのレベルがある。以下は、各レベルの評価基準である。同協会のホームページ[11]より抜粋した。

表 6: 日本インドネシア語検定協会が考案したインドネシア語能力検定の基準

級	概要	評価基準
E	看板や平易な手紙などを読み、挨拶、自己紹介、意思表示などの初歩的な日常会話ができる。初歩的なインドネシア語を理解し、使用できる。	読む：看板、手紙などの初歩的な文章を理解することができる。 書く：簡単で短い文を使った手紙、メール、日記などを書くことができる。 聞く：簡単で短い質問、依頼、誘いの内容を理解する

[11] https://www.i-kentei.com/kentei/penilaian/index.html (最終閲覧 2024 年 10 月 20 日)

		ことができる。 話す：簡単な挨拶、自己紹介、意思表示ができる
D	案内板、チケットなどを読み、買い物、道案内、伝言などの簡単な日常会話ができる。日常の身近なインドネシア語を理解し、使用できる。	読む：案内板、チケットなど簡単な文章を読み、理解することができる。 書く：簡単な手紙、メール、日記などを書くことができる。 聞く：簡単な質問、依頼、誘いの内容を理解することができる。 話す：簡単な買い物、道案内、伝言などができる。
C	商品の取扱説明書、広告などを読み、日常生活について手紙を書いたり、一般的な日常会話ができる。日常生活に必要なインドネシア語を理解し、使用できる。	読む：取扱説明書、広告などを読み、理解することができる。 書く：手紙、メール、日記など日常生活の話題について書くことができる。 聞く：日常会話の内容を理解することができる。 話す：日常会話を話すことができる。
B	平易な新聞記事、文献を読んで翻訳でき、平易な業務文書を書いたり、簡単な通訳ができる。職場や社会生活に必要なインドネシア語を理解し、使用できる。	読む：平易な新聞記事、文献、業務文書を読み、理解することができる。 書く：平易な新聞記事、文献、業務文書の翻訳ができ、文書を書くことができる。 聞く：平易なテレビニュースや会議などの内容を正確に理解することができる。 話す：平易な社会問題について通訳したり、論理的に意見を述べることができる。
A	一般の新聞記事、文献を読んで翻訳でき、業務文書を書いたり、一応の会議通訳ができる。職場や社会生活に必要なやや高度なインドネシア語を理解し、使用できる。	読む：一般の新聞、文献、業務文書を読み、理解することができる。 書く：一般の新聞、文献、業務文書の翻訳ができ、実用文書を書くことができる。 聞く：テレビニュースや一般的な会議の内容を正確に理解することができる。 話す：社会問題について通訳をしたり、論理的に意見を述べることができる。
特 A	インドネシア語の通訳、翻訳者のプロとして通用するレベル。職場や社会生活に必要な高度なイン	読む：新聞の社説、講演・会議資料などを読み、理解することができる。 書く：新聞の社説、講演・会議資料などの翻訳ができる。 聞く：講演、会議などの内容を正確に理解することが

	ドネシア語を理解し、使用できる。	できる。 話す：講演、会議などの話題について通訳をしたり、議論することができる。

このインドネシア語技能検定試験の基準は、受験者にとって重要な指標であるものの、いくつかの問題点があると言えよう。まず、各級の基準がやや抽象的で具体性に欠けるため、受験者が自分のレベルや立ち位置を明確に理解できない。C 級をみると、「商品の取扱説明書、広告などを読み、日常生活について手紙を書いたり」の説明のあとに、「一般的な日常会話ができる」「日常生活に必要なインドネシア語」などが書かれている。日常的に必要なインドネシア語ははたしてこれだけでいいのか、もっと具体的にどのような内容かが示されるとよいだろう。さらに「平易な新聞記事、文献、業務文書」と「一般の新聞、文献、業務文書」との違いは何であるかが気になるところである。つまり、各級のスキルレベル間の違いが明確でないため、どのレベルで何ができるかの具体的なイメージが持ちにくい。たとえば、C 級と B 級の違いが曖昧で、受験者がどの級に挑戦すべきかの手がかりが不足している。

4. 問題提起と提案

4.1. 先行研究から考察できる問題

先行研究では、インドネシア語教育内容のばらつきが指摘されており、大学レベルのインドネシア語教育全体で用いる規範的なモデルづくりが必要であるとの提案もされている。この提案は森山他 (2012) の論文で発表されてから 12 年が経過したが、いまだにその提案が実現される動きが見られていない。

「基本文法記述」は、文法・文型の説明、解釈、教えるための用語を考え、決める時に大いに役に立つものである。この「基本文法」は、それぞれの教育機関の状況に合わせて各教員がその内容をカスタマイズし、教える項目の順番も自由に変えて使うことが想定されている。例えば、専攻語として教える機関では、30 項目の全てを 1 学年で教えることが十分可能であるし、筆者の所属機関のような英語以外の第 2 外国語の選択科目として教えているところでは、文法が他の技能と合わせて教えられるため、1 学期で教えることができる項目が限定される。

先行研究から、以下の問題が提起できるであろう。

1. レベル分け (どの項目をどの段階で教えるべきかなど) の基準がどの関連機関 (言語育成振興局やインドネシア語検定協会など) でも決めておらず、結果的に評価基準も明白ではない。
2. レベル分け基準については、森山他 (2012) では、初級と中・上級の 2 つに分類されている点について、もう少し具体的な説明や区分が求められるように感じられる。
3. インドネシア語教育全体で用いる規範的なモデルづくりが必要であると指摘されているものの、指標となるレベル分け基準がなければ、教育内容のばらつき (例えば、特定の文法項目の内容が機関によって異なることなど) の問題が解決されないであろう。

4.2. 学習法の提案

この節では、以上の問題提起を踏まえ、筆者の所属大学のシラバスを一つの学習法の提案として紹介する。シラバスの中身は、概ね場面やシチュエーションによってアレンジされており、各場面のテーマごとに新しい語彙と文法項目が導入されている。レベルによって異なるが、各ユニットは会話や読解で始まり、語彙解説、文型紹介、応用練習、コミュニカティブな活動、自己表現というように学びが進められる[12]。以下で見られるように、文法項目が低スピードで進められる。語彙・文法項目の選定理由と教えるタイミングは、概ね以下の理由で判断された[13]。

1. APU の学習者の特徴：国内学生 (日本語基準の学生) と国際学生 (英語基準の学生) の数は半々であり、様々な言語・文化背景を持っている学生が多い。インドネシア語を含むアジア太平洋言語 (AP 言語) は選択科目 (共通教養科目) として教えられている。つまり、専攻語としてではなく、専攻科目や英語や日本語の必須科目をとりながらインドネシア語を学ぶ学生が多い。また、キャンパス内にインドネシア語を話すインドネシア人学生が多いことから、インドネシア語の履修者は、負担なく学習でき、かつキャンパス内ですぐ使える言語知識を求めるであろう。
2. APU でインドネシア語を履修する理由 (学習のニーズ) ：言語学の知識を身につけたい学生は極めて少ない (いないと言ってよい) 。実用的で仕事や観光のために将来訪れる機会が多いであろうインドネシアで日常会話ができるまでのレベルで学習したい学生が多い。まれに、仕事で使えるインドネシア語を身につけたいと言う学生もいるが、その学生たちにも文法項目を細かく教える必要はないと考える。

レベル 1 のシラバスの内容を次の表 7 にまとめる。

表 7: レベル 1 のシラバス内容 (全 8 ユニット)

ユニット	語彙・文法項目/文型	場面 (シチュエーション)
1	挨拶の表現、呼びかけ表現、敬称表現	挨拶をする
2	名詞句の語順、主語と述語の語順、前置詞 (di「に」「で」, dari「から」) 、否定語 bukan/tidak	自己紹介
3	数字 (1-99) 、序数詞、意思表現 (mau) 、序数詞 (orang, ekor に限定)	好みを言う；店で注文する
4	日付の表現、基語動詞、前置詞 (ke「〜へ」) 、時の表現	家族のメンバーを紹介する
5	時間の言い方、曜日、アスペクト (sudah, belum, akan, sedang, pernah) 、誘いの基本表現	日常生活について話す

[12] これらのシラバス内容と進め方は 2019 年に改修されたものであり、それまでの内容 (例えば、井口 (2007) の実践報告) とは異なっている。
[13] 主に言語主任である筆者によって判断がまかされているが、テキストを編集していた際に、他の教員からの意見も取り入れ、また教えている中、日々様々な修正や改善案も受けつけている。

6	形容詞、身につけるものの単語、程度の副詞、数字 (100～100 万)	所有物などのものを説明する；買い物をする
7	天気・天候に関する語彙や表現・形容詞、身体部位の語彙、モーダル表現・助動詞　(harus, bisa, boleh)	身体的な特徴について説明する；健康状態について話す
8	接頭辞 ber、接頭辞 me-	人々について描写する；自分の経験について表現する

各ユニットにおいて、それぞれ最後の部分に産出活動があり、できるだけ自己表現ができるように指導し、テキストにもその手順などが書いてある。例えば、ユニット 1 では、挨拶の一部として、近況を尋ねる表現や声かけを教える。導入される会話形式は、キャンパスの日常生活でよく交わされるようなもので、友人や教員に会ったときに近況を尋ねたり、別れの挨拶をしたりするものなどである。その後、学習者はペアになって、テキストにある会話のように会話を作るが、指示に基づいて既習語彙を用いてバリエーションを作るように指導される。他に、ユニット 7 では、体調が悪そうな友人の状態を尋ね、休むか病院に行くように勧めたり、いい病院を紹介するなどの会話を作る活動がある。教科書では、学習者がキャンパス内で自然な会話ができるように、呼びかけの仕方、あいづちの代わりのもの、一人称の使い方、日常会話変種の表現を導入する。

図 1 には、テキストに掲載されている挨拶の表現を使った会話が示されている。また、図 2 には、学習者がペア活動で実際に作成した会話例が示されている。クラス内のペアやグループがお互いに閲覧してコメントしやすくするため、教員は音声録音だけでなく、イラスト付きのスライドなどのメディアの活用を促している。

Romi : Julia! **Apa kabar**?
Julia : Hai Romi! **Aku baik**. Kamu?
Romi : **Aku sehat-sehat saja**.
Julia : Aku ada kerja sampingan, Romi.
Romi : Oh ya? Aku ada kuliah. Dah!
Julia : Dah Romi! Sampai besok!

図 1: ユニット 1 挨拶の会話例『マレー・インドネシア語 I』から抜粋

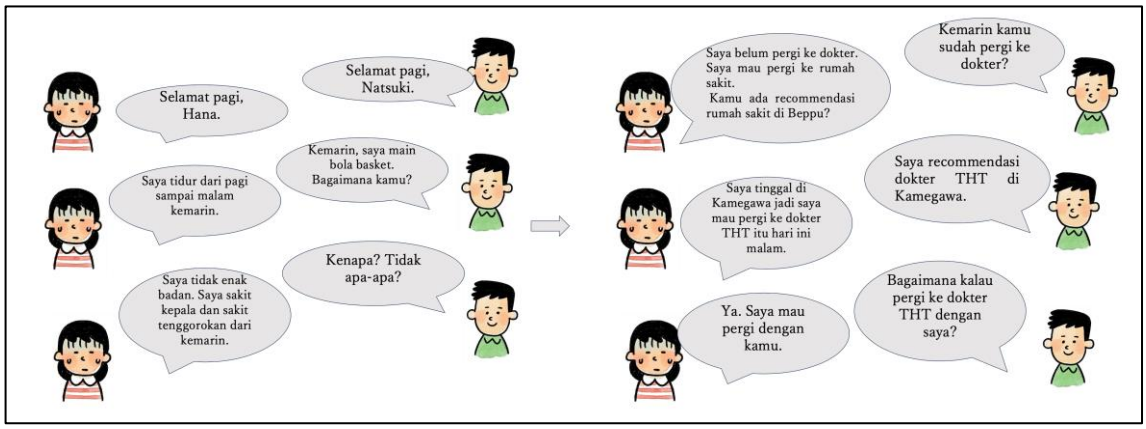


図 2: 学習者がペアで作った会話 (ユニット 7「健康状態を訪ねる場面」)

次に、レベル 2 の学習項目を次の表にまとめる。

表 8: レベル 2 のシラバス内容 (全 6 ユニット)

ユニット	語彙・文法項目/文型	場面 (シチュエーション)
1	願望を表す表現 ingin、経験などを表す助動詞 pernah、時間的表現 masih (まだ〜である) ・sempat (〜時間的に余裕がある) ・baru saja (〜したばかり) 、場所の名詞	旅行の計画を立てる
2	位置・場所に関する語彙、場所や方向を説明する表現、受動文 (di-形とゼロ形)	ジャカルタに到着する
3	誘いの表現、命令表現 (ゼロ形および-lah 命令文) 、関係代名詞 yang	ジャカルタで街歩きする
4	否定命令 (jangan「〜するな」、dilarang「禁止」) 比較表現 (同等、lebih...daripada「〜より〜ほうが〜」	観光スポットを訪問する
5	共接辞 ke-an、様々な接続詞 (逆説、原因関係、時間関連のもの)	公共交通機関に乗る
6	接辞 peN-と pe-、指示文 (ゼロ形を使うもの)	ジョグジャカルタでホームステイする

レベル 3 に上がっていくと、文法項目が少なくなる。レベル 3 以上は、言語形式よりもインドネシアの地域事情などの内容重視になっていき、学習者も既習語彙や表現を用い、日常的な問題について意見を述べたり、身近なテーマについて簡単な発表ができるように指導される。また、場面別ではなく、テーマ別に設計されている。次の表には、レベル 3 の内容を確認できる。

表 9: レベル 3 のシラバス内容 (全 6 テーマ)

ユニット	語彙・文法項目/文型	テーマ
1	様々な重複の表現と意味､家族と家に関する語彙 (拡張家族)	家族について
2	引用表現 (～と、～によると) 、意見の述べ方、seperti「～のように」などを使った表現	ソーシャルメディア
3	共接辞 me-i、祝祭日関連語彙	インドネシアの祝祭日
4	接尾辞 -an	様々な屋台
5	慣用句	昔話
6	共接辞 per-an と peN-an、接尾辞 -nya	インドネシアの独立
7	口語変種の形式・表現、略語	口語インドネシア語
8	接頭辞 ter-	有名な人物

レベル 3 では、未習のインドネシア語文法項目をすべて取り上げているわけではない。森山他 (2017) で取り上げられている基本文法の項目リストをすべて網羅しているわけではないが、該当する項目が読み物や会話に登場する際にその都度説明する。例えば、memper-、ber-an、ber-kan などは、新聞や論文のような固い文章やアカデミックな場面でよく使用されるが、授業で詳しくその意味や用法を取り上げる必要はないと判断したからである。

表 9 の 7 番「口語変種」について次のように述べる。APU では、インドネシア出身の国際学生が多数いるため、標準インドネシア語 (Bahasa Baku) だけでなく、積極的に日常会話 (口語) 変種を教えている。この変種の様々な表現を学習したあと、教員も、あえて会話変種の否定形 nggak、「言う」bilang、「～でしょう」 …kan を使うようにする。また、学習者には、キャンパス内でインドネシア人の友達に一人称として saya ではなく aku を使うよう指導する。

また、レベル 4 (言語グローバル・ラーニング) については、週 2 回という授業回数もあり、言語形式の面はあまり取り上げていない。グローバルラーニングという名称の通り、レベル 3 よりもインドネシアにより密着するテーマだけでなく、世界共通のテーマを取り上げる。新聞記事をリライトして導入教材として提供しているが、学期の後半には、日常的な話題であれば、少しの言い換えや修正を加えるだけで、収集した記事をそのまま読ませることもある。

このように、文法項目・文型は、レベル 3 (1 レベルの学習時間は 56 回 (一回は 100 分)) ですべて完結するというシラバス設計である。現在、上記のレベル 1 ～3 までの内容は学内販売・配布となっている。

5. おわりに

本稿で主張したことは次の 2 点である。

まず、先行研究で指摘されている通り、インドネシア語教育内容全体が様々な問題を抱えており、もっとも深刻な問題は、教材不足と教える内容のばらつきである。この問題を解決するためには、教育機関が協力してレベル分け基準を共同で決める必要があると考える。レベル分け基準 (どの範囲までは初級、中級、上級と言えるか) 、またどの語彙・文法項目をどの段階 (レベル) で教えるべきかを判断することは容易でない。膨大な作業と時間がかかるだろう。筆者は、まず市販の教科書、各教育機関が使用している独自の教材を集め、語彙、文型、文法項目、またそれらを使った例文のデータベース化する (コーパス構築) という方法ができると考える。

今後の課題として、まずレベルわけの基準を策定するための作業、またこの作業の重要性を理解し、賛同できる教育者の仲間を集めること、ある程度の結果ができた段階で、その基準を活用した教材を制作してみることが実現可能であるかどうか検討することでる。

参考文献

今井昭夫 (編) (2020) 「東南アジア島嶼部の言語」『東南アジアを知るための 50 章』東京: 明石書店

井口湯布 (2007) 「マレー語・インドネシア語教育の実践−APU 方式の確立へむけて−」Plyglossia 13: pp. 1-18

浦野崇央 (2017) 「留学に関するカリキュラム統合の可能性ー摂南大学によるストモ博士大学での学修を事例として」『インドネシア―言語と文化』17: pp. 31-42.

小笠原健二 (2016) 『新版 1 冊目のインドネシア語』東京: 東洋出版新社.

原真由子（2020）『世界の言語シリーズ 14 インドネシア語』大阪大学出版会

原真由子・森山幹弘・降幡正志 (2012) 「インドネシア語語教育の活性化のために」インドネシアー言語と文化』18: pp 2-10.

原真由子・森山幹弘・降幡正志 (2017) 「インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告」インドネシアー言語と文化』23: pp.7-30.

深尾康夫・ハフサリー ディアー (2021) 『基礎からレッスンはじめてのインドネシア語』東京: 欧米・アジア語学センター.

降幡正志 (2017) 「インドネシア語を学ぶことと教えること」『言葉とその周辺をきわめる-4- (2017) 』pp. 83-103.

Liliana, Muliastuti (2017) "Peran APPBIPA dalam Upaya Standardidasi Pengajar BIPA「外国人のためのインドネシア語教育標準化政策における APPBIPA の役割」"『インドネシア―言語と文化』23: pp.1-6.

Lestari, Sri Budi (2023) “Pengembangan Bahan Bacaan untuk Kegiatan Extensive Reading di Kelas Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing「立命館アジア太平洋大学における多読のための読み物開発」『インドネシア―言語と文化』29: pp. 35-48

“Indonesian as a Foreign Language: Suggestions from Educational Practice in Non-Major Language Courses”

Sri Budi Lestari
(Ritsumeikan Asia Pacific University)

The purpose of this paper is to propose a framework for categorizing vocabulary and grammar elements according to different proficiency levels in teaching Indonesian as a foreign language. The author aims to organize these items based on previous studies of basic Indonesian grammar and the curriculum taught at the author's institution. While attempting to develop graded readers for Indonesian, the author recognized the need to understand the range of content taught at different educational institutions to ensure broader accessibility for learners. Despite the existence of formal guidelines for teaching Indonesian to foreign learners, practical implementation varies widely, especially in Japan, where content varies from institution to institution.

As a basic step towards the development of graded readers, this paper organizes and reports on the curriculum of the author's current institution, emphasizing the urgent need to clarify proficiency levels in Indonesian language education.

平江影戏演出剧本分析

张　盛开
（静冈大学）

关键词：口传文化，影戏，演出，剧本，语言

1. 前言

平江影戏为湖南省平江县的地方戏曲。平江影戏的内容及形式都与别的地方所说的皮影戏类似，只是平江的影人用的是纸，而不是牛皮，所以一般不称皮影戏，而只称影戏。影戏使用的语言有唱词，还有符合各种人物身份的对白。对白也有几种，地位低的丫环等角色使用地道的本地平江方言口语，地位高的小姐等角色使用文言对白。本文在介绍中国湖南省平江县的省非遗项目影戏的背景知识的同时，利用实际演出的影戏剧本《后英雄》的转写资料，对影戏的演者与戏中的人物切换、语言搭配、对白的语言特色、唱词的押韵情况、唱腔特点等进行分析，深入挖掘影戏中的方言魅力。

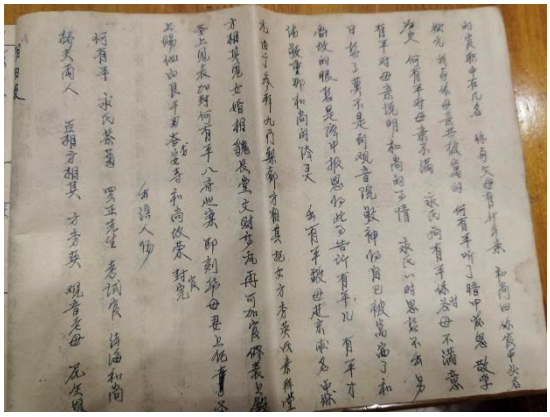
2. 背景知识

笔者手头的资料表明，余剑鸣可以说是第一个深入研究平江影戏的专家，其著作余剑鸣（2011）对平江影戏做了非常详细的描述，作者的材料来自平江各地影戏艺人。书里收集了艺人们提供的一些桥本资料（情节简介），还有利用艺人们的讲述转写的完整剧本。据影戏艺人的讲述，亦可知余剑鸣（2011）的材料来自一线的影戏艺人，可信度非常高。

余剑鸣（2011：7）对影戏的配置做了介绍，“影戏是一门综合艺术，能“跑满台”（各项技术娴熟）的影戏艺人必须具备打、吹拉、董影、唱、制作影人等五个方面的专业技能。平江影戏班子过去由四人组成，现在一般由三人组成:前台“董影”（“董”，平江方言，读 deng，阴上声，意为指使、操纵），负责操纵“影人”表演。中台演奏胡琴、唢呐，坐于戏台后方右边，面向左边，胡琴尾口朝戏台后方，兼奏副钞 （用正副两副钞时）与小堂披。后台演奏打击乐器，坐于戏台后方左边，面向右边。”右边为笔者所摄实际演出的戏台后景。

笔者总结了一些平江影戏的特点，以供加深对平江影戏的了解。

- **内容**：平江影戏的一场演出一般为三个部分，第一部分叫贺戏，以祝贺的内容为主，多演出 30 分钟内的小故事或影戏片段。第二部分叫正戏，一般为两个小时左右的长篇历史故事。第三部分叫耍戏，有各种演出形式，如影戏片段、快板、鱼鼓、小调、白话等，时间多为 10 分钟左右。演出内容一般由主人定，也可以请班主切合主家实际情况来定。贺戏、正戏、耍戏之间一般没有正式的休息时间。



- **剧本**：传统的平江影戏基本上没有完整的纸质剧本，只有一些桥本。演出时每一部戏的内容、台词完全依靠艺人的记忆来临场发挥。　　李喜林提供 桥本资料照片→
- **人员**：平江影戏的演出人数基本为 3 人（规定）。影戏的演出角色多不固定，剧团也不太固定。笔者跟踪剧团拍摄两个多月，就经常碰到不同艺人临时搭配演出的情况。
- **传承**：堪忧。最年轻的艺人出生于 1979 年。
- **演出时期**：没有特别限制，升学还愿戏最多，因此集中在暑假期间。传统影戏由于需要用灯光，一般在晚上才能演出。近期来因为有了方便的电灯，白天也可以演出。
- **演出场地**：主要为主人的家里或者庙里。影戏的演出目的为还神愿，因此即使在家里唱也要请本地的菩萨来观看。影戏开场前需要请神。

家庭演出与庙宇演出现场（笔者拍摄 2024.9）

- **戏台**：原始的戏架子易拆易带，由竹子搭建，放在两块木制大门板和几个长凳搭成的戏台上。演出中的打斗场面等需要艺人用力踩踏门板制造背景音。
- **观众**：多为乡下的老人和一部分爱好者。由于影戏剧本中的历史背景与其复杂的语言使用，70 年代出生的本地人基本上看不懂影戏。
- **演出费用**：800 元/次 （2023 年），需要为戏班的师傅们提供一餐饮食。需要字幕的时候可能需要另外加钱。由于仅靠影戏的演出没法确保固定收入，平江的影戏艺人一般都需要兼职，专职的影戏艺人很少。

3. 先行研究

此节只看涉及戏曲与影戏语言的研究，其他的相关研究在后面的小节中介绍。

余剑鸣（2011：10）指出平江影戏“说白全是平江话，引、白、课子是似是而非的湖北话”、“用本地语言唱的为唢呐腔”、“专在平江本地演唱”。

> 平江影戏的锣鼓经、南路、北路各种板式的唱腔过门与汉戏、巴陵戏一脉相承。经艺人口口相传，加上平江语音的区别，又不完全同于汉戏、巴陵戏。但归腔、归韵的词字保留了汉戏原有的语音，说白全是平江话，引、白、课子是似是而非的湖北话。
>
> 平江影戏唱腔为三大类: 一是用平江本地语言唱的为唢呐腔，又名鸡鸣腔，唱腔象雄鸡发声一样，故有凤鸣鸡叫之称，唢呐腔多为一句七字，尾音押韵分仄起平落，唱的本地语言。最后三字落音唢呐接腔，专在平江本地演唱，行内人称为老戏。
>
> 余剑鸣（2011：10）

余剑鸣（2011：13）还指出“平江影戏剧本是口头文学，道道地地的平江方言。平江人一听就能懂，因而倍受欢迎”、“语言幽默风趣”，还列举了如下五个常用手法以及实例。如前所述这些结论来自作者对多个影戏艺人采访的结果。

> 1、巧用押韵的字词，如“拿一根绳，tiā（捆住的意思）哒嗯咯个银（人），拿一根索，tiā 哒嗯咯双脚。”
> 2、不符逻辑的俏皮话，如“舀一调羹水放到调羹里浸死他”、“老汉今年六十八，讨个婆娘八十八，生个儿子百零八”。
> 3、故意错乱，如前文提到的施三唱段。
> 4、歪改词义: “在下叫鸡公生蛋，是个公子”。
> 5、利用谐音逗趣是用得最多的手法，如把“书生”说成“猪根”、“姑娘”说成“枯糖”、“上京求名”说成“上京参魂”等等。
>
> 余剑鸣（2011：13）

如下所示，游汝杰（2006：4）则指出地方戏曲的语言“与任何一种现实生活中的地方方言都有所不同”。

> 地方戏曲发展到现在，演员实际演出语言，并不纯粹是某一种地点方言，而只是以它作为底子而已。这种演出语言与在社会生活实际使用的语言并不完全相同。或者说它与任何一种现实生活中的地方方言都有所不同。所以地方戏曲的语言实在是一种社会方言，而不是地域方言之一的地点方言。
>
> 游汝杰（2006：4）

4. 问题提起

综上所述，一般戏曲的语言会与现实生活中的语言不同（游汝杰 2006），而平江影戏的语言为地道的平江方言（余剑鸣 2011），这样两者有矛盾之处。那实际上到底如何？

除此之外，本研究还有下列需要解决的问题：

(1) 平江影戏中各类人物使用的语言是否一致？
(2) 平江影戏一般由三个人表演多达几十个人物的历史故事，那其角色如何切换？
(3) 平江影戏的语言是否为地道的平江方言？有无如余剑鸣所说的似是而非的湖北话？

5. 调查

上一章所提出的问题都需要对影戏的剧本进行详尽的研究。因此笔者决定对实际演出的剧本进行详细分析，找出充分的资料来回答上述问题。

5.1. 资料概要与演出人员介绍

本研究用于分析的剧本为实际演出的剧本《后英雄》，为 2024 年 4 月 9 日晚在平江县三墩乡城隍庙演出时的正戏部分。平江影戏艺人，演出人员之一李喜林利用抖音直播的现场演出，笔者利用手机抖音观看并录屏记录。下表为该剧本的演出人员资料。本文只对三位男性资深艺人的语言进行分析。

表格 1 演出人员资料

姓名	代码	性别	出生地	出生年	从师年份	分工与担任角色等
李喜林	Lxl	男	平江县虹桥镇平安村人	1979 年	1988 年（9 岁）	前场、影人操作、元帅徐君美等多个角色
吴红卫	Whw	男	平江县三墩乡忠龙村人	1970 年	1985 年（15 岁）	中场、反王陈龙等多个角色
凌兵昂	Lba	男	平江县梅仙乡人	1970 年	1987 年（17 岁）	后场、许三春等多个角色
邓满满	Dmm	女	平江县虹桥镇白马村人	1981 年	2024 年 5 月（43 岁）正式拜入李喜林门下学艺。	字幕操作、清风公主少许唱词

▶ **《后英雄》剧本概要**

人物：徐君美、陈兰英、许三春、徐金凤、徐金虎、送子仙官、陈龙、陈虎、陈阁老（陈父）、清风公主、小兵、丫环、宋王、渡厄真人。

徐君美，宋王驾下元帅，宾州大原府人，妻陈兰英、许三春。陈龙、陈虎起兵为被宋王腰斩的父亲陈阁老报仇。宋王让徐君美带兵平反。徐君美领旨回府对二位夫人说明出征之事。送子仙官到徐府送子，许氏生子，徐君美取名为徐金虎。徐君美带兵平反，到阵大战，打败二陈，却被其用绊马索捉拿。对话之中得知乃是妻子陈兰英的兄长。徐君美劝二陈投降，二陈不遵，徐暂在反营安身。小军密报夫人陈兰英，陈兰英令大儿徐金凤带兵救父。金凤过清风寨时被清风公主带兵打掳，二人大战。公主看上徐金凤，欲许亲，金凤说明除非带兵随同救父方遵许亲，公主答允。二人成婚，家人回家报陈兰英，陈氏大怒，同家人到清风寨大骂金凤。金凤说明招亲缘由，婆媳相会，三人同到反营。二陈令徐君美观阵，各自认出对方。夫妻、父子、兄妹相会，兰英劝兄投降不遵，一家在反营安身。二儿子徐金虎游荒郊，遇渡厄真人传法。徐君美修密书令小军下书，许三春见书慌张，找儿金虎商量。金虎说出师傅传法之事，单独一人前往反营，大败母舅陈龙陈虎。二陈投降，徐氏父子相会。徐君美大喜，收兵回营，奏明宋王。宋王封官赐酒，赐后代英雄牌匾。

5.2. 调查方法

剧本转写过程与调查方法如下：

(1) 利用软件 ELAN 转写，从视频分离出音频，并将音频与视频导入 ELAN 进行文字转写。
(2) 转写时将每个人物的说与唱分开，每个艺人的担任角色与说唱之词分开进行统计。
(3) 所有人物的唱词、说白、对白都分开分析，找出各自的特征与倾向。
(4) 对唱词与说白进行分析，并与本地平江话进行对比。
(5) 对各个艺人的唱词进行统计分析，找出唱词中加音及尾音的变韵规则。
(6) 从各自的唱词进行分析，考察影戏唱词的押韵情况。

本研究分析的影戏剧本的唱腔基本为唢呐腔，因此分析考察的对象仅限于唢呐腔唱词。本文所用术语中，“唱词”表示为唱出来的词，“说白”指地位高的人说的文言，“对白”指地位低的人使用的口语。

5.3. 调查结果

剧本总时长为 127 分。笔者将唱词、对白、说白等全部进行文字转写。于 2024 年 9 月 13 日请演出与直播者李喜林一起确认转写的内容与文字。转写出的文字共 13640 字，包括唱词 6200 字，说白 2955 字，对白 4488 字。

其中有唱词的人物为：徐君美、陈兰英、反王陈龙·陈虎、送子仙官、许三春、徐金凤、清风公主、徐金虎、渡厄真人、陈阁老（陈父）。有说白的人物为：徐君美、陈兰英、反王陈龙·陈虎、城门官、宋王、许三春、徐金凤、清风公主、徐金虎。下线者为只有说白或者只有唱词的人物。

有口语对白的人物为丫环、小兵等。这些人物只有对白，没有唱词。口语对白共 4488 字，基本为地道的平江方言口语。

6. 分析・考察

本章对剧本的转写内容进行详细分析，找出第 4 章所提问题的答案。

6.1. 人物与语言

关于影戏角色担当与切换，千田大介（2013：76-77）指出皖南皮影戏中，“一人であらゆる役回りを歌う”（一个人要演唱所有角色）。“生、旦、浄、丑：みんな一人で歌う”（生、旦、浄、丑：都由同一个人演唱）。

平江影戏总共只有三个人，需要演出长篇历史故事，应该每个人都需要担任多个角色，那角色切换与人物担当又是如何进行的呢？

结果表明平江影戏也如皖南皮影戏，每一个艺人都要担任多个人物的唱词、说白与对白。艺人并没有各自的固定的人物。据 Lxl 说，每一场戏都是如此，各人的演出角色并不固定。

剧本的分析结果确实如此，除尚未正式拜师的 Dmm 外，三位资深艺人都出演了 7 个人物，还有两个艺人出演同一个人物的现象，并没有固定的搭配与分工。本剧中的艺人出演角色及其语言使用的具体情况如下。

表格 2 人物与语言等

人物	角色	唱词	语言性质	演者	说白/对白	语言性质	演者
徐君美	正生	Xjm_S	文	Lxl	Xjm	文	Lxl
陈兰英	旦	Chly_S	文	Whw	Chly	文	Whw,Lba
许三春	旦	Xsch_S	文	Lba,Lxl	Xsch	文	Lxl,Whw
徐金凤	武生	Xjf_S	文	Whw,Lba	Xjf	文	Whw,Lba,Lxl
徐金虎	奶生	Xjh_S	文	Lba	Xjh	文	Lba
陈龙・陈虎	红净・黑净	CHLH_S	文	Whw,Lba,Lxl	CHLH	文	Lxl,Whw,Lba
清风公主	旦	GZH_S	文	MM	GZH	文	Lxl,Lba
送子仙官、渡厄真人		XianG_S	文	Whw	—	—	—
陈阁老		Chgl_S	文	Whw	—	—	—
宋王		—	—	—	SW	文	Whw,Lxl
小兵A	丑	—	—	—	XiaoB__A	白	Lba
小兵B	丑	—	—	—	XiaoB__B	白	Whw
小兵C	丑	—	—	—	XiaoB__C	白	Lxl
丫环		—	—	—	YH	白	Lba

— 表示没有该项

从上表可以看出，Lxl 出演 7 个人物，包括元帅徐君美的所有唱词与说白、元帅二夫人许三春的部分唱腔与说白、反王陈龙的部分唱词与说白、清风公主、大儿子徐金凤、宋王的部分说白以及小兵 C 的对白。

Whw 出演 7 个人，包括元帅一夫人陈兰英的部分唱词与说白、反王陈龙的部分唱词与说白，元帅二夫人许三春的部分说白、送子仙官的说白、大儿子徐金凤的部分唱词与说白、宋王的部分说白以及小兵 B 的对白。

Lba 出演 7 个人物，包括元帅二夫人许三春的部分唱词、一夫人陈兰英的部分说白、二儿子徐金虎的所有唱词与说白、清风公主的部分说白、反王陈虎的唱词与说白以及小兵 A 与丫环的所有说白。

如前所述，平江影戏所使用的语言可以分为三个部分，即唱词、说白、对白部分。从剧本的转写文本来看，唱词部分为书面语言。基本利用平江方言的文读音，但有一小部分字的发音有例外，如“大”tɑ55、“江”kioŋ33 等，平江的发音为 thai22 与 koŋ33。

说白部分基本利用平江方言的文读音，但有一小部分字的发音有例外。如万岁的“岁”sai55。大人的“大”tɑ55，与平江的发音 si55、thai22 有差别。或许这就是余剑鸣（2011）所说似是而非的湖北话的原因。

对白部分基本利用平江方言的口语。使用角色为丫环、小兵等人。这些人物没有唱词，只有对白。

对话的场面分三种，高地位的人对高地位的人，如徐君美夫妻的对话为文言对白。低地位对低地位如小兵之间使用方言口语对白。两种地位之间的人的对话，如元帅夫人陈兰英与小兵、元帅徐君美与丫环，基本上各自利用各自的语言，并没有两种文体相混的情况，只是有时候低地位的人会利用文白异读故意逗趣。

以下例句只对地道的方言口语对白附加普通话的译文。译文加括号放在例句后边或下边。言及的问题之处加下线表示。唱词中的加音字与拖音及人称代名词采用上标形式。例句采用统一的数字号码。例句后的字母表示演出人员与剧中人物（参考表格 1 与表格 2）。

剧中不同的人物会使用不同的语言，比如同样表示“来了”的意思，使用方言口语的丫环与使用文言的元帅及夫人就用了完全不同的说法。元帅徐君美的唱词与说白、元帅夫人（陈兰英与许三春）的说白都是用的“来了”liau21，丫环则用“来哒”。

1　丫环：来哒，来哒。（来了，来了）
2　陈兰英与许三春：慢步来了欸。
3　徐君美：慢步来了。
4　徐君美唱：阵前哪来了一骑马呢呀诶，
5　空中阿来了陈阁老诶呀诶，

同样的“学了”，元帅徐君美的唱词用文言“学了 liau21”，而小兵 C 则用口语“学哒”。

6　徐君美唱: 我儿诶哦咦唷诶学了阿仙家诶道哦啊诶，
7　XiaoB_C 好哒我伙俚学哒几下咯，（幸亏咱们学了几下的。
8　XiaoB_C 诶，伊番里学哒他咯。（嗯。这阵子学了他的。）

下面先看看一些主要人物的唱词与说白。

- **元帅徐君美的唱词：　文言　表演 Lxl**

表演	人物	唱词	字数与声调
Lxl	Xjm_S	打坐诶府堂我话提起啊呀诶，叫声呢夫人听分啰啊明呢。	7 7，仄平
Lxl	Xjm_S	先指啊江山哪得宁静呢呀诶，谁知阿贼子反朝哦阿廷啰诶。	7 7，仄平
Lxl	Xjm_S	探马不住连声呢报阿呀诶，报与阿老夫得知哦啊情啰诶。	7 7，仄平
Lxl	Xjm_S	奏明啰当今得知诶道阿呀诶，万岁呀命我统雄哦兵呢。	7 7，仄平
Lxl	Xjm_S	几年啰未到阿校场诶走阿呀诶，玲珑铠甲起灰唷诶尘呢。	7 7，仄平
Lxl	Xjm_S	人又老哦血气诶衰啊: 怕难比诶少啊（接唢呐）	6 4,（唢呐）

- **元帅夫人 陈兰英的唱词：文言　表演 Whw**

表演	人物	唱词	字数与声调
Whw	Chly_S	听得啊老爷阿哦啊哦人老时英雄吖在唷啊哦，英雄阿赛过诶旧当啊先啰呃。	9 7，仄平
Whw	Chly_S	圣旨啊哦啊咦唷呃一到时啊如山哪动呃啊哦，哪个诶为臣敢哪逆啰阿君啰呃。	7 7，仄平

Whw	Chly_S	一枪啊哦啊咦啃呃杀进哪番邦啊去啊呀诶，高官呢加入哪徐家呢门啰呃。	7 7，仄平
Whw	Chly_S	两军哪哦啊咦啃呃若有啊不美啊事哦啊呃，你修诶书信我发兵哪： 调兵哪遣哪（接唢呐）	7 7，仄平 3,（唢呐）

- **元帅夫人 许三春的唱词：文言 表演 Lxl、Lba**

表演	人物	唱词	字数与声调
Lxl	Xsch_S	你父诶哦咦带兵哪两军呢去诶呀， 难得取胜回朝哦阿廷啰诶。	7 7，仄平
Lxl	Xsch_S	你大娘诶哦咦啃诶兄长两军呢去哦啊诶， 深陷番营哪难脱啰诶身啰诶。	7 7，仄平
Lxl	Xsch_S	你父诶哦咦啃哦诶修书阿回朝转哪呀诶， 他要诶为娘发救哦诶兵啰诶。	7 7，仄平
Lba	Xsch_S	将身呢哦啊来至诶花园呢里哦阿呀呃，四哦季花草诶看分～明啰呃。	7 7，仄平
Lba	Xsch_S	春有诶哦哦啊蝴蝶阿牡丹戏哦阿呀呃，夏季阿白鹤 阿穿莲哪心啰呃。	7 7，仄平

- **大儿子徐金凤 的唱词：文言 表演 Whw**

表演	人物	唱词	字数与声调
Whw	Xjf_S	又见哪哦呃小姐啊你问名姓呢呀呃，家乡哪名姓表真情啰呃。	7 7，仄平
Whw	Xjf_S	家住哪哦哦呃宾州啊大元府啊呀呃，龙城哪县里啊徐家门啰呃。	7 7，仄平
Whw	Xjf_S	父亲哪哦哦呃有名哪徐君美呢呀呃，母亲哪贤德一夫啊人啰呃。	7 7，仄平
Whw	Xjf_S	要问呢哦哦呃小生哪是非别个啊呀呃，徐金凤吖是我的哦名啰呃。	7 7，仄平
Whw	Xjf_S	父亲哪哦哦呃身陷两军阵呢呀呃，我到啊两军哪救父亲啰呃。	7 7，仄平

- **徐君美（白）：文言 表演 Lxl**

元帅徐君美的对白对夫人与对丫环的口气都一样，使用平江方言文言。

9 来得慌忙啊，何劳二贤妻陈兰英、许三春就迎接不成啦。

10 哈哈，贤夫人啦，听我一言啦～哈

11 丫环哪？只因我在校场操练三天哪再启程，两军交锋啊。你又请出老夫何事啊？

- **反王陈龙的唱词：文言 表演 Whw**

表演	人物	唱词	字数与声调
Whw	ChLH_S	故友哦哦非是别一个啊呀呃，她名字啊叫做是陈兰啰英啰。	7 7，仄平
Whw	ChLH_S	兰英啰哦既是你的呀恩妻子啊呀呃，她家呀后氏啊有何啊人啰诶。	7 7，仄平

- **反王陈龙 （白）：文言 表演 Whw**

12 只因昨晚搭睡三更时偶得一梦啊，梦见一位白发公公哦手执拐杖哦。

- **宋王 白 使用文言 表演 Whw、Lxl**

宋王的对白使用文言，其表演者为 Whw 与 Lxl，两人都用文言对白。

13 Whw 啊爱卿，这等早朝上殿有何本奏啊？

14 Lxl 哈哈卿家，上得殿来啊，孤王表章看得清楚明白，

- **徐家丫环 表演 Lba**

徐家丫环只有对白，对元帅与对元帅夫人说话都一样，使用地道的平江方言口语，语言幽默风趣。

15　伊是我俚许二太夫人哪。我话你三把眼泪四把鼻头，抠哒条裤呢，你呜啊格呜，你做哒么里啊？要生细人啧啊？（这是我们许二太夫人呀。我说你这鼻涕眼泪一大把的，抓着裤子，哼呀哼的，是怎么啦？要生小孩子呀。）

16　丫环妹啧， 箇路硬是上下格里手，我硬不要盅茶久，来啦，搭内里搭拨刺啧样搭你去耧过去。（丫环妹子我啊，这种事可是这一带的行家。我可不要一碗茶的功夫，来吧。上里面去，跟拨刺一样给你挑出来就是啦。）

17　你晓不得，你硬不晓得时，昨夜里你俚许太夫人，肚里痛嗯格痛，麦胯一泻千金格巽卦，你看生个胖胖格男子伢啧。（你知不道，你是真不知道。昨晚上你们许太夫人呀，肚子疼呀疼的，两脚一扒，噼里啪啦！你看就生下了一个胖胖的男孩子。）

- **小兵 A，只有对白 表演 Lba**

这是剧中的丑角，一般用固定的影人“拉厉子”，使用地道的地方口语，出言风趣，出口成章。下面例句中的“郎舅”指男子与其妻子的弟兄的合称。

18　我话你啰，列位啊，抓哒箇个台格诶诶膦手把他拈哒进来，嘿嘿，他阿又是么里扯俚箇一绊，么里亲戚，他俚时，嘿嘿。郎舅。嘿嘿。正阿啧，落我伙营里，安啊哒身哪。

（我说你啊，各位啊。抓着了那个这样的家伙，把他拎了进来。嘿嘿。他们又那么一攀扯，说是什么亲戚，哈哈。原来是郎舅。刚刚在咱们营房里安顿下来了。）

19　嘿，看有么里绳绑啦。一根干薯藤，望搭渠挟啊啦。

（嘿。看有啥绳子可以绑呢？不过就是一根干的红薯藤，看我把它给掐了。）

- **小兵 B，只有对白表演　Lxl、Whw**

两个艺人表演同一个小兵 B，都出言风趣。例中“红烧丸”为平江特色菜，为带甜味汤汁的油炸肉丸子，味道甜而不腻，非常受欢迎。

20　Lxl 黄巴老鼠帮鸡，帮哒进去。（黄鼠狼拉鸡，拉进去。）

21　Whw 拐哒咯诶！你俚伊格红烧丸哟子恁才大个哦？

（哎呀。你们这里的红烧丸怎么做得这么大一个呢？）

- **小兵 C，只有对白 表演 Lxl**

22　悄哒凵眼背里搭我去听下壁来看。（这阵子学了他的，躲在窗户外给我去听墙角去。）

23　气瓣啊哒，气傻啊哒，气肿啊哒。（气倒了，气傻了，气肿了。）

24　同哒你俚徐公子跑哒箇两军么里去救爷哦。他时爷时毛去救，跕落箇山上耍妹细得去哒。

（跟着你们徐公子跑到两军那里，什么去救他爸呀？他呀自个儿爸爸倒是没去救，跑那山上跟女孩子玩儿去了。）

6.2. 语言特征

本节的语言特征来自剧中的地道的平江口语对白。短短 4400 字的对白就隐藏了如此多的笑料，可以看出影戏的语言确实如余剑鸣（2011）所说幽默风趣。分类也按余剑鸣（2011）的五种手法进行。本文总结的幽默风趣语料与余剑鸣（2011）的对比如下。

表格 3 语言特征对比

余剑鸣（2011），译文为笔者所加		本文	
巧用押韵	拿一根绳，tiā哒嗯咯个银（拿一根绳绑住你这个人）		牛马四只脚，只抓一对角。
	拿一根索，tiā哒嗯咯双脚。（拿一根索绑住你的双脚）		为人莫当兵，当兵犯走心。
不符逻辑	舀一调羹水放到调羹里浸死他（舀一汤勺水放到汤勺里淹死他）		打起时冬水田里灰尘只舞啊～
故意错乱	八月十五是清明，五月初五过重阳		七年格崽哩，映哒八年格牛
谐音逗趣	书生→猪根、姑娘→枯糖	同/近音换字	来了 liau21→来尿 niau22（尿裤子）
			公主→公猪、口令→狗凌
			讲→颈、拜堂成亲→拜年成青
		近音/形换词	斗口里(人用的出口)→狗眼里（狗的出口）、拜堂→拜年、擤什么→姓什么
		近类/意换词	绊马索→绊牛索、就地铺砖→就地铺泥
歪改词义	在下叫鸡公生蛋，是个公子	—	—
—	—	打乱词序	你晓不得，你硬不晓得时。（你知不道，你真的不知道啊。）
—	—	制造包袱	姓塌，叫场伢啧→塌场（失败）
—	—	真实属性	虹桥伢啧、打声、红佬
	— 表示没有		

6.2.1. 巧用押韵

以下用例来自地位低的丫环与小兵的对白，这些对白都为地道的方言口语。每一句都幽默风趣。

25 WhwXiaoB_B 哟子把只灶打落厨房里哦？（怎么把灶打在厨房里呢？）

Lxl XiaoB_C 你俚是厨灶厨房打哒灶里咯哦？（你们是厨房打在灶里的吗？）

26 WhwXiaoB_B 你莫搞哒箇格人多莽胜格地方打啥。（你别在人这么多的地方打我啊。）

27 Whw XiaoB_B 日里打哒白打哒，夜里打哒黑打哒。（白天打了白打了，晚上打了黑打了。）

28 Whw XiaoB_B 箇就头发根深，鼻子就根浅。（那就头发根深，鼻子根浅。）

下面的例子都是利用押韵的俗语，下线处为押韵字。

29 XiaoB_B 拎哒我格头发时犹自可，倘至抠哒我个鼻子时，望恼哒火嘎。

（抓着我的头发犹自可，倘若抓着我的鼻子那就恼火了。）

30 反正牛马四只脚，只抓一对角时阿。（反正牛马四只脚，只抓一对角嘛。）

31 为人莫当兵，当兵犯走心哪。

6.2.2. 幽默风趣

(1) 不符逻辑与故意错乱

下述例子与余剑鸣（2011）的不符逻辑的范畴类似。明明只有 7 岁的孩子，却说放了 8 年的牛。冬天里的水田不可能有灰尘，却偏偏说打仗打得漫天灰尘乱舞。明明灯芯很小，没法用来打人，却说大打用灯芯。这些都是用的夸张手法，因此也可以说不符逻辑。以下逗趣形式都为两人对话中出现，一方故意说错，听错，另一方马上纠正。这样的方式能够尽快让观众客观地理解内容，从而发笑。

32　XiaoB_C 我七年格崽哩，映哒八年格牛啊，九年格崽就打哒十年格流。

（我（可是）七岁的孩子，放了八年的牛，九岁的孩子，打了十年的流。）

33　XiaoB_B 打起时冬水田里灰尘只舞啊～（打得冬天的水田里漫天灰尘飞舞。）

34　大打就用灯芯，小打用棉条。（大打用灯芯，小打用棉条。）

(2) 同近音换字

利用发音相同或相近，巧妙换字逗趣的用例都属于余剑鸣（2011）所说谐音逗趣。本文一并称为同近音换字。其中同音字中包括文读音与白读音相混的情况。

故意把公主 35 说成公猪 33，这是近音逗趣的用例，两个字的声韵相同，声调相近。礼官 kuøn33 说成礼梗 kuɑŋ35 则是同声，韵与调不同。书 ʂy33 说成蛆 tshi33，则只有调同，声韵相异。这些都是利用近音换字达到逗趣目的的用例。

35　XiaoB_B 你话格时箇就下来一只公猪呢。（你说的呀那就是下来了一只公猪呢。）

Chly 公主哦。（公主哦。）

36　Lxl　XiaoB_A 要我伙俚做礼梗啊。（要咱们做礼官啊。）

37　WhwXiaoB_B 有封有封蛆拿哒把你看晓得咯。（有封蛆拿给您看就知道啦。）

Xsch有书在此啊。（有书在此啊。）

把“来了 liau21”故意听成“来尿 niau22”（尿床）看似答非所问，却能触动观众的笑点，达到逗趣目的。

38　WhwChly 来了啊 。（来了。）

Lxl　XiaoB_C 来哒尿，就莫打湿哒裤。（尿床了啊？可别弄湿了裤子。）

文白相混的用例如明明对方说的是说话之意的“讲”kiɑŋ35（文读），却巧妙地切换为脖子意的“颈”kiɑŋ35（白读），并顺水推舟说出一套歇后语。

39　Chly 从头讲来啊～ （从头讲来。）

XiaoB_B 我时颈来脚来肚子一套来，我总搭头不留抿搭身上。

（我可是脖子来脚来肚子一起都来了。我可一点儿都不留在身上。）

(3) 近形/音换词

将没有白读只有文读的“亲”tshin33 故意说成“青”的白读 tshiɑŋ33 也属于文白相混，而把“拜堂”说成“拜年”属于近形换词。

40 Lxl XiaoB_A 如今他俚拜年成青 tshiɑŋ33 哦。（如今他们拜堂成青哦。）
WhwXiaoB_B 拜堂成亲 tshin33 啰。伢啧诶。（拜堂成亲呢。孩子。）

把 “斗口里”（人用的出口）故意说成“狗眼里”（狗的出口）。属于近音换词，
41 WhwXiaoB_B 伊格时走后背狗眼里出来咯。（这可是走后边狗洞里出来的。）
Lxl XiaoB_C 斗口里哦。（斗口里哦）

(4) 近类/意换词

除上述近形/音换词外，还有近类/意换词的用例。下面的例子中把“绊马索”故意说成“绊牛索”，并在对方指出错误之后利用押韵的对偶句 43 指出牛马的共同之处“一对角”机智地度过危机。

42 WhwXiaoB_B 喊么里绊牛索，（叫什么绊牛索）
Chly 绊马索哦。（绊马索哦）
43 WhwXiaoB 反正牛马四只脚，只抓一对角时阿。（反正牛马四只脚，只抓一对角嘛。）

下面的用例中把婚礼时的固定组合“就地铺砖”说成“铺泥”。利用砖与泥的材料相同的共性来更换用词，属于近类换词。

44 Lxl XiaoB_A 就地铺泥。（就地铺泥）
WhwXiaoB_B 铺砖啰。（铺砖哦）

(5) 其他逗趣方式

除上述余剑鸣（2011）中指出过的逗趣方式以外，本研究还有制造包袱、打乱次序、利用演出人员属性来取笑、打趣的用例。

例 45 利用对方的提问“擤ɕin55 什么”，换成韵母与声调相同，声母类似的姓名的“姓 sin55”（近音换字），并巧妙地引导对方跟着自己走，让对方寻问姓名，并得出姓名为“塌场”（糟糕、失败之意）（制造包袱），以达到逗趣目的。这也才有了例 46 对方的自嘲总结。

45 我话你擤么里哦？他话我姓塌呢。（我说你擤什么啊？他说我姓塌呀。）
Lxl XiaoB_C 我话你格下个字呢？叫做场伢啧。（我说你的下一个字呢？叫小场啊。）

46 世人到外头毛塌过场啊，怕到你手里塌哒场。
（一辈子没在外面失败过，难道还会在你手里失败么？！）

另外还有故意打乱次序逗趣的情况。把“不晓得”（不知道）说成“晓不得”（知不道）。

47 Lba YH 你晓不得，你硬不晓得时。（你知不道，你真的不知道啊。）

下面的用例为利用演出人员属性打趣的用例。剧中的小兵 C 的表演者 Lxl 为平江虹桥人，对本地平江人来说，虹桥人说话“打声”（说话不是本地口音）。从地势上来讲，平江虹桥在山里面为“上边”，而当天晚上唱戏的地方在三墩乡，属于虹桥的下边。所以有“虹桥人打声，虹桥伢啧、下里”（虹桥人有口音、虹桥孩子、下面）之类的说法。小兵 B 的表演者名叫吴红

卫，所以小兵 C 才说“像那个红佬”（名字叫红的那个人）一样。这种利用艺人的真实属性逗趣的方式更能引起听戏人的共鸣。

48　XiaoB_B 你俚虹桥人有吖打声啦，只过时，（你们虹桥人有点口音嘛，不就是，）

49　XiaoB_B 你个虹桥伢啧，跕哒下里啊。你才，才，近欠啦。才近欠。哈。

（你一个虹桥孩子，在我们下边，你这么，这么，淘气啊。这么淘气。哈。）

50　XiaoB_C 岔诶箇个红佬样咯。（就像那个红（卫）一样的。）

51　XiaoB_B 明明我去平江，把我指放哒箇巴陵哈啊。（明明我要去平江，却把我指向了巴陵。）

6.2.3. 文言白用

小兵与丫环使用的非常地道的方言口语对白中，出现了一个文言词。本剧中地位低的人在对地位高的人说的第一句话中都出现了“有请”一词。如下所示，这是三个艺人分别作为丫环和小兵时所使用的少见的文言词。

- 小兵对城门官

52　Lba　All　箇内里格大人老人家有请快来快来。（这里面的大人，您赶紧来吧）

- 丫环对元帅

53　Lba　YH　有请我俚大人元帅，（有请元帅大人）

- 小兵对元帅夫人

54　WhwXiaoB_B 诶。内面有请太夫人，奶太夫人啦。（有请元帅夫人啦）

55　Lxl　XiaoB_C 有请我俚陈氏太夫人快来格快来快来。（有请陈氏夫人赶紧来啦）

56　WhwXiaoB_B 有请我俚啊奶太夫人啰！（有请元帅夫人啦）

6.3．唱词特征与押韵

本节对平江影戏的唱词的形式方面的特征与押韵字与实际演唱时的变韵情况进行分析。

6.3.1. 唱词特征

古屋昭弘（2001：101）指出乐亭皮影《百寿图》唱词“同じ韻類（ここでは江宕）に属する上去声と平声の字が交互に使われている。同様の押韻法は京劇にも見ることができる”（同属于江宕的去声字与平声字交替使用。同样的押韵法也见于京剧）。

余剑鸣总结了平江影戏的唱词特征“唢呐腔多为一句七字，尾音押韵分仄起平落，唱的本地语言”（余剑鸣 2011：10）。笔者分析的演出剧本也是如此，唱词一般为两句七字，仄起平落。但一般只遵守声调即上仄下平规则，至于两个字之间的韵类，却没有讲究。可以同韵，亦可以不同韵。笔者采访过几位影戏艺人，均说只需要遵守“仄起平落”就可以。下面为影戏中的有名片段“游园”的唱词，这里用的尾音字，“闷-心、里-明、戏-心、采-梅、有-年”都遵守“仄起平落”这个规则，并不全属于同一个韵类。影戏唱词一般两句为一套，一般模式为前句“仄声-呀诶，后句为-n 啰诶”。

奴在呢哦啊绣房啊心忧诶闷啰阿呀诶，要到诶花园散忧哦心哪:两足诶连呢（接唢呐）
将身呢哦啊来至诶花园呢里哦阿呀呃，四哦季花草诶看分～明啰呃。
春有诶哦哦啊蝴蝶阿牡丹戏哦阿呀呃，夏季阿白鹤 阿穿莲哪心啰呃。
秋有诶哦哦啊糖蜂把蜜呢采啰呀呃，冬有诶喜鹊诶吵寒呢梅呀：是花呢流诶（接唢呐）
花开哦哦啊花谢来年年呢有啰啊呃，人老诶何曾呢转少诶年哪：水流阿东呃（接唢呐）

余剑鸣（2011：10）还总结了如下所示的影戏的唱词模式。

唱词为上下句，每句一般七个字，结尾句用三字导入唢呐过门。基本模式为:
一二（哦一喂） 三四五六（呃）七（哟），
鼓板敲击过门;
七六五四三二（呃） 一（呀哦），
鼓板敲击过门;
……，
……，一二二（罗）啊……

余剑鸣（2011：10）

从上面的游园唱词亦可以看出，并不是所有的唱词都完全按照上述基本模式进行。前句的三四、五六、七后可以加音，后句的七、七六、五四、三、二、一后面都可以加音。实际上三位艺人的演唱风格与形式也不完全相同。

6.3.2. 押韵与变韵

古屋昭弘（2001：104）研究了民国年间的排印本『燕影絵』（東洋文庫所蔵、全 754 頁）皮影戏的押韵，总结了七条影戏的押韵规则。其中只有第二条“よく使われるのは山咸、江宕、曾梗＝通、臻深（山咸、江宕、曾梗＝通、臻深最常用）”跟本研究所分析的平江影戏剧本《后英雄》唢呐腔唱词的押韵字有所关联。

影戏《后英雄》的押韵与加音统计如表格 4 所示，总共 148 个下句，以 an 结尾的音 109 句，in 结尾的 33 句。有不少字重复出现，如人 14 次、廷 12 次、心 10 次、兵、情 各 9 次。

表格 4 中唢呐腔的所有押韵字根据加音与中原音韵所属韵类进行分类。两句一套的唱词中，后句的押韵字基本上为鼻音韵尾（真文、侵寻、庚青、先天韵）、方言文读音以-n 结尾的字。这些鼻音押韵字在演唱时，会出现变韵的情况。变韵可以分两种情况，三位艺人的唱词中，都出现了变韵例子，其中 Lba 与 Whw 的唱词中，不论结尾为哪个音，都会变为 an。而 Lxl 的唱词只有一部分为此类变韵。以下为实例。按表演者、人物与唱词列举。字后的字母表示实际唱的尾音。

表格 4 押韵与变韵统计

真文韵	出现次数	平江方言文读音	变音
因	2	in	an
斤	2	in	an
婚	1	in	an
根	1	in	an
亲	4	in	an
云	2	ən	an
真	4	ən	an
神	1	ən	an
臣	4	ən	an
身	6	ən	an
人	14	ən	an/a/y
存	1	ən	an
分	4	ən	an
君	3	ən	an
尘	5	ən	an
论	2	ən	an
门	7	ən	an/a
总计	63		

庚青韵	出现次数	平江方言文读音	变音
丁	1	in	in
英	2	in	an/in
迎	1	in	an
行	2	in	an
情	9	in	an/in
星	1	in	in
清	1	in	in
精	1	in	an
廷	12	in	an/in
兵	9	in	in/an
平	1	in	an
名	2	in	an/in
明	6	in	an
睛	1	in	an/in
宁	1	in	an/in
营	1	in	an/in
承	2	ən	an
声	5	ən	an/n
生	1	en	an
能	1	en	an
总计	60		

侵寻韵	出现次数	平江方言文读音	变音
金	1	in	in
音	4	in	in/an
心	10	in	an/in
林	2	in	an/in
临	3	in	in/an
沉	1	ən	an
总计	21		

先天韵	出现次数	平江方言文读音	变音
先	1	iɛn	an
帘	1	iɛn	an
边	2	iɛn	in
穿	1	yan	an
总计	5		

以下按顺序出示实际的唱词与变韵的用例。

(1) 方言文读音（y）ən→an 实际唱音

方言文读音为（y）ən 的尘、门、人、真、深、城、臣等字，实际唱音为 an，也就是说这些押韵字在唱的时候发生了变韵。三位资深艺人都有这个唱法。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Whw	XianG_S	随 带 阿 仙 童 吖 下 凡 啰 阿 尘 啰 呃 。	ən	an
Lba	Xjh_S	梦 见 师 傅 下 红 诶 尘 啰 呃 。	ən	an
Whw	Chly_S	高 官 呢 加 入 啦 徐 家 呢 门 啰 呃 。	ən	an
Lba	ChLH_S	青 龙 啊 宝 剑 呢 挂 营 呢 门 啰 诶 ：	ən	an
Whw	Chly_S	妻 子 非 是 呢 等 啦 闲 啰 啊 人 啰 呃 。	ən	an
Lba	Xjh_S	骂 声 哪 番 贼 不 成 啰 人 啰 呃 。	ən	an

Whw	ChLH_S	万 事 阿 皆 休 阿 不 见 呢 真 罗 诶。	ən	an
Lba	ChLH_S	万 事 啊 皆 休 啊 不 见 罗 真 罗 诶。	ən	an
Lxl	Xjm_S	羊 入 虎 口 阿 难 脱 罗 诶 身 罗 诶。	ən	an
Lba	Xsch_S	雷 光 闪 电 呢 戏 阿 奴 哦 阿 身 罗 呃。	ən	an

以上为不同艺人唱的同一个尾音字。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Whw	Chly_S	哪 个 诶 为 臣 敢 啦 逆 罗 阿 君 罗 呃。	yən	an
Whw	Xjf_S	父 有 阿 难 来 子 担 承 罗 呃。	ən	an
Lxl	Xjm_S	君 不 君 来 阿 臣 不 罗 诶 臣 罗 诶。	ən	an
Lba	Xjh_S	番 营 就 在 眼 前 罗 阿 存 罗 呃。	ən	an
Lxl	Xjm_S	背 转 身 来 自 思 哦 诶 论 罗 诶。	ən	an

(2) 方言文读音 in→an 实际唱音

方言文读音为 in 的兵、明、情、廷、心、因等字，实际唱音也为 an，这些押韵字在唱的时候也统一发生了变韵。三位资深艺人都有这个唱法。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Whw	Chly_S	为 娘 啊 命 儿 诶 去 出 啃 兵 罗 呃	in	an
Lba	Xjf_S	随 我 阿 两 军 呢 做 援 罗 兵 罗 呃。	in	an
Whw	XianG_S	三 哪 美 目 阿 阿 四 啊 聪 吖 明 罗 呃。	in	an
Lba	Xsch_S	四 哦 季 花 草 诶 看 分 嗯 明 罗 呃。	in	an
Whw	ChLH_S	有 个 阿 故 友 你 知 情 不 知 哦 情 罗 呃。	in	an
Lba	Xjh_S	金 虎 不 讲 厄 怎 哪 知 哦 情 罗 呃。	in	an
Whw	ChLH_S	哪 个 啊 跟 你 降 朝 哦 廷 罗 诶。	in	an
Lba	ChLH_S	哪 个 啊 跟 你 诶 降 朝 哦 廷 罗 诶。	in	an
Whw	Chly_S	倒 把 呢 为 娘 放 诶 宽 罗 哦 心 罗 呃。	in	an
Lba	Xsch_S	夏 季 阿 白 鹤 阿 穿 莲 哪 心 罗 呃。	in	an
Lba	Xjf_S	且 听 哪 金 嗯 凤 讲 吖 原 罗 啊 因 罗 呃。	in	an
Whw	Xjf_S	金 凤 吖 上 前 问 原 因 罗 呃。	in	an

以上用例为不同艺人唱的同一个尾音字。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Whw	ChLH_S	她 名 字 啊 叫 做 是 陈 兰 罗 英 罗。	in	an

Whw	Chly_S	家 人 呢 回 来 报 讯 呢 音 啰 呃。	in	an
Whw	ChLH_S	贤 妹 啊 家 中 啊 可 安 宁 啰 诶。	in	an
Lba	Xjh_S	不 久 书 信 到 来 啰 哦 临 啰 诶。	in	an
Lba	Xjh_S	砍 柴 阿 童 子 阿 入 山 呢 林 啰 呃。	in	an
Whw	Chly_S	为 娘 诶 办 酒 诶 作 践 呢 行 啰 呃 。	in	an
Lba	Xjh_S	秤 砣 啰 虽 小 压 千 啰 斤 啰 诶。	in	an
Lba	Xjh_S	吵 闹 诶 我 主 阿 不 太 啰 平 啰 呃。	in	an
Lba	Xjh_S	腾 云 驾 雾 诶 奔 哪 番 啰 哦 营 啰 诶。	in	an

(3) 方言文读音 y/iɛn→an 实际唱音

方言文读音为 iɛn 的边与先字，实际唱音也为 an，这些押韵字在唱的时候也统一发生了变韵。方言文读音 yan 的穿字，没有发生语音变化现象。三个字各一例，为 Whw 所唱。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Whw	Xsch_S	左 边 哪 疼 痛 又 到 右 哦 阿 边 啰 呃。	iɛn	ian
Whw	Chly_S	英 雄 阿 赛 过 诶 旧 当 啊 先 啰 呃。	iɛn	ian
Whw	Xsch_S	丝 鞋 阿 蹬 得 阿 地 皮 阿 穿 啰 呃。	yan	yan

如上所示，基本上后句的尾音字都为平声字，不管本来的发音如何，演唱时都会发生变韵情况，统一以 an 结尾。三位资深艺人都有这个唱法。

除此之外，还有长音化（in 的延长）与鼻音 n 脱落的情况。这是只有 Lxl 的演唱中出现的现象。Lxl 的唱词中除了上述变韵之外，还出现了很多情况。如下所示，以 in 结尾的字只是延长了 in 的音，一部分以 ən 结尾的字则用 a 结束，发生了鼻音脱落。

(4) 长音化：方言文读音 in→in 实际唱音

方言文读音为 **in** 的兵、丁、明、音、心、林等字，Lxl 的实际唱音 in 的延长音，这些押韵字在唱的时候变成了长音。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Lxl	Xjm_S	我 修 阿书 信 哪 你 发 呢 诶 兵 呢。	in	in
Lxl	Xjm_S	家 门 呢 有 幸 添 男 啰 啊 丁 啰 诶。	in	in
Lxl	Xjm_S	叫 声 呢 番 寇 阿 听 分 啰 阿 明 呢。	in	in
Lxl	Xjm_S	无 有 名 姓 怎 知 哦 阿 音 呢。	in	in
Lxl	Xjm_S	大 王 阿 与 她 有 何 哦 情 啰 诶。	in	in
Lxl	Xjm_S	何 劳 阿 眷 舅 挂 在 啃 阿 心 呢。	in	in
Lxl	Xjm_S	独 自 怎 能 成 得 啃 阿 林 呢。	in	in

(5) 变韵加鼻音脱落：方言文读音（y）ən→ɑ 实际唱音

Lxl 的唱词中，方言文读音为（y）ən 的人、门字都唱成了 ɑ。既有变韵，还有鼻音脱落。

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Lxl	Xjm_S	金 鸡 啊 提 醒 梦 中 哦 啊 人 诶。	yən	ɑ
Lxl	Xjm_S	加 官 进 爵 阿 徐 家 唷 诶 门 诶。	ən	ɑ
Lxl	Xjm_S	她父 陈阁老 阿 腰 斩 在 午 城 哦 阿 门 诶。	ən	ɑ

(6) 其他 各 1 例

表演	人物	唱词	方言文读音	实际唱音
Lxl	Xjm_S	关 稀 煞 少 易 成 啰 阿 人 呢。	yən	y
Lxl	Xjm_S	前 派 的 阿 先 祖 阿 请 一 啰 阿 声 呢。	ən	n

同样的“人”字，Lxl 的唱词有 y 和 ɑ。人字唱成 y，韵母脱落，只剩介音。声字唱成 n，出现了元音脱落，只剩鼻音韵尾。至于为何同样的人字会有不同的唱音，对于笔者的询问，演唱者 Lxl 的回答为：并没有太多的规定，可能是根据当时的心情而定。

总而言之 Lxl 的唱词较之 Whw 与 Lba，多了一些花样，有变化。据本人 2024 年 9 月 13 日所述，以这种唱腔结尾的唱法是虹桥、长寿、木瓜、龙门等平江东北乡地区的唱法。从这点看来，Whw 与 Lba 二位不是这些地区的人，因此唱腔不同亦可理解。

7. 结语

本文利用实际演出的平江影戏《后影雄》剧本，对其唱腔、角色转换、语言性质、押韵等进行了分析，得出了如下结论。

资深艺人都需要出演多个人物，没有固定的角色与分工。有时候甚至会出现两三个艺人出演同一个人物的现象。地位低的人物使用地道的平江方言口语，地位高的人物则使用文言对白。两者的对话也未出现文白语体相混的现象。

影戏的人物与语言特征可以概括如下：

- ▶ 影戏的语言包括唱词、文言对白、方言口语对白
- ▶ 对白根据不同人物身份而不同
- ▶ 影戏的语言充分利用方言的魅力。“拉厉子”（小丑）巧妙利用同音谐音字逗趣
- ▶ 利用文白异读，进行同音、近音换字：讲（文读）与颈、青（白读）与亲（文读）、公主→公猪、来了→来尿、书→蛆等

唱词押韵变韵特征如下：

- ▶ 两句一套，七字为基本，只重视声调配合，仄起平落，韵类可同可不同

- ▶ 押韵字多为鼻音韵尾（真文、侵寻、庚青、先天韵）、方言文读音为-n 的字
- ▶ 押韵字在实际演唱时发生语音变化，包括变韵、鼻音脱落与长音化。三位资深艺人的变韵基本上为 an，长音化（in 结尾的字）与鼻音脱落只见于东北乡

今后将对更多的平江影戏剧本进行转写，积累研究资料。对平江各地区的影戏艺人的唱腔等进行分析，找出平江影戏唱腔的客观规律与方言特征。

参考文献

千田大介（2013）「皖南皮影戯考—伝播・変容・特色」『近現代中国の芸能と社会—皮影戯・京劇・説唱』: 65-112. 東京: 好文出版.

古屋昭弘（2001）「押韻から見た説唱文学と皮影戯」平成 9—11 年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号 09610462）『近代中国都市芸能に関する基礎的研究』（科研費研究成果報書）: 96-105.

游汝杰（2006）《地方戏曲音韵研究》北京: 商务印书馆.

余剑鸣（2011）平江县文化广电新闻出版局编平江非物质文化遗产丛书《平江影戏》、湖南.

张盛开（2024） 平江影戏的语言研究，日本中国语学会关东地区 2024 年度第一届例会报告资料.

基金项目等

- ✧ 日本学術振興会科学研究助成金（A21K004760）「中国平江地方における口承文化の保存及び言語学的研究」（中国平江地方口承文化的保存及语言学研究）
- ✧ 汪涵全程资助“湖南方言調查‘響應’项目
- ✧ 教育部人文社科青年基金项目：汨罗江流域方言与《楚辞》“楚语”比较研究 19YJC740008

影戏艺人李喜林为本研究提供了手头的影戏资料，为笔者解疑答惑，并大力支持笔者采录影戏资料，特此致谢。

要旨

平江影絵上演台本の分析

キーワード：口承文化，影絵，演出，台本，言語

平江影絵は湖南省平江県の地方劇であり、独特の楽器チャルメラで伴奏し、歌詞の一部までカバーするのが特徴である。影絵の構成は三部分からなり、「賀戯」（導入部分、めでたい内容で、ミニドラマ）、「正戯」（主要部分、の長い歴史ドラマ）、「耍戯」（エンディング部分、10 分ほどの短い話等）である。一般的には 3 名の影絵芸人で演出するが、楽器の演奏、影絵の操作、歌、セリフなど全員で複数の作業を担当する必要がある。平江影絵においては、さまざまな登場人物の身分に応じて特徴的な歌詞や会話がみられる。

本研究は実際に上演された影絵「后英雄」（フューチャーヒーロー）について分析するものである。この影絵は 2024 年 4 月 9 日に平江県三墩郷城隍廟にて実際に演出されたものの「正戯」部分であり、上演者李喜林が上演現場を Tiktok で生中継し、筆者が携帯電話の Tiktok を利用してスクリーン録画したものである。主要メンバーは男性 3 名で、10 代の頃から影絵を習得し、芸歴が 30 年以上の方々である。

筆者はこの台本の音声を文字に起こし、2024 年 9 月に、上演者であり生中継を行っていた李喜林氏に確認してもらった。本研究はその文字化データを利用し、出演人物と劇中登場人物の役割の切り替え、言語特徴、歌詞の押韻状況などを分析し、下記のことが判明した。

上演者と登場人物の役割の担当は固定しているものではなく、3 名の上演者はそれぞれ 7 人の人物のセリフを担当しており、2 人または 3 人の上演者が同じ登場人物を演じることもあった。本台本の分析から見られた言語的特徴として下記のことがあげられる。

(1) 影絵の言語には三種類のことばがあり、それは歌詞（文語）、高い地位の人物の会話（方言文語）、地位の低い人物の会話（方言口語）である。

(2) セリフは登場人物の身分によって特徴づけられる。地位の低い使用人などは純粋な地元の方言の口語を使用するが、地位の高い将軍などは文語的な地方方言で会話をする。両者の間の会話ではそれぞれのことばスタイルを使用し、会話スタイルの混在は見られなかった。

(3) 影絵の口語には地元方言の魅力が溢れている。特にピエロのような役が同音異義語や文白異読などを巧みに用いてユーモアを生み出している。

(4) 歌詞は 7 文字を基本とした 2 句のセットで、前句が仄声で、後句が平声で終わるという「7、7 仄平」の形である。その規則は声調のみに重点が置かれ、必ずしも同じ韻類である必要はない。

(5) ほとんどの押韻字が真文、侵尋、庚青、先天などの韻に属し、平江方言の文読音が鼻音韻尾-n で終わる。

(6) 後句の平声-n で終わる押韻字が、歌われる時は「変韻」（韻が an になる）を起こす。このほかに、東北郷の李喜林氏の歌では長音化（in で終わる字の一部はそのまま延長）、鼻音の脱落（a、y のみ）などのバリエーションも見られる。

モンゴル語の副動詞に後続する 3 人称所有小詞 n’ について

ナムダグ　ハグバジャブ
（東京外国語大学　博士後期課程）

キーワード：モンゴル語，副動詞，3 人称所有小詞，コーパス，主語

1. はじめに

モンゴル語には 1 人称所有小詞 *min’, maan’* や 2 人称所有小詞 *čin’, tan’* 3 人称所有小詞 *n’* やいった人称所有小詞が存在する。名詞類 (格接尾辞が後続した名詞類) もしくは動詞の連体形に後続することが可能であると指摘されている。ただし、動詞に後続する čin' については十分に論じられていない。

本稿[1]では、現代モンゴル語ハルハ方言における 3 人称所有小詞 *n’* について調査を行い、特にそれが副動詞[2]に後続し、その全体が副動詞的に機能するものについて、その用法の特徴や使用頻度を明らかにすることを目的とする。すなわち「副動詞＋*n’*」の機能と用法，さらにはそれぞれの形式における人称・数の意味の保持の度合いに焦点を当てて考察する。本稿で扱う副動詞接尾辞は、条件① -vAl、継続 -sAAr, 限界 -tAl、即時① -mAgc、直後 -xlAAr、即時② -ngUUt、同時 -ngAA、時間 -xAAr、前提 -mAAžin/mAAž (以下では -mAAžin という形式で代表させる)、時点 -xAd 、条件② -vAAs である。

グロスや日本語訳に関しては、先行研究で記載のあるものは先行研究によるものとし、記載のないものは筆者によるものとする。本稿の構成は次の通りである。まず第 2 節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。第 3 節で調査方法と調査結果、第 4 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究とその問題点

モンゴル語の人称所有小詞に注目したより詳細な研究としては、水野 (1991)、Brosig et al. (2018)、外賀 (2022) などの記述が挙げられる。Brosig et al. (2018) は中央モンゴル語における人称所有小詞を通じて主観的 (subjective) および間主観的 (intersubjective) スタンスの表現を分析している。そして、「min'と tan' に関しては、主に話し手の被所有者に対する感情的評価を表すために使われ、所有格の意味を保持するが、 maan' と čin'は、本来の所有的な意味や感情的な意

[1] 本稿の例文の表記は、モンゴル国のキリル文字による正書法に従い、以下のようにローマ字に転写したものである：a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, е = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, щ= šč, ъ = ”, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja なお n’ は本稿の研究対象そのものであるため、グロスは N’とする。各接尾辞には母音調和による異形態が存在するため、その代表形としてこれを大文字で表記する。本稿のグロスに関しては、断りのない限り筆者によるものとする。

[2] 岡田・向井 (2006) はモンゴル語の副動詞について、文の述語になるのではなく、述語動詞を修飾するための形であるという。さらに、モンゴル語の副動詞の特徴として、主文の述語を修飾する連用節の述語の形を作るが、主文の述語になることができないため、それ自身が時間的意味を表すことができないとしている。

味を捨て、対話者間の共通基盤を作ろうとして、協調的にあるいは一方的に使われることがある」と述べている。一方、外賀 (2022) は 2 人称所有小詞の非所有用法を 3 人称所有小詞の用法と比較しつつ言及した研究であり、2 人称所有小詞は主観的であることを示すために用いられることを主張している。

モンゴル語の人称所有小詞[3]についてこれまで数多くの研究がなされてきたが、副動詞に後続する人称所有小詞についての研究はまだ十分とはいえない。モンゴル語の教科書であるモンゴル国科学アカデミー言語研究科 (1966) (以下では ŠUA (1966) とする)では、モンゴル語について概説的に述べる中で、副動詞に人称所有小詞が後続できるかどうかについて記述している。3 人称所有小詞に注目したより詳細な研究としては、水野 (1991) と橋本 (2006) が挙げられる。前者は *n'* の用法を基にその意味を分類した研究であり、他方、後者は n' におけるトピック標示機能と焦点標示機能についての研究である。それぞれの指摘を以下に適宜要約して示す。

モンゴル語の副動詞に人称所有小詞が後続可能かどうかについての ŠUA (1966) の記述を表 1 にまとめる (＋ は用例あり、NG は用例なし、？ は条件付きで用例あり、＼ は記述なし)。

ŠUA (1966: 169-177) では、副動詞接尾辞の *-ž/č, -AAd, -n* に再帰接尾辞[4]や人称所有小詞が後続することができないとし、その他の副動詞接尾辞 (以下表 1 に示す) の内、過半数の副動詞接尾辞で人称所有小詞を後続することが可能であると述べている。さらに、*-tAl* と *-mAgc* のみについて異主語の場合 *n'* が後続できるとし、同主語の場合は再帰接尾辞を取ることができるという。

表 1: 副動詞に後続する人称所有小詞

副動詞接尾辞 / 後続する形式		-sAAr	-vč	-mAgc	-tAl	-xlAAr	-vAl, -xUi -mAAžin	-ngUUt	-ngAA
再帰接尾辞	-AA	NG		?	?	+	NG	+	NG
3 人称所有小詞	n'	+		?	?	+	+	+	NG
2 人称所有小詞	čin'	+		?	?	+	+	+	NG
1 人称所有小詞	min'	+		?	?	+	+	+	NG

(ŠUA 1966: 169-177) を基に筆者作成

水野 (1991: 48-49) はモンゴル語の人称所有小詞が主語を表す場合として、*n'* が従属節の後に現れ、省略された主語の存在を表す例 (1B) 、「もっと積極的に主節の主語と従属節の主語が違う」ことを表す例 (2) をそれぞれあげている。

(1) A: Profjessor, Galt-yn duul-a-x-yg sons-o-x ix
　　教授 PSN-GEN 歌う-E-PTCP.NPST-ACC 聞く-E-PTCP. NPST 大きい

[3] 水野 (1991) は所属小辞と呼んでいる。
[4] 岡田・向井 (2006) によると、再帰の範疇は、その名詞類に再帰語尾を接続することによって「主語と関係がある」ことを、何も接続しないことによって「主語と関係がない」ことを示すとしている。主語と関係があるため本研究ではデータのみを提示する。

dur-taj=šüü, end baj-g-aa=juu?
好き-PROP=SFP ここに ある-E-PTCP.IPFV=Q
「教授はガルトの歌うのをとても聞きたがっている、ここにきているかい？」

B: Ganc-xan duul-a-**xad=n’** biš=dee.
一-DIM 歌う-E-CVB.TIM=N’ NEG=SFP
「ただ歌だけが好きなわけではないよ。」

(水野 1991: 48-49)

(2) Mažig, čuluu šoroo-n-d dar-a-gd-čix-aad uxaan-güj baj-**xad=n’**
PSN 石 泥-E-DAT 押す-E-PASS-PFV-CVB.PFV 知恵-NEG ある-TIM=N’
ux-a-ž gar-ga-san=biz=dee.
掘る-E-CVB.IPFV 出る-CAUS-PTCP.PST=SFP=SFP
「(その人が) 石や泥に圧しつぶされて意識がなくなった時に、マジグは掘り出せたはずだ。」

(水野 1991: 48-49)

水野 (1991) はさらに、「従属節の主語が明示されている場合、*n’* が後続すると主節と従属節の主語が違うことを示し、従属節の主語が明示されていない場合にはその省略された主語の存在を示しているようであるが現在のところ確実なことは言えない」としている。

橋本 (2006) は、*-xAd* に *n’* が後続する際、行為者標示 (3) として現れることが可能であるとしている。

(3) [Tsetseg-ijg]α ger-t-ee xari-ž yav-a-**xad** [n’]α genet Baatar
ツェツェグ-ACC 家-D/L-REFL 帰る-ICC 行く-EP-TM 3P 偶然 バータル:∅
dajralg-a-žee[5].
出会う-EP-PST
「ツェツェグが自分の家へ帰って行った時、偶然、バータルは(彼女と)出会いました。」

橋本 (2006) は上記の例の場合、*n’* は副詞節の末尾に付き、対格主語 Tsetseg-ijg と連動して「帰っていく」行為の主体を表す。その際、*n’* と対格主語は前方照応的な指示関係にあるが、同一節内というより狭い範囲で成立していると述べている。

上記のようにモンゴル語の 3 人称所有小詞 *n’* についての先行研究は、もっぱら名詞と代名詞に後続した *n’* を対象にした研究であり、副動詞に後続する *n’* に関する詳細な研究はほとんどない。ŠUA (1966) では *n’* が副動詞に後続するかどうかについて述べたが、*n’*

[5] 橋本 (2006) には dajralgažee と記載されているが、筆者の内省ではこのような語はなく、これは単なる間違いで dajraldžee のように書くと考える。

が後続した場合に副動詞の意味に変化が起こるかどうかについてはふれていない。水野 (1991) は *n'* には行為者標示の機能があることを指摘したが、その際 *n'* は必須であるか否か、*n'* が必須である場合どのような機能を果たすかについては何も触れてない。いわゆる 3 人称所有小詞 *n'* が副動詞に後続する場合どのような役割を果たしているかについての研究はほとんど進んでいない。上記を踏まえ、まず副動詞に後続する *n'* の出現頻度を調べ、次に従属節における「副動詞+*n'*」と共起できる主語の人称や主節と従属節の主語の対応関係を明らかにし、最後に副動詞に後続する *n'* の必須性について述べる。

3. 調査

本節では、3.1 節で調査方法、3.2 節で結果について述べる。

3.1 調査方法

本稿ではコーパス調査を行う。本稿の調査で使用したコーパスは、Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスである Mongolian National Corpus (総語数 1,160,000 語) である。Mongolian National Corpus はウェブ上で用例検索可能であり、コーパス検索の際には、各接尾辞の前に * をつけて、例文を抽出する。筆者はモンゴル語ハルハ方言の母語話者であるため、以下では自身の内省により例文の文法的な容認度などを判断する場合がある。必要に応じて筆者自身による作例や Google 検索で収集した例を補足として挙げることもある。その際、母語話者の 2 人に作例を確認してもらい、2 人とも自然な文と判断した例のみ挙げる。協力していただいた母語話者とは、二人ともモンゴル国ウランバートル市出身モンゴル語ハルハ方言母語話者で、一人は 1999 年生まれの女性 N. T. 氏、もう一人は 1967 年生まれの男性 L. M. 氏である。

3.2 調査結果

本節ではコーパス調査の結果について述べる。3.2.1 節で副動詞に後続する *n'* の出現頻度、3.2.2 節で従属節における「副動詞+*n'*」と共起できる人称所有小詞、3.2.3 節で主節と従属節の主語の対応関係、3.2.4 節で副動詞に後続する場合の *n'* の必須性について調査結果を述べる。

3.2.1 副動詞に後続する n'　の出現頻度

本節では *n'* の直前に現れる副動詞接尾辞をコーパスで確認し、その現れ方と用法をみる。コーパスで得られた用例に基づき、「副動詞+*n'*」を副動詞の全用例数で割り、その割合の高い順から低い順に表にまとめる。さらに出現頻度の高い順から実例を挙げて、その副動詞と *n'* の連続のそれぞれが表す意味と機能を確認していく。副動詞接尾辞としては、条件① *-vAl*、継続 *-sAAr,* 限界 *-tAl*、即時① *-mAgc*、直後 *-xlAAr*、即時② *-ngUUt*、同時 *-ngAA*、時間 *-xAAr*、前提 *-mAAžin/mAAž* (以下では *-mAAžin* という形式で代表させる)、時

点 *-xAd*[6]、条件② *-vAAs* を対象に検索を行った。以下の表 2 では、コーパスから抽出したそれぞれの用例の出現頻度を示す。

表 2: 副動詞の全用例に対する副動詞+n’の出現率

後続する形式 / 副動詞接尾辞	**副動詞の全用例数**[7]	-AA	min’	čin’	**n’**	**割合(%)**
-xAd (時点)	**7537**	2826	33	42	**667**	**8.8%**
-xAAr (時間)	**1797**	314	2	5	**133**	**7.4%**
-ngUUt (即時)	**119**	109	0	2	**4**	**3.3%**
-xlAAr (直後)	**42**	17	0	1	**1**	**2.4%**
-tAl (限界)	**3450**	722	3	2	**49**	**1.4%**
-mAgc (即時)	**519**	30	0	0	**5**	**1%**
-vAl (条件)	**3970**	0	0	6	**8**	**0.2%**

表 2 に示したように、副動詞に人称所有小詞が後続することは割合として高くないことが分かる。表の中で、出現頻度の高い組み合わせは *-xAd+n’, xAAr+n’* であり、出現頻度が低い組み合わせは *-ngUUt+n’, -tAl+n’, -xlAAr+n’, -mAgc+n’, -bAl+n’* である。その他の副動詞接尾辞 *-ngAA* (*n’* は後続しないことがすでに先行研究で述べられている)、*-vč, -sAAr, -vAAs, -mAAjin (mAAj)* に関しては、*n’* を後続させた実例をコーパスから抽出することができなかったため、母語話者としての筆者自身の内省も踏まえ、上記の接尾辞に関しては *n’* が後続しにくい副動詞接尾辞であると判断することにした。*-tAl+n’* の組み合わせに関しては、「～なるまで」という意味を表している用例が観察され、この組み合わせが格助詞のように働きをしているように思われる。そのため、以下の例 (4) のような用例を本研究の対象外とする。

(4) Üxr-ijn max-yg duus-**tal=n’** id-e-ž av.
牛-GEN 肉-ACC 終わる-CVB.LMT=N’ 食べる-E-CVB.IPFV もらう.2.IMP
「牛肉が終わるまで食べて。」

3.2.2 従属節における「副動詞+n’ 」と共起できる主語の人称

本節では、副動詞に *n’* の後続した各表現のそれぞれの用例を挙げ、分析を行う。その分析は全て筆者の内省によるものであるが、作例や一部のコーパス用例の許容度に関してはさらに 2 名の母語話者に確認していただいた。なお「作例」や「Google」などの出典が

[6]岡田・向井 (2006) は -xAd について「連用節を作るほとんど固定化した語尾」であるとしている。本稿もこれに従い副動詞接尾辞として扱う。

[7] コーパス自体には名詞、動詞などを区別する機能もあるが、あまりうまく機能していない。副動詞の全用例数に関しては、コーパスで検索する際には、副動詞が接続詞 (例: bol-「なる」+ -xAAr=boloxoor「なので」)として使用されている用例を除外する。ただし、500 例以上の用例が抽出された場合、目視で全て確認することも難しい。そこで最初の 100 例のうち対象となる用例がいくつあるかを調べ、その割合に基づいて全用例数から対象となる用例の数を推定し、概数として示した。

特に示していない例はコーパスから得られたものである。
(＋ は用例あり、？ はコーパスで例は見つかったが、話者は理解可能だが十分に適格とは判断しなかったもの（後述）、NG は用例なし)

表 3: 従属節において副動詞+n’と共起できる主語の人称

副動詞 / ＋n’ 従属節の主語	-xAd+n’	-xAAr+n’	-ngUUt+n’	-tAl+n’	-mAgc+n’	-xlAAr+n’	-vAl+n’
従属節の主語が 1 人称	NG	NG	NG	NG	NG	NG	NG
従属節の主語が 2 人称	？	NG	NG	NG	NG	NG	？
従属節の主語が 3 人称	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋

表 3 に示したように、従属節の主語が 1 人称と 2 人称の場合は副動詞に *n’* が後続しにくいということが分かる。ただし、*-xAd+n’* と *-vAl+n’* の用例は得られたが、コンサルタントは理解可能だが十分に適格であるとは判断していない。その理由は、*-xAd+n’* の 2 例、*-vAl+n’*の 1 例をそれぞれコーパスから抽出したという点では圧倒的に用例が少ないということである。以下でそれぞれの例を示す。

-xAd+n’

(5) Čamajg boo-g-ood ög-ö-**xöd=n’** xičneen övd-ö-ž üjl
2SG.ACC 巻く-E-CVB.PFV あげる-E-CVB.TIM=N’ どんなに 痛む-E-CVB.IPFV 行為
tam-aa edel-ž baj-san=min’ jer öčüüxen
地獄-REFL 使用する-CVB.IPFV ある-PTCP.PST=1SG.POSS まったく 小さい
tödij=č bod-o-gd-o-x-güj...
それほど=EMPH 考える-E-PASS-E-PTCP.NPST-NEG
「あなたが巻いてくれると、（別の人が巻いた時に）どんなに痛くて大変だったかということも少しも思い出さない...」(Google)

(6) Minij zarc bol! Čamajg sajn böx bol-o-**xod=n’** tus dem
1SG.GEN 使用人 なる.2.IMP 2SG.ACC 良い 相撲取り なる-E-CVB.TIM=N’ 援助 応援
bol-ž, eceg-tej=čin’ cug težee-x bol-no!
なる-CVB.IPFV 父-COM=2SG.POSS 一緒 養う-PTCP.NPST なる-IND.FUT
「私の使用人になれ！お前が良い相撲取りになるまで応援し、君のお父さんと一緒に養ってあげる。」

-vAl+n’

(7) Teg-e-xleer　　či　　nadad　　unaga　　tat-a-ž　　ög-**völ=n’**
そうする-E-CVB.SUCC　2SG　1SG.DAT　仔馬　　引く-E-CVB.IPFV　くれる-CVB.COND=N’
bi　　čamd　　ajrag　　ög-nö.
1SG　　2SG.DAT　馬乳酒　　あげる-IND.FUT
「そうしたらあなたが仔馬を馬の近くにいさせて、私を手伝ってくれるなら、私はあなたにアイラグをあげる。」

上記の用例に関して、二人のコンサルタントから意見をいただいた。筆者からまず、この用例は自然かどうかを確認し、もし少し曖昧である場合は自然な文に修正していただき、次に副動詞に後続している *n’* を除外した場合の用例を自然であるかどうかを確認した。最初の問題に関して、「これらの用例を理解できなくはないが副動詞に後続する *n’* を *čin’* に換えた方がより自然」、次の問題に関しては「副動詞に後続する *n’* がなくても言える」といったほぼ一致した回答をいただいた。

3.2.3 主節と従属節の主語の対応関係

副動詞に *n’* が後続する場合、主節の主語と従属節の主語の対応関係がどのようであるかを明らかにするため、調査結果を整理し以下の表 4 に示す (従: (従属節の主語)、主: (主節の主語)、1: 1 人称、2: 2 人称、3: 3 人称、○: 可能、△: 曖昧、NG は用例なし、＼: 不可能)。

表 4: 主節と従属節の主語の対応関係

	-xAd+n’	-xAAr+n’	-ngUUt+n’	-mAgc+n’	-xlAAr+n’	-vAl+n’
従［2］:主［1］	△					△
従［2］:主［3］	NG					NG
従［3］:主［1］	○	○	○	○	○	○
従［3］:主［2］	○	○	○	○	○	○
従［3］:主［別の 3 人称］	○	○	○	○	○	○

従属節の主語が 2 人称である場合、3.2.2 節で述べたように十分な用例がないため、判断が付かない。ただし、表 3 で分かるようにコーパスで抽出した用例から観察すると「従［2］:主［1］」(例: 4〜6) のみ可能であるが、従属節の主語が 3 人称である場合、主節の主語がどの人称主語であっても可能であるが、同主語では不可能である。つまり、従属節の主語が 1 人称である用例や「従［2］:主［2］」、「従［3］:主［同じ 3 人称］」の用例は見られなかった。以下で従属節の主語 3 人称である場合の用例を示す。

従［3］:主［1］

(8) Neg ödör Xaliunaa egč-ijg Čuluut gol-yn ereg deer ganc-aar-xan-aa
一　日　PSN　姉-ACC PLN　川-GEN 岸　上　たった一-INS-DIM-REFL
suu-ž　baj-**xad=n'**　bi　oč-loo.
座る-CVB.IPFV ある-CVB.TIM=N' 1SG　行く-IND.PST
「ある日ハリウンお姉さんがチョロート川の岸で一人で座っている時に私は (ハリウンの座っているところへ) 行った。」

(9) ...bjaruu-g　ojrt-ood　ir-e-**xeer=n'**　uxasxij-n
2 歳の牛-ACC 近づく-CVB.PFV 来る-E-PUR=N' 飛び跳ねる-CVB.MOD
süüld-e-ž　bar'-ž　av-aad　tevr-e-n　nuur=luu
尻尾を掴む-E-CVB.IPFV 持つ-CVB.IPFV 取る-CVB.PFV　抱く-E-CVB.MOD　池=DIR
güj-v.
走る-IND.PST
「2 歳の子牛が近づいて来たら、飛び掛かって尻尾を掴みあげて池へ走った。」

(10) Bat-yg　ir-e-**ngüüt=n'**　bi　jav-na.
PSN-ACC　来る-E-CVB.SIM=N' 1SG　行く-IND.FUT
「バトが来たら私はすぐに行く。」 (作例)

(11) Bat-yg　ger-t-ee　ir-**megc=n'**　bi　gar-san.
PSN-ACC　家-DAT-REFL　来る-CVB.IMM=N' 1SG 出る-PTCP.PST
「バトが家に帰って来たらすぐ私が出た。」 (作例)

(12) Sajxan mor'-d nüd-en-d tus-aad　baj-**xlaar=n'**　av-čix-san=jum.
良い　馬-PL　目-E-DAT 当たる-CVB.PFV ある-CVB.SUCC=N' 買う-PFV-PTCP.PST=SFP
「良い馬が目に入っていたので買ったのだ。」

(13) Bat-yg　ir-**tel=n'**　bi　end　xülee-ne.
PSN-ACC 来る-CVB.LMT=N' 1SG ここに 待つ-IND.FUT
「バトが来るまで私はここで待つ。」 (作例)

(14) Bat-yg　ir-**vel=n'**　bi　tos-no.
PSN-ACC　来る-CVB.COND=N' 1SG　迎える-IND.FUT
「バトが来たら私は迎える。」 (作例)

上記の例 (8〜14) は、従属節の主語が 3 人称、主節の主語が 1 人称の用例である。つまり、副動詞接尾辞 *-xAd, -xAAr, -ngUUt, -xlAAr, -tAl, -mAgc, -vAl* に *n'* が後続された「従

［3］:主［1］」の用例を 1 例ずつ示した。

従［3］:主［2］

(15) Bat-yg xono-x gazar-güj sandar-č jav-a-**xad=n’** či
PSN-ACC 泊まる-PTCP.NPST 場所-NEG 慌てる-CVB.IPFV 行く-E-CVB.TIM=N’ 2SG
tusal-san.
手伝う-PTCP.PFV
「バトが泊まる場所がなくて困っていたときにあなたが手伝ってくれた。」 (作例)

(16) Daraa ir-e-**xeer=n’** Či ter Xorloo-g-ijn-d-oo oč-i-ž tugal
後 来る-E-CVB.PUR=N’ 2SG その PSN-E-GEN-DAT-REFL 行く-E-CVB.IPFV 1 歳の牛

bjaruu-gij=n’ ivelge-x-güj=juü
2 歳の牛-ACC=3.POSS 搾る-PTCP.NPST-NEG=Q
「(3 人称の誰かが) また来たら、あなたはホリロの家に行って牛乳を牛から搾ってね。」

(17) Bat-yg ir-e-**ngüüt=n’** či dag-uul-aad jav-aaraj.
PSN-ACC 来る-E-CVB.SIM=N’ 2SG 連れる-CAUS-CVB.PFV 行く-IMP.OPT
「バトが来たらあなたがすぐに連れて行ってください。」 (作例)

(18) Bat-yg ger-t-ee ir-**megc=n’** či gar-aaraj.
PSN-ACC 家-DAT-REFL 来る-CVB.IMM=N’ 2SG 出る-IMP.OPT
「バトが家に来たらすぐあなたが出てください。」 (作例)

(19) Bat-yg ir-e-**xleer=n’** či tos-ooroj.
PSN-ACC 来る-E-CVB.SUCC=N’ 2SG 迎える-IMP.OPT
「バトが来たらあなたが迎えてください。」 (作例)

(20) Bat-yg ir-**tel=n’** či end xülee.
PSN-ACC 来る-CVB.LMT=N’ 2SG ここに 待つ.2.IMP
「バトが来るまであなたがここで待て。」 (作例)

(21) Bat-yg ir-**vel=n’** či tos-ooroj.
PSN-ACC 来る-CVB.COND=N’ 2SG 迎える-IMP.OPT
「バトが来たらあなたが迎えてください。」

上記の例 (15～21) は、従属節の主語が 3 人称、主節の主語が 2 人称の用例である。つまり、副動詞接尾辞 *-xAd, -xAAr, -ngUUt, -xlAAr, -tAl, -mAgc, -vAl* に *n'* が後続された「従[3]:主[2]」の用例を 1 例ずつ示した。

従［3］:主［別の 3 人称の人物］

(22) Itgelt ene xojor zaluu-g suu-**xad=n'** durgüj biš baj-laa.
PSN この 二 若い-ACC 座る-TIM=N' 嫌 NEG ある-IND.PST
「イテゲルトはこの二人が結婚した時、(そのことが)嫌ではなかった。」

(23) Gerel zogs-o-lt-güj ujl-aad baj-**xaar=n'** Erdene nulims-yg=n'
PSN 止まる-E-NMLZ-NEG 泣く-CVB.PFV ある-CVB.PUR=N' PSN 涙-ACC=N'
arč-i-n argad-a-v.
拭く-E-CVB.MOD かわいがる-E-IND.PST
「ゲレルが泣き止まなかったので、エルデネはその涙を拭いてあげた。」

(24) Sul širee ezl-e-**ngüüt=n'** Xišgee jaar-a-n oč-loo.
空の 机 侵略する-E-CVB.SIM=N' PSN 急ぐ-E-CVB.MOD 行く-IND.PST
「空いている机を手に入れたらヒシゲがすぐに急いで行った。」

(25) (Gongor,bagšijg orž irexijn ömnö šireen deer n' očiž suugaad bagšijg duuriaž majaglaž bajgaad)
üüd-eer cuxuj-**magc =n'** god üsr-e-n bajr-an-d-aa
ドア-INS つきでる-CVB.IMM=N' 一気に 跳ぶ-E-CVB.MOD 場所-E-DAT-REFL
oč-i-ž suu-dag zan-taj žaal baj-san=jum.
行く-E-CVB.IPFV 座る-PTCP.HBT 性格-PROP 子供 ある-PTCP.PFV=SFP
「(ゴンゴルは先生が入ってくる前、先生の机の上に座って先生の真似をしたりふざけていたりして、)ドアから入って来ると飛び出て自分の椅子に戻るような子だったの。」

(26) Bat-yg ir-e-**xleer=n'** Bajar tos-ooroj.
PSN-ACC 来る-E-CVB.SUCC=N' PSN 迎える-IMP.OPT
「バトが来たらバヤルが迎えてください。」 (作例)

(27) Bat, Süren xojor exner-ijg majxan-d-aa buc-a-ž or-**tol=n'**
PSN PSN 二 妻-ACC テント-DAT-REFL 戻る-E-CVB.IPFV 入る-CVB.LMT=N'
gor'd-o-n širt-e-ž baj-v.
期待する-E-CVB.MOD 見る-E-CVB.IPFV ある-IND.PST
「バトとスレンの二人は妻がテントに戻るまで、期待して待っていた。」

(28) Xavr-yn xavsarga-n-d gar-san xövč-ijn tüjmer jaax+ijxijn+zuurgüj gazar
春-GEN 嵐-E-DAT 出る-PTCP.PST 森-GEN 火事 あっという間に 土
av-č tal xöndij-n xagd-an-d buu-ž
取る-CVB.IPFV 草原 谷あい-GEN 草-E-DAT 降りる-CVB.IPFV
ir-**vel=n’** xün mal zugtaa-ž zajl-a-x-aas
来る-CVB.COND=N’ 人 家畜 逃げる-CVB.IPFV 逃げる-E-PTCP.NPST-ABL
öör arga-güj.
違う 方法-NEG
「春の嵐のせいで起こった森の火事があっという間に広がって草原にまで降りて来れば、人と家畜は逃げるしかない。」

上記の例 (22～28) は、従属節の主語が 3 人称、主節の主語が別の 3 人称の用例である。つまり、副動詞接尾辞 *-xAd, -xAAr, -ngUUt, -xlAAr, -tAl, -mAgc, -vAl* に *n’* が後続された「従［3］:主［別の 3 人称の人］」の用例を 1 例ずつ示した。

本研究で扱った用例の結果によれば、主節の主語と従属節の主語の対応関係は、副動詞に *n’* が後続される場合は異主語のみ許容されるといえる。

3.2.4 副動詞に後続する *n’* の必須性

抽出した用例を二人のコンサルタントに確認した結果、副動詞に後続する *n’* の必須性に関しては、*-xAAr+n’* の組み合わせ以外の組み合わせは副動詞に *n’* が後続しても、しなくても意味に変化が起こらないという結果になった。一方、*-xAAr+n’* の場合は、主節や従属節の主語が明示されているが、 *n’* が後続した用例も観察された。以下の例 (29～31) 関しては、二人のコンサルタントから *n’* が後続した組み合わせの文が「自然な文である」、*n’* が後続していない場合は「少し物足りない感じがする」という回答をいただいた。

(29) Xüü-g gajx-a-n šagš-i-ž ir-e-**xeer=n’** coož=l=jum
息子-ACC 驚く-E-CVB.MOD 非難する-E-CVB.IPFV 来る-E-CVB.PUR=N’ 鍵=EMPH=SFP
bajx ge-ž bod-ood=l=doo.
だろう という-CVB.IPFV 思う-CVB.PFV=EMPH=SFP
「この子が驚いた顔で来たから鍵なんだなと思ったの。」

(30) ...bjaruu-g ojrt-ood ir-e-**xeer=n’** uxasxij-n
2 歳の牛-ACC 近づく-CVB.PFV 来る-E-PUR=N’ 飛び跳ねる-CVB.MOD
süüld-e-ž bar’-ž av-aad tevr-e-n nuur=luu
尻尾を掴む-E-CVB.IPFV 持つ-CVB.IPFV 取る-CVB.PFV 抱く-E-CVB.MOD 池=DIR
güj-v.
走る-IND.PST
「2 歳の子牛が近づいて来たら、飛び掛かって尻尾を掴みあげて池へ走った。」

(31) Zöögč-ijg　　güj-g-eed　　ir-e-**xeer=n'**　　nileen　cündger　šil-tej
ウェイター-ACC　走る-E-CVB.PFV　来る-E-CVB.PUR=N'　かなり　膨らんだ　瓶-PROP
viski=rüü　　zaa-g-aad...
ウイスキー=DIR　　指す-E-CVB.PFV
「ウェイターが走って来たらかなり膨らんだ瓶のウイスキーを指し...」

4. 結論と今後の課題

3 人称所有小詞 *n'* が副動詞に後続する形式の使用頻度は低いということが分かった。副動詞接尾辞の内、*-xAd, -xAAr, -ngUUt, -mAgc, -xlAAr, -vAl* に *n'* が後続することが可能であることが明らかになった。その内、使用頻度の高い組み合わせは *-xAd+n' ,-xAAr+n'* であり、使用頻度が低い組み合わせは *-ngUUt+n', -mAgc+n', -xlAAr+n', -vAl+n'* である。その他の副動詞接尾辞に関しては、すでに先行研究で述べられている *-ngAA* 以外に *-vč, -sAAr, -vAAs, -mAAjin (mAAj)* に *n'* が後続しにくいということが本研究で明らかになった。

複文における主語の対応については、 *-xAAr+n', -ngUUt+n', -mAgc+n', -xlAAr+n', -tAl+n'* の組み合わせは従属節の主語が 3 人称である場合のみ許容される。*-xAd+n', -vAl+n'* の場合は従属節の主語が 3 人称や 2 人称である用例が抽出できたが、2 人称と共起する用例はコンサルタントからいただいたコメントから見て、若干誤った使用である可能性がある。つまり、*n'* は 3 人称所有を表す機能を保持していると言える。一方、例文 (29～31) は異主語文であるが、*n'* が後続した形式が自然という回答をいただいたため、3 人称所有を表さない用法もある。今回は *n'* の 3 人称所有を表さない用法の条件を明確にすることができなかったため今後の課題とする。

略号一覧

-	suffix boundary	接尾辞境界	FUT	future	未来	PLN	place name	地名
=	clitic boundary	接語境界	GEN	genitive	属格	POSS	possessive	所有
1	1st person	一人称	HBT	habitual	習慣	PROP	proprietive	~持ちの
2	2nd person	二人称	IMM	immediative	即時	PRS	present	現在
3	3rd person	三人称	IMP	imperative	命令	PSN	personal name	人名
ABL	ablative	奪格	IND	indicative	直接法	PST	past	過去
ACC	accusative	対格	INS	instrumental	造格	PTCP	participle	形動詞
CAUS	causative	使役	IPFV	imperfective	不完了	PUR	purpose	目的
COM	comitative	共同格	LMT	limitative	限界	Q	question	疑問
COND	conditional	条件	MOD	modal	非分離	REFL	reflexive	再帰
CVB	converb	副動詞接尾辞	NEG	negative	否定	SFP	sentence final particle	文末小詞
DUR	durative	継続	NMLZ	nominalizer	名詞化	SG	singular	単数
DAT	dative	与格	NPST	non-past	非過去	SIM	simultaneous	同時性

DIM	diminutive	指小辞	OPT	optative	希求	SUCC	successive	直後
DIR	directional	方向格	PASS	passive	受身	TIM	time	時間
E	epenthesis	挿入音	PFV	perfective	完了			
EMPH	emphasis	強調	PL	plural	複数			

参考文献

Brosig, Benjamin & Gegentana & Foong, Ha Yap (2018) Evaluative uses of postnominal possessives in Central Mongolian. Journal of Pragmatics 135: 71-86.

外賀葵 (2022) 「モンゴル語 2 人称所有接語の非所有用法：3 人称所有接語との比較から」日本言語学会第 164 回大会 ワークショップ.

Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. London Oriental and African language library 19. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

橋本邦彦（2006）「モンゴル語 3 人称後接語のトピック標示/焦点標示」『認知科学研究』4: 7-23.

水野正規（1991）「モンゴル語の所属小辞」『日本モンゴル学会紀要』22: 42-56.

岡田和行・向井晋一(2006) 「東外大言語モジュール:モンゴル語文法モジュール (標準コース Lesson 20, Step 1. 重文・連用節と副動詞形 [解説])
https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/courses/c02/lesson20/step1/explanation/040.html

ŠUA (1966) *Orčin cagijn mongol xel züj*. Ulaanbaatar: Ulsyn xevlelijn xereg erxlex xoroo.

山田洋平 (2021)「モンゴル語の動詞接辞 -xAAr」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ.

Mongolian National Corpus. http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/ 最終閲覧日 2022/10/30.

On the 3rd person possessive *n'* following a converb in Mongolian

Lkhagvajav NAMDAG

(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Mongolian, converb, 3rd person possessive, corpus, subject

Khalkha Mongolian has 1st person possessive *min', maan'* and 2nd person possessive *čin', tan'* and 3rd person possessive *n'*. In this paper, focuses on *n'* following converbs, first examining their frequency of occurrence, then clarifying the personalities of subjects that can co-occur with "converb + *n'*" in subordinate clauses and the correspondence between the subject of the main clause and the subject of the subordinate clause, and finally discussing the indispensability of *n'* following a converb. We find that the 3rd person possessive *n'* is used infrequently in the form following a converb. Among the converbial suffixes, it was found that *n'* can follow *-xAd, -xAAr, -ngUUt, -mAgc, -xlAAr,* and *-vAl*. Of these, the most frequently used combinations are *-xAd+n'* and *-xAAr+n'*, while the least frequently used combinations are *-ngUUt+n', -mAgc+n', -xlAAr+n ', -vAl+n'*. As for other converbial suffixes, we can say that *-vč, -sAAr, -vAAs, -mAAjin (mAAj)* and *n'* are also less likely to follow, besides *-ngAA* already mentioned in previous studies.

Regarding subject correspondence in compound clauses, the combinations *-xAAr+n', -ngUUt+n', -mAgc+n', -xlAAr+n',* and *-tAl+n'* are dependent clause is only allowed if the subject of the clause is in the 3rd person. In other words, we can say that n' retains its function of expressing 3rd person possessive.

韓国語の -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する名詞述語について
—— 認識モダリティと証拠性に注目して ——

韓　必南
（東京外国語大学非常勤講師）

キーワード：韓国語，モダリティ，名詞述語，機能動詞，証拠性

1. はじめに

本稿では、現代韓国語における認識モダリティ -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta[1] (〜ようだ/そうだ) に後続する名詞の機能に着目し、これらの名詞の中には、語彙的意味よりも一種の証拠性 (evidentiality) を表すものがあることについて述べ、これらの名詞が -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta による推測判断の主観化や客観化に関与していることを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で背景知識となる先行研究を取り上げる。3 節で問題提起をし、4 節で調査について扱う。調査結果を踏まえ、5 節で分析・考察を行う。最後に 6 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿における例文および先行研究の日本語訳、文字飾りについては、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 先行研究

本稿は -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する名詞述語とその類型の機能に焦点を当てているが、これらは当然先行する -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta の機能と密接な関係にある。2.1 節では -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に関する先行研究を概観し、2.2 節では名詞の文法化として「名詞述語」と「機能動詞」を取り上げ、2.3 では「証拠性の分類」を扱う。

2.1. -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta について

韓国語には推測判断を表す表現に多様な形式が存在する。なかでも -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は頻繁に用いられる形式であり、韓国語学においては主に認識モダリティ[2] の研究で取り上げられてきた。主な研究として、김동욱 (2000)、안주호 (2004)、이기갑 (2006)、손혜옥 (2016a)、이지연 (2018)、명정희 (2018) 等があるが、これらの研究では -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta をはじめとする多様なモダリティ形式を対象に、類似表現と比較しつつ、それぞれの

[1] 韓国語の -(u)n/-nun/-(u)l＋kes＋kathta は「連体形 +形式名詞 (もの/こと)+ 同じだ」で構成された分析的構成で、一般的に、命題内容に対する話者の態度 (推測, 不確実性) を表す認識モダリティ (epistemic modality) として扱われる。モダリティの定義は Lyons (1977: 452) を参考。
辞典における記述では、연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998) は、kathta の項目で -(u)n/nun kes または -(u)l kes に後続し、-ilako sayngkakdoyta (〜と思われる) という意を表すと記しており、국립국어연구원 편 (1999)では、kathta は -n/nun kes、-l/ul kes に後続し、「推測」、「不確実な断定」を表すと記している。

[2] 認識モダリティ (epistemic modality) とは、命題の事実性 (factual status) に対する話者の確信の程度 (the degree of commitment) (Bybee & Fleischman 1995)、または命題の事実性に対する話者の判断の表現 (Palmer 2001: 8) と定義される。

特徴について考察している[3]。손혜옥 (2016a) や 이지연 (2018) は、推測の根拠に関連して、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は根拠の有無に関係なく用いることができることや、他の認識モダリティ形式の場合は 1 人称には使いにくいが、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は 1 人称にも制約なく用いられると言及している。

-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta を含む一連のモダリティ形式の弁別的特徴に関する記述は、韓国語教育学 (김지은 1998、이효정 2003、한정한・정희숙 2011 等) においても多く見られる。김지은 (1998) や 한정한・정희숙 (2011)[4] によると、モダリティ形式の中でも -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は、主語の人称制限がなく、結合する用言の時制にも制約を受けない。

さらに、語用論的な特徴 (이한규 2001、Cha 2016、최윤화 2017、윤주형 2021 等) や、話しことばと書きことばの両方における使用頻繁の高さ (손혜옥 2016b) に注目したものも見られる。これらの研究によると、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は、命題に対する話者の確信度を表す機能のほか、聞き手との相互作用において丁寧さ (politeness) を高めるための語用論的な手段としても用いられる。국립국어원 (2005) では、語用論的な機能に関連し、話者の考えや意見を話す時にも用いられるが、強い主張や断定ではなく、より丁寧に且つ消極的に話しているニュアンスで用いられると説いている。

以上の研究をまとめると、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は、推測の根拠の有無に関係なく使用され、人称制限がなく、用言の時制にも制約がない。さらに丁寧さ (politeness) を高める語用論的な機能を持っている、日常もっとも使用頻度の高い認識モダリティ形式である。

2.2.「名詞述語の文法化」と「機能動詞結合」

「名詞述語の文法化」現象は、従来、韓国語のモダリティの研究や補文名詞構文、コピュラ文の研究で取り上げられてきた (강소영 2002、남길임 2003、안주호 2004 等)。남길임 (2003: 172-180) は、語彙的意味を完全にあるいはほぼ失った名詞が結合した「NP-ita (〜だ)」に対し、「一つの意味単位として、先行の命題に対する話者の内面的態度 (modality) を表す構文」であると述べ、この類の構文を「モーダルな構文」と呼んでいる。そして「モーダルな構文の NP-ita (〜だ)」は、統語的・意味的側面において典型的なコピュラ文とは異なると指摘している。

韓国語と形態的・統語的に類似している日本語の研究では、「名詞述語の文法化」に関する議論がさらに活発に行われてきた (村木 1980、角田 1996、角田 2011、三宅 2005[5]、澤田 2014、Tsunoda 2020 等)。

---

[3] 韓国語のモダリティ研究の初期の研究 (장경희 1985、임동훈 2003、박재연 1999 等) ではモダリティ範疇の下位分類と体系の確立に焦点が当てられ、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta のような分析的構成は考察の対象から外している研究が多かったが、近来の研究では分析的構成を含める傾向にある。

[4] 한정한・정희숙 (2011: 1128) は、類型のモダリティ形式における文型の制約に着目し、-kes kathta は勧誘文と命令文として成立しないと記している。김지은 (1998: 100)、명정희 (2018: 103-104)、손혜옥 (2016a: 98) は、3 人称主語が推測判断の主体として現れる用法 (小説作品における神の視点) について言及し、日常では不自然であると指摘している。

[5] 三宅 (2005) は、日本語における「内容語 (content word)」と「機能語 (function word/grammatical word)」のカテゴリーの連続性について述べている。三宅 (2005: 70-71) によると「文末名詞」として用いられる「種類、性質、感じ、様子、意向、塩梅」などは文法化の過程における中間段階に位置する。また「句相当の表

角田 (2011: 54-58) は、「[節] 名詞 だ」を原型とする構文を「人魚構文 (mermaid construction、体言締め文)」と名付け、この構文の N の位置に現れるものを「実質名詞」と「形式名詞」、「後接語「の」」に分けて提示している。角田 (2011) によると、これらの「N だ」は、意味・形態・統語の面で文法化の過程が進んでおり、現れる名詞の特徴は「モーダルな意味」、「aspectual な意味」、「evidential な意味」といった文法的な意味を表す場合が多い。

Kim (2020) は、「人魚構文」に相当する韓国語の文型、及び「人魚構文」に出現する 80 個の名詞を提示し、分類を行っている。

本稿で扱う -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～ような/そうな N だ) 構文も、角田 (2011) や Tsunoda (2020) の「人魚構文」に該当すると考えられる。Tsunoda (2020) による「人魚構文 (mermaid construction)」のプロトタイプは以下の特徴を持つ。

(a) The structure is as shown in【1】– superficially at least.
(b) The Noun is an independent word (not a clitic) that is a noun.
(c) The subject of the Clause and the Noun are non-coreferential.
(d) The Clause can be used as a sentence by itself.
(e) The Clause is not the subject of the “Noun + Copula”.

Prototype of the mermaid construction (MMC):
【1】 [Clause] Noun Copula.

(Tsunoda 2020: 4)

他方、本稿における -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V は、村木 (1980) のいう「機能動詞結合」が文末述語を成している文型である。村木 (1980: 17-18) は、「においがする、感じがする、連絡をとる」などのような表現に対し、その知的意味を変えずに「におう、感じる、連絡する」などのように入れ替えることが可能であると述べ、名詞部分が実質的 (語彙的) 意味を担っており、動詞部分は本来の実質的意味を失い、形態論的・統語論的役割のみ果たしていると説いている。そして、「実質的意味を名詞に委ね、自らは文法的な機能を果たす動詞」を「機能動詞」と名付け、「機能動詞」を含む一連の連語を形態論的な観点から「機能動詞結合」、意味論的な観点から「機能動詞表現」と呼んでいる。

韓国語の N-ita (～だ) や N+V (機能動詞) が -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する構造においては、現れる名詞と、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta による推測の根拠が密接に関わっていると思われる。例えば、話者が自分自身について推測表現を使う場合と、他の事物について推測表現を使う場合とで現れる名詞の種類や機能に違いが出ることが予測される。それは、第三者について視覚、聴覚などを通して得た情報を根拠に、何らかの推測をするということは

現が、ひとまとまりの助動詞的な表現になっているもの」には「気がする」、「感じがする」などがあるという。

珍しくないのに対して、自分自身について外から得た情報を基に推測するという状況は、通常、考えにくいからである。

本稿では、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta による推測が話者自身についてなのか、あるいは第三者についてなのかに注目しつつ、後続する N-ita (〜だ) や N+V (機能動詞) における名詞の種類と機能について考察する。

2.3. 証拠性 (evidentiality)

「証拠性」は、とりわけ言語類型論の分野で活発に議論されてきた。Aikhenvald (2004: 3-6) によると、証拠性は「情報の出処」を意味し、認識モダリティと密接に関わっている。

Plungian (2001、2010) は、証拠性について類型論的な観点から大きく Direct evidence (直接証拠) と Indirect evidence (関接証拠) に分けて記述している[6]。

Plungian (2010) は、Aikhenvald (2004) の分類に基づきつつ、さらに修正を加えた証拠性の分類を提示している。

Direct/Personal [= Attested, Witnessed, Firsthand, Confirmative]
- Participatory/Endophoric; <Common knowledge>
- Visual（with subtypes）
- Non-visual [=Sensory]

Indirect/Personal
- Inferential (based on observed results)
- Presumptive (based on plausible reasoning; <Common knowledge>

Indirect/Non-Personal [=Secondhand]
- Reported (with subtypes)

(Plungian 2010: 37)

上記の Direct/Personal (直接的/個人的) とは、ある状況を話者が視覚などの感覚を通して認識したことや、ある状況に直接参与していることを前提とする情報獲得のあらゆる手段を表す (Plungian 2010: 29)。話者が「その情報をどのように獲得したか」によって、Direct/Personal

[6] Plungian (2001: 354) の証拠性の分類は次の通りである。以下の P は描写される事態・状況を表す。
A. Direct evidence (including direct access to P)
Visual: 'P, and I see/saw P.'
Sensoric: 'P, and I perceive(d) P' [P may be heard, smelled, tasted, etc.].
Endophoric: 'P, and I feel(felt) P' [P is the speaker's inner state, cf. *I am hungry, I want to sleep, I know the answer*, etc.].
B. Reflected evidence (including direct access to some situation Q related to P)
Synchronous inference: 'P, because I can observe some signs of P' [P at T_0]; cf. *He must be hungry* (because he shows signs of it, etc.)
Retrospective inference: 'P, because I can observe some traces of P' [P before T_0]; cf. *He must have slept there* (because we see his untidy bed, etc.)
Reasoning: 'P, because I know Q, and I know that Q entails P'; cf. *Today there must be a fair in Salzburg* (because I know the routines of this region, etc.)
C. Mediated evidence including neither direct nor reflected access to P)
Quatative: 'P, because I was told that P'; cf. *They say he's leaving; He is said to have left*, etc.

(直接的/個人的) は、さらに Participatory/Endophoric (参与/内省 : 以下、内省と称する)、Visual (視覚)、Non-visual (非視覚) に分けられるが、これらのタイプを文法的に区別するか否かは言語によって異なる。

3. 問題提起

これまでにモダリティと証拠性に関する研究[7] や名詞の文法化に関する研究は、韓国語学の分野で活発に行われてきた。しかし、モダリティ形式に後続する名詞述語の機能に着目した研究は管見の限り見当たらない。

現代韓国語の -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta が使われた例を見ると、この形式が文末に来る以下の (1) のような例もあれば、後ろにさらに名詞が続き、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (〜だ) で終わる文型 (2) や、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V が文末に来る文型 (3) も観察される。なお、(1) から (3) は筆者による作例である。

以下、本稿におけるハングルのローマ字転写は Yale 式に従う。例文における助詞やコピュラの境界は「=」で、語尾は「-」で示す。なお、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は斜体で、N-ita (〜だ) や N+V (機能動詞) は囲んで示す。

(1) -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta
  a. il=i caltoy-*l kes kath-ta*. 仕事がうまくいきそうだ。
  b. Yenghuy=ka kincangha-*n kes kath-ta*. ヨンヒが緊張したようだ。

(2) -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita
  a. il=i caltoy-*l kes kath-un* nukkim=i-ta. 仕事がうまくいきそうな感じだ。
  b. Yenghuy=ka kincangha-*n kes kath-un* elkwul=i-ta. ヨンヒが緊張したような顔だ。

(3) -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V
  a. il=i caltoy-*l kes kath-un* nukkim=i tu-n-ta. 仕事がうまくいきそうな気がする。
  b. Yenghuy=ka kincangha-*n kes kath-un* elkwul=ul ha-ko iss-ta. ヨンヒが緊張したような顔をしている。

上記の (1)a は未来のことに対する話者の推測を述べる文であり、(1)b は何らかの状況から第三者の現在の状態を推し量る文である。(1) は、(2) または (3) に置き換えることが可能であり、一見、意味上の違いがないように見える。しかし、(2) や (3) は、推測判断の拠りどころに関する情報を表している点において (1) と区別される。つまり、これらの文では

[7]「証拠性」をモダリティと区別し独立した文法カテゴリーとみるか否かについては多くの議論があり、韓国語学でも「証拠性」をモダリティの範疇に含める立場と、モダリティと区別し独立した文法カテゴリーとみる立場に分かれる (송재목 2009 を参考)。なお、ある形式が文法カテゴリーとしての「証拠性」を構成する一要素であるか否かを判断する基準については風間 (2022) が参考になる。

-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に連なる名詞を含む述部全体がひとかたまりを成して、命題に対するモーダルな意味を表していると考えられる。

(2) のような、名詞文の形をして動詞文のように機能する構文は世界言語から見て特殊であると言われており、言語類型論的に注目されている[8]。しかし関連する言語現象の韓国語の研究は十分とはいえない。本稿では、認識モダリティ -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta の後ろにさらに名詞述語が続く -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (〜だ) と -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) を検討し、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する名詞述語の種類が限定されること、また文の中で一定の機能的意味を表すことを明らかにする。

4. 調査

4.1 節で調査方法について述べ、4.2 節で調査結果を示す。

4.1. 調査方法

調査にあたって、本研究は共時的に、語彙的意味を持つ名詞が、ある統語的な環境において文法的意味を表す現象に注目している。例えば、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 構文の場合、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta (〜ようだ/そうだ) といった特定のモダリティ表示と N-ita (〜だ) が共起する統語的環境において、N-ita (〜だ) は一種の証拠性を表示すると考えられる。先行研究で取り上げた 남길임 (2003) の「モーダルな構文」は、完全にもしくはほぼ文法化を遂げた名詞に限られるが、本稿は、実質名詞を含む N-ita (〜だ) にも「モーダルな構文」と見做しうるものがあると考える。

-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 構文は、その構造と意味において「人魚構文 (角田 2011; Tsunoda 2020)」の特徴を持つ。しかし、従来の研究では「節」と「名詞だ」の間にモダリティ形式が挟まって現れた構造は扱っていない。本稿では、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita を「人魚構文」の変種として捉える。

次に、日本語の「気がする」に類似した特徴を持つ韓国語の sayngkak-i tulta (思い/気がする) や moyang-ul hata (形をする) 類は、村木 (1980) に倣い「機能動詞結合」と見做す。

また、証拠性の下位分類については、前節で取り上げた Plungian (2010) に従う。

本研究の用例抽出には、『The 21st Century Sejong Corpus (국립국어원 2010)』[9] の小説ジャンル 1,054,885 語節を利用する[10]。出現した -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta の用例は 4,206 例であり、連体形 -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un の用例は 510 例含まれている。510 例のうち -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita や -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V の部分を、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に置き換えても命題の意味が変わらない例は 115 例であった。これらの例を考察の対象とする。

[8] Tsunoda (2020) によれば、世界の 26 言語で類似の構造が観察されている。

[9] 韓国の国立国語院により韓国語の情報化事業として 1998 年~2007 年にかけ構築された 2 億語節規模の韓国語データベースである。本研究では「国立国語院 2010 年修正版」に収録された「想像的テキスト/小説」を資料として利用した。

[10] 손혜옥 (2016b) によると、認識モダリティを表す諸形式の中で -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta は、話しことばと書きことばの両方において出現率が高く、書きことばに限ると小説での出現頻度が圧倒的に高いという。

4.2. 調査結果

調査の結果、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～だ) に当てはまるものは 55 例、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) に当てはまるものは 60 例であり、計 115 例が抽出された。

推測の対象の人称に注目して検討してみると、まず -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 文においては、3 人称について述べている例のほか、2 人称について述べている例、さらに話者が自分自身について述べている 1 人称の例が全て見受けられた。

次に、「機能動詞結合」が文末述部を成している -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V 文においては、3 人称について述べている例と 1 人称について述べている例が見出された。

それぞれの構造の N の位置に現れた名詞に注目して調査結果を示すと、下記の表 1 の通りである。

表 1. 調査結果

	-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～だ)			-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞)	
推測の対象	1 人称	2 人称	3 人称	1 人称	3 人称
用例数	14 例 (25.4%)	2 例 (3.6%)	39 例 (70.9%)	27 例 (45%)	33 例 (55%)
N の位置に現れた名詞	nukkim, (感じ) kipun, (気持ち) simceng (心情)	kipun, (気持ち) kisey (気勢)	nukkim, elkwul, (感じ) (顔) phyoceng, kisey, (表情) (気勢) kkol, mosup, (形) (姿) hyengkwuk, punwiki, (形勢) (雰囲気) nwunchi, ekyang, (気色) (声) malthwu, moksoli, soli (口ぶり) (声) (音)	sayngkak, (思い/考え) nukkim, (感じ) kipun, (気持ち) yeykam (予感)	sayngkak, (思い/考え) nukkim, (感じ) elkwul, (顔) phyoceng, (表情) soli (音)

5. 分析・考察

調査結果を踏まえ、5.1 では -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～だ) について、5.2 では -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) について分析・考察を行う。

以下、考察の際に用いる「推測の主体」とは、ある事態に対して推測といった知覚・認知活動の経験者かつ推測判断を下す者を表す。一方、「推測の対象」とは、推測する内容が「何/誰についてなのか」を表し、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-ta 節の意味的主語に該当する。

5.1. -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 構文

推測の対象が 1 人称である、つまり話者が自分自身について述べている例から見ていく。-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita の例のうち、話者と推測の対象が同一人物である例は 14 例 (25%) 見られる。これらの文における N-ita の N には、kipun (気持ち)、nukkim (感じ)、simceng (心情/心境) のような話者の感情や直感を表す名詞類が現れている。

〈1 人称（推測の対象)〉

(4) na=nun tasi hanpen *koa=ka toyepeli-n kes kath-un* kipun=i-ess-ta. [BREO0313]
私は再び孤児になってしまったような気分だった。

(5) na=nun mues-ey holli-n kes kath-un kipun-i-ess-ko, eieps-key=to *sinpicwuuyca=ka toy-n kes kath-un* kipun=i-ess-ta. [BREO0075] 私は何かに惚れ込まれたかのような気分だったし、あっけないことに神秘主義者にでもなったような気分だった。

(6) ike=n machi ce honcase onthong paykcey phaymang=uy *cecwu=lul tulssu-ko iss-nun kes kath-un* nukkim=i-kwun-yo. [BREO0081] これはまるで私一人で百済の敗亡の呪いをかけられているような感じですね。

(7) machi olaystongan kital-ye o-n nwukwu=lul *manna-n kes kath-un* nukkim=i-ess-ci. [BREO0081] まるで長い間待ってきた誰かに会ったような感じだった。

(8) cichi-l taylo cichy-ese itaylo camtul-myen yengwenhi *kkayena-ci anh-ul kes kath-un* nukkim=ita. [4BE00006] 疲れ果ててこのまま寝込むと永遠に目が覚めなくなりそうな感じだ。

(9) kapcaki makhy-ess-te-n *kwi=ka thui-nun kes kath-un* nukkim=i-ess-ta. [BREO0092]
突然詰まった耳が開くような感じだった。

(10) kasum=i ccic-eci-ko phi=lul *thoha-l kes kath-un* simceng=i-n kes=i-pni-ta. [BREO0321]
胸が張り裂けて血を吐きそうな心情なのです。

上記の例を含め、推測の対象が 1 人称である例は、すべて話者が経験した自身の内面的な心理状態 (inner state) について述べているものであり、<内省 (Endophoric)> に当てはまる。統語的には、(4)、(5) をはじめ、話者 na=nun (私は) が文中に明示された例も少なからず見受けられる。主語が文中に現れていない場合でも na(1st)=nun nay(1st)=ka 〜 -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un nukkim (感じ) / kipun (気分) / simceng (心境)=ita (私は私が〜ような/そうな感じ/気分/心境だ) のように言い替えることが可能である。また、命題内容においては、(6)、(7) のように、その内容が仮想であることが文脈から明らかで、副詞 machi (まるで) との共起がとても自然である。

ところが、以下の例は、小説ジャンルにおけるいわゆる「神の視点」に該当する。「神の視点」では、「彼は (彼-REFL が) ～ような気がした」のような構造で、作家がまるで第三者の人物の感情・心理を経験したかのように述べることが可能である。しかしこれは小説に見られる特殊な用法であり、日常の使用においては、話者が感情の経験者として自身の内面的な心理状態を述べる用法に相当する。

(11) K=nun musun mal=ilato ha-ci anh-ko=nun *kyenti-l swu eps-ul kes kath-un* simceng=i-ess-ta.
[BREO0332] K は何かを言わずにはいられないような心情だった。

(12) Tosik=un hanul=lo *olu-l kes kath-un* kibun=i-ess-ta. [2CE00004]
トシク(人名)は空に飛び上がりそうな気分だった。

次に、推測の対象が 2 人称である例は以下の 2 例のみ見受けられた。N-ita (～だ) の N には、kisey (意気込み/気勢)、kipun (気/気持ち) といった名詞が出現している。

〈2 人称（推測の対象)〉

(13) twu cwumek pulkkun cwi-ko tangcang=ilato eti *chyetuleka-l kes kath-un* kisey=ta, ne?
[BREO0292] 両拳をぐっと握りしめてすぐにでもどこかに攻め込んでいきそうな意気込みだね、あんた？

(14) kuleh-key phyohyenha-myen ney=*ka ancenha-l kes kath-un* kipun=i-ta. [BREO0282]
そのように表現すれば君が安全そうな気がする。

N-ita (～だ) の名詞に注目すると、(13) における kisey (意気込み/気勢) は、聞き手に付随する事柄であり、話者が聞き手の様子について、<視覚 (Visual)> を通して獲得した情報を基に述べている文である。この場合は、*na=nun～kisey=ta (私は～意気込み/気勢だ) のように、話者を文中に提示することはできない。(13) は、興奮している聞き手を攻める、または落ち着かせるための発話であり、聞き手の状態を知覚させようとする語用論的な機能が働いているものと捉えられる。

一方、(14) では kipun (気/気持ち) という話者に付随する心理名詞が現れ、話者の主観的な感情を述べる文であり、<内省 (Endophoric)> に当てはまる。この場合は、na=nun～kipun=ita (私は～気分である/気がする) のように話者を文中に提示することができる。ただし、いずれにしても 2 人称が推測の対象となっている N-ita (～だ) の用例は明らかに少ない。これは、恐らく話者とともに聞き手も発話状況の参加者であることに関連していると思われる。

次に、3 人称が推測の対象となっている例は 39 例 (70%) 見受けられる。以下のようなものが挙げられる。

〈3 人称（推測の対象）〉

(15) ku=nun casin=eykey ku oythwu=ka iss-tanun kes-ul mopsi *calangsuleweha-nun kes kath-un* phyoceng=i-ess-ta. [BREO0332] 彼は自分にそのコートがあるということをとても誇りに思うような表情だった。

(16) ku=nun ku yehayngyong kapang an=ey tul-e iss-nun mulken-tul cwung=ey mues=i-nka=ka *tham=i na-nun kes kath-un* phyoceng=i-ess-ta. [BREO0332] 彼はその旅行用のバッグの中に入っているもののなかで何かが欲しそうな表情だった。

(17) eyllipeyithe=ka ollaka-ko iss-nun tongan K=nun kunye=eykey mues=i-nka com te *mulepo-ko siph-un kes=i iss-nun kes kath-un* elkwul=i-ess-ta. [BREO0332] エレベーターが上がっている間、K は彼女に何かもっと尋ねてみたいことがあるような顔だった。

(18) ku=nun kot nwunmul=ilato *hulli-l kes kath-un* kkol=i-ess-ta. [BREO0313] 彼はすぐに涙でも流すような様子だった。

(19) elkwul=i elmana hemakha-nci ku=uy kwulk-un kopsulmeli=ka hankkepen=ey *kontwuse-l kes kath-un* mosup=i-ess-ta. [BREO0338] 顔がどれほど険悪なのか、彼の太い癖毛が一気に逆立ちそうな姿だった。

(20) hwelssin me-n ccok=ey iss-nun salam=hanthey *malha-nun kes kath-un* ekyang=i-ess-ta. [BREO0340] ずっと遠くにいる人に話しているような口ぶりだった。

(21) ku=ka nay twi=lo tolaw-a tung=ul phengpheng twutulky-etay-ss-ta. aph-ass-ta. machi salay=lul phingkyey=lo *twutulkyephay-nun kes kath-un* hyengkwuk=i-ess-ta. [BREO0313] 彼が私の後ろに回ってきて、背中をパンパン叩きつけた。痛かった。まるで報酬を言い訳に叩いているような形勢だった。

(22) amato ku=nun hakkyo=eyse=to *coh-un sensayngnim=i-l kes kath-un* nukkim=i-ess-ta. [BRJO0443] おそらく彼は学校でも良い先生であるような感じだった。

上記の (15) と (16) では、話者が第三者の phyoceng (表情) という視覚的情報を手掛かりに第三者の状態を描写している。(17) elkwul (顔) や (18) kkol (形/格好) も、文脈から (15)、(16) の phyoceng (表情) と同じような意味で用いられている。(15)～(19) をはじめ、3 人称が推測の対象となっている場合は、話者が phyoceng (表情)、elkwul (顔)、kkol (形/格好)、mosup (姿/容貌) などのような、3 人称の人物に付随する部分や事柄を視覚的に目撃して獲得した情報を述べている、すなわち <視覚 (Direct/Personal－Visual)> 証拠性に該当するものが目立つ。

一方、(20) では N-ita (～だ) の N に ekyang (口ぶり) といった名詞が現れ、話者が <聴覚 (Direct/Personal－Non-Visual)> を通して得た情報を基に、ある状況について述べているということが読み取れる。ところが、例えば (20) の例文で N-ita (～だ) を取り除いて、me-n ccok=ey iss-nun salam=hanthey malha-nun kes kath-ass-ta (遠くにいる人に話しかけているようだった) と表現した場合は、声を聞いていない状況、例えば、身ぶりだけを手掛かりにしている可能性も考えられ、推測の根拠の詳細に関しては不明である。このような -(u)n/-nun/-(u)l kes katha 文と -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 文の違いは、N-ita (～だ) が推測の根拠を明示する機能を担っていることを裏付ける。

前掲の (15)～(21) の場合は、話者が視覚や聴覚を通して獲得した情報について述べているということが N-ita (～だ) によって明確であり、<直接的/個人的 (Direct/Personal)> として捉えられる。それに対して、(22) は <推理 (Inferential based on observed results)> として解釈される。(22) は、話者が旅行先で偶然出会った老紳士と話をすることになったが、彼の笑顔、無邪気な姿、態度、話しぶりなどから良い印象を受けた内容、本人から彼が教授であることを聞いたということが文脈から明らかである。そしてその情報を手掛かりに「おそらく学校でも良い先生であろう」と推理している文である。つまり、話者が 3 人称の人物を経験、観察して得た情報 (老紳士＝無邪気、笑顔など) とその人物から直接聞いた内容 (老紳士＝教授) を基に、「老紳士＝良い先生」という別の局面の推理に至っている。(22) の場合は ku=nun ～ -(u)l kes kath-un nukkim=ita (彼は～ような感じだ) のほか、na=nun ku=ka ～ -(u)l kes kath-un nukkim=ita (私は彼が～ような感じだ) のように、話者 na-nun (私は) を文中に提示することも可能である。しかし、(15)～(21) では話者を提示することはできない。これは nukkim (感じ) の持つ多義性に起因すると考えられる。例えば、nukkim (感じ) は、na-uy nukkim (私が認知する感情・感覚) と ku salam-uy nukkim (その人から受ける印象／その人の持つ雰囲気／その人が認知する感情・感覚) のいずれの意味としても使われる。

次に、推測の対象が 3 人称の文における -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita に現れた名詞を観ると、elkwul (顔色/表情)、kkol (形/姿)、phyoceng (表情) のような「表情・形」類、さらに punwiki (雰囲気)、nwunchi (気色)、hyengkwuk (形勢) のような「様子」類の出現が目立つ。後者の「様子」類は、「表情・形」類に比べ、抽象性が高く、視覚的情報に限らない可能性も考えうるが、出現した用例を見る限りでは、<視覚 (Visual)> 証拠性として働く傾向が顕著である。推測の対象が 2 人称である文でも kisey (気勢) といった <視覚 (Visual)> に該当する例が見受けられる (前掲 (13))。さらに、<非視覚 (Non-visual)> 証拠性に当てはまる名詞として、moksoli (声)、malthwu (口ぶり)、ekyang (声/口ぶり) のような例も見られる。これらはすべて <聴覚 (auditory)> に関連する名詞類である。以上、用例分析に基づいて -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～だ) の N に現れた名詞の種類と機能を、推測の対象の人称によって整理すると表 2 の通りである。

表 2. -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 構文に出現した名詞とその機能

推測の対象	N-ita (～だ)	N-ita (～だ) の機能	
	出現した名詞	証拠性	
1 人称	nukkim (感じ) kipun (気持ち) simceng (心情/心境)	内省 (Endophoric)	直接的/個人的 (Direct/Personal)
2 人称	kipun (気持ち)	内省 (Endophoric)	
	kisey (気勢/意気込み)	視覚 (Visual)	
3 人称	nukkim (感じ)	内省 (Endophoric) 推理 (Inferential)	直接的/個人的 (Direct/Personal) 間接的/個人的 (Indirect/Personal)
	elkwul (顔色/表情) kkol (形/姿/格好) phyoceng (表情) mosup (姿) hyengkwuk (形勢/状況) punwiki (雰囲気) nwunchi (気色/様子) kisey (気勢/意気込み)	視覚 (Visual)	直接的/個人的 (Direct/Personal)
	ekyang (声/口ぶり) soli (音) malthwu (口ぶり) moksoli (声)	聴覚 (auditory)	

推測の対象の人称に注目して N-ita (～だ) の機能を「証拠性」の観点から総合的に見ると、まず、表 2 で示した通り、1 人称 (推測の対象) の文ではすべて話者が自身の内面的な心理状態について述べる文であり、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita の N は <直接的/個人的 (Direct/Personal)－内省 (Endophoric)> 証拠性として働く。これは、自分について外から視覚的に確認して何らかの状況や心理状態を推し量るということは一般的ではないことに起因すると考えられる。つまり、1 人称 (推測の対象) の文における -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita は、自分が感知・経験している抽象的な感情を何かに例え、「まるで～のようだ /(し)そうだ」のように具体化して説明するのが主な用法であるといえる。

一方、3 人称 (推測の対象) の文では、<内省 (Endophoric)>、<推理 (Inferential)>、<視覚 (Visual)>、<非視覚 (Non-visual)－聴覚 (auditory)> といった 4 種類の証拠性が確認される。とりわけ <視覚 (Visual)> の用法が目立つ。これは、前述の 1 人称の場合と対照的に、自分以外の物事を視覚や聴覚を通して察知することが現実の世界で一般的であることから、それが言語現象に反映された結果であると考えられる。

ところが、nukkim (感じ) は、推測の対象が 1 人称である文に限らず、3 人称の文でも少なからず使われている。例えば前掲の (22) のように、第三者から受けた印象を基にほかの知らない局面を導き出す時にも nukkim (感じ) が使われている点が注目される。このような用法は、証拠性の分類から考えると <間接的/個人的 (Indirect/Personal)－推理 (Inferential)> と見做しうる。なお、kipun (気/気持ち) や simceng (心情/心境) のような他の感情名詞は、推測表現において多かれ少なかれ人称制限を受けると思われる。それに対して、nukkim (感じ) の場合は人称制限を受けず、<内省 (Endophoric)> と <推理 (Inferential)> といった両方の証拠性の機能を果たす。これは、nukkim (感じ) の持つ多義性に起因すると考えられる。

次に、2 人称 (推測の対象) の文に関しては、今回収集された用例が少ないためさらなる検討が必要であるものの、<視覚 (Visual)> と <内省 (Endophoric)> に当てはまる例が確認された。

最後に、1 人称・2 人称・3 人称のいずれの場合も -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (～だ) 文の N として出現する名詞類はかなり限られる。

5.2. -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V(機能動詞) 構文

本節では、日本語の「形をする」、「気がする」のように、名詞と助詞とともに文法的な機能を果たす「機能動詞結合」が文末述部を成している -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V 構文について見ていく。出現した用例における推測の対象に注目すると、1 人称の例が 27 例 (45%)、3 人称の例が 33 例 (55%) 見受けられる。まず、推測の対象が 1 人称である例としては次のようなものが挙げられる。

<1 人称 (推測の対象)>

(23) ikos=ey hull-ess-te-n, kuliko cikum=to hulu-ko iss-nun poi-ci anh-nun sikan=ul *kamciha-l swu iss-ul kes kath-un* sayngkak=i tu-n-ta. [BREO0282] ここに流れていた、それから今も流れている見えない時間を感じ取ることができるような気がする。

(24) kulssey-yo, kitaly-e po-nun kes=to *kwaynchanh-ul kes kath-un* sayngkak=i tu-ney-yo. [BREO0314] さあ、待ってみるのも大丈夫そうな気がしますね。

(25) kukes=ul naytuli-nun key *akkaw-un kes kath-un* sayngkak=i tul-eyo. [BREO0340] それを差し上げるのは惜しいような気がします。

(26) eccenci ipen il-un *kule-n sik=ulo chelihay-se=nun an toy-l kes kath-un* nukkim=i tul-ess-ta. [BREO0081] なぜか今回のことはそのように処理してはいけないような気がした。

(27) yeypangcwusa mac-taka ohilye *pyeng=i kelli-l kes kath-un* kipun=i tul-ess-ta. [BREO0321] 予防接種をしたら逆に病気になりそうな気がした。

(28) machi nam=uy ilkicang=ul *hwumchyepo-nun kes kath-un* kipun=i tul-ess-ciman, hwakinha-ko siph-ess-ta. [BREO0303] まるで人の日記帳を盗み見しているような気分だったが、確認したかった。

(29) malk-un kongki=lul masi-myense kenkang=i *coh-aci-l kes kath-un* yeykam=i tul-ess-eyo. [BREO0300] 澄んだ空気を吸いながら、健康によさそうな予感がしました。

1 人称が推測の対象である場合、N+V (機能動詞) の N には、sayngkak (思い/考え)、kipun (気/気持ち)、nukkim (感じ)、yeykam (予感) といった「心理・感情」を表す名詞類が現れ、機能動詞 V には tulta (入る/浮かぶ) が出現した例が目立つ。

一方、 phyoceng (表情) のような視覚的情報に関わる名詞は現れていない。これは、前節で述べた通り、自分の顔を見て、怒っている顔なのか嬉しい表情なのかを視覚的に確認してから自分の内面・心理状態を推し量るということは、通常では考えにくいためであろう。

上記の (28) のように、現実とは異なる内容に例え、自分の心理状態を述べている例も珍しくない。(28) は厳密に言って推測とは意味的に区別しうるものの、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta が「不確実性」を意味するということから推察すると、必ずしも別扱いする必要はないように思われる。さらに、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) 文でも、前節の (11)、(12) のような、小説作品における「神の視点」に該当するものが少なからず見受けられる。次の (30)〜(32) がそれに当てはまる。これらの文では、3 人称の人物が 3 人称 (再帰) の心理状態について述べている。つまり、「推測の主体 (感情・心理の経験者)」と「推測の対象」が一致する。

(30) ku=nun kasum wi=ey mukewu-n kes=ul *ollyenoh-un kes kath-un* nukkim=i tul-ess-ta. [BREO0291] 彼は自分の胸の上に何か重いものを置いておいたような感じがした。

(31) Kyenghwa=nun kule-n mal=ul tut-nun swunkan ilkicang=i tu-n selap=ul *camku-ci anh-ko oychwulha-n kes kath-un* kipun=i tul-ess-ta. [BREO0300] キョンファ（人名）はそれを聴いた瞬間、日記帳が入った引き出しに鍵をかけずに外出したような気がした。

(32) (ku=nun) keki=kkaci ilk-ca muntuk hyeng=i eti=ey iss-ulci *a-l kes kath-un* sayngkak=i tul-ess-ta. [BREO0075] (彼は) そこまで読んだら、ふと、兄がどこにいるのかわかりそうな気がした。

次に、推測の対象が 3 人称となっている -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) の例としては次のようなものが挙げられる。なお、2 人称の例は見受けられない。

〈3 人称（推測の対象）〉

(33) na=nun waynci Tonghyen=i ku saken=ul *oymyenhay-se=nun an toy-l kes kath-un* sayngkak=i tul-ess-ta. [BREO0085] 私はなんとなくドンヒョン (人名) がその事件から目を背けてはいけないような気がした。

(34) ku salam=i ha-nun iyaki=lul tul-e po-nikka wuli nala sinmun=ina pangsong=pota te *caseyha-ko cenghwakha-n kes kath-un* nukkim=i tul-ess-eyo. [BREO0093] その人の話を聴いてみたら、(他の国の新聞や放送が) うちの国の新聞や放送よりもっと詳細かつ正確な気がしました。

(35) kunye=nun kwucheycek=ulo *ihay=ka ka-ci anh-nun kes kath-un* elkwul=ul ha-ko iss-ess-ta. [BREO0332] 彼女は具体的に理解できていないような顔をしていた。

(36) ku=nun nolla-se anc-un chay=lo phelccek *ttwieolu-l kes kath-un* phyoceng=ul ci-ess-ta. [BREO0291] 彼は驚いて座ったままぱっと跳び上がりそうな表情をした。

(37) tasi thang, thang, thang, thang……hako yey=uy ku mangchi=lo mues=ul *twutulki-nun kes kath-un* soli=ka na-ss-ta. [BREO0332] 再びタンタンタンタン……と例のハンマーで何かを叩くような音がした。

上記の (33) は「3 人称の人物」について、(34) は「他の国の新聞や放送」について、それぞれ話者の認知活動 (思い/考え) を述べている文である。機能動詞 V にはいずれも tulta (入る/浮かぶ) が現れている。

ところが、(34) は先行節で「その人の話を聴いてみたら」と述べており、-(u)n/-nun/-(u)l kes katha による判断が、他人から得た情報に基づく推測であるということがわかる。この場合の nukkim=i tulta (気がする) は、<内省 (Endophoric)> というより <推理 (Inferential)> に当てはまる。前節の -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (〜だ) 文でも <推理 (Inferential)> に当てはまる nukkim (感じ) の例が見受けられた。このような現象は、nukkim (感じ) という名詞が主観的な用法 (私が認知した感覚・感情) と客観的な用法 (私/彼が持っている雰囲気や印象など) を併せ持っていること、つまり多義性に起因する。そしてそれが <内省 (Endophoric)> と <推理 (Inferential)> のいずれの証拠性を表すということに反映されていると考えられる。

一方、(35)〜(37) では、それぞれ elkwul (顔)、phyoceng (表情)、soli (音) といった 3 人称に付随する事柄名詞が N+V (機能動詞) の N として現れ、V にはそれぞれ hata (する)、cista (作る)、nata (起こる) が現れている。(35)、(36) は話者が 3 人称の人物の elkwul (顔) や phyoceng (表情) を見て、つまり <視覚 (Visual)> を通して獲得した情報を基に「〜ようだ/〜(し)そうだ」という推測を下している。他方、(37) では soli (音) という名詞でもって、話者が <聴覚 (auditory)> を通して得た情報を基に推測していることが明示されている。(37) ではさらに thang, thang, thang, thang (タンタンタンタン) という擬音語が文中に現れており、

N+V がなくても聴覚に基づく推測であることが読み取れるが、語彙的な要素を含む複数の手段を通して情報源を表すことは言語現象として珍しくない[11]。

なお、疑問文の例は以下の (38) の1例のみ見受けられた。疑問文では、聞き手が sayngkak=i tulta (気がする/思いをする) といった認知活動の経験者となる。

(38)　“cengmal *kule-l kes kath-un* sayngkak=i tul-eyo?” lako toymuleo-myen……　[BREO0314]
「本当にそうなりそうな気がしますか？」と聞き返されたら……

以上の -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V 構文に出現した N+V の種類と機能を表 3 にまとめる。

表 3. -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V 構文に出現した機能動詞結合とその機能

推測の対象	N+V (機能動詞)		「N+V」の機能	
	出現した名詞	機能動詞	証拠性	
1 人称	sayngkak (思い/考え), kipun (気/気持ち), yeykam (予感)	tulta (入る/浮かぶ)	内省 (Endophoric)	直接的/個人的 (Direct/Personal)
	nukkim (感じ)	tulta (入る/浮かぶ), patta (受ける)		
3 人称	sayngkak (思い/考え)	tulta (入る/浮かぶ)	内省 (Endophoric) 推理 (Inferential)	直接的/個人的 (Direct/Personal) 間接的/個人的 (Indirect/Personal)
	nukkim (感じ)	tulta (入る/浮かぶ), patta (受ける), cwuta (与える)		
	elkwul (顔色/表情)	hata (する)	視覚 (Visual)	直接的/個人的 (Direct/Personal)
	phyoceng (表情)	hata (する), cista (作る)		
	soli (音)	nata (起こる)	聴覚 (auditory)	

表 3 を見ると、まず、-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V (機能動詞) 構文に出現した名詞の種類について、前述の -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita (〜だ) 構文に比べ、N+V 構造ではより制限される傾向がある。N-ita (〜だ) 構造では機能動詞結合を成さない名詞、例えば kisey (気勢)、nwunchi (気色)、hyengkwuk (形勢) なども現れる。とりわけ sayngkak (思い/考え) は、機能動詞との結合の度合いが強く、N+V 構造を成すのが一般的であると考えられる。

次に、N+V (機能動詞) の機能に注目すると、1 人称の文では <内省 (Endophoric)> 証拠性の機能を果たしており、3 人称の文では <内省 (Endophoric)>、<推理 (Inferential)>、<視覚 (Visual)>、<聴覚(auditory)> の機能が確認される。多義性を持つ nukkim (感じ)

[11] 韓国語の語彙的証拠性については 송재목 (2018) を参考。

の場合は、<内省 (Endophoric)> と <推理 (Inferential)> のいずれにも用いられる。なお、<内省 (Endophoric)> の文に使われた名詞の中には、<推理 (Inferential)> としては不自然なもの、例えば simceng (心情)、kipun (気持ち) などもある。

また、N+V 構造の機能動詞 V としては、tulta (入る/浮かぶ)、hata (する)、cista (作る)、patta (受ける)、cwuta (与える)、nata (起こる) の使用が確認された。とりわけ tulta (入る/浮かぶ) は <内省 (Endophoric)> に当てはまる名詞類すべてと結合し、最も生産的である。

一方、もっぱら特定の名詞とともに現れる機能動詞結合としては、phyoceng=ul cista (表情を浮かべる)、soli=ka nata (音がする)、nukkim=ul patta (感じを受ける)、nukkim=ul cwuta (感じを与える) が挙げられる。このような現象は、tulta (入る/浮かぶ) や hata (する) に比べ、これらの動詞が語彙的な意味を保っていることに起因すると考えられる。

他方、nukkim (感じ) の場合は、nukkim=i tulta (入る/浮かぶ)、nukkim=ul patta (受ける)、nukkim=ul cwuta (与える) のように、結合する動詞の種類が最も多く、このような傾向からも nukkim (感じ) の多義性が窺われる。

6. おわりに

本稿では、「推測」や「不確実性」を表す韓国語の認識モダリティ -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta が、名詞述語 N-ita (〜だ) や N+V (機能動詞) と複合述語を成す文型、すなわち -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N-ita 構文と -(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un N+V 構文を対象に、N-ita (〜だ) 及び N+V (機能動詞) の機能に焦点を当て、コーパスの用例の分析を行った。以下にその結果をまとめる。

第一に、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する N-ita (〜だ) や N+V (機能動詞) の中には、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta とともに複合述語を成し、機能的意味を表すものがある。両構文の N-ita (〜だ) と N+V (機能動詞) に現れる名詞は、語彙の面で共通しているものが多く、その種類はかなり限られる。出現した名詞は、nukkim (感じ)、kipun (気/気持ち)、sayngkak (思い/考え) のような「感情・心理」に関連する名詞類と、elkwul (顔色/表情)、kkol (形/姿)、phyoceng (表情) などの「外見的な部分・事柄」に関連する名詞類とに大きく分かれる。nukkim (感じ) は、N-ita (〜だ) と N+V (機能動詞) の両方において出現頻度が高いのに対し、sayngkak (思い/考え) は機能動詞との結合力が強く、N+V (tulta 入る/浮かぶ) 構造の方が生産的である。

第二に、上記のような名詞の分類は、推測判断の根拠となる情報をどのように獲得したかといった証拠性と密接に関わっていると思われる。Plungian (2010) の証拠性の分類に従ってコーパスの用例を検討した結果、N-ita (〜だ) と N+V (機能動詞) は、いずれも 1 人称が推測の対象である文、すなわち話者が自分自身について述べる文では、「感情・心理」に関連する名詞類でもって <内省 (Endophoric)> 証拠性の機能を果たす。これは、自分について外から視覚的に確認して何らかの状況や心理状態を推し量るということが一般的ではないことに起因すると考えられる。一方、3 人称の人物が推測の対象である文、すなわち話者が別の人物について述べる文では、<内省 (Endophoric)> に加え、<推理 (Inferential)>、<視覚 (Visual)>、<聴覚 (auditory)> の 4 種類の証拠性として機能することが確認された。とりわけ

<視覚 (Visual)> 証拠性の用法が目立つが、これは、日常で自分以外の物事について視覚を通して察知し、そこから得た情報を基に何らかの判断を述べるということは一般的であり、それが言語現象に反映された結果であると考えられる。

第三に、-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta に後続する N-ita (〜だ) と N+V (機能動詞) で現れた名詞のうち、とりわけ出現頻度の高い名詞としては <内省 (Endophoric)> に当てはまる kipun (気/気持ち)、nukkim (感じ) が挙げられる。ということから、韓国語では話者自身の <内省 (Endophoric)> に基づいた判断を述べる際に、認識モダリティ -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta を頻繁に用いるということが窺われる。

最後に、2 人称が推測の対象である文については、N-ita（〜だ）が 2 人称の文で <視覚 (Visual)> と <内省 (Endophoric)> として機能していることが確認されるが、今回収集された用例の少なさから今後さらなる検討が必要である。

以上、本研究では、認識モダリティに後続する名詞述語に焦点を当て、現代韓国語の -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta 文における証拠性の現れ方の一端について考察した。韓国語のモダリティについては既に多くの研究蓄積があるものの、証拠性については韓国語で義務的な文法範疇ではないことから関連研究は乏しいと思われる。モダリティ構文は当然先行する用言の特徴や時制によって影響を受け、証拠性にも影響を及ぼすと思われるが、今回はモダリティ形式に先行する用言や時制の違いによる特徴まで包括的に扱うことはできなかった。このことを含め、巨視的な観点からの調査及び検討が今後の課題として残っている。

参考文献

Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality.* Oxford University Press.

Bybee, J. L. and S. Fleischman (1995) In J. L. Bybee and S. Fleischman (Eds.). *Modality in Grammar and Discourse*: 1-14. Amsterdam: John Benjamins.

Cha, J. (2016) Discourse Functions of -kes kathata in Korean Conversation. *Language Facts and Perspectives* 37: 253-277.

Choi, Y. (2017) *Grammaticalization and Pragmatic Functions of -KES KATH-*. Unpublished doctoral dissertation. University of Hawai‘i at Mānoa.

Kim, J. (2020) Korean. In Tsunoda, T. (Eds.) *Mermaid Construction: A compound-predicate construction with biclausal appearance*: 283-331, Walter de Gruyter.

Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge University Press.

Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality* (2nd eds.). Cambridge University Press. (Original work published 1986.).

Plungian, V. A. (2001) The place of evidentiality within the universal grammatical space. *Journal* of *Pragmatics* 33(3): 349-357.

Plungian, V. A. (2010) Types of verbal evidential marking: An overview. In G. Diewald & E. Smirnova (Eds) *Linguistic Realization of Evidentiality in European Languages*: 15-18. Walter de Gruyter.

Tsunoda, T. (Eds.) (2020) *Mermaid Construction: A compound-predicate construction with biclausal appearance*: 1-61, Walter de Gruyter.

Youn, J. (2021) A Study of Interactional Functions of -kes kath- Using Corpus Analysis. *Studies in Linguistics* 59: 187-214.

강소영 (2002) “[확연], [당연], [개연]의 양태표지 연구”, 『한국어학』 16: 217-236.

국립국어연구원 편 (1999) 『표준국어대사전』, 서울: 두산동아.

국립국어원 (2005) 『외국인을 위한 한국어 문법 2 용법편』, 서울: 커뮤니케이션북스.

김동욱 (2000) “한국어 추측표현의 의미 차이에 관한 연구”, 『국어학』 35: 171-197.

김지은 (1998) 『우리말 양태용언 구문 연구』, 서울: 한국문화사.

남길임 (2003) “‘이다’ 구문의 한 유형”, 『한글』 259: 171-198.

명정희 (2018) “인식양태 구성들의 비교 연구”, 『한국언어학회 학술대회지』: 99-112.

박재연 (1999) “국어 양태 범주의 확립과 어미의 의미 기술”, 『국어학』 34: 199-225.

손혜옥 (2016a) 『한국어 양태 범주 연구』, 연세대학교 박사학위논문.

손혜옥 (2016b) “한국어 인식양태 표지의 사용 양상”, 『언어사실과 관점』 39: 249-285.

송재목 (2009) “인식양태와 증거성”, 『한국어학』 44: 27-53.

송재목 (2018) “한국어의 어휘적 증거성”, 『언어학』 82: 105-131.

안주호 (2004) “‘N-이다’ 구성의 양태의미 연구”, 『담화와 인지』 11 (1): 149-172.

연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998) 『연세한국어사전』, 서울: 두산동아.

이기갑 (2006) “한국어의 양태 (modality) 표현”, 『담화인지언어학회 학술대회 발표논문집』 27: 67-83.

이지연 (2018) 『한국어 양태 표현 연구』, 연세대학교 박사학위논문.

이한규 (2001) “‘-것 같-’의 화용 의미”, 『텍스트언어학』 10: 269-291.

이효정 (2003) 『한국어 교육을 위한 양태 표현 연구』, 상명대학교 박사학위논문.

임동훈 (2003) “국어 양태 체계의 정립을 위하여”, 『한국어 의미학』 12: 127-153.

장경희 (1985) 『현대국어의 양태범주 연구』, 서울: 탑출판사.

한정한・정희숙 (2011) “추측을 나타내는 양태 표현의 문법 제약”, 『언어』 36 (4): 1117-1142.

風間伸次郎 (2022)「東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究」, 『北方言語研究』 12: 113-145.

澤田浩子 (2014)「「文末名詞文」の構文論的分析から見た分類」, 『日本語学会 2014 年度春季大会予稿集』 79-86.

角田太作 (1996)「体言締め文. 鈴木泰・角田太作(編)」, 『日本語文法の諸問題－高橋太郎先生古希記念論文集－』 139-161. ひつじ書房.

角田太作 (2011)「人魚構文: 日本語学から一般言語学への貢献」, 『国立国語研究所論集 1』 53-75.

三宅知宏 (2005)「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって」,『日本語の研究』1 (3) 61-75.

村木新次郎 (1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」,『国立国語研究所報告』65: 17-75.

調査資料

국립국어원 (2010) *The 21st Century Sejong Corpus*. National Institute of Korean Language.

ABSTRACT

HAN, Pilnam

Modal forms vary from language to language in ways that indicate the degree of conjecture or confidence toward the content of the proposition. This is also true for epistemic modal forms in Korean *-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta* 'it seems' that have come into the spotlight in Korean linguistics because they show variation in accordance with context in language use.

However, there seems to be no research at all that attends to the function of a nominal predicate following *-(u)n/-nun/-(u)l kes kathta* 'it seems'.

Based on the analysis of corpus samples, this research first demonstrates that some nominal predicates (e.g. *nukkim-ita*, *kipun-ita* 'feeling-be', *elkwul-ita* 'face-be', etc.) following *-(u)n/-nun/-(u)l kes kath-un* mainly function as the display of evidentiality, rather than the display of a lexical meaning. This feature of evidentiality clarifies the semantic and functional characteristics as well as the patterns of the nouns in each context.

ソロン語の奪格接辞 -dUxI の機能について

バイカル
(東京外国語大学大学院)

キーワード：ソロン語，ツングース諸語，モンゴル語，奪格

0. はじめに

ソロン語[1]の格接辞には、以下の表 1 に示したものがある。本稿の研究対象である奪格接辞 -dUxI[2] に関する研究は豊富ではなく、先行研究間に相違点がある。本稿の目的は、実際の文例を観察し、ソロン語の奪格接辞 -dUxI の機能を記述することである。

表 1: ソロン語の格体系

格	形態	格	形態
主格	-ø	方位格	-lAA, -dUlAA
属格	-nII	方向格	-tIxI
(定) 対格	-wA/-bA	不定方向格	-tIxAAxI
不定対格	-jA	沿格	-lII, -dUlII
具格	-jI	奪格	-dUxI
与格	-dU	方面奪格	-gIjI

胡・朝克 (1986: 22) に基づき筆者作成

本稿の例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。本稿での形態や例文を示すにあたっては風間 (2018a) の音素表記に従う。出典のない例文は筆者[3]による作例であり、母語話者の確認を得たうえ提示する。

[1] 風間 (2018a: 102) は、「ソロン語は中国内蒙古自治区のホロンバイル地方で話されているツングース諸語の言語である。ソロン語はモンゴル語（及びダグル語）の著しい影響を受けてきた。中国では「エウェンク(鄂温克族)」と呼ばれているが、この鄂温克族はソロン人以外にロシア領に分布するエウェンキー語の方言であるツングース・エウェンク、ヤクート・エウェンクを含んでいる。」と述べている。鄂温克族の人口は 30000 人ぐらいで、そのうちのほとんどはソロン人である。その話者数の把握は難しいが、筆者の感覚では人口の半分以下である。

[2] 大文字は母音調和による異形態があることを示す。実例を見ると、奪格接辞 -dUxI は -tIxI の形式で現れる場合がよく見られる。本稿では、 -dUxI の発音が弱化し、今の日常会話では、-tIxI で発音すると考える。方向格の形式も -tIxI だが、本稿の研究対象は奪格接辞であるため、詳しく論じない。なお、奪格接辞のグロスは-dUxI とする。

[3] 筆者は 1993 年鄂温克族自治旗伊敏ソム生まれのソロン語母語話者である。

1. 先行研究

本節では、本稿に関連する先行研究を取り上げる。1.1 節では、ソロン語の奪格に関する記述を取り上げる。1.2 節では、本稿に関連する他の言語の奪格に関する記述を取り上げる。

1.1. ソロン語の奪格の先行文献

ソロン語の奪格に関する記述は胡・朝克 (1986)、風間 (2018a)、朝克 (1995)、Baek (2023)、Tsumagari (2009) などに見られる。本稿では、胡・朝克 (1986)、Baek (2023) を代表的な先行文献として、それぞれ 1.1.1 節と 1.1.2 節で示す。

1.1.1. 胡・朝克 (1986)

胡・朝克 (1986) はソロン語の文法書である。以下に胡・朝克 (1986: 28) によるソロン語の奪格に関する記述を取り上げる。

胡・朝克 (1986: 28) はソロン語の奪格について動作の起点 (1), (2) を表したり、人間や物の比較対象を指示する (3) と述べている。

(1) tajjaa mʊrɪn-duxɪ tixi-čči bəldər-wi xončo-soo
あの 馬-dUxI 落ちる-PFV.CVB 足-REFL 折る-PFV.PTCP
「彼はあの馬から落ちて、自分の足を折った。」

胡・朝克 (1986: 28)

(2) bəəǰin-duxi xaɪlar ǰakka ǰuur dolbo əmun inigi uli-rən.
北京-dUxI ハイラル まで 二 夜 一 日 行く-IND.PRS.3
「北京からハイラルまで二晩一日で行く。」

胡・朝克 (1986: 28)

(3) əwəŋki bəi-nii doolo-nɪn imin doo-dʊxɪ arʊkkʊn.
エウェンキー 人-GEN 中-POSS.3 イミン 川-dUxI 綺麗
「エウェンキー人の心はイミン川より綺麗だ。」

胡・朝克 (1986: 28)

1.1.2. Baek (2023)

Baek (2023) はソロン語の文法を記述したものであり、ソロン語の奪格について以下のように述べている。

Baek (2023: 215)[4] は「奪格接辞 -dUxI は部分的に与格に対応するものであり、対応するさまざまな機能を持つ。これには、出所の指示 (例: tayyaa mʊrɪn-dʊxɪ「あの馬から」(that.ATTR horse-ABL))、出発点 (例: beejin-duxi xaylar jaxxa「北京からハイラルまで」(Peking-ABL Hailar until))、比較基準 (例: HC exur-ni ulde-nin xʊnɪn-nɪ ulde-duxi antaa-sɪ「牛肉は羊肉よりおいしい」(牛-GEN 肉-PX3 羊-GEN 肉-ABL 味-PROPR)) が含まれる」という。

[4] Baek (2023) におけるソロン語の音素表記とグロスは原文のまま提示する。

1.2. 他の言語における奪格の先行研究

本節では、ソロン語と同じくツングース諸語の I 群 (Ikegami 1974) に属するエウェンキー語とオロチョン語の奪格に関する記述を 1.2.1 節と 1.2.2 節にて取り上げる。ソロン語はモンゴル語の影響を著しく受けてきたと考えられており (風間 2018a: 102)、筆者の内省に基づけばソロン語の奪格接辞はモンゴル語の奪格接辞と似た用法で使われているため、1.2.3.. 節では、清格尔泰 (1991) による内モンゴルのモンゴル語の奪格に関する記述を取り上げる。

1.2.1. Bulatova and Grenoble (1999)

Bulatova and Grenoble (1999) はエウェンキー語の文法記述である。以下に Bulatova and Grenoble (1999: 11) のエウェンキー語の奪格に関する記述を適宜要約する。エウェンキー語の例文の音素表記、グロス、英語訳は原文のまま示す。

Bulatova and Grenoble (1999: 11) では、奪格接辞 -dUk は以下の用法があるという。① ある出来事や行為の起点 (source) を指示するために使用される (4)、② これは時制の意味でも使われ、ある動作が始まる時点を指示する (5)、③ ある物を作るための素材を指示する (6)、④ 比較構造の比較対象を指示する (7)、⑤ ある動作や状態の原因を指示する (8)。

(4) kuŋaka:-r bira-duk əmə-rə-ø.
child-PL river-dUk come-AOR-3PL
'The children came from the river.'

Bulatova and Grenoble (1999: 11)

(5) boloŋi:-duk bi: agi:-la bulta-na:-ŋna-m.
fall-dUk 1SG taiga-LOC hunt-go-A.HAB-1SG
'From the beginning of the fall, I would go to the taiga to hunt.'

Bulatova and Grenoble (1999: 11)

(6) əkin-mi: me:ta-duk kumala:n-ma ulli-rə-n
sister-POSS.1SG fur.from.head-dUk kumalan-ACC sew-AOR-3SG
'My sister sewed a "kumalan" dur rug from the furs of deer heads.'

Bulatova and Grenoble (1999: 11)

(7) murin oron-duk guguda-tmar.
horse deer-dUk tall-COM
'A horse is taller than a deer.'

Bulatova and Grenoble (1999: 11)

(8) tigdə-duk bira mu:də:-rə-n.
rain-dUk river flood-AOR-3SG
'The river flooded from therain.'

Bulatova and Grenoble (1999: 11)

1.2.2. 胡(1986)

胡 (1986) はオロチョン語の文法を記述したものである。胡 (1986: 64) によれば、オロチョン語の奪格 -dUk は「主に動作の起点、比較の対象を表す。それ以外に、物事の由来や原因を表す。」という。

(9) tarıl əri aŋŋa-dʊk oŋto buga-laa nulgi-ʧəə-l
彼ら この 営地-dUk 別 場所-LOC 引っ越しする-PFV.PTCP-3
「彼はこの営地から別の場所に引っ越した。」

胡 (1986: 64)

(10) mʊrın ukur-duk dıgar.
馬 牛-dUk 速い
「馬は牛より速い。」

胡 (1986: 64)

(11) bii ənuki-wi arakı-dʊk baka-ʧa-w.
私 病気-REFL 酒-dUk 得る-IND.PST-1SG
「私の病気の原因はお酒だ。」

胡 (1986: 64)

1.2.3. 清格尔泰 (1991)

清格尔泰 (1991) は内モンゴルのモンゴル語の文法書である。以下に清格尔泰 (1991: 168-171) のモンゴル語の奪格に関する記述を適宜要約して示す。例文のローマ字転写は原文のままである。

一 動作の間接対象を表す。

① 中心に向かっていく動作（「もらう」「学ぶ」「向かう」）の間接対象

tegün-eče abqu 从他要「彼からもらう」

② 中心から離れる動作（「分離する」「回避する」「背く」など）の間接対象

olan tümen-eče salqu 脱离群众「群衆から離れる」

③ 区分、分別などの意味の行為の間接対象

qoni-yi imaγan-ača salγaqu 把绵羊与山羊分开「羊を山羊と区別する」

二 全体と部分の関係を表す。

①「つかむ」の意味を持つ行為の着手部分（全体の一部分）

γar-ača ni bariqu 抓他的手「彼の手をつかむ」

②「使用する」の意味を持つ行為の着手部分（全体の一部分）

budaγan-ača ni idekü 吃饭「ご飯を食べる」

③ ある種の事物の中のある種の事物など

idekü-eče budaγ-a-tai 有吃的粮食「食べるものがある」

三 形容詞及び時間・位置を表す言葉の前に置いて比較対象を表す。

aγulan-ača öndor 比山高「山より高い」

四 行為の行為者、行為の主体を表す。

ᠪᠠᡳᡥᡳ ᠴᠠ ᠠᠴᠠ baγši-ača ǰiγaǰai 老师教的「先生が教えた」

五　行為の原因を表し、連用修飾語となる。

ᠠᡵᡴᡳᠨ ᠴᠠ ᠪᠠᠯᠠᠷᠪᠠ arkin-ača balaraba 因喝酒而神志不清「お酒のせいで意識が朦朧とした」

六　時間の起点、すなわち行為の開始時間を表す。

ᠮᠠᠷᠭᠠᡧᡳ ᠴᠠ ᠰᡠᠷᡠᠯᠴᠠᠨ marγaši-ača surulčan-a 从明天学习「明日から勉強する」

七　空間の起点、すなわち行為が開始する地点、行為が開始する方向を表す。

ᠺᠥᡴᡝᠭᠣᡨᠠ ᠴᠠ ᠢᠷᡝᠵᡝᡳ kökeqota-ača ireǰei 从呼和浩特来「フフホトから来た」

八　行為の意味を持つ形容詞述語の時間的な起点を表す。

ᠨᠠᡳᠮᠠᠨ ᠴᠠ ᠴᠠᠭ ᠰᡠᠷᠠᠯ naiman čaγ-ača qural-tai 从八点有会「8 時から会議がある」

九　行為の意味を持つ形容詞述語が開始した方向を表す。

ᠬᠣᡳᠨ ᠠ ᠴᠠ ᠰᠠᠯᡴᡳᠨ qoin-a-ača salkin-tai 从北边有风「北からの風がある」

1.3.　先行研究のまとめと問題の所在

胡・朝克 (1986: 28) はソロン語の奪格について動作の起点、人間や物の比較対象を指示する用法があるという。一方、Baek (2023) はソロン語の奪格について出所の指示、出発点、比較基準の用法があると述べている。前者の動作の起点、比較対象の指示はそれぞれ後者の出発点、比較基準に対応する。後者はさらに詳しく「出所の指示」「出発点」「比較基準の用法」に分けている。しかし、先行研究のどちらもごく簡略な記述である。そのため、さらに詳しい分析を行い、ソロン語の奪格の機能を確認し、その機能が実現する条件を明らかにする必要がある。

2.　調査方法

本稿では、既存のテキストで簡易コーパスを作り、その中から奪格接辞を含む構文を抽出する。コーパスの実例を観察し、ソロン語における奪格接辞の用法とその用法が実現する条件を分析する。

具体的には、既存のテキストを TXT ファイルに変換し、AntConc で開く。AntConc の検索機能で奪格接辞 -dUxI のあらゆる異形態 *daxɪ, *dəxi, *dɪxɪ, *dixi, *dʊxɪ, *duxi, *dax, *dəx, *dɪx, *dix, *dʊx, *dux, *dxɪ, *dxi, *taxɪ, *təxi, *tɪxɪ, *tɪxɪ, *tʊxɪ, *tuxi, *tax, *təx, *tɪx, *tʊx, *tux, *txi, *txɪ を入力した。検索した結果は 617 例であり、それを EXCEL で整理する。ノイズを除くと、奪格接辞を含むと考えられる例は 266 例であった。コーパスの情報は以下のとおりである。風間・トヤー (2008)、風間 (2018b)、風間 (2020)、風間 (2022)、風間・バイカル (2023)、風間・バイカル (2024) はソロン語母語話者にソロンの文化、生活、民話、伝説を語ってもらい、それを著者が音素表記で記述し、日本語で逐語訳を付したものである。筆者はこれらのテキストを併せて簡易コーパス (単語数約 5 万 8 千) を作り、今回の調査に用いた。

3. 調査結果と分析

本節では、ソロン語の奪格接辞の実際の文例を観察し、筆者の内省による分類を行い、意味・機能を整理する。場合により、筆者が作成した文を提示する。

今回の実際の文例を見ると、奪格接辞の機能は大きく「心理動作の対象の指示」、「部分の指示」、「比較基準の指示」、「動作主の指示」、「起点」と分類でき、「起点」の機能をさらに「空間的起点」、「時間的起点」、「状態変化の起点」、「授受の起点」、「分別の起点」と分けることができる。

3.1. 心理状態の対象の指示

奪格接辞は nəəli-「恐れる」と共起する例文が 2 例あった。(12) では、動作主の奪格接辞のホストである tuulgə「狼」に対する nəəli-「恐れる」という心理状態を表す。この場合奪格接辞は動作主の心理動作の対象を指示していると考えられる。筆者の内省によると、奪格接辞は nəəli-「恐れる」以外に、aljɪ-「恥ずかしがる」、 oolo-「驚く」、baana-「飽きる」と共起できるが、他の心理状態動詞と共起しにくい。

(12) tuulgə-tixi　　nəəli-ji-səə.
　狼-dUxI　　恐れる-PROG-PFV.PTCP
　「狼を恐れていた.」　　風間 (2018b: 87)

3.2. 部分の指示

以下の例文 (13), (14) では、奪格接辞が目的語を示し、「複数の一部分・全体の一部分」を指示すると考えられる。例文 (13) では、「狼が動物全体の尻尾の部分に噛みつくこと」を意味する。例文 (14) では、奪格接辞のホストは dooldɪɪ-「聞く」の形動詞であり、ここでは「聞いたこと」を意味する。この場合、奪格接辞は「聞いたことの一部分」を指示する。したがって、奪格接辞は「具体的なものの一部分」と「抽象的なものの一部分」を表すことができる。この場合奪格接辞を対格に置き換えると、「聞いたことを全部言ってあげる」という「全体」の意味を表すと考えられる。

(13) iggi-txi　　xɪxa-ččɪ,　　əmə=l　　sajɪ-ran.
　尻尾-dUxI　　噛む-PFV.CVB　　一=FOC　　首　を振る-IND.PRS.3
　「尻尾に噛みついて、まず一回だけ首を振る。」　　風間 (2020: 301)

(14) tajjaa　　dooldɪɪ-soo-tIxI　　jɪnjɪ-gadɪ.
　あの　　聞く-PFV.PTCP-dUxI　　言う-IMP.1SG
　「あの聞いたことから言おう。」　　風間 (2018b: 349)

3.3. 比較基準の指示

先行研究で述べているように、奪格接辞は形容詞と共起し、比較対象を指示する。形容詞以外に uu-sixi「上へ」、əggəgə-sixi「下へ」と共起して比較を表す例が観察された。しかし、

この場合の uu-sixi「上へ」、əggəgə-sixi「下へ」は位置の「上」と「下」ではなく、年齢の「上」と「下」を表し、形容詞の性質があると考えられる。

(15) tʊŋ baačči-tɪxɪ uu-sixi oo-kkɪ boŋgon unəgən
五 歳-dUxI 上-DIR なる-COND.CVB 大きい 牛
ə-ǰigəə oo-r gii.
NEG-FUT.PTCP なる-IPFV.PTCP Q
「五歳より大きくなったら、成年の牛になるんじゃないか。」
風間・バイカル (2023: 84)

3.4. 動作主の指示

例文 (16) では、奪格接辞のホストが bargaada「隊」であり、動詞 buu-「あげる」と共起している。bargaada「隊」はこの構文の buu-「あげる」という行為を行う動作主である。したがって、このような場合奪格接辞は動作主を指示すると考えられる。今回の調査で観察された例文の主語は bargaada「隊」、gurun「国」、ʊlʊs「国 (モンゴル語)」、ǰasgɪn ordon「政府」、sʊm「ソム (政治単位)」という団体であった。

(16) bargaada-tɪxɪ sin-duu əmun xʊnɪn buu-rən.
隊-dUxI 君-DAT 一 羊 あげる-IND.PRS.3
「隊から君に一匹の羊を与える。」 風間 (2020: 352)

3.5. 起点の指示

「起点」の機能を空間的起点、時間的起点、状態変化の起点、授受の起点、分別の起点に分けて、以下に記述する。

3.5.1. 空間的起点

例文 (17) は Baek (2023) で述べている奪格接辞の「出所の指示」を表す構文である。本稿では、このような例文を空間的起点の一種であると考える。例文 (17) の動詞述語 əmə-「来る」と例文 (18) の動詞述語 əwu-「降りる」は、それぞれ長時間継続する動作と瞬間的動作を表すが、いずれも主体の位置変化を引き起こしているため、奪格接辞がホスト動作の空間的起点である tuwed「チベット」と morɪn「馬」を指示している。例文 (19) は例文 (20) の他動詞を用いた構文である。この場合 əjjəə bəiə「この人」は目的語であり、動詞述語 əwuu-「降ろす」も客体の空間的移動を引き起こし、奪格接辞のホストである morɪn「馬」はその動作の起点であると考えられる。つまり、「空間的起点」の意味を表す場合、奪格接辞は位置変化を引き起こす主体変化動詞と主体動作・客体変化動詞と共起する。

(17) …tuwed-tIxI əmə-səə
チベット-dUxI 来る-PFV.PTCP
「…チベットから来た。」 風間 (2018b: 418)

(18) əjjəə bəiə morɪn-tɪxɪ əwu-sə.
この 人 馬-dUxI 降りる-PFV.PTCP
「この人は馬から降りた。」

(19) əjjəə bəjə-w morɪn-tɪxɪ əwu-u-sə.
この 人-ACC 馬-dUxI 降りる-CAUS-PFV.PTCP
「この人を馬から降ろした。」

(20) oŋgon_toxoɪ-tɪxɪ ǰuləə-sixi oo-kkɪ…
PN-dUxI 南-DIR なる-COND.CVB
「オンゴントハイより南へ行くと…」 風間 (2018b: 384)

本稿では、松本 (2004) に倣い、視覚、聴覚、嗅覚を表す知覚動詞が表す移動は知覚者の視覚・聴覚・嗅覚経験の中に存在する虚構移動であると考える。以下の例文 (21) では、ur-nii oroon-「山の上」は奪格接辞のホストであり、知覚動詞 isi-「見る」と共起している。ur-nii oroon-「山の上」は視覚的な放射点であり、この構文では動作の起点になると考えられる。

(21) ur-nii oroon-tIxI isi-rən.
山-GEN 上-dUxI 見る-IND.PRS.3
「山の上から見る。」

3.5.2. 時間的起点

例文 (22) では、奪格接辞のホストは名詞「革命」であり、「文化大革命が起こる前」という「時間的起点」を表すと考えられる。

(22) xʊwɪsxal-tɪxɪ noogʊ bajan barɪgada bi-səə.
革命-dUxI 以前 裕福な 隊 いる-PFV.PTCP
「革命の前は裕福な隊でした。」 風間 (2020: 349)

例文 (23) では、奪格接辞のホストは ǰaxʊŋee adɪɪ-sɪ anee「(千九百) 八十何年」という年を表す名詞であり、動詞 ʊrʊʊ-「没収する」と共起している。この構文では、奪格接辞が ʊrʊʊ-「没収する」という行為の時間的起点を指示していると考えられる。

(23) mɪɪsam-ba ǰaxʊŋee adɪɪ-sɪ anee-tɪxɪ ʊrʊʊ-saa.
銃-ACC 八十 いくつ-PROP 年-dUxI 没収-PFV.PTCP
「銃を八十何年から没収しはじめた。」

以下は年齢・時期に分類されない例を挙げる。(24) は奪格のホストは動詞の形動詞形であり、動作主があるものを乾かして、終わった時点の後から、次の「牛車に積む動作を行う」ことを表す。この場合奪格接辞は「時間的起点」を表すと考えられる。観察された例を見ると、(24) と同じ構文では、奪格名詞の後部に əwusixi「こっちへ」、 amasɪxɪ「後」、noogʊʊ「以前」がよく現れる。

(24) xatagaa-saa-tɪxɪ　　ama-sɪxɪ　əri　　uxur　　təggəən-ǰi-wi
乾かす-PFV.PTCP-dUxI　後-DIR　この　牛　　車-INS-REFL
təwu-m　　əmuu-rən.
積む-IPFV.PTCP　持ってくる-IND.PRS.3
「乾かした後、この牛車に積んで持ってくる。」　　風間 (2018b: 69)

3.5.3. 状態変化の起点

例文 (25) では、奪格接辞のホストが jadʊʊ xoosʊn「貧乏」であり、述語になる動詞は bajǰɪ-「裕福になる」である。jadʊʊ xoosʊn「貧乏」は状態変化の起点であり、「裕福になる」のは状態変化の着点を表す。この場合、奪格接辞は状態変化の起点を指示すると考えられる。

(25) jadʊʊ　xoosʊn-tɪxɪ　　bajǰɪ-ran.
貧乏-dUxI　　裕福になる-IND.PRS.3
「貧乏から裕福になる。」　　風間 (2018b: 127)

3.5.4. 授受の起点

本稿では、実際の物の授受を表す (buu-「あげる」、gada-「とる」(26) など) と知識の授受を表す動詞 (tɪta-「学ぶ」(27)、 sɪlbaa-「教える」など) をすべて授受動詞にする。さらに、授受動詞は具体的なものや抽象的なものの移動を含意する。したがって、奪格接辞は授受動詞と共起する時、授受の起点を表すと考えられる。

(26) bii　sin-duxi　əjjəə　bitigə-w　　gada-m.
1SG　君-dUxI　この　本-ACC　　もらう-IND.PRS.1SG
「私は君からこの本をもらう。」

(27) tarɪ　baraan　　samaan-tɪxɪ　　jəəmə-i　　tɪta-ran.
あの　たくさん　　シャーマン-dUxI　　もの-INDF.ACC　　学ぶ-IND.PRS.3
「あのたくさんのシャーマンからもの (知識) を学ぶ。」　　風間 (2020: 211)

3.5.5. 分別の起点

以下の例文 (28) は「馬の群れから良い馬を選別して、追い出す」という「分別」の意味を表す。奪格接辞のホストである「馬の群れ」は目的語「良い馬」を含んでいて、「選別する」という行為の起点は「馬の群れ」である。

(28) aɪ　　morɪm-ba　adʊʊn-tɪxɪ　　salgaa-čči…
　　良い　馬-ACC　　馬の群れ-dUxI　分別-PFV.CVB
　　「良い馬を馬の群れから選別して…」

4. ソロン語の奪格の機能と他の言語の奪格の機能の比較

以下の表 2、表 3 に先行研究で述べたソロン語と他の言語の奪格接辞に関する機能と本研究を通して分かったソロン語の奪格接辞の機能をまとめる。

表 2：ソロン語と他のツングース諸語言語の奪格の機能の比較

ソロン語				エウェンキー語	オロチョン語
本研究の結果		胡・朝克(1986)	Baek (2023)	Bulatova & Lenore (1999)	1.2.2. 胡 (1986)
起点	空間的起点	動作の起点	出発点 出所の指示	出来事や行為の起点	動作の起点
	時間的起点			動作が始まる起点	
	状態変化の起点				
	授受の起点				
	分別の起点				
比較基準		比較対象の指示	比較基準	比較対象	比較対象
部分の指示する					
心理動作の対象の指示					
動作主の指示					
				原因	原因
				素材	

表 3: ソロン語とモンゴル語語の奪格の機能の比較

ソロン語	**モンゴル語**	
本研究の結果	清格尔泰 (1991)	
授受の**起点**△[5]	動作の間接対象	中心に向かっていく動作の間接対象
心理動作の対象の指示△		中心から離れる動作の間接対象
分別の**起点**		区分、分別などの意味の行為の間接対象
部分の指示	全体と部分	「つかむ」の意味を持つ行為の着手部分（全体の一部分）
		「使用する」の意味を持つ行為の着手部分（全体の一部分）
		ある種の事物の中のある種の事物など
比較基準	比較対象	
	動作主	
	行為の原因	
時間的**起点**	時間の起点	
空間的**起点**	空間の起点	
時間的**起点**	形容詞述語の時間的な起点	
	形容詞述語の開始方向	
状態変化の**起点**		

5. まとめと今後の課題

今回の調査分析を踏まえ、ソロン語の奪格接辞 -dUxI に関して、以下のことが言える。

今回の研究では、ソロン語の奪格接辞の機能を「心理動作の対象の指示」、「部分の指示」、「比較基準の指示」、「動作主の指示」、「起点」に分類し、「起点」をさらに「空間的起点」、「時間的起点」、「状態変化の起点」、「授受の起点」、「分別の起点」に分けた。「空間的起点」の機能は、Baek (2023) の述べる「出所の指示」「出発点」、胡・朝克 (1986: 28) の述べる「動作の起点」、Bulatova and Grenoble (1999: 11) が述べるエウェンキー語における奪格の「ある動作が始まる時点を指示する」用法に対応すると考えられる。「部分の指示」と「分別」の機能は内モンゴルのモンゴル語にも対応する機能がある。

「心理動作の対象の指示」の機能に関して、共起できる動詞は極めて限られている。清格尔泰 (1991) の述べるモンゴル語の「中心から離れる動作の間接対象」という機能の一部に対応する。

「部分の指示」機能は清格尔泰 (1991) の述べる「全体と部分の関係を表す」という機能に対応する。

「比較基準」の機能に対応するものは本研究に上げたソロン語と他の言語のすべての先行研究に存在する。

動作主を指示する用法の例文が観察された。今回取り上げたエウェンキー語とオロチョン語の文献では、この用法と対応するものがない。一方、内モンゴルのモンゴル語の奪格は

[5] △はソロン語の奪格接辞の機能がモンゴル語の奪格接辞の機能の一部分に対応することを示す。

「行為の行為者、行為の主体を表す」という機能で使われる。

エウェンキー語における奪格の「ある動作や状態の原因を指示する」という機能はオロチョン語の「物事の由来や原因」に対応すると考えられるが、今回の考察ではソロン語にこの用法と対応する用例が観察されなかった。筆者の内省に基づけば、この場合具格を用いる。エウェンキー語における奪格の「ある物を作るための素材を指示する」用法に対応する用例も観察されなかった。筆者の内省に基づけば、この二つの用法はソロン語の奪格接辞で言いにくい。

今回の考察に通じて、ソロン語の奪格接辞の用法をある程度確認できたが、これらの用法が実現する条件を整理できなかった。つまり、奪格の各々の用法が実現する奪格のホスト、奪格名詞に後続する要素、述語動詞の種類の整理が必要である。

略号一覧

-: suffix boundary 接辞境界
=: clitic boundary 接語境界
1, 2, 3: 1st, 2nd, 3rd person 1, 2, 3 人称
A: aspect アスペクト
ABL: ablative 奪格
ACC: accusative (定) 対格
AOR: aorist アオリスト
CAUS: causative 使役
COM: comparative degree 比較基準
COND: conditional 条件
CUM: cumulative 累加
CVB: converb 副動詞
DAT: dative 与格
DIR: directive 方向格
FOC: focus 焦点化
FUT: future 未来
GEN: genitive 属格
HAB: habitual 習慣
IMP: imperative 命令
IND: indicative 直説法
INDF: indefinite 不定
INS: instrumental 道具格
IPFV: imperfective 非完了
LOC: locative 処格
NEG: negative 否定
PL: plural 複数
PN: proper noun 固有名詞
POSS: possessive 所有
PROG: progressive 進行
PROP: propriative 恒常的所有
PRS: present 現在
PST: past 過去
PTCP: participle 形動詞
Q: interrogative marker 疑問
REFL: reflexive 再帰
SFP: sentence final particular 文末小辞
SG: singular 単数

参考文献

Baek, S. (2023). “Solon”. A. Vovin, J. A. Alonso de la Fuente, & J. Janhunen (eds.) *The Tungusic Languages*. (Routledge Language Family Series). 206-223. New York: Routledge.

Bulatova, Nadezhda and Lenore Grenoble (1999) *Evenki. Languages of the World/Materials, 141*. Munich-Newcastle: München: Lincom.

Ikegami, Jiro 1974: Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker,* 271-2, Akademie-Verlag, Berlin.

朝克 (1995) 『鄂温克语研究』北京：民族出版社.

杜 道尔基 (2013) 『鄂漢詞典』 北京: 内蒙古文化出版社.

胡增益・朝克(共著) (1986) 『鄂温克语简志』北京：民族出版社.

胡增益 (1986) 『鄂伦春语简志』北京：民族出版社.

風間伸次郎 (2010) 「ソロン語におけるモンゴル語の影響―言語接触の一例として―」『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座― 語学教育フオーラム』24: 163-183. 東京 : 大東文化大学語学教育研究所.

風間伸次郎 (2018a) 「ソロン語」李林静・山越康裕・児倉徳和 (編著)『中国北方危機言語のドキュメンテーション』101-159. 東京：三元社.

清格尔泰 (1991) 『蒙古语语法』 呼和浩特市: 内蒙古人民出版社.

徳永千枝子 (2015) 「授受動詞の分類について: ヤルとアゲルの意味的差異を中心に」『九州大学言語学論集』35: 254-265. 福岡: 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室

松本曜 (2004) 「日本の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4 (1): 111-128. 日本語文法学会.

調査資料

風間伸次郎・トヤー (2008) 『ソロンの民話と伝説 2』(ツングース言語文化論集 41.) 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎 (2018b) 『ソロンの文化と生活 1』(ツングース言語文化論集 64.) 東京: 東京外国語大学.

風間伸次郎 (2020) 『ソロンの文化と生活 2』(ツングース言語文化論集 67.) 東京: 東京外国語大学.

風間伸次郎 (2022) 『ソロンの文化と生活 3』(ツングース言語文化論集 70.) 東京: 東京外国語大学.

風間伸次郎・バイカル (2023)『ソロンの文化と生活 4』(ツングース言語文化論集 71.) 東京：東京外国語大学.

風間伸次郎・バイカル (2024)『ソロンの文化と生活 5』(ツングース言語文化論集 73.) 東京：東京外国語大学.

The function of the ablative affix -dUxI in Solon

BAIGALA
(Graduate Student of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Solon, Tungusic Language, Mongolian, ablative

In this paper, an analysis of the functions of Solon ablative affix is conducted using existing texts, based on the author's introspection. Based on actual cases, the functions of the ablative affix in Solon can be broadly categorised as ‘starting point’, ‘indication of the object of psychological action’, ‘indication of the part’, and ‘indication of the standard of comparison’. ‘Starting point’ can be further divided into ‘spatial starting point’, ‘temporal starting point’, ‘starting point of state change’, ‘starting point of giving and receiving’ and ‘starting point of segregation’.

The study further compares the functions of the Solon ablative affix with those of the Ewenki, Orochon and Mongolian languages. The results show that the functions of the Solon ablative affix have the same usage as the functions of ‘comparative standard’ and ‘starting point of action’ in Ewenki and Orochon, which are also in Tungusic languages, but no examples of ‘indication of material’ and ‘indication of cause’ were observed. The functions of ‘indication of the part’ and ‘indication of the object of the psychological action’ are observed in both Solon and Mongolian.

現代モンゴル語の名詞型の場所語が要求する格とその意味
―ömnö「南/前」、urd「南/前」を対象として―

バスバヤル　ムンフダラム
（東京外国語大学　博士後期課程）

キーワード：場所語，属格および奪格の要求，コーパスによる出現頻度

要旨:本稿は現代モンゴル語における ömnö「南/前」および urd「南/前」に着目し、コーパスを用いてそれぞれの出現頻度と、属格および奪格を要求する際の使用とその意味を考察した。具体的には、例文の分析を通じて、属格および奪格を要求する際のそれぞれの語の直前に現れる名詞の特徴や述語動詞の意味によってどのような意味を表すかを検討した。調査の結果は、ömnö と urd は文脈によって異なる役割を果たしていることが明らかになった。例えば、ömnö は奪格と属格の両方を要求し、時間的な名詞と共起し、「～の前に」という時間的基準を示すほか、抽象的な名詞（am'dral「人生」、xümüüs「人々」）や固有名詞と共起し、時間的・比喩的な「～の前で」や「～を前に」を表現する。さらに［形動詞 -x］との共起によって「～する前に」という時間的な順序を示す。一方、urd は主に場所的な文脈に特化しており、身体部位や物の部分的な位置（teregnij urd duguj「車の前輪」）を示す際に使用されることが明らかになった。

1.　はじめに

現代モンゴル語では、相対的な意味をもつ「上、下、前、後ろ」といった場所を表す語が形式や用法の面で特別な振る舞いをみせることが特徴的である。これらの場所を表す語について包括的に考察している先行研究としては Chinggeltei (1999) がある。Chinggeltei (1999) によれば、場所語は「名詞型」「形容詞型」「副詞型」に分類され、それぞれの形を形成する一連の接辞があると述べている。本稿では、特に Chinggeltei (1999) の分類に倣い名詞型の場所語に分類される ömnö「南/前」、urd「南/前」を対象にして、それぞれの語の類似点および相違点、そしてその用法に着目し考察する。本稿でいう名詞型の場所語とは、日本語の「～の前に」における「前」のようなものを指し、先行する名詞に属格（あるいは奪格）を要求し、それ自身は名詞的な性格を表す語のことである。

Chinggeltei (1999) の記述は内モンゴル地域のモンゴル語が反映されている可能性があるが、本稿で扱う言語現象に限っては方言差は問題にならないと思われる。モンゴル語には内モンゴルで用いられる文語表記と、モンゴル国で用いられるハルハ・モンゴル語を基礎としたキリル文字によるモンゴル語表記の 2 種類の文字体系が存在する。本稿ではモンゴル文語表記の綴りをローマ字に転写したうえで { } 内に示し、その外側にコロンを置き、右側にキリル文字の綴りをローマ字に転写したものを記載する。例えば、モンゴル文語表記の綴り emün_e「前/南」の場合は、{emün_e}: ömnö「前/南」のように示す。なお、emün_e の _ は、モンゴル文字綴りの転写のルール上挿入されるものである。ローマ字の転写は、次の通りである。[ ] は音声を表す。a= a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, e=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ~tʃ], з=z [dz~ts], и=i, й=j, к=k, л=l [lʒ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [ɵ], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [ʊ], ү=ü [ʉ], ф=f, х=x, ц=c [ts^{h}],ч=č [tʃ^{h}], ш=š [ʃ], ъ=’’, ы=y [iː], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja。

本稿の構成は次の通りである。まず、2 節で先行研究を扱い、3 節で先行研究をまとめる。

4 節では問題提起、5 節で調査、6 節で調査結果と分析について述べ、7 節でまとめと今後の課題について述べる。なお、断りのない限り例文番号、グロス、日本語訳、文字飾りは筆者によるものである。

2. ömnö「南/前」、urd「南/前」について

まず、2.1 節で Chinggeltei (1999)、2.2 節で風間 (2022)、2.3 節で Kullmann and Tserenpil (2005)、2.4 節で向井 (2006) を取り上げる。なお、Chinggeltei (1999) では ömnö「南/前」、urd「南/前」を名詞型の場所語に分類しているが、その他の先行研究ではそれぞれの観点から分析を行っている。詳細は 3 節を参照されたい。

2.1. Chinggeltei (1999)

Chinggeltei (1999: 204-208) は、ömnö と urd を一般的な名詞に近い性質を持っていると述べ、名詞型の場所語として分類している。名詞型の場所語には表 1 で示すように場所と時間を表すものと特定の場所を表すものがあるという。名詞型の場所語は殆どの場合場所を表すが、稀に時間を表すこともできると言及している。例えば、{ger_ün emün_e}: ger-ijn ömnö [家-GEN 前]、{üde_yin emün_e}: üd-ijn ömnö [正午-GEN 前] などであるという（Chinggeltei (1999: 205)）。

形態的に ömnö と urd は、öm-nö および ur-d のようにそれぞれの語幹に接辞 -nö および -d が付加されることで形成される（表１）。なお、本稿では場所語が形成される接辞については記述しない。

表 1: Chinggeltei (1999) による名詞型の場所語の形式とその接辞

	接辞 意義	場所と時間 {n_a/n_e}: -na/-ne/-no/-nö {r_a/r_e}: -r, {da}: -d	特定の場所 {tai/tei}: -taa/-tee
1	前/南	{emün_e}: ömnö	{emünetei}: ömnötee
2	後ろ/北	{qoin_a}: xojno	{qoitai}: xojtoo
3	東	{ǰegün}: züün	{ǰegüntei}: züüntee
4	西	{baraɣun}: baruun	{baraɣuntai}: baruuntaa
5	上	{deger_e}: deer	degetei: deetee
6	下	{door_a}: door	doɣotai: dootoo
7	中	{dumda}: dund	(dumda): [1]
8	外	{ɣadan_a}: gadna{ɣadaɣ_a}: gadaa	ɣadatai: (ɣadar)
9	内	{dotor_a}: dotor	dototai:
10	ここ	{naɣan_a}: naana	naɣatai: (naanataj)
11	あそこ	{čaɣan_a}: caana	čaɣatai: (caanataj)
12	前/南	{urida}: urd	uritai:
13	後ろ	{(aru_du)}: ard	aruntai:

（Chinggeltei 1999 による名詞型の場所詞を元に筆者作成）

加えて Chinggeltei (1999: 210) は、場所語の全体的な文法的な特徴そしてそれぞれの語の

[1]なお、筆者の内省では特定の位置を表す -taa, -tee で挙げられている ömnö-tee, xoj-too, züün-tee, baruun-taa 以外の例は、現代モンゴル語において使われていないと考えられるため取り扱わないことにした。

直前に現れる名詞が①主格 Ø、②属格 -IJn、③奪格 -AAs、④共同格 -tAj を取ると述べている。なお、これらの格の大文字 - IJ, -AA, -A は母音調和による異形態があることを指している。以下の例文については、文語表記は執筆の都合上省略する。

1) 主格の場合

a. Devsger door
敷物.Ø DOOR
「敷物の下に」

b. Ger deer
ゲル.Ø DEER
「ゲルの上に」

c. Ger dotor
ゲル.Ø DOTOR
「ゲルの中に」

(Chinggeltei 1999: 210)

2) 属格の場合

a. Širee-n (ij) deer
机-N.Ø (GEN) DEER
「机の上に」

b. Oln-y dund
人々-GEN DUND
「人々の真ん中に」

c. Uul-yn naana
山-GEN NAANA
「山の前側に」

(Chinggeltei 1999: 210)

3) 奪格の場合

a. Ger-ees baruunš-aa
ゲル-ABL BARUUNŠ-PEFL
「ゲルから西の方へ」

b. Xöx+xot-oos naaguur
PLN-ABL NAAGUUR
「フフホトの前側を」

(Chinggeltei 1999: 210)

4) 共同格の場合

a. Xelex-tej zereg
言う-COM ZEREG
「言うと同時に」

b. Nar garax-taj sacuu
太陽 出る-COM SACUU
「太陽が出ると同時に」

(Chinggeltei 1999: 210)

2.2. 風間 (2022)

風間 (2022: 141-160) では、モンゴル語、ナーナイ語、トルコ語における「前」「後ろ」「(離れた) 上」「(接した) 上」「下」「中」「外」「間」「横」という 9 個の語の名詞的性格を問題として取り上げている。具体的には、以下の 3 点について分析を行っている。①場所語の諸形式自体とその品詞、②場所語を修飾する名詞が属格を伴うか否か、③場所語自体がとる格についてである。

風間 (2022) の調査対象となったモンゴル語の場所語には、urd「前」、ard「後ろ」、deer「上」、door「下」、dotor「中」、gadaa/gadna「外」、gol「間」、xažuu「横」が含まれる。それぞれの語について、コンサルタントからの文の聞き出しによって調査している。調査の結果、それぞれの場所語が以下の表 2 に示すような機能を持つことが確認された。具体的には、次の 5 つの用法である。1.基準となる位置を持たない副詞的な用法 (「へ V」)、2.静止した場所 (「～の～に V」)、3.方向 (「～の～へ V」)、4.通過点 (～の～を V)、5.起点 (「～

の～から V」)。

なお、以下の表 2 の記号は風間 (2022) に準拠しており、G は属格名詞、Ø は無語尾の名詞が先行することを示し、- は格が付加される場合の形式を表している。表 2 は風間 (2022: 151, 157) を参考に筆者がまとめたものである。

表 2: urd「前」による表現

	urd「前」		
1	前へ V	(uragšil-)	noxoj **uragšil**san「犬が**前へ**行った」
2	～の前に V	G urd	noxoj **tüü-nij urd** bajgaa「犬は彼**の前に**いる」
3	～の前へ V	G urd	noxoj **tüü-nij urd** očson「犬は彼**の前へ**行っている」
4	～の前を V	G urd	noxoj t**üü-nij urd/ömnö** javaa「犬は彼**の前を**行っている」
5	～の前から V	G urd-aas	noxoj t**üü-nij urd-aas** irsen「犬は彼**の前から**（こっちへ）きた」

（風間 2022 を元に筆者が作成）

風間 (2022) によると、上記で述べた ①、②、③を総合的に分析・考察すると次のようになると述べている。

> まず①の場所語自体の形式についてみると、いわゆるアルタイ諸言語に属するどの言語でも主体自体を基準とした主体の移動の方向を示す際に、副詞的な場所語が用いられる。モンゴル語ではその基準となる主体は再帰接辞によって明示される。
>
> ②の場所語が属格をとるか否かについてみると、モンゴル語の deer「上」と door「下」、さらに dotor「中」が無語尾の主格名詞を支配するという点において、際立って後置詞的性格を示す。
>
> ③の場所語自体がとる格についてみると、やはりまず格をとらないという点でモンゴル語の場所語の多くが際立って後置詞な性格を示す。しかし奪格にかんしてのみは、トルコ語、ナーナイ語と同様に、モンゴル語もこの格をとる。このことは奪格の示す意味がより有標で、その頻度も低いために一般名詞からの類推を受けやすいということから説明できよう。モンゴル語では、格をとらないために方向なのか静止なのか通過点なのか、という違いを場所語の方から判断することは難しくなる。これを担うために、uragšil-「前進する」、uxr-「後ずらりする」、ergeld-「一つの場所でぐるぐる回る」などの動詞が使用されている点が注意をひく。
>
> (風間 2022: 154-155)

2.3. Kullman and Tserenpil (2005)

Kullmann and Tserenpil (2005: 228-229, 284) は、Chinggeltei (1999: 210) が場所語として扱う一連の語を場所の副詞や後置詞の機能を持つ語として扱っている。場所の副詞は 12 語あると述べ、常に where?という質問に答えるものであるとしている。副詞[2]として使用される

[2] Kullmann and Tserenpil (2005: 229) で挙げられている副詞的な用法を表す例は次の通りである。

ömnö は「南に」(in the south)、urd は「前に」(in the front) という意味で使用されると述べている (Kullmann and Tserenpil 2005: 228)。

Kullmann and Tserenpil (2005: 284) は後置詞の機能を持つ 24 語を挙げており、それぞれの後置詞は名詞要素に接続する接辞と密接に関連しているという。ömnö は時間的な意味として「～の前に」(before…(time))、場所的な意味として「～の前に」(in front of…)、urd は場所的な意味として「～の南に」(south of…)、「～の前に」(in front of…) という意味を表すという (Kullmann and Tserenpil 2005: 284, 290, 292)。

特に ömnö は属格を要求する場合、時間的な意味として「～の直前に」(immediately before) を表し、奪格を要求する場合は、示される時間の長さは属格を要求する時の意味よりも長くなるという（Kullmann and Tserenpil (1996: 292)）。以下、時間的な意味を表すものから示す。

属格を要求する ömnö

5) Bi nöxr-ijg-öö **xurl-yn ömnö** xar-san-güj.
1.SG 夫-ACC-REFL 会議-GEN ÖMNÖ 見る-VN.PST-NEG
"I didn't see my husband before the meeting" (Kullmann and Tserenpil 2005: 292)

6) Bi dörv-ön **cag-ijn ömnö** ir-sen.
1.SG 4-N 時間-GEN ÖMNÖ 来る-VN.PST
"I came four hours ago" (Kullmann and Tserenpil 2005: 292)

7) **Bid-nij ömnö** tom zorilt baj-na
1.PL-GEN ÖMNÖ 大きな 目標 ある-TV.PRS
" There is a big goal in front of us" (Kullmann and Tserenpil 2005: 292)

奪格を要求する ömnö

8) Ta oroj-n arv-an **cag-aas ömnö** nad ruu uts-aar jari-araj.
2.HON 夜-N 10-N 時間-ABL ÖMNÖ 1.SG DIR 電話-INS 話す-OPT
"Please call me before 10 p.m" (Kullmann and Tserenpil 2005: 294)

9) Bi dörv-ön **cag-aas ömnö** ir-sen.
1.SG 4-N 時間-ABL ÖMNÖ 来る-VN.PST

---

a. Bi xojor sar **ömnö** suu-san [1.SG 2 月 ÖMNÖ 座る-VN.PST]
"I lived for two months **in the South.** (refers usually to 'China')

b. Ter jamagt **urd** jav-dag [2.SG いつも URD 行く-VN.HBT]
"He always calls the tune. (he always goes **in the front**)

“I came before 4 o’clock” (Kullmann and Tserenpil 2005: 294)

10) Ta **tüün-ees ömnö** jamar xičeel zaa-lg-až baj-san be?
2.HON 3GS-ABL ÖMNÖ どんな 勉強 教える-PASS-CVB.IPFV ある-VN.PST Q
“ Who was teaching you before him? (“ Who did you have teach you before him?”)”
(Kullmann and Tserenpil 2005: 294)

属格を要求する urd

11) Dorž **minij** **urd** suu-ž baj-san.
PN 1.SG.GEN URD 座る-CVB.IPFV ある-VN.PST
“Dorj was sitting in front of me. (context needed)” (Kullmann and Tserenpil 2005: 290)

12) **Bajšin-gijn urd** xed-en xün zogs-ož baj-na.
建物-GEN URD いくつ-N 人 立つ-CVB.IPFV ある-TV.PRS
“ Some people are standing in front of the house./...south of the house.”
(Kullmann and Tserenpil 2005: 290)

2.4. 向井 (2006)

向井 (2006) は、Kullmann and Tserenpil (2005) と同様に名詞型の場所語を後置詞として使われる用法について言及している。なお、向井 (2006) は、58 の後置詞を扱っているが、本稿では ömnö と urd についてのみ扱う。

以下、向井 (2006) の記述をまとめる。

どの後置詞がどの格 (主格を含む) に続くかが決まっており、これを格支配と呼ぶ。後置詞をとった語は、述語に対する補語や状況語となることが一般的であるが、属格のように名詞類に対する修飾語となる後置詞もある。また、【名詞類+後置詞】の全体で別の名詞句となり、後置詞自身にさらなる格語尾や再帰語尾が接続することもある。このような現状は、モンゴル語の後置詞のほとんどが形容詞・副詞・名詞という別々の品詞にその出自を置いていることによる。

向井 (2006) では、ömnö は属格と奪格で、urd は属格で支配されると述べ、以下のように示している (表 3)。

表 3: 向井 (2006) による後置詞として使用される ömnö と urd の意味

格	後置詞	意味
属格	ömnö	【N】の南側に
		【N】の前に（空間的・抽象的）
	urd	【N】の南側に
		【N】の前に
奪格	ömnö	【N】の前に

(向井 2006 を参考に筆者が作成)

以下では、 向井 (2006) で挙げられている ömnö と urd の例を示す。

>属格 + ömnö

13) **Emnelg-ijn ömnö** bajrla-
病院-GEN ÖMNÖ ある.IMP-
「病院**の南側**にある」

14) **Mašin-y ömnö** zogs-
車-GEN ÖMNÖ 止まれ.IMP-
「車**の前に**立つ」

15) **Bid-nij ömnö** baj-
1.PL-GEN ÖMNÖ ある.IMP-
「私たち**の前に**ある」

16) **Xurl-yn ömnö** uulz-
会議-GEN ÖMNÖ 会う.IMP-
「会議**の直前に**会う」

>属格 + urd

17) **Emnelg-ijn urd** bajrla-
病院-GEN URD ある.IMP-
「病院**の南側**にある」

18) **Mašin-y urd** zogs-
車-GEN URD 止まれ.IMP-
「車**の前に**立つ」

>奪格 + ömnö

19) **Xurl-aas ömnö** jarilc-
会議-ABL ÖMNÖ 話し合う.IMP-
「会議の前に話し合う」

さらに向井 (2006) では、[属格+ömnö] が [奪格+ ömnö] よりも「ある時点」に近い意味を持つ点で相違があると述べている。

3. 先行研究のまとめ

3.1. （名詞的な性質を表すという）ömnö と urd について

特に ömnö と urd が名詞的な性質を表すということについて言及しているのは Chinggeltei (1999) であり、これについては風間 (2022) でも取り上げられている。以下、それぞれの内容をまとめる。

Chinggeltei (1999) では、ömnö と urd は一般的な名詞に近いと述べ名詞型の場所語として位置付けられるとしている。それぞれの語が形成される接辞 -nö と -d についても挙げられているが、接辞 -nö と -d が付加された語は場所と時間を表すとしている。さらに Chinggeltei (1999) では、場所語全体が要求する格形は、主格、属格、奪格、共同格であると述べているが、特に ömnö と urd についての具体的な例示が挙げられておらず、概略的

な説明に留まっているようである[3]。

風間 (2022: 129) は、日本語のようにモンゴル語の場所語は名詞的な性格を表すのかを検討しているが、モンゴル語の場所語は語によって完全に名詞的な性格を示さず、かなり副詞的/後置詞的な性格を表すものがあると言及している。さらに風間 (2022: 151) は、urd のみを扱っており、直前の名詞に属格を要求することについて考察している。さらに、述語の動詞によって urd が以下のような意味を表すことが示されている。1. 基準となる位置を持たない副詞的な用法（「へ V」）、2. 静止した場所（「～の～に V」）、3. 方向（「～の～へ V」）、4. 通過点（～の～を V）、5. 起点（「～の～から V」）である。これらの 1～5 の用法は興味深い問題を提起しているが､ömnö との類似点については特に言及されていない。加えて、風間 (2022) は 3 言語を対象とした調査であるため、モンゴル語におけるそれぞれの語について、より多くの例を抽出し詳細に調査する余地があると考えられる。

3.2.　ömnö と urd が要求する格とその意味について

ömnö と urd が要求する格について､向井 (2006) と Kullmann and Tserenpil (2005) はほぼ同じことを述べており、要求する格によってことなる意味やニュアンス持つと指摘している。以下に、向井 (2006)、Kullmann and Tserenpil (2005) の説明をまとめる。

表 4: ömnö と urd が要求する格とその意味

品詞類		後置詞的な用法		副詞的用法
		属格を要求する意味	奪格を要求する意味	
向井 (2006)	ömnö	「～の直前に（時間的）」 「～の前に （空間的・抽象的）」 「～の南側に」	「～の前に（時間的）」	―
	urd	「～の南側に」 「～の前に（場所的）」	―	―
Kullmann and Tserenpil (2005)	ömnö	「～直前に（時間的）」 「～の前に（場所的）」	「～の前に（時間的）」	「南に」
	urd	「～の南に」 「～の前に」	―	「前に」

[3] 例えば、上記で示したように主格の場合は deer「上」、door「下」、dotor「中」、属格の場合は deer「上」、dund「真ん中/中」、naana「ここ」、奪格の場合 baruunšaa「西/右へ」、naaguur「この辺」、共同格の場合 zereg「同時に」、sacuu「同時に」などが挙げられているのみである。Chinggeltei (1999) で挙げられているこれらの例を見る限りでは、奪格と共同格を要求する場所語は名詞型の場所語ではないとみられる。つまり、Chinggeltei (1999) の場所語の分類からみると、前者の方は副詞型の場所語であり、後者の方はその他の方に分類されると考えられる。しかし Chinggeltei (1999) はそれぞれの語について言及していない。

表 4 から分かるように、属格と奪格を要求する ömnö と urd が表す意味には以下のような類似点と相違点が見られる。

まず、**属格と奪格を要求する ömnö** は、いずれも時間的な意味を表すが、具体的な使い分けによって異なる点があることが分かる。つまり、**属格を要求する ömnö** は「ある時点により近い」という対象との関係をより具体的に表し、**奪格を要求する ömnö** は「ある時点から離れた過去」や「前」というより広い時間的な枠組を示しているというニュアンスが含まれているように思われる。例えば、向井 (2006) などで指摘されているように xurl-ijn ömnö [会議-GEN ÖMNÖ] という表現では属格を用いることで、会議の直前にという会議に一番近い時間的関係が強調されている。一方、xurl-aas ömnö [会議-ABL ÖMNÖ] という表現では奪格を用いることで、属格ほどの即時性がなく、時間的な距離が含まれる傾向があると考えられる。

その他、Kullman and Tserenpil (2005) は、属格を要求する ömnö は「〜の前に（空間的・抽象的）」の意味を表すということについては言及していないが、例 3 では Bid-nij ömnö tom zorilt baj-na [1.PL-GEN ÖMNÖ 大きな 目標 ある-TV.PRS] という抽象的な意味を表す例を挙げている。さらに、Kullmann and Tserenpil (2015) は、urd に「前/南」という両方の意味があると記述しているが、ömnö については「前」という意味のみを記載している。これにより ömnö が「南」という意味で使用されるのは、副詞的な用法の際に限られることが示唆されるが、向井 (2006) は、ömnö と urd の両方を「前、南」という意味で解釈している。

以上のように、それぞれの先行研究で述べられているようにそれぞれの意味や説明が異なる。その相違は表 5 のようにまとめられる。なお、本稿ではそれぞれの語の後置詞的/副詞的な用法といった品詞に関する問題について詳細に取り扱わないこととする。

表 5: ömnö と urd が属格と奪格を要求する場合の意味

	ömnö	urd
属格	「〜の前に（空間的・抽象的）」 「〜の南（側）に」 「〜の直前に（時間的）」 （「ある時点により近い」）	「〜の前に（空間的・抽象的）」 「〜の南に」
奪格	「〜の前に（時間的）」 （「ある時点から離れた過去」や「前」）	—

さらに、向井 (2006)、Kullmann and Tserenpil (2015) で挙げられている例の多くは、風間 (2022) が述べている「静止した場所として用いられる場合（「〜の〜に V」）」に該当するものであった。

4.　問題提起

4.1.　品詞について

モンゴル語の場所語（ömnö と urd）に関する先行研究の大きな問題点は、それぞれの品詞に関する分類が一貫していない点である。例えば Chinggeltei (1999) は、ömnö と urd を名詞的な場所語に分類しており、一般的な名詞に近いと述べている。向井 (2006) は ömnö と urd を後置詞に分類し、Kullmann and Tserenpil (2015) は後置詞および副詞として使用されることについても触れている。

風間 (2022) は、モンゴル語の場所語は移動の方向を表す際に副詞的な性格、そして格を取らない点で後置詞的な性格を示すとしている。

品詞分類は重要であり、これらの語をどのように分類するかついての具体的な基準が必要になる。しかし本稿では、得られた情報と知見を基に品詞分類の方向性を探りつつ、さらに多角的な視点に基づく品詞分類を目指す。

4.2.　問題点と調査の対象について

本稿では、向井 (2006)、Kullmann and Tserenpil (2015) で述べられているような属格を要求する ömnö と urd、奪格を要求する ömnö の用法について詳細に検討する。先行研究は、限られた用例に基づいており、使用文脈や具体的な場面も限られているため、全体的な言及が不足している可能性がある。特に、現代モンゴル語での使用頻度や文脈での使用について、より豊富なデータに基づいた観察が欠けていることが指摘できる。そこで、現代モンゴル語での使用実態を観察し、多様な例を抽出し、ömnö と urd の用法とその類似点および相違点について検討する必要があると考えられる。

さらに、風間 (2022) で言及されている動詞との関係についても考察を深める必要がある。つまり、具体的にどのような動詞と共起し、それによってどのような意味が表されるのかを明らかにすることが重要である。なお、この問題を実現するためには、まず動詞を一定の基準で分類することが必要であるが、文脈や用例によっては異なる意味を表す傾向があるため、動詞分類自体が困難であるのが問題点である。

5.　調査

以下、5.1 節で調査方法、5.2 節で利用するコーパスについて述べる。

5.1.　コーパスについて

コーパスは Mongolian National Corpus (Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスで、総語数は 1,160,000 語、以下 MNC) である。コーパスでは、*X や X*, *X*と入力して検索することで問題の形式 X の前後に何らかの要素のある形式を検索することができる。その他、コーパスでは *X や X*, *X*と入力した上で、その直前や直後に現れる何らかの表現を入力して検索することもできる。本稿では後者の*X とその直後の表現を入力して検索するという方法を用いる。

5.2. 調査方法

場所語の ömnö と urd の用法について考察するために、以下の 2 点を明らかにする。まず、MNC から ömnö と urd を検索し、それぞれの語の直前に現れる名詞とその文法的な性格あるいは特徴を調べる。特に、ömnö と urd が要求する奪格と属格はどのように表れるか、その割合を示す。次にそれぞれの例を分析し、どのような名詞に属格と奪格が要求されるか、その述語の動詞は何かを分析し考察する。

コーパスから検索を行う際の条件は以下の通りである。まず、検索窓にキリル文字でそれぞれの語 ömnö または urd を入力し、検索を実行して総出現数を確認する。次に、以下の手順に従い、要求する格を検索する。

1. コーパスの一番上の検索窓に、調べたい格のそれぞれの形式を入力する。
2. 下の検索窓に ömnö または urd を入力し、検索を実行する。

この作業により、要求する格の出現頻度が表示される。なお、格の形式を入力する際には、それぞれの格の異形態の左上に「*」を付けて検索する必要がある。例えば、属格を調べる場合は具体的な入力方法は以下の通りである。

一番上の検索窓に [*ын (または*ийн/*ы)]
下の検索窓に [өмнө (または урд)]

このようにして、それぞれの語が要求する格の出現頻度を調査する。

6. 調査結果と分析

6.1. コーパス調査による ömnö と urd の出現頻度および要求する格の割合

以下、MNC を用いて出現した ömnö と urd に関する総語数を示す。

表 6: MNC による ömnö「前/南」と urd「前/南」の出現頻度

	ömnö「前/南」	urd「前/南」
MNC	1,407	369

表 6 から分かるように、ömnö の総出現数は urd に比べ顕著に多い。その理由として、ömnö には、属格と奪格の両方を要求する用法があることに加え、場所だけではなく時間の意味を表す用法もある点が挙げられる。

以下では、表 6 に示した出現頻度のデータを基に、ömnö と urd が要求する属格と奪格の頻度 (割合) について示す。

表 7: ömnö と urd が要求する「属格「および「奪格」の頻度 (割合)

用語	総出現数 (割合)	属格の頻度 (割合)	奪格の頻度 (割合)	その他
ömnö	1,407 (100%)	873 (62%)	62 (4%)	472 (34%)
urd	369 (100%)	72 (20%)	0 (0%)	297 (80%)

表 7 から分かるように、ömnö と urd が要求する属格は、奪格に比べて高い割合を示している。具体的には、属格を要求する ömnö は 62%、urd は 20%を占めている。一方、奪格を要求する ömnö は 4.4%、urd は 0%である。このことから、先行研究で述べられているように、時間に関する用法において ömnö は奪格を要求する一方で、urd は奪格を要求しないということが明らかとなり、筆者の内省とも一致している。なお、表 7 にある「その他」に関しては本稿では記述しないが、おそらく主格型で使用される用法や、副詞的に使用される例が多いと考えられる。詳しくは、今後の課題として検討する予定である。

さらに属格と奪格を要求する ömnö、属格を要求する urd の直前に現れる品詞類を観察すると、ömnö の直前には形動詞 -x + -IJn の形が 53、形動詞 -x + 奪格 -AAs の形が 28 例、完了-cix + -AAs の形が 5 例、形動詞 -aa + -ijn の形が 1 例見られた。一方で、urd「前」の直前にはこれらの形は現れなかった。このことも、ömnö「前/南」が「〜する前に」という意味で時間的な文脈で使われることが多い傾向を反映していると考えられる。

6.2.　属格を要求する ömnö と urd について

6.2.1 属格を要求する ömnö の直前の名詞とその意味

上記で述べたように、属格を要求する ömnö と urd の大きな違いは時間的な用法に起因すると考えられる。つまり、属格を要求する ömnö の直前に žil「年」、sar「月」、cag「時間」などの時間に関する名詞が現れることが一般的である (20)。以下、例 (20) から (22) では urd の使用は不可能である。

20) **Xori-n** **žil-ijn** **ömnö** “Tav-yn xaluun us-ny” urd-ax xed-en gudamž, xeseg
20-N 年-GEN ÖMNÖ 5-GEN 熱い 水-GEN 前-DS 幾つ-N 街 一部
xašaa xot-yn urd zax bol-ž baj-laa.
柵 都市-GEN 前の はずれ なる-CVB.IPFV ある-TV.PST
「**20 年前**、タヴのハルン・ウスの前にあるいくつかの通りや区画は、街の南端に位置していました」 (MNC)

他に時間的な意味を持たない am’dral「人生」という名詞に後続し、述語の動詞 sögdöx-「絶望する」との間で動作の対象としての関係を表すために ömnö が使用されている。

21) Jamar=č ge-sen **<u>am'dral-yn</u>** **<u>ömnö</u>** sögdö-x-güj xat
どんな=SUM という-VN.PST 生活-GEN ÖMNÖ 絶望-VN.FUT-NEG 耐える力
suu-san=l xün jum.
座る-VN.PST=FP 人 SFP
「何があっても<u>人生に</u>絶望しない耐える力を身に付けている人である」 (MNC)

さらに、xümüüs「人々」という名詞に後続し、誰か「人物の前で～をする」という抽象的な場所を表す意味で使用されている。述語の動詞は、ünertüülex「匂いを嗅がせる」であり、動作主が相手に特定の感覚（匂い）を伝える使役的な特徴を持つ動詞（動作動詞）である。

22) Ene ter **<u>xümüüs-ijn ömnö</u>** arxi üner-t-üül-ex javdal ajataj＝biš
これ あれ 人.PL-GEN ÖMNÖ 酒 匂い-DS-CAUS-VN.FUT 行為 好ましくない
baj-dag.
ある-VN.HBT
「あれこれ<u>人々の前で</u>お酒の匂いを嗅がせる行為は良くない」 (MNC)

加えて、属格を要求する ömnö の直前には、人を表す固有名詞が使用されている。述語動詞は caraj+alda-n zogsox-「恥をかいて立つ」という複合動詞であり、副動詞接辞 -n によって、動作の進行が表されている。以下、例 (23) では urd の使用も可能である。

23) Juu＝č＝l ge-sen **<u>Žadambaa-gijn ömnö</u>** caraj+alda-n zogsox-güj ge-ž
何=CUM=FP Q-VN.PST PN-GEN ÖMNÖ 顔＋失う-CVB.SIM 立つ-NEG QT-CVB.IPFV
bod-ood ažil guj-ž oč-son-güj.
思う-CVB.PFV 仕事 願う-CVB.IPFV 行く-VN.PST-NEG
「何があっても<u>ジャダンバーの前で</u>恥をかいて立つことはしないと思い、仕事を頼みに行かなかった（屈辱を感じるような状況を避けること）」 (MNC)

次に、ömnö の直前に［形動詞 -aa＋ 属格-IJn］という構造も現れた。この場合は、述語の動詞の性質に応じで、「～している、その前を/に～」という経路および場所的な両方の意味が表される。例えば、(24) に示されている述語動詞は javax「行く」は、文脈によって本来の「行く」という意味が薄れ、「抜けていく」という経路を示す意味として解釈される。一方で、zogsox「立つ」のような動詞が現れる場合、「～している、その前に～」という場所的な意味が表される。なお、この場合は、ömnö と urd の両方が使用可能である。

24) Ömnö-ö jav-san cerg-ijg güjc-ež türüül-ex üje-d ard
前-REFL 行く-VN.PST 軍事-GEN 追う-CVB.IPFV 勝つ-VN.FUT 時-DAT 後ろに
n' mor'-d-yn tuuraj sonso-gd-ox-od erge-ž xar-val
3POSS 馬-PL-GEN 蹄 聞く-PASS-VN.FUT-DAT 回る-CVB.IPFV 見る-CVB.COND
arv-aad xün cuvra-ld-n **jav-aa-gijn ömnö** bor mor'-toj,
10-APN 人 並ぶ-MUT-CVB.SIM 行く-VN.COMT-GEN ÖMNÖ 茶色 馬-POSS
xöx deel-tej xün xuj salxi šig xurd-l-an jav-laa.
青 デール-POSS 人 竜巻 風 のように 速い-IMP-CVB.SIM 行く-TV.PST
「自分の前にいた軍事を追い詰めた時に、後ろから馬の蹄が聞こえ、後ろを向いて見ると、おおよそ 10 人の人々が並んで**歩いている、その前を**白い馬に乗り、青デールを着た人物が竜巻のように急いで駆け抜けていった」 (MNC)

向井 (2006) などは、[属格 + ömnö] は「ある時点により近い」と述べており、[名詞+属格 -IJn] という構造の例が挙げられている。一方、今回の調査では [形動詞 -x + 属格 -IJn] という構造も確認されている。これは「〜する前に」という意味を表し、文脈全体として「前もって何かをする」というニュアンスで使用されている。述語の動詞は、erge-ž jav-「巡り歩く」という複合動詞であり、副動詞接辞 -ž によって動作の行為の進行が表されている。

25) Xašir malčn-y zanšl-aar **untax-yn ömnö** xot-oo erge-ž
老練 遊牧民-GEN 伝統-INS 寝る-GEN ÖMNÖ まち-REFL 回る-CVB.IPFV
jav-av.
行く-VN.PST
「老練な遊牧民の伝統に従い、**寝る前に**集落（自分の）を巡り歩いた」 (MNC)

上記の [形動詞 -x + 属格-IJn + ömnö] という構造を [形動詞 -x + 奪格 -AAs + ömnö] に置き換えても大きな違いがないように思われるが、文脈によって異なる点が見られる。詳細は、以下の節で述べる。

6.2.2. 奪格を要求する ömnö が表す意味と用法

表 5 でまとめたように [奪格 + ömnö] は「ある時点から離れた過去」や「前」というニュアンスを表す。上述のように、[形動詞 -x + 属格-IJn + ömnö] の構造を [形動詞 -x + 奪格 -AAs + ömnö] に置き換えても大きな違いがないように思われる。しかし、文脈によっては [形動詞 -x +奪格 -AAs + ömnö] の方が、「ある行為が行われる前に必ず何か別の行為を先に行う」という強い確約や決意が含まれる、というニュアンスが強い。例えば、以下の例のように述語の動詞に「〜をする必要がある」という文末の義務表現を加えることで、その行為を確実に行わなければならないという意味がさらに明確になる。その場合は、[形動詞 -x + 属格-IJn + ömnö] の構造に置き換えることは不可能である。

26) Bi ger-t-ee **xarix-aas-aa ömnö** delgüür or-ox xereg-tei baj-na.
1.SG 家-DAT-REFL 帰る-ABL-REFL ÖMNÖ 店 入る-VN.FUT 用事-DS あ る -TV.PRS
「私は家に**帰る前に**店に寄らなければならないのである」 (筆者作例)

以下の例も、[形動詞 -x +奪格 -AAs + ömnö]という構造であり、主節の行為である Tömör mord-on jav-žee「トゥムルが (馬に) 乗って行った」という出来事が、日の出という時点よりも前に行為が行われたというニュアンスを含んでいる。

27) **Üür+cajx-aas ömnö** Tömör mord-on jav-žee.
日が明ける.VN.FUT-ABL ÖMNÖ PN 乗る-CVB.SIM 行く-TV.PST
「日が明ける前にトゥムルが (馬に) 乗って行った」 (MNC)

さらに、以下のようにアスペクト［アスペクト接辞 -čix +奪格 -AAs + ömnö］という構造が観察される。その場合は、「ある動作が完全に終わってしまう前に、必ず何か別の行為を先に行う」という決意が含まれる。

28) Jer=n' avtobus **zogs-čix-oos** **ömnö** bi=č ge-sen
概して=3POSS バス 止まる-COMP-ABL ÖMNÖ 1.SG=CUM QT-VN.PST
xödl-öje ge-v.
動く-IMP QT-TV.PST
「概して、バスが**止まってしまう前に**私も出発しようと言った」 (MNC)

以下の例は、［名詞+奪格 -AAs］の構造であるが、［形動詞 -x +奪格 -AAs + ömnö］の構造と同じ意味を表す。

29) Ta nar-yn end buu-ž, **šuurga-n-aas ömnö** otog buudl-aa
2.HON PL-GEN ここ.DEM 止まる-CVB.IPFV 風-N-ABL ÖMNÖ 一族 停留場-REFL
zasax-yg burgas modo-n dotr-oos xar-san bol-ovč zürxle-ž
備える-GEN 柳 木-N 中-ABL みる-VN.PST なる-CONC 決心-CVB.IPFV
ojrt-son-güj.
近つく-VN.PST-NEG
「貴方たちのいるこの場所に止まって、風が出る前に停留場を備えているのを柳の森の中からみたが、決心して近づけなかった」 (MNC)

以下の例は「髭を整えることよりも、まず精神を向上させた方が良い」という、2 つの行為の優先順を比較している。

30) **Saxal-n-aas ömnö** sanaa setgel-ee dodomdo-n öngöl -öx xereg-tej.
髭-N-ABL ÖMNÖ 意見 精神-REFL 向上-CVB.SIM 磨く-VN.FUT 必要-DS
「髭というよりは、精神を向上させる必要がある」 (MNC)

6.3. 属格を要求する urd が表す意味と用法

urd が šönö「夜」、žil「年」などの時間に関する名詞と共起する場合は、ömnö のように［žil「年」 + 属格 -IJn + ömnö］という構造ではなく、名詞を修飾する用法が多く見られる。

31) Ene＝čin' **činij urd šön-ijn** xar+darsan+züüd üü?
これ=2POSS 2.SG.GEN URD 夜-GEN 悪夢 Q
「これが**あなたの昨夜の**悪夢か」 (MNC)

しかし、以下のように ödör「日」という名詞を修飾する際は、ömnö に置き換えても違和感はないが、urd の方がより自然のように思われる。

32) **Naadm-yn urd ödör** jeröösöö nojr+xür-deg-güj jum=ge-lee.
PN-GEN URD 日 全く 眠り+至る-VN.HBT-NEG SFP=QT-TV.PST
「**ナーダム（モンゴル語の伝統的な祭り）の前日**は全く眠れないものだと言った」
(MNC)

以下のような、抽象的な「〜の前に」という意味で使用される例も見られる。つまり、「自分の未来がこれから展開されていく」という前向きなニュアンスを表している。

33) Ireedüj **minij urd** baj-na
未来 1SG.GEN URD ある-TV.PRS
「未来は私の前にある」 (MNC)

属格を要求する urd は、ömnö に比べると以下のように、身体部位の位置を表す際に使用されるという点で異なることが明らかになった。

34) Erdene **temee-nij urd böx-ön** deer tavi-n bar'-ž
PN 駱駝-GEN URD こぶ-N 上に 置く- CVB.SIM 持つ-CVB.IPFV
baj-san buu-ny am-yg erg-üül-ex-ed…
ある-VN.PST 銃-GEN 口-ACC 回す-CAUS-VN.FUT-DAT
「エルデネは**駱駝の前のこぶ**の上に置きながら持っていた銃口を回すと…」 (MNC)

さらに、urd は物の部分的な位置関係を示しており、teregnij urd duguj「車の前輪」とい

う名詞句を形成する用法も見られる。この場合は、urd「前」teregnij「車の」と結びつくことで、「車」という全体に対する部分的な位置を明示し、duguj「輪」が修飾されている。

35) Tereg-nij urd duguj ….
車-GEN URD 輪
「車の前輪」 (筆者作例)

このように、urd は、主に空間的な位置を表すが、身体部位や物の部分的位置を表す際に頻繁に使用されることが確認される。

7. まとめ

本稿では、現代モンゴル語における名詞型の場所語 ömnö「南/前」および urd「南/前」に注目し、主に次の 2 点を明らかにした。まず、コーパスによってそれぞれの語の使用頻度および要求する格 (奪格と属格) の割合を明らかにした。次に、抽出された用例を基に、それぞれの語が要求する格 (奪格および属格) の直前に現れる名詞と、述語動詞の意味および役割を検討した。

本研究の結果、ömnö と urd はそれぞれ異なる場面で異なる役割を果たしていることが明らかになった。特に、ömnö が時間や場所の両方に関連する多くの用途を持つのに対し、urd は場所に特化した用途が多いという特徴が見られた。このように、それぞれの語が現代モンゴル語においてどのように使い分けられているかを示すことができた。以下に、本研究の主な成果を要約する。

7.1. コーパスによる ömnö と urd の使用頻度および要求する格の頻度（割合）

本研究では、コーパス調査を通じで、ömnö (1407 回) と urd (369 回) の使用頻度を明らかにした。ömnö が urd よりも使用頻度が圧倒的に高い原因として、ömnö が場所的な文脈に加え、時間的な文脈でも広く使用される多義的な語であることが挙げられる。また、ömnö は奪格 (873 回/62%) と属格 (62 回/4.4%) の両方を要求するが、urd は属格 (72 回/20%) のみを要求するという点でも大きな違いが見られる。

7.2. 属格と奪格を要求する ömnö の相違点

属格を要求する ömnö は、主に時間的なまたは場所的な文脈に使用され、urd に比べると多義的な性質を持つ。共起する名詞としては、時間を表す名詞 (žil「年」、sar「月」、cag「時間」など)、場所を表す名詞 (barilga「建物」、čečerleg「公園」など)、抽象的な名詞 (am'dral「人生」、xümüüs「人々」など)、人名などが挙げられる。さらに属格を要求する ömnö は [形動詞 -x + 属格-Ijn] という構造も確認されており、これは「〜する前に」という時間的な順調を表す。

一方、奪格を要求する ömnö は、「ある時点から離れた過去」や「前」といった時間的な文脈で使用される。奪格を要求する ömnö の場合は、直前に名詞が現れることが少なく、

代わりに形動詞の構造が共起することが多い。例えば、[形動詞 -x +奪格 -AAs + ömnö] という構造では、「ある行為が行われる前に必ず何か別の行為を先に行う」という強い確約や決意が含まれる。

さらに、 [アスペクト接辞 -čix +奪格 -AAs + ömnö] という構造では、「ある動作が完全に終わってしまう前に、必ず何か別の行為を先に行う」という意図や決意がより明確に表現される。このように、奪格を要求する ömnö は時間的な用法だけではなく、その前後の関係や行動の優先順位を強調するための文法的な手段として重要な役割を果たしている。

7.3. 属格を要求する ömnö と urd の相違点と類似点

属格を要求する ömnö と urd の相違点は、使用文脈や共起する名詞に顕著である。ömnö は時間的名詞 (žil「年」、sar「月」、cag「時間」) と共起し、「〜の前に」という時間的基準を示すほか、抽象的な名詞 (am'dral「人生」、xümüüs「人々」) や固有名詞と共起し、時間的・比喩的な「〜の前で」や「〜を前に」を表現する。さらに [動詞 -x] との共起によって「〜する前に」という時間的な順序を示す。一方、urd は主に場所的な文脈に特化しており、身体部位や物の部分的な位置 (teregnij urd duguj「車の前輪」) を示す際に使用される。

ömnö と urd の類似点は、抽象的な名詞と共起する場合に見られる。例えば、ireedüj minij {urd/ömnö}bajna「未来は私の前にある」のように、前向きな意味を持つ文脈でどちらの語も使用可能である。

略号一覧

1,2: 1st, 2nd person (1,2 人称)
ABL: Ablative (奪格)
ACC: Accusative (対格)
APN: Approximate number (概数)
CAUS: causative (使役)
CONC: Concessive (譲歩)
COND: Conditional (条件)
CUM: Cumulative (累加)
CVB: Converb (副動詞)
DAT: Dative (与位格)
DIR: Directive (方向格)
DS: Derivational suffix (派生)
FP: Focus particle (焦点小辞)
GEN: Genitive (属格)
HBT: Habitual (習慣)
HON: Honorific (敬称)
IMP: Imperative (命令)
INS: Instrumental (道具格)
IPFV: Imperfective aspect (未完了)
N: Hidden n (隠れた n)
NEG: Negative (否定)
OPT: Optative (希求)
PFV: Perfective (完了)
PL: Plural (複数)
PLN: Place name (地名)
PN: Proper Noun (固有名詞)
POSS: possessive (所有)
PRS: Present (現在)
PST: Past (過去)
Q: Question particle (疑問小辞)
QT: Quotative (引用)
REFL: Reflexive (再帰接辞)
SFP: Sentence final particle (文末小辞)
SG: Singular (単数)
SIM: Simultaneous (同時)
TV: Transitive verb (動詞)
VN: Verbal noun (形動

参考文献

Chinggeltei (1999) *A grammar of modern mongolian*: 内蒙古人民出版社.

Kullmann, Rita. and D.Tserenpil (2005) *Mongolian Grammar*.3rd edition. Kullnom.

風間伸次郎 (2022)「アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」『日本語の類型』三省堂.

向井晋一 (2006) 「後置詞」『東京外国語大学言語モジュール＞モンゴル語＞文法モジュール』https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/028.html [2024.11.11]

利用したコーパス

Mongolian National Corpus. https://www.web-corpora.net/ [2024.11.11]

Abstract

The Cases Required by Locative Nouns in Modern Mongolian and Their Meanings -Focusing on ömnö “south/front” and urd “south/front”-

BASBAYAR Munkhdaram

Keywords: Locative nouns, genitive and ablative case requirements, corpus based frequency

This paper focuses on the Mongolian locative nouns “ömnö” (south/front) and “urd” (south/front) in modern Mongolian. Using a corpus, the paper examines the frequency of occurrence of these words and how they are used when requiring the genitive and ablative cases, as well as the meanings they convey in those contexts. Specifically, through the analysis of example sentences, the paper investigates how the nouns that appear immediately before each word and the meanings of predicate verbs affect the interpretation.

The results of the study reveal that “ömnö” and "urd" serve different roles depending on the context. “ömnö” requires both the genitive and ablative cases and co-occurs with temporal nouns to express a temporal reference such as "before" (e.g., before a certain point in time). It also co-occurs with abstract nouns (e.g., “am’dral” [life], “xümüüs” [people]) and proper nouns, expressing temporal or metaphorical meanings like "before" or "in front of." Additionally, it co-occurs with the adjectival verb “x” to indicate a sequence of actions, meaning “before doing something”. On the other hand, “urd” is primarily used in spatial contexts and is used to indicate the partial position of body parts or objects, such, as in “teregnij urd duguj” (the front wheel of a car).

Two Possessive Constructions in Samarkand Tajik[1]

HISHIYAMA Yuto, FAYZIEVA Zarina
(Niigata University, no affiliation)

Keywords: Tajik, Uzbek, possession, language contact

1. Introduction

Samarkand Tajik is one of the Northern dialects of Tajik (Indo-European, Indo-Iranian branch) spoken in the city of Samarkand in Uzbekistan. It has syntactic structures more similar to Turkic ones due to the influence of Uzbek (Turkic, Southeastern branch). It has two ways of expressing possession (note that possession in this paper includes broadly defined possessive relationships including spatial relationships): 1) the inherent izofat construction ("ezāfe" in Persian grammars) and 2) the contact-induced genitive possessive construction. In the izofat construction, the izofat marker *-i* appears on the preceding possessee (e.g., *kitob-i man* [book-IZ 1SG] "my book"), while in the genitive possessive construction the optional genitive possessor precedes the possessee marked by the personal possessive marker as in Uzbek (e.g., *(man-a) kitob-am* [1SG-ACC/GEN book-1SG.POSS] "my book"). Previous studies have insufficiently described the distribution and characteristics of the two constructions.

The purpose of this paper is to clarify the distribution and characteristics of these two possessive constructions in Samarkand Tajik. The quantitative survey conducted in this paper revealed that 1) the frequency of the personal possessive marker is much higher than that of the izofat marker, while the frequency of the genitive possessive construction (with an overt genitive possessor) is lower than that of the izofat construction; 2) the izofat construction is preferred when expressing the following: a) a spatial relationship, b) a construction in which the possessor is a personal pronoun, c) fixed expressions; and 3) the izofat marker *-i* usually appears only once (maximum twice) in the izofat construction.

These results suggest that the expanded usage of the genitive possessive construction induced by the influence of Uzbek is to some extent limiting both the distribution and the structure of the izofat construction in Samarkand Tajik, although it still retains its productivity and original discourse function of expressing the focused possessor.

The remainder of this paper is organized as follows. Section 2 provides an overview of Samarkand Tajik. Section 3 summarizes the previous research and delineates the problems. Section 4 presents the methods and results of the survey. Section 5 discusses the survey results. Finally, Section 6 presents

[1] This research was supported by Grant-in-Aid for Scientific Research 23KJ1014 from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). The content of this paper is an expanded version of the presentation at the 7th Annual Meeting of the Japan Association of Northern Language Studies (September 22, 2024, online) with significant additions and revisions. We deeply appreciate every comment and discussion made at the annual meeting, and the kind and sincere comments of the reviewers.

the conclusion. The transliteration, English translation, glossing of the example sentences, example sentence and figure/table numbers, and text decorations were made by the authors.

2. About Samarkand Tajik

Tajik, a variety of Persian, belongs to the Iranian languages of the Indo-European language family. Its speakers reside primarily in Tajikistan and Uzbekistan (Ido 2007: 1). Within Uzbekistan, Tajik speakers are found in large numbers in two cities, Samarkand and Bukhara (Ido 2007: 1). The Samarkand Tajik addressed in this paper is a spoken variety of Tajik used in the city of Samarkand.

Compared to Standard Tajik, the national language of Tajikistan, Samarkand Tajik has developed synthetic structures through phonetic contraction and suffixation, and has syntactic structures more similar to Turkic languages due to the strong influence of Uzbek (Fayzieva 2024a: 120-121). The vocabulary is influenced by Russian as well as Uzbek. The phonemes are as follows. Vowel phonemes: /i, e, a, o [ɔ], ū [ɵ], u/, consonant phonemes: /p, b, t, d, č [tʃ], j [dʒ], k, g, q, f, v, s, z, š [ʃ], x [χ], ğ [ʁ], h, m, n, l, r, y [j]/.

Note that the speakers of Samarkand Tajik also speak Uzbek and Russian. Zarina Fayzieva, one of the authors of this paper, is a female speaker of Samarkand Tajik, born in Taylak district of Samarkand region in 1997.

3. Previous research

Section 3.1 summarizes the descriptions on the Tajik language in general, Section 3.2 summarizes the descriptions on Samarkand Tajik, and Section 3.3 delineates the problems.

3.1. Previous research on the Tajik language in general

Ido (2005: 26-27) states that the izofat (original: "izafet") construction and the use of pronominal clitics[2] are the two primary ways of expressing possession in Tajik. The following is a summary of Ido (2005: 26-27, 38).

In the izofat construction, the possessee, to which the izofat particle *-i* is suffixed, precedes the possessor (e.g., *kitob-**i** man* "my book"). This construction is also used in adjective modifications (e.g., *kitob-**i** nav* "new book").

Pronominal clitics (1SG *-(y)am*, 2SG *-(y)at*, 3SG *-(y)aš*, 1PL *-(y)amon*, 2PL *-(y)aton*, 3PL *-(y)ašon*)[3] are suffixed to the possessee (e.g., *kitob-**am*** "my book"). The suffix *-(y)a*[4], which is apparently the "genitive case" suffix, may be used in conjunction with pronominal clitics (e.g., *Ayni-**ya** kitob-aš*

[2] These correspond to what we call personal possessive markers. Note that these markers are inherent elements of Persian as well as Tajik.

[3] The 'buffer' sound /j/ (represented as *y* in this paper) is inserted between a vowel other than /a/ and a pronominal clitic that follows it (Ido 2005: 26).

[4] This marker is a "colloquial and dialect form of the enclitic *-ro*" (Perry 2005: 80). According to Perry (2005: 80), the function of the enclitic *-ro* is manifested in modern language as a marker of the direct object where it is definite or specific. In certain literary registers, *-ro* is used as an equivalent of the genitive *-(y)a* (Ido 2005: 26).

"Ayni's book"). The use of this suffix with a first or second person possessor seems to be non-standard (e.g., Bukharan Tajik: *man-**a** hamsoyem* [1SG-ACC/GEN neighbour.1SG.POSS] "my neighbour"). This construction is in correspondence with a possessive construction in Uzbek (e.g., *mening hamsoya-m* [1SG.GEN neighbour-1SG.POSS] "my neighbour"), which could be ascribed to language contact between Tajik and Uzbek.

Focus appears to affect the speaker's choice between the two possessive expressions. If the focus is on the possessor, the izofat construction seems to be preferred. If the possessee is focused, the use of a pronominal clitic seems to be preferred (compare examples (1)a and (1)b below).

(1) a. *kitob-i man gum šud-a-ast*
book-IZ 1SG lost become-PTCP-be.3SG
"MY book (not someone else's) is lost."
b. *kitob-am gum šud-a-ast*
book-1SG.POSS lost become-PTCP-be.3SG
"My BOOK (not, e.g., notebook) is lost."

(Ido 2005: 27)

Perry (2005: 83) states that in Northern dialects of Tajik, which also includes Samarkand Tajik, a construction using *-(y)a* (e.g., *muallim-a kitob-aš* [teacher-ACC/GEN book-3.POSS] "the teacher's book") widely replaces the Persian type of izofat and the model for this seems to be the equivalent Uzbek NP type (e.g., *muallim-ning kitob-i* [teacher-GEN book-3.POSS] "the teacher's book").

3.2. Previous research on Samarkand Tajik

Fayzieva (2024a: 32-33) describes that there are two ways in which possession is expressed in Samarkand Tajik: the izofat construction and the genitive possessive construction. The following is a summary of Fayzieva (2024a: 32-33).

The izofat construction is a common construction which is also used in Persian. In this construction, the possessee, to which the izofat marker *-i* is attached[5], precedes the possessor (e.g., *kitob-**i** man* "my book"). This construction is also used in adjective modifications (e.g., *kitob-**i** nav* "new book"). The genitive possessive construction is absent in Persian, and can be attributed to as a borrowing from Uzbek. In this construction, the possessor is marked by the accusative-genitive case marker *-(y)a*, and the possessee is marked by the personal possessive marker (1SG *-(a)m*, 2SG *-(a)t*, 3SG *-(a)š*, 1PL *-(a)mo(n)*, 2PL *-(a)ton*, 3PL *-(a)šon*)[6] (e.g., *man-**a** kitob-**am*** [1SG-ACC/GEN book-1SG.POSS] "my book").

[5] The word-final vowel *a* drops in front of the izofat marker (e.g., *xoni tu* < *xona+i tu* "your house") (Fayzieva 2024a: 26). If a word ending in the vowel *i* is followed by the izofat marker, the vowel is not lengthened (e.g., *marojni man* < *marojni+i man* "my ice-cream").

[6] When preceded by a consonant, the forms with the initial vowel *a* are added. When the preceding sound is one of *-ū* or *-o*, the forms without the initial vowel *a* are added (e.g., *rū-š* 'his/her face', *asar-o-šon* [novel-PL-3PL.POSS] "their

On the differences between both constructions, Fayzieva (2024b: 29/63-32/63) notes that 1) the izofat construction can express wider relationships than the genitive possessive construction (e.g., unlike many other examples, (2) is only given by the izofat construction), and 2) "A's B's C('s D's...)" as in (3) is expressed by the genitive possessive construction because the izofat marker can appear only once in the izofat construction.

(2) *peš-i stol-ba isto*
front-IZ table-DAT/LOC stand(PRS)
"Stand in front of the table!"

(Fayzieva 2024b: 30/63)

(3) *hamsoya jūrem-a dadeš-a mošin-aš-a*
neighbor friend.1SG.POSS-ACC/GEN father.3SG.POSS-ACC/GEN car-3SG.POSS-ACC/GEN
šineš šab kafid-a-s
tire.3SG.POSS yesterday burst(PST)-PTCP-3SG
"Apparently my neighbor's father's car tires went flat yesterday."

(Fayzieva 2024b: 32/63)

3.3. Delineating the problems

Previous studies have insufficiently described the characteristics of the two constructions. Although Perry (2005: 83) states that a construction using the genitive widely replaces the izofat construction in Northern dialects (see 3.1), the distribution of those constructions is not discussed in detail. Ido (2005: 27) describes that focus appears to affect the speaker's choice between the izofat construction and the use of personal possessive markers (see 3.1). However, when the genitive possessive construction has an overt genitive possessor, their differences cannot be explained by focus. Regarding Fayzieva's (2024b: 29/63-32/63) description that the izofat construction can express a wider range of relationships (see 3.2), the research does not specifically explain what kind of relationships each construction tends to express. Her statement that only one izofat marker appears in the izofat construction seems to mean that an izofat construction cannot be embedded into another izofat construction (see 3.2). This statement requires verification as well.

This study aims to clarify the characteristics and distribution of each construction[7] by conducting a survey described in the next section.

novels"). When the preceding sound is one of *-a*, *-i* or *-u*, the last vowel of the word and the initial vowel of the marker merge into *e* (e.g., *bačča* "child", *baččem* "my child", *bozi* "game", *bozet* "your game", *doru* "medicine", *doreš* "his/her medicine") (Fayzieva 2024a: 33).

[7] Note that in this paper, genitive possessive constructions also refer to those that do not include an overt genitive possessor, such as *kitob-am* "my book" in (1)b.

4. Survey

Section 4.1 describes the survey method, and Section 4.2 presents the survey results.

4.1. Methods

The two possessive constructions were extracted from textualized recordings of native speakers' speech: Recording A (published on Fayzieva 2024: 126-165) and Recording D (unpublished). We compared the two constructions according to the frequency of the markers, and semantic relationships (e.g., alienable / inalienable) and types (e.g., personal pronoun / common noun) of two NPs in the constructions. Number of occurrences of the izofat marker in the izofat construction was also examined. Details of the recordings are as follows:

Recording A lasts 19 minutes and 12 seconds and contains about 2400 words. It was recorded in Taylak district of Samarkand in August 21, 2021. The content of the conversation is a recollection of the past, in which HK (female, year of birth: 1949) talks about living in Afghanistan for three years with FF (male, year of birth: 1969) and his brother. Recording D lasts 17 minutes 45 seconds and contains about 2000 words. It was recorded in Taylak district of Samarkand in March 19, 2023. The content of the conversation is about various topics in daily life. The speakers are NS (male, year of birth: 1956), FF (male, year of birth 1969), DS (female, year of birth: 1971), and NF (male, year of birth: 2002). All of the speakers were born in and spent their language formative years in Taylak district, Samarkand.

In analyzing the survey results, the author (Zarina Fayzieva), a native speaker of Samarkand Tajik, used her own introspection.

4.2. Results

The survey revealed that 1) the frequency of the personal possessive marker is much higher than that of the izofat marker, while the frequency of the genitive possessive construction with an overt genitive possessor is lower than that of the izofat construction; 2) the izofat construction is preferred when expressing the following: a) a spatial relationship, b) a construction in which the possessor is a personal pronoun, c) fixed expressions; and 3) the izofat marker *-i* usually appears only once (maximum twice) in the izofat construction.

The frequency of the markers and the constructions

As shown in Table 1, 46 izofat markers and 45 examples of the izofat construction (excluding adjective modifications)[8], and 229 personal possessive markers and 26 examples of the genitive

[8] There was one izofat construction which includes an embedded izofat construction, resulting in two izofat markers in the whole construction (9). In the next subsection on the semantic relationships and types of elements, the whole construction and the embedded construction were treated separately. Therefore, not 45, but 46 examples of the izofat constructions were examined.

possessive construction with an overt genitive possessor were extracted. Note that 7 examples of the izofat construction contained elements with the personal possessive marker (see (10)).

Table 1. The frequency of the markers and the constructions

Izofat markers	46
Personal possessive markers	**229**
Izofat constructions	**45**
Genitive possessive constructions with an overt genitive possessor	26

Semantic relationships and types of elements

Both constructions can represent both inalienable possession (e.g., body parts as in (4) and (5)) and alienable possession (e.g., *asar-i Nodir* [work-IZ PN] / *Nodir-a asar-aš* [PN-ACC/GEN work-3SG.POSS] "Nodir's work" (Fayzieva 2024b: 29/63-30/63)).

(4) *in xest-a-s=u binni Feruz-a*
this stand(PST)-PTCP-3SG=and nose.IZ PN-ACC/GEN
gazid-a kit-a-s.
bit(PST)-PTCP take(PST)-PTCP-3SG
"He stood up and suddenly bit his brother's nose."

(Recording A, Fayzieva 2024a: 143)

(5) *akun man-a dast-am-ba Feruz, šiš mah-a*
now 1SG-ACC/GEN hand-1SG.POSS-DAT/LOC PN six month-ADJLZ
"I had Feruz in my hands, six-month-old."

(Recording A, Fayzieva 2024a: 132)

A notable difference was found in the proportion of spatial relationship expressions: 41.3% (19 out of 46 examples) for the izofat construction, and 11.5% (3 out of 26 examples) for the genitive possessive construction. According to the author's introspection, spatial relationships are normally expressed by the izofat construction.

It was also notable that 13 of the 19 examples of izofat constructions expressing spatial relationships were marked by the dative-locative case marker *-ba* as in (6), while 3 examples of genitive possessive constructions expressing spatial relationships were not as in (7). According to the author's introspection, however, it is possible to attach *-ba* to the genitive possessive construction as well (e.g., *peš-am-ba* [front-1SG.POSS-LOC] "in front of me").

(6) *dan-i paraxod-ba šin-ond*
inside-IZ steamship-DAT/LOC sit(PRS)-CAUS(PST)
"They made us sit in the steamship."

(Recording A, Fayzieva 2024a: 132)

(7) *dom-o-ya čet-aš devol*
house-PL-ACC/GEN side-3SG.POSS wall
"There were fences around the houses."

(Recording A, Fayzieva 2024a: 136)

Regarding the types of elements, the proportion of examples which include personal pronouns[9] as the possessor was higher in the izofat construction: 19.6% (9 out of 46 examples) for the izofat construction, 7.7% (2 out of 26 examples) for the genitive possessive construction.

(8) *peš-i man-ba hast ku*
front-IZ 1SG-LOC exist MOD
"It is by my side (as you know)."

(Recording D)

(9) *akun man-a dast-am-ba Feruz, šiš mah-a* (=5)
now 1SG-ACC/GEN hand-1SG.POSS-DAT/LOC PN six month-ADJLZ
"I had Feruz in my hands, six-month-old."

(Recording A, Fayzieva 2024a: 132)

Some of the examples of the izofat construction were fixed expressions, which are not normally interchanged with the genitive possessive construction. For example, while the literal meaning of *narx-i ota+bovo* in (10) is "the price of father and grandfather," it is a fixed expression that means "a very high price." The corresponding genitive possessive construction *ota+bovo-ya narx-aš* is seen as rather unnatural.

(10) *ganda bamaza bud-a-s a supermarket kit-agi da*
very delicious be(PST)-PTCP-3SG from supermarket take(PST)-PTCP MOD
narx-i ota+bovo ku
price-IZ father+grandfather MOD
"It's very delicious. It's obvious that you bought it from the supermarket, the price is very high."

(Recording D)

[9] In Samarkand Tajik, the demonstrative pronoun *vay* "that" and its plural form *vayo* "those" are substituted for the 3rd person pronouns. Therefore, personal pronouns here only refer to the 1st and 2nd person pronouns.

Number of occurence of the izofat marker in the izofat construction

Among the 45 examples of the izofat construction, there was one example which includes an embedded izofat construction, resulting in two izofat markers appearing in the whole construction. According to the author's introspection, this is fairly acceptable when the head is a spatial noun and the dependent is a conventionally used phrase, like *xoni mohon* "our house" in (11).

(11) [*pušt-i* [*xoni mohon*]] *anamin* *tirezo-mo* *šišt-a-s-u...*
back-IZ house.IZ 1PL this window.PL-1PL.POSS sit(PST)-PTCP-3SG-and
"At the back of our house, (where) our windows were, they were sitting and..."
(Recording A, Fayzieva 2024a: 154)

As mentioned above, 7 examples of the izofat constructions contained elements with the personal possessive marker. In three of them, the possessor was a reflexive personal pronoun (e.g., *avqot-i xud-aš-a* [food-IZ self-3SG.POSS-ACC/GEN] "their own food"). Examples such as (12), which represent "A's B's C," were also found. In (10), if the dependent is made into an izofat construction (e.g., *tirezo-ho-i mohon*), it can be considered unnatural, as it is not a conventionally used phrase.

(12) *tag-i* *tirezo-ho-mo* *balkon* *barin* *bud-da*
under-IZ window.PL-PL-1PL.POSS balcony like be(PST)-MOD
"There was like a balcony under our windows."
(Recording A, Fayzieva 2024a: 154)

5. Discussion

The survey results suggest that the expanded usage of the genitive possessive construction induced by the influence of Uzbek is to some extent limiting both the distribution and the structure of the izofat construction in Samarkand Tajik.

First, the survey result that personal possessive markers were extracted considerably more than izofat markers suggests that using the personal possessive marker is a more common way to express possession in Samarkand Tajik. Although comparisons with Standard Tajik and Persian are necessary, a higher frequency of the izofat marker is expected in these languages.

Second, the survey result that the izofat construction was widely used to represent a spatial relationship indicates that the distribution of the izofat construction is narrowed to some extent in Samarkand Tajik. Since spatial nouns are closed class words and are used frequently, spatial expressions in the izofat construction might have become somewhat conventionalized expressions. Thus, it is thought that the inherent izofat construction remains without being replaced by the contact-induced genitive possessive construction, along with some old and fixed expressions.

Third, the survey result that the izofat marker *-i* usually appears only once in the izofat construction (meaning that the izofat construction doesn't usually allow another izofat construction embedded) indicates that the structural flexibility of the izofat construction is limited in Samarkand Tajik. This may reflect a greater preference for head-final NPs due to the influence of Uzbek. In Persian or Standard Tajik, such a strict limitation does not exist. For example, in the Persian example (13), five izofat markers appear in one izofat construction (a five-layered izofat construction).

(13) [*čarx-**e*** [*māšin-**e*** [*pedar-**e*** [*dust-**e*** [*xāne-**ye*** *baqali-yam*]]]]]
tire-IZ car-IZ father-IZ friend-IZ house-IZ neighbor-1SG.POSS
diruz *yek daf'e* *pančar šod*
yesterday suddenly go.flat(PST)
"Apparently my neighbor's father's car tires suddenly went flat yesterday."
(Yoshie 2013: 377)

In addition to the distribution and the structural flexibility of the izofat possessive construction being limited, the influence of the Uzbek language can also be seen in adjective modifications. In Samarkand Tajik, the Uzbek-type prenominal modification, which is impossible in Persian and Standard Tajik, is considered to be more common than the inherent izofat construction. According to the author's introspection, the most natural translation of "I bought a new book yesterday" is *Man shab **nav kitob*** [new book] *xaridam*, not *Man shab **kitob-i nav*** [book-IZ new] *xaridam*. Research on adjective modifications is a subject for future study.

However, it is also suggested from the survey results that the izofat construction still retains its productivity and original discourse function in Samarkand Tajik. No strict limitation on the combinations of two nouns means that the izofat construction is still productive, although not as much as in Standard Tajik and Persian. This argument is supported by the following survey results: 1) the frequency of the izofat construction is higher than that of the genitive possessive construction with an overt genitive possessor, and 2) the fact that the proportion of examples which include personal pronouns as the possessor is higher in the izofat construction. Therefore, it can be said that the izofat construction is still preferred when the possessor is focused (see 3.1).

6. Conclusion

This paper dealt with two possessive constructions in Samarkand Tajik: the izofat construction and the genitive possessive construction.

The survey revealed that 1) the frequency of the personal possessive marker is much higher than that of the izofat marker, while the frequency of the genitive possessive construction with an overt genitive possessor is lower than that of the izofat construction; 2) the izofat construction is preferred when expressing the following: a) a spatial relationship, b) a construction in which the possessor is a

personal pronoun, c) fixed expressions; and 3) the izofat marker *-i* usually appears only once (maximum twice) in the izofat construction.

These results suggest that the expanded usage of the genitive possessive construction induced by the influence of Uzbek is to some extent limiting both the distribution and the structure of the izofat construction in Samarkand Tajik, although it still retains its productivity and original discourse function of expressing the focused possessor.

Future work will include conducting a survey on Standard Tajik and Persian, and comparing them with the results of this study.

Abbreviations

1, 2, 3:	1st, 2nd, 3rd person	IZ:	Izofat	PRS:	Present
ACC:	Accusative	LOC:	Locative	PST:	Past
CAUS:	Causative	MOD:	Modality	PTCP:	Participle
DAT:	Dative	PL:	Plural	SG:	Singular
GEN:	Genitive	POSS:	Possessive	-:	Morpheme boundary

References

Fayzieva, Z. (2024a) *The Verb System of Samarkand Tajik*. Master's thesis. Tokyo University of Foreign Studies.

_____ (2024b) Samarkand Tajik. [in Japanese] *Journal of the Institute of Language Research No.28*. 1/63-63/63.

Ido, S. (2005) *Tajik*. Languages of the World / Materials 442. München: Lincom Europa.

_____ (2007) *Bukharan Tajik*. Languages of the World / Text Collections 26. München: Lincom Europa.

Perry, J. R. (2005) *A Tajik Persian Reference Grammar*. Leiden - Boston: Brill.

Yoshie, S. (2013) Possessive and Existential Expressions of Persian. [in Japanese] *Journal of the Institute of Language Research No. 18*. 501-555.

サマルカンド・タジク語における 2 つの所有構造について

菱山　湧人・ファイズエワ　ザリナ
（新潟大学・所属なし）

キーワード：タジク語，ウズベク語，所有，言語接触

サマルカンド・タジク語はウズベキスタンのサマルカンド市で話されるタジク語の北部方言の一つである。この言語は、固有のエザーフェ構造と、ウズベク語の影響を受けた属格所有構造の 2 つの所有構造を持つ。エザーフェ構造では、エザーフェ標識が先行する被所有物名詞に現れる（例：*kitob-i man* [本-エザーフェ 私]「私の本」）。一方、属格所有構造では、人称所有標識が付された被所有物名詞の前に、任意の属格所有者名詞が先行する（例：*(man-a) kitob-am* [私-属格 本-1 人称単数]「私の本」）。両構造の分布や特徴に関する先行研究の記述は不十分である。

本稿の目的は、サマルカンド・タジク語におけるこれら 2 つの所有構造の分布と特徴を明らかにすることである。録音の書き起こしテキストをもとに行った量的調査の結果、1）人称所有標識の頻度がエザーフェ標識の頻度よりはるかに高い一方、属格所有者名詞が明示された属格所有構造の頻度はエザーフェ構造の頻度より低いこと、2）位置関係を表わす場合、所有者が人称代名詞である場合、慣用句では、エザーフェ構造が好まれること、3）エザーフェ構造ではエザーフェ標識が通常 1 回（最大 2 回）しか出現しないこと（エザーフェ構造には通常、他のエザーフェ構造が埋め込まれないこと）、が分かった。

これらの結果から、サマルカンド・タジク語におけるエザーフェ構造は、焦点が所有者にある場合に用いられるという本来の談話的機能と生産性を保持しているものの、所有を表すのに専ら属格所有構造を用いるウズベク語の影響で属格所有構造の使用が拡大した結果、その分布と構造はある程度制限されていることが示唆される。

ウズベク語における時間的連続と条件を表す節連結の意味的連続性

日髙　晋介
（筑波大学）

キーワード：アルタイ型言語，チュルク諸語，ウズベク語，節連結，条件

1. はじめに

本稿では、ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) において、「時間的連続」を表す節連結が「条件」も表すのかという問題について論じる。Dixon (2009: 14) は、多くの言語で「相対的時間」を表す ‘when’ 節と条件節には密接な関わりがあると述べている。しかし、「時間的連続」と「条件」の関連については何も指摘されていない。他方、ウズベク語の先行研究では「時間的連続」を表す形式は *V-(i)sh bilan* [V-VN with]「〜して (すぐに)」、*V-(i)b* [V-CVB.SEQ]「〜して」、*V-gach* [V-CVB.SEQ]「〜して (すぐに)」とされており、それらの用例には「条件」とも捉えられる用例がある。風間 (2022) も、アルタイ型言語 (トルコ語、モンゴル語ハルハ方言、朝鮮語、日本語) における「条件」と「時間的連続」に連続性があることを指摘している。そこで、本稿では、母語話者への聞き取り調査を行うことで、ウズベク語の「時間的連続」と「条件」の関連性について明らかにする。調査結果から、Dixon (2009: 14) で指摘されているように、ウズベク語でも「相対的時間」と「条件」に密接な関わりがあることを検証した。考察では、Dixon (2009) でもウズベク語の先行研究でも述べられていない、「時間的連続」と「条件」の連続性に焦点を当て、「時間的連続」を表す形式を用いる際には ①前件の成立が前提とされること、 ②前件と後件に時間的な前後関係が必要とされることを明らかにした。つまり、①かつ②の条件が揃ったときのみ、「時間的連続」を表す形式を用いて「条件」を表すことができる。したがって、今回調査した「時間的連続」と「条件」との関連は、Dixon (2009: 14) によって指摘された「相対的時間」と「条件」の関連よりも限定的であると結論付ける。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で先行研究を概観したのち問題提起を行い、3 節でインフォーマント調査の方法と結果を述べる。4 節でインフォーマント調査の結果に基づいた考察を行い、5 節で結論と今後の課題を述べる。なお、本稿における例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特にことわりのない限り筆者によるものである。

2. 先行研究

2.1 節で Dixon (2009) をもとにしたウズベク語における節連結形式の整理を行い、2.2 節で時間的連続と条件の連続性について議論している風間 (2022) を概観し、問題提起を述べる。最後に、2.3 節で本稿での調査に関わる先行研究として、内藤 (2019) を概観する。

2.1. Dixon (2009) をもとにした、ウズベク語における節連結形式の整理

Dixon (2009) は、言語類型論の観点から、節間の意味関係を表すために用いられる、異なる文法的手段を検証することを目的としている。ただし、ここでいう節連結には関係節と補文節は含まれない。

Dixon (2009: 2) は、表 1 のように、英語の標識を例に挙げて節連結の意味的タイプをまとめ、一般的に節連結は二つの節を含むとしている。表 1 にある、FC = Focal clause「焦点節」は二節間連結における中心的な動作や状態に言及するのに対して、SC = Supporting clause「支持節」は、焦点節の時間的環境を設定したり、焦点節のための前提または条件、あるいは焦点節の前置きを特定したりする (Dixon 2009: 3)。これらは意味論的な単位である焦点節と支持節は、統語論における主節と非主節にたいてい対応する (Dixon 2009: 4)。

表 1: 節連結の意味的タイプ

	LINKING TYPE	exemplified by markers in English, with information on whether each marks Supporting clause [SC] or Focal clause [FC]
I	Temporal	
Is	Temporal succession	and, then, and then [all FC]
Ir	Relative time	after, before, when, since, until, while [all SC]
Ic	Conditional	if [SC] (... then [FC])
II	Consequence	
IIc	Cause	because [SC], therefore [FC]
IIr	Result	(and) so [FC]
IIp	Purpose	in order that, (in order) (for) to [both FC]
III	Possible consequence	in case, lest [SC]
IV	Addition	
IVu	Unordered addition	and [no SC/FC distinction]
IVs	Same-event addition	and, moreover [both FC]
IVe	Elaboration[1]	<apposition> [2nd clause is FC]
IVc	Contrast	but [FC], although [SC]
V	Alternatives	
Vd	Disjunction	or [no SC/FC distinction]
Vr	Rejection	instead of [SC]
Vs	Suggestion	rather than [SC]
VI	Manner	
VIr	Real	like, in the way that [both SC]
VIh	Hypothetical	as if (, like) [both SC]

(Dixon 2009: 2)

[1] Elaboration「精緻化」とは、「第二の節が出来事あるいは状態についての追加情報を加えて第一の節をそのまま繰り返す」ことを指す (Dixon 2009: 27)。

本稿では、上記の表 1 に基づいてウズベク語における節連結の諸形式を分類する。下記の表 2 に意味と形式の対応一覧を挙げる。この一覧では、筆者が、先行研究 (Kononov 1960, Bodrogligeti 2003) の用例から判断して、それぞれの形式を分類している。なお、本稿で問題とする諸形式には太字を付す。

表 2: ウズベク語の節連結における意味と形式の対応一覧

		形動詞／動名詞 （＋後置詞／名詞）	副動詞	接続詞	左記 以外
I: 時間	Is: 時間的連続 「して、」	***V-(i)sh bilan*** [V-VN with]	***V-(i)b*** ***V-gach***		
	Ir: 相対的時間	*V-(i)sh-dan ilgari*「する前」 [V-VN-ABL before] *V-gan-dan so'ng*「した後」 [V-PTCP.PAST-ABL after] ***V-gan-da***「した時」 [V-PTCP.PAST-LOC] *V-(a)yotgan-da*「している時」 [V-PTCP.PRS-LOC] *V-gan-dan beri*「して以来」 [V-PTCP.PAST-ABL since]	*V-guncha* 「～まで」		
	Ic: 条件 「すれば、」	***V-gan-da***			***V-sa*** [V-COND]
II: 帰結	IIc: 原因 「ので、」	*V-(i)sh uchun* [V-VN for] *V-gan uchun* [V-PTCP.PAST for]	*V-(i)b*		
	IIr: 結果 「した結果、」	*V-(i)sh natija-si-da/oqibat-i-da* [V-VN result-3.POSS-LOC]			
	IIp: 目的 「ために、」	*V-(i)sh uchun* [V-VN for] *V-(i)sh-ga* [V-VN-DAT]	*V-gani,* *V-gali*		
III: 潜在的帰結 「しないように、」		*V-maslik uchun* [V-VN.NEG for]			
IV: 追加	IVu: 順不同 の追加				並置
	IVs: 同じ出来事 の追加		*V-(i)b*		
	IVe: 精緻化		*V-(i)b*		並置
	IVc: 対比 「けれども、」	*V-gan bilan* [V-PTCP.PAST with]		*ammo* */biroq* */lekin*	
V: 代替	Vd: 離接 「、それとも」			*yo/yoki*	
	Vr: 拒絶 「代わりに」	*V-(i)sh evaz-i-ga* [V-VN compensation-3.POSS-DAT]			
	Vs: 提案 「するよりも」	*V-gan-cha* [V-PTCP.PAST-ADVLZ]	*V-guncha*		
VI: 様態	VIr: 現実の様態 「するように」	*V-gan-day/-gek, V-gan-simon* [V-PTCP.PAST-1PL.POSS-like]			
	Vih: 仮説的様態 「まるで～するかのように」	*V-gan kabi/singari* [V-PTCP.PAST-1PL.POSS like]			

表 2 に示したように、Dixon (2009) に基づいてウズベク語の節連結を整理すると、形動詞あるいは動名詞を用いた節連結が最もよく見られる。その他、副動詞を用いたもの、少数ではあるが、接続詞、条件形 *V-sa*、並置を用いたものも見られる。

Dixon (2009: 14) では、多くの言語で Ic. Conditional「条件」が Ir. Relative time「相対的時間」の 'when' と密接な関係を持つことを指摘しているが、Is. Temporal succession「時間的連続」と条件との関係は特に述べていない。

以下の節では、2.1.1 節で Is: 時間的連続を表す形式として、*V-(i)sh bilan* [V-VN with]「～して (すぐに)」、*V-(i)b* [V-CVB.SEQ]「～して」、*V-gach* [V-CVB.SEQ]「～して (すぐに)」を挙げ、2.1.2 節で Ic. Conditional「条件」を表す *V-gan-da* と *V-sa* を挙げ、それらのウズベク語文法書における記述を概観する。なお、これ以降、表 2 で示されている節連結の意味を表す用語には鍵括弧を付けて表記する。

2.1.1. ウズベク語における「時間的連続」を表す形式

ウズベク語の「時間的連続」を表す形式として、*V-(i)sh bilan* [V-VN with]「～して (すぐに)」、*V-(i)b* [V-CVB.SEQ]「～して」、*V-gach* [V-CVB.SEQ]「～して (すぐに)」が挙げられる。それらの用例の中には「条件」とも捉えられる用例がある。それぞれの用法と用例を下記に挙げる。

まず、*V-(i)sh bilan* について述べる。この形式は、動名詞 *V-(i)sh* に後置詞 *bilan* [with]「～と、～とともに」が続いている。母音終わり動詞語幹には動名詞 *-sh* が付き、子音終わり動詞語幹には動名詞 *-ish* が付く。*V-(i)sh bilan* は、動名詞 *V-(i)sh* で表される動作の直後に主節による動作が行われること、もしくは同時に主節の動作が行われることを表す (Kononov 1960: 299-300, Bodrogligeti 2003: 266)。なお、(1) における前件の訳は、Kononov (1960: 300) によるロシア語訳 (С наступлением весны ‖ Как только ‖ Лишь только ‖ Когда наступила весна,…) に対応している。

(1) *Ko'klam* ***kel-ish-i*** ***bilan*** *butun daraxt-lar* *uyg'on-di.*
spring come-VN-3.POSS with all tree-PL wake.up-PAST
「春の訪れとともに/春が来るとすぐに/春が来るとすぐに/春が来ると、全ての木が目覚めた。」(Kononov 1960: 300)

次に、副動詞 (*V-(i)b*、*V-gach*) について述べる。副動詞 *V-(i)b* は、母音終わり動詞語幹には *-b* が付き、子音終わり動詞語幹には *-ib* が付く。どちらとも継起的な意味を表すが、*V-gach* は、従属節事態と主節事態の同時性、あるいは従属節事態が主節事態を引き起こしたことを表す (Kononov 1960: 243, Bodrogligeti 2003: 606)。(2) と (3) はともに継起的な動作を表すが、(3) *kel-gach*「来ると (すぐに)」は同時性が強調されている[2]。

[2] (3) は Bodrogligeti (2003: 606) で'**As soon as** the airplane reached the Amu Darya river, the artificial ice on board began to melt.' と英訳されている。As soon as で *V-gach* による同時性を強調している。

(2) *Ular yana yarim soat* ***ishla-b,*** *ketman-lar-i-ni yelka-ga* ***qo‘y-ib,***
they again half time work-CVB.SEQ hoe-PL-3.POSS-ACC shoulder-DAT put-CVB.SEQ
paxtazor-dan qayt-ish-di.
cotton.farm-ABL return-RECP-PAST
「彼らはもう半時間働いて、自分の鍬を肩に担いで、綿花農場から帰った。」
(Kononov 1960: 241)

(3) *Samolyot Amudaryo-ga* ***kel-gach,*** *bort-dagi sun’iy muz eri-y*
air.plane PLN-DAT come-CVB.SEQ board-ADJLZ artificial ice melt-CVB.CNT
boshla-di.
start-PAST
「飛行機がアム川に来るとすぐに、機上の人工的な氷が溶け始めた。」
(Bodrogligeti 2003: 606)

(1) ~ (3) の「時間的連続」形式が表す意味を検討すると、 (1) の *V-(i)sh bilan* が含まれる節は「春が来る」ことが主節の事態が起こる条件と解釈できるため、「時間的連続」を表す形式によって「条件」を表していると言える。(3) も同様に *kel-gach*「来ると (すぐに)」が主節の条件を表している。しかし、Dixon (2009) もウズベク語の先行研究 (Kononov 1960, Bodrogligeti 2003) でも「時間的連続」と「条件」の関連性については特に言及していない。

2.1.2. ウズベク語における「条件」を表す形式

表 2 では、「条件」を表す形式として、*V-gan-da* と *V-sa* を挙げた。ここでは主に *V-gan-da* について先行研究の記述を概観する。

V-gan-da は、形動詞過去 *V-gan* に処格 *-da* が付いている。形動詞の後の所有人称接尾辞は、主語の数・人称に一致する。(4) の *uyg‘on-gan-i-da*「起きた時に」中に 3 人称所有人称 *-i* があり、これは主語 *Sultanmurod*「スルタンムラド」の人称に一致している。

(4) *Ertasi Sultanmurod* ***uyg‘on-gan-i-da*** *kun yoy-il-ib*
next.morning PN wake.up-PTCP.PAST-3.POSS-LOC sun spread.up-CVB.SEQ
ket-gan=di.
leave-PTCP.PAST=PAST
「翌朝スルタンムラドが起きた時に、太陽の光が広がっていた。」
(Bodrogligeti 2003: 601)

この形式は、表 2 に挙げたように、相対的時間あるいは条件を表す。日髙 (2017) では *V-gan-da* を基本的に時間節 (本稿で言う「相対的時間」) を表すものとし、*V-gan-da* の条件の

読みができる環境として、「従属節事態が起きてから主節事態が起きるという時間的前後関係があり、かつ従属節事態が生じると主節事態も生じることが想定される場合」を挙げている。(5) は相対的時間「〜した時に」を表し、(6) は条件「〜したら」を表している。

(5) *U* ***tur-gan-da,*** *hech* *qanday* *hodisa* *bo‘l-ma-di.*
3SG stand-PTCP.PAST-LOC never how event be-NEG-PAST
「彼が (見張りに) 立った時に、何も起きなかった。」(Kononov 1960: 378)

(6) *Mening* *siz-ga* *munosabat-im* ***yomon*** ***bo‘l-gan-da*** *bun-day*
1SG.GEN 2PL-DAT relationship-1SG.POSS bad be-PTCP.PAST-LOC this-like
gaplash-mas=di-m.
talk-PTCP.FUT.NEG=PAST-1SG
「あなたとの関係が悪かったら、私はこのように話さなかっただろう。」
(Bodrogligeti 2003: 1254)

したがって、発話時時点で主節事態が起こるかどうかが不明である場合で、従属節事態が主節事態よりも後に起こる場合には、*V-gan-da* が用いられない (日髙 2017: 8-9)。(7) は前者の例で、(8) は後者の例である。(7) と (8) では、条件形 *V-sa* が用いられている。

(7) *Ertaga* *yomg‘ir* ***yog‘-sa,*** *men* *u* *yer-ga* *bor-ma-y=man.*
tomorrow rain fall-COND 1SG that place-DAT go-NEG-NPST=1SG
「明日雨が降ったら、私はそこに行かない。」(日髙 2017: 8)

(8) *Agar* *uy-ga* ***kel-adigan*** ***bo‘l-sa-ng,*** *qo‘ng‘iroq* *qil-gach* *kel-gin.*
if house-DAT come-PTCP.NPST be-COND-2SG bell do-CVB come-IMP.2SG
「家に来るなら、電話をしてから来てください。」(日髙 2017: 9)

本稿では、Dixon (2009: 14) によって指摘済みの、「相対的時間」と「条件」の連続性のみならず、「時間的連続」と「条件」の連続性に焦点を当てる。詳しくは次節で述べる。

2.2. 条件と時間的連続との連続性と、問題提起

風間 (2022) は、アルタイ型言語 (トルコ語、モンゴル語ハルハ方言、朝鮮語、日本語) における「条件」と「時間的連続」 (風間 2022 は継起と呼ぶ) の連続性について分析・考察している。風間 (2022: 391-393) は、下記 [1]-[14] の 14 文をもとにして、表 3 の真正条件形式、疑似条件形式、継起形式のどれを使うかについて、各言語の母語話者に尋ねるという方法で調査を行った。それぞれの形式の詳細については風間 (2022: 383-391) を参照されたい。表 3 では、もっぱら反実仮想や仮説条件に用いられる形式を真正条件形式、事実条件を中心に用いられる形式を疑似条件形式、日本語のテ形のような形式を継起形式としている。

表 3: 各言語における真正条件形式と疑似条件形式と継起形式

	トルコ語	モンゴル語	朝鮮語	日本語
真正条件形式	(-AOR)-SA	-VAL	-MYƏN	-BA
疑似条件形式	-INCA	-SAN ČIN, -NGUUT, -TAL	(-PST)-DƏNI, -NIGGA	-TO, -TARA
継起形式	-IP	-AAD	-'ASƏ	-TE

(風間 2022: 391)

なお、太字・下線は、風間 (2017) がデフォルトとする形式に付されている。

[1] お金が {**あれば／あったら**／あると／あって}、あの車を買うんだけれどなあ。
［反実仮想］

[2] 明日 {**雨が降れば／雨が降ったら**／雨が降ると／雨が降って}、私はそこに行かない。
［仮説条件］

[3] 駅に {**着いたら**／着けば／着くと／着いて}、電話してください。
［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）］

[4] ここでは {**夏になると**／夏になれば／夏になったら／夏になって}、よく雨が降る。
［恒常条件］

[5] 箱を {**開けると／開けたら**／開ければ／開けて}、中にハンカチが入っていた。
［事実条件］

[6] その料理を {**食べてみたら**／食べてみると／食べてみれば／食べてみて}、おいしかった。
［事実条件・人称制限述語］

[7] 兄が {**怒ると／怒ったら**／怒れば／怒って}、妹が泣き出した。［原因・異主語］

[8] 風邪を {**ひいて**／ひけば／ひくと／ひいたら}、仕事を休んだ。［原因・同主語］

[9] 音楽を {**聞いていたら**／聞いていると／聞いていて／聞いていれば}、人が来た。
［継続中生起・異主語］

[10] 私 {は/が} 部屋に {**入って／入ると**／入れば／入ったら} ドアに鍵をかけた。
［継起的行為・1 人称主語］

[11] 昨日の晩は疲れて、横に {**なると**／なって／なったら／なれば} 寝てしまった。
［継起的行為・1 人称主語・後件無意志］

[12] ボール {は/が} {**ころがって**／ころがると／ころがれば／ころがったら} 池に落ちた。
［継起的事象・無生物主語］

[13] 冷蔵庫を {**開けて**／開けると／開ければ／開けたら}、ビールを取り出した。
［継起的行為・同一主語］

[14] 袋から {**出して**／出したら／出せば／出すと}、それを食べろ。
［継起的行為・主節の有標なモダリティ（命令）］

表 4 に風間 (2022) による調査結果をまとめる。

表 4: 諸形式の連続性のまとめ

	反実仮想	仮説条件	恒常条件	事実条件	原因	継起
トルコ語	————-(AOR)-SA————		————————————-INCA————————————			—-IP—
モンゴル語	————————-VAL————————			————————**-SAN ČIN**————————		
				————————**-TAL**————————		
			————————————**-NGUUT**————————————			
					————————**-AAD**————————	
朝鮮語	————————-MYƏN————————					—-DƏNI—
				————————**--ƏSS-DƏNI**————————		
				————————**-NIGGA**————————		
					————————**-’ASƏ**————————	
日本語	————————バ————————					
			————————————ト————————————			
	————————————————————タラ————————————————————					
					————————テ————————	

(風間 2022: 413; 太字は筆者による)

上記の調査から、モンゴル語と朝鮮語と日本語では、表 4 の太字で示したように、原因を仲介として、特に [8] 原因、[11] 後件無意志、[12] 無生物主語の文において、疑似的条件形式が継起形式との意味的連続性を示すと述べている (風間 2022: 414)。風間 (2022: 418-419) は、真正条件形式による条件文では前件と後件に因果関係があるとするのは話し手の判断によることから、真正条件形式は「判断」という特性を持つとし、疑似条件形式による条件文では話し手が後件を認識／観察するものと捉えていることから、疑似条件形式は「観察」という特性をもつとし、継起形式は判断にも観察にも関わらないデフォルトの意味を実現する、と結論付けている。判断も観察も伴わない述語は、文末の主節述語がその文で示しているのと同じ性質を帯びるため、意志と無意志が前件・後件で食い違う場合 (例えば [1], [2], [3], [5], [9]) には、継起形式が用いられないという。したがって「時間的連続」を表す形式が「条件」を表している場合 (1) では、どちらの節とも無意志 (「春が来る」「すべての木が目覚める」) のため、継起形式＝「時間的連続」を表す形式が用いられても条件に読めると考えられる。しかし、Dixon (2009) でもウズベク語の先行研究 (Kononov 1960, Bodrogligeti 2003) でも「時間的連続」と「条件」を表す形式の関連性については特に言及されていない。本稿では、特に「条件」と「時間的連続」の間にある意味的な関連を明らかにする。

2.3. 本稿での調査に関わる先行研究

内藤 (2019) は、後置詞 *bilan* [with]「～と、～とともに」を用いた従属節である、*V-(i)sh bilan* と *V-gan bilan* (対比を表す) の使用条件について考察している。その中のインフォー

マント調査の一つで、ウズベク語母語話者に風間 (2017: 43-44) の調査[3]に用いられた 14 文 ([1]-[14]) をウズベク語に翻訳してもらってから、「対比」を表す *V-gan bilan*、本稿で言う「時間的連続」を表す形式 *V-(i)sh bilan*、*V-(i)b*、「相対的時間」を表す形式 *V-gan-da*、「条件」を表す形式 *V-sa* のいずれが用いられるかについて尋ねている。本稿では内藤 (2019) の調査で用いられたウズベク語の文を用いて選択式調査を行うが、*V-gan bilan* は「対比」を表すため選択肢には入れない。他方、*V-gach* については、内藤 (2019) で選択肢として挙げられていないため、本稿での調査では選択肢として追加する。

3. インフォーマント調査

ウズベク語母語話者 2 名 (1989 年生・男性、1994 年生・女性、両者ともタシケント市出身) に、風間 (2022: 391-393) による [1]-[14] の 14 文において、「時間的連続」を表す形式 *V-(i)sh bilan*、*V-(i)b*、*V-gach*、「相対的時間」「条件」を表す形式 *V-gan-da*、「条件」を表す形式 *V-sa* を用いた場合について、それぞれ ○「問題なく使える」、△「少し違和感があるが使える」、×「使えない」のうち一つを選んで回答してもらった。表 5 は、○を 2 点、△を 1 点、×を 0 点として、2 名の回答を点数化した調査結果の一覧である。なお、表 5 では、許容度が低いと判断された 2 点以下の形式のセルは黄色で、3 点以上の形式のセルは薄茶色で、それぞれ塗りつぶす。

その後、母語話者一名に対して、特に次節以降で言及する「時間的連続」を表す形式の使用条件に関して、①調査文の後件書き換えによる追加の聞き取り調査と、②筆者の作例に基づく許容度調査を行った。

[3] 風間 (2017) は、風間 (2022) の前バージョンの論文である。風間 (2022) は風間 (2017) の結論と大差はない。

表 5: 継起と条件に関する調査結果一覧

形式 / 例文［機能］		時間的連続			相対的時間・条件	条件
		V-(i)sh bilan	*V-(i)b*	*V-gach*	*V-gan-da*	*V-sa*
[1]	お金が{**あれば/あったら**}、あの車を買うんだけれどなあ。［反実仮想］	2	0	0	4	4
[2]	明日雨が{**降れば/降ったら**}、私はそこに行かない。［仮説条件］	0	0	0	1	4
[3]	駅に**着いたら**、電話してください。［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）］	4	4	4	4	4
[4]	ここでは**夏になると**、よく雨が降る。［恒常条件］	3	2	4	4	4
[5]	箱を{**開けると/開けたら**}、中にハンカチが入っていた。［事実条件］	1	0	0	3	4
[6]	その料理を**食べてみたら**、おいしかった。［事実条件・人称制限述語］	1	0	0	4	3
[7]	兄が**怒ると/怒ったら**、妹が泣き出した。［原因・異主語］	4	2	4	4	4
[8]	風邪を**ひいて**、仕事を休んだ。［原因・同主語］	2	4	3	4	0
[9]	音楽を**聞いていたら**、人が来た。［継続中生起・異主語］	1	0	0	2	2
[10]	私{は/が}部屋に{**入って/入ると**}ドアに鍵をかけた。［継起的行為・1 人称主語］	4	4	4	3	0
[11]	昨日の晩は疲れて、横に**なると**寝てしまった。［継起的行為・1 人称主語・後件無意志］	3	4	3	3	1
[12]	ボール{は/が}**ころがって**池に落ちた。［継起的事象・無生物主語］	4	4	3	3	0
[13]	冷蔵庫を**開けて**/、ビールを取り出した。［継起的行為・同一主語］	4	4	3	4	0
[14]	袋から**出して**、それを食べろ。［継起的行為・主節の有標なモダリティ（命令）］	3	2	2	0	2

以上の調査結果をもとに、表 6 に各形式の表す意味範囲をおおまかに示す。表 6 には、［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）］[3]、［継続中生起・異主語］[9]、［継起的行為・主節の有標なモダリティ（命令）］[14] の結果が特殊な変数を含んでいるため、これらの例文の点数は考慮に入れていない。なお、「原因」は、［原因・異主語］[7] あるいは［原因・同主語］[8] のどちらかで使われることを表す。

表 6: 各形式の表す意味範囲

		反実仮想	仮説条件	恒常条件	事実条件	原因	継起
条件	*V-sa*	<——————————————>					
相対的時間・条件	*V-gan-da*	<—>		<——————————>			
時間的連続	*V-(i)sh bilan*			<—>		<——————>	
	V-(i)b					<——————>	
	V-gach			<—>		<——————>	

本稿では、これ以降、調査の結果 (表 **5**) のうち、「条件」([1]-[6]) に注目する。明らかになったことを大きく二つに分けて述べる。一つ目は、[反実仮想] [1]、[仮説条件] [2]、[事実条件] [5][6] では、条件 *V-sa* と相対的時間・条件 *V-gan-da* が両方とも用いられうることである。これは、Dixon (2009: 14) による「多くの言語で「相対的時間」を表す 'when' 節と条件節には密接な関わりがある」という見解とも一致する (ただし、[仮説条件] [2] では、相対的時間・条件 *V-gan-da* の許容度は低い)。二つ目は、「時間的連続」を表す形式と「相対的時間・条件」を表す *V-gan-da* とは、たいてい同じ機能で用いられるように見えるが、「時間的連続」を表す形式は [1] [反実仮想]、[5] [事実条件]、[6] [事実条件・人称制限述語] では用いられないことに違いがある。

次節では、ウズベク語の例を挙げながら、「時間的連続」と「条件」、ならびに「相対的時間」と「条件」の関連をそれぞれ考察する。

4. 考察

まず、「時間的連続」が許容されない、[1] [反実仮想]、[2] [仮説条件]、[5] [事実条件]、[6] [事実条件・人称制限述語] について考察し、ウズベク語の「時間的連続」を表す形式は、前件が成立する場合かつ動作の時間的前後関係がある場合に用いられ、この前提を外れて「条件」を表すことはできないことを示す。さらに、「時間的連続」が許容される、[3] [仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令)]、[4] [恒常条件] についても考察する。なお、以下の例文中の * は表 **5** で 0 点、? は 1~2 点、無印は 3~4 点であることをそれぞれ表す。

まず、[1] [反実仮想] と [2] [仮説条件] について述べる。これらの「条件」では、「時間的連続」を表す形式は許容されないか許容度が低い。なお、例文内では、条件 *V-sa*, 相対的時間・条件 *V-gan-da*, 時間的連続 *V-(i)sh bilan*・*V-(i)b*・*V-gach* の順に動詞形式を挙げる。

[1] 反実仮想:

Pul-im *{bo'l-sa/ bo'l-gan-da/* *?bo'l-ish-i bilan/* **bo'l-ib/*
money-1SG.POSS be-COND be-PTCP.PAST-LOC be-VN-3.POSS with be-CVB.SEQ
**bo'l-gach}* *ana* *u* *mashina-ni* *sot-ib* *ol-ar=di-m.*
be-CVB.SEQ exactly that car-ACC sell-CVB.SEQ take-PTCP.FUT=PAST-1SG
「お金が{あれば/あったら/あると/あって}、あの車を買うんだけれどなあ。」

[2] 仮説条件:

Ertaga *yomg‘ir* *{yog‘-sa/* *?yoq-qan-da/* **yog‘-ish-i* *bilan/* **yog‘-ib/*
tomorrow rain fall-COND fall-PTCP.PAST-LOC fall-VN-3.POSS with fall-CVB.SEQ
**yoq-qach}* *u* *yer-ga* *bor-ma-y=man.*
fall-CVB.SEQ that place-DAT go-NEG-NPST=1SG
「明日{雨が降れば/雨が降ったら/雨が降ると/雨が降って}、私はそこに行かない。」

[1]［反実仮想］では前件は現実に成立しておらず、[2]［仮説条件］では前件が必ず成立するとは限らない。したがって「時間的連続」を表す形式が「条件」を表す場合は、前件の成立を前提としていると言える。

次に、[5]「事実条件」について述べる。[5] では「時間的連続」を表す形式は許容されないか許容度が低い。

[5] 事実条件:

Quti-ni *{och-sa/* *och-gan-da/* *?och-ish-im* *bilan/* **och-ib/*
box-ACC open-COND open-PTCP.PAST-LOC open-VN-1SG.POSS with/ open-CVB.SEQ
**och-gach}* *ich-i-da* *dastromol* *bor* *edi.*
open-CVB.SEQ inside-3.POSS-LOC handkerchief existence PAST-3
「箱を {開けると/開けたら/開ければ/開けて}、中にハンカチが入っていた。」

しかし、母語話者から、後件を次の下線部のように変えれば、「時間的連続」を表す形式も用いられるとの指摘を得た (内藤 2019: 198 でも同様の指摘がある)。

[5]’ *Quti-ni* *{och-ish-im* *bilan/* *och-ib/* *och-gach}* *ich-i-da*
box-ACC open-VN-1SG.POSS with open-CVB.SEQ open-CVB.SEQ inside-3.POSS-LOC
dastromol-ni *ko‘r-di-m.*
handkerchief-ACC see-PAST-1SG
「私は箱を {開けると／開けて／開けて}、その中に (ある) ハンカチを見た。」

[5] では、前件→後件という時間的な前後関係を表しているわけではない。一般的に考えれば、ハンカチは箱を開ける前から箱の中にあったのであり、箱を開けたことでハンカチが現れたわけではない。このように後件が前件の事態と重なって継続的に起こっている場合は「時間的連続」を表す形式は許容されない。一方、[5]’ では、前件「開ける」→後件「見る」というような時間的な前後関係を表しており、「時間的連続」を表す形式が許容される。

[6] の［事実条件・人称制限述語］でも、「時間的連続」を表す形式は許容されない。

[6] 事実条件・人称制限述語:

Bu taom-ni ye-b {ko'r-sa/ ko'r-gan-da/ ?ko'r-ish-im bilan/
this dish-ACC eat-CVB.SEQ see-COND see-PTCP.PAST-LOC see-VN-1SG.POSS with
**ko'r-ib/ *ko'r-gach} mazali edi.*
see-CVB.SEQ see-CVB.SEQ tasty PAST
「その料理を{食べてみたら/食べてみると/食べてみれば/食べてみて}、おいしかった。」

しかし、[5]と同様に、後件を「おいしかったと感じた」とした文は母語話者に許容された。

[6]' *Bu taom-ni ye-b {ko'r-ish-im bilan/ ko'r-ib/ ko'r-gach}*
this dish-ACC eat-CVB.SEQ see-VN-1SG.POSS with/ see-CVB.SEQ/ see-CVB.SEQ
mazali ekanlig-i-ni sez-di-m.
tasty SUB-3.POSS-ACC feel-PAST-1SG
「その料理を{食べてみると／食べてみて／食べてみて}、おいしいと感じた。」

[6] では、前件→後件という時間的な前後関係を表しているわけではなく、「おいしい」という状態は食べる前から続いている。このような場合は「時間的連続」を表す形式は許容されない。一方、[6]' では、前件「食べてみる」→後件「感じる」という時間的な前後関係を表しているため、「時間的連続」を表す形式が許容される。

今までの例とは異なり、［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令)］と［恒常条件］には、「時間的連続」を表す形式も用いられる。これらの例が上記の例で考察したことと矛盾がないか検証する。上記の [1]［反実仮想］、[2]［仮説条件］では、「時間的連続」を表す形式が「条件」を表す場合は、前件の成立を前提とすることを述べ、[5]［事実条件］、[6]［事実条件・人称制限述語］では、前件と後件に時間的な前後関係があると述べた。

［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令)］[3] では、どの形式も最高点の 4 が付いているため、どの「時間的連続」を表す形式も用いられる。

[3] 仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）

Stanstiya-ga {kel-sa-ngiz/ kel-gan-ingiz-da/ kel-ish-ingiz bilan/
station-DAT come-COND-2PL.POSS come-PTCP.PAST-2PL.POSS-LOC come-VN-2PL.POSS with
kel-ib/ kel-gach/ telefon qil-ing.
come-CVB.SEQ come-CVB.SEQ telephon do-IMP.2PL
「駅に{着いたら/着けば/着くと/着いて}電話してください。」

恒常条件 [4] では、*V-(i)b* のみが 2 点で、他の形式は 3 点以上である。

[4] 恒常条件

Bu yer-da yoz {kel-sa/ kel-gan-da/ kel-ish-i bilan/
this place-LOC summer come-COND come-PTCP.PAST-LOC come-VN-3.POSS with
?kel-ib/ kel-gach/ tez tez yomg‘ir yog‘-a=di.
come-CVB come-CVB quick quick rain fall-NPST=3
「ここでは {夏になると/夏になれば/夏になったら/夏になって}、よく雨が降る。」

［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令)］と［恒常条件］の場合も,「前件の成立を前提とし、かつ前件と後件に時間的な前後関係がある」ため、「時間的連続」を表す形式が用いられると考えられる。これは、日髙 (2017) が相対的時間 *V-gan-da* が条件に読める環境として、「従属節事態が起きてから主節事態が起きるという時間的前後関係があり、かつ従属節事態が生じると主節事態も生じることが想定される場合」と述べていることに一致する。しかし、「時間的連続」を表す形式は意味的に典型的な「条件」([1]［反実仮想］、[2]［仮説条件］、[5][6]［事実条件］) を表せないことから、相対的時間 *V-gan-da* とは異なる性質を持つと言える。

5. 結論と今後の課題

本稿での調査によって、Dixon (2009: 14) で指摘されているように、ウズベク語でも「相対的時間」と「条件」の間に密接な関わりがあることが検証された。典型的な条件文 (［反実仮想］[1]、［仮説条件］[2]、［事実条件］[5][6]) では、相対的時間・条件 *V-gan-da* と条件 *V-sa* がどちらとも用いられる。

4 節での考察においては、Dixon (2009) でもウズベク語の先行研究でも述べられていない、「時間的連続」と「条件」の連続性に焦点を当てた。[1]［反実仮想］と [2]［仮説条件］で「時間的連続」の諸形式が許容されなかったことから、「時間的連続」には①前件の成立が前提とされることを、そして [5]［事実条件］と [6]［事実条件・人称制限述語］での追加調査からは ②前件と後件に時間的な前後関係が必要とされることを明らかにした。つまり、①かつ②の条件が揃ったときのみ、「時間的連続」を表す形式を用いて「条件」を表すことができる。これは日髙 (2017) の相対的時間・条件 *V-gan-da* が「条件」の読みを持つ場合に一致するが、「時間的連続」を表す形式は意味的に典型的な「条件」は表せないところが相対的時間・条件 *V-gan-da* とは異なる。したがって、ウズベク語における「時間的連続」と「条件」との関連は、Dixon (2009: 14) によって指摘された「相対的時間」と「条件」の関連よりも、限定的である、と結論付ける。

今後の課題として、大きく二点を挙げる。まず一つは、時間的連続を表す形式間 (*V-(i)sh bilan* [V-VN with]「〜して (すぐに)」、*V-(i)b* [V-CVB.SEQ]「〜して」、*V-gach* [V-CVB.SEQ]「〜して (すぐに)」) の差異を明らかにしなければならないことである。本稿での調査によって、

表 6 に示したように互いの表す意味を明らかにしたが、それぞれがどう異なっているのかについては詳細を述べていない。2.1.1 節で挙げた先行研究 (Kononov 1960: 243, Bodrogligeti 2003: 606) による記述のように、意味的な差異があるのかどうか、さらに、意味以外の他の差異についても調べる必要がある。もう一つは他言語との対照をしなければならないということである。日本語では、風間 (2022:418) が蓮沼 (1993) を引用して、疑似条件形式「〜たら」は後件を認識／観察するものであるとし、人称制限や非意志性、モダリティの制限があるとしている。しかし、ウズベク語の疑似条件形式 (本稿で言う相対的時間・条件) *V-gan-da* にはそのような制限がないように見える。筆者は、日本語とウズベク語の疑似条件形式を対照することで、お互いの形式の特性を見極められるのではないかと考えている。さらに、トルコ語の条件を表す形式と対照する必要もあると考える。トルコ語もウズベク語も真正条件形式は共通する音形 (*V-sa*) であるものの、表 3 や表 4 に示したトルコ語の疑似条件形式と継起形式を構成するメンバーは、表 6 に示したウズベク語のそれと大きく異なっている。加えて、真正条件形式は共通する音形 (*V-sa*) であるにも関わらず、各形式が表せる意味が異なっている。トルコ語では「反実仮想」と「仮説条件」しか表せないが、ウズベク語ではそれのみならず、「恒常条件」「事実条件」「原因」までも表せる。この違いはお互いの言語で条件を表す形式のメンバーが大きく異なることが関係しているのか、または他の原因が考えられるのかについても稿を改めて議論したい。

謝辞

本稿は、2021 年 11 月 21 日にオンラインで行われた、日本言語学会第 163 回大会「アルタイ型言語における節連結の意味とその形式的特徴」での発表を大幅に改稿したものである。ワークショップのメンバーならびに当日ワークショップを聴きにいらした皆様、コメントをくださった皆様に感謝申し上げる。

本稿を作成するにあたり、ウズベク語母語話者二名の方からの協力を得た。ここに彼らに深い感謝の意を表する。無論、本稿の誤りは、協力者に一切の責はなく、筆者に帰するものである。

略号一覧

ABL	ablative	奪格	GEN	genitive	属格	PLN	place name	地名
ACC	accusative	対格	IMP	imperative	命令	PN	personal name	人名
ADJLZ	adjectivizer	形容詞化	LOC	locative	処格	POSS	possessive	所有
CNT	continuative	継続	NEG	negative	否定	PTCP	participle	形動詞
COND	conditional	条件	NPST	non-past	非過去	RECP	reciprocal	相互
CVB	converb	副動詞	PAST	past	過去	SEQ	sequential	継起
DAT	dative	与格	PFV	perfective	完結相	SUB	subordinator	従属節化
FUT	future	未来	PL	plural	複数	VN	verbal noun	動名詞

参考文献

Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek.* München: Lincom Europa.

Dixon, R. M. W. (2009) The Semantics of Clause Linking in Typological Perspective. Dixon R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology*. 1-55. Oxford: Oxford University Press.

蓮沼昭子 (1993)「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』73-93. 東京: くろしお出版.

風間伸次郎 (2017)「条件と継起の連続性について: 疑似条件形式を中心として」『北方言語研究』7: 35-68.

_____ (2022)「第 14 章 条件と継起の連続性について―疑似条件形式を中心として―」『日本語の類型』381-421. 東京: 三省堂.

Kononov, Andrej N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*.［現代標準ウズベク語文法］Moskva, Leningrad: Izdatel'stova akademii nauk SSSR.

内藤遼 (2019)「ウズベク語における後置詞 bilan を用いた時を表す従属節について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』15: 195-202.

Semantic Continuity of Clause Linkage between Temporal Succession and the Conditional in Uzbek

HIDAKA Shinsuke
(University of Tsukuba)

Keywords: Altaic Languages, Turkic Languages, Uzbek, clause linkage, conditional

This study discusses whether a clause linkage for temporal succession can express a conditional. Dixon (2009: 14) pointed out that many languages have a close association between a conditional and "when" clause expressing "relative time." However, Dixon (2009) does not indicate an association between "conditional" and "temporal succession." Previous studies have considered *V-(i)sh bilan* [V-VN with], *V-(i)b* [V-CVB] and *V-gach* [V-CVB] as "temporal succession," which can be considered as conditional. Kazama (2022) also discussed the association between "conditional" and "temporal succession" in Altaic-type languages (Turkish, Khalkha Mongolian, Korean, Japanese). The present study clarifies this association through an interview with native Uzbek speakers. The results verify the association between "conditional" and "temporal succession" in Uzbek. This study finds that the realization of protasis is presupposed, and that temporal relation between protasis and apodosis is needed to substitute "temporal succession" for "conditional." That is, "temporal succession" can express a "conditional" only if the above findings are realized. Therefore, the association between "conditional" and "temporal succession" examined in this study is more limited, compared to that between "conditional" and "relative time" pointed out by Dixon (2009).

モンゴル語の動詞形式 -xAAr
―節連結の意味とその形態的特徴から―

山田　洋平
（東京外国語大学）

キーワード：モンゴル語，連結，副動詞，目的節

1. はじめに

本稿はモンゴル語の動詞の取る形式 -xAAr について、とくに次の例 (1) に見る目的節述語になる用法を中心として論じるものである[1]。以下、-xAAr がつく語に下線を引いて示す。以下の議論ではこの形式についてこれ以上の分析はせず、-XAAR というグロスを振る。

(1) *bi calingaa ur'dčilan awaxaar xööcöldöž baigaa.*

bi	calin-AA	ur'dčil-n	aw-xAAr	xööcöld-ž	baj-AA
1SG	salaly-REFL	to.advance-ASS	to.get-XAAR	to.endeavour-SIM	to.be-IPFV

「私は給料を先取りできるように頑張っています」

インタビュー記事 (https://gogo.mn/r/78kyv)

他方、同形の -xAAr が確定条件の意味を表す (2) のような例も見られる。

(2) *sajn dasgal xijgeed irexeer gurwan ügiig neg bolgož xardag.*

sajn	dasgal	xij-AAd	ir-xAAr	guraw/n	üg-IIg	neg	bolgo-ž
well	training	to.do-ANT	to.come-XAAR	three	word-ACC	one	to.make-SIM

xar-dAg.
to.see-HBT

(速読の説明)「よく練習していくと 3 語が 1 語に見える (ようになる)。」

インタビュー記事 (https://gogo.mn/r/45591)

そもそも -xAAr は形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が接続した形と一見同形であるが、これらが別物であるのか、どのように異なるのかについては従来十分に検討されてきていない。

本稿では Dixon (2009) による節連結の意味的分類に従って、モンゴル語の節連結に用い

[1] 本稿は 2021 年 11 月 21 日にオンラインで開催された日本言語学会第 163 回大会におけるワークショップ企画「アルタイ型言語における節連結の意味とその形式的特徴」(蔡ほか 2021) における分担発表稿に基づきつつ、大幅に加筆したものである。とくに本稿の 3.2. は蔡ほか (2021) によるワークショップ企画全体の説明を踏まえ書き加えたものであり、4. は諸形式の選択に恣意的な判断を多分に含んでいたところ極力恣意性を廃し、また十分な説明を記載するよう努めた。5. 以降の分析において追加の調査と分析を加えた。

られる形式を整理する。その上で関連する諸形式と比較しつつ目的の意味を成す -xAAr が形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が接続した形とは異なるものであると分析した方が妥当であろうことを論じる。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で前提知識を概観したのち、3 節で先行研究での記述をまとめる。4 節では先行研究の記述に基づきモンゴル語の節連結の諸形式の分類を試みる。この上で 5 節では先行研究の問題点を指摘し、6 節で -xAAr に関する調査・分析を行う。最後に 7 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿における例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 前提知識

2.1. モンゴル語の基本情報

モンゴル語は、モンゴル国や中国内モンゴル自治区といった地域に分布する言語であり、本稿で主に対象とするのはこのうちモンゴル国で広く通用するハルハ・モンゴル語である。類型的には主要部後置型・接尾辞型の、いわゆるアルタイ型の言語である。提示する例はモンゴル国における新モンゴル文字正書法に従い、次のようにラテン文字転写したものを示す。(右がラテン文字) a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, e:yö/ye, ё:yo, ж:ž, з:z, и:i, й:j, к:k, л:l, м:m, н:n, o:o, ө:ö, п:p, p:r, c:s, т:t, y:u, ү:ü, ф:f, x:x, ц:c, ч:č, ш:š, ь:’, ы:y, ъ:”, э:e, ю:yu/yü, я:ya。

なお、モンゴル語の各種接辞は語幹の母音や末尾の音に応じて異形態を取りうるが、接辞の代表形を示すのにラテン文字の大文字を用いてこれを表現する。例えば本稿の標題にある -xAAr とは、実際に動詞語幹に接続した場合に実現形として接辞内部の AA の部分が母音調和の原則によって 4 つの母音になって実現し、-xaar, -xeer, -xoor, -xöör という形式が現れることを意味する。

2.2. モンゴル語の動詞形態論

モンゴル語の動詞は、語幹に対し動詞接辞 1 つを接尾することで構成される。動詞接辞は主節の述部を成す定動詞接辞、名詞節や連体修飾節の述部を成す形動詞接辞、連用修飾節の述部を成す副動詞接辞に分類される。形動詞接辞には未来 -x、完了-sAn、未完了-AA、習慣-dAg がある。形動詞接辞が付された動詞形は、名詞節の述部として主要部になり、形動詞接辞の直後に格接辞を付すことも可能である。

連用修飾節の述部を成す副動詞接辞が付された動詞形は、モンゴル語における節連結を成すための形式であると言える。しかし節連結は副動詞接辞のみならず、形動詞接辞を付した名詞節や連体修飾節に格接辞や後置詞を組み合わせることによっても表現される。節連結における従属節が取りうる形式について、詳細は 4.2. を参照されたい。

2.3. その他

その他、本稿に関連する名詞形態論のうち造格と所属のカテゴリについて記載する。

名詞に付される格接辞のうち造格 -AAr {-INS} とは、道具や手段を表す他、幅のある時間や通過する場所など様々な用法を有する。

所属のカテゴリは名詞句 (格接辞の後ろ) や一部の副動詞接辞の後ろに付され、所有や所属といった関係を表すものであり、再帰所属と人称所属に分類される。このうち再帰所属の -AA {-REFL} は主語に関わるモノ・コトを表す名詞句に必須的に用いられるもので、人称所属のうち =n' {=3} (三人称所属) は主語に関わらないことを表す任意の要素である。

3. モンゴル語の -xAAr

本節では本稿で扱うモンゴル語の -xAAr について先行研究の記載をまとめる。主に形式的な側面を 3.1. で、主に意味的な側面を 3.2. で扱う。

3.1. -xAAr という形式

Kullmann & Tserenpil (2015: 166) は目的副動詞 (原典における呼称は Intending sVDS: sVDS とは Subordinating Verb Determing Suffix「従属 (節を成す) 動詞修飾接辞」の略語) -xAAr について '(in order) to'「～するために」と訳しうる主節の叙述内容が起こる理由を表すものであるとして紹介し、次のような例を挙げている (3, 4)。

(3) *bi nogoo awaxaar delgüür yawsan.*
bi nogoo aw-xAAr delgüür yaw-sAn[2]
1SG vegetable to.take-XAAR shop to.go-PRF
'I went to the shop (in order) to buy vegetables.'
「私は野菜を買いにお店へ行った」 (Kullmann & Tserenpil 2015: 166. 英訳も)

(4) *bi šalgaltaa sajn ögöxöör ertnees beltgež bajna.*
bi šalgalt-AA sajn ög-xAAr ertn-AAs beltge-ž baj-nA
1SG exam-REFL well to.give-XAAR early-ABL to.prepare-SIM to.be-NPST
'In order to do well on an exam, I prepare early.'
「私は試験で良い成績が取れるように早くから準備している」
(Kullmann & Tserenpil 2015: 166. 英訳も)

この形式について、「新モンゴル文字による綴りを見る限りは未来形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr の組み合わせのように見え、実際にそのような由来に基づくのであろう」としている (Kullmann & Tserenpil (ibid.))。しかし伝統的なモンゴル文字綴りでは未来形動詞接辞と造格接辞を組み合わせると -qu bar/ -kü ber となるのに対し、「するために」という意味の動詞接辞は -qar/ -ker という異なる綴りが用いられる[3]。Kullmann & Tserenpil (ibid.) はこのことを根拠として両者を区別している。

[2] なお、この目的節は例文 (2) に見るように移動以外の動詞を主節に取ることができるようであるが、Kullmann & Tserenpil (2015: 166) が挙げる 9 例のうち 5 例で主節述語が yaw_「行く」という動詞であり、他にも ir_「来る」, xödöl_「動く、出発する」, gar_「出る」という移動の意味を表す動詞が共起している。
[3] Kullmann & Tserenpil (2015:166) は例文 (3)(4) に対応する伝統的なモンゴル文字綴りとして ab-qar {to.take-XAAR} = aw-xAAr, ög-ker {to.give-XAAR} = ög-xAAr といった例を挙げている。伝統的なモンゴル文字綴りは、モンゴル語のより古い形式を保持するものである可能性があるが、モンゴル文字綴りが比較

Kullmann & Tserenpil (2015: 96) では造格の機能の一つとして「根拠の説明」(Explaining causes) を挙げ、未来形動詞接辞 -x のあとに造格接辞 -AAr が続く組み合わせの例を提示している (5)。未来形動詞接辞 -x についての説明 (Kullmann & Tserenpil 2015: 148) の中でも格接辞が付された用例として、造格接辞を伴う例として (6) のような例を示しているが、そこではとくに意味の説明をしていない。

(5) *nar garaxaar dulaan boldog.*
nar gar-xAAr dulaan bol-dAg
sun to.rise-XAAR warm to.become-HBT
'When the sun rises it becomes warm. ("Through the rising of the sun…")'
「太陽が出たら暖かくなる」 (Kullmann & Tserenpil 2015: 96. 英訳も)

(6) *šönö nom unšixaar nüd muuddag.*
šönö nom unš-xAAr nüd muud-dAg
night book to.read-XAAR eye to.go.bad-HBT
'When you read at night, your eyes go bad. ("Because of nighty reading…")'
「夜に本を読むと目が悪くなる」 (Kullmann & Tserenpil 2015: 148. 英訳も)

いずれも英訳では 'when' 句で訳出されており、また理由や根拠を表すものである (causes, 'Because…') ことが示唆されている。

さらに Kullmann and Tserenpil (2015: 165) は「必然的に連続する 2 つの動作」(two actions follow each other logically) を表す論理連続副動詞 (Logically Succeeding sVDS) -xlAAr の説明の中で、「この副動詞の代わりに同じ文法的な意味を成す未来形動詞接辞 -x + 造格接辞 -AAr という組み合わせが使われることがよくある」としている。

Janhunen (2012: 164) は副動詞接辞をそれ以上の形態素に分解できない一次的副動詞と複数の形態素を含むと見られる二次的副動詞に分類している。その上で、目的の意味を表す -xAAr を目的副動詞 (final) として未来形動詞接辞 -x と造格接辞 -AAr から成る二次的副動詞であるとしている (Janhunen 2012: 166)。同時に Janhunen (2012: 169-171) は形動詞接辞＋格接辞 (与位格、奪格、造格) からなる疑似副動詞 (quasiconverb) を立て、その一つに形動詞接辞＋造格接辞という組み合わせで様態 (modal, 'by way of'「〜することによって」の意) の機能を有する -xAAr と同形の形式を挙げている。伝統的に目的節を成す機能を有する場合は副動詞接辞に含められるとし[4]、形式が同一である以上これらを多義と見るか同音異義と見るかは恣意的にしか決定できないとしている (Janhunen 2012: 171)。

的新しい口語表現に合わせて綴り方が改まるケースもある。この例も、綴りの違いが少なくとも語源的な違いを示すわけではない。また本稿の査読者より、この -qar/-ker は論文などの文体において目的の意味を明示するために使われるもので、実際の使用頻度は低い印象があるとの指摘をいただいた。

[4] Janhunen (2012: 171) は他に -xAAr の選択／比較副動詞 (selective/ comparative)「〜するよりも(むしろ)、〜する代わりに」としての機能についても挙げている。これは 清格尔泰 (1991) の分類 (7) における＜7) 選択関係＞に該当するものと思われる。

3.2. -xAAr の意味

形動詞接辞+造格接辞の形式が成す意味について、清格尔泰 (1991: 298-303) は 12 種に分類している。以下の (7) は清格尔泰 (1991) による分類をまとめたものである。例は代表的なものの和訳のみ示し、該当箇所に下線を引く。

(7) 形動詞接辞+造格接辞の意味 (清格尔泰 1991: 298-303 のまとめ)
1) よりどころにする行為 (例: 殺すことで脅す)
2) もう一つの行為の内容[5] (例: 終わったと見做す)
3) 形容詞述語とともに用いて主述関係を成す (例: 走るのが早い)
4) 時機関係 (例: 彼が来たら聞いてみよう)
5) 並行関係 (例: 座りながら眠る)
6) 目的関係 (例: 医者になるために頑張る)
7) 選択関係 (例: 立つよりも座れ)
8) 依拠関係 (例: 言った通りにする、見たところ間違っている)
9) 原因 (例: よく頑張ったことで成功した)
10) 未然 (例: 行くことになる、帰ろうとしている)
11) すべき行為 (例: 言うべき言葉がない)
12) その他の慣用表現 (例: 嫌だけど行くときは行く)

清格尔泰 (1991) は上記のような名付けをしているだけでそれぞれの用法について詳しい説明をしていない。しかしそこに付された例文から、次のように整理し直すことが可能であろう。

1) の「よりどころにする」とは漢語の「凭借」という語を訳したものだが、これは「造格」を指す用語にも用いられるものであり、造格の本来的な用法にあたるものであると見られる。例としては未来形動詞接辞に造格が続く例のみが挙げられている。他方、9) の原因には完了形動詞接辞に造格が続く例のみが挙げられていて、1) と 9) の用法の違いはこうした形動詞接辞の意味によって生じるものではないかと思われる。

4) の時機関係と 5) 並行関係は例文中に現れる形動詞接辞に偏りがある。4) では多くが未来形動詞接辞を伴うもので、「～すると／～したら／～するときに」などと訳せそうな用法である。先に挙げた (2)(5)(6) の例の用法もここに含まれるのではないかと考えられる。1 例だけ未完了形動詞形に否定の要素を伴う「まだ～していない」という形式を伴うもので「～していないうちに」と訳しうる例である。5) は未完了形動詞接辞を伴う例のみが挙げられており、この未完了形動詞接辞の成す意味が「～しながら」という同時に進行する動作の意味を成すものと思われる。

[5] この説明 (原文では「表示另一个行为的内容」) の意図するところについて筆者は十分に理解できていないが、「主に「～と見做す」という内容を表す」(原文では「主要是表示 “做为”“认为” 的内容」) というところから察することができる。

4. モンゴル語の節連結形式

本節では節連結の形式の分類に関する先行研究をまとめ、モンゴル語の節連結を表す諸形式の分類を試みる。まず 4.1 で Dixon (2009), Aikhenvald (2009) らによる類型論的観点からの節連結の形式の分類について概要を示す。4.2 ではこれをふまえてモンゴル語の節連結を表す諸形式を意味で分類する。

4.1. 節連結の意味と形式

Dixon (2009)[6] は、節連結における節と節の間の意味関係を表すためにどのような文法的手法が用いられているのかについて述べている。具体的には統語レベルの主節／非主節と意味レベルの焦点節 (中核的な行為・状態を表す節)／支持節 (時間的環境・条件・前提・前置きなどを表す節) の対応関係、節連結の標識がどちらの節に標示されるか、節連結に用いられる標識の形態・統語的特徴は何かなどに注目して調べている。意味に関しては、6 つの大きな意味タイプ (I時間、II帰結、III潜在的帰結、IV追加、V代替、VI様態) に分け、さらに 16 の下位タイプに分類している。下位タイプの詳細は次節で示す。

Aikhenvald (2009) は Dixon (2009) に基づいて調査された諸言語について総括したもので、その中である節連結の形式が多機能性を有する場合どのような意味を共有しうるか一覧にして示している。この一覧は 5 節で筆者の考察を加えて提示する。

4.2. モンゴル語の節連結形式の分類

4.2.1. 分類の方針

本節では、モンゴル語における節連結の諸形式のうち特に従属節の動詞述語が取る形式を取り上げ、Dixon (2009) の意味分類に基づいて 4.2.2. の 4 つの表 1〜4 にまとめる。

ここで扱う諸形式とその意味については Kullmann & Tserenpil (2015) による接続形式の一覧と、(7) で見た形動詞接辞＋造格接辞の表す意味分類 (清格尔泰 1991) を利用して選出する。Kullmann & Tserenpil (2015: 297-318) は “conjunctions” として文またはその一部をつなぐ諸形式を coordinating conjunctions 16 種、subordinating conjunctions 26 種に分けて記述している。ここでいう “conjunctions” とはいわゆる接続詞という独立語に限らず、動詞の屈折語尾を含む様々な形式を含むものである。このうち専ら節をつなぐものを選出し[7]、ここに含まれない副動詞接辞やその他必要と思われる形式を加えて、本稿における分析対象とする[8]。清格尔泰 (1991: 298-303) の提示する形動詞接辞＋造格接辞のうち、主述関係を表すという 3)、一種の補文節を成すものと見られる 2), 10)、また名詞修飾節を成す 11) は本稿に

[6] 本段落の説明は蔡ほか (2021) におけるまとめを利用した。

[7] Kullmann & Tserenpil (2015) はこれらの形式について、つなぎうるのが非述部か述部か、また文や段落かそれぞれ記述している。ここでは専ら非述部をつなぐと記載された諸形式 (ba, -güj, bolon, č, tüünčlen, tödij biš) を考察の対象外とした。

[8] 表 1~4 では Kullmann & Tserenpil (2015) が括弧を付けて任意の要素であると見做している副詞的な要素は除外し、それぞれの形式は筆者が形態素分析して示すこととした。このほか Kullmann & Tserenpil (2015: 282-296) の「後置詞」も参照し、必要なものを適宜追加した。表中では網掛けでこれを示す。Kullmann & Tserenpil (2015: 319) では代動詞や代名詞を含む接続表現 (Proword-Conjunctions) を挙げているが、この多くが代動詞や代名詞を含まない本稿で扱う諸形式の説明で十分代替可能であると見て、ここでは除外した。

おける節連結を表すものではないと判断して除外し、12) は分類不明のその他として本稿では扱いを保留する。また清格尔泰 (1991) は 9) 「原因」につき完了形動詞 -sAn +造格接辞の例のみ、5) 「並行関係」につき未完了形動詞 -AA+ 造格接辞の例のみを挙げている。これらは形動詞接辞の意味 (完了、未完了) に由来するもので、実質はそれぞれ 12) は 1)「よりどころにする行為」とともに表 4 の「VI 様態」に当てはまるものであり、 5) は 4) 「時機関係」とともに表 1 の「Ir 相対的時間」に当てはまるものであると考える。

これらの形式を Dixon (2009) の意味分類により整理し、「形動詞 (＝形動詞接辞を付した動詞形と後置詞などの組み合わせによるもの)」、「副動詞 (＝副動詞接辞によるもの)」、その他に分類して提示する。V は動詞語幹を表し、これに続く接辞は「形動詞」または「副動詞」の動詞接辞であることを示す。V を含まない接辞は名詞類 (形動詞接辞含む) に付される接辞である。- (ハイフン) が付されていないものは接辞でない、独立性の高い要素である。それぞれの形式の分析と和訳は筆者による。

表の左列「形動詞」は動詞の形動詞接辞が付された形と後置詞[9]から成る固定的な表現 (形動詞接辞を他の形動詞接辞に置き換えられないもの) が該当する。形動詞接辞の後に格接辞が付されるものも多いが、この格接辞は後置詞側の要求によって付されたり選択されたりするものと考えられる。

表の中列「副動詞」は副動詞接辞を含む表現である。

表の右列「その他」に属するものは形動詞接辞に付されうる形式であるが、後置詞的でないもの (名詞類ではない、ないし名詞類由来ではないと考えられるもの) や、形動詞の種類を特定しないもの (どの形動詞形も直前に現れうるもの)、ge-wč のほか、次節以降で扱うため分析を保留した -xAAr が含まれる。ここに含まれるものは基本的に名詞類 (形動詞接辞) を直前に要求するが、ge-wč (表 4) は直前に特定の語類を要求しない。

表に挙げた形式のうち、本稿で扱うことになる諸形式には下線を付した。このような分類を行うことで、時制などのカテゴリを自由に選択できない (=主節述語によって決定づけられる) 形動詞・副動詞と、形動詞接辞を選択することで主節述語とは独立して時制を決定づけることができるその他とに分けることを可能とした。

4.2.2. モンゴル語の節連結

以下では表 1~4 に分けてモンゴル語の節連結がどのような形式で表されているかを概観する。

次の表 1 では「I: 時間」を示した。「I: 時間」には単純な時間の連続関係 (Is) や「～する前に」「～した後に」などの相対的時間 (Ir)、条件 (Ic) が含まれる。表 1 を見ると、単純な時間の連続関係 (Is) や条件 (Ic) は副動詞形によるシンプルな形式で表される一方、「～する前に」「～した後に」などの相対的時間 (Ir) は後置詞が形動詞接辞 (＋格接辞) と組み合わさることによって表現されていることが分かる。

[9] 後置詞という語類を立てる十全な定義は従来されていない。ここでは固定的な表現に見られる形動詞に後続する独立語 (同形式が独立語として用いられうる語) を後置詞と見做している。

表 1.「I: 時間」

	形動詞	副動詞	その他
Is: 時間的連続		V-ž, V-AAd, V-n「して」 V-ngUUt, V-mAgc, V-xlAAr 「するとすぐ」	
Ir: 相対的時間	V-x-d「するとき」{V-FUT-DAT} V-x üye-d (同上)[10] {V-FUT time-DAT} V-x bür / bolgon / tutam {V-FUT every} 「するたびに」 V-x xürtel「するまで」 {V-FUT until} V-x xoorond「する間」 {V-FUT while} V-x zawsar / zuur「する間」 {V-FUT besides} V-sAn-II daraa / xojno {V-PRF-GEN after}「した後で」 V-sAn-AAs xojš(同上) {V-PRF-ABL after} V-x-IIn ömnö 「する前に」 {V-FUT-GEN before} V-x-tAj zereg「すると同時に」 {V-FUT-COM degree}	V-ngAA「しながら」 V-sAAr「しつつ」	-AAr「するときに」{-INS}
Ic: 条件		V-WAl「すれば」	toxioldol/nöxcöl -d {case/ condition -DAT} bol「ならば」[11]

[10] Kullmann & Tserenpil (2015: 315) では baj-x üye-d {ある-FUT time-DAT} という形式で掲載し、例としては副動詞接辞 -ž {-SIM} が先行して「～しているとき」と訳しうる表現や形容詞述語文が先行する表現を挙げている。この形式は動詞 baj_「ある」の部分に他の動詞をあてはめることも可能であるので、baj_ を含まない形式を表に挙げることとした。

[11] Kullmann & Tserenpil (2015: 317) では -x toxioldol-d {-FUT case-DAT} という形式で掲載されているが、実際には -x 以外の述語形式を伴うこともあるためここに入れた。また bol は “conjunctions” ではなく小詞 “particle” として記述されている (Kullmann & Tserenpil 2015: 342)。

次に「II: 帰結」と「III: 潜在的帰結」を表 2 に示す。このうち「II: 帰結」は「IIc: 原因」「IIr: 結果」「IIp: 目的」に分類される。「III: 潜在的帰結」は「～しないように」という意味を表すものである。

「IIc: 原因」「IIr: 目的」などの意味関係を表す帰結には、副動詞によって表されるものが少なく、形動詞やその他の表現が該当する。副動詞としては表 1 で「時間的連続」に当てはめられた諸形式が「～したので」という意味で解釈されることもある。

「IIc: 原因」「IIr: 結果」を表すその他の諸形式は -x「未来」や -sAn「完了」、-dAg「習慣」などの形動詞接辞を選択することで主節との相対的テンスを表すことが可能である。

「IIp: 目的」を表すその他の諸形式には動詞 ge_「と言う／(～しよう)と思う」{to.say} を含む表現がある。

表 2.「II: 帰結」「III: 潜在的帰結」

	形動詞	副動詞	その他
IIc: 原因 「したので」		V-ž, V-AAd, V-n「して」	-AAr {-INS} učir(-aas) {reason(-ABL)}, tul bol-ox-oor {to.become-FUT-INS} -AAs bol-ǰ {-ABL to.become-SIM} 「～のせいで」
IIr: 結果 「した結果」			
IIp: 目的 「するために」	V-x ge-ǰ / g-eed {V-FUT to.say-SIM/ to.say-ANT} V-x-IIn tuld / tölöö {V-FUT-GEN purpose}		V-g ge-ǰ {V-IMP3 to.say-SIM} V-xAAr
III: 潜在的帰結 「しないように」	V-x=güj-n tuld / tölöö {V-FUT=NEG-GEN purpose}		

次の表 3 では「IV: 追加」を示した。「IV: 追加」には「IVu: 順不同の追加」「IVs: 同じ出来事の追加」「IVe: 精緻化」「IVc: 対比」といった下位分類があるが、モンゴル語の節連結の形式ではこうした意味が十分に区別されない。

いずれも単純な副動詞で表されるものは使用頻度が低く、副動詞形 + 補助動詞 (の形動詞) 的表現やその他がこれを表す。

表 3.「IV: 追加」

	形動詞	副動詞	その他
IVu: 順不同の追加 IVs: 同じ出来事の追加 IVe: 精緻化		V-ž, V-AAd, V-n「して」	bögööd「そして」 tödijgüj, mön「だけでなく、さらに」 -AAr bar-x=güj {-INS to.finish-FUT=NEG} (=-AAr ül baram) baj-tugaj {to.be-IMP3}「〜はもちろん／〜どころか」(= büü/ bitgij xel-ø {PROH to.say-IMP}
IVc: 対比		V-wč {V-CONC} V-ž /-AAd baj-x-d {V-SIM/ANT to.be-FUT-DAT}	č「も」 xar'-n {to.go.back-ASS}「却って」, baj-x-d xar'-n {to.be-FUT-DAT to.go.back-ASS}「一方で」 ge-wč {to.say-CONC} / bol-wč {to.become-CONC}[12]「しかし」

最後に表 4 で「V: 代替」「Vi: 様態」を示す。「V: 代替」には「Vd: 離接」「Vr: 拒絶」「Vs: 提案」、「VI: 様態」には「VIr: 現実の様態」「VIh: 仮説的様態」という下位分類がある。これらはいずれも専らその他の表現によって表される。

表 4.「V: 代替」「VI: 様態」

	形動詞	副動詞	その他
Vd: 離接			eswel, esxül「あるいは」
Vr: 拒絶 Vs: 提案			-IIn oron-d「の代わりに」{-GEN place-DAT} -AAr「よりも」{-INS}
VIr: 現実の様態 VIh: 仮説的様態			-AAr「によって」{-INS} yos-oor「に従って」{rule-INS} -IIn daguu「に従って」{-GEN accordance} (yum)=šig/met(=l) {(thing) =like (=EMP)}「ように」 -tAj adil「と同じく」{-COM same}

[12] Kullmann & Tserenpil (2015: 318, 319) では xedij-geer … bol-wč {how.much-INS ... to.become-CONC}, xedij tijm bol-wč {how.much yes to.become-CONC} といった形式で掲載されているが、bol-wč はこれらの先行要素を伴わずに使用される例も見られるためここではこの語単独の形式のみ掲載した。

Kullmann and Tserenpil (2015: 318) は V-sn-AAr という形式を挙げるが、これも形動詞接辞 -sn に固定された表現ではないと見てその他の -AAr {-INS} に集約した。

5. 問題提起

本稿で考察の対象とするのは -xAAr という形式である。表 2 を見ると、「IIp 目的」の欄に -xAAr という形式がある他、表 1「Ir 相対的時間」、表 4「Vs 提案」、「VI 様態」に含まれる造格接辞 -AAr は未来形動詞接辞 -x に後続すると -xAAr という形になり、これらは同形である。清格尔泰 (1991), Janhunen (2012), Kullmann & Tserenpil (2015) はいずれも「目的」を表す副動詞接辞 -xAAr と形動詞接辞 + 造格接辞からなる形式をそれぞれ別個に扱っているが、その両者の関係については十分な説明をしていない[13]。

ここで仮に -xAAr (表 1~4 における -AAr も含む) が有する諸機能が単一の形式の持つものであるとして、Aikhenvald (2009: 390) による節連結の多機能性のまとめと照らし合わせてみる (表 5)。-xAAr という 1 つの形式が「Ir 相対的時間」、「IIc 原因」、「V 様態」を有することは表 5 (「様態」列と「原因」「時間」行の交差点に x がある) とも矛盾しない。しかし「IIp 目的」が「V 様態」と形式を共有すると、少なくとも表 5 に示された結果には合わない (「原因」列と「様態」行の交差点に x がない) と言える。

表 5. 節連結標示の多機能性 (Aikhenvald 2009: 390, Table に一部筆者網掛け)

時間				※交差部分に x がある場合、列と行のそれぞれの節連結の意味を 1 つの形式で表すケースがいずれかの言語で見いだされたことを示す				
x	条件							
x	x	原因						
x		x	結果					
x		x	x	目的				
	x	x	X	x	潜在的帰結			
x	x	x	X			追加		
		x	x			x	対比	
	x				x	x	x	代替
x		x						様態

ここで、次のような問題提起をする。目的を表す用法とそれ以外の用法とでは、意味的な違いという理由以外に分かつ根拠があるのだろうか。表 5 を見ると先行研究では同一の形式が「目的」と「様態」の意味をいずれも持つという例が無いようであるが、モンゴル語の同形式は Aikhenvald (2009) の整理に新たなるデータを提供するものとなるのだろうか。また同じく表 5 では同一の形式が「目的」と「時間」の意味をいずれも持つという例があることも示されているが、この「時間」に含まれる節連結の意味は多岐に渡る点が考慮されてい

[13] 清格尔泰 (1991) は文語表記のモンゴル語を扱ったもので、両形式は表記上異なるものである。しかし (6) に「目的関係」とあることから両形式に意味的共通性があることは認めているものと思われる。

ない点が問題であると思われる。「A するために B する」といった目的の意味は、「A するに先んじて B する」といった時間関係の意味とは類似すると考えられるが、「A したときに／A したあとで B する」といった時間関係の意味と形式を共有することはないのではないか。すなわち、-xAAr は多機能な単一の形式というより、同音異義の複数形式であると見るべきなのではないか。

以下の議論では -xAAr の形式と意味の関係を明らかにするために、google 検索やコーパス調査[14]によって -xAAr を含む動詞形の出現する用例を収集し、その意味を解釈することで -xAAr の実際の使われ方を精査していく。さらに形動詞接辞に造格接辞が付された形式であれば再帰所属接辞が付される可能性もあると見て、同じく -xAAr-AA {-XAAR-REFL} などといった形式についても用例を集め、比較検討する。

6. 分析

6.1. 「時間」「原因」「様態」

-xAAr という形式は一見多機能的であるが、「目的」の意味になる場合と「時間」「原因」「様態」を表す場合とでは所属のカテゴリの接続可否に違いがある可能性がある。後者の場合には再帰所属 -AA や、三人称所属 =n’ が付され、主節との同主語・異主語が示されうる。(8) は再帰所属 -AA を伴う同主語の例、(9) は三人称所属 =n’ を伴う異主語の例である。

(8) *bi udaxgüi gar utasny dugaar awaxaaraa tan’ ruu myessyež bičiž baina aa!*

bi udaxgüi gar utas-IIn dugaar aw-xAAr-AA tan’=RUU myessyež
1SG soon hand phone-GEN number to.get-XAAR-REFL 2SG.HON=ALL message
bič-ž bai-nA=AA
to.write-SIM to.be-NPST=EMP

「私はまもなく電話番号を手に入れたらあなたにショートメッセージを書きますよ！」

L. Tüdew “Tuuraitai zarlig, ödtei bičig”

(9) *tüügeer olimp sonsood mongol xün alt awaxaar n’ xanaa nüdeed, uilaldaad böön bayar l bolloo.*

ter-AAr olimp sons-AAd mongol xün alt aw-xAAr=n’ xana-AA
that-INS Olympic to.listen.to-ANT Mongolian person gold to.get-XAAR=3 wall-REFL
nüd-AAd ujlald-AAd böön bayar=l bol-lAA

[14] SketchEngine 上で試験運用されている CEFR-Jx28-Mongolian というコーパス (学校教科書やウィキペディア記事などから成り、総トークン数は 8,407,629) を用いた。Wordlist 機能を用いて語末に xAAr を有する語形を検索すると 1018 項目 9468 件が検出される。検索上のゴミを目視でざっと取り除くと調査対象となる動詞形の出現数は 8524 となる。同様に -xAArAA を検索すると 79 項目 216 件がヒットする。

検索に際しては Criteria を Advanced として ending with を選択し、大文字・小文字を区別しない設定で正規表現を用いて .[аеёийоөуүэя]x(aa|oo|өө|ээ)p をキーとした。これは -xAAr を除いた動詞語幹部分は必ず 2 文字以上から綴られ、おそらく正書法上 -xAAr の直前には母音が必ず 1 つ以上綴られることを表す。得られた結果のうち検索上のゴミ (動詞以外の例) として目立つのは ünexeer「本当に」, arwajxeer (地名) があり、その他 xAAr の前に 2 文字だけ綴られた短い語の中から探した。これらを除いても動詞と名詞が同形の šüüxeer, tüüxeer といった例は除外できていない。

to.hit-ANT to.cry.each.other-ANT everyone happy=EMP to.become-PST
「それ (=ラジオ) でオリンピックを聞いて、モンゴル人が金 (メダル) を取ると壁を叩いて泣き合って皆で喜んだんです」 インタビュー記事 (https://gogo.mn/r/47m5k)

ただしこれらの標識が用いられることは必須の要件ではない。次の例のように所属のカテゴリを示さないが「時間」「原因」の意味を表わしていると見られる例も見られる。次の例 (10) は同主語の例だが、再帰所属は付されていない。

(10) *süülijn üyed xoolond n' neg l durgüj, ünerijg n' awaxaar dotor n' muuxaj orgiǰ ogiuldag boljee.*
süül-IIn üye-d xool-d=n' neg=l durgüj üner-IIg=n' aw-xAAr dotor=n'
tail-GEN time-DAT meal-DAT=3 one=EMP dislike smell-ACC=3 to.take-XAAR inside=3
muuxaj orgi-ž ogiul-dAg bol-jee
dirty to.feel-SIM to.vomit-HBT to.become-PST
「最近は食欲も全然なく、においを嗅ぐと気持ち悪くなって吐き気を催すようになった。」
(CEFR-J Corpus: 11_eruul_mend.txt)

所属のカテゴリは、節連結の形式のうち表 1 の形動詞の多くと、副動詞 V-ngUUt, V-mAgc, V-xlAAr 「するやいなや」に付されうる。V-xlAAr はその形式が -xAAr によく似ており、Kullmann & Tserenpil (2015) では前者の代替として後者が用いられるとの記述があるが、少なくとも共時的には形動詞接辞＋格接辞などのようには分析できない。従って所属のカテゴリが付されることそのものは、この形式を形動詞接辞 -x ＋造格接辞 -AAr からなるものであるとする決定的な根拠にはならない。

他方、こうした「時間」「様態」を表す用法では、-x の部分を他の形動詞接辞と置き換え可能であるらしいことが清格尔泰 (1991: 298-303) (7)b, c や Janhunen (2012: 170) によって示唆されている。さらに次の (11) のように、-x と -AAr の間に否定を表す =güj を挿入した形式が「時間」「原因」または「要因」の否定形 (-x=güj-AAr「しないことによって／しないときに」) を成していると見られる例もある。

(11) *šinžlex uxaan tyexnologijn ololtyg ašiglaxgüjgeer yamar č uls oron xögžix bolomžgüj.*
šinžlex+uxaan tyexnologi-IIn ololt-IIg ašigla-x=güj-AAr yamar=č
science technology-GEN achievement-ACC to.use-FUT=NEG-INS what=ever

uls oron xögž-x bolomž=güj
nation country to.develop-FUT chance=NEG
「科学技術の成果を利用しなければ／せずには、どんな国も発展できません」
インタビュー記事 (https://gogo.mn/r/46308)

このことは「時間」「原因」「様態」の意味を表す -xAAr は形動詞接辞 -x {-FUT} の付された動詞形に造格接辞 -AAr がついて成された疑似副動詞と呼びうるものであることの根拠となるであろう。形動詞接辞の部分は -sAn {-PRF}, -dAg {-HBT} に変更可能で、主節のテンスに対する相対的な時制を表すことが可能であるだけでなく、形動詞接辞の直後に否定の =güj を付すことで従属節中の命題を否定することも可能である。

なお「時間」「原因」「様態」という 3 つの意味は連続的で必ずしも区別できるものではない。おそらく造格の有する道具・手段の意味から様態「～する／したことによって」の意味を成したのがこの形式の本来的な用法であろうと考えられる。ここから「～する／したので」という原因の意味が生じ、「～する／したとき」という時間の意味を表すに至った。

6.2.「目的」

-xAAr が「目的」の意味で用いられるとき、6.1. で「時間」「原因」「様態」の場合に見たような様々な形式の可能性がない。所属のカテゴリは付されえず、形動詞接辞の-sAn {-PRF}, -dAg {-HBT} や =güj を伴う否定形に置き換えることは不可能である。

Janhunen (2012: 164) はこの形式を conjunct の節連結を成すものと位置付けており、すなわち従属節と主節が同主語の場合にのみ使われるものであるとしている。本来的に同主語しか表し得ないために、所属のカテゴリを付しえないのであろうと考えられる (12)。

(12)a. *xüü eež aawdaa zoriulan beleg awaxaar möngö cugluulžee.*

xüü eež aaw-d-AA zoriul-n beleg aw-xAAr möngö cugluul-žee
son mom dad-DAT-REFL to.intend-ASS present to.buy-XAAR money to.collect-PST
「子どもは親のために贈り物を買おうとお金を集めた」(CEFR-J Corpus: 03_matematics.txt)

b. xüü eež aaw-d-AA zoriul-n beleg *aw-xAAR-AA möngö
son mom dad-DAT-REFL to.intend-ASS present to.buy-XAAR-REFL money
cugluul-žee
to.collect-PST

否定目的「～しないために」を表すためには、表 2.「III 潜在的帰結」で見たような表現で代替することとなる (13)。

(13)a. *ter šalgaltand unaxgüjn tuld šurguu ajillasan.*

ter šalgalt-d una-x=güj-IIn tuld šurguu ajilla-sAn
that exam-DAT to.fail-FUT=NEG-GEN purpose hard to.work-PRF
「彼は試験に落ちないように真面目に働いた」 (Kullmann and Tserenpil 2015: 313)

b. *ter šalgalt-d una-x=güj-AAr šurguu ažilla-sAn
that exam-DAT to.fail-FUT=NEG-INS hard to.work-PRF

その他、目的節の相対的なテンスを操作することができないのは、「目的」というものが主節の表す絶対的テンスに対して時間的に後の事柄を表すからであると説明できよう。

6.3. その他

その他、コーパス上の用例を見ると -xAAr という形式の節連結的でない用法も見出された。(7) で見た清格尔泰 (1991) による意味記述のうち 10) 「未然」にあたる意志や決定を表す動詞述語の補語項になる用例が多数得られた (14)。

(14) *tuyaa delgüürees 5 dm tuuz awaxaar bolow.*
tuyaa delgüür-AAs 5 dm tuuz aw-xAAr bol-w
PN shop-ABL 5 decimeter ribbon to.buy-XAAR to.become-PST
「トヤーはお店で 50 センチのリボンを買うことになった」(算数の文章題)
(CEFR-J Corpus: 02_matematick.txt)

この例では bolow「なった」が -xAAr 形の動詞を伴い、「～することになった」という意味を成している。これと同じ用法の -xAAr を伴う動詞としては、ほかに šijd_「～することに決める」, tölöwlö_「～しようと計画する」, toxirolc_「～しようと約束する」などがよく用いられる。なお、bol_「なる」は名詞を補語に取る (「A は B になる」) 場合、当該の名詞は裸で現れ造格は要求されない。šijd_「決める」, tölöwlö_「計画する」は対格名詞を要求し、toxirolc_「約束する」は補文標識 ge-ž {to.say-SIM} を伴う引用句などを要求する。従って -xAAr という動詞形は動詞側の名詞項に対する要求とは関係なく現れていると見ることができる。また、この -xAAr には所属のカテゴリが標示されない。

清格尔泰 (1991: 301) はこの未然の用法として -xAAr の後ろに否定を表す =güj を付した例を挙げている。コーパスからも -xAAr=güj の用例は多数見られた。

(15) *či minij üürend orž čadaxaargüj tom yum.*
či minij üür-d or-ž čad-xAAr=güj tom yum
2SG 1SG.GEN nest-DAT to.enter-SIM to.be.able-XAAR=NEG big thing
「あんたは私の巣に入れないくらい大きいんだ」
民話 (CEFR-J Corpus: 03_mongol_yos_khumuujil.txt)

否定の =güj は名詞の語幹に付されて存在の否定を表すが、格接辞の後ろには付されえない。=güj が付きうる動詞の屈折形式としては、名詞的な曲用が可能な形動詞接辞の付された動詞形がある。-xAAr が他の形動詞接辞と似たような振る舞いをする例として、条件標示 =bol「～ならば」を後続させる例 (16) や存在動詞が後続する例 (17) がある。

(16) *zaaxyn tijn yalgal awaxaar bol -n dagawar awna.*

zaa-x-IIn	tijn+yalgal	aw-xAAr=bol	-n dagawar	aw-nA.
to.point.out-FUT-GEN	case	to.take-XAAR=COND	-n suffix	to.take-NPST

「対格を取るなら接辞 -n を取る」 (CEFR-J Corpus: 05_eruul_mend.txt)

(17) *xödöö bajgaa öwöö emeetejgee yaaž xolboo barix we geed olon asuudal üüsexeer bajgaa biz?*

xödöö	baj-AA	öwöö	emee-tAj-AA	yaa-ž	xolboo
countryside	to.be-IPFV	grandpa	grandma-COM-REFL	to.do.how-SIM	relation

bar'-x=we	ge-AAd	olon	asuudal	üüs-xAAr	baj-AA=biz
to.hold-FUT=Q	to.say-ANT	many	problem	to.rise-XAAR	to.be-IMPV=SFP

(携帯電話が無かったら)「田舎にいる祖父母とどうやって連絡を取るかといったいろいろな問題が起きそうですね」 (CEFR-J Corpus: 05_eruul_mend.txt)

この (14)~(17) の例はいずれも目的「～するために」という訳だと据わりが悪いが、「～しようと」などと読み替えることはできそうである ((14)「買おうとすることになる」(15)「入れようもない」(16)「取ろうとするなら」(17)「起きようとしている」)。目的節も「～しようとして」と解釈しうることを考えると、これらは意味的に関連するものなのではなかろうか。形式的にも所属のカテゴリが付された用例は得られていない。

(7) で見た清格尔泰 (1991) による意味記述のうち 3) 「主述関係 (走るのが早い)」とは -xAAr が形容詞述語の項として用いられる用法を意図したものであろうと思われる。これにあたる例として次の (18) が得られた。

(18) *xerew ted bidnij zöwlögöö xüleen awaxaar neelttej bol zan bajdlynx n' sörög ür dagawryg xelž ögč, tüünijg zogsoox xeregtej.*

xerew	ted	bid-IIn	zöwlögöö	xülee-n	aw-xAAr	neelttej=bol	zan
if	3PL	1PL-GEN	advice	to.wait-ASS	to.take-XAAR	open=COND	habit

bajdal-IIn-x=n'	sörög	ür	dagawar-IIg	xel-ž	ög-ž	
situation-GEN-thing=3	negative	outcome	consequence-ACC	to.say-SIM	to.give-SIM	

ter-IIg	zogsoo-x	xeregtej	
3SG-ACC	to.stop-FUT	necessary	

「もし彼らに私たちの助言を受け入れる気があるなら、その振る舞いが悪い結果につながることを伝えてあげる必要があります」(CEFR-J Corpus: 11_irgenii_yos_zui.txt)

形容詞は項として造格を要求する用法があるので (清格尔泰 1991: 167)、(18) の -xAAr は造格を含む形式であると見るべきかもしれない。しかし所属のカテゴリを含む形式などはコーパスなどから見出すことはできなかった。

清格尔泰 (1991) が言うところの 10) 「未然」の用法 (動詞 bol_「なる」などの補語となる用法, (14)) とその他 -xAAr の付いた動詞が名詞的な振る舞いを見せる用法 (否定の

=güj を伴う (15), 条件の小詞を伴う (16), 存在動詞を伴う (17)) は -xAAr の目的の用法と意味的に連続的である。このように見たとき、目的の -xAAr はこれを副動詞接辞であると認定したとしても、名詞的な振る舞いをする形動詞接辞らしさを見せる点で他の典型的な副動詞接辞とは区別した方が良いのかもしれない。

7. おわりに

-xAAr という形式には節連結の多様な意味・用法が記述されているが、主たる用法として時機関係「～すると」などの意味を表すものと目的「～するために」があり、これらは同音異義の別形式であると見るべきである。前者時期関係の -xAAr が形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が付されたものであると分析しうるのに対し、目的を表す -xAAr は少なくとも共時的には造格接辞を含むものと分析しがたい。これは従来の記述にも同様の指摘はされてきていたが、所属のカテゴリや否定小詞の付加の可不可、その他名詞的な振る舞いなどの観点から根拠を示したものは無かった。名詞的な振る舞いからして目的を表す -xAAr も典型的な副動詞接辞とは異なるものである。

議論の出発点として Dixon (2009) による節連結の分類と Aikhenvald (2009) によるそれらの相互関係を見たが、とくに「相対的時間」が他の節連結の意味と繋がるのかについてはなお議論が必要である。今後は、より精緻な意味地図を描き出していくことで節連結の類型論研究を発展させていく必要がある。

ところでモンゴル語の -xAAr を巡っては目的副動詞の古形 -rA との関係も問題になる。この点の精査は今後の課題としたい。

略号一覧

ANT	anterior 先行	EMP	emphatic 強調	PN	proper name 固有名詞
ASS	associative 連合	HBT	habitual 習慣	SFP	sentence final particle 終助詞
CONC	concessive 譲歩	HON	honorific 尊敬	SIM	simultaneous 同時
DAT	dative-locative 与位格	(Leipzig Glossing Rules に記載されていないもののみ掲載)			

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2009) Semantics and Grammar in Clause Linking. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology.* Oxford: Oxford University Press. pp380-402.

蔡熙鏡・山田洋平・日髙晋介・吉岡乾 (2021)「アルタイ型言語における節連結の意味とその形式的特徴」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ.

Dixon R. M. W. (2009) The Semantics of Clause Linking in Typological Perspective. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology.* Oxford: Oxford University Press. pp1-55.

Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian.* Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Kullmann, Rita & Dandii-Yadam. Tserenpil (2015) *Mongolian Grammar*. 5th revised edition. Switzerland: Kullnom Verlag.

清格尔泰 (1991)『蒙古语语法』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

Mongolian Verbal Form -xAAr
-From a Perspective of Meaning and Formal Characteristics of Clause Linking-

YAMADA Yohei
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Mongolian, clause linking, converb, final clause

In this paper, based on Dixon's (2009) classification of clause linking and Aikhenvald's (2009) study of the relationship between the groups of clause linking, I argue that the Mongolian verbal form -xAAr, with its wide variety of meanings and clause linking functions, should be regarded as distinct homophones, with the main uses being those expressing a time relation such as "when" and those expressing a final clause such as "in order to". While the former -xAAr of time relation can be analyzed as the participle suffix -x with an attached instrumental suffix -AAr, -xAAr for final clause is not to be analyzed as including an instrumental suffix, at least synchronically. This has been pointed out in previous studies, but no evidence has been presented in terms of the category of nominal possessives, a negative particle, or other noun-like behavior. Due to its noun-like behavior, the form -xAAr, which is used for final clause, differs from typical converbs.

パキスタン北部の基本味覚語彙

吉岡　乾
（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

キーワード：基本味覚語彙，意味地図，パキスタン，言語人類学

1. はじめに

本稿では、言語人類学的調査として基本色彩語彙研究に相当するような、基本味覚語彙研究というものが可能であるかを大きな考察のターゲットとし、そのパイロット研究としてパキスタン北部の諸言語における味覚に関する基礎語彙を基に、地域全体で共有されている味覚認識の構成を明らかにすることを小さな目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で味覚に関連する言語（人類）学的な研究の流れを概観したのち、3 節では本稿での一番下の土台となる分析手法である意味地図について概要を述べる。4 節で調査についてその対象・実施実態・手法について説明をする。5 節では調査で得られたデータから分析の前段階として各表現の指し示している味の同定を行い、6 節で調査結果の提示と、分析・考察を行う。最後に 7 節では、以上の調査研究をパイロット的サンプルとした上で、基本味覚語彙研究の可用性について述べる。

2. 味覚・食の言語（人類）学的な研究

味覚に関わる言語（人類）学的な研究はこれまでにもあるものの、それらで明らかにしようとしていたのは主に、味覚の表現における提喩に関するもの（「土のような味」など）や、多義性や比喩的な拡張表現として味覚語彙をどのように用いるか（「甘い声」「辛い評価」）といった認知的なものが主流であり、味覚語彙の研究というよりも、味覚に関する言語表現の研究の方向に集中していた実情がある。あるいは広く食を対象として言語との関わりを考察すると謳っている研究・出版物に関しても、調理法の語彙や表現構造（柴田 1998）や、雑駁な料理名・食品名の語彙論（内林 1999）といったものに偏っており、柴田・石毛（編）（1983）がその限られた方向性を総じているものと言えるだろう。近年は更に食と言語との関係を論じるものに、オノマトペ研究も精力的に参入してきている（ザトラウスキー（編）（2021）所収の数篇など）が、本質的に方向は広がっていない。

味覚に関する現代科学の理解を繙くと、古くは心理学者の H・ヘニングが嗅覚に関する大著の中で味の四面体（後の研究者らに *taste-tetrahedron* と呼ばれる）というものを何気なく紹介している辺りに始まるようであり、先に述べた研究でも複数回引かれている。ざっくりと解釈すれば、伝統的な味覚である四つの味（塩味 *salzig*、甘味 *süss*、苦味 *bitter*、酸味 *sauer*）[1]を頂点としたこの四面体の中にヒトの生理学的な味覚は収まるというもので、光の三原色

[1] これらはヘニングを始めとした当時の研究が積極的に述べているわけではないが、時代背景などから、ヨーロッパ圏（主に西欧〜中欧圏辺りか）で伝統的に共通認識だと意識している可能性がある、アリストテレス以来の四つの基本味である。

とプリズムとに準えて、四原味とピラミッドとであらゆる味を説明できると考えたものである。これより先にも、例えばヘニングの引いているR・ヘーバーやF・キーゾーといった学者が19世紀末に論じているが、ヘニングの四面体はそのキーゾーが1896年に描いた平面図への反論として提示されたものであり、こちらの研究が後世に圧倒的支持を得ている。

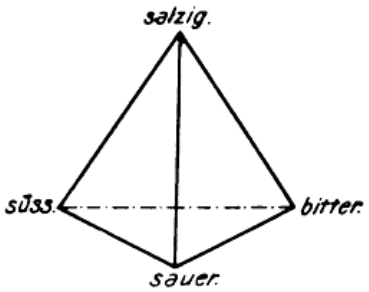


図1：ヘニングの味の四面体（Henning 1916: 506）

このヘニングの図式に影響を受けたような図式化は、日本でも早くは山田（1972）辺りで始まっている。これを受けて國廣（1982）が意味論的な図式だとして権威付けをし、学際的な議論の場で西尾（1983）が國廣の「山口方言」の味覚形容詞体系図（図2）を挙げつつ日本語の味覚語彙を語り、追って各言語・各文化の備えている基本的な味覚語彙について着眼している研究として更に複雑な図式化を見せた吉田（1998）が出た。この研究では、あるものは言語の持つ味の構造として、あるものは民族の持つ味の構造として十個以上の幾何学的な「味の構造」図を描いている（図3）。半立体的に描画されているそれらの図の見方が、適切に解説されているとは言えず、それぞれの文化圏で味覚の認知が異なっているのだということを漠然と描いているのだということしか結局は分からないように思える。図の上下が良い味と悪い味との対立であると看做されたり、あるいは好ましい味と好ましくない味との対立であるとされたり、各図の空間解釈が銘々に恣意的過ぎて、端々に言語的事実を持ち出して言語研究であるかのように思わせつつも、言語学の目指す客観的記述からは遠い。

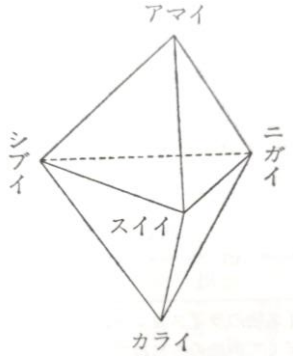


図2：「〔図34〕山口方言」（國廣 1982：153）＝「味覚形容詞の体系」（西尾 1983：108）

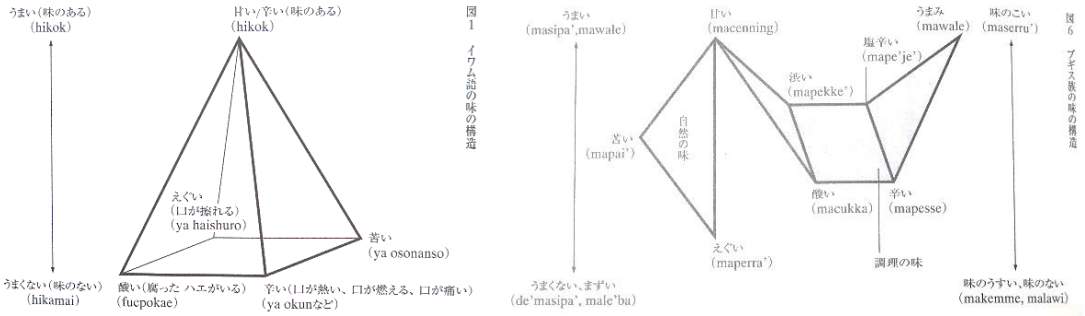


図 3：「イワム語／ブギス族の味の構造」（吉田 1998：372, 377）

國廣（1982）では図 2（引用箇所で言う「図 34」）を示しつつ、この山口方言の味覚形容詞の体系図がヒトの生理的感覚とマッチしているのだと述べ、基本色彩語彙の研究（Berlin & Kay 1969）を引き合いに出している。

> 「アマイ」は場合によって「アマイ―カライ」、「アマイ―ニガイ」、「アマイ―シブイ」のように対をなして用いられるが、普通の食物の味としては「アマイ―カライ」が基本的と考えられるので、体系は図 34 のようになると考えられる。このように組み立てると、「シブイ・ニガイ・スイイ」の三語は、共に好ましくない味として同一平面上に並ぶことになり、感覚的な印象にもよく合うと思われる。
>
> 色名の体系が、典型的な色点についてみると、おそらく普遍的であることはバーリン＝ケイ（1969）が明らかにしたところであるが、これも視神経の構造の反映と考えてよいであろう。
>
> （國廣 1982：152–153）

つまり、基本色彩語彙と同様に基本味覚語彙は語り得るのだと述べている。但し、論拠を挙げずに「普通はこれが基本だと考えられるから体系はこうだと考えられる」という主観的な論述に留まっており、印象論なのではないだろうか。

バーリン＆ケイに始まる基本色彩語彙研究は、色彩に関する基本語彙の多寡は言語ごとに区々であり、実際の色世界の切り分けかたも言語ごとに様々ではある（図 4）が、その一方で語彙獲得のパタンが一定であり、先ずは白黒（明暗）の二語彙、次に赤青、黄色、緑色という風に一般化できるという認知能力と言語文化との強い関係を論じたものである。

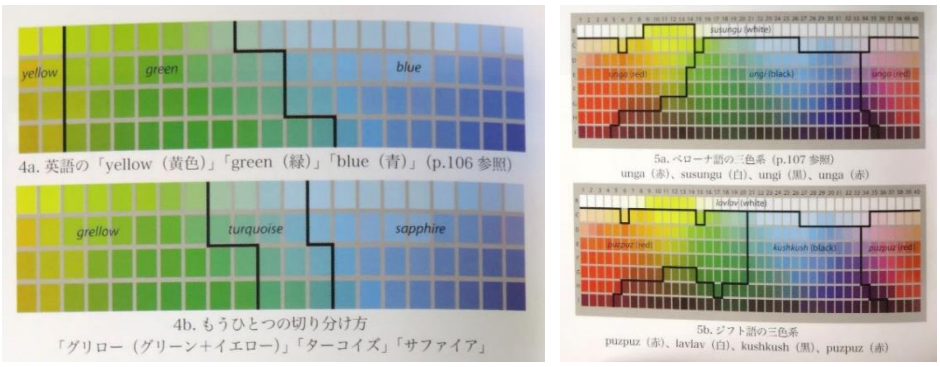


図 4：言語による色の切り分けの典型例と実例（ドイッチャー 2012：iii）

基本味覚語彙というものが立てられるとして、果たして本当に國廣が言うように、基本色彩語彙と同じだけの一般化が可能なのだろうか。本稿ではその検証に向けての予備的研究を行いたい。対象としたのは、予てより現地調査を行っているパキスタン北部の言語群である。

3. 意味地図

先の第 2 節で述べた通り、ヘニングの四面体に始まる各図式化は、何かを語っているようでありながら、客観的な指標がなく、それぞれの図をどのように見比べれば良いのかという指南もなされていない。

本稿では客観性を担保して言語研究に留まることを目的に、言語学で用いられている意味の構造や体系を図示する手法として、意味地図を用いて味覚語彙の図式化を試みる。

意味地図は複数の言語を用いて、範列関係にある類語同士の意味の重なり合いのみを基に図を描く手法であり、これによってそれら複数の言語が共通して持つ意味概念の関係性、遠近を図式化することが可能である。ある意味概念と別の意味概念との間に描かれる経路は、概念同士の類似性、意味的な近さを反映することとなり、それによってヒトの認知能力の一つである範疇化能力を覗き見ることができる。

但し 6 節で示す通り、真正な意味地図の手法のみではパキスタン北部の味覚語彙の意味図を構築することが適わなかったため、本稿ではそこから大きな論理的飛躍とならない範囲内で拡張し、一枚の図に収められるところまで意味領域を拡大しての模式図を描いていく。この記述でも明らかであるが、本稿は言語学の論文として調査量と調査内容から迎えた限界を示すこととなり、一方で言語人類学の論文として一定度合のそうした工夫をするものであることを予め容認されたい。

4. 調査

本節ではまず 4.1 節で調査の基本情報を示し、次いで 4.2 節で調査手法に関して少し細かく説明をする。

4.1. 調査情報

本研究ではパキスタン北部の言語の内、以下の八言語を対象として大きく分けて四地点で現地調査を行った：①東ブルシャスキー語、ドマーキ語、②シナー語、パシュトー語（北東方言）、③西ブルシャスキー語、コワール語、④カラーシャ語、カティ語。調査地点は①ギルギット・バルティスタン州フンザ県フンザ谷、②同州ギルギット市、③同州ギズル県ヤスィン谷、並びに④ハイバル・パフトゥンフワー州下チトラール県ルンブール谷である。期間中、数字の順に行った。協力者は青年層から高年層まで各言語につき数名で、全員が男性であった。調査期間は 2019 年 8 月 26 日から 10 月 16 日であり、媒介言語には目標言語そのものかウルドゥー語を用いた。

これらの言語はパキスタン北部で話されているという点では共通しているが、言語系統としては区々である。多くはインド・ヨーロッパ語族に属すが、そうでない言語も含まれているので、論旨と直接は関わらないけれど、各言語の言語系統を下の表 1 に一覧の形で示しておく。なお、上では調査順に並べていた言語の並び順を、以下の表や調査結果の節では、西から東への大まかな分布地域に沿った順序に変えて示していく。

表 1：調査言語の言語系統

パシュトー語	インド・ヨーロッパ語族　イラン語派
カティ語	インド・ヨーロッパ語族　ヌーリスタン語派
カラーシャ語	インド・ヨーロッパ語族　インド・アーリヤ語派　北西グループ
コワール語	インド・ヨーロッパ語族　インド・アーリヤ語派　北西グループ
西ブルシャスキー語	ブルシャスキー語族
シナー語	インド・ヨーロッパ語族　インド・アーリヤ語派　北西グループ
ドマーキ語	インド・ヨーロッパ語族　インド・アーリヤ語派　中央グループ
東ブルシャスキー語	ブルシャスキー語族

4.2. 調査手法

今回の研究では、複数名のネイティブ話者が同席している場面で、①それぞれの言語での味覚に関する形容として基本的にどういった単語を用いるか；②それぞれの単語がどういった食品・料理に対して使われるか；③それぞれの形容は味以外に用いることもあるか（「匂い」・「人」といった語やその他の名詞類）を尋ねる形で味覚に関する表現を収集した。更にそのようにして収集した表現の内、第一義が味覚の形容であり、複合語ではないもの[2]を選別して「基本味覚語彙」と認定した。派生語は容認している。②の例が一概に言えない場合には、④目標言語での言葉による説明を促すことで理解を補った。

③の質問によって「甘い匂い」「辛い人」のような拡張用法も副次的に収集できたが、今回の分析では用いない。この設問は各語の語義を理解し、第一義が何であるかを判定するための参考情報を収集するのが主な目的であった。

なお、食に関する研究をしている文化人類学者らからの参考意見では、サンプルとなる食品を各言語の話者に味わわせて味覚表現を引き出す手法が提案された。穏便な手法では現地で食されているものを一律で試食させる案、過激な手法ではクエン酸や甘味料のような極端な味のものや、更にはワサビやクサヤのようなパキスタンに元々ないものを食べさせるという案であった。しかし前者は、パキスタン国内のみとはいえ異なる山村数ヶ所での調査に際して、どこでも等しく調達可能な食材がなく断念。後者は、それが事実として別の文化圏で食用されているものではあるが、イスラーム法的にそもそも現地に存在しない食材

[2] 即ち日本語の「甘辛い」みたいな表現は複合語であるために、「キツい（味）」みたいな形容詞も第一義が味覚表現であるとは看做しがたいために、どちらも基本味覚語彙には含めない。当然、「凄く甘い」などの句も除いている。

や食品は「疑わしいもの」[3]であり、それを持参して実験的に食べさせて味の感想を訊こうというのは倫理的に適切ではないので放棄した。その末に取った手法が上に述べた語彙調査であり、一般的な語彙調査と異なって複数名を同席させたのは一般語彙として妥当なものを協議して提示させるのが「基本語彙」を取る上で有効かと考えたためである。

いずれの言語であっても、話者間で意見が割れて揉める語彙というのはなかった。

5. 味の同定

調査で得られた諸言語の味覚形容詞が実際に、どういった味を示す語彙であるのかを 4.2 節で述べた調査手法の②④を基にして同定した。話者によるウルドゥー語や英語などでの説明（④には含まない）もあったが、これを参考に留めたのは異言語間での言い替えに際して同一話者の脳内で意味同定に関するトートロジー[4]がある可能性を避けるためである。

以下の表 2 に、得られた基本語彙の意味（《 》で表すこととする）と、その語彙が指し示す食品・料理の例、もしくは言葉による解説とを示す。意味はニュアンスのブレを抑える意図で、日本語と英語とを併記した。これは全ての味に関して全ての言語で得られたということではなく、一言語でも事例があれば表に載せている。同じ食品（ワイン、杏仁、蒸留酒）が複数個所に挙がっているものは、別の言語での例示であり、ある種、意味同士の近さを示している側面だとも言える。幸いどの言語でも、同一の食品を別の意味に宛てて例示したケースはなかった。

表 2：パキスタン北部の言語に見られた基本味覚語彙の示し得る味

意味	食品例として挙がったもの；「言葉による解説」
《甘い *sweet*》	砂糖、果物全般、チョコレート、肉
《旨い *delicious*》	ワイン；「味が良い」「食べ易い」
《しょっぱい *salty*》	塩
《不味い *bad-tasting*》	「味が悪くてまずい」
《無味の *tasteless*》	「味がなくてまずい」
《苦い *bitter*》	悪いクルミ、焦げた料理、酒、タバコ、毒
《辛い *chilly*》	唐辛子、黒コショウ、パンジャーブ料理、蒸留酒、チーズ
《酸っぱい *sour*》	酢、ワイン、リンゴ、スモモ、未熟な果物、蒸留酒、腐った牛乳、ブドウ、トマト
《渋い *mouth-puckering*》	カキ、未熟な果物、クルミの果肉

[3] シュブハ（شبهة *šubha*「疑惑」）と呼ばれるカテゴリ。シュブハのものはできるだけ口にしないことが求められる。イスラーム文化では食品に関して大きく三カテゴリがあり、法的に問題のないハラール（حلال *ḥalāl*「許可」）のものは食べても良く、逆に問題のあるハラーム（حرام *ḥarām*「禁止」）のものは食べてはならない。シュブハはそのどちらにも入らないものであり、ハラールやハラームが定められた時代のイスラーム圏に存在しなかったような食品は、全般的にシュブハに該当すると考えて大きな問題はない。

[4] 日本語話者が「甘い」と考えているものを英語で一律 *sweet* で表現するということ。この場合、これらは全く同じ意味範疇を指し示しているので、解説ではなく言い替えに過ぎない。その者の言う *sweet* と、英語話者の *sweet* とでは意味範囲が異なる可能性があり、後者だと見込むと分析に誤解が生じる。

意味	食品例として挙がったもの；「言葉による解説」
《コクのある *full-bodied*》	最上のクルミ、アーモンド、杏仁、上出来のワイン、杏仁の油粕
《しょっぱ過ぎる *too salty*》	「とても《しょっぱい》」
《甘じょっぱい *salty-sweet*》	「《甘い》＋《しょっぱい》」
《甘過ぎる *too sweet*》	「とても《甘い》」
《甘ったるい *syrupy*》	熟しきったブドウ、甘いブドウ汁（ワイン原液）、杏仁
《ほろ苦い *bittersweet*》	砂糖入りのコーヒー；「《甘い》＋《苦い》」

次節ではこれらの味を基準として、各言語での実際の基本味覚語彙について考察する。

6. パキスタン北部の基本味覚語彙

まずは次ページの表 3 に、八言語の基本味覚語彙を味に割り振ってまとめて一覧として示す。

表ではセルの書式で 3 つのカテゴリを設けている。【カテゴリ A】白地に語形が入っている普通のセルが基本味覚語彙と問題なく認定できる語である。【カテゴリ B】表で薄い灰色に網掛けをして文字列に複合語境界記号+を含んでいるセルは、調査で収集したがその味が複合的な表現でなされており基本味覚語彙ではなかったものの、他の言語との対照に際して参考すべき表現が入っている。【カテゴリ C】濃い灰色で網掛けをして斜め罫線で×としているセルは、少なくとも今回の調査でその味に相当する意味を持った語句が協力者らから自発的に産出されなかった箇所、空欄である。

表 3：パキスタン北部諸言語の基本味覚語彙

	パシュトー	カティ	カラーシャ	コワール	西ブルシャスキー	シナー	ドマーキ	東ブルシャスキー
甘い	xóog	aruzuó	máora	širín	nyam	ispáo	miṭʰá	uyám
旨い	mazidáar		žáo	xaldár		mazedáar	mazaí	
しょっぱい	maalgín	ẓuk+čʰalə́	l̥ə̃+kʰal	ṣor	bayú	paźú	paayúi	bayúkiṣ
不味い	beemazá	kụró	wę̣kʰál	wexál	wexál	aɣáo	aɣaápo	aɣaápo
無味の	piká				bíći	duúm		
苦い	trix		wę̣kʰál / číṣṭaka	trok	ɣaqám	ch̤úṭo	karká	ɣaqáɣum
辛い		murč+čʰalə́	čunḍáki	palék	marć	marś	paćaná	babárum
酸っぱい	triw	čʰinó	črúka	šud	šud	ć́húrqo	ć́hurká	ṣuqúrum
渋い			číṣṭaka	iškét				
コクのある		múuro			telé		maurá	tináani
しょっぱ過ぎる			kạ́wa		bayú+ṣor		kos	ṣaú
甘じょっぱい							gaśárum	gaśárum
甘過ぎる						bóḍo+ispáo		śirení
甘ったるい						móṛo		
酸っぱ過ぎる[5]						ć́húrqo+śud		
ほろ苦い				tošták				

※　音素表記を通言語的な記号で統一した。IPA と異なる記号は次の通り：t [t̪], d [d̪], ṭ [ʈ], ḍ [ɖ], ż [dz], ć [tɕ], ź [ʑ], č [ʧ], ç [ʦ], ś [ɕ], š [ʃ], ṣ [ʂ], ẓ [ʐ], l̥ [ɬ], r [ɾ], ṛ [ɽ], ɣ [ɰ], y [j]; V̩ [V̩]。V́ は高アクセント。VV は長母音または同音の母音連続（言語ごとの違いを捨象した）

[5] 5 節で同定した味の意味にはなかった《酸っぱ過ぎる》は、6.1.1 節の検討に関する参考情報として入れた。実際に《酸っぱ過ぎる》を意味する基本味覚語彙を持つ言語は今回の研究対象の言語の中にはない。

調査で得られた基本味覚語彙は傾向として、西ほど語彙数が少なく、東ほど語彙数が多いという特徴が見られた。特にパシュトー語やカティ語で、一つの形容詞が複数の味をカバーしているとしてまとめられた。作表上なるべく、そういった複数の意味に跨って分布している語が図示できるようにと並びに配慮をしたが、カラーシャ語の《苦い》は話者らに *wẹkʰál* と *číṣṭaka* とのいずれでも表現するとされ、*wẹkʰál* は上に隣接してカバー範囲の《不味い》・《無味の》が配置できているものの、*číṣṭaka* でカバーしている味である《渋い》は下に離れた位置になってしまった。ここだけは、パシュトー語・カティ語との兼ね合いで諦めた箇所になる。

6.1. 意味地図と拡張地図の作図

表 3 に列挙された八言語の語彙から意味地図を描くと、結局、複数の意味に跨っている語がある部分だけしか地図化ができない。暫定的にそうして作成した二つの領域の意味地図を図 5 として示す。

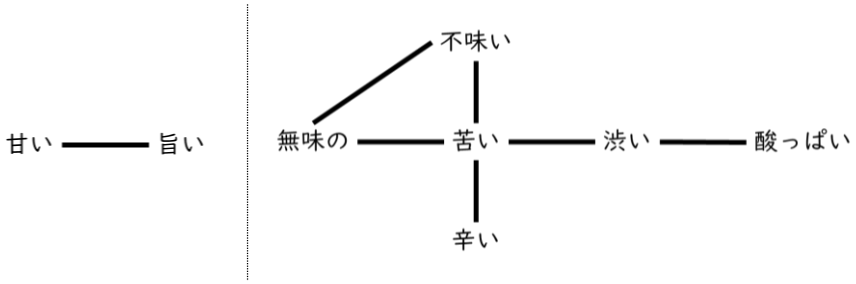


図 5：厳密に作った最大限の味覚意味地図

ここから、意味地図の基本的なコンセプトから逸脱した拡張地図の作成を試みる。本稿の目的である言語学に耐える客観性は損なわれるが、意味論的研究として道理の通せる範囲を睨みつつ図式の拡大を図るものである。工夫は以下三つ小節で述べる観点のみに限って行う。

6.1.1. 拡張 1：過剰な味の処理

一点目は、味の過剰性を形容する表現が表 3 に含まれていることに注目する。《甘い》・《しょっぱい》・《酸っぱい》に対する《甘過ぎる》・《しょっぱ過ぎる》・《酸っぱ過ぎる》である。これらは言語による説明で「非常に《甘い》」などと言い替えられるものであり、それでも基本語彙（カテゴリ A）と認定できる範囲や、考察に値すると思われる表現（カテゴリ B）で出現したものである。具体的な語対を以下(1)・(2)に列挙する。

(1) カテゴリ A 同士

a. 東ブルシャスキー語： *uyám*《甘い》 — *śirení*《〜過ぎる》
b. 東ブルシャスキー語： *bayúkiṣ*《しょっぱい》 — *ṣaú*《〜過ぎる》
c. ドマーキ語： *paayúi*《しょっぱい》 — *kos*《〜過ぎる》

(2)　カテゴリ A・B の組み合わせ

a.	シナー語：	*ćʰúrqo*《酸っぱい》A	—	*ćʰúrqo śud*《〜過ぎる》B
b.	シナー語：	*ispáo*《甘い》A	—	*bóḍo ispáo*《〜過ぎる》B
c.	西ブルシャスキー語：	*bayú*《しょっぱい》A	—	*bayú ṣor*《〜過ぎる》B
d.	カラーシャ語：	*l̥ṍ kʰal*《しょっぱい》B	—	*kə́wa*《〜過ぎる》A

《甘い》と《甘過ぎる（とても甘い)》とには意味上の関係があると考えることに無理はないだろう。(1)の事例から《甘い》・《しょっぱい》に関して《〜過ぎる》という意味との経絡を付けることができる。(2)に関しては対の一方が基本語彙ではないのでやや説得力が落ちるが、その語構成に着目して同等に扱おうと考える。(2a)の《酸っぱ過ぎる》、(2c)の《しょっぱ過ぎる》は、左の基本味覚語彙に *śud* や *ṣor* という要素が足されたものになっているが、これらはシナー語や西ブルシャスキー語で独立語として用いられる語ではなく、いずれもコワール語の基本味覚語彙 *šud*《酸っぱい》や *ṣor*《しょっぱい》を借用しているものである。そういう意味では、言語 X と言語 Y の同義語を組み合わせて表現しているものである。管見の限り、そういう手法で過剰性を形容するのはこれら以外では見受けられず、(2a, c)の《〜過ぎる》表現は単純語ではないという側面からカテゴリ B とはしたが、言語内的に見ればクランベリー形態を含んでいるため、複合語か派生語か判定しづらい部分でもある。

(2b)はカテゴリ A・B の対ではあるが単に *bóḍo ispáo*「とても甘い」という表現であり、ここの議論には関係しない。この対に関しては後の 6.1.3 節で述べる。

(2d)に関しては基本味覚のほうが複雑な構成をしていて、過剰な味のほうが単純語になっている例であり、分析することが難しい[6]。そういう意味では、やや《しょっぱい》と《しょっぱ過ぎる》との間の意味的関連性を否定する向きの傍証になり得るものであるが、本稿では看過することとした。今後の検討事項としたい。

6.1.2. 拡張 2：中間的な味の処理

二点目は、中間的な味の存在に着目する。《甘じょっぱい》、《ほろ苦い》という 2 つの基本味覚語彙が、僅少ではあるが収集できている。これらはいずれも、味の説明（表 2）で協力者らが明確に「A と B とを合わせた味」といった言いかたをしていたものである。

(3)　a.　東ブルシャスキー語：
uyám《甘い》＋*bayúkiṣ*《しょっぱい》＝*gaśarum*《甘じょっぱい》
b.　ドマーキ語：　*miṭʰá*《甘い》＋*paayúi*《しょっぱい》＝*gaśarum*《甘じょっぱい》
c.　コワール語：　*širín*《甘い》＋*trok*《苦い》＝*tošták*《ほろ苦い》

[6] 意味変化を伴った近年の借用語であるか、あるいは *kə́wa* が本来《しょっぱい》という意味であったか、本稿で扱えていない別の味を指していたか。可能性が広過ぎるのと、変遷の痕跡が追えないのとが相俟って、少なくともここで扱える範疇の話ではない。

語対として(3)に挙がっている内、(3b)のドマーキ語の《甘じょっぱい》は、東ブルシャスキー語からの借用語であり、考慮から除外したい[7]。(3a, c)でそれぞれ A + B = C として、基本味覚語彙で表現される二種の意味（A, B）が別の基本味覚語彙で一語で表現される（C）ということは、これらの意味概念が互いに似たものではなく、全く同一の概念であるか（A = B (= C)）、全く別の概念であるか（A ≠ B）を表していると考えられる。そうでなければ意味を合わせた別の基本語彙が立てられる言語上の必要性がない。そして《甘い》と《しょっぱい》や《苦い》が別の意味概念であることは他の言語からも明らかであるので、この複合的意味は対立する概念の合成であると言えるだろう。ヘニングの光の三原色の譬えを思い出していただきたいのだが、*gaśarum* が「《甘い》か《しょっぱい》かの味がある」ではなく「《甘い》且つ《しょっぱい》味がある」を意味し、同じく *tošták* が「《甘い》且つ《苦い》味がある」を意味しているのは、これらの味が元素のように別個に対立してからであると言える。

これらの中間的な基本味覚語彙の存在が繋ぎ役として対立する味を関係付けていると看做せるので、意味地図で描こうとしている「近い関係」ではなく、水と油とのような「相反する関係」を拡張地図上で《甘い》と《しょっぱい》、《甘い》と《苦い》の間に示すこととする。

6.1.3. 拡張 3：《甘ったるい》味の処理

最後に、先程飛ばした(2b)シナー語の *ispáo*《甘い》と *bóḍo ispáo*「とても《甘い》」との対であるが、これは表 3 にある *móṛo*《甘ったるい》の解釈に関連する語彙である。ワインの素となる完熟したブドウの汁などに用いる *móṛo* という形容は、調査手法④言語による解説では「甘味が強い」「油分が多いような」「濃密な」といった意見が得られている。一方で「単に *bóḍo ispáo*（とても《甘い》）であるのとは異なる」のだとの主張もされ、《甘過ぎる》とは別に《甘ったるい》として概念を独立させたものである。更に、*móṛo* たり得る食材として(a)《コクがある》にも登場している杏仁が挙げられており、(b)語形上の類似がカティ語 *múuro*《コクがある》やドマーキ語 *maurá*《コクがある》（更にカラーシャ語 *máora*《甘い》）との間に認められるという二つの点も勘案すると、《甘過ぎる》～《甘ったるい》～《コクがある》との意味的近似性が推定される。但し、《コクがある》の味の手法④言語による解説で《甘い》に直接関連付けている説明は得られていない。

6.2. 考察

表 3 の上半分がどの言語文化でも共通して知覚されているであろう味であり、下半分は特定の言語文化でのみ観察された味である。つまり、この八言語をパキスタン北部の代表だと看做すのであれば、パキスタン北部では《甘い》・《旨い》・《しょっぱい》・《不味い》・《無

[7] 但し、東ブルシャスキー語の *uyám* が《甘い》・《旨い》を意味する一方で、ドマーキ語の *gaśarum* の意味的な構成要素である *miṭʰá* は《甘い》だけを指し、*mazaí*《旨い》とは別物であるという点は一考の余地があり、翻って両言語の *gaśarum* が《旨じょっぱい》ではなく《甘じょっぱい》であることを示す証左となり得る。

味の》・《苦い》・《辛い》・《酸っぱい》の八つの味は共通して知覚されており、言語化される味であるということになる（《しょっぱい》と《辛い》についてはやや弱い；後述）。だが、これらの味が共通して知覚されるということであり、これらの味が必ずしも別物として認知されるという話ではない。次点の《渋い》は北西部では言語化されるが、北東部では言語化まではされない味である。ちょうどこの切れ目は、北西の言語群がハイバル・パフトゥンフゥー州で（も）用いられ、北東の言語群がギルギット・バルティスタン州で用いられるという、分布が州境界と重なる部分でもあり、不思議な説得力がありそうにも見える。

その共通味覚に関する複合的表現に目を向けよう。カティ語の *ẓuk čʰalə́*《しょっぱい》、*murč čʰalə́*《辛い》[8]はそれぞれ、*ẓuk*「塩」と *marč*「唐辛子」の *čʰalə́*「味」という表現である。地理的にも隣接しているカラーシャ語でも *l̥ə̃ kʰal*《しょっぱい》が *l̥ə̃*「塩」の *kʰal*「味」という構成になっていることからも、これらの香辛料が比較的後世になって外部から齎され、それに伴ってその味が常用されるようになったものだと理解することができそうである。そういう意味では、上で述べた共通味覚は六つ＋二つと下位分類するのが妥当であろう。単純語で表現されている言語でも、《しょっぱい》は「塩」という語から派生されている、あるいは「塩」という語そのもので表現されることが多い（「塩」；パシュトー語 *máalga*、西ブルシャスキー語 *bayú*、シナー語 *paźú*、ドマーキ語 *paayú*、東ブルシャスキー語 *bayú*）し、同じように《辛い》は「唐辛子」という語で表現する言語が見受けられる（「唐辛子」；西ブルシャスキー語 *marć*、シナー語 *marś*）。

《しょっぱい》が対立軸上にある味でありつつ意味的に関連する語が極端に少ないのは、新参の知覚であるからかも知れない。その点、同じく新しいと睨んだ《辛い》の周囲に意味が多く分布しているのは、《辛い》が國廣の図で、氏の言う「好ましくない味の地平」を挟んで《甘い》の対極に位置していることを念頭に考えれば、《辛い》が《しょっぱい》よりも早い時点でパキスタン北部地域に参入して「不快な味」シリーズと結び付けて処理され、その後また別の知覚として《しょっぱい》が生まれそちらは拡がりを見せなかったという、認知獲得の順序が推定できそうである。カラーシャ語 *čunḍáki* (~ *čunḍóku*)《辛い》と東ブルシャスキー語 *babárum*《辛い》という基本味覚語彙は、チーズの味が濃いことに対しても用いるという協力者らからのコメントがあり、原義として「味が強い」であった語を特に刺戟的である味に多用するようになったものなのではないか。つまり、新参の味であっても語彙は古い可能性がある。

言語間での借用も散見されているので、そういった語彙を省いて本来語だけに絞れば、より厳密に（比較的）古来の味覚認知が理解できる可能性もあるが、体系性を考察するに足りるデータ密度が担保されなくなるかも知れない。シナー語 *ayáo*《不味い》＞ドマーキ語・東ブルシャスキー語 *ayaápo*《不味い、無味の》[9]や、シナー語 *ćhúrqo*《酸っぱい》＞ドマー

[8] 2008 年の基礎語彙調査では *tsatskólə*「辛い」という語形が取れいているが、2019 年調査では出て来なかった。現地調査中にその異なりに気付けなかったため、*tsatskólə* と *marč čʰalə́* との関係性は不明。

[9] 東ブルシャスキー語やドマーキ語の本来語で VV́ という尻上がりアクセントの長母音はないか稀であり、一方でシナー語には広く確認できる点などから、恐らくシナー語の古い語形が *ayaápo* であり、シナー語（ギルギット方言）で音変化が起こったものと考えられる。社会言語学的背景からも、シナー語が最も威信的で、東ブルシャスキー語が次ぎ、ドマーキ語が最も威信度が低い。

キ語 *ćhurká*《酸っぱい》、東ブルシャスキー語 *gaśarum*《甘じょっぱい》＞ドマーキ語 *gaśarum*《甘じょっぱい》、コワール語 *šud*《酸っぱい》＞西ブルシャスキー語 *śud*《酸っぱい》、コワール語 *wexál*《不味い、無味の》＞西ブルシャスキー語 *wexál*《不味い》は借用である。東ブルシャスキー語の *śirení*《甘過ぎる》も、もしかしたらコワール語 *širín*《甘い》の借用の可能性が考えられるけれども、コワール語と地理上で隣接している西ブルシャスキー語のほうに確認できない（*śirení* という表現を用いないことを確認した）ことから否定されるかも知れない。

西ブルシャスキー語 *nyam*《甘い、旨い》・*ɣaqám*《苦い》と東ブルシャスキー語 *uyám*《甘い、旨い》・*ɣaqáɣum*《苦い》は同源語関係である。カラーシャ語 *črúka*《酸っぱい》とシナー語 *ćhúrqo*《酸っぱい》、パシュトー語 *trix*《苦い、辛い》とコワール語 *trok*《苦い》も同源語であろう。

《旨い》には「味がある」という語構成の派生語が多い：パシュトー語 *mazi-dáar*、コワール語 *xal-dár*、シナー語 *maze-dáar*。ドマーキ語 *mazaí* も「味の」と直訳できる。逆に《不味い》には「味がない」表現が見受けられる：パシュトー語 *bee-mazá*、カラーシャ語 *wę-kʰál*、コワール語 *we-xál*。

6.3. まとめ：パキスタン北部の基本味覚

6.1 節の工夫を踏まえ、6.2 節の考察を経て通用しそうな理窟に則ると、5 節の表 2 で示した全ての味の意味を含めた拡張地図が表 3 の語彙に基づいて図 6 のように描画できる。単線が意味的親近性、二重線が意味的な対立軸を示している。それぞれの線の長さの異なりに積極的な意味はない。

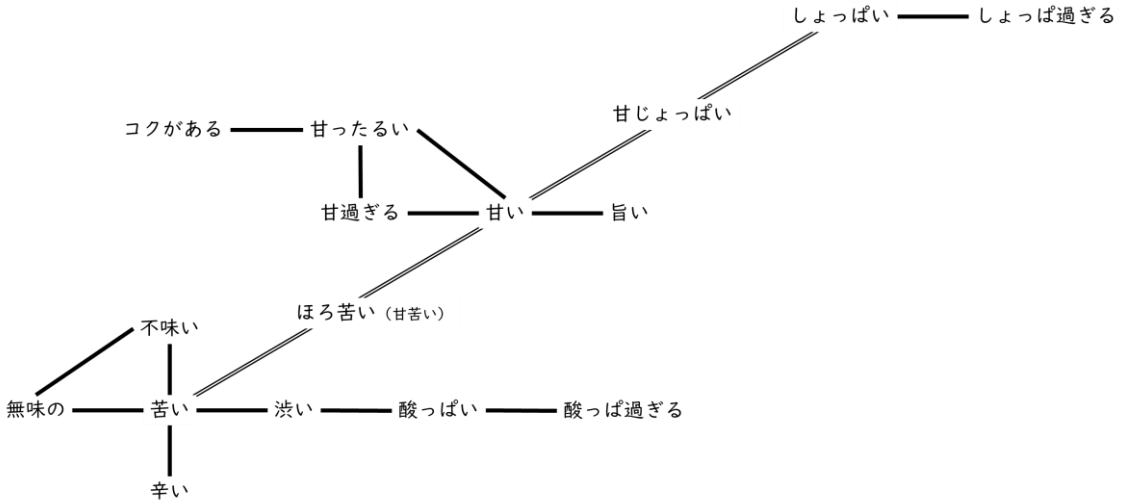


図 6：パキスタン北部の味覚の拡張地図

これが厳密な意味地図（図 5）ではないこと、純然な基本味覚語彙のみを対象として構築した図ではないことには留意が必要であるが、八言語の味覚語彙が一枚の図版に統合する

ことができたのは、パキスタン北部の諸言語、並びにその話されている文化圏での味覚認知に飛び抜けて異質なものが含まれていないこと、つまりこれらの言語による世界の分割に相矛盾するようなものがないことを意味していると言える。

現代のパキスタン北部の味覚認知においては、以下の七点が言えそうである。図 6 に①～④の特徴が描かれ、表 3 から⑤～⑦が読み取れる。

(4) ① 《甘い》を中心にして片翼に《しょっぱい》、片翼に《苦い》となる対立軸がある
② 《甘い》と《旨い》・《甘過ぎる》・《甘ったるい》との間、《甘ったるい》と《コクがある》との間に意味的近似性がある
③ 《しょっぱい》には《しょっぱ過ぎる》しか近似の味がない
④ 《苦い》と《不味い》・《無味の》・《辛い》・《渋い》との間に近似性がある。《不味い》と《無味の》との間にも関連がある。更に《渋い》の先に《酸っぱい》、そして《酸っぱ過ぎる》まで続く意味の連なりがある
⑤ 西部は東部よりも語彙が少ない傾向にあり、単一表現のカバーする範囲の広いことが多い傾向と関連している
⑥ 《渋い》味は西部で明確に認識されている
⑦ パキスタン北部の基本の味は、第一階層に《甘い》・《旨い》・《不味い》・《無味の》・《苦い》・《酸っぱい》、第二階層に《しょっぱい》・《辛い》、第三階層に《渋い》・《コクがある》がある

これらをまとめて考えると、言語の側面から考える限り、三元論的な味覚認知をパキスタン北部では共有して持っているということになり、しかしそれらの三元味の周囲にある意味の広がりは複雑で広いもの（④）から極めてシンプルなもの（③）までギャップが大きいと言える。

大まかに西のハイバル・パフトゥンフワー州と東のギルギット・バルティスタン州とで傾向が異なり、特に《渋い》という味の有無に関してはっきりと差が出ている。これらの州の間の交通の動脈は海抜 3,720m のシャンドゥール峠を超える自動車道であり、地勢的な阻害が文化を隔てていたことを思わせる。

第一階層と第二階層とが全域に亙る基本的な味覚と言えるが、発生に時代差がありそうであり、それが言語的な味の対立パタンと階層との間に齟齬を生んでいる。ヒンドゥークシ山脈からカラコラム山脈に掛けて広がる本稿で扱った八言語は生態環境的にそう大差のない地域に収まっているとも言え、その環境で得られる自然食材が刺戟する味覚は、凡そこの第三階層までに収まると考えられる。とは言え、第三階層までの味覚となると、この地域以外を対象として考えてもそう違いは出なさそうであり、この考察に強く意味が伴うかは疑わしい。

7. 基本味覚語彙の可用性

前節で一通り本題の考察を済ませたのだが、本節では基本味覚語彙という仮説モデル自体の可用性について述べたい。

6 節で示した結論部分にあった(4)①は、日本語文化圏や「西洋」文化圏の味覚語彙のモデルである図 1・図 2 や諸先行研究の構築していた味覚対立と違った、三元論的な認知世界となっている。逆に、今回の八言語に日本語を含めて図 6 のように（拡張）意味地図を描こうと思ったら、そもそも破綻してしまって何も描き出せなかったのではないか。例えば西日本の日本語では《辛い》と《しょっぱい》が *karái* という語で束ねられるので、そこに意味的近似性が認められることとなったら、《しょっぱい》から《苦い》が一連の意味まとまりになり、対立軸の話と矛盾をきたす。

飽くまでも地続きの言語群を対象にこの手法を用いれば、それなりにまとまった描画が可能であるという事例を本稿では提示できたが、その範囲を拡大すればいずれどこかの言語を取り入れたタイミングで無理が出る筈である。寧ろ、そうして無理が出る地点が文化の地理的な断続点であると看做すこともできるかも知れないが、そのためには双方向的に作図をして迫り、こちらから見た文化の終点だけではなくあちらから見た文化の終点を確認する必要性は絶対にある。

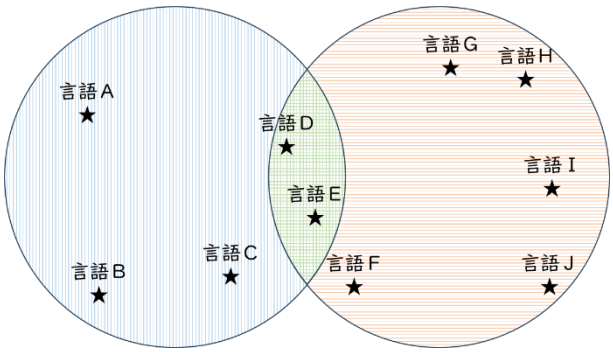


図 7：言語文化領域の重なり合い模式図

つまり、図 7 のような言語分布があったとして（但し言語は実際には点的ではなく面的に分布している）、それぞれ円が今回見たような（拡張）意味地図で共通性を確立できる範囲だとした場合に、左の円を見ていた立場から言語 F に手を伸ばして意味地図が破綻したからと言って、即座に言語 A〜E と言語 F から向こうが別の文化圏だとしてしまうのではなく、言語 F を含む何らかの言語群で共通した意味地図が作図できる右の円（これは言語 D〜J の文化的共通性を支持する）をも見て、言語 C で破綻するが、言語 D・E はそちらでも馴染むことを確認しなければならない。言語や文化に優劣はないからである。

図 7 から分かることは、言語 A〜C と言語 F〜J とはこの図で示している側面に限って言えば文化的に異質であるが、言語 D・E は両面性を持っていて、排他的にどちらかの文化圏に属しているとは言い難いということである。却ってこういった言語 D・E が橋渡し役や突

破口となって文化の流入や変容が起こる可能性なども考えられるわけで、こういった単純化した話で大きな話をしたいのであれば、結論を急ぐべきでないのは鉄則である。

本稿で提案した基本味覚語彙の確定は、6.1.1 節で示した借用由来のクランベリー形態の扱いにも絡んで、まだ曖昧さをかなり残している。何を「基本」と看做すのかの議論も、複合語を排除する理由も不提示である点など、甘いものになっているが、パイロット研究として敢えてそうした部分でもある。基本色彩語彙に限らず、言語学や言語人類学が語彙論を展開する際に大概、通言語的に通用して説得的な定義がしっかりと示されていないのは弱点であるが、示されていないのも手抜きばかりではなく理由がある。

視覚に関する色彩に次いで扱いが可能そうであるのが味覚に関する味であると考えて本研究をしたものであるが、調査上の倫理の問題もあって、色彩（可視光）ほど対象概念である味の客観的確立ができていないのも今後改善の余地がある（図 8）。それこそクエン酸やスクラロースなどの典型的なサンプルを用いるとか、脳波測定といった客観化は手立てとして考えられるだろうけれど、必ずしも生理学や脳神経科学的な視座ばかりが「正しい」と評されるべきであるとも思わない。いずれにせよ改善を具体化してくれる方には是非とも現地調査との親和性の低さをクリアしてパッケージ化して貰いたい。色彩と比較して、味は元素（アリストテレスの四原味など）の数が多くて実効軸としての次元数がどうしても高くなりがちである。それこそ先行研究の吉田（1998）の苦心が読者に読み解けない描画（図 3）のような混迷の原因にもなっているだろう。高次元の模式図の平面（二次元）への落とし込みには限度があるので、基本語彙調査から抜けて味覚表現のマッピング（どの味を何と形容するのか）ということを考える段に当たっては、どうにか次元を下げて図式化する手法なども求められるだろう。

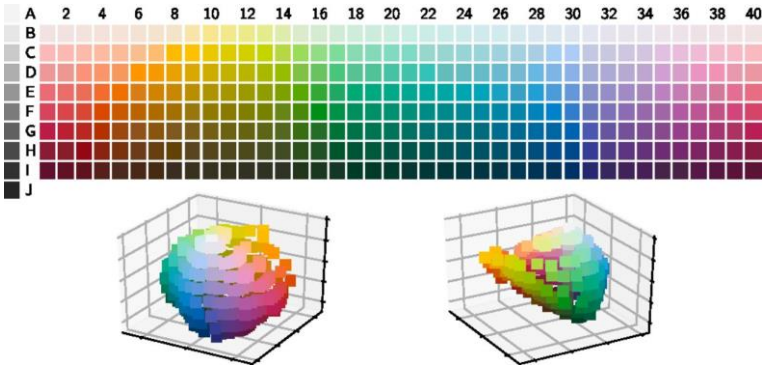


図 8：色彩研究では彩度を固定したこの手の明度・色相の二軸チャートが多用される（Zaslavsky et al. 2018: 7939）

言語リソース的な側面から考えると、基本嗅覚語彙や基本聴覚語彙となると表現数が乏し過ぎて研究として成立するか難しいところであると思えるし、触覚語彙はオノマトペ研究などではありそうだが、基本語彙となると温冷、硬軟、軽重などの対立軸こそ多々あれ、多用に区別するような軸は想定し辛い。

いずれの発展あるいは改良を図るにしても、本稿は議論にも構想にもまだ余地が多くあると思う。どうぞ踏み台として自由に踏んでいっていただけたらと願うものである。

参考文献

内林政夫（1999）『ことばで探る食の文化誌』東京：八坂書房.

國廣哲彌（1982）『意味論の方法』東京：大修館書店.

ザトラウスキー，ポリー（編）（2021）『五感で楽しむ食の日本語』東京：くろしお出版.

柴田武（1998）「言葉からみた食」石毛直道（監修）・吉田集而（編）『人類の食文化』: 87-100．東京：財団法人 味の素食の文化センター.

柴田武・石毛直道（編）（1983）『食のことば』東京：ドメス出版.

ドイッチャー，ガイ（2012）『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』椋田直子（訳）．東京：インターシフト.

西尾寅弥（1983）「食の感覚を表わす形容詞」，柴田武・石毛直道（編）『食のことば』: 99–111.

山田進（1972）「現代宮古方言味覚語彙考―東京方言との比較を中心に―」，『沖縄文化』39 : 30–37.

吉田集而（1998）「味の認識と調味の類型」，石毛直道（監修）・吉田集而（編）『人類の食文化』: 369-407．東京：財団法人 味の素食の文化センター.

Berlin, Brent & Paul Kay (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. California: University of California Press.

Henning, Hans (1916) *Der Geruch*. Leipzig: Verlag von Johann Ambrosius Barth.

Zaslavsky, Noga, Charles Kemp, Terry Regler, & Naftall Tishby (2018) Efficient compression in color naming and its evolution. *PNAS* 115: 7937-7942.

Basic Taste Vocabulary in Northern Pakistan

YOSHIOKA Noboru
(National Museum of Ethnology / Graduate University for Advanced Studies)

Keywords: basic taste vocabulary, semantic map, Pakistan, linguistic anthropology

The major aim of this paper is to consider whether a basic taste vocabulary study, equivalent to the one for basic colour vocabulary, is possible as a linguistic anthropological study. As a pilot study, the minor aim was to identify the structure of taste perception shared across the region on the basis of the 'basic taste vocabulary' in the languages of northern Pakistan.

The following seven points can be made about contemporary taste perception in northern Pakistan. (1) There is an axis of opposition with 'sweet' at the centre, 'salty' on one wing and 'bitter' on the other; (2) There is semantic proximity among 'sweet', 'delicious', 'too sweet', and 'syrupy', and between 'sypury' and 'full-bodied'; (3) 'Salty' has only 'too salty' as a close approximation; (4) 'Bitter' has 'bad-tasting', 'tasteless', 'chilly', and 'mouth-puckering' as close approximations, with being an approximation between 'bad-tasting' and 'tasteless', furthermore there is a sequence of meanings leading from 'mouth-puckering' to 'sour' and 'too sour'; (5) The West tends to have a smaller vocabulary than the East, which is related to the tendency for single expressions to cover a wider range; (6) 'Mouth-puckering' taste is clearly identified in the West; (7) The basic tastes of northern Pakistan are 'sweet', 'delicious', 'bad-tasting', 'tasteless', 'bitter', and 'sour' on the first level, 'salty' and 'chilly' on the second level, and then 'mouth-puckering' and 'full-bodied' on the third level.

The determination of the 'basic taste vocabulary' proposed in this paper still leaves a considerable amount of ambiguity. The discussion of what is regarded as 'basic' and the reasons for excluding compound words have not been presented, but this is a part of the pilot study that dared to do so. This study was conducted in the belief that tastes related to the gustatory sense is the second most likely to be handled after colours related to the visual sense, but there is room for improvement in the future as the target concept of taste has not been as objectively established as colour (visible radiation), partly due to ethical issues in the research.

三角関係標示の広域類型論

小林　剛士
(東京外国語大学 博士後期課程) la.fulfom@gmail.com

キーワード：言語類型論，外部所有，分格，受影性，個別性

1. はじめに・問題提起

類型論的な言語研究において，全体と部分の関係 (part and whole relation) に動詞述語を加えた，いわば三角関係 (全体-部分-動詞) の分析は高橋 (1975) にその端緒をみることができる．こうした三角関係は外部所有 (external possession)，二重主語構造 (double subject constructions)，名詞抱合 (noun incorporation) のように形態統語的に多様な振る舞いを見せる (Rose and Van linden 2023)．さらに風間 (1994) は一括支配型・分割支配型の別を提案し，所有関係のみならず知覚構文など三角関係を示す他の構文についてもその構造を統一的された基準で分析できるようにした．風間 (1994) の分類は一括支配型と分割支配型を等価な対立として見ている点も重要で，所有構造（すなわち一括支配型）の方を基底とする分析とは一線を画す．

本研究は風間 (1994) による枠組みをスタート地点とし，より広範で多様な言語を対象として，三角関係の節レベルのストラテジー（表現構造）のバリエーション，および意味領域の別によるストラテジーの使い分けを類型論的に調査・分析するものである．風間 (1994) は日本語・朝鮮語・ナーナイ語・モンゴル語などを調査対象としている一方，本研究で用いる『語学研究所論集』のデータ（詳細は後述）にはより多様な言語のデータが含まれている．

本研究で焦点を当てるのは「彼の肩をたたく」のような構文と「水を{全部／一部}飲む」のような構文である．部分要素の代替集合に着目すると，前者は集合が非均質であり（e.g. 肩，手，足……），後者は集合が均質である（e.g. 水，水，水……）．本研究ではそれぞれ「非均質集合文」(1),「均質集合文」(2) と呼ぶ．後者は Seržant (2021: 885) における true-partitive relation に相当する．

(1)　サハ語 非均質集合文（全体-対格 + 部分-対格）

kini　[*ol*　*kihi-ni*]　[*sann-ɯ-n*]　*taptaj-da*
3SG　あの　人-ACC　肩-POSS.3SG-ACC　トントンする-N.PST:3SG

「彼(女)はあの人の肩をトントン叩いた」　(江畑 2022: 492)

(2)　サハ語 均質集合文（全体-対格 + 部分-対格 + *kebis-* 完了を表す補助動詞）

min　*ïstakaan-naax*　[*uu-nu*]　[*barï-tï-n*]　*ih-en*　*kebis-ti-m*
1SG　コップ-PROP　水-ACC　全て-POSS.3SG-ACC　飲む-SEQ　AUX-N.PST-1SG

「私はコップに入った水をすべてを飲んでしまった」　(江畑 2022: 493)

本稿の構成は以下の通りである．まず非均質集合文の統語的ストラテジーにどのようなバリエーションがあるか示す (2 節)．次に均質集合文のストラテジーにどのようなバリエーションがあるか示す (3 節)．最後に一言語内に見られるストラテジーの使い分けについて分

析の観点と作業仮説を提示する (4 節). 小林，宮川，石橋（いずれも本論集所収）ではここで提示した観点と作業仮説に基づいて議論を進める.

調査対象例文は東京外国語大学『語学研究所論集』特集データ（以下「論集データ」）収録の 51 言語 8 例文 (表 1) および本研究のために追加で収集した 13 言語の追加例文 (表 2) である. この論集データは同一の調査票を用いて通言語的なデータを収集したものであり，構文レベルでのストラテジーのバリエーションを調査することに適している.

表 1: 語研論集例文（51 言語）

#	調査例文	所収
1	A は B に足を踏まれた。	14 号-2
2	私は頭が痛い。	17 号-15
3	彼女は髪が長い。	17 号-16
4	彼は (別の) 彼の肩をたたいた。	17 号-17a
5	彼は (別の) 彼の腕をつかんだ。	17 号-17b
6	私は (コップ) の水を一部飲んだ。	17 号-20a
7	私は (コップ) の水を全部飲んだ。	17 号-20b
8	私はその人が走って行ったのを見た。	23 号-28

表 2: 追加例文（13 言語）

#	調査例文
9	あの医者が彼の風邪を治した。
10	私は彼の服を引っ張った。
11	私は彼の絵を褒めた。
12	泥棒が彼の財布を奪った。
13a	私は彼の考え (全体) を理解した。
13b	私は彼の考え (一部) を理解した。
14	私は子どもたちを全員連れてきた。
15	私はそのリンゴを全部買った。
16	私はそのリンゴをたくさん買った。
17	私はそのリンゴを 3 個買った。
18	私はリンゴを 3 個買った。
19a	あの人が私たち (全員) を連れてきた。
19b	あの人が私たち (一部) を連れてきた。
20	私はリンゴを 1 個ずつ買った。

追加例文調査言語の一覧は下記の通りである (表 3). 以下でこれらの追加データを引用する際は出典を [名字] のように示す.

表 3: 追加例文調査言語の一覧

言語	調査者	言語	調査者
標準アラビア語	宮川寛人	フィンランド語	小林真緒
ヒンディー語	小林颯	コミ・ペルミャク語	長谷川朝香
口語タミル語	小林颯	ペルシア語	須貝梨麻
リトアニア語	笠原隆成	マレーシア語	加藤稚菜
チェコ語	松山芳瑛	モンゴル語	ムンフダラム
ロシア語	長谷川朝香	フィジー語	岡本進

2. 非均質集合文における統語的ストラテジーのバリエーション

本節では非均質集合の場合についてストラテジーの類型を整理する.

まず項構造については以下のようなバリエーションが見られる (表 4).

表 4: 項構造のバリエーション

類型	下位分類	項構造	言語例
一括型		[全体 部分] 動詞	日本語 (3)
分割型	単純分割型	[全体] [部分] 動詞	チェコ語 (4)
	共立分割型	[全体$_i$] [全体$_i$ 部分] 動詞	サハ語 (5), (6)

風間 (1994) にならって，大きく一括（支配）型と分割（支配）型[1]に分類する．一括型は全体と部分が（所有構造などによって）同一の項の中で表現されるものであり (3), 分割型は全体と部分が切り離されて異なる項の中で表現されるものである (4).

(3) 日本語

彼は [(別の) 彼の肩を]たたいた。 (風間 2012: 21)

(4) チェコ語

Poplácal [*ho*] [*po* *zádech*]
pat.3SG.PST 3SG.ACC on back.PL.LOC

「彼は（別の）彼の肩をたたいた」 (浅岡 2019: 140)

本研究では分割型をさらに単純分割型と共立分割型に分けることにする．共立分割型は全体と部分が別々の項で表現されると同時に，全体を表す所有人称接辞等が部分の名詞に付加されることなどによって，全体と部分が同じ項で表現されるようなものである (5), (6). 全体と部分が同じ項で表現される点で, 共立分割型は一括型と分割型の両方の特性を兼ね備えたものと言える. 共立分割型を一括型と分割型のどちらかに含めるべきか, 含めるとしたらどちらに含めるべきか, については議論の余地があるが, 本研究では全体と部分を別の項に分割しうるという点を重く見て分割型の一種とする.

(5) サハ語 「彼はあの人の肩を叩いた.」

kini [*ol* *kihi-ni*] [*sann-u-n*] *taptaj-da*
3SG あの 人-ACC 肩-POSS.3SG-ACC トントンする-N.PST:3SG

「彼(女)はあの人を肩をトントン叩いた」 (江畑 2022: 492)

(6) サハ語 「彼はあの人の手をつかんだ.」

kini [*ol* *kihi-ni*] [*ilii-ti-tten*] *ul-la*
3SG あの 人-ACC 手-POSS.3SG-ABL 取る-N.PST:3SG

「彼(女)はあの人を手からつかんだ」 (江畑 2022: 492)

ここで，この一括・分割の類型は文ではなく項構造における分類であることを強調したい．同一文中の従属部と主要部で異なる項構造を持つ分裂や抱合も観察されるからである．共立分割型と対照されたい (表 5, (7), (8))[2]．分裂の場合は従属部に全体項が現れ得ない（ただし別の文法関係で現れることはあるかもしれない）.

[1]名称から「支配」を削除したのは短く表現するためであって，便宜以外の意味は特にない.

[2]従属部が分割型で主要部が一括型である場合も不可能ではないと思われるが観察が難しい．その場合主要部には [全体 部分] 句の主要部である部分の indexing・一致標示が現れるが，従属部も主要部も分割型で [部分] 句の indexing・一致標示が現れている場合と区別がつかない.

表 5: 項構造の分裂と共立分割型の対照

従属部	主要部	項構造	言語例
一括型	分割型（全体）	[全体 $_i$ 部分] $_{従}$ 動詞 [全体 $_i$] $_{主}$	ブルシャスキー語フンザ方言 (7)
共立分割型	標示ナシ	[全体 $_i$] [全体 $_i$ 部分] $_{従}$ 動詞	サハ語 (5), (6)
分割型（全体）	分割型（部分）	[全体] $_{従}$ 動詞 [部分] $_{主}$	Chukchi 語 (8)

(7) ブルシャスキー語フンザ方言

khín-e [*i-phoíŋ*] *i-dél-m-*[*i*]
これ:H-ERG 3SG.HM:I-肩 3SG.HM:I-打つ-NPRS-3SG.HM

「彼は（別の）彼の肩を叩いた.」 (吉岡 2023: 26)

(8) Chukchi [全体] $_{従}$ 動詞 [部分] $_{主}$

ətlәg-e [*ekәk*] [*qaa*]-*nm-ənen.*
father-ERG son.ABS reindeer-slaughter-3SG.PST

'The father slaughtered a reindeer for the son.'[3] (Nedjalkov 1976: 199; Haspelmath 1999: 120)

次に主に主要部標示において，分割型でかつ一部の項のみについて人称標示があるとき，全体と[部分]/[全体 部分]のどちらの項を標示するかにはバリエーションが見られる．

ブルシャスキー語フンザ方言 (7) や Kalkatungu 語 (9) では主要部が全体項の人称を標示する．フィジー語 (10) では主要部が部分項ないし[全体 部分]項（の主要部である部分）の人称を標示する．

(9) Kalkatungu (Australian)

Kalpin-tu *lha-nytyama-mi-*[***kin***] [*nyini*] [*thuku*]*?*
man-ERG hit-APPL-FUT-2SG 2SG.ABS dog.ABS

'Will the man hit your dog?' (Blake 1984: 439)

(10) フィジー語

E *tavi-*[***a***] [*na* *taba-qu*]
3SG tap-TR:3 ART shoulder-1SG

「彼は私の肩を叩いた.」 [岡本]

次に従属部が分割型の場合には，それぞれの項がどの格・文法関係で現れるかについてもバリエーションが見られる．Seržant (2016) によれば，全体は与格，属格，場所格，対格・目的語のバリエーションがあり，部分は対格・目的語，抱合のバリエーションがある．

最後に，1 つの言語の中でも場合によって異なる類型が現れる．4 節で詳しく述べる．

3. 均質集合の標示に見られる Coexpression

本研究では均質集合文のうち集合の全要素に作用するものを「完全作用（文）」(e.g.「水を全部飲む」)，一部の要素に作用するものを「不完全作用（文）」(e.g.「水を一部飲む」）と呼ぶ．

[3] この文において全体 *the son* と部分 *a reindeer* は厳密には所有関係ではなく recipient-theme relation (Haspelmath 1999: 120) を示している．

均質集合文では，部分要素（e.g.「全部」,「一部」）が語彙項目以外の方法で（も）表現されることがある．その場合，全体名詞句または文の主要部に部分要素の標示が現れる (11–12).

(11) チェコ語 完全作用 （完結相 + 対格）

Vypil *jsem* [***vodu***].
drink.**up**.SG.PST AUX.1SG water.SG.**ACC**

「私は水を（全部）飲んだ」 (浅岡 2019: 141)

(12) チェコ語 不完全作用（非完結相 + 属格）

Napil *jsem* [***vody***].
drink.SG.PST AUX.1SG water.SG.**GEN**

「私は水（の一部）を飲んだ」 (浅岡 2019: 141)

(13) サハ語 不完全作用（全体-奪格）

min *ïstakaan-naax* [*uu-ttan*] *is-ti-m*
1SG コップ-PROP 水-ABL 飲む-N.PST-1SG

「私はコップに入った水から飲んだ」 (江畑 2022: 492)

(14) サハ語 完全作用（全体-対格 + 部分-対格 + *kebis-* 完了を表す補助動詞）

min *ïstakaan-naax* [*uu-nu*] [*barï-tï-n*] *ih-en* *kebis-ti-m*
1SG コップ-PROP 水-ACC 全て-POSS.3SG-ACC 飲む-SEQ AUX-N.PST-1SG

「私はコップに入った水をすべてを飲んでしまった」 (江畑 2022: 493)

完全作用と不完全作用を対照すると，完全作用と不完全作用を標示し分けるストラテジーには DOM，冠詞，アスペクト，語彙項目がある (表 6)．DOM や冠詞は全体名詞句に対する標示で，アスペクトは文の主要部に対する標示である．

表 6: 均質集合文のストラテジーリスト

ストラテジー	完全作用	不完全作用	言語
DOM	対格	属格 / 分格 / (奪格)	ロシア、チェコ、リトアニア、フィンランド、(バスク)
冠詞	定冠詞	部分冠詞	フランス、スペイン、(ドイツ)
	定冠詞	部分代名詞	イタリア
アスペクト			チェコ、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア
	se 完了 < 再帰	（標示なし）	スペイン (「飲食」)
	複合動詞「～しきる」	（標示なし）	ウルドゥー
語彙項目	全称数量詞 ‘all’ 有形	部分数量詞 ‘some of’ 有形	英、ノルウェー、イタリア、ポルトガル、ロシア、ブルガリア、リトアニア、コミ・ペルミャク、ジョージア、バスク，ヒンディー，トダ，コタ，アラビア（標準，シリア方言），フィジー，ペルシア，モンゴル，マレーシア
	（標示なし）	有形	タミル, カンナダ, アラビア語エジプト方言
	有形	（標示なし）	マラーティー，ベンガル，マルマ

(筆者作成)

語彙項目には量的なもの（「すべての」） (15) と時間的なもの（「完全に」） (16) がある.

(15) 現代標準アラビア語 完全作用

šarib-tu *kuub-a* *l-maa'-i* ***kull-a-hu***
drink.PST-1SG cup-ACC DEF-water-GEN all-ACC-3SG.M

「私は (コップの) 水を全部飲んだ。」 [宮川]

(16) 現代標準アラビア語 完全作用（*kaamil* <「完了した」）

fahim-tu *fikrat-a-hu* ***bi-l-kaamil-i***.
understand.PST-1SG idea-ACC-3SG.M by-DEF-whole-GEN

「私は彼の考え（全体）を理解した。」 [宮川]

以上を総括すると，下記の意味地図が考えられる (図 1).

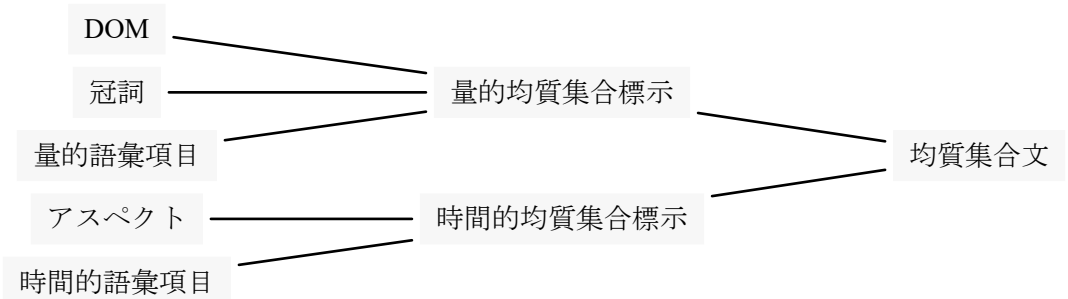


図 1: 均質集合文のストラテジーの意味地図

4. 言語内的バリエーション

一言語内においても三角関係標示に異なるストラテジーが使われることがある.

(17) チェコ語 分割型 [全体-与格] [部分]前置詞句

Poklepa-l-∅ [*mu*] [*na* *ramen-o*]
tap.PFV-PST-M.SG M.3SG.DAT.CLT on shoulder.N-SG.ACC

「彼は（別の）彼の肩をたたいた。」 [松山]

(18) チェコ語 一括型 [全体 部分-対格]

Oceni-l-∅ *jsem* [*jeho* *malb-u*].
appreciate.PFV-PST-M.SG AUX.1SG his painting.F-SG.ACC

「私は彼の絵を褒めた。」 [松山]

(19) 現代標準アラビア語 完全作用 分割型

šarib-tu *kuub-a* [*l-maa'-i*] [*kull-a-hu*]
drink.PST-1SG cup-ACC DEF-water-GEN all-ACC-3SG.M

「私は (コップの) 水を全部飲んだ。」 [宮川]

(20) 現代標準アラビア語 不完全作用 一括型

šarib-tu [*baʕḍ-a* *l-maa'-i* *llaḍii* *kaan-a* *fi* *l-kuub-i*]
drink.PST-1SG some-ACC DEF-water-GEN REL.M.SG COP.PST-3SG.M in DEF-cup-GEN

「私は (コップの) 水を一部飲んだ。」 [宮川]

そこで通言語的研究における 4 つの観点と作業仮説を設定する (1, 2a–c). まずこれらの観点と作業仮説を下記に一覧の形で示し, 続く節で詳しく見ることにする. なお対象例文を示すにあたって # を付した数字は表 1, 表 2 における例文番号のことである.

1. 非均質集合の場合に部分の意味的性質によって違いが出るか

   受影性仮説 Haspelmath (1999) の受影性階層のうち c. 譲渡可能性階層

   分割: 身体部位 > 服 > 文脈的に唯一なもの: 一括

   対象例文: #4 肩, #5 腕 > #10 服 > #11 絵

2. 均質集合の場合

   a. 完全作用 vs 不完全作用の分割／一括

      完全作用分割仮説 完全作用なら分割, 不完全作用なら一括になりやすい

   b. 完全作用 vs 不完全作用の有標／無標

      完全作用無標仮説 完全作用の方がより無標で, 不完全作用の方がより有標

      2a, 2b の対象例文:

      - 完全作用: #19a 私たち（全員）, #6 水（全部）, #13a 考え（全体）
      - 不完全作用: #19b 私たち（一部）, #7 水（一部）, #13b 考え（一部）

   c. 全体の意味的性質によって違いが出るか

      個別性仮説 個別性階層 (Davydova et al. 2011: 5) と有生性階層 (Haspelmath 1999: 4) を合成した以下の個別性階層に従う

      分割: **1/2 人称代名詞** > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > **人間** > 動物 > **有形物** > **非抽象不可算** > **抽象物**: 一括

      対象例文: #19 私たち > #14 子ども > #15 リンゴ > #6, 7 水 > #13 考え

小林，宮川，石橋（いずれも本論集所収）ではここで提示した観点と作業仮説に基づいた分析の結果が示されている．

続く節で各観点について検討する．仮説 2 についてはスタート地点として現代標準アラビア語を例にとって検討する．

4.1. 仮説 1. 受影性仮説

本節では以下の観点について検討する．

1. 非均質集合の場合に部分の意味的性質によって違いが出るか
   受影性仮説 Haspelmath (1999) の受影性階層のうち c. 譲渡可能性階層
   分割: 身体部位 > 服 > 文脈的に唯一なもの: 一括
   対象例文: #4 肩，#5 腕 > #10 服 > #11 絵

この受影性仮説はヨーロッパの言語における外部所有構文に関してのみ実証されており，非ヨーロッパの言語に拡張して再検討する余地がある．受影性階層を以下に示す．

受影性階層 (Haspelmath 1999: 4)

a. **The Animacy Hierarchy**
   (EP constructions are favored if the possessor is a)
   1st/2nd p. pronoun > 3rd p. pronoun > proper name > other animate > inanimate
b. **The Situation Hierarchy**
   (EP constructions are favored if the predicate is)
   patient-affecting > dynamic non-affecting > stative
c. **The Inalienability Hierarchy**
   (EP constructions are favored if the **possessum** is a)
   body part > garment > other contextually unique items
d. **The Syntactic Relations Hierarchy**
   (EP constructions are favored if the syntactic relation of the possessum is)
   PP > direct object > unaccusative subject > unergative subject > transitive subject

受影性階層について Haspelmath (1999) は以下のように述べている (以下 Haspelmath 1999: 4–5 を筆者要約).

- 階層 a–d において高い位置のものほど全体（所有者）の受影性が高くなりやすく，かつ外部所有構文（本研究でいう分裂型の構文）は受影性の高い要素でのみ可能（受影性条件）．
- 受影性条件を満たすような受影性の程度は言語によって異なる．König & Haspelmath (1997) は受影性条件の強さを反映する 4 つの含意階層を実証した．これらの階層で高い位置にある場合外部所有構文が好まれる．すなわち階層のある位置において外部所有構文が可能であれば，その左側にあるすべての位置で外部所有構文が可能である．
- ただし受影性階層は König & Haspelmath (1997) が対象にしたヨーロッパの諸言語についてはよく検討され反例はないが，世界の言語についても適用できる真の含意階層であるかどうかは未検証である．ヨーロッパの地域特徴が含まれているかもしれない．

4.2. 仮説 2a. 完全作用分割仮説，仮説 2b. 完全作用無標仮説

本節では以下の観点について検討する．

2. 均質集合の場合
   a. 完全作用 vs 不完全作用の分割／一括
      完全作用分割仮説 完全作用なら分割，不完全作用なら一括になりやすい
   b. 完全作用 vs 不完全作用の有標／無標
      完全作用無標仮説 完全作用の方がより無標で，不完全作用の方がより有標
      2a, 2b の対象例文:
      • 完全作用: #19a 私たち（全員）, #6 水（全部）, #13a 考え（全体）
      • 不完全作用: #19b 私たち（一部）, #7 水（一部）, #13b 考え（一部）

たとえば現代標準アラビア語においては完全作用文と不完全作用文で異なるストラテジーが用いられている．完全作用文では分割型，不完全作用文では一括型が用いられている (19), (20)．さらに現代標準アラビア語においては完全作用文より不完全作用文の方でより迂言的な構造が用いられている (19), (20)．

(19) 現代標準アラビア語 完全作用 分割型

šarib-tu	*kuub-a*	[*l-maa'-i*]	[*kull-a-hu*]
drink.PST-1SG	cup-ACC	DEF-water-GEN	all-ACC-3SG.M

「私は (コップの) 水を全部飲んだ。」 [宮川]

(20) 現代標準アラビア語 不完全作用 一括型

šarib-tu	[*baʕḍ-a*	*l-maa'-i*	*llaḏii*	*kaan-a*	*fi*	*l-kuub-i*]
drink.PST-1SG	some-ACC	DEF-water-GEN	REL.M.SG	COP.PST-3SG.M	in	DEF-cup-GEN

「私は (コップの) 水を一部飲んだ。」 [宮川]

このような言語内的変異が他の言語についても見られるかを検討する余地がある．

4.3. 仮説 2c. 個別性仮説

本節では以下の観点について検討する．

2. 均質集合の場合
   c. 全体の意味的性質によって違いが出るか
      個別性仮説 個別性階層 (Davydova et al. 2011: 5) と有生性階層 (Haspelmath 1999: 4) を合成した以下の個別性階層に従う
      分割: **1/2 人称代名詞** > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > **人間** > 動物 > **有形物** > **非抽象不可算** > **抽象物**: 一括
      対象例文: #19 私たち > #14 子ども > #15 リンゴ > #6, 7 水 > #13 考え

Davydova et al. (2011) の個別性階層を以下に示す (図 2).

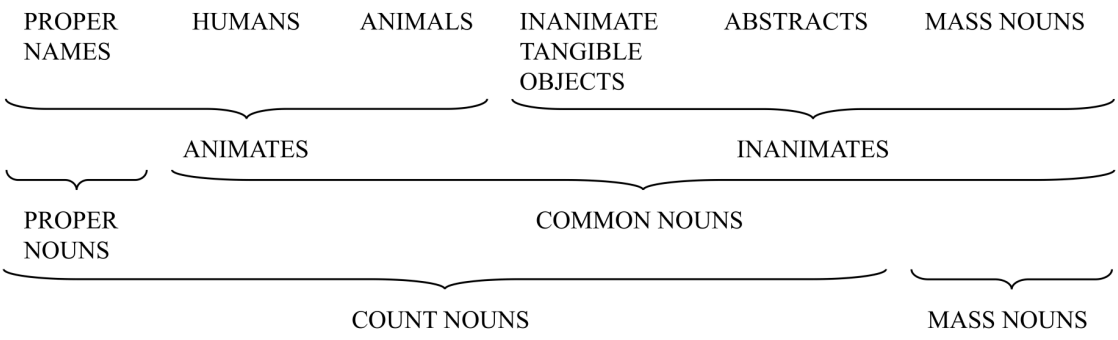


図 2: The hierarchy of individuation (Davydova et al. 2011: 5)

本研究では Davydova et al. (2011) の個別性階層に次の変更を加えた個別性階層を立てる．まず抽象物は mass nouns（不可算）に含めて考える．さらに抽象物を非抽象不可算より下位に改変する．

たとえば現代標準アラビア語の完全作用文においては以下の 2 点が指摘できる．

① 全体要素によって文の項構造が異なる．このことは有生性仮説を部分的に支持する．

- 1/2 人称代名詞「私たち」なら分割型で文の主要部に全体要素の人称標示が現れる (21).
- 人間「子どもたち」なら共立分割型で副詞に全体要素の人称標示が現れる (22).

(21) 現代標準アラビア語 分割型 （*jamiiʕ-a-n* 「同時に，一斉に」＜√jmʕ～「集める」）

ḏaalika *l-šaxṣ-u* *’aḥḍar-a-**naa*** ***jamiiʕ-a-n***.
DEM.DIST.3SG.M DEF-person-NOM bring.PST-3SG.M-1PL all-ACC-INDEF[4]
「あの人が私たち（全員）を連れて来た。」 [宮川]

(22) 現代標準アラビア語 共立分割型

’aḥḍar-tu *l-’aṭfaal-a* ***jamiiʕ-a***{*-n* / ***-hum***}.
bring.PST-1SG DEF-child.PL-GEN.DEF all-ACC{-INDEF / -PRON.3.M.PL}
「私は子供たちを全員連れてきた。」 [宮川]

② 全体要素によって異なる部分語彙項目が用いられるケースが観察される．

- 有生（人間）「私たち」「子どもたち」であれば「一斉に」 (21)
- 可算複数「リンゴ」，非抽象不可算「水」であれば「全て」 (23), (15)
- 抽象物「考え」であれば「完全に」 (16)

(23) 現代標準アラビア語 完全作用

ištaray-tu ***kull-a*** *l-tuffaaḥ-i*
buy.PST-1SG all-ACC DEF-apple-GEN
「私はそのリンゴを全部買った。」 [宮川]

このような言語内的変異が他の言語についても見られるかを検討する余地がある．

5. まとめ

本稿では非均質集合文，均質集合文それぞれにおいて通言語的に用いられるストラテジーの一覧を整理した．さらに，その意味的性質によって言語内的バリエーションの現れる

[4] この -ACC-INDEF は副詞化の機能を担っており，*jamiiʕ-a-n* は格を取っていて一見名詞に見えるが，副詞であるという (宮川 p.c.).

点を示した（非均質集合文における部分の受影性，均質集合文における完全作用 vs 不完全作用，均質集合文における全体の個別性）．

略号一覧（Leipzig glossing rules にないもののみ）

CLT: clitic / H: H (human) class / HM: HM (human male) class / I: I/II/III grade-I/II/III personal prefix / INDEF: indefinite / N.PST: 近過去 / NPRS: non-present mood / PRON: pronoun / PROP: proprietive / SEQ: 継起副動詞

参考文献

浅岡健志朗 (2019) 「ヴォイスとその周辺 ーチェコ語ー」『語学研究所論集』24: 137–142.

Blake, Barry J. (1984) Problems for possessor ascension: Some Australian examples. *Linguistics* 22. 437–453.

Davydova, Julia, Michaela Hilbert, Lukas Pietsch and Peter Siemund (2011) Comparing varieties of English: Problems and perspectives. In: Peter Siemund (ed.) *Linguistic Universals and Language Variation*. Berlin: Mouton de Gruyter, 291–323.

江畑冬生 (2022)「サハ語 : 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 471–546.

Haspelmath, Martin (1999) External possession in a European areal perspective. In: Immanuel Barshi & Doris Payne (eds.) *External possession*. Amsterdam: Benjamins, 109–35.

風間伸次郎 (1994)『ナーナイ語の「一致」について』北大言語学研究報告 5. 札幌: 北海道大学.

———— (2012) 「テーマ企画：特集「ヴォイスとその周辺」まえがき」『語学研究所論集』17: 1-22.

König, Ekkehard and Martin Haspelmath (1997) Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe. In: Jack Feuillet (ed.), *Actance et valence dans les langues de l'Europe*. (Empirical Approaches to Language Typology/EUROTYP, 20-2.) Berlin: Mouton de Gruyter, 525–606.

Nedjalkov, Vladimir P. (1976) Diathesen und Satzstruktur im Tschuktschischen. In: Ronald Lötzsch (ed.) *Satzstruktur und Genus verbi*. Berlin: Akademie-Verlag, 181–211.

Rose, Françoise and An Van linden (2023) Introduction: the limits of the explanatory potential of the alienability contrast. *Linguistics*. 61(6): 1341–1363.

Seržant, Ilja A. (2016) External possession and constructions that may have it. *Language Typology and Universals*. 69(1): 131–169.

———— (2021) Typology of partitives. *Linguistics* 59(4): 881–947.

高橋太郎 (1975) 「文中における所属関係の種々相」『国語学』103: 1–17.

吉岡乾 (2023)「ブルシャスキー語フンザ方言 :特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』28: 16.

アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史

宮川　寛人
（東京外国語大学　博士前期課程）

キーワード：言語類型論，所有構造，言語変化，アラビア語方言論

1. はじめに

本稿では、アラビア諸語を対象に三角関係標の類型を考える。アラビア諸語は、西アジア / 北アフリカとその周辺に広がり、文語体と口語体の差異だけでなく、口語体の間においてもそれぞれの地域で多様な変異を示す。アラビア諸語のうち、本稿が調査対象とするのは、現代標準アラビア語 (MSA) 、エジプト方言 (EA) 、シリア方言 (SA) である。アラビア諸語の分布については図 1 を参照されたい。データの一部にはマルタ語 (MLT) も含む。東京外国語大学『語学研究所論集』の構文ベースの調査票を用いてデータを収集・考察した結果、アラビア諸語内で三角関係標示の方法にバリアントが観察された。地域的な言語接触などに、そのバリアントの要因を求めた。

本稿は全 5 節で構成される。2 節で、調査方法および調査結果を示す。3 節で、本特集における仮説（受影性、均質集合）の検討を行う。4 節で、アラビア諸語の特徴と変異について述べる。5 節で、最後、全体のまとめや研究の展望について述べる。なお、本稿中の例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。

図 1: アラビア諸語の分布地図 (Keye and Rosenhouse 1997: 264)

2. データにもとづく調査

表 1 は、本稿の調査への協力を得たコンサルタントの情報を示す。各々の母語として用いるアラビア諸語の変種において調査例文の表現を最も自然に言い表すことのできる文をそれぞれ作成して頂いた。なお、複数回答も可能にした。

表 1: コンサルタントの情報

イニシャル	母語	出生年	出生地
A 氏	MLT	1995	マルタ, モスタ
M 氏[1]	EA	2004	エジプト
H 氏	SA	2002	シリア, サバダニ

MSA の例文データは、筆者が作例したものを H 氏に添削して頂いた。調査にご協力いただいた方々にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

3. 仮説の検討

本節では、仮説の検討を行う。3.1 節では受影性仮説の検証を、3.2 節では均質集合である変化主体の部分的変化と全体的変化についての検討を行う。ここから各節で提示される表中の「○」は当該の表現が分割型の構文で表現し得ることを、「×」は分割型の表現が調査データの範囲で確認できなかったことを示す。例文中太字で示した部分は、分割型で分割が起きている部分を表す。例文中 [ ] で示した部分は、一括型で動詞の一括の支配を受けている部分を表す。

なお本稿は、アラビア諸語のうち MLT, EA, SA, MLT の 4 変種を対象としているが、4 変種全てのデータを取れたのは例文 (1) 〜(8) までであり、例文 (9) 〜 (20) については MLT のデータを欠くことを予めお断りしておく。

3.1. 受影性仮説の検証

本節では、受影性仮説を検証するため、例文 (4), (10), (11) について検討する。

[1] M 氏との連絡は松本大介氏（東京外国語大学アラビア語専攻 3 年）の取次のもと行った。記して感謝申し上げる。

(4) 彼は (別の) 彼の肩をたたいた。

He tapped his shoulder.

MSA	*ḍarab-a-**hu***		*ʕalaa*	*katf-i-hi*	
	hit.PST-3SG.M-***3SG.M***		on	shoulder-GEN-3SG.M	
MLT	*huwa*	*teptep*	*subgħaj-h*	*fuq*	[*spallt-i*]
	3SG.M	tap.3SG.M.PST	finger.DU-3SG.M	on	shoulder-1SG
EA	*xabaṭ*	*ʕala*	[*kitf-o*]		
	tap.3SG.M.PST	on	shoulder-3SG.M		
SA	*ḍrab-**o***		*ʕa-kəᵊf-o*		
	hit.3SG.M.PST-***3SG.M***		on-shoulder-3SG.M		

(10)私は彼の服を引っ張った。

I pulled on his clothes.

MSA	*šadad-tu-**hu***		*min*	*malaabis-i-hi*
	pull.PST-1SG-***3SG.M***		from	clothes-GEN-3SG.M
EA	*šadd-eet-**o***	*men*	*libs-o*	
	pull-1SG-***3SG.M***	from	clothes-3SG.M	
SA	*šadd-eet-**o***	*mən*	*tyaab-o / awaaʕi-h*	
	pull-1SG-***3SG.M***	from	clothes-3SG.M	

(11)私は彼の絵を褒めた。

I praised his painting.

MSA	*ʾaṯnay-tu*	*ʕalaa*	[*lawḥat-i-hi*]
	praise.PST-1SG	on	painting-GEN-3SG.M
EA	*madaḥ-t*	[*rasmat-o*]	
	praise.PST-1SG	painting-3SG.M	
SA	*mdəḥ-t*	[*looḥat-o*]	
	praise.PST-1SG	painting-3SG.M	

以上に挙げた各例文の分割可能性について、表 2 のように整理できる。アラビア諸語の例文 (4), (10), (11) のデータは受影性仮説におおかた適合していると言える。対象項への受影性の低い例文 (11) では一貫して分割不可能である。

表 2: 受影性仮説の検証

#	調査例文	MSA	MLT	EA	SA
4	彼は (別の) 彼の肩をたたいた。	○	×	×	○
10	私は彼の服を引っ張った。	○	N/A	○	○
11	私は彼の絵を褒めた。	×	N/A	×	×

反例は例文 (4) の MLT, EA にみられる。例文 (4) には身体部位が関わる。アラビア諸語において身体部位が関わるときの三角関係標示については 4 節で述べる。Haspelmath (1999: 6) の記述を参考にすると、言語内で分割型と一括型が分裂する言語は普遍的ではない。本特集の対象地域を見ても、南アジア地域は一貫して一括型の言語が大半である (小林颯: 本特集第 3 セクション) 。

3.2.　均質集合について：作用の完全・不完全

本節では、均質集合である変化主体の完全作用と不完全作用についての検討をするために、6 つの例文 (6) vs (7), (13a) vs (13b), (19a) vs (19b) を見る。完全作用ならば分割型が可能で、不完全作用ならば一括型であるというのがここでの仮説である。

(6) 私は (コップの) 水を全部飲んだ。

I drank all of the water in the glass.

MSA	*šarib-tu*	*kuub-a*	*l-maa'-i*	***kull-a**-hu*
	drink.PST-1SG	cup-ACC	DEF-water-GEN	***all-ACC***-3SG.M
MLT	*jiena*	*xrob-t*	*l-ilma*	***kollu***
	1SG	drink.PST-1SG	DEF-water	***all.ADV***
	(li	*kien*	*hemm)*	*fi-t-tazza*
	(REL	COP.3.M.SG.PST	there.ADV)	in-DEF-glass
EA	*širib-t*	*kubaaya*	*l-mayya*	***kull-**ha*
	drink.PST-1SG	glass	DEF-water	***all***-3SG.F
SA	*šrəb-t*	*kaaset*	*ʾl-ṃayye*	***kəll-**a*
	drink.PST-1SG	glass	DEF-water	***all***-3SG.F

(7) 私は (コップの) 水を一部飲んだ。

I drank some of the water in the glass.

MSA	*šarib-tu*	[*baʕḍ-a*	*l-maa'-i*	*llaḏii*
	drink.PST-1SG	some-ACC	DEF-water-GEN	REL.M.SG
	kaan-a	*fi*	*l-kuub-i*]	
	COP.PST-3SG.M	in	DEF-cup-GEN	

MLT	*xrobt*	[*xi ftit*	*mill-ilma*	*ta'*	*ġot-tazza*]
	drink.PST-1SG	a_little	from.DEF-water	of	inside-glass
EA	*širib-t*	[*šiwayya*	*l-mayya*]		*bass*
	drink.PST-1SG	a_little	DEF-water		only.ADV
SA	*šrəb-t*	[*šwayyet*	*ṃayye*]	*mən*	*ʾl-kaase*
	drink.PST-1SG	a_little	water	from	DEF-glass

(13)a. 私は彼の考え（全体）を理解した。

I understood his whole idea.

MSA	*fahim-tu*	*fikrat-a-hu*	***bi-l-kaamil-i***
	understand.PST-1SG	idea-ACC-3SG.M	***by-DEF-whole-GEN***
EA	*faahim*	[*qaṣd-o*]	
	understand.AP.M.SG	idea-3SG.M	
SA	*fhəm-t*	*fəkrat-o*	***kəll-o***
	understand.PST-1SG	idea-3SG.M	***all***-3SG.M

(13) b. 私は彼の考え（一部）を理解した。

I understood part of his idea.

MSA	*fahim-tu*	[*juz'-a-n*		*min*	*fikrat-i-hi*]
	understand.PST-1.SG	part-ACC-INDEF		from	idea-GEN-3SG.M
EA	*faahim*	[*šiwayya*	*howwa*	*ye-qṣud*	*'iyyaa-h*]
	understand.AP.M.SG	a_little	3SG.M	3SG.M-think	ACC-3SG.M
SA	*fhəm-t*	[*šwayye*	*mən*	*fəkrat-o*]	
	understand.PST-1SG	a_little	from	idea-3SG.M	

(19) a. あの人が私たち（全員）を連れて来た。

That person brought all of us.

MSA	*ḏaalika*	*l-šaxṣ-u*	*'aḥḍar-a-naa*	***jamii'-a-n***
	DEM.DIST.3SG.M	DEF-person-NOM	bring.PST-3SG.M-1PL	***all-ACC-INDEF***
EA	*el-raagil da*	*gib-na*		***kull***-*na*
	DEF-man DEM.M.SG	bring.3SG.M.PST-1PL		***all***-1PL
SA	*hadaak*	*(el-šaxˀṣ)*	*žəb-na*	***kull***-*na*
	DEM.M.SG	(DEF-person)	bring.3SG.M.PST-1PL	***all***-1PL

(19) b. あの人が私たち（一部）を連れて来た。

That person brought some of us.

MSA	*ḏaalika*	*l-šaxṣ-u*	*ʾaḥḍar-a*	[*baʿḍ-a-naa*]	
	DEM.DIST.3SG.M	DEF-person-NOM	bring.PST-3SG.M	some-ACC-1PL	
EA	*el-raagil da*	*gaab*	[*šiwayya*	*min-na*]	
	DEF-man DEM.M.SG	bring.3SG.M.PST	a_little	from-1PL	
SA	*hadaak*	*el-šaxᵊṣ*	*žaab*	[*kam waaḥed*	
	DEM.M.SG	DEF-person	bring.3SG.M.PST	some	
	mən-na]				
	from-1PL				

表 3: 均質集合である変化主体の完全作用/不完全作用

#	調査例文	MSA	MLT	EA	SA
6	私は (コップ) の水を全部飲んだ。	○	○	○	○
7	私は (コップ) の水を一部飲んだ。	×	×	×	×
13a	私は彼の考え（全体）を理解した。	○	N/A	×	○
13b	私は彼の考え（一部）を理解した。	×	N/A	×	×
19a	あの人が私たち（全員）を連れて来た。	○	N/A	○	○
19b	あの人が私たち（一部）を連れて来た。	×	N/A	×	×

具体物についての名詞「私」「 (コップの) 水」ならいずれの例文も仮説に合う。抽象物についての名詞「考え」も、EA 以外では、仮説に合う。

4. アラビア諸語の特徴と変異

本節では、本稿の主題であるアラビア諸語内での三角関係標示の特徴と変異を見ていく。三角関係標示という観点から見たアラビア諸語の特徴として、目的語なしで前置詞句のみをとる従属部標示型があることが挙げられる。従属部に限ってみれば一括型を取りながらも、主要部で分割が生じている構文が多用される点も特徴的である。本稿では、このような構文も分割型として取り扱っている。

(10)私は彼の服を引っ張った。 (再掲)

I pulled on his clothes.

MSA	*šadad-tu-**hu***	*min*	*malaabis-i-hi*
	pull.PST-1SG-***3SG.M***	from	clothes-GEN-3SG.M

以下の表 4 は MSA, MLT, SA, EA の 4 変種のデータが揃っている例文 (1) 〜 (8) を分割可能性の可否に基づいて整理したものである。

表 4: 例文 (1) 〜 (8) の整理

#	調査例文	MSA	MLT	EA	SA
2	私は**頭**が痛い。	○	○	○	○
7	私は (コップ) の水を全部飲んだ。	○	○	○	○
8	私はその人が走って行ったのを見た。	○	○	○	○
3	彼女は**髪**が長い。	○	○	×	×
4	彼は (別の) 彼の**肩**をたたいた。	○	×	×	○
5	彼は (別の) 彼の**腕**をつかんだ。	×	○	×	○
1	A は B に**足**を踏まれた。	×	×	×	○
6	私は (コップ) の水を一部飲んだ。	×	×	×	×

表 4 を見ると、例文 (2) を例外として、身体部位が関わる (3), (4), (5), (1) で分割可能性のバリアントがあることがわかる。所有形式における譲渡可能性による標示様式の分裂は、先行研究 (Brustad 2000: 86, Haspelmath 2017: 223) でも指摘されており、関連する事象であると考える[2]。この点に関して、EA には特に一括型への強い傾向が見られる。反対に分割型が多く現れるのは SA である。例文 (4) のデータが、この EA - SA の対照をよく示している。

(5) 彼は (別の) 彼の腕をつかんだ。

He grabbed his arm.

EA	*misik*	[*'ayd-i*]		
	grab.3SG.M.PST	hand.PL-3SG.M		
SA	*msək-**o***		*mən*	*'iid-o*
	grab.3SG.M.PST-***3SG.M***		from	arm-3SG.M

EA では、[名詞-代名詞] で一括し、SA では ***-代名詞*** (=全体) を主要部のほうに分割していると見ることができる。このような身体部位が関わるところで観察される一括型と分割型のバリアントについて、一括型がアラビア諸語元来のもので、分割型がより新しい形式なのではないかと仮説を立てたい。

MLT では、ヨーロッパ (特にロマンス諸語) との関連を指摘することができる。

[2] アラビア諸語の所有構造には、いわゆる総合的 (synthetic) なもの (*B* + *A* 'A's B') と分析的 (analytic) なもの (*A of B*) の 2 種類がある (Harning 1980 など)。分析的所有構造を構成する *of* にあたる要素は現代アラビア諸語の各変種で様々な形式を用いる (Brustad 2000: 72)。多くの現代アラビア口語諸語で、身体部位など譲渡不可能なものには分析的所有構造が用いられない傾向がある (Brustad 2000: 86, Haspelmath 2017: 223)。

(5) 彼は (別の) 彼の腕をつかんだ。

He grabbed his arm.

MLT	*huwa*	*qabad-**l-u***	*driegħ-u*
	3SG.M	grab.3SG.M.PST-***to-3SG.M***	arm-3SG.M

例文 (5) のようなMLTにおいて主要部に付く与格標識 *-l-* の使用は以下のようなフランス語の例と対照することができると考える。

Elle	*lui*	*a*	*tiré*	*dans*	*le*	*ventre*
3SG.F	3SG.DAT	has	shot	in	DEF	stomach

'She shot at his stomach.'

(Haspelmath 1999: 3 (6))

一方で、上述のMLTにおける与格標識 *-l-* の使用をどの程度までヨーロッパと関連付けるかには議論があると考える。定動詞に接続する与格標識 *-l-* はエジプト方言・シリア方言にも存在する。この点で、例文 (1) のシリア方言のデータは興味深い。

(1)　AはBに足を踏まれた。

Andy's foot was stepped on by Bob.

SA	*bob*	*daʕas-**l-o***	*ʕa-rəjˀl-o*	*la-andi*
	PN	step.3SG.M.PST-***to-3SG.M***	on-foot-3SG.M	POSS-PN

上の (1) は三角関係の枠組みで全体 (= *andi* 'Andy') 、部分 (= *rəjˀl* 'foot') 、動詞 (= *daʕas* 'step') と整理できる。動詞 (= *daʕas* 'step') には与格標識 *-l-* が見られる。与格標識 *-l-* に全体 (= *andi* 'Andy') を指す代名詞 *-o* が現れていることから、分割型であると判断できる (表4) 。従属部では、前置詞 *ʕa* 'on' を介して、部分 (= *rəjˀl* 'foot') が支配される。ここで興味深い点は、「Andy の足」を *rəjˀl andi* 'Andy's foot' のような名詞の並列による所有表現をとらず、いったん *rəjˀl* 'foot' に代名詞 *-o* をつけ、別な所有標識 *la-* をさらに付け加えている点である。以下の同例文のEAのデータと対照されたい[3]。

(1) Aは Bに足を踏まれた。

EA	*andi*	*daas*	*ʕala*	[*rigl*	*bob*]
	PN	step.3SG.M.PST	on	foot	PN

[3] EAの例文では Andy と Bob の関係が逆になっている。これは回答のなかで生じた取違いであり、他意はない。

上述の例文 (1) における SA のデータは、Haspelmath (1999: 7) が MLT について報告している次のような例に近いものと考える。

it-tabib	***lill-pazjent***	*ittawwal-**l-u***	*f'*	*ħalq-u*
DEF-doctor	***to.DEF-patient***	look.3SG.M.PST***-to-3SG.M***	in	mouth-3SG.M

'The doctor looked into the mouth of the patient.'

(Haspelmath 1999:7 (19) ; Maltese: Ray Fabri, p.c.)

例文 (1) における SA のデータにおいて、仮に所有者を標示する項である *la-andi* POSS-PN が動詞の近傍に生起できるとすれば[4]、上の MLT の例文と同じ構造となる。

(1) A は B に足を踏まれた。

Andy's foot was stepped on by Bob.

SA *	*bob*	***la-andi***	*daʕas-**l-o***	*ʕa-rəjˀl-o*
	PN	POSS-PN	step.3SG.M.PST-to-3SG.M	on-foot-3SG.M

MLT はロマンス諸語からの影響を被る以前から SA のような所有構造を有していたのかもしれない。

5. おわりに

本稿では、MSA, MLT, EA, SA を対象にアラビア諸語の三角関係標示について検討した。3 節では、アラビア諸語が受影性についての仮説および均質集合についての仮説ともおおかた適合していることが分かった。4 節では、アラビア諸語の特徴と変異について論じた。アラビア諸語の特徴については、目的語なしで前置詞句のみをとる従属部標示型があることを挙げた。そして、身体部位の関わるところで三角関係標示のバリアントが観察されることを指摘した。MLT においては特にロマンス諸語との接触の観点からバリアントが説明できることを述べた。今後の課題としては量的な問題として対象変種を広げること、質的な問題としては論点をさらに整理し基層言語や接触言語への対照をさらに精緻にすることの 2 点が挙げられる。発表会場での質疑応答では、同族目的語 (述語動詞と同根な名詞句を用いた表現) の使用と三角関係標示の関連について観る提案がなされた。この点についても検討の余地がある。

[4] H 氏によれば、できない。

略号一覧（Leipzig Glossing Rules にないもののみ）

(-)：要素の境界（element boundary）

参考文献

Brustad, Kristen E. (2000) The syntax of spoken Arabic: A Comparative Study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti Dialects. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Harning, Kerstein E. (1980) The Analytical Genitive in the Modern Arabic Dialects. Göteberg: Acta Universitatis Gothoburgensis. Orientalia Gothoburgensia, 5.

Haspelmath, Martin (1999) External Possession in a European Areal Perspective. In: Doris L. Payne and Immanuel Barshi (eds.) *External Possession*. 109-136.

____ (2017) Explaining alienability contrasts in adpossessive constructions: Predictability vs. iconicity. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 36: 193-231. doi: https://doi.org/10.1515/zfs-2017-0009.

Kaye, Alan S. and Judith Rosenhouse (1997) Arabic Dialects and Maltese. In Robert Hezron (ed.) *The Semitic Language*, 1st Edition. London: Routledge.

南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向

小林　颯
（東京外国語大学　博士前期課程）

キーワード：言語類型論，南アジアの言語，インド諸語，ドラヴィダ語族，知覚構文

1. はじめに

本稿の目的は，南アジア[1]の言語にみられる三角関係標示を類型論的観点から考察することである．本稿で扱う言語は次の 12 言語である: ヒンディー語 (H)，ウルドゥー語 (U)，ベンガル語 (Be)，マラーティー語 (Ma)，シンハラ語 (S) (以上インド・ヨーロッパ語族)，タミル語[2] (Ta)，カンナダ語 (Ka)，トダ語 (To)，コタ語 (Ko) (以上ドラヴィダ語族)，マルマ語 (Mar) (シナ・チベット語族)，ムンダ語 (Mu) (オーストロアジア語族)，ブルシャスキー語フンザ方言 (Bu) (孤立語).

本稿の構成は以下の通りである．まず 2 節で調査について扱い，3 節で調査結果に基づいた分析・考察を行う．4 節で南アジアの言語にみられる地域的特徴についての考察を述べ，最後に 5 節で全体のまとめを述べる．なお，本稿中の例文・図表番号，グロス，文字飾り，先行研究の日本語訳については，特に断りのない限り筆者によるものである．例文番号は各調査例文に充てられたもので示す．グロスについては表記統一のため先行研究から一部改めた.

2. データにもとづく調査

『語研論集』の特集データおよび筆者による調査データを用いて各言語にみられる三角関係標示を調査した．用いた『語研論集』特集データは次の通りである: ヒンディー語 (小林 2022，早田 2021, 2022)，ウルドゥー語 (萩田 2009，萬宮 2012, 2018)，ベンガル語 (藤原 2021)，マラーティー語 (千田 2023)，シンハラ語 (吉田 2023a, 2023b)，マルマ語 (藤原 2023)，ムンダ語 (長田ほか 2023)，ブルシャスキー語フンザ方言 (吉岡 2023)．ヒンディー語の追加データおよびドラヴィダ語族の言語データは筆者による調査データであり，各言語のコンサルタントの情報は次の表 1 の通りである．なお，一つの言語にコンサルタントが複数いる場合は，例文の末尾に (B 氏) のように区別して示す.

[1] 本稿では，辛島ほか (2012) に倣い，インド，スリランカ民主社会主義共和国，ネパール連邦民主共和国，パキスタン・イスラーム共和国，バングラデシュ人民共和国，ブータン王国，モルディヴ共和国の 7 ヵ国から構成される地域を指すものとする.

[2] タミル語，カンナダ語は文語と口語とで格などが異なる．本稿におけるデータは特に断りのない限り全て口語である.

表 1: コンサルタント情報[3]

コンサルタント	母語	出生年	出生地	媒介言語
A 氏	ヒンディー語	1966	Mumbai	日本語，英語
B 氏	タミル語	2005	Udagamandalam	英語
C 氏	タミル語	1970	Chennai	日本語
D 氏	タミル語	1950	Nagercoil	英語
E 氏	カンナダ語	2006	Nagmangla	英語，タミル語
F 氏	トダ語	1984	Udagamandalam, Tamizhaga mumd	英語
G 氏	コタ語	1987	Udagamandalam, Kokkal	英語

表 2 に調査結果を示す．分割標示を用いる言語に「分割」，一括標示を用いる言語に「一括」，その両方を用いることができる言語に「両方」と記載する．いずれの標示もない言語には「-」と記載する．表中の “N/A” は「データなし」を示す．今回扱った言語は語族を問わずいずれも基本語順[4]が SOV かつ AN (形容詞－名詞) 語順の言語であったが，三角関係標示についても一括型による標示が優勢であるという傾向がみられた．分割型がみられる例については 3.2 節，3.3 節，4 節でそれぞれ扱う．

表 2: 各言語がとる全体と部分の関係

調査例文	H	U	Be	Ma	S	Ta	Ka	To	Ko	Mar	Mu	Bu
1. A は B に足を踏まれた	一括	一括	両方	一括	一括	一括	一括	一括	一括	一括	一括	一括
2. 私は頭が痛い	両方	両方	一括	一括	N/A	両方	分割	分割	分割	両方	分割	一括
3. 彼女は髪が長い	両方	一括	一括	一括	N/A	一括	一括	分割	分割	両方	両方	一括
4. 彼は肩をたたいた	一括	一括	一括	一括	N/A	一括	一括	一括	-	一括	一括	一括
5. 彼は腕をつかんだ	一括	一括	一括	一括	N/A	一括	一括	一括	-	一括	一括	一括
6. 私は水の一部を飲んだ	一括	-	-	-	N/A	分割	分割	分割	一括	-	分割	-
7. 私は水を全部飲んだ	一括	分割	分割	一括	N/A	分割	-	分割	一括	分割	分割	-
8. その人が走っていったのを見た	分割	分割	一括	N/A	一括	分割	一括	一括	一括	一括	-	一括
9. あの医者が彼の風邪を治した	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
10. 私は彼の服を引っ張った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
11. 私は彼の絵を褒めた	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	N/A	一括	一括	N/A	N/A	N/A
12. 泥棒が彼の財布を奪った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
13. a. 私は彼の考え(全体)を理解した	分割	N/A	N/A	N/A	N/A	-	-	分割	分割	N/A	N/A	N/A
b. 私は彼の考え(一部)を理解した	分割	N/A	N/A	N/A	N/A	分割	分割	分割	分割	N/A	N/A	N/A
14. 私は子どもたちを全員連れてきた	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
15. 私はそのリンゴを全部買った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	両方	両方	一括	一括	N/A	N/A	N/A
16. 私はそのリンゴをたくさん買った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	両方	両方	一括	一括	N/A	N/A	N/A
17. 私はそのリンゴを 3 個買った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
18. 私はリンゴを 3 個買った	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
19. a. あの人が私たち(全員)を連れてきた	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
b. あの人が私たち(一部)を連れてきた	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	一括	N/A	N/A	N/A
20. 私はリンゴを 1 個ずつ買った	分割	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	一括	一括	分割	N/A	N/A	N/A

3. 分析・考察

本節では，3.1 節で受影性仮説の検証，3.2 節で変化主体が均質集合である場合の不完全作用と完全作用，3.3 節で知覚構文を扱う．

[3] ここに挙げた以外に，それぞれ 1 名のタミル語話者 (2007 年 Chennai 生) とヒンディー語話者 (1986 年 Uttar Pradesh 生) の方に容認度の確認をしていただいた．

[4] 各言語の基本語順は『語研論集』の元データに記載のあるものはそれを参照し，他の言語については Dryer (2013a) [WALS: 83A] と Dryer (2013b) [WALS: 81A] を参照した．いずれにも記載のない言語は例文をもとに筆者が判断した．

3.1. 受影性仮説の検証

本節では，受影性仮説を検証するため，例文 4, 10, 11 について検討する．データのあるいずれの例においても，一括型をとることがわかる．Haspelmath (1999: 4) の受影性階層のうち，譲渡可能性階層「身体部位 > 衣服 > その他文脈的に唯一的なもの」に従えば，身体部位が一括型をとるのであればより下の階層も一括型をとると予測できる．実際，ヒンディー語とドラヴィダ諸語においては一貫して一括型を用いる．

4. 彼は (別の彼の) 肩を叩いた．

Be *se* [*tar'* *kãdh-e*] *ṭoka* *dilô.*
3SG 3SG.GEN shoulder-LOC tap give.3.PST

(藤原 2021: 384)

Mar *yáŋ=θu* [*yáŋ=θu* *paʔkúŋ=ma*] *khɔʔ-li=re.*
that=person that=person shoulder=LOC knock-PST=RLS

(藤原 2023: 30)

10. 私は彼の服を引っ張った．

H *mãĩ=ne* [*us=k-ā* *kapṛā*] {*khȋc* *li·y-ā /*
1SG=ERG 3SG.DIST.OBL=GEN-M.SG cloth.M pull TAKE[5].PRF-M.SG
khȋc-Ø-ā}.
pull-PRF-M.SG

Ta *naaṉ* [*avaṉ-ooṭa* *caṭṭai*] *piṭi-tt-eeṉ.*
1SG.NOM 3SG.M.DIST-GEN shirt catch-PST-1SG (C 氏)

11. 私は彼の絵を褒めた．

H *mãĩ=ne* [*us=k-ā* *penṭiṅg*] *tārif* *ki·y-ā.*
1SG=ERG 3SG.DIST.OBL=GEN-M.SG painting praise.F.SG do.PRF-M.SG

To[6] [*an* *pardhviyin*] *ulthisuddis* *eshni.*
his painting prasing told

3.2. 変化主体が均質集合である場合の不完全作用と完全作用

本節では，変化主体が均質集合である場合の不完全作用と完全作用について，次の 3 つのテーマについて扱う: [A] 全体と部分の表現で一括・分割に違いが出るか，[B] 全体と部分のどちらが有標か，[C] 部分の意味的性質によって標示方法に違いが出るか．

[5] 太字は複合動詞の後項動詞を示す．動詞 *lenā* 'take' は語幹に続いて自分に向かう動作のニュアンスを付け加え，「(自分に向けて)…する，…してあげる」のように訳出される (岡口典雄・岡口良子 2023: 119).
[6] トダ語の転写およびグロスは暫定的なものである．トダ語はタミル語などと同じく膠着型の言語であり，実際はより詳細に形態素分析が可能であるが，本稿では議論に関連する最低限のグロスを付すに留める．

[A] 全体と部分の表現で一括・分割に違いが出るか

ヒンディー語とドラヴィダ諸語においては多くの場合で違いが出ず，一括型の標示をしていた．ただ，タミル語とカンナダ語では 15, 16 の例で一括と分割両方の表現が可能であるという．ヒンディー語においては，15b の方がより自然で，15c のように複合動詞のみで全体を示すことはできないという．

15. 私はそのリンゴを全部買った．

H　a. *mãĩ=ne*　[*sab*[7] *seb*]　[*kʰarīd li·y-ā*].
　　1SG=ERG　all　apple.M　buy　TAKE.PRF-M.SG
　b. *mãĩ=ne*　[*sab seb*]　*kʰarīd-Ø-ā.*
　　1SG=ERG　all　apple.M　buy-PRF-M.SG
　c. * *mãĩ=ne seb kʰarīd li·y-ā.*
　　1SG=ERG apple.M　buy　TAKE.PRF-M.SG

Ka *naanu* {[*ella aappils*] / [*aappilis*] [*ella*]} *tago bandudeeni.*
　1SG.NOM　all　apples　apples　all　take come.PST.1SG

16. 私はそのリンゴをたくさん買った．

H　*mãĩ=ne* [*kāfī seb*] *kʰarīd-Ø-ā.*
　1SG=ERG　considerable.amount.of　apple.M　buy-PRF-M.SG

Ka *naanu* {[*jaasti aappils*] / [*aappils*] [*jaasti*]}　*tago bandudeeni.*
　1SG.NOM　excess apples　apples　excess　take come.PST.1SG

これはタミル語とカンナダ語の場合それぞれ「全部」と「たくさん」を意味する語の統語的ステータスの問題だと考えられる．すなわち，これらは名詞の前後どちらにも生起することができる語であるため，一括型と分割型両方の標示が可能になる[8]．似た表現を用いるトダ語とコタ語においても同じ理由で分割型による表現が許容される可能性がある[9]．

[7] 別のコンサルタントからは *sabʰī* (all+EMPH) の方が自然であるというコメントをいただいた．
[8] Lehmann (1993: 110) はタミル語の数量を表すこれらの語について名詞の後置修飾であるとしている．この立場をとれば，タミル語やカンナダ語でも一括型のみを許容するといえる．これらの語の統語的ステータスについては，名詞と数量を表す語の間に他の語句が介入できるかなど，さらなる調査が必要であるが，本稿ではこれらの表現についてはひとまず分割型として扱う．
[9] 実際，トダ語では今回分析対象としなかった他のコンサルタント (1964 年 Udagamandalam, Muthunad mumd 生) による文では同様の形式で分割型による例がみられた．

[B] 全体と部分のどちらが有標かについて

ヒンディー語，トダ語，コタ語，ムンダ語においてはどの例文でも有標で示されていたが，ウルドゥー語，ベンガル語，マルマ語では「水」(例文 6, 7) の部分は無標で示されていた．他方，タミル語，カンナダ語では「考え」(例文 13) の全体が無標で示されていた[10].

6. 私は (コップの) 水を一部飲んだ.

H *mãĩ=ne gilās mẽ se* [*kuch pānī*] *pi·y-Ø-ā.*
1SG=ERG glass.M.SG in from some water.M.SG drink-PRF-M.SG
(早田 2022: 821)

Be *ami gelas-er' pani pan'* *kôrechi.*
1SG glass-GEN water act.of.drinking do.1.PRS.PRF
(藤原 2021: 385)

7. 私は (コップの) 水を全部飲んだ.

H *mãĩ=ne gilās mẽ se* [*sār-ā pānī*] *pī·y-Ø-ā.*
1SG=ERG glass.M.SG in from all-M.SG water.M.SG drink-PRF-M.SG
(早田 2022: 821)

Be *ami* [*gelas-er' pani*] [*puro*] *pan'* *kôrechi.*
1SG glass-GEN water whole act.of.drinking do.1.PRS.PRF
(藤原 2021: 386)

13. a. 私は彼の考え (全体) を理解した.

H *mãĩ us=k-ā* [*soc-n-ā*] [*sab {pūr-ā}*] *samaj*^{h}
1SG 3SG.DIST.OBL=GEN-M.SG think-INF-M.SG all full-M.SG understand
ga·y-ā.
GO.PRF-M.SG

Ta *avaṉ niṉai-tt-a-tu* *teri-nt-u* *koṇṭ-eeṉ.*
3SG.M.DIST think-PST-ADJZ-N know-PST-SEQ get.PST-1SG (C 氏)

[10] これらの他にも両方無標の場合もあり，ブルシャスキー語フンザ方言は「水」の例文について，「部分であろうが全体であろうが，必要のない限りは分量の表現などによる区別をしないで表現され」(吉岡 2023: 28)，いずれも無標であるという．以下の吉岡 (2023: 28) の例文を参照されたい.

6/7. 私は (コップの) 水を全部／一部飲んだ.
jáa *chil* *min-a-m.*
1SG:ERG water drink-1SG-NPRS

b. 私は彼の考え (一部) を理解した.

H　*mãĩ us=k-ā* [*soc-n-ā*] [*t^{h}oṛ-ā=s-ā*] *samaj^h*
1SG 3SG.DIST.OBL=GEN-M.SG think-INF-M.SG small-M.SG=ADJZ-M.SG understand
ga·y-ā.
GO.PRF-M.SG

Ta [*avaṉ niṉai-tt-a-tu*] [*koñcam*] *teri-nt-u* *koṇṭ-eeṉ.*
3SG.M.DIST think-PST-ADJZ-N little know-PST-SEQ get.PST-1SG (C 氏)

以上のことを踏まえると，全体と部分の有標・無標に関しては，現時点では系統を超えた傾向を捉えることはできない.

[C] 全体の意味的性質によって標示方法に違いが出るか

Haspelmath (1999: 4) は次のような有生性階層を提案した: 1/2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > 他の有生名詞 > 無生名詞．この階層に従い，有生性が高いほど分割標示を用いる傾向が強いという．本稿では，部分の意味的性質によって違いが出るかについてこの有生性階層をもとに例文を比較する．本稿で扱うデータが含むのは 1 人称代名詞 / 有生名詞 (人間) (例文 19)と無生名詞 (モノ: 可算 (例文 15, 16) ，不可算 (例文 6, 7) ，抽象 (例文 13)) である．これらの標示方法をまとめると表 3 のようになる.

表 3: 部分の意味的性質による標示方法の違い

		ヒンディー語	コタ語	トダ語	カンナダ語	タミル語
1 人称／有生 (人間)		一括	一括	一括	一括	一括
無生	可算:　「リンゴ」				両方	両方
	不可算:「水」			分割	分割	分割
	抽象:　「考え」	分割	分割			

表 3 が示すように，有生性が高いほど一括標示を用いられる傾向が強い．これは Haspelmath (1999) が示した傾向とは逆転しているものの，有生性階層に従って標示が分かれている．すなわち，有生性が最も高い 1 人称代名詞 / 有生名詞 (人間) にはデータの得られた全ての言語で一括標示を用いる一方で，抽象名詞「考え」には一貫して分割標示を用いている．「リンゴ」と「水」は言語によって揺れており，どちらも一括型で示すヒンディー語とコタ語のような言語もあれば，それぞれで異なる標示方法を用いるトダ語，前者のみ一括標示を許容するカンナダ語とタミル語のような言語もある．Haspelmath (1999) が示した傾向とは逆転している理由については，これらの言語にとってのデフォルトが一括型であり，分割型は有生性が低く抽象度が高い名詞の部分を示す際に動詞の側でそれを示すためであると考えられる．13a, b のように，最も抽象度が高い「考え」は不定詞か動詞の名詞化で示されており，これが分割型を用いるモチベーションになっている可能性がある．さらに，タミル語をはじめとしたドラヴィダ語族の言語については，本節の [A] でも言及したように，数量を表す語の統語的ステータスによるものだともいえる.

3.3. 知覚構文

本節では，三角関係標示が関わる知覚構文を用いた例文 8 を扱う．この知覚構文においては，ヒンディー語とウルドゥー語のみが分割標示を用い，残りの他の言語[11]は語族を問わず一括標示を用いていた．表 4 に各言語の内訳と具体的な構造を示す．なお，簡便のため筆者が各例文を日本語に置き換えて示す.

表 4: 知覚構文「私は[その人が走っていったのを]見た (I saw [him] [run away])」の標示方法

分割	[その人を][走っている]	[名詞+格][非定動詞]	ヒンディー語，ウルドゥー語
	[節その人走っていった]	[接続詞+名詞+定動詞]	ベンガル語
	[その人走っていった]	[名詞+定動詞]	シンハラ語
一括	[その人走っていく/いったの]	[名詞+非定動詞(+名詞化)]	シンハラ語，タミル語，カンナダ語，トダ語，コタ語，ブルシャスキー語
	[その人(の)走りを]	[名詞(+格)+非定動詞+名詞化+格]	ベンガル語，マルマ語

知覚構文の一括・分割の選択について，他の三角関係標示の場合と同様に語順による傾向を示すことができそうである．風間 (2022: 53) はこの選択について「後ろから修飾する長い語句では，それがどこで終わるのかを示すことが難しく，文的な要素をそのまま目的語等にすることが難しい SVO 型の言語と，文的な長い語句でも主要部後置の特性から従属節の範囲の把握が聞き手にとって容易であり，容易に項にすることのできる SOV 型 (特に純主要部後置型) の言語の違い」であるという．この点で，SOV/AN 語順が支配的な南アジアの言語においては主述の順番を崩さずに項とすることができる一括標示の選択が優勢であると考えられる.

8. 私はその人が走っていったのを見た.

U *mãĩ ne* [*us ādmī ko*] [*dauṛ-Ø-ā hu-ā*]
1SG ERG 3SG.DIST.OBL person.M.SG OBJ run-PRF-M.SG COP.PRF-M.SG
dēkʰ-Ø-ā.
see-PRF-M.SG

(萬宮 2012: 45)

Be a. [*tār' douṛano-ke*] *ami dekhechi.*
3SG.HON.GEN run.VN-ACC 1SG see.1.PRS.PRF
b. *ami dekhechi* [*ye tini douṛaccilen'*].
1SG see.1.PRS.PRF that 3SG.HON run.3.HON.PST.PROG

(藤原 2021: 435)

S a. *mamə* [*eya: pænəla giyapu ekə*] *dækka.*
1SG 3SG run.away.PST.VADJ NMLZ see.PST

[11] ムンダ語のみ 2 文で表現していたため，分析対象から外している.

8. *aŋ do en hoŗo nir-ja-na. ena ge=ŋ lel-li-ʔ-i-a.*
1SG TOP that run-INGR-INTR-IND that EMPH-1SG.SBJ see-ANT-TR-3SG.OBJ-IND
「私はその人が走っていった，それを私はみた.」 (長田ほか 2023: 59)

b. *mamə* [*eya: pænəla giya:*] *dækka.*
1SG 3SG run.away.PST see.PST

(吉田 2023: 5–6)

Ta *naan̲* [*avan̲* *ooṭ-i·p* *poon̲-a-tu*] *paar-tt-een̲.*
1SG.NOM 3SG.M.DIST run-SEQ go.PST-ADJZ-NMLZ see-PST-1SG
* *naan̲* [*avan̲-ai*] [*ooṭ-i·p* *poon̲-a-tu*] *paar-tt-een̲.*
1SG.NOM 3SG.M.DIST-ACC run-SEQ go.PST-ADJZ-NMLZ see-PST-1SG (B 氏)

南アジアの外に目を向けると，日本語，朝鮮語，アルタイ諸言語など基本的に OV 語順を持つアルタイ型言語は一括標示，基本的に VO 語順を持つヨーロッパの印欧語族の言語は分割標示を用いる (風間 2022: 64)．さらに，同じく VO 語順を持つアラビア諸語においても分割標示を用いる (本論集の宮川を参照)．ただし，比較的語順が自由なスラブ語派の言語と印欧語族の中でも極めて東に位置するベンガル語は「接続詞 + 主語 + 動詞」によって知覚構文を形成する (ベンガル語については 8b，スラブ語派の言語については『語研論集』の各言語の特集参照)．この構文においてはベンガル語のような基本語順が SOV の言語であっても，SVO 語順をとるなど，印欧的な特徴が現れる．この点で，同じ一括型でも，「接続詞 + 主語 + 動詞」タイプの一括標示は今回扱った南アジアの言語においてはベンガル語にのみみられる特殊なタイプであるといえる．

4. 南アジアの言語にみられる地域的特徴

南アジア (あるいは少なくともインド) の言語に系統を超えてみられる地域特徴として，Masica (1976) でも述べられている与格主語構文の存在が挙げられる．今回扱ったデータのうち，ヒンディー語・ウルドゥー語 (インド・ヨーロッパ語族インド語派) とタミル語・カンナダ語・トダ語・コタ語 (ドラヴィダ語族南部ドラヴィダ語派) で与格主語構文が確認された (例文 2a)．与格主語構文は本稿でいう分割型による標示方法である．

2. 私は頭が痛い．
H a. [*muj^{h}e*] [*sirdard*] *h-ai.*
1SG.OBJ headache.M COP.PRS-3SG
b. [*mer-ā* *sir*] *dukh-t-ā* *h-ai.*
1SG.GEN-M.SG.NOM head.M hurt-IMPF-M.SG COP.PRS-M.3SG

(早田 2022: 819)

Ta a. [*en̲·n̲-akku*] [*talai*] *vali* *iru-kku-tu.*
1SG-DAT head ache be-INF-N.PRS.AFF (C 氏)
b. [*en̲·n̲-ooṭa* *talai*] *vali-kki̲r-atu.*
1SG-GEN head hurt-PRS-3SG.N (C 氏)

これらの言語が与格主語構文を用いる表現では，同じ SOV/AN 語順の主要部後置型言語である日本語でも分割標示を用いる ([私は][頭が]痛い)．これは，主語を主題としてとりあげたいというモチベーションが分割標示の使用を引き起こしていると考えられる．一方，前節でみた知覚構文のような目的語において分割標示を用いずに一括標示を用いるのは，風間 (2022: 64) が指摘するように「OV 言語では長い修飾語は主名詞に先行することも問題ないので，単文における形容詞の修飾などと同じ修飾構造を用いる」ことができるからであるといえる．さらに，風間 (2022: 64) は「OV 型言語の中ではさらに，形式名詞を用いるか，それとも用いないで直接格を接続するかの違い」もあるという．具体的には，日本語・朝鮮語が前者，アルタイ諸言語が後者に分類される．この点では，南アジアの言語はいずれも後者のパターン，すなわち形式名詞を用いずに直接格を接続するタイプであるといえる．

5. おわりに

本稿では，①南アジアの言語においては三角関係標示において一括支配型が優勢であり，これは系統を超えてみられる SOV/AN 語順の特徴と相関していること，②分割型を用いるのは主に部分の意味的性質の有生性が低い時と主語を主題としてとりあげる与格主語構文のときであることの 2 点を主張した．

今後の課題として，今回扱えなかった言語の例文を加え，より包括的な分析をすることが挙げられる．具体的には，南部ドラヴィダ語派以外のドラヴィダ語族の言語やネパールのネパール語，モルディヴのディベヒ語などのデータを欠いている．さらに，部分の意味的性質による標示方法の違いをより詳しく検証するために本研究で調査例文として扱わなかった名詞についても調査する必要がある．

グロス略号一覧（Leipzig Glossing Rules にないもののみ）

ADJZ	adjectivizer	HON	honorific	RLS	realis
AFF	affirmative	IMPF	imperfect	SEQ	sequential
ANT	anterior	INGR	ingressive	VADJ	verbal adjective
EMPH	emphasis	NPRS	non-present mood	VN	verbal noun

参考文献

千田聡美 (2023)「マラーティー語: 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」」『語学研究所論集』28: 23.

Dryer, Matthew S. (2013a) Order of Object and Verb. In Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online*. (v2020.3). [2024-10-28].

_____ (2013b) Order of Subject, Object and Verb. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online*. (v2020.3). [2024-10-28].

萩田博 (2009)「ウルドゥー語」『語学研究所論集』14: 224–227.

Haspelmath, Martin (1999) External Possession in a European Areal Perspective. In: Immanuel Barashi and Doris Payne (eds.) *External Possession*. 109–135. Amsterdam: Benjamins.

藤原敬介 (2021)「ベンガル語: 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』26: 359–438.

_____ (2023)「マルマ語: 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 25.

辛島昇・前田専学・往地利明・小西正捷・坂田貞二・重松伸司・清水学・成沢光・山崎元一 (監修) (2012)『新版 南アジアを知る事典』東京: 平凡社.

風間伸次郎 (2022)『日本語の類型』東京: 三省堂.

小林颯 (2022)「ヒンディー語の受動表現」『語学研究所論集』27: 775–781.

Lehmann, Thomas (1993) *A Grammar of Modern Tamil*. Second Edition. Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.

Masica, Colin P. (1976) *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.

萬宮健策 (2012)「ウルドゥー語におけるヴォイス」『語学研究所論集』17: 184–199.

_____ (2018)「ウルドゥー語の否定，形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 39–47.

長田俊樹・Madhu Purti・高橋翼 (2023)「ムンダ語: 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 24.

岡口典雄・岡口良子 (2023)『ヒンディー語文法ハンドブック』新装版. 東京: 白水社.

早田仁知 (2021)「ヒンディー語の否定，形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』26: 345–357.

_____ (2022)「ヒンディー語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』27: 811–824.

吉田樹生 (2023a)「シンハラ語における受動表現」『語学研究所論集』28: 17.

_____ (2023b)「シンハラ語における否定，形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』28: 22.

吉岡乾 (2023)「ブルシャスキー語フンザ方言: 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定，形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 16.

ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因

石橋　雄大
（東京外国語大学　博士前期課程）

キーワード：Standard Average European，受影性，譲渡可能性，所有の与格

1.　はじめに

本稿は『語研論集』の特集データおよびコンサルタント調査のデータをもとに、ヨーロッパ諸言語の三角関係標示について考察する。本発表で扱う言語は以下の 17 言語である: 英語 (E)、ドイツ語 (Gm)、ノルウェー語 (N)、フランス語 (Fr)、イタリア語 (It)、スペイン語 (S)、ポルトガル語 (Pt)、ロシア語 (R)、ポーランド語 (Pl)、チェコ語 (C)、ブルガリア語 (Bg)、リトアニア語 (Lt)、ラトヴィア語 (Lv)、フィンランド語 (Fi)、コミ・ペルミャク語 (K)、バスク語 (Bq)、ジョージア語 (Gg)。

本稿の構成は以下の通りである。2 節で調査データについて述べる。3、4 節で調査結果に基づき作業仮説を検討する。3 節では非均質集合における受影性仮説を、4 節では均質集合に関する 3 つの仮説を検証する。5 節でヨーロッパの地域特徴について述べる。最後に 6 節でまとめと今後の課題を述べる。

2.　データにもとづく調査

本稿では『語研論集』の特集データとコンサルタント調査によるデータを用いる。

『語研論集』の特集データは以下を用いる: 英語 (風間 2020)、ドイツ語 (成田 2018、成田 2022)、ノルウェー語 (谷川 2023)、フランス語 (敦賀 2009、秋廣 2018、秋廣 2019)、イタリア語 (花本 2009、久保 2018、久保 2021)、スペイン語 (高垣 2009、高垣 2012、喜多田・シフエンテス 2018)、ポルトガル語 (黒澤・鳥越 2009、水沼 2019a、水沼 2019b)、ロシア語 (匹田・瀧川 2009、阿出川 2018、中岩・プロホロワ 2021)、ポーランド語 (ミロスラバ 2009、森田 2018、森田 2021)、チェコ語 (金指 2009、浅岡 2018、浅岡 2019)、ブルガリア語 (菅井 2012、菅井・チャラコヴァ 2018、菅井・チャラコヴァ 2022)、リトアニア語 (櫻井 2012、櫻井 2018)、ラトヴィア語 (堀口 2012、堀口 2018)、フィンランド語 (坂田・高橋 2013、坂田 2018)、バスク語 (吉成・風間 2022、石塚・吉成 2023)、ジョージア語 (児島 2022)。

コンサルタント調査に協力していただいた方の情報を以下に示す。当然ながら本稿における誤りは全て筆者の責任である。

表 1: コンサルタント情報

対象言語	出生年	出生地	調査者
ドイツ語	1999	Wil St. Gallen	石橋雄大
ロシア語	2001	モスクワ	長谷川朝香
チェコ語	1985	Krnov	松山芳瑛
リトアニア語	1991	Klaipėda	笠原隆成
フィンランド語	1999	Oulu	小林真緒
コミ・ペルミャク語	1993	ペルミ地方、カルバス	長谷川朝香

3. 受影性仮説の検証

本節では非均質集合における受影性仮説について検討する。Haspelmath (1999: 4) における受影性条件を構成する階層の 1 つである譲渡可能性階層「身体部位 > 衣服 > その他文脈的に唯一的なもの」に基づき、部分が譲渡不可能的であるほど分割型になりやすいという作業仮説を検証する。例文 4「彼は (別の) 彼の肩をたたいた」、10「私は彼の服を引っ張った」、11「私は彼の絵を褒めた」を用いる。調査結果を表 2 に示す。

表 2: 非均質集合における一括／分割

	E	Gm	N	Fr	It	S	Pt	R	Pl	C	Bg	Lt	Lv	Fi	K	Bq	Gg
4	一括	分割	一括	分割	分割	分割	一括	分割	分割	分割	分割	分割	両方	一括	両方	分割	分割
10	一括	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	分割	N/A	分割	N/A	一括	N/A	分割	分割	N/A	N/A
11	一括	一括	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	一括	N/A	一括	N/A	一括	N/A	一括	分割	N/A	N/A

今回のデータの範囲では、受影性仮説は印欧語においてはおおむね妥当と言える。英語、ノルウェー語、ポルトガル語では最も譲渡不可能的な身体部位においても一括型が見られたが、明確に階層に違反する例は見られなかった。3 つの例文すべてが比較可能な印欧語においては、譲渡可能性階層に応じて分割型と一括型の分裂が見られた (表 3)。ドイツ語とリトアニア語では身体部位と衣服の間で、ロシア語とチェコ語では衣服とモノの間で構文の分裂が見られた。なお、分割型で所有者が与格で標示される構文が見られることがあるが (ドイツ語の例文 4 など)、これは Haspelmath (1999, 2001) によると SAE (Standard Average European) の特徴の 1 つである (5 節参照)。

表 3: 非均質集合における一括／分割と譲渡可能性階層

	E	Gm	Lt	R	C	Fi	K
4 [肩]	一括	分割	分割	分割	分割	一括	両方
10 [服]	一括	一括	一括	分割	分割	分割	分割
11 [絵]	一括	一括	一括	一括	一括	一括	分割

Gm 4 [肩] 分割; 10 [服] 一括

4. Er klopft [ihm] [auf die Schulter].
   he.NOM slap.PRS.3SG him.DAT on DEF.ACC shoulder.ACC
   (成田 2022: 118、グロス改変)
10. Ich habe an [seiner Kleidung] gezogen.
   1SG.NOM have.PRS.1SG on his.DAT clothes.DAT pull.PP

C 10 [服] 分割; 11 [絵] 一括

10. Zataha-l-∅ jsem [ho] [za oblečen-í].
   pull_on.PFV-PST-M.SG AUX.1SG M.3SG.ACC.CLT at clothes.N-SG.ACC
11. Oceni-l-∅ jsem [jeho malb-u].
   appreciate.PFV-PST-M.SG AUX.1SG his painting.F-SG.ACC

一方で、ウラル語族の言語では受影性仮説とは合致しない結果が得られた。フィンランド語では 4 [肩] が一括、10 [服] が分割、11 [絵] が一括、コミ・ペルミャク語では 4 [肩] が分割と一括の両方が可能、10 [服] と 11 [絵] が分割を示した。

Fi 4 [肩] 一括; 10 [服] 分割; 11 [絵] 一括

4. Hän-∅ taputt-i-∅ [häne-n olkapää-tä-än]
   3SG.PRN-NOM clap-IMP-3SG 3SG.PRN-GEN shoulder-PART-3.POSS
   (坂田・高橋 2013: 404)
10. Ved-i-n [hän-tä] [vaatte-i-sta].
   pull-PST-1SG PRN.3SG-PART cloth-PL-ELA
11. Kehu-i-n [häne-n maalaus-ta-an].
   praise-PST-1SG PRN.3SG-GEN painting-PART-POSS.3SG

K 4 [肩] 両方; 10 [服] 分割; 11 [絵] 分割

4. 一括 sïja kutyšt-ïs [sïjö pel'pon-öttjas]
   PRN.3SG.NOM tap-PST.3SG POSS.3SG.NOM shoulder-POSS.3SG.PROL
   分割 sïja kutyšt-ïs [sylïs'] [pel'pon-sö]
   PRN.3SG.NOM tap-PST.3SG PRN.3SG.ABL shoulder-POSS.3SG.ACC

10. me njužöt-ï [sylïs'] [pas'köm-sö]
PRN.1SG.NOM pull-PST.1SG PRN.3SG.ABL clothes-POSS.3SG.ACC
11. me ošk-i [sylïs'] [serpas-sö]
PRN.1SG.NOM praise-PST.1SG PRN.3SG.ABL painting-POSS.3SG.ACC

以上、本稿のデータでは印欧語族とウラル語族の間で受影性仮説の妥当性が異なるという結果が得られたが、この差異が系統的な要因によるものなのか、それとも地域的な要因によるものかはただちに判断できない (5 節参照)。

4.　変化主体が均質集合である場合の不完全作用と完全作用

4.1.　完全作用 vs 不完全作用の一括／分割

本節では、「均質集合において完全作用では分割型が可能だが、不完全作用では一括型になる」という作業仮説を検証する。例文 6・7「私は (コップの) 水を {全部／一部} 飲んだ」、13ab「私は彼の考え {全部／一部} を理解した」、19ab「あの人が私たち {全員／一部} を連れてきた」を用いる。調査結果を表 4 に示す。

表 4: 完全作用と不完全作用における一括／分割

	E	Gm	R	C	Lt	Fi	K
6	一括	一括	一括	一括	一括	—	一括
7	一括	一括	—	分割	—	—	分割
13a	一括	一括	一括	一括	—	一括	分割
13b	一括	一括	一括	分割	分割	分割	分割
19a	一括	一括	一括	一括	一括	一括	一括
19b	一括	一括	一括	分割	分割	分割	分割

ヨーロッパ諸言語においてこの仮説は妥当とは言えない。むしろ、全体と部分で分裂が見られる場合には、完全作用で一括型が、不完全作用で分割型が見られた (表 4 太枠部分)。非均質集合の場合 (3 節参照) と異なり一貫して一括型が見られた言語もあった (ドイツ語、ロシア語) が、完全作用で分割型、不完全作用で一括型を示す言語はなかった。

C　6 [水・全部] 一括; 7 [水・一部] 分割

6. Vypi-l-∅ jsem [všechn-u vod-u] ze sklenic-e.
drink.PFV-PST-M.SG AUX.1SG all-F.SG.ACC water.F-SG.ACC from glass.F-SG.GEN
7. Vypi-l-∅ jsem [trochu] [vod-u] ze sklenic-e.
drink.PFV-PST-M.SG AUX.1SG a_little water.F-SG.ACC from glass.F-SG.GEN

K　6 [水・全部] 一括; 7 [水・一部] 分割

6.	me	ju-i	[byd-ös	va-sö]	stakan-sis
	PRN.1SG.NOM	drink-PST.1SG	all-SG.ACC	water-POSS.3SG.ACC	glass-SG.ELA
7.	me	ju-i	[nevna]	[va-sö]	stakan-sis
	PRN.1SG.NOM	drink-PST.1SG	a_little	water-POSS.3SG.ACC	glass-SG.ELA

4.2. 完全作用 vs 不完全作用の有標／無標

本節では、均質集合において、「不完全作用の方が有標である」という作業仮説を検証する。例文 6・7「私は (コップの) 水を {全部／一部} 飲んだ」を用いる。調査結果に基づき、まずヨーロッパ諸言語における標示ストラテジーの多様性を見た後に、作業仮説の検証を行う。

ヨーロッパ諸言語では表 5 に示すように完全作用と不完全作用の標示ストラテジーに多様性が見られた。なお、表中の下線はバルト・スラヴ諸語を、波線はロマンス諸語を表す。

表 5: 完全作用と不完全作用における標示ストラテジー

	標示ストラテジー	完全作用	不完全作用
ロシア、チェコ、リトアニア、フィンランド、バスク	DOM	対格	属格 / 分格 / 奪格
フランス、スペイン、(ドイツ)	冠詞、(前置詞)	定冠詞	部分冠詞、(前置詞＋冠詞)
イタリア		定冠詞	部分代名詞
チェコ、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア	アスペクト	完了体	不完了体
スペイン (「飲食」)	アスペクト	*se* 再帰	∅ ゼロ
英、ノルウェー、イタリア、ポルトガル、ロシア、ブルガリア、リトアニア、コミ・ペルミャク、ジョージア、バスク	語彙項目	all / glass	a little / some of

文法的な標示ストラテジーとして、冠詞や格の交替を用いて目的語の側で処理するタイプと、アスペクトや再帰を用いて動詞の側で処理するタイプが見られた。名詞側 (DOM) と

動詞側 (アスペクト) で二重標示する言語もあった (チェコ語。リトアニア語[1]、表 5 網かけ部分)。

Lt

6. Aš　išgėriau　visą　vandenį　(iš　puodelio).
   私.1SG.NOM　飲みほす.PST.1SG　すべての　水.M.SG.ACC　〜から　カップ.M.SG.GEN
   (櫻井 2012: 112)
7. Aš　atsigėriau　vandens　(iš　puodelio).
   私.1SG.NOM　飲む.PST.1SG　水.M.SG.GEN　〜から　カップ.M.SG.GEN
   (櫻井 2012: 112)

次に「不完全作用の方が有標である」という作業仮説の検証を行う。仮説に対する反例として完全作用の方が有標と思われるものは以下の 2 つが観察された。

・スペイン語の再帰：

高垣 (2012: 80) によると「スペイン語には再帰表現で、飲食 (comer, beber) のような消費動詞で、飲食物をすべて消費したときに動詞に再帰代名詞 SE を付けて完了性を表すことができる」。

S

6. Me　bebí　la　botella de　vino.
   me(REFL)　I.drank　the　bottle　of　wine
   「私はワインを 1 本全部飲んだ。」
   (高垣 2012: 80)

・ポーランド語の完了体：

本稿のデータの範囲では、ポーランド語の動詞の完了体と不完了体のペアにおいて、前者は形態的に有標 (動詞接頭辞 wy-)、後者は無標であった。

Pl

6. Wypiłem　szklankę　wody.
   drink.PFV.PST.1SG　cup.SG.ACC　water.SG.GEN
7. Piłem　szklankę　wody.
   drink.IPFV.PST.1SG　cup.SG.ACC　water.SG.GEN
   (森田 2021: 171、グロス改変)

[1] 櫻井 (2010: 108) は「リトアニア語の動詞アスペクトは、ロシア語のように全体的な二項対立はなさず、語彙部門と文法部門の中間にあるカテゴリーとして位置づけられる」としている。本稿では文法的なカテゴリーとして扱うこととした。

4.3. 全体の意味的性質によって違いが出るか

本節では、Haspelmath (1999) の受影性条件を構成する階層の 1 つである有生性階層「1/2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > 他の有生名詞 > 無生名詞」に基づき、均質集合において全体の有生性によって標示方法に違いが見られるのか検証する。例文 6・7「私は (コップの) 水を {全部／一部} 飲んだ」、13ab「私は彼の考え {全部／一部} を理解した」、19ab「あの人が私たち {全員／一部} を連れてきた」を用いる。調査結果を表 6 に示す。

表 6: 完全作用と不完全作用における一括／分割

	E	Gm	R	C	Lt	Fi	K
6	一括	一括	一括	一括	一括	—	一括
7	一括	一括	—	分割	—	—	分割
13a	一括	一括	一括	一括	—	一括	分割
13b	一括	一括	一括	分割	分割	分割	分割
19a	一括	一括	一括	一括	一括	一括	一括
19b	一括	一括	一括	分割	分割	分割	分割

一括／分割については有生性による違いははっきりと見られない。一括／分割の型に有生性による違いが全く見られない言語も観察された (英語、ドイツ語、チェコ語)。ただし標示ストラテジーとしては、全体が有生物の場合には部分が項として標示される傾向が見られた。

C　7 [水・一部] 副詞「少し」; 19b [私たち・一部] 「何人かを」

7. Vypi-l-∅ jsem [trochu] [vod-u] ze sklenic-e.
drink.PFV-PST-M.SG AUX.1SG a_little water.F-SG.ACC from glass.F-SG.GEN

19b T-en člověk-∅ přived-l-∅ [někter-é]
DEM-M.SG.NOM person.MA-SG.NOM bring.PFV-PST-M.SG some-MA.PL.ACC
[z nás].
from 1PL.GEN

5. 地域特徴

Haspelmath (1999, 2001) によると、所有者を与格で標示する分割型は SAE の特徴の 1 つである (3 節ドイツ語の例 4 など)。これは系統的な特徴ではなく地域的な特徴とされている。Haspelmath (1999) はその根拠として 3 つ挙げている: [1] バスク語・マルタ語・ハンガリー語のような非印欧語にも見られる。このことは本稿のバスク語のデータとも一致する (マルタ語に関しては宮川: 本特集第 2 セクションを参照されたい)。[2] ヨーロッパの全て

の印欧語に見られるわけではない。[3] ヨーロッパ外の印欧語には見られない。この点については、インドの印欧語も扱っている小林颯: 本特集第 3 セクションを参照されたい。

Bq

4. Har-k (**beste-a-ri**) sorbald-a kolpa-tu
that(DIST)SG-ERG (other-SG-DAT) shoulder-SG[ABS] beat.up-PFV
z-i-o-n.
PST.3[SG]ABS-TR.DAT-3SG-[3SG.ERG]PST
「彼は (別の) 彼の肩をたたいた」

5. Har-k (**beste-a-ri)** beso-a euts-i
that(DIST)SG-ERG (other-SG-DAT) arm-SG[ABS] seize-PFV
z-i-o-n.
PST.3[SG]ABS-TR.DAT-3SG-[3SG.ERG]PST
「彼は (別の) 彼の腕をつかんだ」

(石塚・吉成 2023: 7、太字は筆者による)

このように所有者を与格で標示する分割型は SAE の地域特徴の 1 つと考えられる。一方で、2 節で見たように、非均質集合では譲渡可能性階層に応じて一括／分割の分裂が見られ、必ずしも一貫して分割型が用いられるわけではない。一括／分割の分裂に受影性条件が厳密に作用する点もヨーロッパ的な特徴とされている (Haspelmath 1999: 6)。

6. まとめと今後の課題

ヨーロッパ諸言語は、非均質集合では分割型が優勢であり、受影性条件による構文の分裂を示す。一方で均質集合では必ずしも分割型が優勢ではない。先行研究では所有者 (全体) を与格で標示する分割型はヨーロッパの地域特徴とされ、本稿のデータもこれに合致するものであるが、この特徴は非均質集合の場合に限られる。均質集合においては完全作用と不完全作用の対立を表す標示ストラテジーに多様性が見られた。

今後の課題として以下の点が挙げられる。

まず第 1 に対象言語の拡充が課題として挙げられる。『語研論集』のデータとしては特にケルト語派、バルカン諸言語、ハンガリー語のデータが欠けている。Haspelmath (1999) は、ケルト諸語を「所有者を与格で標示する分割型」を示さない言語として、ハンガリー語を与格による分割型を示す非印欧語として挙げており、これらの言語は「所有者を与格で表す分割型」という地域特徴について考える上で特に重要である。バルカン諸言語は Haspelmath (2001) において英語やロマンス諸語と並んで SAE の中核に近いとされている。

コンサルタント調査をすることができた言語にも偏りが出てしまった。系統的にはゲルマン語派、バルト・スラヴ語派、ウラル語族の言語に、地域的には中欧〜東欧の言語に偏ってしまった。

第 2 に調査方法について、各例文に関して可能な表現パタンが網羅的に調べられているとは限らない、という点が挙げられる。例えば、実際には一括／分割の両方ともが可能であるが片方の型しか回答を得られていない可能性も考えられる。この一括型／分割型間の交替可能性についても今後の課題としたい。

略号一覧（Leipzig Glossing Rules にないもの）

CLT clitic / ELA elative / MA masculine animate / PART partitive / PP past participle / PRN pronoun / PROL prolative

参考文献

秋廣尚恵 (2018)「フランス語の否定、形容詞と連体修飾文」『語学研究所論集』23: 69-76. / **_____ (2019)**「ヴォイスとその周辺 ―フランス語―」『語学研究所論集』24: 67-74. / **浅岡健志朗 (2018)**「否定、形容詞と連体修飾複文 ―チェコ語―」『語学研究所論集』23: 139-143. / **_____ (2019)**「ヴォイスとその周辺 ―チェコ語―」『語学研究所論集』24: 137-142. / **阿出川修嘉 (2018)**「ロシア語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 109-122. / **石塚政行・吉成奏彗 (2023)**「バスク語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』28: 10. / **ミロスワバ, カチマレク (2009)**「ポーランド語の受動文」『語学研究所論集』14: 184-188. / **風間伸次郎 (2020)**「英語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』25: 139-171. / **金指久美子 (2009)**「チェコ語」『語学研究所論集』14: 189-192. / **喜多田敏嵩・カテリネ シフエンテス (2012)**「スペイン語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 89-107. / **久保博 (2018)**「イタリア語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 77-88. / **_____ (2021)**「イタリア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26: 91-100. / **黒澤直俊・鳥越慎太郎 (2009)**「ポルトガル語の受動表現について」『語学研究所論集』14: 171-175. / **児島康宏 (2022)**「ジョージア語 (グルジア語)：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定と、形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 213-268. / **坂田晴奈 (2018)**「フィンランド語の否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 169-180. / **坂田晴奈・高橋健太郎 (2013)**「フィンランド語」『語学研究所論集』18: 381-408. / **櫻井映子 (2010)**「リトアニア語のアスペクトとパーフェクト ―ロシア語との対照アスペクト論的観点から―」『語学研究所論集』15: 105-130. / **_____ (2012)**「リトアニア語のヴォイス表現」『語学研究所論集』17: 97-116. / **_____ (2018)**「リトアニア語の否定、形容詞と連体修飾節」『語学研究所論集』23: 159-168. / **菅井健太 (2012)**「ブルガリア語」『語学研究所論集』17: 81-88. / **菅井健太・チャラコヴァ マリア (2018)**「ブルガリア語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 145-150. / **_____ (2022)**「ブルガリア語における受動表現」『語学研究所論集』27: 175-178. / **高垣俊博 (2009)**「スペイン語」『語学研究所論集』14: 158-170. / **_____ (2012)**「スペイン語」『語学研究所論集』17: 73-80. / **谷川みずき (2023)**「ノルウェー語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定と、形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』28: 6. / **敦賀陽一郎 (2009)**「フランス語」『語学研究所論集』14: 148-152. / **中岩諒・プ**

ロホロワ マリア (2021)「ロシア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26: 137-147. / **成田節 (2018)**「否定、形容詞と連体修飾複文 (ドイツ語データ)」『語学研究所論集』23: 49-59. / **_____ (2022)**「ドイツ語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』27: 111-121. / **花本知子 (2009)**「イタリア語」『語学研究所論集』14: 153-157. / **匹田剛・瀧川 ニキパレツ ガリーナ (2009)**「ロシア語」『語学研究所論集』14: 176-183. / **堀口大樹 (2012)**「ラトヴィア語アンケート」『語学研究所論集』17: 89-96. / **_____ (2018)**「ラトヴィア語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 151-157. / **水沼修 (2019a)**「ポルトガル語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』24: 95-99. / **_____ (2019b)**「ポルトガル語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』24: 125-130. / **森田耕司 (2018)**「ポーランド語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 123-129. / **_____ (2021)**「ポーランド語におけるヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26: 165-172. / **吉成奏彗・風間伸次郎 (2022)**「バスク語における受動表現」『語学研究所論集』27: 145-148.

Haspelmath, Martin (1999) External Possession in a European Areal Perspective. In: Doris L. Payne and Immanuel Barshi (eds.) *External Possession*. 109-136. / **_____ (2001)** The European linguistic area: Standard Average European. In: Martin Haspelmath, Ekkehard König and Wulf Österreicher (eds.) *Language Typology and Language Universals* 2, 1492-1510. Berlin: De Gruyter.

修士論文　要旨

インドネシア語における談話小辞機能研究の再検証
―インターネット上のテキストコミュニケーションを例に―

菅原　宜優
（博士前期課程　世界言語社会専攻）

キーワード：インドネシア語，口語体，談話小辞，コーパス，容認度テスト

1.　はじめに

本稿の目的はインドネシア語における談話小辞 (discourse particle) である *kok, lho*[1]*, sih* の文法機能について、関連する諸研究の記述を包括的にまとめ、テキストコミュニケーションの場面を想定した話者への容認度テストを通してその妥当性を検証し、明らかにすることである。本稿では「談話小辞」を Karaj (2021) の定義による「統語的に必ずしも必須ではない短い発話要素のことで、固定的な意味を持たず、直前の言行に対する所見を表す。その意味は文脈と発話/文中位置によって変化する[2]」ものとして扱う。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で先行研究を概略し、問題提起を行う。3 節で調査概要、4 節で結果と考察、最後に 5 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿における例文・図表・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳、英語と区別したインドネシア語の斜体表記については、特に断りや表記のない限り筆者によるものである。

2.　先行研究のまとめと問題点

本節では紙幅の都合上、対象となる 3 つの談話小辞の機能や位置について、先行研究である Ewing (2005), Sneddon (2006), Sari (2008), Miyake (2015), Zainur(2018), Karaj(2021)の内容を要約する。これらの先行研究では、対象の小辞の機能は概して以下のように記述されている。

・*kok*

① 疑問マーカー (Ewing 2006: 235, Miyake 2015: 111 など)

②相手にとって予期せぬ/未知の事実を述べる (しばしば *kok* を含む発話内容は、相手の持つ情報を否定する。*kok* における「強調」か。Sari 2008:143, Miyake 2015: 110 など)

③「和らげ」(Miyake 2015: 111 など)

・*lho*

① 意図せぬことや新情報に対する驚き(＝感嘆詞的。Sneddon 2006: 124、Karaj 2021: 327）

② 警告 (聞き手に注意を促す。Miyake 2015: 108, Karaj 2021: 329)

③ 新情報の導入

(その情報が事実であることを表す。*lho* における「強調」か。 Miyake 2015: 111)

[1] *loh, lha* 等の異なるつづりがあるが、本稿では *lho* という形式に含めて扱う。

[2] “Discourse particles are syntactically optional, short speech elements, usually without fixed meaning, providing a comment on what has just been said or done. Their meaning varies depending on the context and position in an utterance.” (Karaj 2021: 320)

・*sih*

① 主題を示す標識

(対比的なニュアンスを帯びることもある Ewing 2005: 237, Miyake 2015: 106 など)

② 疑問文の「和らげ」(答えを急かす印象を失くす。 Sneddon 2006: 126 など)

③「強調」(しばしば疑問詞に共起する。 Sneddon 2006: 127, Zainur 2018: 154 など)

④理由付け・正当化 （Miyake 2015: 106）

⑤定型表現 "*masa sih*" 「まさか！」

（これらの機能に、皮肉や話し手のやるせなさ、ためらいといった感情に関するニュアンスが付与される場合がある。 Miyake 2015: 107 など）

(各記述の要約は筆者による)

上記の先行研究には、以下 2 点の問題点が挙げられる。1 つ目は、機能の違いが何に起因しているのか、体系的な枠組みに基づいて記述されていない点である。2 つ目は、「強調」という語の指す内容が不明であり、研究によって異なる点である。この 2 点を解決するため、本稿では客観的なパラメータとして「出現位置」「文の種類」を設け、コーパスによる定量調査を行う。その上で、その結果から各談話小辞の持つ機能についての仮説を立て、その妥当性について母語話者による容認度テストを実施して検証を行う。

3. 調査概要

本節では、行った 2 つの調査概要について簡潔に記す。3.1 節でコーパス調査について、3.2 節で容認度テストについての概要を述べる。

3.1. コーパス調査

談話小辞を含む文を分析するため、本稿ではコーパスを用いて、談話小辞 *kok*, *lho, sih* の 3 つを含む例文を収集した。使用したコーパスは Leipzig Corpera Collection のインドネシア語混合コーパスである “ind-mixed 2013” を用いる。このコーパスは 2010 年以降のインターネット上に存在する WEB サイト、新聞記事、個人ブログ、Wikipedia の本文等から成り、総文数は 7432 万 9815 文で、総トークン数は 12 億 628 万 1985 個である。検索ワードに “*kok*” “*lho*” “*sih*” をそれぞれ設定し、先頭から得られた例を最大 200 例ずつ収集した。当該コーパスは検索時に大文字と小文字を区別するため、この検索結果は文頭に現れる例を殆ど含まない。そのため、文頭に現れる例を収集する目的で、別途 “*Kok*” “*Lho*” “*Sih*”で検索を行い、当該小辞が文頭に現れるものに限り、先頭から最大 200 例収集した。その際、人名の一部と思われるものや、文中で大文字表記されている例は対象外とし、収集できる例文数（最大 200 例）に達するまで先頭から収集を行った。収集した例文には、Google スプレッドシート上で「出現位置」「文の種類」のラベルを付した。以下、付したラベルの説明を記載する。

○出現位置

・文頭：先頭の文字が大文字始まりで、かつ文の頭に出現した例。感嘆表現 (Wah, Hmm 等) が現れ、その後に小辞が現れた場合も含む

・文末：文の区切りを指す記号 (“.”,“?”,“…”など) の直前に出現した例
・文中：上記 2 例以外の位置に出現した例。分類の都合上、接続詞等で 2 つ以上の文が繋がれた複文は、このラベルに分類する。
〇文の種類
- 平叙文：下記の例以外に当てはまる文
- 否定文：否定の働きを持つ語を含む文 (語がイディオムとして現れる例は含まない)
- 命令文：動詞相当語で始まる、相手や第三者に動作を促す文。勧誘/禁止文もこれに含む
- 極性疑問文：「はい/いいえ」で答えられる疑問文。付加疑問文もこれに含む
- WH 疑問文：答えが 1 つに定まらない疑問文。WH 疑問文で表す反語表現も含む

調査の結果、ノイズが多く収集できなかった「文頭に現れる *sih*」のパターンを除き、各小辞の大文字検索と小文字検索にて、「文頭」と「文中/文末」でそれぞれ 200 例ずつ用例を収集することができた。総用例のヒット数と、各小辞の「文中位置」と「文の種類」による分類結果は、以下の表 1~表 6、及び 4.2 節の表 9 を参照されたい。

表 1：Leipzig Corpora による総用例ヒット数

kok	*Kok*	*lho*	*Lho*	*sih*	*Sih*
83986 件	10271 件	27120 件	3856 件	108264 件	668 件

表 2： “*kok*”を含む例の「文中位置」と「文の種類」による分類結果

“*kok*”	
文中位置	件数
文中	139
文末	61

文の種類	件数	全体での割合
平叙文	110	55.0%
否定文	22	11.0%
命令文	0	0%
WH 疑問文	61	30.5%
極性疑問文	7	3.5%
計	200	100.0%

表 3： “*Kok*”を含む例の「文中位置」と「文の種類」による分類結果

“*Kok*”	
文中位置	件数
文頭	200

文の種類	件数	全体での割合
平叙文	0	0%
否定文	0	0%
命令文	0	0%
WH 疑問文	200	100.0%
極性疑問文	0	0%
計	200	100.0%

表 4： “*lho*”を含む例の「文中位置」と「文の種類」による分類結果

“*lho*”	
文中位置	件数
文中	71
文末	129

文の種類	件数	全体での割合
平叙文	162	81.0%
否定文	20	10.0%
命令文	17	8.5%
WH 疑問文	0	0%
極性疑問文	1	0.5%

表 5：“*Lho*” を含む例の「文中位置」と「文の種類」による分類結果

“*Lho*”	
文中位置	件数
文頭	200

文の種類	件数	全体での割合
平叙文	45	22.5%
否定文	6	3.0%
命令文	1	0.5%
WH 疑問文	79	39.5%
極性疑問文	69	34.5%
計	200	100.0%

表 6：“*sih*” を含む例の「文中位置」と「文の種類」による分類結果

“*sih*”	
文中位置	件数
文中	179
文末	21

文の種類	件数	全体での割合
平叙文	111	55.5%
否定文	31	15.5%
命令文	1	0.5%
WH 疑問文	50	25.0%
極性疑問文	7	3.5%
計	200	100.0%

3.2. 容認度テスト

本テストは 2023 年 11 月 25 日～2023 年 12 月 9 日までの期間で、Google Form を経由してインドネシア語で行われた。回答を頂いたのは、筆者の知人から紹介を頂いたインドネシア語母語話者 7 名であった。以下にアンケート内で開示の許可を頂いた範囲で、回答者についての情報を示す。

表 7： アンケート回答者の情報

イニシャル	出身	生まれ年	職業・性別	日常会話で使う言語
R.N.A 氏	東ジャワ州マラン	1973 年	会社員・女性	インドネシア語
A.K 氏	非公開希望	1998 年	会社員・女性	インドネシア語
B.G 氏	西ジャワ州ジャカルタ	2002 年	学生・男性	インドネシア語・英語
A.D 氏	西スマトラ州パヤクンブ	1998 年	フリーランス・女性	インドネシア語
I 氏	西ジャワ州ジャカルタ	1993 年	コンサルタント・男性	インドネシア語
A.R 氏	東ジャワ州ラモガン	1996 年	学生・女性	インドネシア語
L.K 氏	西ジャワ州バンドン	1991 年	事業家・男性	インドネシア語

本テストは 3 つのセクションから成り立っている。セクション 1 では回答者個人に関する情報についての調査を、セクション 2 では同年代の友人との SNS を通したテキストコミュニケーションの場を想定して、筆者がコーパス傾向に基づき作成した例文の容認度調査を、セクション 3 では複数の類似した例文を比較して意味やニュアンスに差異があるかの調査を行った。アンケートで使用した全例文については、紙幅の都合上省略する。

4. 結果

上記 2 つの調査に基づき得られた結果について、4.1 節で小辞の文中出現位置、4.2 節で出現した文の種類、4.3 節で情報構造における topic/comment への共起の観点から記述する。

4.1. 文中出現位置

以下の表 8 に、文中出現位置による、各小辞の持つ機能傾向を記載する。

表 8：文中出現位置による、各小辞の持つ機能傾向

	文頭	文中	文末
kok	理由を尋ねる 疑問詞的機能	①理由を尋ねる 疑問詞的機能 ②直前の発話内容を否定し、聞き手にとって未知と思われる情報を述べる	直前の発話内容を否定し、 聞き手にとって未知と思われる情報を述べる
lho	意外性や驚きを示す 感嘆詞的機能	ポジティブな文脈で、聞き手にとって未知と思われる情報を述べる	ポジティブな文脈で、 聞き手にとって未知と思われる情報を述べる
sih		対比的なニュアンス	否定的なスタンスで 話し手のやるせなさ・見解を述べる

○文頭・文中の *kok*：理由を尋ねる疑問詞的機能

(1) *Kok　ngga　telepon　waktu ke Jakarta?*

KOK　NEG　telephone　time　to　Jakarta

「どうしてジャカルタに来た時、電話しなかったんだ？」

(Leipzig Corpera 2014)

○文中/文末の *kok*：聞き手にとって未知と思われる情報の叙述

（直前の発話内容を否定する傾向にある）

(2) *Saya gak　kehilangan anting　kok.*

1SG　NEG lost　earrings　KOK

「私はピアスを失くしていません、*kok*。」

(Leipzig Corpora 2014)

○文頭の *lho*：意外性・感嘆

(3) *Lho? bukannya　bagus　ya?*

LHO　NEG.DEM　great　yes

「*Lho*、それって良いことじゃないの？」

(Leipzig Corpora 2014)

○文中/文末の *lho*：ポジティブな文脈で、聞き手にとって未知と思われる情報を述べる

(4) *Bagiku ini　adalah　kelebihan　lho.*

for_me　this COP　merit　LHO

「自分にとって、これはメリットだ、*lho*。」　(Leipzig Corpora 2014)

○文中の *sih*：対比的なニュアンス (特に WH 疑問文以外)

(5) *Saya sih, gak ngikutin tuh berita-berita artis.*
1SG SIH NEG join that news~news artist
「私は *sih*、芸能ニュースにはさほど興味がありません。」

(Leipzig Corpora 2014)

○文末の *sih*：否定的なスタンスで話し手のやるせなさ・見解を述べる

(6) *Sejujurnya emang kurang produktif sih.*
to_be_honest really little productive SIH
「正直に言って、それはあまり生産的ではない、*sih*。」

(Leipzig Corpora 2012)

4.2. 共起傾向

本節では、コーパス調査から得た、文の種類による各小辞の共起割合を以下の表 9 に記載する。表中に機能を補足した内容は、容認度テストから得られた結果に基づき記載した。傍線を付した箇所は一定の共起傾向が見られたと判断したものであり、傍線と太字を付した数値は特に強い共起が見られたと判断した箇所である。いずれの小辞も平叙文へ一定量共起するが、*kok* は疑問詞的機能として WH 疑問文に多く、*lho* は様々な文へ一定の共起傾向を持ちながらとりわけ平叙文に多く、*sih* は他 2 つの小辞より否定文に多く共起した。

表 9：文の種類による各小辞の共起割合（*kok/lho*: n=400、*sih*: n=200[3]）

	平叙文	否定文	極性疑問文	WH 疑問文	命令文	合計
kok	27.5%	5.5%	1.8%	**65.3%**	0%	100.0%
lho	**51.8%**	6.5%	17.5%	19.8% いずれも文頭のみ	4.5% 禁止と 共起傾向	100.0%
sih	**55.5%**	15.5%	3.5% 容認度に 個人差あり	25.0% 話し手が疑問を解消するための何らかのプロセスを経た上で用いられる	0.5%	100.0%

WH 疑問文に共起する *lho* は (3) のような形式で、文頭にのみ共起した。命令文に共起する *lho* は、(7) のように禁止表現と結びつく傾向がある。これは、コーパス調査にて禁止表現が 18 例中 12 例収集されたことと、容認度テストにて「禁止」と「行為を促す命令」に *lho* を共起させた文を話者に提示した際、前者がより強く容認されたことから判断した。

[3] *kok* と *lho* は文頭の 200 例と文中/文末の 200 例の計 400 例、*sih* は文中/文末の 200 例を母数とする。

(7) *Jangan lupa siapkan mantel, nanti kedinginan lho.*
PROH forget prepare scarf after be_cold LHO
「後で寒くなるから、マフラーを忘れないで、*lho*。」
（禁止命令文への共起, 筆者作成）

極性疑問文に共起する *sih* はコーパス調査でも得た用例が少なく、(8)のような例文を容認度テストにて提示した際、「自然だ」と回答した人数が 2 名、「少し不自然だが容認可能」と回答した人数が 3 名、「不自然だ」と回答した人数が 2 名となり、容認度に差が生じる結果となった。一部回答者からは「ジャワ語のようである」と回答を頂いたが、以下のような形式と類似する表現がジャワ語に存在するかどうかは不明である。

(8) *Katanya PT itu hampir bangkrut.* ― *Tapi benar kayak gitu sih?*
word.DEM company that almost bankrupt but really like like_that SIH
「あの会社はほぼ倒産しているらしい。」－「でも、本当にそうなのか、*sih*？」
（極性疑問文に付く *sih*, 筆者作成）

一方、WH 疑問文に共起する *sih* は必ず疑問詞の直後に置かれ、*sih* が疑問詞に先行する用例は収集されなかった。

(9) *Apa sih yang terjadi sebenarnya?*
what SIH REL happen in_fact
「実際に何が *sih*、起こったのですか？」
(Leipzig Corpora 2014)

この (9) のような表現について、容認度テストで小辞を伴う場合と伴わない場合の 2 文のニュアンスの違いについて調査したところ、一部回答者より「以下の例で a の例文を使う場合は、例えばこのような文脈で用いる。この発話の前に自分たちが相手の好きな飲み物は何なのか推測していて、それが聞きたいので続けて尋ねる場合である」との補足説明を頂いた。

(10) a. *Apa sih minuman favorit kamu?*
what SIH drink favorite 2SG
「君の好きな飲み物は何、*sih*？」
（文頭疑問詞+*sih* の疑問文, 筆者作成）

b. *Apa minuman favorit kamu?*
what drink favorite 2SG
「君の好きな飲み物は何？」
（小辞を伴わない、疑問詞が文頭の疑問文, 筆者作成）

つまり (10) の文脈において、*sih* の付いた WH 疑問文を使う際は、「話し手がその疑問を解消するために行う何らかのプロセス」を挟んでから用いる必要があると考えられる。先行研究で「皮肉的」や「強調」という表現は、上記のような「プロセス」を経た上で生まれる「それじゃあ/一体全体」というニュアンスを表すために充てられた説明ではないかと思われる。

4.3. 情報構造の topic/comment との共起と機能の関連

コーパス調査の中で、情報構造における topic/comment[4]に対して共起した際に、小辞が特定の機能を果たす傾向が見られた。これを踏まえ、容認度テストで topic/comment に対する共起と機能の相関を調べる作例を行ったところ、下記のような傾向が見られた。

表 10： topic と comment に共起した際に、各小辞が果たす機能の傾向

	topic	comment
kok	直後：理由を尋ねる疑問詞的機能 comment の頭に置かれているとも 解釈できる	末尾：直前の発話内容を否定し、 聞き手にとって未知と思われる 情報を述べる
lho	直後：ポジティブな文脈で、 聞き手にとって未知と思われる 情報を述べる	末尾：ポジティブな文脈で、 聞き手にとって未知と思われる 情報を述べる
sih	対比的なニュアンス	末尾：否定的なスタンスで 話し手のやるせなさ・見解を述べる

topic の直後に共起する *kok* について、容認度テストにて文頭に *kok* を置いた例との差異を調査した際、回答者の 1 人から「機能面ではほとんど同じであるが、a の方が中立的で、b の方がネガティブな印象を受ける」とのコメントを頂いた。どちらの位置でも理由を尋ねる疑問文としては機能するが、話者によっては受ける印象が異なる可能性がある。

(11) a. *Kok Ali datang ke sini?*
KOK PN come to here
「なぜ Ali はここに来たの？」
（文頭の *kok*：「なぜ」，筆者作成）

b. *Ali kok datang ke sini?*
PN KOK come to here
「Ali はなぜここに来たの？」
（topic の直後の *kok*：「なぜ」，筆者作成）

comment 節末における *lho* と *kok* について、両者は「聞き手にとって未知と思われる情報を述べる」機能を有しているように考えられるが、コーパス調査の段階では差異を明らかにできなかった。容認度テストにて下記例文を提示した際、回答者の 1 人から「a の方はネガティブなイメージがあるが、b の方はポジティブなニュアンスを受ける」との補足を頂いた。

(12) a. *Hati-hati menyuapi bayinya. Makan saja bisa resiko tersedak kok.*
pay_attention feed baby.DEM eat even can risk suffocate KOK
「赤ちゃんに食べさせるのは注意して。食べるだけでも窒息する危険がある、*kok*。」

[4] Kotschi (2006: 677) によれば、まず話し手が発話の中で「あるものについて、何か話している」という前提で、「付与される新しい情報」を “comment”とし、これに対して、「既に提示され、新しい情報の基準点として機能できる情報」を “topic”として位置付けている。本稿では、用語について便宜上この定義に従う。

b. *Hati-hati* *menyuapi* *bayinya.* *Makan saja* *bisa* *resiko* *tersedak* *lho.*
pay_attention feed baby.DEM eat even can risk suffocate LHO
「赤ちゃんに食べさせるのは注意して。食べるだけでも窒息する危険がある、*lho*。」

（いずれも筆者作成）

kok との直接の比較ではないが、Miyake (2015: 107) では *lho* と *sih* のニュアンスの違いを述べる際に、*lho* はポジティブな印象を持つという旨の記述が見られる。そのため、上記 2 文についても、受ける印象の面で何らかの違いが生じた可能性が考えられる。

5. おわりに

本稿では、インドネシア語の談話小辞 *kok, lho, sih* の機能を論じた研究を再整理した上で、その内容についてコーパス調査及び、インターネット上でのテキストコミュニケーションを想定した容認度テストを以て検証した。その結果、統語的・情報構造の観点を中心に、格小辞の持つ機能の差異及びその傾向や、文の種類による小辞共起の傾向を明らかにした。

今後の課題として、*sih* が文頭に現れる用例の収集、コーパス調査では見られなかったが先行研究で言及されている機能についての追検証が挙げられる。この他、収集データにおける topic と comment の境界についての明確化、正確な文脈の補足や調査する要素のみを調査できる例文への改善、インドネシア地方言語との比較や影響についての議論も挙げられる。

略号一覧

1: first person/ 2: second person / COP: copula /DEM: demonstrative / NEG: negation /PN: proper noun
PROH: prohibition /REL: relative / SG: singular / ~ : reduplication

参考文献

Ewing, M. C. (2005) Colloquial Indonesian. In: K. Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann (eds) *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*. 227-258. London and New York: Routledge. / Karaj, D. M. (2021) Indonesian discourse particles in conversations and written text. *Wacana, Journal of the Humanities of Indonesia*, 22 (2): 319-337. / Kotschi, T. (2006) Information Structure in Spoken Discourse. In: K. Brown (ed) *The Encyclopedia of Language and Linguistics, 2 Edn*: 677-682. Oxford: Elsevier. / Miyake, Y. (2015) Pragmatic particles and information structure in colloquial Indonesian dialogue. In: *Proceedings of the second international workshop on information structure of Austronesian languages*, 103-114. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies. / Sari, F. (2008) Teaching Pragmatic Particles in the LCTL Classroom. *The Journal of the National Council of Less Commonly Taught Languages*, 5: 129-159. / Sneddon, J. N. (2006) *Colloquial Jakartan Indonesian*. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University. [Pacific Linguistics 581.] / Zainur, R. (2018) The Study of the Indonesian Pragmatic Particle Sih. *LiNGUA Jurnal Ilmu Bahasa dan Sastra,* 13 (2): 151-156.

調査資料

Leipzig Corpera Collection. https://corpora.uni-leipzig.de/en?corpusId=ind_mixed_2013 (2023/12/8 アクセス)

The Verb System of Samarkand Tajik

FAYZIEVA Zarina
(Global Studies Program, Language and Culture Studies Course)

Keywords: Samarkand Tajik, Verb System, Descriptive Linguistics, Iranian Languages

1. Introduction

The purpose of this paper is to give a brief summary of my thesis. In my thesis, I present an overview of the verb system of Samarkand Tajik (abbreviated as ST), a dialect of the Tajik language spoken in the Samarkand region of the Republic of Uzbekistan. It is clear that this dialect has been influenced by the Uzbek language due to language contact in the span of centuries.

As a result of this study, some general features of ST have been determined. These can be summarized in two parts: the development of synthetic constructions, and the resemblance with Uzbek due to language contact. The development of synthetic constructions can be seen in the grammaticalization (affixization) of the literary past participial form *istoda* to suffix *-sa* to express the progressive aspect and the literary perfect form *budan* turning into the suffix *-ud*.

The features that have developed due to language contact with Uzbek are the extensive usage of auxiliary verb constructions, modal constructions, and the supplementary usage of two past participles. The usage of participial possessive and the progressive form of the verb *omadan* 'to come' to express volition is also a feature that can be attributed to the influence from Uzbek.

This study is based on the data recorded in the Taylak district of Samarkand region. The data was transcribed[1] by the author[2]. It is noted that the transcription of recordings, English translation and glossing of the examples were made by the author unless specified otherwise.

2. Previous Research

Two grammars have mainly been used as a reference in this paper: Perry (2005) and Ido (2005). An explanation on features of these is given below.

Perry (2005) is a comprehensive grammar of Tajik. Consisting of 521 pages, it gives thorough description of Tajik grammatical structures. Almost all of the example sentences given in this work are presented in Persio-Arabic script as well as Cyrillic. Perry (2005: XV) states that "this work aims to provide a quick, easy, and comprehensive access to grammatical structures of Tajik Persian of Central Asia, as used in writing and educated speech". While the immense influence of Uzbek and common Turkic on Tajik is recognized in Perry (2005), the degree to which it has impacted is not specified. In addition, although Perry (2005) states that the Northern dialects have been influenced

[1] The vowels /i/, /e/, /a/, /o/, /ů/ and /u/ are transcribed as *i, e, a, o, ů* and *u* respectively. For the following consonants, /p/, /b/, /t/, /d/, /k/, /q/, /m/, /n/, /r/, /f/, /v/, /s/, /z/, /h/, /l/, the spelling is generally the same as the IPA symbol. The following consonants will have a special spelling: /ɡ/: *g*, /ʃ/: *š*, /ʤ/: *j*, /ʧ/: *č*, /j/: *y*, /χ/: *x*, /ʁ/: *ğ*

[2] The author is a female speaker of Samarkand Tajik, born in Taylak district of Samarkand region in 1997.

by Uzbek, the presence or absence of the difference in the specific influences between dialects and Literary Tajik (LT) is not clarified. In other words, it is not clear which features of Northern dialects have been more influenced by Uzbek than in Literary Tajik.

Ido (2005) is an easy-read comprehensive grammar of Tajik. Consisting of 99 pages, it can be considered as an introductory grammar of Tajik. This work clearly states that the verb paradigms of Literary Tajik and dialects (especially Northern dialects) are radically different (Ido 2005: 66). Also, Ido (2005) gives examples of dialects, and sometimes makes a difference between colloquial forms and forms that are only seen in literary usage. However, as it is stated in Ido (2005: 66), since this is not a dialectological study, detailed description of the verb systems of Northern dialects, and other dialects is not given.

Other studies on Tajik Grammar and Dialectology including Rastorgueva (1952, 1964), Rastorgueva and Kerimova (1954), Kerimova (1959, 1997), Xalilov (1977) were also referred in my thesis.

3. Data used

Primary spoken data: This is the main data for this study. This data consists of about 4 hours of spoken ST which was recorded in the Taylak district of Samarkand. Taylak is a district in Samarkand region with the total area being 0.28 thousand km^2. Distance to Samarkand city center is about 10 km.

My main language consultants are HK (female, year of birth: 1949), NS (male, year of birth: 1956), FF (male, year of birth 1969), DS (female, year of birth: 1971), NF (male, year of birth: 2002). All of the consultants were born in and spent their language formative period in the Taylak district. The example sentences used in this paper are extracted from this data unless specified otherwise.

Journal of the Institute of Language Research No. 28: This is a journal published by the Institute of Language Research in Tokyo University of Foreign Studies. According to Kazama (2022: 105), the "Special Issue" series of this journal began in 2009, and until 2018, 10 themes have been covered in this series. From 2019, the goal has been to add data of new languages that had not been covered in the previous special issues. In the 28th issue of the journal, the data for ST is created by present author. Research example sentences of ST from this journal are used in this paper. These sentences are specified on the right corner of the sentence, with the mark "JILR" and the number of the sentence in the section of the journal.

Lastly, if examples needed are not found both in primary spoken data and the JILR, they will be created by the author, who is a native speaker of ST. These will be marked as "Created by the author".

4. Verb morphology

Verbs are inflected for tense, aspect, mood, number, and person. The formation method for verb forms is as follows: (NEG)-(IMPF)-verb.stem-(CAUS)-(PROG)-(PST)-person=(MOD). The structures in the squares are integral parts of the verb forms, while those in brackets can be combined freely. Note that the imperfective and progressive markers do not cooccur.

4.1. Verbal stems

Every verb has two stems: **the present stem**, and **the past stem**. The past stems of Tajik verbs always end in *-t* (after unvoiced consonants) and *-d* (after vowels and voiced consonants). According to Ido (2005: 43), the present stem, although with a certain degree of regularity, is not as systematic as the past stem because it has derived from the complex verbal morphology that existed in the history of Iranian languages. In ST, although the stem formation is generally the same to that of LT, there are some differences caused in two ways: phonetically and morphologically. These differences are discussed in detail in my thesis.

4.2. Pre-stem elements

The possible slots of pre-stem elements, which include **imperfective marker *me-*** and **negation marker *na-*** is as follows: ***na-me-****don-am* [NEG-IMPF-know(PRS)-1SG] 'I don't know'. In ST, the imperfective marker has 4 allomorphs: *mi-*, *mu-*, *mů-*, and *me-*. These allomorphs appear due to regressive assimilation: ***mi-****gir-am* [IMPF-take(PRS)-1SG] 'I take, I will take', ***mu-****kun-am* [IMPF-do(PRS)-1SG] 'I do, I will do', ***mů-****xůr-am* [IMPF-eat(PRS)-1SG] 'I eat, I will eat'. Prefix *bi-,* which is a literary imperative marker, is not used in Samarkand Tajik.

4.3. Person marking and 'be'

Tajik utilizes subject-verb agreement morphology where personal markers are used to mark the subject's person and number (Ido 2005: 45). Personal markers of ST are as follows: 1SG -am, 2SG *-i/-et*, 3SG *-at/-Ø/-s*, 1PL *-em*, 2PL *-eton*, 3PL *-an*.

In ST, when a present stem ends in a vowel sound, the *a* in 1SG, 3SG, and 3PL drops (e.g., *mu-kušo-**m*** [IMPF-open(PRS)-1SG] 'I open, I will open'). In 2SG, 1PL, and 2PL, a *y* is added between the vowel and the suffix (e.g., *mu-kušo-**y**em* [IMPF-open(PRS)-1PL] 'we open, we will open').

The second person singular marker *-et* is used for honorific expression. Among the third person singular markers, *-at* is used for the present stem, *-Ø* is used for the past stem, and *-s* is attached to the participial forms (e.g., *kad-a-**s*** [do(PST)-PTCPI-3SG] '(it seems that) he has done'). The literary copula *ast* and its inflectional forms are not used in nominal predicate sentences in Samarkand Tajik (e.g., LT: *ů xursand **ast*** [s/he joyful COP.3SG] 's/he is joyful'; ST: *vay xursand* [s/he joyful] 's/he is joyful').

There are two existential verbs in ST: ***hast*** (negative *nest*) and ***budan***. *hast* is used only in the present tense (e.g., *sinf-ba ki **hast**?* [class-DAT/LOC who exist] 'Who is in the classroom?'). *budan* has a present stem *boš-* and a past stem *bud-*. The past stem is used to express existence of someone or something in the past (e.g., *Muhammad Zoiršoh poššo **bud*** [PN padishah be(PST)]'Muhammad Zoirshoh was the padishah.'). However, the present stem is not used to express existence.

4.4. Non-finite verb forms

The non-finite forms in ST are made of one infinitive form and five participial forms. The verb *kadan* 'to do' is used as an example in the table.

Table 1: The non-finite verb forms of ST

Infinitive		***kad-an***
Participles	Past I	***kad-a***
	Past II	***kad-agi***
	Present-Future	***me-kad-agi***
	Progressive	***kaysagi***
	Future	***kad-ani***

Infinitive [past stem + *-an*] has the properties of a noun. Therefore, it can take the plural marker (e.g., ***xond-an-o*** *nağz mi?* [read(PST)-INF-PL good Q] 'How are your studies?'), accusative/genitive marker *-(y)a*, the dative/locative marker *-ba*, and the possessive marker as well. It is often used in sentences expressing a necessity with the word *darkor* 'necessary' or general possibility with the word *mumkin* 'possible', as well as prohibition with its negative form.

Past participles I [past stem + *-a*] **and II** [past stem + *-agi*] are in complementary distribution in ST. Past participle I is seen only in adverbial usage (1). It is mainly used as the main verb in auxiliary verb constructions (4.7). Past participle II is used mainly in adjectival usage as a predicate or as a modifier for nouns (2).

(1) *bozi* ***ka*** *šišt-agi.* *In binni vay-a* ***gazid-a*** *kit-agi*
play do(PST).PTCPI sit(PST)-PTCPII this nose.IZ that-ACC/GEN bite(PST)-PTCPI take(PST)-PTCPII
'They were playing. He bit his (the other person's) nose (to his own benefit).'

(2) *mohon Šibirğon-ba* ***šišt-agi****.*
1PL PN-DAT/LOC sit(PST)-PTCPII
'We lived in Shibirghon (a city in Afghanistan).'

The present-future participle [*me-* + past stem + *-agi*] represents a stative perfect (3). It often bears a modal nuance of potential or obligation. It can also refer to the near future. Unlike past participle II, present-future participle does not have a predicative usage.

(3) *unja joy-i* ***me-raft-agi*** *nest.*
there place-IZ IMPF-go(PST)-PTCPII exist.NEG
'There is no place to go.'

The progressive participle [past stem + *-sagi*] is often used to express that the action that has been in progress at the time when the action in the main clause happened (4). Similarly to the present-future participle, the progressive participle does not have a predicative usage.

(4) *tu zix* ***šuysagi*** *barin*
2SG bored become.PROG.PTCPII like
'You look like you are bored.' JILR [227] (24)

The future participle [past stem + *-ani*] is used to express the intention or volition of the speaker

(5). In ST, this form can be seen only in predicative usage.

(5) *yoki* ***raft-ani***. *yoki yagonjo* ***raft-ani***
or go(PST)-PTCP.FUT or somewhere go(PST)-PTCP.FUT
'(Yes) or he is planning to. Or he is planning to go somewhere.'

4.5. Finite verb forms

Finite verb forms of ST are characterized by having more synthetic constructions in the forms which are analytical in LT (LT: *raft-a istod-a bud-am* [go(PST)-PTCPI stand(PST)-PTCPI be(PST)-1SG] 'I was going'); ST: *rafsud-am* [go(PST).PROG.PST-1SG] 'I was going'). The table below is a paradigm of finite verb forms in Samarkand Tajik. It is divided into the next mood forms: indicative, inferential, speculative, imperative and conditional. The naming of forms are borrowed from Ido (2005), with slight changes made by me. The verb *kadan* 'to do' is used as an example in the table.

Table 2: The finite verb forms of ST

		1SG	2SG; 2SG.HON	3SG	1PL	2PL	3PL
Indicative	Past	*kadam*	*kad-i*; *kad-et*	*kad*	*kad-em*	*kad-eton*	*kad-an*
	Past imperfective	*me-kad-am*	*me-kad-i*; *me-kad-et*	*me-kad*	*me-kad-em*	*me-kad-eton*	*me-kad-an*
	Past perfect	*kad-ud-am*	*kad-ud-i*; *kad-ud-et*	*kad-ud*	*kad-ud-em*	*kad-ud-eton*	*kad-ud-an*
	Past perfect imperfective	*me-kad-ud-am*	*me-kad-ud-i*; *me-kad-ud-et*	*me-kad-ud*	*me-kad-ud-em*	*me-kad-ud-eton*	*me-kad-ud-an*
	Past progressive	*kaysud-am*	*kaysud-i*; *kaysud-et*	*kaysud*	*kaysud-em*	*kaysud-eton*	*kaysud-an*
	Present progressive	*kaysem*	*kaysi*; *kayset*	*kaysas*	*Kaysem*	*kayseton*	*kaysen*
	Present imperfective	*mu-kun-am*	*mu-kun-i*; *mu-kun-et*	*mu-kun-ad*	*mu-kun-em*	*mu-kun-eton*	*mu-kun-an*
Inferential	Past	*kad-em*	*kad-i*; *kad-et*	*kad-a-s*	*kad-em*	*kad-eton*	*kad-en*
	Past imperfective	*me-kadem*	*me-kadi*; *me-kadet*	*me-kad-a-s*	*me-kad-em*	*me-kad-eton*	*me-kad-en*
	Past perfect	*kadudem*	*kad-ud-i*; *kad-ud-et*	*kad-ud-as*	*kad-ud-em*	*kad-ud-eton*	*kad-ud-en*
	Past progressive	*kaysudem*	*kaysud-i*; *kaysud-et*	*kaysud-as*	*kaysud-em*	*kaysud-eton*	*kaysud-en*
Speculative	Past	*kad-agem*	*kad-aget*; *kad-ageton*	*kad-agi-s*	*kad-agemon*	*kad-ageton*	*kad-agen*
	Present imperfective	*me-kad-agem*	*me-kad-aget*; *me-kad-ageton*	*me-kad-agi-s*	*me-kad-agemon*	*me-kad-ageton*	*me-kad-agen*
	Present progressive	*kaysagem*	*kaysaget*; *kaysageton*	*kaysagi-s*	*Kaysagemon*	*kaysageton*	*kaysagen*
Imperative		*kun-am*	*kun; kun-ed*	*kun-ad*	*kun-em*	*kun-eton*	*kun-an*
Conditional		*kun-am*	*kun-i; kun-ed*	*kun-ad*	*kun-em*	*kun-eton*	*kun-an*

Indicative past form expresses a completed action in the past (6). **Indicative past imperfective form** expresses habitual patterns in the past and occurrences which took place for a long period of time (7). **Indicative past perfect form** refers to an action or state in past already completed by a

certain time in the past (8). **Indicative past perfect imperfective form** is used in complex sentences, when the reference time is in past, to designate that an action had been going on at that time or was repeated habitually (9). **Indicative past progressive form** expresses an action in progress at the reference time (10). **Indicative present progressive form** expresses the progressive aspect of action verbs (11). **Indicative present imperfective form** expresses the non-past, therefore it can denote unchanging situation, general truths, action occurring in the future, a habitual action (12).

(6) *hamtu bovo-t-ba nyo* ***kad-am*** *ki, imoh* ***kad-an***
like.this grandfather-2SG.POSS-DAT/LOC look do(PST)-1SG REL sign do(PST)-3PL
'Your grandfather gave me a sign once I looked at him.'

(7) *raft-a tamošo* ***me-kad-em****,* ***mi-šišt-em***
go-PTCPI look IMPF-do(PST)-1PL IMPF-sit(PST)-1PL
'We used to watch (it) and sit (there).'

(8) *hamun kas-a na-bin-em* ***guft-ud-em****, na-did-em*
that person-ACC/GEN NEG-see(PRS)-1PL say(PST)-PST-1PL NEG-see(PST)-1PL
'We didn't want to see him, and luckily we didn't see him.'

(9) *ayni Islom-ba rav-em agar yak-ta čoynik čoy dam* ***me-kad-ud***
one's PN-DAT/LOC go(PRS)-1PL if one-CLF teapot tea brew IMPF-do(PST)-PST
'Whenever we went to Islom's house, he used to make tea for us.'

(10) *vay omad-ageš-ba man avqot* ***xůrsud-am***
that come(PST)-PTCPII.3SG.POSS-DAT/LOC 1SG food eat.PROG.PST-1SG
'I was eating food when he came back.' JILR [254] (26)

(11) *hozir Farhod peš-i Širin-ba* ***rafsa-s***
now PN front-IZ PN-DAT/LOC go.PROG-3SG
'Now, Farhod is going to Shirin's place.' JILR [11] (11)

(12) *můl gard-am počem dar* ***mu-kun-ad***
many walk(PRS)-1SG leg.1SG.POSS hurt IMPF-do(PRS)-3SG
'If (when) I walk a long distance, my feet hurt.'

The inferential mood forms express that the speaker does not have first-hand information on a statement. **Inferential past form** expresses information that was gained by the speaker in the past through hearsay or indirect evidence (13). **Inferential past imperfective form** expresses an

information that was obtained in the past but will take place in the future or is a habitual action taking place in the present (14). **Inferential past perfect form** expresses that the information was obtained in past, and that the action took place prior to reference time (15). **Inferential past progressive form** expresses an information obtained in the past but the action is in progress in the present (16).

(13) *forsi gap-o můl* ***bud-a-s***
Persian word-PL many be(PST)-PTCPI-3SG
'(It seems that) there are many Persian words.'

(14) *Qobil-a pisar-aš kor* ***me-kad-a-s*** *hamja*
PN-ACC/GEN son-3SG.POSS work IMPF-do(PST)-PTCPI-3SG there
'(I found out that) Qobil's son works there.'

(15) *Nodir xoneš-ba raft-ageš-ba,*
PN house.3SG.POSS-DAT/LOC go(PST)-PTCPII.3SG.POSS-DAT/LOC
oyteš uje avqot puxt-a ***mond-ud-a-s.***
sister.3SG.POSS already food cook(PST)-PTCPI put(PST)-PST-PTCPI-3SG
'(I heard that) when Nodir went home, his sister had already cooked a meal (for him).'

(16) *Qobil aka=yam xonešon-a* ***furůxsud-en***
PN brother=too house.3PL.POSS-ACC/GEN sell.PROG.PST-PTCPI.3PL
'(I heard that) Mr. Qobil is also selling his house.'

Speculative mood forms express presumptions of the speaker on a situation without having any evidence on it. **Speculative past form** expresses presumptions about a situation in the past (17). **Speculative present imperfective form** expresses presumptions about a situation that might take place in the future (18). **Speculative present progressive form** expresses presumptions about a situation that might be ongoing in the present (19).

(17) *Saylun bud-agi-s=da*
PN be(PST)-PTCPII-3SG=MOD
'(I presume that) it should be Sailun.'

(18) *palav* ***me-kad-agen***
plov IMPF-do(PST)-PTCPII.3PL
'(I presume that) they will make plov.'

(19) *ukem* *a* *kor* ***omaysagi-s***
y.brother.1SG.POSS from work come.PROG-PTCPII-3SG
'(I think that) my brother might be coming back from work.'

4.6. Voice

Causative suffix *-on* is attached to the present stem to form causative verbs (e.g., *šin-**on**-* [sit(PRS)-CAUS-] 'make one sit'). This suffix can form causatives from both transitive and intransitive verbs. The patient is marked by the accusative/genitive case *-(y)a* (e.g., *man ukem-**a** xez-ond-am* [1SG y.brother.1SG.POSS-ACC/GEN awake(PRS)-CAUS-1SG] 'I woke my brother up'). The causer is in the nominative case (zero marking), and the causee is marked by the dative/locative case *-ba* (20).

(20) *man* *ukem-**ba*** *ašůla* ***xon-ond-am***
1SG y.brother.1SG.POSS-DAT/LOC song read(PRS)-CAUS-1SG
'I made my brother sing a song.' JILR [73] (3)

The **passive** voice is expressed by the past participle I and the verb *šudan* 'to become' (21). The participial form does not change, therefore the verb *šudan* is conjugated for person, number, and takes the imperfective or negation markers. In ST, similarly to LT, the passive construction is not utilized as much.

(21) *nav* *bino* ***soxt-a*** ***šud***
new building make(PST)-PTCPI be(PST)
'the new building has been built' JILR [5] (5)

4.7. Auxiliary verb constructions

The auxiliary verb constructions in Tajik are formed by the past participle I with the auxiliary verbs which are conjugated for tense, person and number and take the imperfective or negation markers. The lexical meaning is given by the past participial form while the grammatical or functional nuance is added by the auxiliary verb (22).

(22) *hozi* *man* ***yoft-a*** ***mi-tiy-am***
now 1SG find(PST)-PTCPI IMPF-give(PRS)-1SG
'I will find it (for you/ for you benefit) right away.'

Auxiliary verb constructions are broadly used in Samarkand Tajik. According to Rastorgueva (1964: 84), this is a feature that is absent in both Classical Persian and (Classical) Tajik, and can be addressed to as a borrowing from Uzbek. Ido (2005: 70) states that the total number of auxiliaries in Tajik is uncertain, since majority of them probably came into existence as a result of language contact between

Tajik and Uzbek/Turkic. Therefore, the auxiliary verbs are naturally particularly salient in northern dialects, which are heavily influenced by Uzbek. Being a member of northern dialects, auxiliary verbs are very common in Samarkand Tajik.

4.8. Modal constructions

Modal constructions in ST have been influenced by Uzbek to a wide extent. For example, LT modal constructions of necessity and obligation are formed by the defective verb *boyad* 'it is necessary (that)' (e.g., *man boy-ad rav-am* [1SG need(PRS)-3SG go(PRS)-1SG] 'I must go' (Perry 2005: 330)). However, in ST, similarly to Uzbek, non-finite forms of the verb with the adjective 'necessary' (ST *darkor*, Uzbek *kerak*) is used (e.g., ST *man raft-agem* ***darkor*** [1SG go(PST)-PTCPII.1SG.POSS necessary] 'I must go'; Uz *men ket-ish-im kerak* [1SG leave-VN-1SG.POSS necessary] 'I must go'). Before *darkor*, nominal forms of the verb, which are the infinitive form (23) or the participial possessive form are used.

(23) *Zomin-ba* ***raft-an*** ***darkor***
PN-DAT/LOC go(PST)-INF necessary
'We have to go to Zomin (lit. It is necessary to go to Zomin).'

Possibility is expressed by the word ***mumkin*** 'possible'. Like *darkor,* this can also be preceded by the infinitive or a participial possessive form (24).

(24) *kor-aton* *tamom šav-ad* ***raft-ageton*** ***mumkin***
work-2PL.POSS end become(PRS)-3SG go(PST)-PTCPII.2PL.POSS possible
'You can go if you have finished your work.' JILR [40] (1)

Ability is expressed by the verb ***tonistan*** 'to be able to/can'. This is a fully inflected verb, which means that it can be used in all the forms non-finite and finite forms (e.g., *vay habozi kad-a* ***me-ton-ad*** [that swim do(PST)-PTCPI IMPF-can(PRS)-3SG] 'He/she can swim').

Volition is expressed by participial possessive and the progressive form of the verb *omadan* 'to come' (e.g., *yagon čiz* ***xůrd-agem omaysa-s*** [some thing eat(PST)-PTCPII.1SG.POSS come.PROG-3SG] 'I want to eat something'). This construction can be addressed to as a borrowing from Uzbek, since the same construction is seen is Uzbek and other Turkic languages as well, but not seen in Literary Tajik and Persian (e.g., Uz *nimadir ye-gi-m kel-yap-ti* [something eat-VN-1SG.POSS come-PROG-3SG] 'I want to eat something').

5. Conclusion

Features of ST can be summarized in two parts: the development of synthetic constructions, and the resemblance with Uzbek due to language contact. The development of synthetic constructions is thought to have occurred outside the influence of Uzbek, while the resemblance is a result of language

contact. First, the development of synthetic constructions is yielded by two means: the phonemic means and also the morphological means. The phonemic contraction is seen in vowels in clusters fusing into one and also in the regular elision or omitting of *av*. Also, the irregularity in some forms of verbs caused by individual difference as a result of analogy from other forms and complete irregularity in contraction (e.g., *bed* (ST) || *biyoyed* (LT) '(you) come') is seen in ST as well. The morphological means of the development of synthetic construction can be seen in the grammaticalization (affixization) of the literary past participial form *istoda* to suffix *-sa* to express the progressive aspect and the literary perfect form *budan* turning into the suffix *-ud*. Second, some features of ST that have developed due to language contact with Uzbek, differentiate it from LT. Some of these features are the complementary distribution of the two literary past participles and the extensive usage of auxiliary verb constructions. Also, the development and high usage of modal sentences (e.g., *kad-an darkor* [do(PST)-INF necessary] 'it is necessary to..'; *kad-aget mumkin* [do(PST)-PTCPII.2SG.POSS possible] 'you can do...') can be attributed to influence from the Uzbek language. In addition, the usage of participial possessive and the progressive form of the *verb omadan* 'to come' to express volition is also a feature of ST that is thought to have developed due to language contact with Uzbek.

In my thesis, I gave an overview of the verb system of ST. However, only brief description of phonology and nominal morphology was given. Hence, more research needs to be done on these fields, as well as a thorough research on syntax. Once these tasks are accomplished, the description of the entire grammatical system of ST can be aimed for. This will, in result, be a step to conservation of the language and a contribution to further research on Tajik linguistics, and linguistics of Iranian Languages in general.

Abbreviations

1, 2, 3: 1, 2, 3 person/ ACC: Accusative/ CLF: Classifier/ COP: Copula/ DAT: Dative/ FUT: Future/ GEN: Genitive/ HON: Honorific/ IMPF: Imperfective/ INF: Infinitive/ IZ: Izafet/ LOC: Locative/ LT: Literary Tajik/ MOD: Modality/ NEG: Negative/ PL: Plural/ PN: Proper Noun/ POSS: Possessive/ PROG: Progressive/ PRS: Present/ PST: Past/ PTCP: Participle/ Q: Question/ REL: Relativizer/ SG: Singular/ ST: Samarkand Tajik/ Uz: Uzbek/ VN: Verbal Noun.

References

Ido, S. (2005) *Tajik.* Languages of the World Materials 442. München: Lincom Europa. / Kazama, S. (2022) 「補遺データ：まえがき」[Special Issue: Foreword.] *Journal of the Institute of Language Research No.27*, 105-109. / Kerimova, A. A. (1959) *Gorov Tadžikov Buxari*. Moskva: Nauka. / Kerimova, A. A. (1997) *Sovremennyj Tadžikskij Literaturnyj Jazyk (Funkcionirovanije i Razvitije).* Abstract. Moskva: Nauka. / Perry, J. R. (2005) *A Tajik Persian Reference Grammar*. Leiden - Boston: Brill. / Rastorgueva, V. S. (1952) *Očerki po tadžikskoj dialektologii.* Moskva: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. / Rastorgueva, V. S. (1964) *Opyt Sravnitel'nogo izučenija tadžikskix govorov.* Moskva: Nauka. / Rastorgueva, V. S. and A. A. Kerimova (1954) *Sistema tadžiskogo glagola.* Moskva: Nauka. / Xalilov, A. (1977) *Hissačaho dar zaboni adabii hozirai tojik*. Dushanbe: Donish.

チェコ語の関係節における代名詞残留

松山　芳瑛
（博士前期課程　世界言語社会専攻）

キーワード：チェコ語，関係節，代名詞残留，コーパス

修士論文の構成 (本稿では主に下線部を取り上げる)

0. はじめに	5. 調査 1: 5 つの条件に関するコーパス調査
1. 背景	6. 調査 2: 5 つの条件と話者意識に関するアンケート調査
2. 先行研究	7. 調査 3: 限定表現に関するコーパス調査
3. まとめと問題提起	8. 結論と今後の課題
4. 調査対象	

1. はじめに

チェコ語[1]の関係節化には、特に口語やインフォーマルな書き言葉において、不変化の疑問代名詞 co “what” が用いられることがある (Šimík 2008)。このタイプのスラヴ諸語の関係節における残留代名詞の出現範囲は名詞句接近可能性階層「主語＞直接目的語＞斜格句」に合致しており、原則として、関係節における主要部の働きが主語の場合は残留が不可、斜格句の場合は残留が義務的となる (Philip 2012)。一方、直接目的語 (対格名詞句) の場合、諸々の条件によって、主要部名詞の性・数・格を標示する残留代名詞が現れる場合 (1a) と現れない場合 (1b) がある (Mendoza 2019)。本研究では、チェコ語において、関係節内での主要部が直接目的語である場合の代名詞残留に影響を与える条件及び条件間の働きの強さの相対的な関係を、コーパス調査により明らかにする。

(1) a. To je ten chlap, [**co** *ho* viděli
DEM be.PRS.3SG DEM guy.MA.SG.NOM CO M.3SG.ACC.CLT see.PST.MA.PL
v tramvaji].
in streetcar.F.SG.LOC
「これは彼らが路面電車の中で見た男だ。」

b. To je ta kniha, [**co** viděli na stole].
DEM be.PRS.3SG DEM book.F.SG.NOM CO see.PST.MA.PL on table.MI.SG.LOC
「これは彼らが机の上で見た本だ。」

(チェコ語, Toman 1998: 310 に文字飾り・グロス・訳加筆)

[1] チェコ語の名詞は 7 つの格 (主格、生格、与格、対格、呼格、前置格、造格) と単数・複数の区別を有する。名詞は、男性、女性、中性の 3 性を区別し、男性名詞はさらに有生性によって男性活動体名詞と男性不活動体名詞に区別される。基本的に、男性活動体名詞は有生物、男性不活動体名詞は無生物を表し、女性名詞、中性名詞は有生物、無生物いずれも表す。

本稿では、関係節において代名詞が残留する現象のことを「代名詞残留」、残留する代名詞のことを「残留代名詞」と呼ぶ。「主要部」という場合、主要部名詞とそれを支配する前置詞や、指示詞・形容詞といった限定語も含む。本稿では 3 人称代名詞のみを残留代名詞と見なす。チェコ語において関係節を導く疑問代名詞には co というグロスを振る。特に断りの無い限り、本稿中の例文・図表番号・文字飾り・グロスは筆者により、例文における太字は関係節を導く疑問代名詞、下線は主要部、[] は関係節、斜字は残留代名詞を表す。

2. 先行研究

2.1. スラヴ諸語における代名詞残留

Hladnik (2015) によると、スラヴ諸語における直接目的語位置での代名詞残留は次の 2 つの条件に左右される。

①主要部名詞の主格形と対格形 (以下、主・対格形) の形態的一致: 主要部名詞の主・対格形が形態的に同一でない場合、残留代名詞が必要となる (Hladnik 2015: 63-65)。なお、スラヴ語における格変化パターンには若干の相違が見られる。チェコ語は、単数では男性活動体名詞と女性名詞が、複数では男性活動体名詞のみが主・対格形を異にする (表 1 下線部)。

表 1: チェコ語の代表的な格変化パターン (Short 1993: 465-468 に基づき作成)

	SG			
	MA	MI	F	N
NOM	chlap (man)	hrad (castle)	žena (woman)	město (town)
ACC	chlapa	hrad	ženu	město
	PL			
NOM	chlapi	hrady	ženy	města
ACC	chlapy	hrady	ženy	města

②主節と関係節における主要部の格 (以下、主関格) の合致: 主関格が合致しない場合、残留代名詞が必要となる。

Hladnik (2015: 65-69) は、**主・対格形の方が主関格より優先される**と主張している。例えば (2) では、主節における主要部が主格、関係節における主要部が対格となっており、主関格が合致していないにも関わらず、主要部名詞 dijete "child" (N.SG) の主・対格形が同一であるため、非残留が容認される。

(2) Dijete [**što** sam (*ga*) vidio] voli Ivu.
child.N.SG.NOM what AUX.1SG N.3SG.ACC.CLT see.PST.M.SG love.PRS.3SG PN.ACC
「私が見た子供は Iva を愛している。」
(BCS[2], Hladnik 2015: 66 に文字飾り・グロス・訳加筆)

[2] ボスニア・クロアチア・セルビア語を指す。略称は Hladnik (2015) に従う。

2.2. チェコ語における代名詞残留

チェコ語に関してコーパス調査を行った Čech and Šimík (2005) と Fried (2010) は、チェコ語において、主に以下の条件が直接目的語位置における代名詞残留に影響を与えると主張している。

①**主要部名詞の有生性**: 有生名詞、特に人間を表す名詞において残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005: 21, Fried 2010: 20)。Fried (2010: 23) は「主要部名詞が有生物である場合は残留代名詞が要求されるようであるが、無生物においては選択的である」と述べている。
②**主要部名詞の性**: 男性活動体名詞、女性名詞で残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005: 21)。Čech and Šimík (2005: 21) はこの理由を、人間の指示対象は主にこれらの名詞によって表されるためであるとしている。
③**主要部名詞の数**: 単数において残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005: 21-22, Fried 2010: 23)。Fried (2010: 23) は「残留関係節は有生性に関わらず単数名詞と共起しやすい」と述べている。
④**主関格**: 主関格が合致しない場合に残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005: 22)。
⑤**限定表現**: 限定所有表現を伴う名詞は残留関係節との共起傾向がある (Čech and Šimík 2005: 22)。一方、každý “every” や všechen “all” を伴う名詞は非残留関係節との共起傾向が示唆されており (Čech and Šimík 2005: 23)、最上級を伴う名詞は常に非残留関係節をとる (Čech and Šimík 2005: 20)。
⑥**関係節の制限／非制限用法**: Fried (2010: 25-26) は、関係節の用法は、残留代名詞の有無が選択的な無生名詞においてのみ残留代名詞の有無に影響を与え、非残留関係節は制限用法、残留関係節は非制限用法として働くと主張している。

3. まとめと問題提起

2 章で挙げた条件の関係は以下の図に示す通りである (図 1)。実線は当該条件が対応する条件や概念と合致していること、点線は相反している点があることを示す。

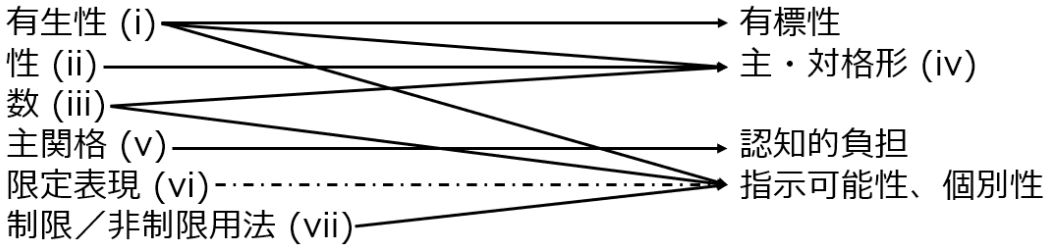


図 1: チェコ語において残留代名詞の有無を左右する条件の関係
(Hladnik 2015, Čech and Šimík 2005, Fried 2010, 王・プラシャント・堀江 2005 を基に作成)

概して、チェコ語における残留代名詞は、有生物、単数、所有表現を伴う、非制限的に修飾され得るなど、有標な名詞や、指示可能性・個別性の度合いの高い名詞との共起傾向があ

る[3]。主・対格形を異にする男性活動体名詞と女性名詞 (表 1) において比較的残留が起きやすいことは、チェコ語においても主・対格形が働いており、形態的な対格標示の欠如を補うために残留が起きることを示唆している。さらに、主関格が合致しないために関係節内の文法関係を理解する際の認知的負担 (王・プラシャント・堀江 2005) が高い場合に、残留代名詞を用いた明示的な関係節が用いられる傾向があると言える。

一方、先行研究では、個々の条件が個別に記述されており、条件間の強さの関係が明らかでないという問題点がある。加えて、関係節の用法に関しては挙げられている例文が少なく調査が不十分である。これらの問題点を踏まえ、本研究では、**(i) 有生性、(ii) 性、(iii) 数、(iv) 主・対格形、(v) 主関格、(vi) 限定表現、(vii) 関係節の制限／非制限用法**、の 7 つの条件に着目し、条件同士の働き方の比較を可能とする方法によって調査を行う。

4. 調査方法

修士論文では、(i) 〜 (v) に着目したコーパス調査 (調査 1)、(i) 〜 (v) に着目したアンケート調査 (調査 2) 、(vi) に着目したコーパス調査 (調査 3) を行った。本稿では紙幅の都合上、調査 1 を重点的に取り上げる。(vii) に関しては、調査 1 で得られた用例を基に適宜考察を行うこととする。

調査 1 では、主にチェコ語国立コーパスの SYN verze 11 (以下、SYN11) を用い、用例数が不足する場合のみ、チェコ語国立コーパスで公開されている Araneum Bohemicum Maximum verze 15.04 (3,20 G) (以下、ABM) を用いる[4]。以下の条件を組み合わせて、合計 24 通りの「名詞, co」の語連続を検索する。

(1) 主要部名詞の有生性　A (人間)[5] / I
(2) 主要部名詞の性　　M / F / N
(3) 主要部名詞の数　　SG / PL
(4) 主要部名詞の格　　対格 (主関格が合致) / 主格 (主関格が非合致)

初版が 1980〜2021 年であるテキストから、1 グループにつき 40 例を目標に用例を手作業で収集する。この際、2.2 節で挙げた限定表現を伴う名詞は対象外とする。以下、本稿において、SYN11 から用例を引用する場合はテキスト名とテキストジャンルを、ABM から引用する場合はウェブドメインと用例が収録された年月日を記載する。

[3] ただし、každý “every”、všechen “all” を限定表現に持つ名詞と非残留関係節の共起傾向が示唆される、最上級を伴う主要部と残留関係節が共起できない、といった例外も存在する。
[4] チェコ語国立コーパスは 1994 年に設立され、カレル大学哲学部のチェコ語国立コーパス研究所と理論・コンピューター言語学研究所が中心となって運営している。SYN11 はフィクション、雑誌、新聞などから成り、現時点でおよそ 50 億語を収録するタグ付き書き言葉共時コーパスである。ABM は Vladimír Benko によって作成された、現時点でおよそ 1500 万語を収録するタグ付きウェブコーパスである。ウェブ記事やブログ等から成る。
[5] 女性・中性人間名詞の用例を抽出する際は、コーパス内で出現頻度の高い人間名詞を主要部名詞の lemma に指定し検索を行う。女性名詞と中性名詞は有生性による文法カテゴリーの区別がないため、lemma の指定なしでは人間名詞の用例を効率良く収集できないことがその理由である。

5. 調査

5.1. 調査結果

以下に、調査1の結果を示す (表2)。残留割合は、データ全体で **20.6%**、有生名詞で **42.7%**、無生名詞で **2.5%**となった。表中の数値は残留 : 非残留の用例数を、括弧内の数値は当該項目における残留関係節の割合 (小数第2位を四捨五入) を表す。表2内の太字は、当該項目における残留関係節の割合が全体の残留割合のおよその平均である 20%以上であることを表す。

表 2: 調査 1 のデータ (計 871 例、うち残留 179 例、全体の残留割合 20.6%)

主関格	合致		非合致		合計
数	SG	PL	SG	PL	
MA	**32:8 (80.0%)**	**8:32 (20.0%)**	**39:1 (97.5%)**	**14:26 (35.0%)**	**93:67 (58.1%)**
FA	**17:23 (42.5%)**	**9:26 (25.7%)**	**27:13 (67.5%)**	**8:32 (20.0%)**	**61:94 (39.4%)**
NA	2:14 (12.5%)	**1:3 (25.0%)**	6:34 (15.0%)	**4:12 (25.0%)**	13:63 (17.1%)
MI	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	4:36 (10.0%)	1:39 (2.5%)	5:155 (3.1%)
FI	0:40 (0.0%)	3:37 (7.5%)	2:38 (5.0%)	1:39 (2.5%)	6:154 (3.8%)
NI	1:39 (2.5%)	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	1:159 (0.6%)

なお、テキストジャンルに関しては、フィクション、特に散文における会話文の用例が非常に多く見られた。新聞・雑誌からの用例も観察されたが、インタビューや取材における発言が多くを占めていた。ここから、co 関係節が口語やインフォーマルな文体で使用されやすいことが改めて確認された。

5.2. 5 つの条件の序列に関する考察

本節では、5 つの条件の働きの強さを明らかにする。有生名詞を残留割合の高いグループから順に並べると、次のようになる。用例数の少ないN.A.PL.合致は考慮しないこととする。

①M.**SG**.*非合致* (97.5%) ＞②M.**SG**.合致 (80.0%) ＞③F.**SG**.*非合致* (67.5%) ＞④F.**SG**.合致 (42.5%) ＞⑤M.PL.*非合致* (35.0%) ＞⑥F.PL.合致 (25.7%) ＞⑦N.PL.非合致 (25.0%) ＞⑨M.PL.合致 (20.0%) ＝ ⑨F.PL.非合致 (20.0%) ＞⑩N.SG.非合致 (15.0%) ＞⑪N.SG.合致 (12.5%)

これらの残留割合の降順から、次のことが言える。

①**有生性**によって残留代名詞の有無が決まる。基本的に無生物では残留せず、特定の条件の働きは観察されない。
↓
以下、有生名詞において、諸条件が次の順に強く働く。
②**主・対格形**が働く。主・対格形が非同一である名詞は残留割合がより高くなる (網掛け)。
↓

③**数**が働く。［②主・対格形非同一］の条件を満たす名詞の中では、単数の場合に残留割合がより高くなる (**太字**)。
↓
④**性**が働く。［②主・対格形非同一、③単数］の条件を満たす名詞の中では、特に男性名詞で残留割合が高くなる (波線)。
↓
⑤**主関格**が働く。［②主・対格形非同一、③単数、④男性］の条件を満たす名詞の中では、主関格が合致していない場合に、残留割合がより高くなる (*斜字*)。なお、主関格非合致による残留割合増加の傾向は、［②主・対格形非同一］の条件を満たしていれば、数、性を問わず観察される。

まとめると、チェコ語において残留割合が最も高くなるのは、**男性有生名詞単数かつ主関格が非合致**のグループである。一方、概して有生名詞の中では主・対格形が常に合致する中性名詞で比較的残留割合が低くなる。他の有生名詞のグループはこれら2つのグループの中間的な残留割合を示す。これらの条件の働き方は、右のように図式化することができる (図 2)。

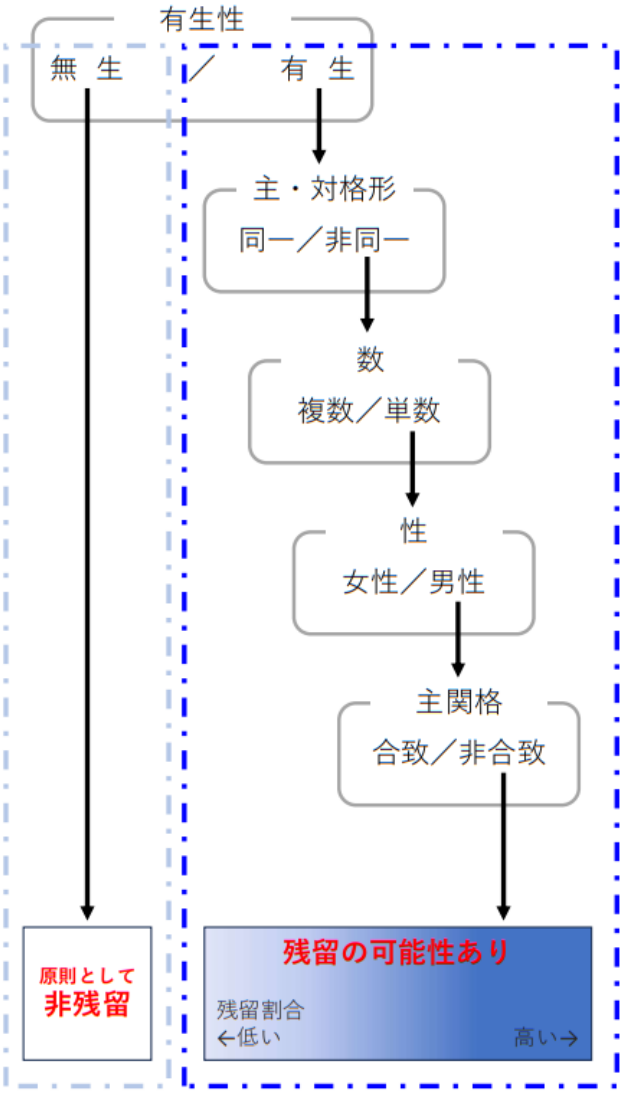


図2：コーパス調査に基づく5つの条件の働き方

本稿では、チェコ語の代名詞残留に関して新たに次のことを主張する。

【条件全体の働き方に関して】

1) 5 つの条件は、**有生性＞主・対格形＞数＞性＞主関格**、の順に強く働く。原則として、有生性によって残留代名詞の有無が決定する。基本的に無生名詞は非残留関係節をとる一方、有生名詞では様々な条件の組み合わせにより残留割合に差が生じる。

2) 一方、**主関格**は序列のより上位にある**数・性の如何に関わらず効力を発揮する**。よって、主関格は、残留割合を高める働きはそれほど強くないものの、比較的広範に働く条件であると言える。

【個々の条件の働き方に関して】

3) スラヴ諸語全般において働くとされる主・対格形はチェコ語においても観察され、主・

対格形は主関格より優先的に働く。Čech and Šimík (2005) は、残留関係節の割合が特に男性活動体名詞と女性名詞で高くなる理由を、人間の指示対象は主にこれらの名詞によって表されるためであるとしている。しかしこの記述は、人間を表す中性名詞の残留割合が男性・女性名詞より低くなることを説明していない。より正確な理由は、男性活動体名詞・女性名詞は少なくとも単数において主・対格形を異にするためである。

4)「残留関係節は有生性に関わらず単数名詞と共起しやすい」(Fried 2010) という主張は、「有生名詞においては特に単数で残留割合が高くなる」のように修正することができる。

5) 同じ条件を満たすグループの中では、女性名詞より男性名詞で残留割合が高くなる。この理由はチェコ語文法における男性名詞の振る舞いによって説明できる可能性がある。チェコ語には、男性名詞が無標となる現象が見られる。例えば、男性名詞を基本形とする女性・中性名詞の派生 (Šlosar 2000: 121-123) や、SV 語順で男性活動体名詞主語を 1 つ以上有する場合における動詞の男性複数形への一致 (金指 2010: 32) がある。有生名詞における残留は (無生名詞における残留よりは) 頻度の点で無標であるが、男性名詞はチェコ語において無標となりやすいため、特に残留割合が高くなるのではないか、という仮説を立てた。ただし、この点についてはさらなる考察の余地がある。

6) Fried (2010) の主張とは異なり、無生名詞はほぼ一貫して非残留関係節をとる。そのため、無生名詞においてのみ関係節の用法が残留代名詞の有無に影響を与える (Fried 2010) という主張には問題があることが分かる (5.3 節にて詳述)。

5.3. 個々の用例の分析

本節では、5.2 節で扱った 5 つの条件に加えて、以下の条件もチェコ語の残留代名詞の有無に影響を与えることを主張する。個々の用例の分析に基づき、①関係節内の主語が無生物である場合に残留が起きやすいこと、②残留代名詞は名詞の指示対象を限定する機能を併せ持つこと、③名詞が jediný “only” を伴う場合に非残留関係節をとる傾向があること、を示す。

①関係節内に無生物主語を有する例に関して

有生名詞に着目すると、関係節内の主語が無生物でありかつその無生物主語が普通名詞や節によって明示されている用例 (5 例) は全て残留代名詞を伴っていた。関係節内の主語と動詞の組み合わせはそれぞれ「それ (to＝ 駐車違反切符を切ったり騒がしいパーティーを追い散らしたりすること) がヒトを楽しませる (bavit)」、「頭 (hlava) がヒトを痛ませる (bolet)」、「私が書いているということ (že píšu) がヒトの興味を引く (zaujmout)」、「病気や様々な怪我 (nemoci a různá zranění) がヒトを苦しめる (trápit)」、「おなら (prdíky) がヒトを苦しめる (trápit)」であった。このように、無生物主語と人間目的語という非典型的な組み合わせの場合、関係節内の文法関係が理解しづらくなり、認知的負担が大きくなるため、残留代名詞が現れやすいのではないかと考えられる。以下に、「頭 (hlava) がヒトを痛ませる (bolet)」の例を示す (3)。

(3) {Většina z nás ještě dovede pochopit, že} muž hledá
husband.MA.SG.NOM look_for.PRS.3SG
potěšení jinde, když má doma vzteklou semetriku
pleasure.N.SG.ACC elsewhere when have.PRS.3SG at_home angry shrew.F.SG.ACC
nebo manželku, [**co** *ji* pořád bolí hlava].
or wife.F.SG.ACC CO F.3SG.ACC always ache.PRS.3SG head.F.SG.NOM
「家に怒った口やかましい女やいつも頭が痛い妻が居る時、夫は他の場所で喜びを探す{ということを、我々の多くはまだ理解できる}。」 (ABM; ona.idnes.cz; 2013-05-29)

②残留代名詞の有無と関係節の働きに関して

一部の用例から、Fried (2010) の主張とは異なり、関係節の用法は必ずしも残留代名詞の有無に対応している訳ではないことが示された。例えば、無生名詞の中には、残留が起きているにも関わらず、非制限用法的な解釈が困難な例が存在する (4)。

(4) Koukněte, támhle přijíždí ta maringotka, [**co** jsme
look.IMP.PL over_there come.PRS.3SG DEM caravan.F.SG.NOM CO AUX.1PL
ji viděli dole v úvozu].
F.3SG.ACC see.PST.MA.PL below in sunken_way.MI.SG.LOC
「見ろ、向こうから下の小道で見たキャラバンが来るぞ。」
(SYN11; Správná pětka 10; 散文)

代わりに、本稿では、以下の 2 つの表現 (a, b) における残留代名詞の有無の傾向から、残留代名詞は名詞の指示対象を限定する機能を併せ持つことを主張する。

a. 接続詞 jako / jak “like” を用いた比喩表現と残留関係節の共起傾向

接続詞 jako / jak “like” を用いた比喩表現となっている用例は残留関係節をとる傾向がある。有生名詞の中では比較的残留割合が低い中性有生名詞に着目すると、該当する 7 例のうち 6 例が残留関係節をとっていた。以下に例を挙げる (5)。

(5) Vypadala úplně jako ta strašidla, [**co** *je* malují
look.PST.F.SG totally like DEM goast.N.PL.NOM CO 3PL.ACC draw.PRS.3PL
na obrázcích].
on picture.MI.PL.LOC.DIM
「彼女は完全に絵に描かれるお化けのように見えた。」(SYN11; Pivoňková lucerna; 散文)

b. 動詞 znát “know” と非残留の傾向

動詞 znát “know” を伴う関係節では残留が起きない傾向がある。男性有生名詞 23 例のうち残留関係節は 4 例、女性有生名詞 11 例のうち残留関係節は 2 例、中性有生名詞 6 例のう

ち残留関係節は 0 例であった。いずれの残留代名詞の出現頻度も、男性・女性・中性有生名の平均残留割合 58.1%、39.4%、17.1% (表 2) より低くなっている。以下に例を挙げる (6)。

(6) Dokážu vzít za srdce jako žádný jiný
manage_to.PRS.1SG take.INF at heart.N.SG.ACC as no other
spisovatel, [**co** znám].
writer.MA.SG.NOM co know.PRS.1SG
「私の知っている他のどんな作家とも比べ物にならないほど、私は (人々を) 魅了することができる。」 (SYN11; Adrian Mole; 散文)

a のような用例では、主要部名詞の指示対象が定まっていないため、関係節は指示対象がどのようなものであるかを限定する機能を担っている。一方、b のような用例では、発話者にとって既知の対象について述べているため、関係節が主要部名詞の指示対象を限定する働きは a に比べて弱いと言える。よって、残留代名詞は主要部名詞の指示対象を限定する機能を併せ持つのではないかと考えられる。

③jediný "only" を伴う例に関して

jediný "only" を伴う用例は 3 性の有生名詞において 9 例 (男性 2 例、女性 5 例、中性 2 例) 発見されたが、全て非残留関係節をとっていた。jediný は名詞の指示可能性・個別性の度合いを高める点や高頻度で非残留関係節をとるという点で、最上級と似ている。以下に例を挙げる (7)。

(7) {Musela jsem se vytratit z domu dřív,} než ztratím tu **jedinou**
before lose.PRS.1SG DEM only
kamarádku, [**co** jsem kdy měla].
friend.F.SG.ACC CO AUX.1SG ever have.PST.F.SG
「かつて私にいた唯一の友人を失う前に{、私は家からそっと抜け出さなくてはいけなかった}。」 (SYN11; Deník lhářky; 散文)

最上級 / jediný / každý "every" / všechen "all" を伴う名詞が義務的に非残留関係節をとるまたは好む傾向があるという点は、上記②で言及した、残留代名詞が主要部名詞の指示対象を限定する機能と関係していると考えられる。即ち、これらの限定表現を伴う名詞は指示可能性・個別性の度合いが既に高くなっているため、残留関係節により指示対象を限定する必要がない。ただし、限定所有表現を伴う名詞は残留関係節をとりやすい (Čech and Šimík 2005) ため、主要部名詞の指示可能性・個別性の度合いが高い場合は常に残留が起きにくい、という訳でない。残留代名詞は、主要部名詞の指示対象を限定する機能において、最上級 / jediný / každý / všechen と相補分布していると考えられる。

6. 結論

修士論文では、定量的調査に基づき、チェコ語の代名詞残留に影響を与える条件の働き方を記述した。チェコ語において代名詞残留に影響を与える条件が、有生性＞主・対格形＞数＞性＞主関格、の順に強く働くことを示し、従来は個別に記述がなされてきた諸条件が、専ら有生名詞においてのみ働くことを明らかにした。加えて、個々の用例の分析に基づき、残留代名詞は関係節内の文法関係の理解を促進する機能と、主要部名詞の指示対象を限定する機能を併せ持つことを主張した。さらに、主要部名詞の指示対象を限定する機能において残留代名詞が一部の限定表現と相補分布していることを主張した。

略号一覧

1 1 人称 / 3 3 人称 / A 有生 / ACC 対格 / AUX 補助動詞 / CO 関係節を導くチェコ語の疑問代名詞 / CLT 前接形 / COND 条件法 / DEM 指示詞 / DIM 指小形 / F 女性 / I 無生 / IMP 命令 / LOC 前置格 / M 男性 / MA 男性活動体 / MI 男性不活動体 / N 中性 / NOM 主格 / PN 固有名詞 / PL 複数 / PRS 現在 / PST 過去 / SG 単数

参考文献

王路明・プラシャント パルデシ・堀江薫 (2005)「中核 (core) から周辺 (periphery) までー英語、日本語、中国語、アジュクル語、マラーティー語の関係節形成ー」『言語処理学会年次大会発表論文集』11: 839-842.

金指久美子 (2010)『中級チェコ語文法』東京: 白水社.

Čech, Radek and Radek Šimík (2005) Distribuce plných a prázdných akuzativních resumptiv: korpusová analýza. In: Linda Awadová et al. (eds.) *Sborník ze setkání bohemistů Cikháj 2005*, 19-24. Brno: Masarykova univerzita v Brně.

Fried, Mirjam (2010) Accusative resumptive pronoun in the Czech relative clauses with absolutive relativizer *co*. *Korpus-gramatika-axiologie* 1: 16-29.

Hladnik, Marko (2015) *Mind the gap: Resumption in Slavic relative clauses*. Doctoral dissertation, Utrecht University.

Mendoza, Imke (2019) Relative Particles and Resumptive Pronouns in Slavic. *Zeitschrift für Slavische Philologie*, 75 (1): 5-42.

Philip, Minlos (2012) Slavic relative *čto* / *co*: between pronouns and conjunctions. *Slověne= Словѣне. International Journal of Slavic Studies* 1 (1): 74-91.

Short, David (1993) Czech. In: Bernard Comrie and Greville G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages*, 455-532. New York: Routledge.

Šimík, Radek (2008) Specificity in Czech Relative Clauses. In: Jacek Witkoś and Gisbert Fanselow (ed.) *Elements of Slavic and Germanic Grammars: A Comparative View*, 177-198. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Šlosar, Dušan (2000) Slovotvorba. In: Petr Karlík, Marek Nekula, Zdenka Rusínová (eds.) *Příruční mluvnice češtiny*, 109-226. Second revised edition. Praha: Nakladatelství Lidové noviny.

Toman, Jindřich (1998) A discussion of resumptives in Colloquial Czech. *Formal Approaches to Slavic Linguistics* 6: 303-318.

調査資料

Benko, Vladimír. Araneum Bohemicum Maximum, verze 15.04. Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha 2015. https://www.korpus.cz/ [2024 年 1 月 3 日アクセス].

Český národní korpus. Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha. https://www.korpus.cz/ [2024 年 1 月 3 日アクセス].

卒業論文　要旨

韓国の建設現場で使用される日本語系借用語の現状について

李　承容
（言語文化学部　日本語専攻）

キーワード：韓国語，借用語，現場俗語，意味の変化，社会言語学

0. はじめに

19世紀後半から第二次世界大戦までの間、特に「韓国併合」時期における同化政策の一環として行われた朝鮮人への日本語教育は今日までその影響を及ぼしている。1945年の韓国独立後、政府の主導のもとで幾回もの「国語純化」が執り行われた。特に、1992年に文化部 (現在の文化体育観光部) で発行した「우리 말 건설용어집 (韓国語建設用語集)」では建設用語の中で日本語風の用語等の「純化すべき」用語を収集して4回もの国語審議会会議を経て確定したと記している。しかし、一般社会と専門的な職業分野とのあいだの純化の達成状況には大きな差があり、後者の場合は現在もなお日本語系借用語 (以下、借用語) が使用されている例を容易く見つけ出すことができる。建設分野はその代表的な例である。特に、建設分野は用語だけでなく「元請と日雇労働者が下請けを通じて間接契約で雇われるという労働形態」も流入したため、借用語がさらに根強く残っている。本稿の目的は、現在も使用されている建設現場用語を調査して現状を明らかにし、意味変化の面から考察を行うものである。

なお、引用文を除く本文中の韓国語のローマ字転写はイェール式表記法に倣っており、外国語文献の和訳及び下線・図表番号は、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 背景知識

1.1. 韓国の建設産業の雇用構造に起因する純化達成度の低迷

前節にて「建設分野は用語だけでなく元請と日雇労働者が下請けを通じて間接契約で雇われるという労働構造」と言及したが、本節では沈 (2006) を参考に、より詳細な説明を行う。

まず、建設工事の発注者は元請に該当する「一般建設会社」に工事の依頼をする。ここでいう「一般建設会社」は工事に対して全般的な施工能力を持つ会社である。この元請は電気・塗装・防水などの個別の専門的な分野において技術と人力を保有する「専門建設会社」に下請として工事を依頼し、この「専門建設会社」はさらに2次・3次の下請契約を通じて仕事を依頼する。

結果として、日雇労働者が実際の施工段階において大多数を占めることとなる。当然、日雇労働者が大多数を占める状況において体系的な用語等の教育はなされておらず、作業現場には常に危険が伴い、正確なコミュニケーションが必要であるため容易に純化することができないのである。なお、その純化についても、韓国政府主導で文献上で発表された

もの以上の措置は今まで取られておらず、これが純化達成度の低迷の要因として挙げられる。

1.2. 韓国の建設現場における日本語系借用語

本節では、韓国の建設現場で使用される日本語系借用語について概観する。

内藤 (1995) は、現場俗語の語数とその構成について以下のように述べている。

> 1993年9月20日重版発行の「建築用語辞典 (普通版) 」 (編著 : 金　平卓) には、付録として韓国の「建設工事現場俗語集」がP1,189 ~ 1,210に収録されている。収録語数は1,448語で、その内のほとんどが日本式建築用語である。
>
> 内藤 (1995: 189)

なお、林 (2009) での分類を参考に、用語の種類ごとの例を以下に示す。

例) 「用語の種類」　　用語　　現場俗語 (転写)

「工具・道具」	型枠	가타와쿠, 가다와꾸 (kathawakhwu, katawakkwu)
「資材」	鉄筋	뎃킨, 뎃낑 (teyskhin, teyskking)
「構造」	勾配	고바이, 고바위, 구배 (kopai, kopawi, kwupay)
「仕上げ」	おさまり	오사마리 (osamali)
「単位」	法高	노리다카, 노리다까 (nolitakha, nolitakka)
「作業用語・名称」	手待	데마치, 데마찌 (teymachi, teymacci)

以上の例のように、さまざまな種類の現場俗語が存在しており、その現場俗語においても変異形が存在している。

2. 先行研究

2.1. 内藤 (1995)

内藤 (1995) は、韓国「建築用語辞典」(普及版)[1] に収録されている建築工事現場俗語を対象としており、合計1,448語を韓国語の俗語、漢字の韓国語読み、日本式用語と韓国語の合成語等に分類して考察を述べている。特に、現場俗語の構成について以下のように述べている。

> (前略) 収録された語が現場俗語であるため、やはり施工・仮設等に関する語が圧倒的に多い。「仮設工事」や「基礎工事」などの各種工事名、「家具屋」「土方」「建具屋」などの職方名、「工程表」や「断面図」「立面図」などの図面類の名称、「荷重試験」「載荷試験」などの各種試験名、「片足場」

[1] 金平卓 (編著) (1993)「建築用語辞典」技文堂

「組立足場」などの各種足場名称や「仮説垣」等の仮設資材名から「かき均し」「仮締め」「仮敷き」「かしめ」などの現場作業を示す語まで、かなり細部に渡った語が掲載されている。(中略) 単に言葉だけが現場俗語化したばかりでなく、その言葉の概念なり、実態がその背景にあった可能性は高いと言えよう。

(内藤 1995: 195-196)

2.2. 林 (2009)

林 (2009) は、1980年以降より今日までおける「土木建築分野」での韓国語への純化状況の調査を行った。調査に関しては、林本人が韓国人建築家である李仁炯氏を訪ね現在の現場俗語の使用状況について聞き取りを行い、日本人建築家井上一氏の協力で今の日本の社会での土木建築用語の使われ方について情報を得ることができたとの説明がある。

上記の調査について林 (2009) は、「67語彙中、27年間で韓国語に純化されたものは18語彙である。これは1980年を100とした時の26.9パーセントに当たる。」と述べている。

2.3. 亀井・河野・千野 (編著) (1996)

日本語の建設用語が韓国語に流入し、実際の現場で使用される際に種々の意味変化が生じる。本稿では、このような現場俗語の意味変化を分類するがその際にこの亀井・河野・千野 (編著) (1996) を参考にし、分類に使用する。そのため、ここで意味変化の定義と分類を紹介する。

まず、亀井・河野・千野 (編著) (1996: 64) は意味変化の定義について以下のように述べている。

ある時期のある言語の形式F1が音形P1と意義M1を備え、その後のある時期のある言語の形式F2が、音形P2と意義M2を備えていて、音形P2が音形P1と同系であると認められるとき、形式F1の意義M1が形式F2において意義M2に変化した、という。

(亀井・河野・千野 (編著) 1996: 64)

このような意味変化は「1) 意味の変化」、「2) 意味の縮小」、「3) 意味の向上」、「4) 意味の堕落」、「5) 意味の特殊化」、「6) 意味の一般化」、「7) 意味の弱化」、「8) 意味の空虚化」、「9) 意味の圧縮」、「10) 意味の伝染」、「11) 隠喩」、「12) 換喩」、「13) 提喩」、「14) 誇張」、「15) 緩徐法」の15項目に分類できる。この意味変化の分類に際して亀井・河野・千野 (編著) (1996: 65) は以下のように述べている

［**意味変化の分類**］形式 (たいていは単語) の古い意義と新しい意義とを比較し、両者の関係をいくつかの種類に分類することは、前世紀から今世紀中頃にかけての意味論 (semantics) の中心課題であった。以下にその主なものを示すが、これらの用語は、当時の "意味論" を反映して、必ずしも全体で一つの体系をなすものではない。したがって、同じ基準に基づく分類 (たとえば、拡大と縮小、

> 特殊化と一般化)は相対立するけれども、異なる基準に基づく分類 (たとえば、拡大と一般化、縮小と特殊化) には重なり合うものもある。
>
> (亀井・河野・千野 (編著) 1996: 65)

2.4. 先行研究の問題点

現状を把握するためには新規の調査を行う必要があると考えられる。その際、現場俗語の現状をより正確に把握するために、現場の施工段階において大多数を占める日雇労働者の存在を考慮する必要性も考えられる。

3. 予備調査

3.1. 調査概要

現場俗語の使用実態を明らかにするため、現場従事者を対象にアンケート調査を行なった。まず、この調査で使用される現場俗語を選定するため、Web上に不特定個人が作成した建設現場必須用語集2種とYoutube上の解説動画1種の合計3種[2]の資料に載っている現場俗語と文化部 (1992) に記載されている392個の現場俗語を比較した。1回以上重複して現れた用語67個を取り出し、この内、2回以上重複して現れた用語31個を取り出した。

このように取り出された31個の現場俗語に対して、参加者は「① 使用する」、「② 現場で使用されるが、私は使用しない」、「③ 知らない」、「④ その他」の4つの選択肢から1つを選択し、その使用状況を回答した。

3.2. 調査結果

調査の結果、大多数の現場俗語において認知度が80%以上であり、「知ってはいる」状態であることが明らかになった。なお、回答者自身の実際の使用状況と認知度との差が大きい現場俗語の存在も確認できる。例えば、88.9%の認知度が確認できた「도란스 (tolansu)」の回答者自身の使用率である「①使用する」の回答割合は25.9%で、最下位を記録した。これらのケースにおいては「仕事内容的に使用する機会はないが、聞くことはある」、「純化された用語を使っている」、「現場俗語が指しているモノの使用頻度自体が減っている」ことが考えられる。特に、「도란스 (tolansu)」に関しては、電力の効率化を図って従来の110vから220vへと供給電圧を上げる「韓国昇圧事業」が1970年代から開始され、2005年に終了していることを考慮すると、昇圧以前に使っていた機器を引き続き使うためには「도란스 (tolansu)」、つまり、変圧器が必要であったが、時間が経過するにつれて220vで動作する機器の導入が増え、結果的に変圧器の使用頻度自体が減っていったのが影響しているのではないかという考察ができるのである。

---

[2] 参考サイト一覧の「노가다 초보자 용어사전 최종편 -완결-（建設現場素人用語辞典最終編 -完結-)」、「노가다 하려는 사람은 참고하셈（용어편）(建設現場で働こうとする人はこれを参考するように（用語編))」、「노가다 현장용어 초보노가다를 위한 용어정리（**建設現場用語素人のための用語整理)」**を参照のこと。

従事経歴を見ると、5年未満の経歴を持つ回答者の現場俗語の使用率が38.71%で最も低く、10年以上20年未満の経歴を持つ回答者の使用率が72.58%で最も高い。しかし、20年以上の経歴を持つ回答者の使用率は63.31%と若干低下しており、「④その他」で「過去は現場で使用されたが、今は使用されなくなった」とコメントを残していることから、「最も経験がある層が業界の変遷や用語の標準化を詳しく経験し、新しい用語や基準化された用語を意識的に採用している」可能性が考えられる。なお、すべてのカテゴリで、「②現場で使用されるが、私は使用しない」という回答が2割前後であることを考慮すると、日本語由来の現場俗語の使用及び認識は、従事者の経歴、業界の変遷、個人の状況 (役職、業務内容等) の影響が強く作用していると考えられる。

4. 本調査

4.1. 調査概要

本調査では、林 (2009) で行われた調査の対象語彙67語を用いて設問調査を行って得られた結果を示し、結果を分析する。2023年11月20日にGoogle formを用いて調査を実施し、日雇労働者を含む現場実務者の計20人から回答を得ることができた。

調査に用いた現場俗語は以下の通りである。なお、調査の設問では現場俗語の変異形も含めており、「①使用する」、「②現場で使用されるが、私は使用しない」、「③知らない」、「④その他」の中から一つを選択する形式で行った。

4.2. 調査結果

今回の調査結果と林 (2009) の内容と比較すると、現場俗語を以下の4つのタイプに分類することができる。

タイプ1) 林 (2009) で純化済みと判断されたが、今回の調査で使用が確認された現場俗語。
タイプ2) 林 (2009) と今回の調査の両方で未純化と判断された現場俗語。
タイプ3) 林 (2009) で未純化だったが、今回の調査で純化されたと判断された現場俗語。
タイプ4) 林 (2009) と今回の調査の両方で純化と判断された現場俗語。

表1: タイプごとの現場俗語数

分類	タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4	合計
語数 (%)[3]	4 (6%)	38 (56.7%)	11 (16.4%)	14 (20.9%)	67 (100%)

全体的に見ると、林 (2009) の調査時点である2007年から16年が経過した今、純化達成度は林 (2009) での結果である26.87%から37.31%へと、10%以上上昇したことが確認できる。実際に、今回の調査で新しく純化が確認できた現場俗語は11個があり、時間の経過が純化を促進させたことが考えられる。一方、林 (2009) と純化達成に関して差異が見られ

[3] 小数第二位で四捨五入した。

るケースも確認できる。特に、林 (2009) で純化されたと判断したが、今回の調査でまだ残存していることが確認された語彙が4個存在する。その要因としては、現場の特性上の理由と変異形の存在が考えられる。建設現場の雇用構造は、前述の通り、日雇労働者が大多数を占めており、一律的な教育がなされておらず、労働の過程で用語や技術を習得することが多いため、現場俗語の使用量において個人差がある可能性が高い。そのような特性は、「建築家」だけを対象にして行う調査では反映されない可能性があり、そのような差異が今回の調査で明らかになったのはないかという考察ができる。なお、変異形に関しては考慮の余地がある。林 (2009) では「데나오시 (teynaosi)」は2007年の時点で純化が確認できたと述べているが、実際の現場では (teynawusi, teylawusi) 等の変異形も使用されることから、回答の正確度を上げるためにはこのような変異形の存在も考慮することが妥当であると考えられる。

ただし、これらの調査結果は建設現場 (集合住宅施工) を対象にしており、電気・内装等の分野ごとの調査は行っていないため、分野ごとの純化の様相は建設現場全体の様相とは異なる可能性が考えられる。例えば、今回の調査では「시아게칸나 (siakeykhanna)」、「마사메 (masamey)」[4]、「이토마사 (ithomasa)」等の木材の加工に関する用語は純化済みと判断されたが、大工等の木材業界ではまだ純化されずに使用され続けられている可能性もある。

5. 現場俗語の意味変化

韓国の建設現場で使用される現場俗語とその元となった日本語の用語間に意味の差異がある例が幾つか確認できる。本節では、予備調査で用いた現場俗語のうち、意味の変化が見られる例を取り出し、紹介する。意味変化の判断は、2.1.節で紹介した亀井・河野・千野 (編著) (1996) をもとにしている。該当用語の日本での意味は、『広辞苑 (第七版) 』及び「東建コーポレーション株式会社」がWeb上に公開した「建設用語集」を参考にした。

この調査の結果、現場俗語の意味変化に関する事例として4件を確認した。具体的には、「意味の拡大」に1件、「意味の縮小」に2件、「意味の向上」に1件である。この調査は現場俗語の特性を踏まえ、意味が作業者の解釈によって曖昧になる可能性を考慮し、明確な意味変化が認められる事例に限定して行われた。その為、意味変化の発生数から傾向を導き出すことには限界があるものの、意味変化の考察を進める上での最低限の結果は得られたと考えられる。

以下に、意味変化の調査結果を表にまとめる。

[4] 参考サイト「강남 스시집 히노끼 무절 스시다찌 시공 (江南寿司屋ヒノキ無切寿司カウンター施工)」から。

表2: 現場俗語意味変化

	現場俗語	従来 (日本) の意味	現場での意味
意味の拡大	갓파 kaspha (kapppa)	合羽	防水用シート
意味の縮小	다루키 talwukhi (talwukki)	垂木	30*30*3600 (mm) サイズの角材
	오비키 opikhi (opikki, opaykki)	大引き	81*81*3600 (mm) サイズの角材
意味の向上	한바 hanpa (hampa, hampa-cip)	飯場 (不潔)[5]	現場食堂

建設現場の言葉、つまり、現場俗語が経年変化を遂げてきた背景には、社会環境と認識の進化及び言語の経済性が密接に関連していることが考えられる。特に、徐・全 (2020) によると搾取やそれに伴う負のイメージがあった「飯場」は時間の経過と新しい労働世代の台頭とともに、その印象が顕著に改善さてきたという。この改善は、建設現場の言葉における意味の変化に大きな影響を与えていると考えられる。後者の場合、建設現場という危険を伴う職場環境では迅速かつ正確な意思疎通が不可欠であり、この労働・意思疎通の効率化はもとより労働者の安全に関わる重大な要素である。したがって、現場で用いられる俗語を含む意思疎通の経済性が意味変化に大きく寄与しているということが考えられる。

6. まとめ

本研究は、韓国の建設現場で使用される現場俗語の現状を把握し、その意味変化を明らかにするために行われた。本調査では、日雇労働者およびそれらの労働者と業務上密接に意思疎通をとる者を対象に、林 (2009) の研究以来の変化を比較分析した。

先行研究から15年が経過し、その間に建設現場の社会的・言語的環境には顕著な変化があったと考えられるが、特に日雇労働者の視点が新たな洞察をもたらした。

予備調査の結果、現場俗語の認知度は依然高く、80%以上の現場俗語が活発に使用されている状態が維持されていることが示された。さらに、本調査においても、調査対象67語のうち42語 (62.69%) が現在も使用されていることが確認された。この結果は、現場俗語が建設現場のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていることを示している。

言語の意味変化についても「意味の拡大」1件、「意味の縮小」2件、「意味の向上」1件という形で確認され、これらの変化は建設現場という特有の危険を伴う環境下での意思疎通の必要性と、社会環境の改善がもたらす言語の変容に関連していると考えられる。特に、「飯場」という語の意味の向上は、建設現場の改善された労働環境と社会的認識の変化を反映している可能性が示唆された。

[5] 参考サイト「飯場」から。

なお、本研究は集合住宅の施工に特化した建設現場を対象に実施された。建設現場と作業内容によって、俗語の使用が異なる可能性が高いことから、より広範囲にわたる建設現場全体についての体系的な調査が必要である。

本調査は遠隔地でのアンケート調査によって行われたため、アンケートの設問に限定された情報しか収集できなかった。この限界を部分的に補うために、30年以上にわたり建設現場を監督・統率してきた筆者の父からの専門的な意見も求めたが、それによって得られた情報も限られたものであった。この点が、本研究の主要な限界点として考慮されるべきである。

参考文献[6]

亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996)「意味変化」『言語学大辞典 第6巻: 術語編』65-67. 東京: 三省堂. / 沈揆範 (2006) 『건설현장의 다단계 하도급구조 개선방안 (建設現場の多段階下請構造の改善方案)』韓国建設産業研究院. / 徐尚佑・全ウンフィ (2020) 「ノガダになった土方 -韓国における日雇い建設労働者の歴史的背景と現状に関する一考察-」『空間・社会・地理思想』23: 93-102. / 内藤和彦 (1995) 「韓国「建築用語辞典」収録の「建設工事現場俗語」に見られる日本式建築用語の関する研究」『日本建築学会計画系論文集』468: 189-197. / 林悦子 (2009) 「韓国社会に残存する日本語系借用語　-土木建築分野を中心に-」『目白大学人文学研究』5: 203-216.

参考資料

新村出 (編) (2018)『広辞苑 第七版』東京: 岩波書店. / 大韓建設団体総聯合会 (2002)『올바른 우리말 건설용어집 (正しい韓国語建設用語集)』 / 文化部 (1992)『우리 말 건설 용어집 (韓国語建設用語集)』

参考サイト

「飯場」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A3%AF%E5%A0%B4 [2024年1月10日最終閲覧]
「建築用語集」https://www.token.co.jp/estate/useful/archipedia/row_kana.php?jid=00016 [2024年1月10日最終閲覧] / 「노가다 현장용어 초보노가다를 위한 용어정리 (建設現場用語素人のための用語整理)」https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=n76QMRYH9DM [2023年12月22日最終閲覧] / 「강남 스시집 히노끼 무절 스시다찌 시공 (江南寿司屋ヒノキ無切寿司カウンター施工)」 https://hinokinara.com/39/?q=YToyOntzOjEyOiJrZXl3b3JkX3R5cGUiO3M6MzoiYWxsIjtzOjQ6InBhZ2UiO2k6MTt9&bmode=view&idx=15365272&t=board [2024年1月10日最終閲覧] / 「노가다 초보자 용어사전 최종편 -완결- (建設現場素人用語辞典最終編 -完結-)」https://gall.dcinside.com/board/view/?id=arbeit&no=1993478 [2023年12月22日最終閲覧] / 「노가다 하려는 사람은 참고하셈 (용어편) (建設現場で働こうとする人はこれを参考するように (用語編))」https://gall.dcinside.com/board/view/?id=arbeit&no=4387062 [2023年12月22日最終閲覧]

[6] 著者名に漢字が当てられている韓国語文献は漢字を原音読みし、五十音順に並べた。

ベトナム語の自称詞と対称詞について

大西　奈実
（言語文化学部　ベトナム語専攻）

キーワード：ベトナム語，自称詞，対称詞，親族名称

0. はじめに

ベトナム語の自称詞と対称詞は、話し手と聞き手の年齢や相手との関係に応じて使い分けられる。本稿では、話し手と聞き手の年齢・親疎関係・関係性の切り替えに着目し、ベトナム語の自称詞と対称詞の使い分けの特徴を明らかにすることを目的とする。なお、本文中のグロス、図表番号、例文番号、傍線は特にことわりのない限り筆者によるものである。

1. 背景知識

最初に、本稿における自称詞と対称詞の定義付けを行う。これらの用語についての定義は様々であるが、鈴木 (1982: 19) では、自称詞を「発話の中で話者が自分自身を指示したり、自分自身に言及するために用いる語のことを言う。」という定義している。対称詞を「話者が発話に際して、発話の相手を指示したり、あるいは言及したりする語である。」(鈴木 1982: 19) と定義している。本稿では便宜上、鈴木 (1982: 19) の定義に従ってこれらの用語を扱うものとする。

2. 先行研究

本節では、ベトナム語の自称詞と対称詞について、2.1 節で Tao (2009)、2.2 節で桑原 (1989)、2.3 節で Ngo and Unsworth (2011) をまとめる。

2.1. Tao (2009)

Tao (2009) によると、ベトナム語では、人称代名詞、親族名称、固有名詞、地位・職業名、年功序列表現、指示詞が自称詞と対称詞として使われており、自称詞と対称詞を通して相手に対しての尊敬、親愛、態度・姿勢、時には感情の変化が表されるとしている。特に、親族名称を自称詞と対称詞として使用することが一般的であり、これは親族内、親族外どちらにおいても言えることである。なお、以下例文のグロスでは、自称詞を「自」、対称詞を「対」と示す。

(主人公 (cháu (孫)) から近所の女性 (cô (おば)) に対して)

(1) Lâu quá　<u>cháu</u>　chưa　về　nhà. Có　chuyện　gì　thế　<u>cô</u>?
　長い事　1SG:自　NEG　帰る　家　ある　事　何　EMP　2SG.F:対
　(私) 長い事家には帰ってないの。(あなたは) 何かあったの?

Tao (2009: 189)

さらにベトナム語では、自称詞と対称詞の切り替えによって、話し相手に対する感情や心理的な距離を表す。例文 (2) では、主人公は初めて会った女の人に対し一人称代名詞 tôi と称しているが、関係が親しくなった後の例文 (3) では、親族名称 anh (兄) に切り替えられている。

(2) Ý kiến　cá nhân　của　tôi　thì　phải　tháo　cà-vạt ra　mới　nói　được.
【意見】[1]　個人　〜の　1SG:自　EMP COND　外す　ネクタイ　初めて　言う　POT
僕の個人的な意見はネクタイを外さないと出てこないんです。

(3) Anh　chỉ　nói　được　là　có　lẽ　thế thôi.
1SG.M:自　だけ　言う POT　COP　多分　EMP
多分としか僕には言えないよ。

Tao (2009: 193)

2.2. 桑原 (1989)

桑原 (1989) は、親族語彙の体系を以下のようにまとめている。表中の G は Generation (世代) を示し、G^{+2} は G^0 の 2 世代上であることを示す。なお、表中の空欄は桑原 (1989: 104) の表記に従う。

表 1: ベトナム語親族語彙の体系

	直系血族			傍系血族			日本語訳
	男性	共性	女性	男性	共性	女性	
G^{+2}	ông		bà				ông : 祖父 bà : 祖母
G^{+1}	cha		mẹ	bác, chú, cậu		cô, dì	bác : 父の兄 chú : 父の弟 cậu : 母の兄弟 cô : 父の姉妹 dì : 母の姉妹
G^0				anh	em	chị	anh : 兄 em : 年下の自称 chị : 姉
G^{-1}	con			cháu			con : 子 cháu : 孫
G^{-2}	cháu			cháu			

(桑原 (1989: 104) をもとに筆者作成)

[1] 以下、漢越語は墨付き括弧【】による。

2.3. Ngo and Unsworth (2011)

Ngo and Unsworth (2011) によると、表 2 に示したように、ベトナム語では相手との関係によって人称代名詞が使い分けられる。

表 2: ベトナム語の単数人称代名詞

Level	First (speaker)	Second (hearer)
Respectful	tôi	−
Superior	ta	−
Familiar	tớ, mình	mình
Abrupt	tao	mày

(Ngo and Unsworth (2011: 12) をもとに筆者作成)

3. 問題提起

Tao (2009) は、感情に応じて自称詞と対称詞が切り替えられるという。しかし、主人公の感情の変化からくる自称詞の切り替えは示されているものの、相手の呼称の切り替えは示されていないなど、どちらの先行研究にも例文未記載の箇所が複数あり、十分な例が示されていない。特に親しい間柄において性別や年齢などが限定的なものであり、他の間柄によっても差が見られるのではないかと考える。さらに、どの語彙を人称代名詞とするか、そして各人称代名詞の使用範囲について、先行研究によって違いが見られる。

4. 調査 1

4.1. 調査方法

本調査は、書籍を用いた調査である。本調査では、原作が日本語の作品と原作がベトナム語の作品を用いた。日本語の作品は、多くの年齢層の異なる会話を収集するために、話毎に登場人物が変わり、若年層から年配者まで様々な人物が登場する『名探偵コナン』の 1、5、12 巻 (青山 (1994, 1995, 1996)) のベトナム語訳版 (Linh (2022) “Thám Từ Lừng Danh Conan”)) を用いた。名探偵コナンとは、黒の組織によって少年の姿にさせられた高校生探偵・工藤新一が“江戸川コナン”と名乗り、組織の行方を追いながら事件を解決していく推理漫画である。上記の 3 巻を選んだのは、今回調査したかった、親しい間柄である登場人物が多数出てくるためである。ベトナム語の作品は、Ánh (2010) “Tôi thấy hoa vàng trên cỏ xanh” (日本語版は加藤訳 (2017) 『草原に黄色い花を見つける』) という小説を用いた。こちらは、1980 年代後半、ベトナムの貧しい村に生きる兄弟ティユウ、トゥオンと幼馴染の少女マン、そして彼らを取り巻く人々の日常の物語である。それぞれの書籍で、日本語版とベトナム語版を対照しながら、2 人以上の会話から自称詞や対称詞として用いられている人称代名詞や親族名称を集め、性別・年齢・親疎関係を記録した。

表 3: 調査資料に関する情報

タイトル	頁数
名探偵コナン第 1 巻	182
Thám Từ Lừng Danh Conan 1	180
名探偵コナン第 5 巻	190
Thám Từ Lừng Danh Conan 5	188
名探偵コナン第 12 巻	180
Thám Từ Lừng Danh Conan 12	178
草原に黄色い花を見つける	296
Tôi thấy hoa vàng trên cỏ xanh	375

(筆者作成)

集められた結果を、Tao (2009) の分類にならい、A: 親族内における自称詞と対称詞の用法、B: 親族外の親しい間柄における自称詞と対称詞の用法、C: 親族外の疎遠な関係における自称詞と対称詞の用法に分類した。

4.2. 調査結果

今回の調査では、自称詞の A の例は 19 件、B の例は 175 件、C の例は 115 件、合計 309 件出てきた。対称詞の A の例は 29 件、B の例は 147 件、C の例は 144 件、合計 320 件出てきた。自称詞と対称詞、どちらにおいても多くの人称代名詞・親族名詞が親密な関係と疎遠な関係に分けて用いられていたが、一部の親族名詞が、親密な関係でも疎遠な関係でも用いられていた。本稿では、調査で得られた自称詞と対称詞の結果は省略し、関係性による切り替えが見られた結果を取り上げる。

今回の調査では、B から C に切り替わる例が 3 件、C から B に切り替わる例が 6 件、C の表現の中で単語が切り替わる例が 29 件見られた。以下に、C の表現の中で単語が切り替わる例のうち、相手に対して呼びかける際は B の表現であるが、第三者に説明する時や心の中で推理をしている時は C の表現である例文 (4) (5) を示す。

(新一が初対面の女性に話しかける場面)

(4) Chị　　tham gia　câu lạc bộ thể dục dụng cụ　　đúng không?
　F.2SG:対　【参加】　体操部.【倶楽部】【体育】【用具】EMP
　あなた、体操部に入ってますよね?

青山 (1994: 17)／Linh (2022: 15)

((4)のすぐ後、新一が蘭に説明する場面)

(5) Trên tay cô ấy　có　vết chai!
　上　手　F.3SG:対 ある　マメ
　彼女の手のマメさ!

青山 (1994: 17)／Linh (2022: 15)

4.3. 調査 1 のまとめ

親族内における自称詞と対称詞の用法においては、先行研究で示されていなかった、傍系血族にあたる親族関係間の用例を収集することができた。人称代名詞については、2.3 節の表 2 で言及されていない、人称代名詞 ngài (恐れ多い人・神などにつける呼称) と thằng (下の者または同格の男子で親しく、または軽蔑して呼ぶ場合の呼称) の例を収集することができた。さらに、感情／関係性による自称詞と対称詞に切り替えが複数みられた調査 1 では、切り替えが起こるのは、相手に対して親密な感情が増したと判断できる場面、疎遠な感情が増したと判断できる場面、話す相手によって呼び方を使い分ける場面であった。特に話す相手によって呼び方を使い分ける場面においては、例文 (4) (5)からわかるように、年下の表現 (例 chị (姉)) を親密な場合に、年上の表現 (例 cô (おば)) を疎遠な場合に使用していたことから、ベトナム語では年下の表現が親密で、年上の表現が疎遠であると考えられる。

5. 調査 2

5.1. 調査方法

調査 1 は書籍調査であったため、話者がどのような感覚で各人称代名詞と各親族名詞を用いているのか判断できなかった。特に切り替えについては感情の変化が伴うものなので、実際のインフォーマントの感覚が知りたいと考えた。さらに調査 1 を通して、ベトナム語では年下の表現が親密で、年上の表現が疎遠であるという仮説を立てることができた。これらの点を調査するために、調査 2 ではインフォーマントに対してアンケート調査を行った。

アンケートには Google フォームを用い、ベトナム語母語話者を対象とする。Facebook の投稿を通してアンケートの回答を依頼した。アンケート回答者は 1980 年〜2004 年生まれの男女 7 人である。以下にインフォーマントの情報を示す。なお記号の M は男性、F は女性であることを示す。

表 4: インフォーマント情報

記号	性別	生まれ年	出身
FA	女	1980	ハノイ市
MB	男	1980	ハイズオン省
FC	女	1998	ホーチミン市
FD	女	2002	ハノイ市
FE	女	2002	ハノイ市
MF	男	2002	バクニン省
FG	女	2004	ホアビン省

アンケートでは、性別・年齢・親疎関係が異なる 10 人の人物 (例: 初対面の 10 代女性) を設定し、このような相手に対して、何と自称し、相手のことは何と呼ぶか質問をした。親密な関係を指す人物は người quen (知り合い) と表し、「友達またはなんらかの関係を持つ人物」と注釈をつけた。それらの設問に答えてもらった後に、あなたはどのように自称詞と対称詞を使い分けたかを問う設問を立てた。そして、最後に各人称代名詞、親族名詞に対して何か特別なイメージ等を持っていたら自由に記述してもらう欄を設けた。

5.2. 調査 2 のまとめ

5.2.1 節で自称詞、5.2.2 節で対称詞について述べる。

5.2.1. 自称詞

同じ年齢・世代のインフォーマント間で、どの語彙を使うかには多少の違いが見られた。これらのことから、ベトナム語の各親族名詞がどれくらいの年齢の人物を指すという点についての共通認識はあるものの、明確な決まりはないことがわかった。

関係性による切り替えについては、疎遠な関係と親密な関係では使用する語彙が異なり、親疎関係を意識して語彙を使い分けていることがわかる。年上に対する自称詞で一般的なものとしては cháu (孫)、em (年下の兄妹) が用いられる。そして親密な関係の場合は con (子) が用いられ、疎遠な関係の場合は tôi (一人称代名詞) が用いられることがわかった。同世代に対する自称詞については、一般的なものは em、tôi、女性の場合は chị (姉)が用いられる。そして親密な関係の場合は tao が用いられ、疎遠な関係の場合は em、mình (一人称代名詞)、tớ (一人称代名詞)、tôi が用いられることがわかった。年下に対する自称詞については、親密な関係と疎遠な関係による回答の差はなかった。年下に対する自称詞として得られた回答は、全て親族名称だった。

5.3.2. 対称詞

話し手と聞き手の年齢によって、多くの親族名詞が対称詞として使い分けられていた。親族名称の他にも、友人間で用いられる呼称 cậu と、二人称代名詞 mày の使用も確認することができた。

さらに、親密な関係において、傍系血族の親族名詞が多く使われていた[2]。回答で得られた傍系血族の親族名称は、chú (おじ)、bác (父の兄または姉) である。傍系血族の他に、血族の配偶者 (母の兄弟の妻) である mợ の回答が得られたことは注目に値する。

関係性による切り替えについては、自称詞同様、親疎関係を意識して語彙を使い分けていることがわかる。一般的な呼び方を除き、親密な関係にも疎遠な関係にも用いられるという用語は今回見つからなかった。このことから、人によって各人称代名詞、親族名詞の使用の幅には違いが見られるものの、各人称代名詞、親族名詞が親疎関係のどちらを示すのかは、ベトナム人の中で共通認識になっていることがわかる。

[2] 傍系血族については表 2 参照

6. 考察

本節では、年齢による使い分け、親疎関係、関係性による切り替えに分けて考察を行う。

6.1. 年齢による使い分け

調査 1、調査 2 共に年齢による自称詞と対称詞の使い分けを見ることができた。調査 1 において、同じ人物に対して、年齢を示さない人称代名詞を自称詞や対称詞として使うことはあっても、他の親族名詞が使われている例は見られなかった。このことから、一人の人物に対して用いる親族名詞は変わらず、相手との自称詞と対称詞を決めるには、年齢を知ることが重要であることがわかる。調査 2 から、人によってどの親族名詞を使うかの感覚は若干異なり、個人の判断で使い分けられていることがわかる。アンケートの記述回答から、実際の年齢に関係なく、個人の若さに対する意識も自称詞と対称詞に表れることがわかった。調査 2 における 10 代女性の回答で、知り合いの 40 代女性に対して自称詞 con (子) を用いるのに対して、それより年下である知り合いの 30 代男性に対しては自称詞 cháu (孫) を用いるとあったことからも、必ずしも実際の年齢が自称詞や対称詞に反映されているわけではないと考えることができる。

6.2. 親疎関係

調査 2 で親疎関係によって使用する自称詞と対称詞に異なる回答が見られたことや、記述回答で「相手との関係による」という回答を得られたことから、日頃からベトナム人は意識して自称詞と対称詞を使い分けていると考えられる。

調査 1 において、Ánh (2010) “Tôi thấy hoa vàng trên cỏ xanh” では、子供の友人関係において 自称詞 tao ― 対称詞 mày が多く使われていた。これは子どもたちの仲の良さを表現するために、あえて軽蔑の意味や見下した態度を示す、自称詞 tao ― 対称詞 mày を 用いたのではないかと考えた。しかし、物語の舞台、時代背景など、他にも考慮するべき点はあると考える。

6.3. 関係性による切り替え

調査 1 で得た、知り合いの関係からより親しい友人関係へと切り替わると、用いられる自称詞や対称詞もより親密な表現へと切り替えがなされることが、調査 2 のインフォーマント調査で確認することができた。調査 1 では、切り替えが起こるのは、相手に対して親密な感情が増したと判断できる場面、疎遠な感情が増したと判断できる場面、話す相手によって呼び方を使い分ける場面であった。特に話す相手によって呼び方を使い分ける場面においては、年下の表現を親密な場合に、年上の表現を疎遠な場合に使用していたことから、ベトナム語では年下の表現が親密で、年上の表現が疎遠であると考えられる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、ベトナム語の自称詞と対称詞の使い分けについて、年齢・親疎関係・関係性による切り替えに着目し、書籍調査とインフォーマントに対するアンケートを通して考察し

た。年齢について、話者間の年齢によって親族名称が使い分けられている。しかし、必ずしも実際の年齢を反映しているのではなく、話し手の年齢に対する意識が含まれていることもある。親疎関係について、どの自称詞と対称詞を用いるかによって、話し手と聞き手の関係性が判断できる。ベトナム語の人称代名詞にはレベルがあり、より親密な関係で用いられやすいもの、フォーマルな場面で用いると好ましいものとそれぞれが持つニュアンスに違いがある。関係性の切り替えについて、ベトナム語では自称詞や対称詞の切り替えによって、相手に対する感情が表現される。人称代名詞や親族名称だけでなく、失礼な意味を表す普通名詞も対称詞として用い、相手に対する態度を表していることが確認できた。

今回のアンケート調査では、インフォーマントの性別と年齢が偏ってしまい、女性や若年層の回答は複数得ることができたが、男性の回答は少なく、高年層の回答は得ることができなかった。より多くの男性・高年層の回答を得ることで、性別や世代による自称詞と対称詞の使い方の実態をより詳細に明らかにできると考える。そして今回の調査では、インフォーマントの出身地による自称詞と対称詞の違いは見られなかった。今後はインフォーマントの母数を増やし、地域による違いはあるのか調査したい。

略号一覧

1 一人称 / 2 二人称 / 3 三人称 / COND 条件 / COP コピュラ / EMP 強調 / F 女性 / M 男性 / POT 可能 / SG 単数

参考文献

桑原政則 (1989)「ベトナム語の親族名称体系」東京国際大学教養学部論叢編集委員会 (編)『東京国際大学論叢』39: 103-113. / Ngo, Thu Thi Bich and Len Unsworth (2011) Vietnamese person reference system as an appraisal resource. Linguistic diversity and cultural identity; 185-206. NY: Nova Science Publisher. / 鈴木孝夫 (1982) 「自称詞と対称詞の比較」『日英語比較講座』5: 17-59. 東京: 大修館書店. / Tao, Vu Thi Thu (2009)「日本語とベトナム語の自称詞と対称詞に関する比較: 人称代名詞と親族名称を中心に」『大阪大学言語文化学』18: 183-195.

調査資料

Ánh, Nguyễn Nhật (2010) *Tôi thấy hoa vàng trên cỏ xanh.* Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản trẻ. / 青山剛昌 (1994)『名探偵コナン』1 巻. 東京: 小学館. / 青山剛昌 (1995)『名探偵コナン』5 巻. 東京: 小学館. / 青山剛昌 (1996)『名探偵コナン』12 巻. 東京: 小学館. / 加藤栄訳 (2017)『草原に黄色い花を見つける』東京: カナリアコミュニケーション. / Linh, Phương Việt biên tập (2022) *Thám Tử Lừng Danh Conan 1*. Hà Nội: Nhà xuất bản Kim Đồng. / Linh, Phương Việt biên tập (2022) *Thám Tử Lừng Danh Conan 5*. Hà Nội: Nhà xuất bản Kim Đồng. / Linh, Phương Việt biên tập (2022) *Thám Tử Lừng Danh Conan 12*. Hà Nội: Nhà xuất bản Kim Đồng.

その他ツール

〈ベトナム語辞書〉井上寛 (2010)『CJKI 越日辞典』日中韓辞典研究所.

条件表現の日独対照

荻田　絢香
（言語文化学部　ドイツ語専攻）

キーワード：ドイツ語，日本語，条件表現，モダリティ，対照言語学

0. はじめに

日本語ではタラ、ナラ、バ、トが、ドイツ語では falls (=in case) 、wenn (=if) が主に条件表現として用いられる。本稿は、対訳テキストを用いた調査により、日本語とドイツ語における条件表現の対応・非対応について明らかにすることを目的とする。

なお、各節における例文、日本語訳は特に断りのない限り各先行研究の筆者によるもの、本文中の例文・図表番号、グロス、文字飾りは特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 先行研究

1.1. 前田 (2009)

前田 (2009) は、「言語によって表された事態と、現実との事実関係」(前田 2009: 18) と定義される「レアリティー」に着目して条件表現を分類している。

表 1: 条件表現の用法

					レアリティー			なら	ば	と	たら
					前件	後件					
条件的用法	仮定的	反事実	事実的		事実	反事実	①	○	×	×	×
					反事実	反事実	②	○	◎	◎	■
		仮説			仮説	仮説	③	◎	◎	◎	○
			事実的		事実	仮説	④	○	○	○	○
	非仮定的	多回的	一般・恒常		(不問)	(不問)	⑤	×	◎	■	◎
			習慣・反復		事実	事実	⑥	○	◎	■	◎
		一回的	様々な状況	連続			⑦	×	△	△	◎
				きっかけ			⑧	×	○	◎	◎
				発現			⑨	×	△	◎	◎
				発見			⑩	×	○	◎	◎
非条件的	並列・列挙						⑪	○	◎	×	×
	評価的用法						⑫	×	◎	◎	○
	終助詞的用法						⑬	×	○	○	×
	後置詞的用法						⑭	△	○	○	○
	接続詞的用法						⑮	○	○	○	○

◎：使用が十分に可能
○：一定の用例があり、使えると判断できる
■：不可能ではないが、用例はほとんどない
△：近い用例はあるが、制限がある
×：使えない

(前田 2009: 40 をもとに筆者作成)

●仮定的用法: ②[1]反事実的用法と③仮説的用法が当てはまる。
●事実的な仮定条件: 仮定的条件 (仮説・反事実) の中には、前件が事実のものがあり、①事実的な反事実条件文と④事実的な仮説条件文がこれに当てはまる。
●多回的な条件文: 多回的な条件文のうち、⑤一般条件文は超時的で、後件にタ形が現れずル形しか現れない一方、⑥反復・習慣条件文は、テンスが分化する。
●様々な状況を表す場合: 同一主体の連続する動作が表される⑦連続、異主体の連続する動作を表す⑧きっかけ、前件の状態の最中に後件の動作が発生する関係を表す⑨発現、前件の動作によって後件の状態を発見する場合の用法である⑩発見が当てはまる。
●非条件的な用法: ⑪並列・列挙、⑫評価的用法 (～たら/ばいい など)、⑬終助詞的用法、⑭後置詞的用法、⑮接続詞的用法 (思えば、本来なら など) がある。ただし前田 (2009) は、周辺的な用法に過ぎず、「条件」とは呼びにくいとしている。

1.2. 野田他 (編) (2002)

野田他 (編) (2002) は、条件形式のうち、レバ形式とタラ形式が持つ用法の一つとして、「現実化以前の事態を表す用法」を挙げている。この用法では、前件で時間の経過とともに実現されることが分かっている事態が表現される。

(1) 夏休みになったら海に泳ぎに行こう　(野田他 (編) 2002: 78)

1.3. 村上 (2003)

村上 (2003) は、ドイツ語における条件表現について、falls (=in case)、wenn (=if)、「条件」を表す副文に代わる形式を挙げている。紙幅の都合上、wenn の用法のみ一部要約する[2]。

現実的な条件の場合、定動詞には直説法が、非現実的な条件の場合、定動詞には接続法Ⅱ式が用いられる。話者が聞き手に対して加える前提条件が述べられることもある。願望文も表すことができる。(2) のように、条件的な意味が薄れ、陳述内容がすでに事実である場合にも、wenn が用いられる。この場合、主文では副文で言われる事柄についての説明や解説などになる。(3) は、wenn で導かれる副文が主語文や目的語文になっている例である。他にも、wenn 節の主語や定動詞などが省略され、「短縮された副文」になることもある。

(2) *Wenn* er das getan hat, so war das nicht
if he this do.PP have.AUX.3SG.PRS so be.3SG.PST this not
aus seiner bösen Absicht.
from his.DAT bad.DAT purpose.DAT
「事実彼がそれをしたわけなのだが、それは悪意からのものではない。」

[1] ①～⑮の数字は表 1 に対応している。
[2] 村上 (2003) は「条件」を表す副文に代わる形式として、定動詞を文頭に立たせる形式や前置詞句を用いる形式を挙げている。また、条件以外の wenn の用法として、認容と時間を挙げており、本稿における 3.節以降の調査でもこれらを分類に含めた。

(3) Mein Mann mag es nicht, *wenn* ich Süßigkeiten esse.
my.NOM husband.NOM like.3SG.PRS it not if I sweets eat.1SG.PRS
「夫は私が甘いものを食べるのを嫌う。」 ((2) 村上 2003: 92, (3) 村上 2003: 93)

1.4. 成田 (2015)

本節では、成田 (2015) の記述を一部要約する。成田 (2015) は、条件表現 wenn を使うと不自然なものとして、以下の例を挙げている[3]。

(4) *Als* (/*Wenn) ich den Hügel hinaufkam, konnte ich das Meer sehen.
when if I DEF.ACC hill.ACC come_up.1SG.PST can.1SG.PST I DEF.ACC sea.ACC see.INF
「丘を上ると、海が見えた。」 (成田 2015: 69)

(5) *Am kommenden Sonntag* (/? wenn der Sonntag kommt)
on+DEF.DAT coming Sunday if DEF.NOM Sunday come.3SG.PRS
möchte ich mit euch zusammen in den Park gehen.
would_like_to I with you.PL.DAT together into DEF.ACC park go.INF
「日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。」 (成田 2015: 70-71)

●確定条件 (4) : 成田 (2015) は確定条件について、生起[4]と発見の二つを挙げている。ここでは事態が条件と帰結ではなく、継起的連続とみなされるため、どちらも wenn による条件形式は不自然で、従属接続詞 als が用いられるという。
●仮定条件＋願望 (5) : 成田 (2015) は (5) において、「日曜日が来る」ことは確実なので、括弧内のような wenn 節は不自然で、前置詞句で表す方が自然だと述べている。

2. 先行研究のまとめと問題点

成田 (2015) の記述を踏まえると、前田 (2009) が言う、一回的な事態を表す用法や、野田他 (編) (2002) が指摘する、現実化以前の事態を表す用法は、ドイツ語では条件形式 wenn では表現できないと考えられる。同様に、村上 (2003) が挙げている wenn の用法のうち、条件的な意味が薄れた場合や、主語文/目的語文を導く用法は、日本語の条件表現の用法からは逸脱しているように思われる。

本稿は、対訳テキストを用いた調査により、各条件表現の用法の違いにも着目し、日本語とドイツ語における条件表現の対応・非対応について明らかにすることを目的とする。

3. 調査方法

調査は表 2 の対訳テキストを用いて行う。調査にあたり、まず表 2 の作品をスキャンし PDF にした。その後、OCR をかけたものを手作業で修正し、文字検索機能を用いて調査を

[3] 例文 (4) (5) は、紙幅の都合上 2 つの文を 1 つにまとめた。
[4] 紙幅の都合上、発見の例文のみ取り上げ (4)、生起の例文は割愛する。

実施した。なお、表 2 中の略号は、筆者が便宜上ふったもので、以下この略号を用いる。

表 2: 調査に使用する作品一覧

言語	タイトル	著者 / 訳者	出版年	略号
日本語	『ノルウェイの森』	村上春樹	1987	jpN
ドイツ語	*Naokos Lächeln*	Murakami, Haruki / Ursula Gräfe	2001	deN
ドイツ語	*Momo oder Die seltsame Geschichte von den Zeit-Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte*	Ende, Michael	1973	deM
日本語	『モモ 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』	エンデ, ミヒャエル / 大島かおり	1976	jpM

3.1. 調査 1

調査 1 における対象範囲は、jpN、deN ともに 1 - 6 章 (jpN: 7-242, deN: 7-248) である。まず、jpN から文字検索機能を用いて、タラ、ナラ、バ、トが使われている例 (以下「条件表現が使われている例」) を抽出する。次に、各例における条件表現の用法を、前田 (2009)、野田他 (編) (2002) を参考に設定した 16 個のカテゴリーに分類する。その後、条件表現が使われている例に対応するドイツ語訳 (以下「ドイツ語の対応訳」) を deN から探し、村上 (2003)、成田 (2015) を参考に設定した 7 個のカテゴリーに分類する。分類カテゴリーについては、表 3 を参照されたい。

3.2. 調査 2

調査 2 の対象範囲は、deM、jpM ともに全てである (deM: 7-267, jpM: 11-353)。まず、deM から文字検索機能を用いて、wenn が使われている例を抽出する[5]。次に、各例における用法を、村上 (2003) を参考に設定した 13 個のカテゴリーに分類する。その後、wenn が使われている例に対応する日本語訳 (以下「日本語の対応訳」) を jpM から探し、前田 (2009)、村上 (2003) を参考に設定した 8 個のカテゴリーに分類する。分類カテゴリーについては、表 4 を参照されたい。wenn の用法分類の際、筆者はドイツ語の内省が効かず、判断が難しい例があったため、ドイツ人の友人に協力を仰いだ。インフォーマントは、2000 年生まれで、0〜11 歳まで Senftenberg で、11〜18 歳まで Dresden で過ごした女性である。

4. 調査結果

4.1.節で調査 1 の、4.2.節で調査 2 の結果を示すが、表 3、4 における分類のうち、「訳出なし」には、対応する箇所がそれぞれ対応訳に訳出されていないものが含まれる。また、表中の**太字・囲み**は 2.節で言及した用法、**太字・下線**は 2.節では言及しなかったものの、調査の結果、特徴が見られた用法である。

[5] ①falls、②定動詞を文頭に立たせる形式、③前置詞句を用いる形式は調査対象からは除外した。理由はそれぞれ以下の通りである。①deM の中で 6 例しか得られなかったため。②文字検索機能では抽出が困難であったため。③条件の意味を含むかどうかの区別が、内省が効かない筆者には困難であったため。

4.1. 調査 1 の結果と分析

表 3: 調査 1 の結果: 用法とドイツ語の対応訳の関係[6]

	wenn	定動詞文頭	前置詞句	als	und	その他	訳出なし	用法合計
現実化以前の事態を表す用法	**2**	**0**	**3**	**0**	**0**	**0**	**0**	**5**
事実的な反事実条件文	0	0	0	0	0	0	0	0
反事実的用法	6	6	2	0	0	4	1	19
仮説的用法	70	5	8	0	2	54	8	147
事実的な仮説条件文	4	0	1	0	0	2	3	10
一般条件文	9	2	4	0	0	7	1	23
反復・習慣条件文	59	1	13	0	1	16	11	101
連続	**1**	**0**	**8**	**8**	**0**	**14**	**5**	**36**
きっかけ	**2**	**1**	**18**	**42**	**7**	**43**	**6**	**119**
発現	**3**	**0**	**7**	**4**	**0**	**8**	**4**	**26**
発見	**0**	**0**	**5**	**4**	**2**	**19**	**4**	**34**
並列・列挙	0	0	1	0	1	6	0	8
評価的用法	2	0	0	0	0	47	4	53
終助詞的用法	0	0	0	0	0	2	0	2
後置詞的用法	2	1	8	1	0	23	5	40
接続詞的用法	**13**	**1**	**10**	**1**	**4**	**41**	**20**	**90**
対応訳　合計	173	17	88	60	17	286	72	713

4.1.1. 一回的な事態を表す用法

結果を見ると、一回的な事態を表す際には、ドイツ語の対応訳に wenn が現れにくいことが分かる。対応訳には、前置詞句や als のほか、従属接続詞 nachdem (=after) も 12 例現れた。

4.1.2. 現実化以前の事態を表す用法

(6) a. 料理が来たら戻るから。

b. Ich setze mich wieder zu ihnen, *wenn* das Essen kommt.
I sit.1SG.PRS REFL.1SG.ACC again to them if DEF.NOM meal.NOM come.3SG.PRS

(7) a. 卒業したらドイツに留学するっていう話もだいたい決っていたしね、

b. *Nach* dem Examen sollte ich in Deutschland weiterstudieren.
after DEF.DAT exam.DAT be_to.1SG.SBJV I in Germany study_further.INF

((6) jpN: 78, deN: 83, (7) jpN: 172, deN: 177)

この用法については、仮説に反する例も見つかった (6)。(6) では、「料理が来る」という、時間の経過とともに実現が見込まれる事態が表されているが、ドイツ語の対応訳には wenn が用いられている。(7) はドイツ語の対応訳に wenn が用いられていない例である。この 2 つを比べてみると、(6) には、後件に発話者の意志という、ある種のモダリティ的要素が現

[6] 紙幅の都合上、用法とドイツ語の対応訳の関係の調査結果のみ示す。

れている一方で、(7) では、「卒業したらドイツに留学する」という事実が客観的に述べられているに過ぎない。このことから、後件に発話者の意志が現れると、wenn が使われるのではないかという仮説を立てた。しかし、後件で発話者の意志が表されているにもかかわらず、wenn ではなく前置詞句を用いて訳されている例も見つかった。

これを踏まえると、現実化以前の事態が表されている時、図 1 のように示すことができるのではないだろうか。図 1 では、「ドイツ語の対応訳に wenn が現れる」時はいつも「後件に発話者の意志が現れている」、すなわち、「ドイツ語の対応訳に wenn が現れる」ことが「後件に発話者の意志が現れている」ことの十分条件になっている。この仮説を検証することを今後の課題としたい。

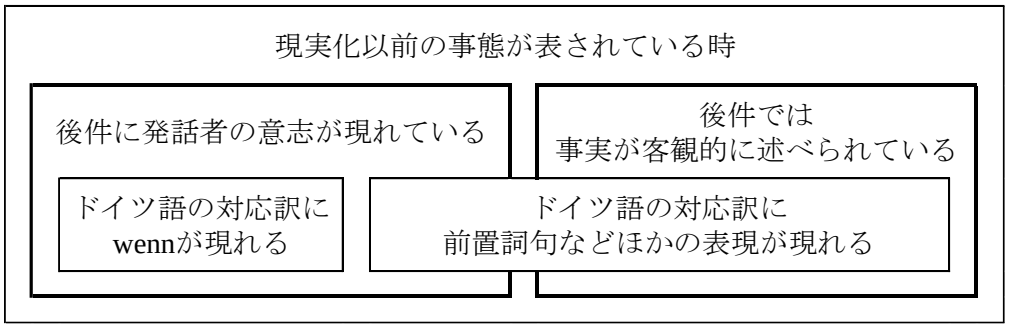


図 1: 現実化以前の事態が表されている時の包含関係

4.1.3. 非条件的用法

(8) a. よかったら一度うちに遊びに来ない？

b. *Wenn* *du* *Lust* *hast,* besuch mich doch mal.
if you desire have.2SG.PRS visit.IMP.2SG PRN.1SG.ACC PART PART

(9) a. もしよければその話を聞かせてくれませんか?

b. Ich meine, *wenn* *es* *Ihnen* *nichts* *ausmacht,*
I mean.1SG.PRS if it PRN.2HON.DAT nothing make_a_difference.3SG.PRS
mir *die* *Geschichte* *zu* *Ende* *zu* *erzählen.*
PRN.1SG.DAT DEF.ACC history.ACC to end to tell.INF

((8) jpN: 96, deN: 101, (9) jpN: 177, deN: 183)

前田 (2009) の言う非条件的用法の多くに対しては、ドイツ語の対応訳においても条件表現 wenn が用いられにくい。ただし、非条件的用法だと考えられるにもかかわらず、対応訳に wenn が用いられている例も見つかった (8) (9)。(8) (9) において、日本語では「よかったら」「よければ」という、ほぼ定型化した表現が、ドイツ語では wenn を伴い、さらに文脈に合わせて表現が変わっている。これらを観察すると、後件に働きかけのモダリティが現れていることが分かる。このことから、日本語において非条件的で定型化した表現であっても、主節の動詞に働きかけのモダリティが現れている時には、ドイツ語の対応訳に wenn が用いられうると言えよう。

4.2. 調査 2 の結果と分析

表 4: 調査 2 の結果

	タラ	ナラ	バ	ト	トキ	テモ	その他	訳出なし	用法合計
現実的な条件	23	11	23	16	5	2	9	0	89
非現実的な条件	9	3	7	2	1	0	3	0	25
前提条件	0	2	0	0	0	0	3	0	5
条件的な意味が薄れた場合	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**
願望文	0	0	2	0	0	0	1	0	3
主語・目的語文を導く	**0**	**0**	**2**	**1**	**0**	**0**	**6**	**0**	**9**
短縮された副文を導く	0	2	1	0	0	1	0	0	4
事実の認容	0	0	0	0	0	1	1	0	2
仮定の認容	0	0	0	1	0	6	2	0	9
前時性・一回性	7	0	3	0	2	0	2	0	14
前時性・反復	0	0	1	3	1	0	4	0	9
同時性・一回性	0	0	0	3	1	0	2	0	6
同時性・反復	0	0	1	6	2	0	12	0	21
対応訳　合計	39	18	40	32	12	10	45	0	196

4.2.1. 条件的な意味が薄れた場合

村上 (2003) はこのような場合にも wenn が現れるとしていたが、今回の調査では、用例を得ることができなかった。表 4 を見ると、wenn の用法は、現実的/非現実的な条件といった、より条件的意味が強いものが中核的だと考えられる。そのため、今回の調査でこの用法が現れなかったことは、ある意味妥当な結果だと思われる。

4.2.2. 主語文/目的語文を導く用法

2.節で述べた仮説に反し、この用法に対する日本語訳に、条件表現であるバやトが使われている例も 3 例見つかり、その全てが前田 (2009) の言う評価的用法に相当すると考えられるものだった。さらに用例を集め、この用法と日本語の対応訳の関係を明らかにしたい。

(10) a. Es genügt völlig,
it satisfy.3SG.PRS fully
wenn einige von uns diese Katastrophe überstehen.
if some of us this.ACC catastrophe.ACC overcome.1PL.PRS
b. われわれのうち少数だけがこの破局を生きのびられれば、それで充分だ。

(deM: 258, jpM: 341)

4.3. 調査結果のまとめ

調査結果および先行研究をもとにすると、日本語とドイツ語の条件表現がそれぞれ持つ用法は、今回明らかになった範囲で大まかに以下のように示せるのではないだろうか。

表 5: 日独条件表現の用法別対応

ナラ	バ	タラ	ト		wenn
―	△	△	△	主節の主語や目的語を表す用法	●
●	●	●	―	反事実な事態を表す用法	●
●	●	●	●	仮説的な事態を表す用法	●
―	―	●	―	現実化以前の事態を表す用法	●
―	●	―	●	多回的な事態を表す用法	●
―	△	●	●	現在・未来における一回的な事態を表す用法	●
△	△	△	△	非条件的用法	△
―	△	●	●	過去における一回的な事態を表す用法	―

●: 使用が可能だと考えられるもの
△: 一部使用が可能だと考えられるもの
―: 使用されないと考えられるもの

wenn を伴う条件節が主節の主語や目的語を表す際、今回の調査では日本語の対応訳に条件表現が使われている例が見つかった。得られた例全てが前田 (2009) の言う評価的用法に相当するものだと考えると、タラも現れうるのではないだろうか。

現実化以前の事態は、wenn を用いると不自然という成田 (2015) の主張に反し、wenn が用いられている例が複数得られた。分析の結果、「ドイツ語の対応訳に wenn が現れる」ことが「後件に発話者の意志が現れている」ことの十分条件になっていると予想できる。

一回的な事態は、現在・未来の事態には、日独ともに条件表現が現れた一方、過去における事態には、ドイツ語において wenn は現れず、前置詞句や als など別の語が多く見られた。

非条件的用法は、ドイツ語でも wenn が現れにくいが、一部の表現には、対応訳に wenn が現れうる。「よかったら」「よければ」という表現は、主節の動詞に働きかけのモダリティが現れている際、ドイツ語の対応訳にも wenn が用いられていた。

5. 今後の課題と展望

本稿では、各条件表現の用法の違いにも着目し、日本語とドイツ語における条件表現の対応・非対応を明らかにすることを試みた。今後の課題として、以下の 2 点が挙げられる。①調査 2 において、他の条件形式である falls、定動詞を文頭に置く形式、前置詞句を調査対象に入れられなかった。②調査 1、2 ともに、得られた例文数が少なく、十分に仮説を検証できない用法があった。調査範囲を広げ、より多くの例文数を確保することや、ドイツ語母語話者に協力を仰ぐことで、これらの問題を克服し、日本語とドイツ語における条件表現の体系化をさらに目指したい。

〈略号一覧〉 1: 1 人称 / 2: 2 人称 / 3: 3 人称 / ACC: 対格 / AUX: 助動詞 / DAT: 与格 / DEF: 定 / HON: 敬称 / IMP: 命令 / INF: 不定詞 / NOM: 主格 / PART: 不変化詞 / PL: 複数 / PP: 過去分詞 / PRN: 人称代名詞 / PRS: 現在 / PSN: 人名 / PST: 過去 / REFL: 再帰 / SBJV: 接続法 / SEP: 分離辞 / SG: 単数

〈参考文献〉 前田直子 (2009) 『日本語の複文 ―条件文と原因・理由文の記述的研究―』東京: くろしお出版. / 村上重子 (2003) 『〈ドイツ語文法シリーズ〉6 接続詞』東京: 大学書林. / 成田節 (2015) 「(連用修飾的) 複文 ドイツ語」『語学研究所論集』第 20 号: 63-75. / 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『複文と談話』東京: 岩波書店.

〈調査資料〉 Ende, Michael (1973) *Momo oder Die seltsame Geschichte von den Zeit-Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte*. Stuttgart: Thienemann Verlag. / ミヒャエル, エンデ (1976)『モモ 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子の ふしぎな物語』大島かおり (訳) 東京: 岩波書店. / 村上春樹 (1987) 『ノルウェイの森』東京: 講談社. / Murakami, Haruki (2001) *Naokos Lächeln nur eine Liebesgeschichte*. Ursula Gräfe (tr.). Köln: DuMont Buchverlag.

日本語・ヒンディー語のオノマトペの音象徴対照
―日本語で「キラキラ」な星はヒンディー語でも「キラキラ」なのか―

早田　仁知
（言語文化学部 ヒンディー語専攻）

キーワード：ヒンディー語，音象徴，オノマトペ，イデオフォン

0. はじめに

ヒンディー語[1]には、日本語と同様に、オノマトペが豊富に存在する。日本語のオノマトペの音象徴については、Hamano (1986) などが詳細に記述している一方で、ヒンディー語のオノマトペの音象徴についてはほとんど記述がない。本稿の目的は、日本語のオノマトペと対照して、ヒンディー語のオノマトペの音象徴を明らかにすることである。

1. 背景知識

1.1.「音象徴」について

本稿では、村上 (1983) と同様に、Jespersen (1922) の音象徴の記述を暫定的な音象徴の定義とする。以下の表 1 に、村上 (1983: 114) が定義に用いている、Jespersen (1922) による音象徴の 6 項目の場合分けとそれぞれの項目の実例を、筆者がまとめた。

表 1: 村上 (1983: 114) による Jespersen (1922) の音象徴の記述部分の要約

項目	説明	実例
1) 直接模倣	音を直接に模倣する最も簡単な場合。	金属音の clink, clank, ting, tinkle
2) 音の創造	何度も繰り返される音から言葉が形成される場合。	横浜でイギリスかアメリカの水兵を指すダムライス人 (“Damn your eyes” から)
3) 運動の記述	特定の運動にいつも伴う音があるとき、その音によって運動が表現される場合。	bubble, splash, clash, crack, peck など
4) 事物と外観への拡張	象徴的命名を事物に拡張する場合。事物と音との間に多少連想関係がある。	英語では母音 /i/ が明るいこと (e.g. gleam)、/u/ は暗いこと (e.g. gloom) を指す。
5) 心の状態の記述	運動の記述で用いられた言葉が心の状態を表す言葉へ意味を変化させた場合。	嫌悪や軽蔑を象徴的に表す、鈍い高母音で表される blunder, clumsy, humdrum など
6) 大小と距離の表現	——	母音 /i/ が小さい、弱い、不明瞭な、あるいは上品なものを象徴する (e.g. little, petit, piccolo, piccino)。

(村上 (1983: 114) を基に筆者作成)

[1] 本稿で用いたヒンディー語のローマ字転写を簡易的に説明すると、“h” が付かない閉鎖・破擦音 (e.g. k, c, p) は無気音、“h” が付く閉鎖・破擦音 (e.g. kh, ch, ph) は有気音を表す。下に点が付く子音 (e.g. ṭ, ḍ) はそり舌音を表す。長母音は上に付した “–” で (e.g. ā, ī)、鼻母音は上に付した “~” で (e.g. ã, ĩ) 表す。

1.2. ヒンディー語のオノマトペについて

Diatka (2014) では、ヒンディー語のオノマトペの重複パターンをまとめている (表 2)。

表 2: Diatka (2014) によるヒンディー語のオノマトペの重複パターン

重複の種類	重複パターン[2]	具体例	具体例の意味
完全重複 (Full reduplication)	AA	sarsar	シューという音
	AXA	sarāsar	完全に
	AAY	caṛbaṛiyā[3]	おしゃべり
部分重複 (Partial reduplication)	ABCB	lathpath	びしょ濡れの
	ABCBY	kulbulāhaṭ	うごめき

(Diatka (2014: 21-22) を基に筆者作成)

2. 先行研究：Hamano (1986)

Hamano (1986) では、日本語の 1 音節のオノマトペにおいて、語頭子音と描写物の特徴には表 3 のような相互関係があると述べている。

表 3: 1 音節のオノマトペの語頭子音と描写物の特徴の相互関係

語頭子音	描写物の特徴①	描写物の特徴②	描写物の特徴③
p	突然の動き	張っている面/線	軽い/小さい/目が細かい
b			重い/大きい/目が粗い
t		緩んでいる面	軽い/小さい/目が細かい
d			重い/大きい/目が粗い
k		硬い面	軽い/小さい/目が細かい
g			重い/大きい/目が粗い
s	なめらかな/滑るような動き		軽い/小さい/目が細かい
z			重い/大きい/目が粗い
h	息音		
m, n	抑止/曖昧さ		
w, ∅, y	人間や動物の声		

(Hamano (1986: 127) を基に筆者作成)

日本語の 2 音節のオノマトペにおいては、$C_1V_1C_2V_2$ と表すとき、それぞれの構成音と描写物の特徴には表 4・表 5 のような相互関係があると述べている。

[2] 重複パターンの英大文字の説明は以下の通りである：A は任意の長さの重複する部分。X は重複の間に挿入される要素 (大部分は ā)。Y は重複の後に付加される接尾辞。B は部分重複における重複の同じ部分。C は部分重複における交替子音。

[3] 部分重複の ABCBY のパターンに見えるが、Diatka (2014: 21) では AAY のパターンに分類されている。

表 4: 2 音節のオノマトペの構成子音と描写物の特徴の相互関係

音節頭子音	C_1		C_2
	描写物の触感	描写物の大きさ/量	描写物の動態の種類
p	壊れやすく張った面	軽い/小さい/目が細かい	爆発、破壊、決断
b		重い/大きい/目が粗い	
t	緩さ	軽い/小さい/目が細かい	面への打撃
d		重い/大きい/目が粗い	
k	硬い面	軽い/小さい/目が細かい	開ける動作、崩壊、膨張、拡張、内側からの排出
g		重い/大きい/目が粗い	
h	弱さ、柔らかさ、頼りなさ、不確定さ		
s	粘り気のない物体、静かさ	軽い/小さい/目が細かい	柔らかな接触、摩擦
z		重い/大きい/目が粗い	
m	濁り・薄暗さ		?
n	粘り気、ぬめり気、鈍さ		屈曲、弾力、頼りなさ、弱さ
w	人間の声、感情の起伏		柔らかさ、脱力感、かすんでいる様子
y	ゆったりとした動き、揺れるような動き、不安定な動き		多方からの音、かすんでいる様子、子供っぽさ
r			回転、流れ

(Hamano (1986: 225-226) を基に筆者作成)

表 5: 2 音節のオノマトペの構成母音と描写物の特徴の相互関係

母音	V_1	V_2
	描写物の形	描写物の形・大きさ
i	線形	+張り、+小ささ、-大きさ、-突起
e	不適当さ	不適当さ
a	平面	-張り、-小ささ、+大きさ、-突起
o	丸い物	-張り、-小ささ、+大きさ、-突起
u	突起物	-張り、+小ささ、-大きさ、+突起

(Hamano (1986: 226) を基に筆者作成)

3. 先行研究のまとめと問題提起

ヒンディー語のオノマトペを扱った先行研究は、Diatka (2014) と、Dey and Prasad (2015) があるが、Diatka (2014) は、ヒンディー語のオノマトペの形態的・統語的特徴を記述したもの、Dey and Prasad (2015) は、ヒンディー語のオノマトペが、漫画においてどのような色・

形・デザインで描かれるかについて記述したものであり、音象徴について詳細に記述されたものではない。そのため、ヒンディー語のオノマトペの音象徴の特徴を、今までに記述されている日本語のオノマトペの音象徴と対照して検討することを本稿の目的とする。

4. 調査

4.1. 調査方法

本稿の調査[4]で取り扱うオノマトペは、Diatka (2014: 57-76) が挙げるヒンディー語のオノマトペのうち、Diatka (2014) がまとめた重複パターン (表 2) に合う計 493 個である。これらの抽出したオノマトペについて、Diatka (2014) に記述されている意味に基づいて、子音による特徴・母音による特徴の分析を行う。

4.2. 調査結果

今回調査したオノマトペに見られた音節頭子音 (C_1)・音節末子音 (C_κ)・母音 (V_1)・echo formation の交替子音 ($C_{\underline{1}}$') の種類と数は、それぞれ以下の図 1 〜 図 4 の通りである[5]。

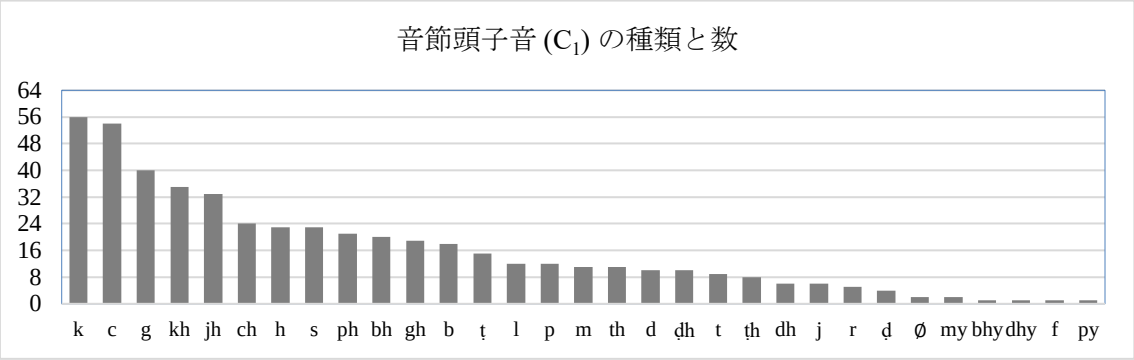


図 1: 音節頭子音 (C_1) の種類と数

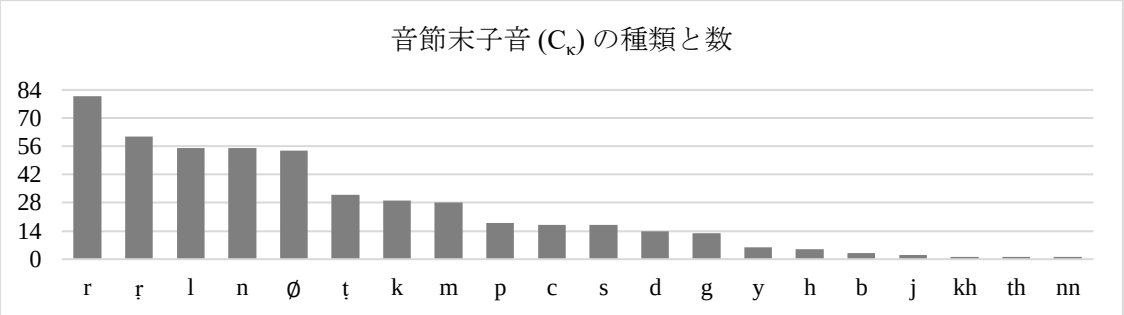


図 2: 音節末子音 (C_κ) の種類と数

[4] 本稿では割愛したが、この調査を行う前に予備調査を行なっており、ヒンディー語のオノマトペに音象徴自体がある、ということは既に実証している。

[5] Diatka (2014) に基づく重複パターンごとの数・音節構造パターンごとの数・C_1-$C_{\underline{1}}$'ペアごとの数・C_1-C_κ ペアごとの数は、紙幅の都合上、本稿では割愛する。

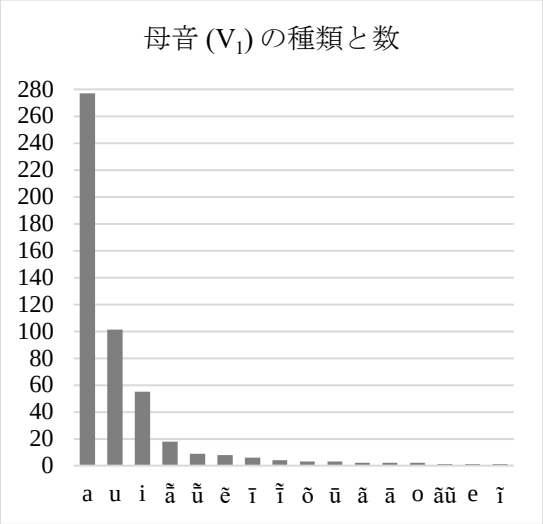


図 3: 母音 (V_1) の種類と数

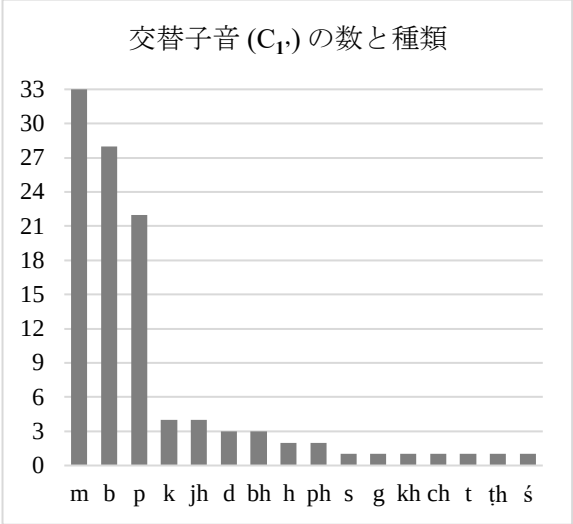


図 4: 交替子音 ($C_{\underline{1}}$) の種類と数

4.3. 調査結果の分析・考察

音節頭子音 (C_1) と音節末子音 (C_K) に基づいたヒンディー語のオノマトペの分析結果を、以下の表 6 にまとめる。

表 6: ヒンディー語のオノマトペの音節頭子音 (C_1)・音節末子音 (C_K) の音象徴

	音節頭 (C_1)	例	音節末 (C_K)	例
k	①硬い様子・乾燥している様子・粗い様子 ②音量の大きい声	karkarā, kiṭkiṭ	①輝き ②恐怖を感じる様子	taṛakbhaṛak, jhakājhak, dhakdhak
kh	①ベルや鐘が鳴る音 ②不均一である様子 ③ささやき声	khankhanānā khurkhurā	(データ不足)	
g	①轟音 ②感情に震える様子	gaṛgaṛ, gudgudī	?[6]	
gh	①騒音・打撃音・轟音 ②金属などの衝突音	ghamāgham, ghanghanānā		
c	①乾いた衝撃音 ②痛みや辛味	caṭcaṭ, culculānā	過密な様子	ghicpic
ch	①輝き・金属などの衝突音 ②水の音	chanchan, chapchap		
j	輝き	jagmagā	(データ不足)	
jh	輝き・金属などの衝突音	jhaljhal		

(次ページに続く)

[6] 「?」は、データの数は十分であるが特徴や傾向が分からなかったことを示す。

表 6 (続き): ヒンディー語のオノマトペの音節頭子音 (C_1)・音節末子音 (C_K) の音象徴

	音節頭 (C_1)	例	音節末 (C_K)	例
ṭ	?		①震える様子・混乱する様子 ②素早い様子	khaṭkhaṭānā, paṭāpaṭ
ṭh	金属などの衝突音	ṭhanṭhan		
ḍ	太鼓の音	ḍugḍugī		
ḍh	重い物質の落下音・足踏みの音・ 太鼓の音	ḍhamḍham		
t	?			
th	①震える様子 ②たるんでいる様子	thartharānā	(データ不足)	
d	①恐怖や不安を感じる様子 ②液体が泥状である様子	dugdug, daldalā	?	
dh	①恐怖を感じている様子 ②鼓動の音	dhakdhakī		
n			①金属などの衝突音 ②低い小さな音	chanchan, runjhun
p	柔らかい様子・たるんでいる様子	pulpulā	軽くたたく音	thupthupī
ph	①はためく様子 ②空気が出るような音	pharphar, phu̐phu̐		
b	つぶやき声・うめき声・ おしゃべりな様子	bakbak, budbudānā	(データ不足)	
bh	①虫の羽音・不明瞭な声 ②燃えている・焦げている様子	bhinbhināhaṭ, bhakbhak		
m	香りが漂う様子	mahmah	輝き・金属などの衝突音	ṭimṭimānā
y			人間や動物の出す声	ṭa̐yṭa̐y
r	泣いている声・耳障りな声	rĕrĕ	(単に語がオノマトペであることを示す)	karkarā, sarsarī, thartharānā
l	①粘り気がある様子 ②痩せ細った様子	lijlijā, laslasā laglag	①柔らかい様子・たるんでいる様子 ②水の運動 ③落ち着きのない様子	gulgulā, gilbilā, chalchal
w			人間や動物の出す声	ka̐wka̐w
s	素早い様子	saṭāsaṭ	ささやき声	kuskusānā
h	(ほとんどが echo formation)	haṛbaṛ	①色が濃い様子 ②香りが漂う様子	cuhcuhā
ṛ			①騒音 ②亀裂が入る音 ③うめき声・つぶやき声	gaṛgaṛ, taṛtaṛ, baṛbaṛānā
∅	?		人間や動物の出す声	hi̐hi̐, cu̐cu̐

音節頭子音 (C_1) の音象徴に関しては以下のようにまとめる。

/c/ を除く硬口蓋破擦音 /ch, j, jh/ に共通して、輝く様子を表すという特徴が見られた。

/ṭ/ を除くそり舌閉鎖音 /ṭh, ḍ, ḍh/ は衝突音や打撃音を表す傾向があることがわかった。Hamano (1986) は、日本語のオノマトペにおいて、面に対する打撃音のような音象徴を持っているのは 2 音節のオノマトペ ($C_1V_1C_2V_2$) の C_2 に位置する /t/ であると述べており、この点では、ヒンディー語のそり舌閉鎖音と日本語の /t/ のもつ音象徴は類似している。一方で、Hamano (1986) は、日本語のオノマトペにおいて緩い様子を表すのは、1 音節のオノマトペの語頭子音 /t, d/ と、2 音節のオノマトペ ($C_1V_1C_2V_2$) の C_1 に位置する /t, d/ であると述べているが、ヒンディー語においてそれに類似した音象徴を持つのは、たるんでいる様子を表す /th/ や、液体が泥状であることを表す /d/ である。このことから、日本語の /t/ が担っている音象徴を、ヒンディー語では、そり舌閉鎖音と歯裏閉鎖音が分割して担っている。

ヒンディー語の音節頭子音 (C_1) /k/ については、硬い様子を表すという点が、Hamano (1986) が記述する日本語の 1 音節のオノマトペの語頭子音 /k/ や、2 音節のオノマトペ ($C_1V_1C_2V_2$) の C_1 に位置する /k/ の特徴と一致している。その一方、ヒンディー語の音節頭子音 (C_1) /p/ はたるんでいる様子を表すが、これは Hamano (1986) の記述する、日本語の 1 音節のオノマトペの語頭子音 /p/ や、2 音節のオノマトペ ($C_1V_1C_2V_2$) の C_1 に位置する /p/ が壊れやすく張った様子を表すという特徴とは異なる。

音節末子音 (C_K) に関しては、/n/ と /m/ という鼻音に共通して、金属などの衝突音を表している。これはヒンディー語における音節末の鼻音が一つの音象徴を成していると考えることができる。/∅ (母音)/ や、/y, w/ の半母音には共通して、人間や動物が出す声を表すという特徴が見られた。これは Hamano (1986) が記述した日本語の 1 音節のオノマトペの語頭子音 /w, ∅, y/ が表す描写物の特徴とほぼ一致している。

音節末子音 (C_K) に共鳴音 (/n, m, y, r, l, w, ɾ, ∅/) の数が多いことも特筆すべきことである。Gordon et al. (2008) では、50,822 個のヒンディー語の CVC という音節の音節末子音について調査を行い、そのうち 23,297 個 (約 45.8%) が共鳴音、27,525 個 (約 54.1%) が阻害音であるという調査結果を出した。それに対し、今回本調査で取り扱った 493 個のオノマトペのうち、音節末子音 (C_K) が共鳴音であるものが 341 個 (約 69.2%)、それ以外の阻害音が 152 個 (約 30.8%) と、Gordon et al. (2008) の調査とは異なり、共鳴音の数が阻害音の数を大きく上回っている。このことから、特にヒンディー語のオノマトペの音節末子音 (C_K) には共鳴音が立ちやすくなると考えられる。

表 7: 母音 (V_1) に基づくヒンディー語のオノマトペの分析結果

	母音 (V_1)	例
a	音量の大きな音	ghamāgham, kaṛkaṛ
i	湿っている様子・困惑している様子・不快に感じている様子	rimchim, ciṛciṛā
u	小さな運動を続けて行うような落ち着きのない様子・柔らかい様子	bhunbhunānā, gulgulā

母音に関して (表 7) は、Hamano (1986) で述べられている日本語のオノマトペと同様に、/a/ が大きい様子、/u/ が小さい様子を表す。特に、/u/ に関しては、柔らかい様子を表す場合もあるが、Hamano (1986) では、日本語で 2 音節のオノマトペ ($C_1V_1C_2V_2$) の V_2 に位置する /a/・/o/・/u/ が張りのない様子を表すとしている。そのため、/u/ のみが柔らかい様子を表すという今回の結果は、ヒンディー語固有の特徴であると考えられる。/i/ に関しては、金 (2021) で述べられている日本語のオノマトペと同様に、不快感や湿っている様子を表すこともわかった。

echo formation が起こっているオノマトペでは、echo formation 自体が音象徴であると考えられ、音節頭子音 (C_1) が特徴付ける意味とは異なり、急ぐ様子や落ち着きのない様子、乱れている様子を表す傾向があることがわかった。

5. 今後の課題とまとめ

本稿では、これまで記述のなかったヒンディー語のオノマトペの音象徴について、様々な特徴や傾向の記述を試みた。しかし、今回の調査では特徴が分からなかったオノマトペの構成音もあり、多くの問題点が残った。今後は、SD 法[7]を用いたヒンディー語母語話者対象のアンケート調査などを通して、分析結果の精度を高める必要がある。

最後に、日本語で「キラキラ」な星は、ヒンディー語では “chanchan, jhamjham” な星になる[8]。

［参考文献］ Abbi, A. (2018) Echo formations and expressives in South Asian languages. In: Aina Urdze (eds.) *Non-prototypical reduplication,* 22: 1-34. Boston: De Gruyter Mouton. / Dey, S. and Prasad Bokil (2015) Sound Symbolism in India Comic Books. In: Amaresh Chakrabarti (eds.) *ICoRD'15 – Research into Design Across Boundaries,* 1: 227-236. New Delhi: Springer. / Diatka, V. (2014) Hindi ideophones. MA thesis. Karlova Univerzita. / Gordon, M., Carmen Jany, Carlos Nash and Nobutaka Takara (2008) Vowel and consonant sonority and coda weight: A cross-linguistic study. In: Charles B. Chang and Hannah J. Haynie (eds.) *WCCFL: Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics,* 26: 208-216. / Hamano, S. (1986) The Sound-Symbolic System of Japanese, Ph.D. dissertation. University of Florida. / Jespersen, O. (1922) *Language: Its nature development and origin,* London: George Allen & Unwin Ltd. (筆者未見) / 金敬玲 (2021)「『水・液体に関する』オノマトペの音象徴研究：音の組み合わせの観点から」『國學院大學大学院紀要：文学研究科』52: 39-60. 東京: 國學院大學大学院. / 村上宣寛 (1983)「音の象徴性について」『富山大学教育学部紀要. A, 文科系』33: 81-92. 富山: 富山大学教育学部. / 仲地加奈 (2007)「ヒンディー語の echo formation」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』3: 171-178. 東京: 東京外国語大学. ［参考辞書］ 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』東京: 大修館書店. ［調査資料］ Diatka, V. (2014) Hindi ideophones. MA thesis. Praha: Karlova Univerzita.

[7] 「硬い vs. 柔らかい」や「強い vs. 弱い」などの反対の意味を持つ 2 つの形容詞 (形容動詞) 対を用いて、5 段階や 7 段階などの尺度で回答させる方法のこと。

[8] C_1＝硬口蓋音 (/c/ 以外)、V_1＝/a/、C_K＝鼻音が構成要素であるオノマトペ。

広東語における “VV 吓” と共起する動詞及び言い換え可能な構造

津野　華穂
（言語文化学部　中国語専攻）

キーワード：広東語，アスペクト，コーパス調査，アンケート調査，吓

0. はじめに

本稿は、広東語における “VV 吓” と共起する動詞及び、これと言い換え可能な構造について論じることを目的とする。筆者は言語形成期に香港で生活していた、広東語の話者である。なお、本文中の図表番号、例文番号、グロス、日本語訳、文字飾りなどは特に断りのない限り筆者によるものである。 “吓” は本稿の研究対象そのものであるため、HA というグロスにする。広東語のローマ字表記はイェール式を用いる。先行研究で他のローマ字表記が使用されている場合もイェール式にすべて統一する。

1. アスペクトマーカー “吓” に関する背景知識

Matthews and Yip (2011: 239) は、アスペクトマーカー “吓” は「しばらく～する」「ちょっと～する」という意味を持っていると述べている (1)。

(1) 我　好　　劫　　呀，　想　　休息　　吓。
　　ngo5 hou2　gui6　a3　　seung2 yau1sik1 ha5
　　1SG　とても 疲れた PART　したい 休憩　　HA
　　「ああ、とても疲れたよ、ちょっと休みたい。」
　　(Matthews and Yip 2011: 239)

2. 先行研究

2.1. 朱 (2010)[1]

朱 (2010) は、1841 年～1941 年の広東語の教科書及び辞書 11 点を調査した。これを踏まえて “VV 吓” について、朱 (2010: 152-153) は「進行中の動作に予期せぬ変化が生じ、元の動作からの変化」(2) を示すと述べている。

(2) 車　　行行吓　　就　　停
　　che1　haang4~haang4-ha5　jau6　ting4
　　車　　進む~進む-HA　　まさに　止まる
　　「車は進んでいたら止まった」　(Wells 1941: 179)

[1]朱 (2010) 及び後述する彭 (2000) では、 “吓” を “下” と表記していたが、本稿では統一して “吓” を使用する。

朱 (2010) は “VV 吓” と “V 吓 V 吓” は意味に違いがあるため、言い換えはできないという。同様に、“VV 吓” と “V 吓 V 吓” は “V 一吓”、“V 吓”、“V 一 V”、“VV” とは意味において明らかな違いがあり、言い換えはできないという。

2.2. 彭 (2000)

彭 (2000) は、“VV 吓” を 2 種類に分類できると考える。以下、彭 (2000) が述べる 2 種類の “VV 吓” (“VV 吓$_1$”と “VV 吓$_2$”) についてまとめる。

2.2.1. “VV 吓$_1$”

彭 (2000: 420) によると、単音節動詞または動賓型複合語[2] の前に動詞が重複し、“吓” と組み合わせて “VV 吓$_1$” の構造を形成する。彭 (2000: 420) では、この構造は、文の前半部分で頻繁に現れ、意味の重点は後半部分にあり、具体的には、次の 2 つの用法に分けられると言う。①文全体である行動や状況が一定期間持続し、新しい状況や変化が生じたことを示す用法 (“VV 吓$_1$” 用法①、(3)) 、②行動が進行中のときに新しい状況が生じたことを表す用法 (“VV 吓$_1$” 用法②) 。 “VV 吓$_1$” 用法②の例文は (2) を参照されたい。①の複文は前節と後節で前後関係を表しているが、②は①と異なり、複文の前節と後節は同じ時点で起きているため、前節と後節の内容を入れ替えが可能である (彭 2000: 420) 。

(3) 佢　嚟嚟吓　又　唔　嚟　喇。
keui5　lai4~lai4-ha5　yau6　m4　lai4　la3
3SG　来る~来る-HA　また　NEG　来る　PART
「彼はしばらく来ていたが、また来なくなった。」

(彭 2000: 420)

2.2.2. “VV 吓$_2$”

彭 (2000: 421) によると、単音節動詞が重複し “吓” と組み合わせて “VV 吓$_2$” を形成するという。この構造は一般的に述語として文中に現れるか、連動文の後半部に位置して動作や状態の反復を表し、具体的には、①動作や状態を描写する用法 (4) と②一定期間持続し、「気兼ねのないこと」と「試み」を表す用法がある (5) という (彭 2000: 421) 。

(4) 你　睇，啲　彩燈　閃閃吓，　幾　靚　啊！
nei5　tai2　di1　choi2dang1　sim2~sim2-ha5　gei2　leng3　a1
2SG　見る　CL　イルミネーション　光る~光る-HA　かなり　きれい　PART
「見て、イルミネーションが光っていて、とてもきれいだね。」

(彭 2000: 422)

[2] 大茂 (2018: 35) によると、動賓型複合語は離合詞であり、前音節語幹は動詞、後音節語幹はその賓語 (目的語) となる名詞を取る。

(5) 其實　由　頭　至　尾　都係　客串　玩玩吓
kei4sat6 yau4 tau4 ji3 mei5 dou1hai6 haak3chyun3 waan2~waan2 ha5
実は　から 最初 まで 最後 やはり 特別出演 遊ぶ~遊ぶ-HA
「実は最初から最後まで特別出演のゲストとして遊んでいただけだ。」
(彭 2000: 422)

3. 問題提起

朱 (2010) は、“VV 吓” と “V 吓 V 吓” はともに継続を表すものの、“VV 吓” は動作の進行中に変化が生じたことも示し、両構造は意味に違いがあるため、言い換えはできないと言う。一方、彭 (2000) は、“VV 吓” を “VV 吓$_1$” と “VV 吓$_2$” の用法に分け、いずれも “V 吓 V 吓” に言い換え可能だと述べている。朱 (2010) と彭 (2000) の主張は矛盾しているため、さらなる調査を行い、主張の矛盾を解明する必要があると考える。彭 (2000) と朱 (2010) でも、彭 (2000) の “VV 吓$_1$” 用法①に相当する用法があるとしているが、動詞共起制約については触れていない。したがって、本研究で調査する事項は、以下 2 点とする。(i) “VV 吓$_1$” 用法①と共起する動詞の分類。(ii) すべての “V 吓 V 吓” が “VV 吓$_1$” に言い換えられるかどうかについての評価。

4. 調査 I：“VV 吓$_1$” と共起する動詞の分類についてのコーパス調査

4.1. 調査方法

コーパス検索ツール Sketch Engine の中にある広東語のコーパス Cantonese Web (Cantonese WaC) を用いてコーパス調査を行った。Sketch Engine とは、Lexical Computing 社の Adam Kilgarriff によって、2003 年に開発した言葉の働きを調査するためのツールである。Cantonese WaC では 30,898,663 語が収録されている。検索では CQL 機能を使用し、“吓” の前に任意の文字列が来るよう [][word=""吓""] で検索した結果、 2347 件が表示された。検索結果を Google スプレッドシートに貼り付け、手作業で “VV 吓” の構造に当たる例文を抽出した。なお、重複の文例と普通話の「驚く」を表す “吓 xià” の文例を除外して 1429 件の文例を収集した。コーパスの文例で簡体字表記のものはそのまま簡体字で表記する。

動詞と “吓” の共起傾向やそこで “吓” が表す意味は、共起する動詞のアスペクトによって違いがあることが予想される。千島 (2007: 188) にある 5 つのアスペクト (静態、動態、完了、継続、瞬間) と 4 種の状況タイプ (活動、完結/ 変化、達成/ 完成、状態) の組み合わせに基づいた広東語の動詞を分類した 。それぞれの詳しい定義は紙幅の都合上省略しているため、卒業論文本体を参照されたい。

4.2. 調査結果

“VV 吓” にあたる 61 件の文例を得て、24 種類の動詞を収集できた (表 1) 。収集した動詞は千島 (2007: 189-206) が用いた広東語の動詞分類と各動詞の具体例を基に分類する (表 2) 。なお、表 2 ではコーパス調査で得た動詞例が千島 (2007: 189-206) で記載がない場合は、筆者の内省によって判断し分類した。筆者が判断したものには下線を引いている。

表 1: “VV 吓” 構造を取る動詞の検索結果

動詞	文例数
玩 waan2「遊ぶ」	9
行 haang4 「歩く」、食 sik6 「食べる」、瞓 fan3 「寝る」	4
想 seung2 「想う」	3
估 gu2 「予想する」、睇 tai2 「見る」	2
chok[3] 「格好をつける」、按 on3 「押す」、聞 man4 「嗅ぐ」、 坐 cho5 「座る」、刷 chaat3 「擦る」、整 jing2 「作る」、洗 sai2 「洗う」、 等 dang2 「待つ」、望 mong6 「見る」、做 jou6 「する」、扭 nau2 「捻る」 彈 daan6 「はねる」、曬 (+ 太陽)[4] saai3 (+ taai3 yeung4) 「日に当てる」、 諗 nam2 「考える」、跑 paau2 「走る」、闪 sim2 「光る」、飄 piu1 「漂う」	1

表 2: “VV 吓” 構造を取る動詞の分類[5]

分類	下位分類①	下位分類②	動詞	個数 A	割合 A (%)	個数 B	割合 B (%)
状態動詞	関係動詞			0	0.0	0	0.0
	存在動詞			0	0.0		
	空間的配置動詞			0	0.0		
活動動詞	情態動詞	思考動詞	想、估、諗	3	12.5	16	66.7
		感情動詞		0	0.0		
		知覚動詞		0	0.0		
		感覚動詞		0	0.0		
	動作動詞	接触動詞	食、按、等、彈	4	16.7		
		発話・表現動詞		0	0.0		
		認識動詞	睇、聞、望	3	12.5		
		行動動詞	玩、行、洗、跑	4	16.7		
		非意志的動詞	闪、飄	2	8.3		
完結/ 変化動詞	操作・分離動詞		刷、曬、扭	3	12.5	5	20.8
	設置動詞		整、做	2	8.3		
	取引動詞			0	0.0		
達成/ 完成動詞	再帰動詞			0	0.0	3	12.5
	＋意思性自動詞		瞓、chok、坐	3	12.5		
	－意思性自動詞			0	0.0		
			計	24	100.0	24	100.0

4.3. 考察

調査結果から、動詞と “吓” の共起傾向と意味表現は動詞のアスペクトによって異なることが示唆される。全体として、活動動詞の下位分類が最も多く、 “VV 吓” と共起する動詞は 16 例ある。下位分類では、活動動詞の動作動詞が最も “VV 吓” と共起している。活動動詞が “VV 吓” と共起しやすい理由は、活動動詞が継続や動作の進行中の変化を示すアスペ

[3] “chok” は漢字表記なし。広東語の流行語である。
[4] 曬 (＋太陽) は離合詞である。
[5] 個数 A と割合 A は下位分類①②の個数と割合、個数 B と割合 B は大分類の個数と割合を示す。

クトと共起しやすいためであると考察される。同様に、 “VV 吓” は変化のない持続を示すアスペクトと共起しやすい状態動詞と最も共起しにくいと考えられる。

千島 (2007: 189-206) では、各大分類の動詞を 5 つの意味素性で定義している一方、各大分類動詞の中に “VV 吓” と共起しやすいと共起しにくい下位分類がある。これは、千島 (2007: 189-206) が下位分類の基準に触れていないことが考えられる。

5. 調査Ⅱ：“V 吓 V 吓” と “VV 吓$_1$” の言い換えについてのアンケート調査

5.1. 調査方法

調査 I と同様、Sketch Engine における広東語のコーパス Cantonese WaC コーパスで調査した “V 吓 V 吓” の文例を筆者が “VV 吓” の文に言い換える。言い換えたものについて、広東語母語話者に評価してもらう。アンケート調査は Google フォームを使って実施する。筆者が “VV 吓” に言い換えた 17 の文は、インフォーマントに「A) 自分は使う」、「B) 自分は使わないが、他人が使うのを聞く」、「C) 自分は使わないかつ他人が使うのを聞いたことがない」という 3 項目で評価してもらう。各文、A と C を選択した方それぞれに追加の質問を提示した。A を選択した方には、 “V 吓 V 吓” と “VV 吓” のいずれがより適切かを質問し、C を選択した方には、 “V 吓 V 吓” の方がより適切かを質問した。

5.2. 調査結果

5.2.1. コーパス調査結果

コーパス調査では、 “V 吓 V 吓” 構造にあたる文例は 42 件の検索結果を得て、 “V 吓 V 吓” に当てはまる 24 種類の動詞を収集することができた (表 3) 。なお、本節において、千島 (2007) で i) ローマ字表記はあるが、漢字で表記されていない動詞、ii) ローマ字表記と漢字表記が両方ともない動詞は、筆者によって漢字に変換して、*を付けている。

表 3: “V 吓 V 吓” 構造を取る動詞の検索結果

動詞	文例数
行 haang4 「歩く」	8
食 sik6 「食べる」	4
hea he3 「まったりする」	3
揈 fing6 * 「振る」、郁[6] yuk1 「動く」、浮 fau4 「浮く」、玩 waan2 「遊ぶ」、炒 chaau2 「炒める」、蜎 gyun1 「くぐる」、加 ga1 「加える」	2
may 「少しずつ食べる」、扒 an3 * 「貧乏ゆすりをする」、搖 yiu4 「揺らす」、震 jan3 「揺れる」、搓 cho1 「捏ねる」、跳 tiu3 「跳ぶ」、瞓 fan3 「寝る」、入 yap6 「入れる」、派 paai3 「配る」、學 hak6 「学ぶ」、飄 piu1 「漂う」、搞 gaau 「 (何かを) する」、擰 ning2 「ねじる」、反 faan2 「ひっくり返す」	1

“V 吓 V 吓” と “VV 吓” の言い換えは、動詞分類によって違いがあると予想される。そのため、収集した動詞は千島 (2007: 189-206) が用いた広東語の動詞分類と各分類における動

[6] 千島 (2007b: 197) では、 “啷” と表記されている。

詞の具体例を基に分類する。ただし、4 種類の動詞の下位分類を設けた基準が不明確のため、調査Ⅱでは分類基準が明確である大分類で収集した動詞を分類する。24 種類の動詞から、文脈が明確である 17 種類の動詞の文例を抽出して、アンケート調査で用いた。複数の文例がある動詞は、1 文例のみ抽出する。分類した結果は表 5 を参考されたい。

5.2.2. アンケート調査結果

1968 年～2004 年生まれの男女計 19 名の広東語母語話者から回答を得た。

表 4: インフォーマント一覧 (生年順)

性別	生年	出身地	性別	年齢	出身地	性別	年齢	出身地
女	1968	香港	女	2000	香港	男	2002	香港
女	1992	香港	男	2000	中国	女	2002	香港
男	1996	カナダ	女	2000	香港	男	2002	香港
女	1998	香港	女	2000	香港	女	2003	香港
女	1999	香港	男	2001	香港	女	2004	マカオ
女	2000	香港	男	2002	香港	女	2004	香港
女	2000	香港						

5.3. “VV 吓”と“V 吓 V 吓”の言い換えに対する分析

5.3.1. 分析方法

“VV 吓”と “V 吓 V 吓” で言い換えられる可能性が高い動詞 (以下、言い換えができる動詞) は、 “VV 吓” で提示した文に対し、A と回答した人数で判断する[7]。 “VV 吓”と “V 吓 V 吓” で言い換えられる可能性が低い動詞 (以下、言い換えが難しい動詞) は、C と答えた人への追加質問のうち、 “V 吓 V 吓” を取った方がより適切と回答した人数で判断する。

5.3.2. 分析結果

表 5 では、上記の手順を基に分析した “VV 吓” と “V 吓 V 吓” の言い換え結果を動詞の分類ごとにまとめている。なお、表中各動詞の最大値は太字で示している。コーパス調査で得た動詞例が千島 (2007: 189-206) で記載がない場合、筆者の内省によって分類した。筆者が判断したものには下線を引き、漢字で表記できない動詞はそのまま表記している。

表 5: “VV 吓” と “V 吓 V 吓” の言い換えの結果

分類	動詞	選択肢	人数	割合 (%)	分類	動詞	選択肢	人数	割合 (%)
活動動詞	行	VV 吓	**18**	**100.0**	完結変化動詞	加	VV 吓	**18**	**94.7**
		V 吓 V 吓	0	0.0			V 吓 V 吓	1	5.3
	食	VV 吓	**18**	**100.0**		派	VV 吓	**16**	**94.1**
		V 吓 V 吓	0	0.0			V 吓 V 吓	1	5.9

[7] アンケートでは A の回答者にも追加質問があったが、A を選択した時点で “VV 吓” への言い換えが可能と判断できる。

表 5 (続き)

	學	VV 吓	**16**	**94.1**		擰	VV 吓	6	40.0
		V 吓 V 吓	1	5.9			V 吓 V 吓	**9**	**60.0**
	郁	VV 吓	**10**	**62.5**		炒	VV 吓	**6**	**60.0**
		V 吓 V 吓	6	37.5			V 吓 V 吓	4	40.0
	搖	VV 吓	**10**	**62.5**		浮	VV 吓	5	41.7
		V 吓 V 吓	6	37.5			V 吓 V 吓	**7**	**58.3**
	蜎	VV 吓	8	50.0	達成完成動詞	入	VV 吓	**15**	**93.8**
		V 吓 V 吓	8	50.0			V 吓 V 吓	1	6.3
	震	VV 吓	**7**	**58.3**		瞓	VV 吓	6	50.0
		V 吓 V 吓	5	41.7			V 吓 V 吓	6	50.0
	飄	VV 吓	7	50.0		hea	VV 吓	3	20.0
		V 吓 V 吓	7	50.0			V 吓 V 吓	**12**	**80.0**
	may	VV 吓	**7**	**70.0**					
		V 吓 V 吓	3	30.0					

明らかに言い換えができる動詞 (“VV 吓” の割合が 60% より大きい動詞) は 9 件、言い換えが難しい動詞 (“VV 吓” の割合が 40% 以下の動詞) は 2 件、回答が分かれた動詞 (“VV 吓” と “V 吓 V 吓” の割合が 40～60% の動詞) は 6 件という結果を得た。

5.3.3. “VV 吓” と “V 吓 V 吓” の言い換えについて

彭 (2000) の観点に基づき、 “VV 吓” と “V 吓 V 吓” がどの状況でも言い換え可能かを調査する。彭 (2000) の “VV 吓” に関する定義を参考にし、筆者の内省によりアンケート調査の文例における “VV 吓” が “VV 吓$_1$”と “VV 吓$_2$”のいずれの分類に該当するかを考えた。表 5 の結果を踏まえ、 “VV 吓$_1$”が当てはまる動詞は “VV 吓”に言い換え可能であり、一方で “VV 吓$_2$” が当てはまる動詞の中には言い換えが難しいものもあると予想された。この予想に基づき、Google スプレッドシートの CORREL 関数を使用し、 “VV 吓” の分類と “VV 吓”、“V 吓 V 吓” との共起のしやすさの相関関係を調査した。

= CORREL (配列 1, 配列 2) で相関関数を求めた。配列 1 の値は “VV 吓” の分類を表し、“VV 吓$_1$”の場合は 1、 “VV 吓$_2$” の場合は 2 とする。配列 2 の値は言い換えができる動詞、言い換えが難しい動詞、回答が分かれた動詞を表し、言い換えができる動詞は 2、回答が分かれた動詞は 1、言い換えが難しい動詞は 0.5 とする。

相関係数の結果は-0.60 であり、正負の影響を無くすために絶対値を求めたところ、0.60 となった。相関係数 0.60 はやや強い相関を示唆している。したがって、 “VV 吓” と “V 吓 V 吓” 構造の言い換えは、彭 (2000) の主張とは矛盾し、具体的には “VV 吓$_1$” と “VV 吓$_2$” の用法によって影響されることが明らかになった。この結果は、彭 (2000) の “VV 吓$_1$” と “VV 吓$_2$”のいずれも “V 吓 V 吓” に言い換えられるという主張、朱 (2010) が言う “VV 吓”と “V 吓 V 吓” の言い換えはできないという主張と異なる結果である。

5.4. 考察

アンケート調査で、“VV 吓”に言い換え可能だが、“V 吓 V 吓” がより適切とされる動詞もあると考察できる。言い換え可能な動詞のうち、最も多いのは活動動詞で、その中でコーパス調査とアンケート調査の両方で現れた動詞は“食”、“行”と“飘 (飄) ”の 3 つである。特に、“食” と “行” は 100% “VV 吓” に言い換え可能だという結果を得た。

アンケート調査の分析では、“V 吓 V 吓” 構造を取る 17 種類の動詞のうち、“VV 吓$_1$” に当てはまる動詞は “VV 吓” に言い換え可能で、一方で “VV 吓$_2$” の用法が当てはまる動詞の中には言い換えが難しいものもあることは明らかである。活動動詞は特に “VV 吓” に言い換えができるという仮説が立てられる。

6. 今後の課題

本研究を通じて 2 点を明らかにした。①動詞と “吓” の共起傾向や表す意味は、動詞のアスペクトによって異なり、“VV 吓” は千島 (2007: 189-206) が指摘する活動動詞と最も共起すること。② “V 吓 V 吓” を取る動詞のうち、“VV 吓$_1$” に該当する動詞は “VV 吓” に言い換え可能で、一方で “VV 吓$_2$” に該当する動詞の中には、言い換えが難しいものも存在すること。結論として、“VV 吓” と “V 吓 V 吓” の言い換えは “VV 吓$_1$” に該当する動詞で最も頻繁に起きることを導き出した。

今後の課題について述べる。調査Ⅰでは千島 (2007: 189-206) の細かい動詞分類基準が不明確であるため、下位分類の分類基準が明らかである分類を用いて分析する必要がある。調査Ⅰでは対象となる動詞が 24 例にとどまっていたため、より多くの “VV 吓” を取る動詞を収集することで、共起制約に関するより詳細な考察が可能と考えられる。調査Ⅱではアンケート回答者の年齢層が狭く、動詞の分析数が限られていたことが課題である。今後は年齢層を広げ、より多くの動詞を分析することで、より正確な結果が得られると期待される。

略号一覧

-: 接辞境界/ ~: 重複境界 / 1: 一人称 / 2: 二人称 / 3: 三人称 / CL: 類別詞 / HA: アスペクトマーカー“吓” / NEG: 否定 / PART: 小辞 / SG: 単数

参考文献

千島英一 (2007) 「香港広東語の研究　—語彙と言語文化を中心に—」『金沢大学大学院社会環境研究科博士論文』1-511. 金沢: 金沢大学. / 朱元 (2010) 「粤語 (廣州話) “V 下”、“VV 下”與“V 下 V 下”形式關係探討」*the 22nd North American Conference on Chinese Linguistics (NACCL-22) & the 18th International Conference on Chinese Linguistics (IACL-18)*. 2: 145-162. Cambridge, MA, Harvard University. / Matthews, Stephen and Virginia Yip (2011) *Cantonese: A comprehensive grammar*. Second edition. London: Routledge. / Wells, H. R. (1941) *Cantonese for Everyone*. Hong Kong: International Commercial Printing Press. (筆者未見) / 大茂利充 (2018) 『日・英・中　三方攻読　中国語文法ワールド　改訂版』東京: 朝日出版社. / 彭小川 (2000) 「廣州話の “VV 下” 與 “V 下 V 下”」『第 7 屆國際粵方言研討會論文集: 方言增刊』. 420-424. 北京: 商務印書館.

調査資料

Sketch Engine https://auth.sketchengine.eu/#login [2023 年 9 月 17 日最終アクセス].

ウチナーヤマトゥグチにおける程度表現

照喜名　ももこ
（言語文化学部　中国語専攻）

キーワード：ウチナーヤマトゥグチ，程度表現，若者言葉

0. はじめに

本稿では、若年層の話すウチナーヤマトゥグチについて、新しい単語が生まれやすいと言われる程度表現を対象にその使用実態を調査する。扱う程度表現は、「とても」、「非常に」、「たいへん」のような、程度を強調する機能を持つ程度副詞、及びそれに相当する他品詞の程度副詞的用法である。なお、例文番号、図表番号、下線部は特に断りのない限り筆者によるものである。調査におけるウチナーヤマトゥグチの表記にはカタカナを用いる。

1. 背景知識

本稿ではロング (2010) に従い、ウチナーヤマトゥグチを「伝統的な沖縄語 (琉球語の沖縄本島諸方言) と標準日本語との接触によって誕生した言語体系 (ロング 2010: 1)」と定義する。高江洲 (2002) によれば、沖縄には標準語教育の導入期に西日本方言から流れ込んだ言葉が定着したものがある。本稿では、定着した九州方言やその他の地域の方言もウチナーヤマトゥグチの特徴の 1 つとして捉えることとする。

2. 先行研究

2.1. 標準語の程度表現に関する先行研究

2.1.1. 工藤（2000）

工藤 (2000) は、程度副詞と共起する品詞には形容詞・形容動詞 (i)、情態副詞・連体詞の一部 (ii)、状態性の動詞 (句) (iii)、相対的広がりをもつ時間・空間の体言 (iv) があるという。

(i) たいへん楽しい。　(ii) とてもはっきりいう。　(iii) たいへん疲れた。　(iv) ずっと昔。

2.1.2. 佐野（1997）

佐野 (1997) は、程度副詞と共起する名詞には、相対的広がりを持つ時空間の名詞 (v)、数量を表す名詞 (vi)、形容詞的要素を前項とし、且つ句を包摂しうる接辞的要素を後項とする名詞 (vii)、属性を表すなど、形容詞的な特徴を持つ名詞 (viii) があると述べている。

(v) かなり上だ。　(vi) かなり大勢だ。　(vii) かなり新型。　(viii) かなり努力家だ。

2.1.3. 佐野（1998）

佐野 (1998) は、主体変化動詞を変化の進展性の有無と、進展性の限界の有無を基準に分類し、それらとの共起関係から程度副詞を「だいぶ」類と「非常に」類に分類している。進展性とは、進展的・漸次的に進んでいくことを意味しているという。佐野 (1998) は、変化に進展性を伴わない「[-進展的変化] 動詞句」は、全ての程度副詞と共起しないと述べている。変化に進展性を伴う「[+進展的変化] 動詞句」は、進展性に限界を持つ「[+限界/進展的変化] 動詞句」と進展性に限界を持たない「[-限界/進展的変化] 動詞句」に分類され、「非常に」類の程度副詞は「[-限界/進展的変化] 動詞句」のみと共起するという (表 1)。

表 1: 主体変化動詞の分類及び程度副詞との共起関係

	主体変化動詞の例	「だいぶ」類	「非常に」類
[-進展的変化] 動詞句	死ぬ、割れる、生まれる、着る	共起不可	共起不可
[+限界/進展的変化] 動詞句	暮れる、腐る、凍る、枯れる	共起可	共起不可
[-限界/進展的変化] 動詞句	広まる、冷える、老ける、太る	共起可	共起可

(佐野 1998 をもとに筆者作成)

2.1.4. 佐野（1999）

佐野 (1999) は、「とても」などの程度副詞と共起する状態性述語として、形容詞、感情・感覚を表す動詞、「名詞+だ」の形式 (佐野 (1997) のいう属性を表すなど、形容詞的な特徴を持つ名詞と一致する) に加え、「～がある」の形式を挙げている。「見込みがある」、「勇気がある」など、その名詞部分は数えることのできない事柄であるという。

2.2. ウチナーヤマトゥグチの程度表現に関する先行研究

2.2.1. 野原（1996）

野原 (1996) は、1991 年～1994 年頃の沖縄県内の小中高生が使用する若者言葉について記述している。尚・佐々木 (2015) によれば、野原 (1996) には全部で 117 語の若者言葉が出現し、収集された 22 語の副詞のうち、16 語は「とても」を意味する程度副詞である。

2.2.2. 尚・佐々木（2015）

尚・佐々木 (2015) は、2011 年～2012 年に沖縄県内の高校生を対象にアンケート調査を実施し、述べ語数 4,077 語、異なり語数 767 語を収集している。野原 (1996) に出現した 16 の程度副詞のうち 1 語を除く全てが確認できたという。程度副詞は標準語とも組み合わせやすいためバリエーションが増加しやすいと述べており、若者が新たに生み出した程度副詞や、沖縄本島諸方言では名詞として使用されているものがウチナーヤマトゥグチでは程度副詞として使用されている例もあるという。

2.2.3. かりまた（2006）

かりまた (2006: 1) は、沖縄や奄美の若い人の言葉には琉球語がいろいろな形で顔を出すといい、その要素には、①琉球語の単語がそのままの形でとりこまれたもの、②琉球語の

形式や意味の影響をつよくうけたもの、③琉球語にも日本語にもなく、琉球語を素材に若い世代がうみだしたものの 3 つがあるとしている。

3. 先行研究のまとめ及び問題提起

標準語の程度副詞に関する研究は、その分類基準が研究者によって異なることから程度副詞として認められる語に揺れがある。複数の程度副詞を調査の対象にしている研究もあれば、特定の程度副詞のみを対象にしている研究もあるため、副詞側と共起する語側の両方の性質を踏まえて共起関係を検討する必要ある。ウチナーヤマトゥグチの程度表現に関する先行研究は、程度表現が出現する例文の数が少なく、その統語的なふるまいに関して十分な考察が行われているものが管見の限り見当たらない。したがって、現在の若年層[1]が話すウチナーヤマトゥグチの程度表現について、①程度表現の使用率と使用する相手、②程度表現と共起する語のタイプ及び品詞、③程度表現が出現する構文の特徴の 3 点を調査し、その使用実態を明らかにする必要があると考えられる。

4. 調査

4.1. 調査 I の調査方法

調査 I ではアンケート調査を行う。沖縄本島南部の中学生 146 名を対象に Google フォームを用いて実施した。アンケート回答者の出生年は 2009 年～2011 年で、性別、出身地は表 2 の示す通りである。「『あの人とてもチュラカーギー (美人) だね。』、『昨日夜ふかししたからとても眠い。』など、「とても」という意味で以下の言葉を使うことがありますか。」という設問を設け、程度表現の使用状況を尋ねた。回答者は、それぞれの程度表現に対して「使う/たまに使う」、「使わないが人が使うのを聞く」、「使わないし聞いたこともない」から 1 つを選択する形式にし、「使う/たまに使う」と回答した人には、その程度表現を使用する相手を尋ねる設問を提示した。調査対象の程度表現は、野原 (1996)、尚・佐々木 (2015) で示された程度表現と筆者の内省を踏まえた以下の 21 語である。

【調査対象の程度表現】デージ/シニ/シニカ/シャニ/シャニカ/シャカニカ/シニカン/ウミチカ/サッコー/アンシ・アンチ/シカ/シッタ/サラ/テーゲー/ヤッケー/シンケン/ジュンニ/イッペー/ジコー/ウスマサ/シタタカ

表 2: アンケート回答者の内訳

性別		男	女	その他	合計
出身地	沖縄県内で生まれ沖縄県内で育った	59	71	3	133
	沖縄県内と沖縄県外のどちらにも住んでいたことがあるが沖縄県内に住んでいた期間の方が長い	7	3	1	11
	沖縄県内と沖縄県外のどちらにも住んでいたことがあるが沖縄県外に住んでいた期間の方が長い	2	0	0	2
合計		68	74	4	146

[1] 尚・佐々木 (2015) の調査対象者と重ならないよう、出生年が 1995 年～2011 年の人を指す。

4.2. 調査Ⅰの結果

「使う/たまに使う」の回答率が最も高かったのは「シニ」の61.6%で、「使わないが人が使うのを聞く」の回答率を合わせると、94.5%に上る。「使う/たまに使う」の回答率が次に高かったのは「デージ」の 27.4%で、「使わないが人が使うのを聞く」の回答率を合わせると、91.8%に上り、「シニ」と大差がない。「使う/たまに使う」の回答率が 3 番目に高かったのは「テーゲー」の 24.7%である。これは、尚・佐々木 (2015) が示すように、沖縄本島諸方言の名詞が副詞的な用法で使用されているものである。図 1 は 21 の程度表現における「使う/たまに使う」の回答率が高いものを上から順に並べたものである。程度表現を使用する相手については、親しい友達や家族など、親しい間柄の人に対して使用する傾向にあり、先生や先輩など目上の人に対しては積極的には使用しないという結果が得られた。

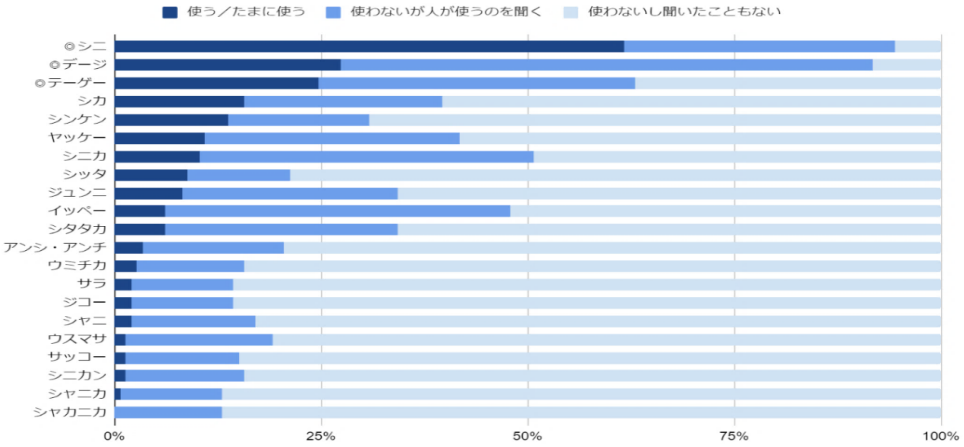


図 1: 程度表現の使用率

4.3. 調査Ⅱの調査方法

調査Ⅱでは談話調査を行う。使用する談話資料はウチナーヤマトゥグチ話者による自然談話で、概要は表 3 の通りである。話者は全員 1995 年以降の生まれで、「沖縄県内で生まれ沖縄県内で育った」或いは、「沖縄県内と沖縄県外のどちらにも住んでいたことがあるが沖縄県内に住んでいた期間の方が長い」のいずれかに該当する。収録が複数回にわたっているものはそれぞれの収録時間を合算した。なお、話者 F は筆者自身であるため、話者 F の程度表現は考察の対象から除くこととする。

表 3: 談話資料の概要

		資料 1	資料 2	資料 3	資料 4	資料 5	資料 6	資料 7
話者	生年・性別	A: 1995 男 B: 1995 男	A: 1995 男 C: 1995 男	D: 1999 男 E: 2000 女 F: 2001 女	G: 1995 女 H: 1995 女	I: 1997 女 J: 2001 女	K: 2000 男 L: 2000 男 M: 2000 男 N: 2000 男 O: 2001 男	E: 2000 女 P: 2000 女 Q: 2000 女 R: 2000 女
収録方法		YouTube	YouTube	電話	YouTube	録音	録音	録音
回数 (回)		1	1	1	16	4	1	9
時間 (分)		16	30	46	87	272	146	784

調査対象の程度表現は調査Ⅰで使用率の高かった「シニ」、「デージ」、「テーゲー」の 3 つである。語のタイプについては、まず、標準語の語彙とウチナーヤマトゥグチに特有の語彙に区別した。ウチナーヤマトゥグチに特有の語彙はさらに、かりまた (2006: 50) の若い人の言葉に顔をだす琉球語の 3 つの要素と高江洲 (2002: 154-155) によるウチナーヤマトゥグチの語彙の分類を参考に、以下の (ア)〜(オ) の 5 つのタイプに分類した。

【ウチナーヤマトゥグチに特有の語彙の 5 つのタイプ】
(ア) 標準語に同じ語形の単語がなく、沖縄本島諸方言の単語を音声的、形態的に標準語に対応させ、沖縄本島諸方言の意味を引き継いだもの
(イ) 標準語にも同じ語形の単語があり (沖縄本島諸方言の単語を音声的、形態的に標準語に対応させたものを含む)、沖縄本島諸方言の意味を引き継いだ部分があるもの
(ウ) 標準語に同じ語形の単語がなく、沖縄本島諸方言を素材に若い世代がうみだしたもの
(エ) 標準語に同じ語形の単語がないが、標準語を素材に若い世代がうみだしたもの
(オ) 他の地域の言語や方言を取り入れたもの

4.4. 調査Ⅱの結果

談話資料には、3 つの程度表現が全て出現し、全部で 122 件の使用が確認できた。程度表現と共起する語の述べ語数は 120 語で、異なり語数は 97 語であった。本節以降、実際の用例を示す際は談話資料の番号 1〜7 と発話者のアルファベット A〜R、該当箇所には上記の語のタイプ (ア)〜(オ) と品詞の分類名称[2]を併記する。例文の標準語訳は筆者の内省により付した。ウチナーヤマトゥグチの程度表現は、「とても」と訳すように統一したが、文が不自然になる場合はニュアンスが近づくようにカッコ書きで訳を付した。

4.4.1. 程度表現と共起する語のタイプ

表 4 の示す通り、「シニ」と「デージ」が出現する文は、標準語の語彙の共起率が高く、「テーゲー」が出現する文はウチナーヤマトゥグチに特有の語彙の共起率が高い。「テーゲー」は、程度強調にネガティブなニュアンスを内包しているため、仲間うちのみで使用するような語彙、すなわちウチナーヤマトゥグチに特有の語彙と共起しやすくなると考えられる。(1)〜(3) はウチナーヤマトゥグチに特有の語彙が共起した例である。

(1) 何でも作れると思われてるのはいいけどさ、シニワジワジーするワケヨ。【7P, (ア)】
「何でも作れると思われてるのはいいけどさ、とても腹が立つの。」

(2) あいつの顔デージコユイからしょっちゅうハーフと間違われてるぜ。【6O, (オ)】
「あいつの顔とても濃いから、しょっちゅうハーフと間違われてるぜ。」

[2] 複数の先行研究によって示されている場合は、出版年の古い先行研究の分類名称で記述することとする。

(3) (過剰に褒めてくる人に対して) テーゲーウシェーテル。【3D, (ア)】
「とても馬鹿にしている。」

表 4: 程度表現と共起する語彙のタイプ

		シニ		デージ		テーゲー		合計[3]
		語数	共起率	語数	共起率	語数	共起率	
標準語の語彙		62 (78)	89.7%	24 (27)	93.1%	1 (1)	25%	86 (106)
ウチナーヤマトゥグチに特有の語彙	(ア)	6 (6)	6.9%	1 (1)	3.4%	3 (3)	75%	8 (10)
	(イ)	1 (2)	2.3%	0	0%	0	0%	1 (2)
	(ウ)	1 (1)	1.1%	0	0%	0	0%	1 (1)
	(エ)	0	0%	0	0%	0	0%	0
	(オ)	0	0%	1 (1)	3.4%	0	0%	1 (1)
	計	8 (9)	10.3%	2 (2)	6.9%	3 (3)	75%	11 (14)
計		70 (87)	100%	26 (29)	100%	4 (4)	100%	97 (120)

4.4.2. 程度表現と共起する語の品詞

表 5 の示すように、品詞別で見るとどの程度表現も形容詞・形容動詞や動詞との共起率が高く、標準語の程度副詞と共通の特徴を持っている。

表 5: 程度表現と共起する語彙の品詞

	シニ		デージ		テーゲー		合計 [3]
	語数	共起率	語数	共起率	語数	共起率	
形容詞・形容動詞	33 (47)	54.0%	11 (12)	41.4%	2 (2)	50%	37 (60)
動詞	25 (28)	32.2%	8 (10)	34.5%	2 (2)	50%	30 (40)
副詞	1 (1)	1.1%	3 (4)	13.8%	0	0	4 (5)
名詞	10 (10)	11.5%	3 (3)	10.3%	0	0	14 (14)
感動詞	1 (1)	1.1%	0	0%	0	0	1 (1)
計	70 (87)	100%	25 (29)	100%	4 (4)	100%	86 (120)

4.4.3. 程度表現が出現する文の特徴

≪動詞が共起する文≫

程度表現と共起する動詞には、工藤 (2000)、佐野 (1999) のいう感情・感覚を表す動詞、佐野 (1998) のいう [-限界/進展的変化] 動詞句、佐野 (1999) のいう「～がある」の形式が確認できた。一方、先行研究の述べる動詞分類のいずれにも属さない動詞もウチナーヤマトゥグチの程度表現とは共起している (4), (5)。さらに、佐野 (1998) が程度副詞とは共起しないと述べる [-進展的変化] 動詞句もウチナーヤマトゥグチの程度表現とは共起している (6)。

(4) バスレーンとか正直知らないサ、レンタカーとかシニ切符切られてるハズヨ。

[3] 収集した全ての語の異なり語数であるため、3 つの程度表現それぞれと共起した語の異なり語数の合計とは異なる。

「バスレーンとか正直知らないじゃん、レンタカーとかとても (=たくさん/たびたび) 切符切られると思うよ。」【6N, 属さない】

(5) (映画を見て) 俺シニ泣いてたヤンニ？
「俺とても (=激しく) 泣いてたよね？」【6N, 属さない】

(6) (ネットワークが不安定な中テレビ電話をして) やばい、シニ止まるね。
「やばい、とても (=頻繁に) 止まるね。」【7E, 佐野 (1998) [-進展的変化] 動詞句】

≪名詞が共起する文≫

程度表現と共起する名詞には、佐野 (1997)、工藤 (2000) のいう相対的広がりを持つ時空間の名詞、佐野 (1997)、佐野 (1999) のいう属性を表すなど、形容詞的な特徴を持つ名詞が確認できた。一方、先行研究の述べる名詞分類のいずれにも属さない名詞もウチナーヤマトゥグチの程度表現とは共起している (7), (8)。

(7) 6N: (炭水化物を食べないようにしているという人に対して) 昼何食ったバ？
「昼何食ったの？」
6L: おにぎりとメロンパン。
「おにぎりとメロンパン。」
6N: は？シニ炭水化物ヤッシ。
「は？とても (=典型的な) 炭水化物じゃん。」【6N, 属さない】

(8) 6N: あっちのソーキ、軟骨まで食べれるサ、
「あっちのソーキ、軟骨まで食べれるじゃん、」
6K: あー、あれ旨いよな。
「あー、あれ旨いよな」
6N: は？お前食ったことあるバ？いつもシニ三枚肉ヤッシ。
「は？お前食ったことあるの？いつもとても (=必ず) 三枚肉じゃん。」【6N, 属さない】

≪感動詞が共起する文および感動詞としての単独用法≫

ウチナーヤマトゥグチの程度表現では、「シニ」と「デージ」が挨拶の感動詞と共起したり (9)、応答の感動詞そのものとして単独で使用されたりすることがある (10)。

(9) シニありがとう。
「とても (=本当に) ありがとう」【7P】

(10) (「○○さんシニ怒ってたよね。」という問いかけに対して) デージ！
「とても (怒ってたね) ！」【6N】

4.4.4. 程度表現の表す意味範疇

「シニ」、「デージ」、「テーゲー」は程度の大きさを表すことが基本的な機能である。しかし、共起する語が程度性を持たない場合、程度の大きさ以外の意味で使用されることがある。例えば、先に挙げた (4) では数量の多さ或いは頻度の高さ、(5) では動作の激しさ、(7) では事物が典型的な姿であること、 (8) では事実の強調、(9) では伝達態度の強調、 (10) では応答の感動詞として相手の問いかけに対する同意や肯定を表している。さらに打ち消しの語を伴い否定を表すこともある。この意味範疇の広さゆえ、共起する語や形式の制限が緩く、標準語の程度副詞とは共起しないものとも共起しやすいと考えられる。

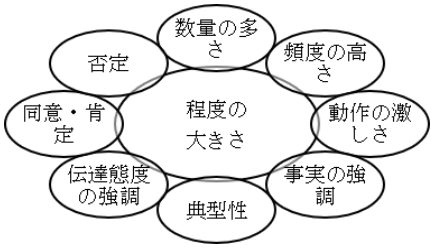


図 2: ウチナーヤマトゥグチの程度表現が表す意味

5. まとめと今後の課題

本稿ではウチナーヤマトゥグチにおける程度表現の使用実態について調査した。調査Ⅰでは「シニ」、「デージ」、「テーゲー」の使用率の高さと、親しい間柄の人に対してよく使用される傾向が示された。調査Ⅱでは、ウチナーヤマトゥグチの程度表現が表す意味範疇が標準語のそれよりも広く、汎用性が高いため、共起する語や形式の制限が緩いことが明らかになった。しかし、程度表現の統語的なふるまいやそれぞれの語の同異をより深く調査するには、さらに多くの例文を収集する必要がある。加えて、その用法が多くの人に容認されているかに関してはアンケートを実施して明らかにする必要がある。

[参考文献] かりまたしげひさ (2006) 「沖縄若者ことば事情」『日本語学』25 (1): 50-59, 東京: 明治書院. / かりまたしげひさ (2010) 「琉球クレオロイドの性格」石原昌英・喜納育江・山城新 (編) 『沖縄・ハワイコンタクト・ゾーンとしての島嶼』31-42, 東京: 彩流社. / 工藤浩 (1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実 (編) 『副用語の研究』176-198, 東京: 明治書院. / 工藤浩 (2000)「程度副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』163-234, 東京: 岩波書店. / 国立国語研究所 (1969)『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局. / 佐野由紀子 (1997)「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16: 121-133. / 佐野由紀子 (1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」国立国語研究所 (編)『日本語科学』3: 7-22, 東京: 国書刊行会. / 佐野由紀子 (1999)「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』6: 32-50. / 尚真貴子・佐々木香代子 (2015)「県内高校生の沖縄の言葉の使用について」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』18 (1): 1-40. / 高江洲頼子 (2002)「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』67 (7), 151-160, 東京: 至文堂. / 仁田義雄 (1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2 (10), 18-22, 東京: 明治書院. / 野原三義 (1996) 「沖縄の若者言葉」『沖縄文化研究』22: 265-282. / ロング，ダニエル (2010)「言語接触から見たウチナーヤマトゥグチの分類」『人文学報』428: 1-30.**[調査資料]** RYUCHELL WORLD、「沖縄の友達とゴーヤーチャンプルーを作る」、 2020 年 12 月 8 日、動画、https://youtu.be/ImmZJLfzjtc?si=O_NOpYUT-Rk24_I9 [2023 年 11 月 13 日アクセス] / RYUCHELL WORLD、「沖縄の友達と東京タワーを見にドライブしたよ」、 2021 年 10 月 16 日、動画、 https://youtu.be/SOgQRoJYOLA?si=vug-r33-ruMG2W99 [2023 年 11 月 13 日アクセス] / いーどぅし、「いーどぅしサーサーラジオサー」vol.1-16、2020 年 3 月 25 日、動画、https://youtu.be/wC97M1TGubk?si=b99FMmjvHWdW0amH [2023 年 11 月 13 日アクセス]

文語イナリ・サーミ語における定動詞と双数名詞句の一致について

長谷川　朝香
（言語文化学部　ロシア語専攻）

キーワード：イナリ・サーミ語，双数名詞句，有生性階層，一致，コーパス調査

0. はじめに

イナリ・サーミ語[1]の定動詞は主語名詞句の人称と数に一致し、その方法として完全一致 (full agreement) と部分一致 (partial agreement) の 2 種類が併存する。この一致の選択には主語名詞句の有生性と特定性、語順が関係しているとされてきた。

本稿ではイナリ・サーミ語の文語コーパスを用いて、主語名詞句の有生性および語順と一致の選択の関係について分析する。本稿は (i) 一致に関する有生性階層の精密化 (ii)部分一致の文例における先行研究への反例を示すとともに、新たに (iii) 従来の 2 つの一致体系の中間に位置する、新たな一致体系の提案を目的とする。なお本稿中の例文・図表番号、和訳、文字飾り、グロス、例文略は特に断りの無い限り筆者による。表中のパーセンテージは小数第 3 位を四捨五入したものであるため、合計は必ずしも 100.00%にならない。

1. 背景知識

イナリ・サーミ語では名詞と定動詞に対し数 (単数、双数、複数) が形態的に標示される。ただし双数が標示されるのは人称代名詞、定動詞および所有接尾辞のみである。

なお定動詞が双数形であるとき、主語名詞句の取りうる形は [複数形] [*kyehti* 'two'+単数形] [単数形+*já* 'and' +単数形] の 3 通りである (Morottaja and Toivonen 2016: 20) 。

表 1: 直説法現在における繋辞 *leđe* (Toivonen (2007b: 230) より筆者作成)

		完全一致	部分一致
SG	1	lam	
	2	lah	
	3	lii	lii
DU	1	láán	
	2	leppee	
	3	lava	
PL	1	lep	
	2	leppeđ	
	3	láá	láá

[1] イナリ・サーミ語はウラル語族フィン語派東サーミ方言群に属する言語である。類型的には語幹に接辞を接続する膠着語であるが、接辞が語幹と一体化する傾向にあることから屈折語的性格を認める学者もある (以上庄司 1989: 67 より要約) 。基本語順は SVO である (Toivonen 2007b: 228) 。

定動詞における一致体系は、完全一致と部分一致の 2 種である。完全一致が主語名詞句の数 (単数 / 双数 / 複数)と人称に一致する (1) 一方、部分一致では数 (単数 / 非単数)のみ (2) に一致する。表 1 は繋辞 ('to be') *leđe* について、完全一致と部分一致における語形変化を示したものである。以下に各一致の文例を挙げる。なお太字の部分は主語となる名詞句、下線部は完全一致が起こっている動詞、波線部は部分一致が起こっている動詞を示しており、以降の文例の文字飾りもこれに従う。

(1) **Kyehti** **almaa** lá-i-n meeci-st. 完全一致の例
二.NOM 男.SG.ACC COP-PST-3DU 森-SG.LOC
「2 人の男は森にいた。」 (Toivonen 2007b: 229)

(2) Riddoo-st lá**á** **kyehti** **keeđgi**. 部分一致の例
浜-SG.LOC COP.PRS.3PL 二.NOM 石.SG.ACC
「浜には 2 つの石がある。」 (Toivonen 2007b: 230)

2. 先行研究

イナリ・サーミ語の一致の選択への条件については、Toivonen (2007b) 、Valtonen et al. (2022) 、Morottaja and Toivonen (2016) に記述が見られる。表 2 は先行研究をまとめたものである。表中の〇は完全一致および部分一致が起こりうるもの、△は完全一致のみ起こるもの、×は部分一致のみ起こるもの、―は記述がないものを示している。

表 2: 先行研究のまとめ (Toivonen (2007b)、 Valtonen et al. (2022)、Morottaja and Toivonen (2016) より筆者作成)

	Toivonen (2007b)	Valtonen et al. (2022)	Morottaja and Toivonen (2016)
有生 (人間)	〇	〇	△
有生 (動物)	〇	×	〇
無生	×	×	×
部分一致が出現しやすい条件	存在文・所有文 (主語が人間) 【非特定性】	―	存在文・所有文 (主語が 3 人称)
完全一致が出現しやすい条件	関係節 【特定性】	―	―
備考	主語が人称代名詞で部分一致が起こる場合、主語は動詞に後置	完全一致・部分一致に関する明確な記述なし	主語が 3 人称の存在文・所有文での双数形による完全一致は不自然

3 つの先行研究は、主語名詞句が無生である場合部分一致のみを起こしうる点では共通している一方、有生である場合の一致の選択可否の記述に差異がある。本稿では、先行研究における問題点のうち特に以下の 2 点を扱う。

(i) 完全一致・部分一致の選択に影響する主語名詞句の有生性の範疇の差異
(人間 vs 非人間 / 有生 vs 無生)

(ii) 主語名詞句が人間であり、かつ部分一致が起こっている場合の語順

4. 調査

卒業論文では研究課題 7 項目[2] を対象とした調査を 2 つ実施した。本稿では紙幅の都合上、7 項目中 3 項目 ((I), (II), (VI)) に対応するもののみ扱う。調査 1 は概要のみ、調査 2 は概要と結果を述べる。

4.1. 調査 1

調査 1 では完全一致の文例を対象とし、定動詞が 3 人称双数である場合の主語名詞句の有生性範疇についてコーパス調査を行った。使用したコーパスは SIKOR (Saami International Korpus) のイナリ・サーミ語の文語コーパス[3] (Aanaar Saami texts) である。

調査方法の概略は次の通りである。『アジア・アフリカ言語調査票 (下) 』の A・B 語彙より動詞 90 語を翻訳し、その直説法 3 人称双数をコーパスの Simple (Oktageardán ohcan) に入力する。得られた文例について、定動詞に対応する主語名詞句を形式 (複数形、*kyehti* +単数形、単数形+*já*+単数形) と有生性階層 (人称代名詞>名詞 [人間名詞>動物名詞>無生物名詞] : 角田 (1991) 参考。) にそって手作業で分類する。

上記により 1055 例を収集・分析した結果、有生性階層が高いほど完全一致が起こりやすい傾向にある一方、主語名詞句が動物や無生物であっても完全一致が起こりうることが判明した。さらに定動詞 3 人称双数形と共起する主語名詞句の形式として、先述のものの他に名詞「2 つ」に由来する [単数形=*kyevtis*] といった形式も出現した。さらに完全一致にも部分一致にも当てはまらない文例として、人称代名詞 1 人称双数が定動詞 3 人称双数と共起しているものが 11 例出現した。

4.2. 調査 2

4.2.1 調査概要

調査 2 では完全一致、部分一致の両方の文例を対象とし、調査 1 で用いた文語コーパス (4.1 節参照) を使用する。

(i) コーパスの Advanced (CQP ohcan) に以下の検索式 (a) - (e) を入力し、文例を得る。

(a) [word="mu[oá]i|tu[oá]i|su[oá]i"] (人称代名詞双数形)

(b) [msd=".*N\.Sg\.Nom.*"][word="já"][msd=".*N\.Sg\.Nom.*"] ([単数形+*já*+単数形])

(c) [word="kyehti"][pos="N"] ([*kyehti* + 単数形])

(d) [word=".*kyevtis"] ([単数形=*kyevtis*])

[2] (I) 完全一致における主語名詞句の有生性 (II) 部分一致における主語名詞句の有生性 (III) 完全一致における関係節の割合 (IV) 部分一致における存在文・所有文・関係節の割合 (V) 部分一致の存在文・所有文における主語名詞句の人称 (VI) 主語となる名詞句が人間かつ部分一致の文の語順、および名詞句が人称代名詞であるか (VII) *kyehti*、=*kyevtis* が共起する主語名詞句の性質の差異

[3] トロムソ大学 (The Arctic University of Norway) およびノルウェー国内のサーミ議会により作成されたものであり、行政、宗教、ブログ、ノンフィクション、フィクション、新聞、学術、Wikipedia の文語テキストが 316,086 文収録されている。[最終更新日: 2021 年 11 月 8 日]

(e) [word="kuohtuuh"][msd=".*N\.Pl.\Nom.*"] ([*kuohtuuh* 'both' + 複数形])

(ii) (i) で収集した文例を一致の方法 (完全一致 / 部分一致) 別に手作業で分類し、主語名詞句の有生性を調査する。名詞句の有生性は、角田 (1991: 39) のシルバースティーンの名詞句階層 (人称代名詞 (1 人称>2 人称>3 人称)>親族名詞>固有名詞>人間名詞>動物名詞>無生物名詞) にそって分類する。

(iii) (ii) で分類した部分一致の文例のうち、主語名詞句が人間であるものを手作業で抽出し、名詞の性質およびその文例の語順を調査する。名詞の性質は 同上の名詞句階層(人称代名詞 (1 人称>2 人称>3 人称)>親族名詞>固有名詞>人間名詞) にそって分類する。

5. 結果

5.1. 有生性

調査 2 では 3309 例を収集、分析した。主語名詞句と有生性との関連について、調査結果を以下の表 3[4]に示す。

表 3: 主語名詞句の有生性階層と一致

名詞句階層		完全一致	部分一致	その他	計
人称代名詞	1DU	816 (96.34%)	2 (0.24%)	29 (3.42%)	847 (100.00%)
	2DU	143 (98.62%)	1 (0.69%)	1 (0.69%)	145 (100.00%)
	3DU	925 (99.78%)	2 (0.22%)	0 (0.00%)	927 (100.00%)
	小計	1884 (98.18%)	5 (0.26%)	30 (1.56%)	1919 (100.00%)
親族名詞		278 (96.19%)	5 (1.73%)	6 (2.08%)	289 (100.00%)
固有名詞		40 (97.56%)	0 (0.00%)	1 (2.44%)	41 (100.00%)
人間名詞		206 (74.10%)	71 (24.74%)	10 (3.48%)	287 (100.00%)
動物名詞		255 (78.70%)	49 (15.12%)	20 (6.17%)	324 (100.00%)
無生物名詞		266 (24.25%)	503 (45.85%)	328 (29.90%)	1097 (100.00%)
計		2929 (74.02%)	633 (16.00%)	395 (9.98%)	3957 (100.00%)

表 3 に示した通り、人間を示す名詞 (人称代名詞、親族名詞、大半の固有名詞、人間名詞) が主語として最も多く出現しているのは完全一致の文例中であり、無生物名詞が最も多く出現しているのは部分一致の文例中である。動物名詞については 324 語中 255 語 (78.70%) が完全一致の文例の主語として出現した。さらに部分一致の文例において、固有名詞が主語名詞句となることはなかった。以下、先行研究と反する例を挙げる。

5.1.1. 無生物名詞

本調査では、完全一致の文例の主語として無生物名詞が 266 語出現した。名詞の特徴として、「団体の名称 (例 *kieldâstivrâ*: 執行委員会 / *kielâpiervâl*: 言語の巣)」「植物名 (例 *kárânâsjuŋŋâ*: クマコケモモ / *čeve*: オーツ麦)」は比較的完全一致での出現頻度が高い一方、「概念を表す名詞 (例 *vuoigâlâšvuotâ*: 正義 / *lukko*: 幸運)」「他品詞から派生した名詞 (例 *jienâkevttim*: 録音の利用 / *lahâasâttem*: 立法)」の出現頻度は低いことが挙げられる。

[4] 表 3 中の数値は主語名詞の述べ語数を示すものであるため、総文例数と一致しない。

(3) 2. **Säämi** **párnái+kulttur+kuávdáš** **já**
NUM サーミ.SG.GEN 子供.SG.GEN+文化.SG.GEN+センター.SG.NOM CONJN
nuorâi+lävdikodde+haahâ orni-v oovdâst
若い.SG.GEN+委員会.SG.GEN+計画.SG.NOM 配置する-PRS.3DU 前に
čäällim+kišto sämi+párnái-d já nuorái-d.
作文.SG.GEN+競争.SG.ACC サーミ.SG.GEN+子供-SG.ILL CONJN 若者-SG.ILL
「2. サーミの子供文化センターと若者の委員会の計画は、サーミの子供と若者のための作文コンクールを前へ進めている。」 (SIKOR : 新聞 : 2009)

(4) **Čuákkim** **kyehti** **uáiviääši** lá-i-n 1) päikki+nomâttâs-ah
会議.SG.GEN 二.NOM 要点.SG.ACC COP-PST-3DU NUM 家.SG.GEN+名称-PL.NOM
já toi jurgâlem anarâškielâ-n, já 2)
CONJN それ.SG.GEN 翻訳.SG.NOM イナリ・サーミ語-SG.ILL CONJN NUM
biologia=sänilisto tärhistem.
生物学.SG.GEN=語彙.SG.GEN 確認.SG.NOM
「会議の 2 つの要点は、 1) 家の名称とそれのイナリ・サーミ語への翻訳、および 2) 生物学の語彙の確認であった。」 (SIKOR : 新聞 : 出版年不明)

5.1.2. 「その他」の文例

本調査では、完全一致と部分一致のどちらにも当てはまらない文例が 217 例出現した。以下、主語名詞句と対応していると思われる定動詞は斜字で示す。

1DU-*1PL*: 2 例

(5)…ko **muoi** *ooinijm* mottoom auto puátimin
CONJN 1DU.NOM 気づく.PST.1PL ある人.SG.GEN 車.SG.NOM 来る.ESS.CVB
terminaal kuuvl,…
ターミナル.SG.GEN ～のそばに
「…私たちはある人の車がターミナルの側まで来るのに気づいて…」(SIKOR : 新聞 : 2008)

1DU-*3DU*: 27 例

(6)…**muái** *áigo-i-n* kárgá-đ škoovlâ-st.
1DU.NOM ～するつもりである-PST-3DU 逃げる-INF 学校-SG.LOC
「…私たちは学校から逃げるつもりであった…。」 (SIKOR : 新聞 : 2018)

3DU-*3SG*: 188 例

(7) Jiem haalijd et taat **kielâ** **já** **kulttuur**
NEG.1SG 望む.PRS.PTCP REL これ.SG.NOM 言語.SG.NOM CONJN 文化.SG.NOM
potkân mii suuvâ-st eidu munjin.
中断する.PRS.3SG 1SG.GEN 一族-SG.LOC ちょうど今 1SG.ILL
「私の一族において、この言語と文化が今私の手によって途絶えることを望んでいない。」
(SIKOR : 新聞: 2010)

(7) のような [**3DU**-*3SG*] については、主に [単数形+*já*+単数形] の形式の主語名詞句を持つ文例中にとりわけ多く見られた (180 例) 。

5.2 語順

主語名詞句が人間を指し、かつ部分一致である文例は 59 例であった。表 4 は名詞句階層別の主語名詞句の出現数と、その文例の語順の割合を示したものである。

表 4: 主語名詞句が人間名詞かつ部分一致の文における主語名詞句の性質と語順

名詞句階層		SV	VS	計
人称代名詞	1DU	2 (100.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)
	2DU	1 (100.00%)	0 (0.00%)	1 (100.00%)
	3DU	2 (100.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)
親族名詞		0 (0.00%)	3 (100.00%)	3 (100.00%)
人間名詞		5 (9.80%)	46 (90.20%)	51 (100.00%)
計		10 (16.95%)	49 (83.05%)	59 (100.00%)

主語が人称代名詞である文例は 5 例全てが SV 語順である。一方、親族名詞では 3 例全てが VS 語順[5]、人間名詞では 5 例を除いた 46 例が VS 語順である。これは Toivonen (2007b: 232) の主張と対立する。主語が人間名詞かつ部分一致である文例では、むしろ主語名詞句が「親族名詞」「人間名詞」の場合に語順の転倒 (VS 語順) が起こりやすくなると言える。

【SV 語順】

(8)…já　kaččâl-ij　auto　luus　ton　sirdemân　aldeláá,
CONJN　走り始める-PST.3SG　車.SG.NOM　～へ　それ.SG.GEN　移動.SG.ILL　近くへ
amas　**muái**　kyesih　njuoskâ-đ　kävppi+tävir-ijgijn.
～しないように　1DU.NOM　倒れる.PRS.3PL　濡れる-INF　店.SG.NOM+品物-PL.COM
「… (Márjá-Liisá は) 私たちが店の品物で転んで濡れないように、近くへと車を走らせた。」
(SIKOR : 新聞 : 1998)

(9) **Poolis+kyevtis**　čuožžuu　piso-h　kieđâ-st…
警察官.SG.GEN+2 つ.SG.NOM　立っている.PST.3PL　銃-PL.NOM　手-SG.LOC
「警察官 2 人は銃を手にして…立っていた。」
(SIKOR : ブログ : 2018)

【VS 語順】

(10) Jeesus　muštâl-ij　meid　eeji-st,　kiäst　lijjii
PSN.NOM　語る-PST.3SG　～もまた　父-SG.LOC　REL.SG.LOC　COP.PST.3PL
kyehti　**kaandâ**.
二.NOM　息子.SG.ACC
「イエスは 2 人の息子がいる父にも語った。」　(SIKOR : 宗教 : 2010)

[5] なお本調査では 3 例全てが存在文、所有文であった。

6. 考察

本節では、イナリ・サーミ語の有生性および一致の方法について考察する。

まずイナリ・サーミ語において「有生」とされるものの範疇を考察する。人間～動物が有生とみなされるのは前掲の調査結果からも明らかである。加えて無生物名詞の中でも、団体名や植物名は比較的完全一致の文例中に現れやすい (5.1.1 節参照)。そのため特に人間を構成物とした団体や、生物と非生物の間に位置する植物は、他の無生物名詞より有生性階層が高く解釈されると考えられる。

無生物名詞での完全一致の要因としては、主語名詞句の双数標示と文体による影響が考えられる。本稿で取り扱った先行研究は全て口語であり、文語を対象とした本研究とは異なる。特に文語においては主語名詞句が双数であることが視覚的に明示されるため、定動詞双数との一致が起こりやすいと推測できる。

続いて、[**1DU**-*1PL*] (5) および [**1DU**-*3DU*] (6) の要因を考察する。

まず [**1DU**-*1PL*] の共起要因として、定動詞の 1 人称過去双数・複数間の音的類似による中和を提示する。本調査で収集した 2 文例の定動詞 *keččâđ* (1DU.PST: *keej**á**im* 1PL.PST: *keej**â**im)*、*uáiniđ* (1DU.PST: ***o**inijm*、1PL.PST: ***oo**inijm*) の差異は â [ə] と á [æ] 、および第 1 音節の音長のみであるため、音的類似を由来とした混同が起こる可能性が考えられる。実際に、口語における音的類似による中和は既に指摘がある (Toivonen 2007a) 。

次に [**1DU**-*3DU*] の要因を考察するため、以下に一致体系を再検討する。イナリ・サーミ語の一致方法の特徴としては、主語名詞句と定動詞が「数と人称の両方」と「完全に」一致するものと、「数のみ」と「部分的に」一致するものの 2 つが挙げられる。これを実際の体系に対応させると、「完全な」一致に当たるのが「数・人称で一致する」完全一致、「部分的な」一致に当たるのが「単数 / 非単数で一致する」部分一致である。

本調査では[**1DU**-*3DU*]の文例が有意に出現した。ここで、これらは主語名詞句と定動詞の「3 つの数」が「部分的に」一致した、新しい体系に即したものであると仮定する。以下はイナリ・サーミ語の一致方法の特徴と対応させたものである (併せて表 5 を参照されたい)。

「完全な」一致=元来の「完全一致」

・ある数と人称が標示される主語名詞句は、同一の数、人称標示をもつ定動詞と一致

「部分的な」一致……2 つの体系が対応→「部分的な」一致≠元来の「部分一致」

・ある数と人称が標示される主語名詞句は、同一の数標示をもつ定動詞と一致

→新しい一致体系 (以下、部分一致 α)

・主語名詞句が単数であるとき定動詞単数と一致し、非単数であるとき定動詞複数と一致

→元来の「部分一致」 (以下、部分一致 β)

この一致体系を設定する利点は、3 つの数における対称性の確保、1 人称双数代名詞と定動詞 3 人称双数との一致に対する説明が可能になることにある。ただし本調査では 2 人称双数の主語名詞が定動詞 3 人称双数と共起する文例が出現していないため、既存の一致体系と同等に扱うことには疑義が残る。この一致体系を認定するためには、主語名詞句が 2 人称双数かつ定動詞 3 人称双数と共起する文例の存在の有無を調査する必要がある。

表 5 : イナリ・サーミ語文語における一致体系の提案

特徴		「完全な」一致	「部分的な」一致	
体系		完全一致 (=元来の「完全一致」)	部分一致 α	部分一致 β (=元来の「部分一致」)
SG	1	lam		
	2	Lah		
	3	lii	lii	lii
DU	1	láán		
	2	leppee		
	3	lava	lava	
PL	1	lep		
	2	leppeđ		
	3	láá	láá	láá

7. まとめと今後の課題

本稿の成果は次の 5 点である。 (i) 文語資料を用いた定量的データの収集 (ii) 名詞句階層の導入による詳細な分析の実現 (iii) 有生性と一致の選択における傾向と反例の提示 (iv) 主語が親族名詞や人間名詞かつ部分一致の文例における基本語順の転倒 (VS 語順) の指摘 (v) 元来の 2 つの一致体系の中間に位置する、新たな一致体系の可能性の提示

今後調査すべき課題を以下に提示する。

- 動詞の性質と一致の選択との関連の有無
- 主語名詞句が 2 人称双数代名詞かつ定動詞 3 人称双数と共起している文例の収集
- 主語名詞句に数標示がない場合の一致の傾向
- 無生物名詞の下位分類の設定と階層付与
- コーパスにて収集した文例、および筆者作成の文例を用いたインフォーマント調査

【略号一覧】ACC: 対格 / COM: 共格 / CONJN: 接続詞 / COP: 繋辞 / CVB: 副動詞 / DU: 双数 / ESS: 様格 / GEN: 属格 / ILL: 入格 / INF: 不定詞 / LOC: 処格 / NEG: 否定 / NOM: 主格 / NUM: 数詞 / PFV: 完了 / PL: 複数 / PRS: 現在 / PSN: 人名 / PST: 過去 / PTCP: 分詞 / REL: 関係詞 / SG: 単数 / 1: 1 人称 / 2: 2 人称 / 3: 3 人称 / -: 形態素境界 / +: 複合語境界【参考文献】Morottaja, Petter and Ida Toivonen (2016) *Some note on Inari Saami syntax and morphology DRAFT version, June 10.* / Toivonen, Ida (2007a) Microvariation in Inari Saami*, Suomalais-Ugrilaisen Seuran Toimituksia=Mémoires de la Société Finno-Ougrienne*: 363-374. Helsinki: Suomalais Ugrilainen Seura./ Toivonen, Ida (2007b) Verbal agreement in Inari Saami, Diane Nelson and Ida Toivonen (eds.) *Saami Linguistics*: 227-258. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. / Valtonen, Taarna, Jussi Ylioksi and Luobbal Sámmol Ánte (Ante Aikio) (2022) Aanaar (Inari) Saami, Bakro-Nagy, Marianne, Johanna Laasko and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages* : 178-195. Oxford: Oxford University Press. / 庄司博史 (1989)「サーミ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編 (中) さ-に』65-71, 東京: 三省堂. / 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版. / 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (1967) 『アジア・アフリカ言語調査票 (下)』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.【参考辞書】Olthuis, Marja-Liisa, Taarna Valtonen, Miina Seurujärvi and Trond Trosterud (2015-2022) *Nettidigisäänih Anarâškiela-suomakielâ-anarâškielâ sänikirje*. Tromsø: UiT. (22000 inarinsaamen sanaa, 18000 suomen kielen sanaa) (http://saanih.oahpa.no) [最終閲覧日: 2024 年 1 月 18 日] / 吉田欣吾 (編) (2019)『パスポート初級フィンランド語辞典』東京: 白水社.【調査資料】SIKOR. UiT The Arctic University of Norway and the Norwegian Saami Parliament's Saami text collection, Version 01.12.2021, (http://gtweb.uit.no/korp/) [最終閲覧日: 2023 年 12 月 21 日]

現代ロシア語における他動詞の否定生格と名詞句階層理論について

服部　壮留
（言語文化学部　チェコ語専攻）

キーワード：ロシア語，生格，分裂能格，名詞句階層理論，否定

0. はじめに

ロシア語では否定文において、他動詞の対格目的語と自動詞の主格主語が生格[1]で現れることがあり、これを否定生格と呼ぶ。青木 (1996) や松本 (2006) で言及されているように、否定生格の起こる文では、名詞句の格組織が能格構造をとっており、現象自体が選択的であることから、この現象が分裂能格的であると解釈できる。その上で本稿では、否定生格の起こりやすい環境の記述にシルヴァースティーンの名詞句階層理論を援用できるのではないかという仮説 (青木 1996) を検証する。本稿の構成は以下の通りである。1 節では前提知識の概観、2 節では先行研究のまとめと問題提起、3 節では調査、4 節では調査結果の提示と考察、5 節でまとめと今後の課題について述べる。本稿における例文・図表番号、和訳、引用文中の略、文字飾りは特に断りのない限り筆者によるものである。ただし、調査対象の福音書テキストとその和訳はウェブ資料を引用している。キリル文字の転写は ISO 式に倣う。統計検定はフィッシャーの正確確率検定か正確二項検定を必要に応じて使用し、優位水準はすべて $\alpha = 0.05$ である。p 値は Excel で表示されたすべての桁を表示し、百分率は小数第 1 位を四捨五入している。

1. 前提知識の概観

前提知識を概観する。まず否定生格について、次にシルヴァースティーンの名詞句階層について述べる。ロシア語は主格・対格型の屈折型言語である。しかし、動詞句が否定されると自動詞の主語と他動詞の目的語が生格になる、つまり否定生格の形をとることがある。ロシア語の否定文は、否定生格が使われると能格型、使われないと対格型をとり分裂能格が起きているといえる (例文は Bernetová (etc.) (1979: 839-840)から)。

(1) Солнца не будет.　「太陽は昇らないだろう」
solnc-a　ne　bude-t
太陽 N-SG.GEN　NEG　ある FUT-3SG

(2) Он ничего больше не писал.　「彼はそれ以上もう何も書かなかった」
on　nič-ego　bol’še　ne　pisa-l-Ø
PRN.3SG.M.NOM　ない物 PRN-GEN　より多く ADV　NEG　書く IPFV-PST-M.SG

[1] 「生格」とは、英語の術語の genitive であるが、ロシア語の roditel’nyj padež の訳語としてこの生格という術語が定着している。本稿でも「属格」ではなく「生格」を用いる。

次に名詞句階層について述べる。シルヴァースティーンの名詞句階層 (図 1) とは、名詞句の意味的特徴による階層である。分裂能格という観点では、「対格表示はこの階層の上の方から、一方、能格表示は階層の下の方から現れ、この関係が逆になったりあるいは非連続な形をとることは決してないというもの」(松本 2006: 84) としている。

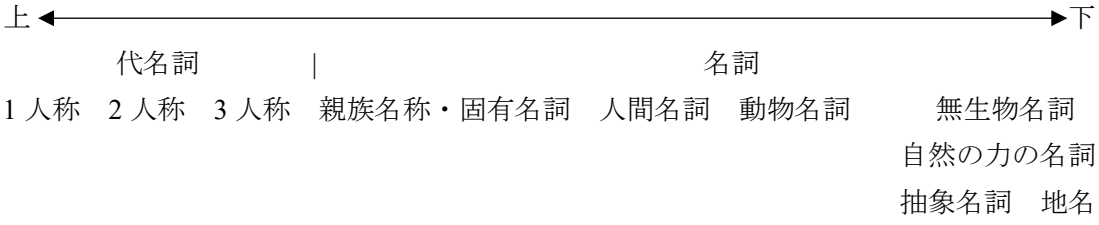


図 1: シルヴァースティーンの名詞句階層 (角田 2009: 41 をもとに筆者作成)

2. 先行研究のまとめと問題提起

先行研究は青木 (1996)、(1982) を見る。

青木 (1996) では、名詞句・動詞句の意味的性質に焦点を当てた。否定生格の現象を分裂能格的なものと解釈し、否定生格の出現の要因の記述にシルヴァースティーンの名詞句階層が援用できるのではないかと考えた。青木 (1996) は動詞の他動性を 3 つ、目的語を名詞句階層に従って 5 つ、否定を強弱の 2 つに分け、否定文における対格目的語の頻度を調べた (表 1)。データは「1958 年から 1973 年に書かれた 18 の戯曲の会話体の部分」(青木 1996: 55) を分析している。

表 1: 現代ロシア語において否定文の目的語としての対格があらわれる頻度

他動性	
直接影響	58%
感覚	31%
知覚	27%
知識	25%
追求	2%
所有	0%

名詞句階層	
人名	100%
人間	82%
身体部位	73%
具体名詞	43%
抽象名詞	24%

否定の強さ	
強調	11%

(青木 1996 をもとに本稿筆者作成)

青木 (1982) では現代ロシア語の否定生格の出現について、1958 年から 1973 年に書かれた 13 篇の戯曲の会話体の部分をデータとし、新聞・文学を対象とした Restan (1960) のデータと合わせて検討している。その際、否定生格の出現環境として、名詞の意味的性質を含めた 12 の条件を挙げている (表 2)。

表 2: 否定文において直接目的語の格の決定に影響する要素

生格が出やすくなるもの	対格が出やすくなるもの	関係のない物
複数形	ー	単数、倒置、所有の動詞 (すべて生格)、固有名詞 (人名のみに言及、必ず対格)
他動性の低い動詞	他動性の高い動詞	
完了体	ー	
強い否定	間接否定	
ー	疑問節、命令文	
ー	具体名詞	
ー	-a (ja) で終わる名詞	

(青木 1982 をもとに筆者作成)

次に、先行研究について問題提起をする。まず青木 (1996) で想定されている階層は、角田 (2009) と異なり、親族名称、人間以外の有生物、自然の力、地名が不足し、「身体部位」という独自の範疇も立て、地名が直接目的語である場合を調べていない。

次に、データ解釈上の問題を指摘する。先行研究で提示された条件は標本となる文において様々な組み合わせで出てくる。そのため、条件の組み合わせを考慮しないと任意の条件の影響は、必ずしも厳密な意味では測れない。さらに、統計的には意味のない差についても意味のある差として扱っている。正確二項検定によれば、完了体 ($p = 0.1687$ $\alpha = 0.05$, ns)、命令文 ($p = 0.2354$ $\alpha = 0.05$, ns) は否定生格の頻度差に影響せず、倒置 ($p = 0.0102$ $\alpha = 0.05$)、不完了体 ($p = 0.0000$ $\alpha = 0.05$) は強く影響している。

3. 調査

3.1. 調査対象

調査は 2 回行った。調査対象はキリスト教の福音書と新聞コーパスである。調査 A は福音書とコーパスを対象としている。調査 B はコーパスのみの調査である。

否定生格の調査では、硬く保守的な文体が好ましい。加えてある程度まとまった量を持つことを考慮し、福音書のルカ伝、ヨハネ伝、マルコ伝を対象とした。福音書では得られないデータを得るために新聞コーパス[2]も使用した。コーパス調査 A、B ともに、Nacional'nyj Korpus Russkogo Jazyka を用いた。このコーパスはロシア科学アカデミーにより運営され、20 億語を採録 (2023 年時点) したロシア語の国立コーパスである。ジャンルは文学、SNS など 16 ジャンルが存在する。本調査では、総語数が多くかしこまった文体である「新聞」を選択した。新聞コーパスは、7 億 9000 万語を収録し、ロシア国内で 1940 年から 2021 年までに出版されたロシア語の新聞記事をデータとしている。

3.2. 調査方法

各テキストにおいて、肯定文で対格目的語をとる動詞が、否定された否定文を抜き出す。否定が動詞以外にかかっているものや、目的語をとっていないもの、3 項動詞は排除する。これに加え、生格なのか対格なのか判断できなかったもの[3]も除いた。次に、抽出した文例について、直接目的語が <1> 対格をとっているか生格をとっているか、<2> 名詞句階層の

[2] 新聞に用いられる文体も硬いものであるため、調査資料内での一貫性はとれている。
[3] 調査範囲の内、全体の 1 割ほどがこれに当たる。

どの位置にあるか、<3> 他動性、<4> 格選択に影響する要素 (表 4 と先行研究において、生格を促進する要素を +、対格を促進する要素を - であらわす) 不完了 (+)、倒置 (+)、複数 (+)、強い否定 (+)・間接否定 (-)、定 (-)、直説法 (-)、疑問 (-) を確認する。

調査は A、B の 2 度行う。

調査 A は名詞句階層理論と否定生格の関係を検討する準備段階のための調査で、格選択により大きく影響する文法的要素が何であるかを調べることを目的とする。

コーパス調査 A では、福音書のデータから得られなかったもの・データが足りないと判断したものを得るために行った。①所有の動詞、②間接否定の場合、③否定の強調の例、④節内に間接否定と否定の強調がどちらも出てくる場合である。コーパス調査 A①では所有の動詞 imet'を検索し上から 200 例を対象とした。コーパス調査 A②では間接否定の条件をとるために、moč'を 100 例、 ne možet を 50 例、ne mogut を 50 例、umet'を 100 例、 ne umeet を 50 例、ne umejut を 50 例、それぞれ上から収集し計 200+200 例を対象とした[4]。コーパス調査 A③では否定の強調の例をとるため、nikakoj と nikogda を検索し、それぞれ上から 100 例＋100 例を対象とした[5]。コーパス調査 A④では否定の強調と間接否定が共存する例をとるため、nikogda ne možet を検索し上から 100 例を対象とした。

調査 B は名詞句階層との関係を調べる調査で、①～⑤の 5 つの調査を行った。コーパス調査 B 全体で収集できたのは、合計 217 例である。

コーパス調査 B①は名詞句階層の影響を調べるために何も制約を設けない方法でデータを収集している。否定の助詞 ne を検索し、否定の他動詞文の上から 170 例を対象とした。「人間名詞」のデータを収集するためにコーパス調査 B②を行った。「娘 doč'」を単数[6]∧ (生格∨対格) で検索し、上から 10 例収集した。コーパス調査 B③では「身体部位」の用例を集めた。「子宮 matka」「腕 ruka」を対象とした。すべて生格∨対格を指定し、前者では 21 例中 1 例がデータになり、後者は上から 7 例収集した。なお、後述のコーパス調査 B④の「鳥 ptica」のデータ収集の際に出てきた用例を 2 例含んでおり、「身体部位」のデータは全体で 10 例集まった。コーパス調査 B④では「動物」の例、「牛 korova」「動物 životnoe」「鳥 ptica」を単数[7]∧ (生格∨対格) で指定し、各 200 例、合計 600 例を調査範囲とし、全部で 10 例が得られた。コーパス調査 B⑤では「地名」の階層に当たる例を調査した。訪問先を対格目的語で表す、完了体の 2 項動詞 posetit'「訪れる」の現在 3 人称形の否定文を検索した。単数形 ne posetit は 52 例、複数形 ne posetjat は 25 例ヒットし前者は 7 例、後者は 3 例集まった。このコーパス調査 B⑤では「人名地名以外の固有名詞」が 9 例得られている。

[4] moč'は状況可能、umet'は能力可能、 možet・umeet は現在形 3 人称単数、mogut・umejut は現在形 3 人称複数である。

[5] nikakoj は形容詞で「どんな～も…ない」を意味する。nikogda は副詞で「どんなときも…ない」という意味である。

[6] この単語は複数形で生格と対格が同じ形になり、否定生格をとっているかどうかの判断がつかないため、単数形のみを対象とした。

[7] この単語は複数形で生格と対格が同じ形になり、否定生格をとっているかどうかの判断がつかないため、単数形のみを対象とした。

4. 調査結果と分析

4 節では調査について扱う。まずは調査 A の結果を述べる。

コーパス調査 A の福音書テキストでは、否定他動詞文 69 例中、対格形が 6 例 (9%) 見つかった。先行研究のデータでは、対格の例が Restan (1960) で 31%、青木 (1982) で 38% (148 / 393)、青木 (1996) で 36% (171 / 478) である。頻度数におけるこの差異は、本調査の対象テキストである福音書の特性であると考えられる。そこで、福音書テキストでは他動詞の否定生格が生じるのがデフォルトであり、対格が出てきたものは、対格が出てくる / 生格が出てきにくい要因があるためだと仮定した。対格が出てきた例と似た条件である否定生格の例を対照することで、否定生格出現の条件を分析できると考えた。

否定生格の条件について、本調査で得られた階層は以下の通りである。これを以下で示す。

間接否定 (-) ＞ 強調・複数・倒置 (+) ≧ 他動性 (+ ～ -) ＞ 不完了体(+)
【否定生格出現に関する文法要素階層】

表 3: 福音書での調査で対格形が出現したもの

階層	例文番号	目的語	数	他動性	体	否定の型	語順
人間	Mk.6.18	妻	単数	所有	不完了体	間接否定	VO
具体名詞	Lk.6.29	下着	単数	直接影響	不完了体	間接否定	VO
	Lk.15.8	部屋	単数	直接影響	完了体	—	VO
	Jo.5.18	安息日	単数	直接影響	不完了体	—	VO
	Mk.13.16	上着	単数	直接影響	不完了体	間接否定	VO
抽象名詞	Lk.5.31	必要性	単数	所有	不完了体	—	VO

(3) 「イエスが安息日を破るだけでなく」(Jo.5.18)

что Он не только нарушал субботу.

čto	On	ne	tol'ko	naruša-l-Ø	subbot-u
that.CONJN	PRN.3SG.M.NOM	NEG	ADV	違反する PFV-PST-M.SG	安息日 F-SG.ACC

4. . 1. 1. 間接否定と他動性・体の関係：間接否定 (-) ＞ 他動性 (+ ～ -)・不完了体 (-)

表 4: 福音書テキストでの人間名詞での比較

人間	Mk.6.18	妻 ACC	単数	所有	不完了体	間接否定	VO
人間	Lk.14.26①	母 GEN	単数	感覚	完了体	—	VO
人間	Lk.14.26②	妻 GEN	単数	感覚	完了体	—	VO

4. 1. 2. 他動性と不完了体の関係：他動性 (+ ~ -) ＞ 不完了体 (-)

表 5: 福音書テキストでの具体名詞の対格

具体名詞	Lk.15.8	部屋 ACC	単数	直接影響	完了体	—	VO
具体名詞	Jo.5.18	安息日 ACC	単数	直接影響	不完了体	—	VO
具体名詞	Mk.13.16	上着 ACC	単数	直接影響	不完了体	間接否定	VO

4.1.3. 他動性と複数の関係：複数（+）＞ 他動性（+ ～ −）

表 6: 身体部位のデータについて

身体部位	Lk.11.38	腕 GEN	複数	直接影響	完了体	—	VO
身体部位	Lk.22.53	腕 GEN	複数	直接影響	完了体	—	VO
身体部位	Mk.7.3	腕 GEN	複数	直接影響	完了体	—	VO
身体部位	調査 B-b.10	腕 ACC	単数	直接影響	不完了体	—	VO

4.1.4. 間接否定と倒置の関係：間接否定（−）＞ 倒置（+）

表 7: 間接否定と倒置

抽象名詞	nmj34	詳細 GEN	複数	知識	不完了体	間接否定	OV
抽象名詞	nmg41	事実 ACC	単数	知識	完了体	間接否定	OV
抽象名詞	nue19	考え ACC	複数	感覚	不完了体	間接否定	VO

4.1.5. 倒置と他動性の関係：倒置（+）≧ 他動性（+ ～ −）

表 8: Jo.5.18 との対照

階層	例文番号	目的語	数	他動性	体	否定の型	語順
具体名詞	Jo.5.18	安息日 ACC	単数	直接影響	不完了体	—	VO
具体名詞	Lk.8.14	実 GEN	単数	直接影響	不完了体	—	VO
具体名詞	Lk.6.44	ブドウ GEN	単数	直接影響	不完了体	—	OV
具体名詞	Lk.7.33①	パン GEN	単数	直接影響	不完了体	—	OV
具体名詞	Lk.7.33②	葡萄酒 GEN	単数	直接影響	不完了体	—	OV

4.1.6. 間接否定と数の関係：間接否定（−）＞ 複数（+）

表 9: 間接否定∧複数で対格をとったもの

個数	名詞句階層	数	他動性	体	否定の型	語順
5	具体名詞	複数	直接影響	完了体	間接否定	VO
3	抽象名詞	複数	直接影響	完了体	間接否定	VO
4	抽象名詞	複数	感覚・知覚	完了体	間接否定	VO

表 10: 間接否定∧複数で否定生格をとったもの

具体名詞	nmj34	詳細 GEN	複数	知覚	不完了体	間接否定	OV
抽象名詞	nmj82	責任 GEN	複数	直接影響	不完了体	間接否定	VO

4.1.7. 強い否定と間接否定の関係：間接否定（−）＞ 強調（+）

表 11: 強い否定と間接否定の文で否定生格をとったもの

階層	例文番号	目的語	数	他動性	体	否定の型	語順
抽象名詞	nnm13	権力 GEN	単数	直接影響	不完了体	間接＋強調	VO
抽象名詞	nnm15	扱い GEN	単数	知覚	完了体	間接＋強調	VO
抽象名詞	nmj68	アクセス権 GEN	単数	所有	完了体	間接＋強調	VO

表 12: コーパス調査における nnm13 (例文 26) と類似した条件の対格形 7 例

個数	名詞句階層	数	他動性	体	否定の型	語順
3	具体名詞	単数	直接影響	不完了体	間接＋強調	VO
4	抽象名詞	単数	直接影響	不完了体	間接＋強調	VO

以上で前掲の階層の根拠となるデータを示した。なお、この階層のみでは解釈ができない、福音書での対格の例が 1 例ある。例文 (4) に示した。

(4) 「健康な人には医者はいらない、(医者が) いるのは病人である。」

не здоровые имеют нужду во враче, но больные.			
ne	zdorov-y	imej-ut	nužd-u
NEG	健康な ADJ-PL.NOM	所有する IPFV-PRS.3.PL	入用 F-SG.ACC
v-o	vrač-e	no	bol'n-ye
へ PREP-E	医者 M-SG.LOC	しかし CONJN	病んだ ADJ-PL.NOM

次に、コーパス調査 B から、ロシア語の他動詞文の格選択とシルヴァースティーンの名詞句階層とのかかわりについて考察する。ここで、名詞句階層の影響をより可視化し先行研究の問題点を克服するために、前掲の階層のうち、強い条件である間接否定 (-)、否定の強調 (+) 、所有 (+) はデータからのぞき、以下のように調整した (表 13)。

表 13: コーパス調査 B の調整後の結果 (括弧内は調整前の値)

	対格の文例数	対格の割合	データの合計
人間名詞	8 (10)	100% (100%)	8 (10)
動物名詞	5 (10)	100% (100%)	5 (10)
身体部位	8 (9)	89% (90%)	9 (10)
具体名詞	42 (63)	81% (79%)	52 (80)
地名	10 (10)	100% (100%)	10 (10)
抽象名詞	36 (45)	55% (52%)	66 (87)
地名・人名以外の固有名詞	8 (8)	80% (80%)	9 (9)
合計	117 (156)	73% (72%)	150 (217)

名詞句の意味的性質が生格出現の頻度数に差を与えているかを、表 13 に示した調整後のデータの統計検定によって検証する。フィッシャーの正確確率検定によると、動物と身体部位の階層間 ($p = 0.642857$ $\alpha = 0.05$, ns)、身体部位と具体名詞の階層間 ($p = 0.48502$ $\alpha = 0.05$, ns) における、否定生格の出現度には有意差がない。一方、具体名詞と抽象名詞については正確確率検定によると、具体名詞と抽象名詞の階層間における否定生格の出現度にはかなり強い有意な差が認められる ($p = 0.000126$ $\alpha = 0.05$)。

以上より、名詞句の意味的性質は、一部の意味において否定生格に関連するが、シルヴァースティーンの名詞句階層理論を否定生格出現環境の記述には援用できないとしないと結論付けられる。

なお、具体名詞と抽象名詞の有意差や、地名の出現度には、4 節で導き出した文法的性質の階層や、本稿では省いた目的語の意味の「総称性」(Bernetová 1979) や「存在の前提」(Partee and Borschev 2004) という説明原理が適応できる。

5. まとめと今後の課題

以上をまとめる。調査 A から、教会文書から得られたデータを分析することで文法的要素が否定生格に与える影響の階層 (否定生格における文法要素階層) を設定した。

間接否定 (-) ＞ 強調・複数・倒置 (+) ≧ 他動性 (+ ～ -) ＞ 不完了体(+)
【否定生格出現に関する文法要素階層】

調査 B では、先行研究の問題点の 1 つであった、名詞句階層以外の要素の影響の不十分な検討という点を解決するため、上掲の文法要素階層のうち、より上位にあたる間接否定・強い否定と、所有動詞のデータを排除することで、名詞句の意味的性質の影響度をより鮮明に検討できた。統計検定を用いると、「人間」「動物」「身体部位」「具体名詞」間では対格の出現数に有意な差がなく、階層として成立していないことが分かった。これに加え、シルヴァースティーンの名詞句階層理論の通りであれば、具体名詞よりも生格が多く出現するはずの「地名」のカテゴリーで生格の例が得られなかった。以上のことから、本稿では、現代ロシア語における否定生格の記述に、名詞句階層理論を援用することはできないという結論を持った。

なお、文法要素階層は帰納的な議論に終始したため、これを演繹的な方法で示すことを今後の課題としたい。

［記号・略語一覧］Jo. ヨハネ伝 / Lk. ルカ伝 / Mk. マルコ伝 / Ø ゼロ形態素 / - 接辞境界 / 3 三人称 / ACC 対格 / ADJ 形容詞 / ADV 副詞 / CONJN 接続詞 / E 挿入音 / F 女性 / FUT 未来 / GEN 生格 / IPFV 不完了体 / LOC 前置格 / M 男性 / N 中性 / NEG 否定辞 / NOM 主格 / PFV 完了体 / PL 複数 / PREP 前置詞 / PRN 代名詞 / PST 過去 / SG 単数 / ［参考文献］

青木正博 (1982) 「現代ロシア語の否定生格について (他動詞の場合)」『ロシア語ロシア文学研究』106-108. / ———— (1996) 「ロシア語の否定生格の現象における格表示」『言語研究』vol.110: 52-78. / Bernetová, Vilma and Helena Běličová-Křížková, Oldřich Leška, Zdena Skoumalová, Vlasta Straková (1979) *Russkaja Grammatika*. Praha: Československé akademie věd. / 匹田剛 (2016) 『NHK 出版　これならわかる　ロシア語文法　入門から上級まで』東京: NHK 出版. / 松本克己 (2006) 『世界言語への視座 ― 歴史言語学と言語類型論』東京: 三省堂. / Partee, Barbara H. and Vladimir Borschev (2004) The Semantics of Russian Genitive of Negation: The Nature and Role of Perspectival Structure. In Young, R., ed., *SALT,* vol.14: 212-234, New York: Corenell University. / Restan, P. A. (1960) The Objective Case in Negative Clauses in Russian. *Scand-Slavica*, vol.6: 92-112. (筆者未見) / Timberlake, Alan (1975) Hierarchies in the genitive of negation. *Slavic and East European Journal*. vol.19: 123-138. / 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版. / 福音書資料訳: https://www.bible.com/ja/bible/1820/JHN.1.%E5%8F%A3%E8%AA%9E%E8%A8%B3 (最終利用日 2023/09/26) ロシア語国立コーパス https://ruscorpora.ru/ (最終利用日 2023/12/05) 福音書調査資料: http://www.patriarchia.ru/index.html (最終利用日 2023/12/05)

スロヴェニア語の双数
―「両親」「双子」を表す語および方言で見られる特徴を中心に―

播磨　のぞみ
（言語文化学部　ポーランド語専攻）

キーワード：スロヴェニア語，双数，方言，数表示，数の一致

0. はじめに

スロヴェニア語には、単数・複数に加えて双数[1]が残存している。本稿は、スロヴェニア語の双数形のうち、方言で見られる双数形や、標準語で双数形と複数形両方が使われる語の数表示の特徴を分析することを目的としている。なお、本稿の図表・例文番号、グロス、文字飾り、日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 背景知識

1.1. スロヴェニア語の下位分類

金指 (2022: 11-15) および Jakop (2012: 349-351) は、スロヴェニア語を、方言・地方口語・標準語、の 3 種類に分類している。このうち地方口語は本稿の調査と直接関係しないため、ここでは方言と標準語について説明する。なお、下の図 1 は、Logar and Rigler (1983 [2016]) の方言地図に筆者が加筆し、各方言群の位置を、金指 (2022: 11) が用いている各方言群の番号 (①～⑦) とともに示したものである。

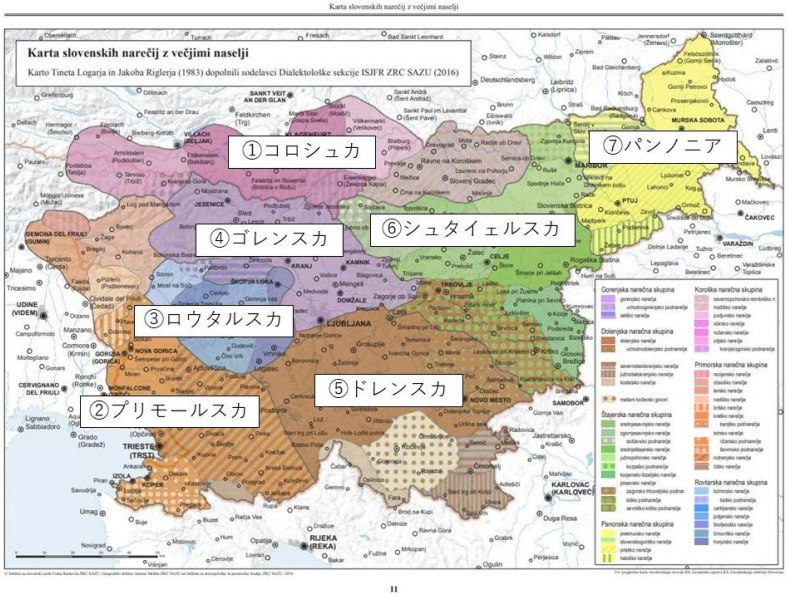


図 1: スロヴェニア語の方言地図 (Logar and Rigler 1983 [2016] に筆者が加筆)

[1] 文献によっては、「双数」ではなく「両数」と表記される場合もある。例えば木村 (1985) では「両数」となっている。しかし、本稿では便宜上、全て「双数」に統一する。

金指 (2022: 11) はスロヴェニア語の方言を、①コロシュカ方言群、②プリモールスカ方言群、③ロウタルスカ方言群、④ゴレンスカ方言群、⑤ドレンスカ方言群、⑥シュタイェルスカ方言群、⑦パンノニア方言群、⑧コチェーウスカ方言群、に分類している。ただし⑧コチェーウスカ方言群は混交方言で、伝統的な方言学では独立の方言群とみなされなかった (金指 2022: 11)。方言群とは共通の特徴を持つ地域方言のグループである (金指 2022: 12)。

標準語は 19 世紀初頭、意識的かつある程度人工的に形成され、その後も多少の改定が加えられてきた (金指 2022: 14)。Jakop (2012: 349-350) によれば、標準語は古代教会スラヴ語や他のスラヴ諸語の語彙を取り入れたこともあり、どの地域の口語とも異なる特徴を持つ。

1.2. スロヴェニア語の屈折パラダイム

スロヴェニア語の双数形は、屈折する全ての単語において見られる (Derganc 2006: 415)。ただし標準語では、人称代名詞を除く名詞で生格と前置格が双数・複数同形になっているほか、方言によっても双数形がどの程度保存されているかは異なる (Jakop 2012: 352-360)。

さらに Derganc (2006: 419-421, 429) は、男性名詞双数形主語の文では屈折語尾が全て -a になり、これによって男性名詞双数形主語文の双数形パラダイムが安定したと述べている。

(1) Midv*a* / vidv*a* / onadv*a* / dv*a*
1DU.PRN.M.NOM 2DU.PRN.M.NOM 3DU.PRN.M.NOM two.NUM.M.NOM
brat*a* sv*a* / st*a* mlad*a*.
brother.M.DU.NOM COP.PRS.DU.1 COP.PRS.DU.2/3 young.M.DU.NOM
「私たち 2 人 / あなたたち 2 人 / 彼ら 2 人 (いずれも男性含む) / 2 人の兄弟は若い。」
(Derganc 2006: 420 に筆者が一部加筆・修正)

2. 先行研究

2.1. Derganc (2006)

Derganc (2006: 421) によると、roke「手」、čevlji「靴」、starši「両親」など、ふつう対で存在するものに双数形を用いると冗長になるため、通常は複数形を用いる。しかし「両親」は、2 人からなる 1 集団としても 2 人の個別の人間としても捉えられるため、現代語では starša (DU) / starši (PL) ともによく使われるという。ここで Derganc (2006: 424) は、物よりも人を表すときに双数形が重要な意味を持つと述べ、Corbett (2000: 56) による、数表示に関わる名詞の有生性階層に言及している。Derganc (2006: 424, 429) によると、この階層内では人称代名詞がトップで、その後に親類→人間→生物→無生物と続く。

2.2. Jakop (2012)

Jakop (2012: 352-357) は、方言における双数形の概要を述べている。まず、男性名詞を主語とする動詞や男性名詞より、女性名詞を主語とする動詞や女性名詞で双数形が失われやすい。次に、主格・対格のみで双数形を使う方言が多く、生格と前置格はほぼ全ての方言で

複数形化している。例外は、男性名詞双数前置格形に双数造格形と同じ -oma を使うパンノニアのわずかな方言のみである。さらに、中性名詞の男性名詞化や女性名詞化が見られる方言もあり、このうち男性名詞化が見られるのはスロヴェニア中央部の方言[2]だという。

2.3. Marušič and Žaucer (2021)[3]

2.3.1. 対になるものを表す名詞について

対となるものを表す名詞は通常複数形で用いられることが多いが、「両親」は starši (PL) / starša (DU)、「双子」は dvojčki (PL) / dvojčka (DU) 両方が用いられる。スロヴェニア語の正書法について述べた Toporišič et al. (2001) では、「両親」双数形は標準的でないとされ、「双子」複数形は記載がないが、Marušič and Žaucer (2021: 13) は、現代スロヴェニア語の標準語の書き言葉において「両親」双数形や「双子」複数形の用例は豊富に見出されるとしている。

(2) Starša sta me obiskala.
parent.M.DU.NOM AUX.PST.DU.3 1SG.PRN.ACC visit.PART.M.DU
「両親が私を訪ねてきた。」
(Marušič and Žaucer 2021: 13、Derganc 2003 からの引用。筆者が一部加筆・修正)

(3) Rodila je dvojčke.
give birth.PART.F.SG AUX.PST.SG.3 twin.M.PL.ACC
「彼女は双子を生んだ。」
(Marušič and Žaucer 2021: 13, Bajec et al. 1970-1991 からの引用。筆者が一部加筆・修正)

2.3.2. 双数形の使用に対する方言的な差異

Marušič and Žaucer (2021: 16-18) は Jakop (2008) を参照し、全体的な傾向としてスロヴェニア南西部と南部で双数形が衰退しているが、中央部・北部・北東部の方言は双数形をよく保っていると述べている。しかし、双数形が衰退している方言で見られる双数形が、双数形をよく保っている方言で見られない場合があるという。例えば Jakop (2008) によると、女性名詞 krava「牛」主格形は、西部で双数形がよく保たれていたが、中央部は双数・複数同形だった。ここから Marušič and Žaucer (2021: 17) は、中央部では複数主格形 krave 主語の文で動詞に双数形も取り得る (4) ほか、西部の方言の一部は (5) のような文を許容するとした。

(4) Dve krave se paseta na travniku.
two.NUM.F.NOM cow.F.PL.NOM REF.PRN.ACC graze.PRS.DU.3 on pasture.M.SG.LOC

(5) Dve kravi se pasejo na travniku.
two.NUM.F.NOM cow.F.DU.NOM REF.PRN.ACC graze.PRS.PL.3 on pasture.M.SG.LOC
「2 頭の牛が牧草地で草を食べている。」
(Marušič and Žaucer 2021: 18 に筆者が一部加筆・修正)

[2] これより少し後の箇所で、Jakop (2012: 353) は中央部の方言をゴレンスカ・ドレンスカの大部分とシュタイェルスカの南西部としているため、ここでの「中央部」も、おそらく同じ地域を指していると思われる。
[3] この文献にはページ番号がないため、本稿では筆者が便宜的に振ったページ番号 (1-22) を使用する。

2.4. Pavlič, Stepanov, and Stateva (2022)

まず Pavlič, Stepanov, and Stateva (2022: 1) は Jakop (2008) を引用し、男性名詞双数形は主格と対格でよく保たれ、生格と前置格は全ての方言で複数形化していたと述べている。さらに Pavlič, Stepanov, and Stateva (2022: 1-2) は、双数形の残存度合が異なる 6 方言において、他動詞文の主語・目的語となる名詞を男性名詞中心に分析し、統語論的観点から双数形の使用頻度の違いを調査している。結果として、全ての方言で動詞の双数形が見られたほか、主語と動詞の数は必ず一致し、動詞の双数形は主語の双数形を維持する役割を果たしていた。

3. 先行研究のまとめと問題提起

まず、男性名詞双数前置格形の記述に差異が見られる。Jakop (2012: 353) は双数・複数前置格形を区別する方言に言及しているが、Pavlič, Stepanov, and Stateva (2022: 1) は全ての方言で前置格形が双数・複数同形だと述べている。次に、主語と動詞の数の一致について記述に揺れがある。Marušič and Žaucer (2021: 17-18) は女性名詞主語の文で数の不一致が見られるとしているが、Pavlič, Stepanov, and Stateva (2022: 2) は主に男性名詞を調査し、数の不一致は見られなかったとしていた。そのため数の一致について、名詞性を限定せず調査する必要がある。さらに、「両親」「双子」は標準語で双数形・複数形の両方が使われる (Derganc 2006: 421-424 および Marušič and Žaucer 2021: 13)。Derganc (2006: 423) は「両親」が双数形・複数形両方で使われる理由を説明しているが、具体的な使い分けを述べていない。

上記を踏まえ、本研究の調査事項は、(i) 方言において男性名詞双数前置格形が残存しているか、(ii) 各方言における数表示の一致の体系、(iii)「両親」「双子」の複数形・双数形それぞれの使用状況、の 3 点とし、第 4 節で調査の具体的内容を述べる。なお、卒業論文では調査 1 から調査 4 まで行ったが、本稿では紙幅の都合上、調査 4 のみを取り上げる。

4. 調査 4

スロヴェニア語母語話者を対象に Google フォームで記述式アンケート調査を行った。アンケート中の英文は、英語コーパス English Web 2021 (enTenTen21) で集めた例文をもとに筆者が作成した。各節で対象とした調査項目を示すため、節の見出しに該当する調査項目の番号を振った。各方言群の名称の前には、第 1.1 節で用いたものと同じ番号を付している。

4.1. 調査方法

まず「両親」「双子」の単語と、「両親」「双子」を主語とする文を、それぞれ標準語と方言に訳してもらった。次に英語の前置詞句「about＋数詞 1〜3＋名詞」を、前置格支配の前置詞 o「〜について」を含む方言の前置詞句に訳してもらった。さらに、「数詞 2 / 3＋名詞」を主語とする英文を方言に訳してもらった。最後に生年・性別・15 歳までの居住地を尋ねる質問と、自由回答欄を設けた。

12 月 20 日までに 20 件の回答が得られ、回答者の属性は以下の表 1 の通りであった。金指 (2022: 11) が挙げていた方言群のうち、⑧コチェーウスカ方言群を除く全ての方言群に

属す話者の回答が集まった。金指 (2022: 11) によれば、⑧コチェーウスカ方言群は伝統的な方言学では独立の方言群とみなされていないため、実質的にはスロヴェニア語の全ての方言群の話者による回答が集まったと言えるが、回答数は方言群により差がある。

表 1: 調査 4 の回答者の属性

方言群	番号	生年	性別	方言群	番号	生年	性別
①コロシュカ	1	1991	女	⑥シュタイェルスカ	11	1976	女
	2	1997	女		12	1987	女
②プリモールスカ	3	1999	女		13	1989	女
③ロウタルスカ	4	1989	女		14	1991	女
	5	1999	女		15	1998	女
④ゴレンスカ	6	1961	男		16	1999	女
	7	1969	女	⑦パンノニア	17	1993	男
	8	1975	女	その他[4]	18	1999	女
	9	1998	女		19	1999	女
⑤ドレンスカ	10	1980	女		20	2002	女

4.2. 調査結果とその分析

4.2.1.「両親」「双子」の数表示（iii）

表 2: 文の主語となる「両親」「双子」の数表示[5]

	標準語				方言			
	「両親」		「双子」		「両親」		「双子」	
文の内容	一般論	一組の親	一般論	一組の双子	一般論	一組の親	一般論	一組の双子
双数形	0	**4**	5	**16**	1	**6**	5	**15**
複数形	**20**	16	**15**	4	**16**	11	**12**	2
合計	20	20	20	20	17	17	17	17

本稿では紙幅の都合上、文の主語となる「両親」「双子」の数表示のみに触れる。「両親」は標準語・方言両方で、一般論ではほぼ複数形のみが使われるが、一組の親への言及では一般論の文より双数形の回答数が増加している。「双子」は標準語・方言の両方で、一般論では複数形、一組の双子への言及では双数形が多い。したがって、標準語・方言ともに、文の主語となる「両親」「双子」の数表示は文の内容に左右される。加えて「双子」では、文の内容による数の使い分けがより厳密に行われる。

4.2.2. 各方言における男性名詞双数前置格形（i）

設問で使った英単語は、標準語に訳すと全て男性名詞となるが、文法的特徴が異なる。

[4]「その他」には、15 歳までに異なる方言群に属する 2 都市、あるいはスロヴェニアが話される地域の外に居住していた回答者を分類している。方言について考察する際は、この 3 名の回答は考慮していない。

[5] 本稿で扱わない調査 2 から、文の主語となる「両親」「双子」では、一般論を述べるときは複数形、一組の親・双子に言及するときは双数形が使われやすいことが分かった。これを受けて調査 4 では、「両親」「双子」について一般論を述べた文と一組の親・双子に言及した文を用意し、それぞれを訳してもらった。

表 3: アンケートで使った 9 個の名詞

英単語	標準語訳	標準語の PL.LOC[6]	名詞の文法的特徴[7]	DU≠PL の回答数
brother	brat	bratih	活動体 / 子音終わり	1
umbrella	dežnik	dežnikih	不活動体 / 子音終わり	2
colleague	kolega	kolegih	活動体 / 母音終わり	1
car	avto	avtih	不活動体 / 母音終わり	1
wolf	volk	volkovih	活動体 / 子音終わり / -ov- 語幹拡大	3
castle	grad	gradovih	不活動体 / 子音終わり / -ov- 語幹拡大	1
father	oče	očetih	活動体 / 母音終わり / -t- 語幹拡大	2
metro	metro	metrojih	不活動体 / 母音終わり / -j- 語幹拡大	1
human	človek	ljudeh	活動体 / PL で補充法	4

umbrella で双数・複数同形でなかった回答の 1 件は 13 番の回答者によるもので、dežnik (M) ではなく marela「傘 (F)」を使い、双数前置格形を双数造格形と同形の marelama としていた。今回の調査対象である男性名詞双数前置格形とは直接関係ないが、⑥シュタイェルスカでは女性名詞でも双数・複数前置格形を区別していることが分かる。これを除くと、語幹拡大型ではなく補充法も取らない brat, dežnik, kolega, avto は「DU≠PL の回答数」がそれぞれ 1 件ずつだが、dežnik は回答ミスの可能性がある[8]。brat, avto では、17 番の回答者が前置格形に双数・複数生格形語尾と同形の語尾 -ov を用いていた。古代教会スラヴ語では双数生格・所格[9]が同形であり (木村 1985: 61)、何らかの関連が考えられる。2 番の回答者は、kolega の双数前置格形を双数造格形と同形の kolegoma としていた。

語幹拡大型の volk, grad, oče, metro では、語尾の母音で数を区別した回答 (8 番・13 番・17 番の回答者) や、双数前置格形に双数造格形と同じ -oma を使った回答 (4 番)、本来語幹拡大型の名詞で語幹拡大せず曲用させたときのみ数を区別する回答 (2 番)[10] が確認できた。

človek は複数形で補充法を取るが、生格・前置格は双数・複数同形のため、双数生格・前置格形に複数形語幹が現れ、双数形パラダイムでは 2 つの語幹が混ざる[11]。双数・複数前置格形を区別したのは 3 番・10 番・11 番・15 番の回答者だった[12]。10 番・11 番・15 番の回答

[6] 表中のこの列は、スロヴェニア語の語形変化ツール Spletna verzija pregibnika Amebis Besana を参考にした。
[7] 活動体 / 不活動体の区別は男性名詞にのみ存在し、活動体は人か動物、不活動体はそれ以外を意味する (金指 2022: 36)。語幹拡大型の名詞は以下のようなものである。例えば、語幹拡大型でない avto は全ての数・格で語幹が avt- だが、語幹拡大型の oče は単数主格形以外の語幹が očet- となる (金指 2022: 55, 56)。
[8] dežnik で双数・複数同形でなかったのは 3 番の回答者で、双数前置格形を dežniki としていたが、この回答者は dežnik と človek 以外では全て双数・複数同形としていた。もしこの回答者が曲用の特殊な človek を除き、不活動体の dežnik のみで数を区別していたとすると、有生性の階層が高い名詞で見られない数の区別は、それより低い階層の名詞でも見られないと述べた Corbett (2000: 56-57) の主張と矛盾する。
[9] 所格は「現代ロシア語の《前置格》に当たる格である」(木村 1985: 58) が、「前置詞を伴わずに用いられることもある」(木村 1985: 58) という。スロヴェニア語の前置格は必ず前置詞とともに用いられる (金指 2022: 288) ため、古代教会スラヴ語の所格とはその点で異なるが、文中の機能は同一であると考えられる。
[10] この回答者は、volk の双数前置格形で volkoma、grad の双数・複数前置格形で gradovih と回答していた。標準語では volk, grad ともに -ov- による語幹拡大が起きる。よって、この回答者は標準語と同様に -ov- を用いた際 (grad) には数を区別せず、標準語と異なり -ov- を用いない場合 (volk) のみ数を区別している。
[11] človek の双数形変化は、človeka (NOM) / ljudi (GEN) / človekoma (DAT) / človeka (ACC) / ljudeh (LOC) / človekoma (INST) となる (金指 2022: 63)。
[12] 3 番の回答者は註 8 の通り、おそらく dežnik で回答ミスをしている。človek も dežnik と同様に語尾 -i を使っていたが、dežnik が回答ミスだと思われるため、同じ語尾を使った človek も回答ミスの可能性がある。

者は双数前置格形で človek 語幹に一般的な男性名詞双数・複数前置格形語尾 -ih をつけ、複数前置格形は標準語同様に複数形語幹を使っていた。加えて、12 番・13 番・17 番の回答者は双数・複数同形だったものの、双数だけでなく複数前置格形でも človek 語幹を使っていた。つまり、⑤ドレンスカ (10 番の回答者) では語幹の使い分けによる数の区別、⑦パンノニア (17 番) では človek 語幹の複数前置格形への進出、⑥シュタイェルスカ (11 番・12 番・13 番・15 番) ではその両方が見られることが分かる。

4.2.3. 主語と動詞の数表示の一致（ii）

表 4: アンケートで文の主語として用いた 12 個の名詞

英単語	標準語訳	性	その他特徴	有効回答[13]	数不一致	DU の PL 化
brother	brat	男性	活動体 / 子音終わり	15	0	0
umbrella	dežnik	男性	不活動体 / 子音終わり	5	0	0
colleague	kolega	男性	活動体 / 母音終わり	14	0	0
car	avto	男性	不活動体 / 母音終わり	14	0	0
wolf	volk	男性	活動体 / 子音終わり / -ov- 語幹拡大	14	0	0
castle	grad	男性	不活動体 / 子音終わり / -ov- 語幹拡大	14	0	0
father	oče	男性	活動体 / 母音終わり / -t- 語幹拡大	14	0	0
metro	metro	男性	不活動体 / 母音終わり / -j- 語幹拡大	11	0	0
cow	krava	女性	母音終わり	14	2	3
peach	breskev	女性	子音終わり	14	4	2
window	okno	中性	母音終わり	13	9	0
tree	drevo	中性	-es- 語幹拡大	14	8	1

文の主語とした名詞について、有効回答数、主語・動詞の数が不一致の回答数、主語・動詞両方で双数形が複数形化していた回答数とともに表 4 に示した。男性名詞主語文は主語の文法的特徴を問わず、全て双数形と複数形の区別を保っている。女性名詞主語文では主語と動詞の数の不一致と双数形の複数形化が両方観察され、子音終わりの名詞が母音終わりの名詞よりも数の不一致を起こしやすかった。しかし中性名詞主語文で「数不一致」とした回答のほとんどは、名詞や数詞の分析から、中性名詞が男性名詞化した回答だと分かった。

中性名詞主格形語尾は -i (DU) / -a (PL)、男性名詞主格形語尾は -a (DU) / -i (PL) で、中性名詞複数主格形と男性名詞双数主格形は同じ語尾になるため、双数形で男性名詞化した中性名詞は、形の上で双数・複数同形になる。ここで数詞に着目すると、英文の数詞 two は、回答では訳されていないか、dva / dve「2」または oba / obe「両方」と訳されていた。本来中性名詞につくのは女性・中性形の dve, obe だが、表 4 で「数不一致」とした回答のうち男性形 dva, oba を使わず訳していたものは 1 件のみだった。さらに、「数不一致」に分類していない回答や無効な回答も含めると、男性形 dva, oba を使った回答は全方言群で見られた。一方、数詞 three は訳されていないか、trije / tri「3」と訳されているかの 2 通りで、男性形 trije を使った回答は全回答中 3 件のみだった。男性形は three より two で多く見られたため、双

[13] 双数形主語文と複数形主語文のどちらかが無回答・主語と動詞のどちらかが訳されていない・主語の単語がこちらの想定と違う・数を間違えている (複数形を単数形に訳した回答など)、のいずれにも該当しないものを「有効回答」としている。

数形がより男性名詞化しやすいことが分かる。男性名詞双数形主語文では屈折語尾 -a によって双数形が安定した (Derganc 2006: 419-421, 429) ため、中性名詞主語文でも双数形の安定性を高める目的で、多くの回答者は双数形のみを男性名詞化させていたのだと思われる。

なお、表 4 で「DU の PL 化」とした中性名詞主語文の回答は、主語は双数・複数とも dreva で、two は dva と訳され、three は訳されていなかった。動詞はいずれの文でも複数形だった。dva を使っているため、dreva は男性名詞化した中性名詞双数形だと分かるが、複数形の動詞とは数が一致しない。この回答をしたのは 11 番の回答者で、⑥シュタイェルスカの南部の都市で 15 歳までを過ごしたと回答していた。そのため⑥シュタイェルスカ南部では男性名詞双数形主語の文でも双数形パラダイムの安定性が崩れていることが分かる。

5. まとめと今後の課題

第 3 節で示した調査項目 3 点についてまとめる。まず、(i) človek では語幹の使い分けによって、človek 以外では語尾の工夫によって男性名詞の双数・複数前置格形を区別している。⑥シュタイェルスカでは女性名詞でも前置格の双数形・複数形の区別が見られた。次に (ii) 女性名詞や中性名詞、男性名詞化した中性名詞が主語の文では数の不一致が見られること、中性名詞双数形の男性名詞化は全ての方言群で見られることが分かった。さらに (iii) 文の主語となる「両親」「双子」は、一般論では複数形、一組の親・双子への言及では双数形が使われやすく、特に「双子」でその傾向が強かった。

今回の調査 4 では、方言群によって回答数に差があったため、より広範囲にアンケートを実施し、偏りの少ない結果を目指したい。さらに、無回答やこちらの想定とは異なる回答があったため、質問文などを見直し、こちらの想定した回答が引き出せるよう工夫していく。

【略号一覧】1: 1 人称 / 2: 2 人称 / 3: 3 人称 / ACC: 対格 / AUX: 助動詞 / COP: コピュラ / DAT: 与格 / DU: 双数 / F: 女性 / GEN: 生格 / INST: 造格 / LOC: 前置格 / M: 男性 / NOM: 主格 / NUM: 数詞 / PART: 分詞 / PL: 複数 / PRN: 代名詞 / PST: 過去 / REF: 再帰 / SG: 単数

【参考文献】〈欧文〉Bajec, Anton et al. (eds.) (1970-1991[2000]) Slovar slovenskega knjižnega jezika. Spletna izdaja. http://bos.zrc-sazu.si/sskj.html [accessed 9 January 2024]. / Corbett, Greville G. (2000) *Number.* Cambridge: Cambridge University Press. / Derganc, Aleksandra (2003) The Dual in Slovenian. In: Janez Orešnik and Donald D. Reindl (eds.) *Sprachtypologie und Universalienforschung.* 56(3): 165-181. Berlin: Akademie Verlag. / Derganc, Aleksandra (2006) Some characteristics of the dual in Slovenian. *Slavistična revija* 54: 415- 434. Ljubljana: Slavistično društvo Slovenije. / Jakop, Tjaša (2008) *The dual in Slovene dialects.* Bochum: Universitätsverlag Dr. Norbert Brockmeyer. (筆者未見) / Jakop, Tjaša (2012) Use of dual in standard Slovene, colloquial Slovene and Slovene dialects. *Linguistica*. 52(1): 349-362. Ljubljana: University of Ljubljana Press. / Logar, Tine and Jakob Rigler (1983[2016]) *Karta slovenskih narečij z večjimi naselji.* https://fran.si/204/sla-slovenski-lingvisticni-atlas/datoteke/SLA_Karta-narecij.pdf [accessed 17 April 2023]. / Marušič, Franc and Rok Žaucer (2021) Case study: Slovenian dual. In: *The Oxford Handbook of Number in Language.* Oxford: Oxford University Press. to appear. / Pavlič, Matic, Arthur Stepanov, and Penka Stateva (2022) Distribution of the dual in relation to sentential function of the noun and preservation of dual morphology in six Slovenian dialects. Oral presentation at 15th European Conference on Formal Description of Slavic Languages. Humboldt University of Berlin main building, 7 October 2022. / Toporišič, Jože et al. (eds.) (2001[2010]) Slovenski pravopis. Spletna izdaja. http://bos.zrc-sazu.si/c/SP/ [accessed 9 January 2024].〈和文〉金指久美子 (2022)『スロヴェニア語文法』東京: 三修社. / 木村彰一 (1985)『古代教会スラブ語入門』東京: 白水社.

【その他ツール】〈スロヴェニア語の語形変化検索ツール〉 Spletna verzija pregibnika Amebis Besana. https://besana.amebis.si/pregibanje/ [accessed 9 January 2024].〈アンケート作成時に参考とした英文の収集元〉English Web 2021 (enTenTen21). https://app.sketchengine.eu/#dashboard?corpname=preloaded%2Fententen21_tt31 [accessed 22 December 2023].

ルーマニア語の時制の一致について
―コーパスに基づく量的な分析―

山﨑　晴太
（言語文化学部　イタリア語専攻）

キーワード：ルーマニア語，時制の一致，コーパス

0. はじめに

時制の一致は、亀井・河野・千野 (編著) (1996) の説明によると次のような事である。

(1) He told me that she was ill.

(亀井・河野・千野 (編著) 1996: 1021 下線は筆者による)

例文 (1) で実際に He が過去行った発言は “She is ill” だが、主節動詞が過去形を取っているため補文節の動詞 (is) も過去にずれ込む。このような現象を時制の一致という。

ルーマニア語ではこのような時制の一致は必須ではないという (鈴木 2020: 39)。そこで本稿ではルーマニア語の時制の一致についてコーパス調査を行う。

例文番号は本稿の通し番号に改めた。グロスも一部改めているが、意味に違いはない。

1. 背景知識：ルーマニア語の時制の一致について

1.1. ルーマニア語の時制

ルーマニア語の直説法の時制は、次の表の通りである。

表 1: ルーマニア語の時制

時制	作り方	用法	例: cânta (歌う) 1.SG, 2.SG
未来	1. 助動詞 vrea + 不定詞 2. 助動詞 o + să[1] + 接続法 3. 動詞 avea + să + 接続法	未来	1. voi cânta, vei cânta… 2. o să cânt, o să cânți 3. am să cănt, ai să cânți
未来完了	不定詞や接続法に fi[2]を付ける	未来のある時点での完了	vom fi cântat, o să fi cântat
現在	動詞末尾が現在形の活用	現在など	cânt, cânți…
複合過去	助動詞 avea + 動詞の過去分詞	過去	am cântat, ai cântat…
半過去	動詞末尾が半過去の活用	過去の未完了 / 継続	cântam, cântai…
単純過去	動詞末尾が単純過去の活用	現在とつながりのない過去	cântai, cântași…
過去完了	動詞末尾が過去完了の活用	過去のある時点での完了	cântasem, cântaseși…

(DEX online の cânta の活用表 (conjugări)[3] をもとに筆者作成)

さらに Zafiu (2013) によると完全には文法化されていない迂言形式で、過去未来 (過去から見た未来) も「avea / urma[4]の半過去 + 接続法動詞」の形式で存在する (Zafiu 2013: 38-39)。

[1] să は接続法マーカーである。
[2] a fi はコピュラ動詞の不定詞である
[3] https://dexonline.ro/definitie/c%C3%A2nta/paradigma [最終閲覧 2023 年 12 月 22 日]
[4] なお avea、urma の意味はそれぞれ英語の‘have’、‘follow’にあたる。

1.2. ルーマニア語の時制の一致

Zafiu (2013) は、ルーマニア語の時制の一致について、「従属節における動詞の時制は、直示のものではなく相対時制で使われる (Zafiu 2013: 63)」とし、現在形は同時関係を ((2) 前者)、未来形は主節への後続関係、複合過去は先行関係を表すとした。そのような時制の一致なしが無標だとした上で、半過去 ((2) 後者)や過去未来、大過去による表現も可能とした。(2) の後者では「彼はもう怒っていない」という推測ができるという (Zafiu 2013: 64)。

(2) Mi-a spus că **e / era** supărat
CL.1SG.DAT-'have'.3SG 'tell'.PART that COP.3.SG.PRS / COP.3.SG.IMPF 'angry'
He told me that he was angry.

(Zafiu 2013: 63-64)

2. 先行研究

2.1 鈴木 (2020)

鈴木 (2020) は、Zafiu (2013) を踏まえ、アガサ・クリスティの作品を利用し、厳格な時制の一致のシステムを持つ英語とルーマニア語のパラレルコーパスで補文節を伴う過去形の動詞の時制の一致の現れ方を調査した。調査の全体的な結果は次の通りである。

表 2: ルーマニア語の (過去の文脈中での) 補足節における各時制の出現頻度

	過去への移し替えなし (無標)		過去への移し替えあり (有標)	
同時関係 125 例	現在	46 例 (36,8%)	半過去	79 例 (63.2%)
先行関係 89 例	複合過去	20 例 (22.5%)	大過去	69 例 (77.5%)
後続関係 34 例	未来	30 例 (88.2%)	過去未来	4 例 (11.8%)

(鈴木 2020: 46)

I. 同時関係: 同時関係 (補文説の内容が主節と同時であるもの) では、英語の過去形がルーマニア語の有標である半過去形になるケースが最も多い (59.4%[5])。Comrie (1986) の、英語でも発話時に効力があれば補文節の時制の一致は随意的という記述を引用し、ルーマニア語で一致なしの場合の原文が全てこの性質であることを確認した。加えて、ルーマニア語で一致ありのものは原文でも一致ありであった。普遍的なような内容でも、英語原文が時制の一致を起こしている場合、ルーマニア語でも一致が起きたことも指摘した。

II. 先行関係: 先行関係 (補文節の内容が主節に先行しているもの) では、英語の過去完了のルーマニア語への翻訳で最も多いのが大過去 (53.4%)、最少は無標であるはずの複合過去であった (5.5%) ことに着目した。英語の過去完了の翻訳では、無標の複合過去ではなく、先行関係の明確になっている大過去が用いられやすくなっている可能性を提示している。

III. 後続関係: 後続関係 (補文説の内容が主節に後続するもの) では、英語の法助動詞過去形は大部分ルーマニア語の未来形になっている (76.9%)。ルーマニア語の過去未来に訳された法助動詞過去は 1 例しか存在せず、過去未来自体が過去形 3 例を含めた 4 例のみである。

鈴木 (2020) は、同時関係や先行関係ではもとの英語に引っ張られて有標の形が取られたが、過去未来を表す形式自体文法化がそれほど進んでいないこと原因として考えている。

[5] 表 2 との数値の食い違いは、鈴木 (2020: 46) によれば、英語版で「非定型」のもの、英語版で「動詞が欠如している」もの、「ルーマニア語版の補語節が英語版では従属節の体をなしていない」もの、「従属節ではあってもその動詞の基準点が過去の時間にない」ものを除外しているため。

2.2. 川瀬（2023）

川瀬 (2023) は、時制の一致が厳格なフランス語原作の作品[6]と、そのルーマニア語訳とでパラレルコーパスを作成し、時制の一致の現れ方を分析した。全部で 122 例があつまり、フランス語では大半の 119 例 (97.5%) が時制の一致を引き起こしており、3 例 (2.5%) のみが時制の一致を起こしていない。一方でルーマニア語では、時制の一致を起こしているのが 58 例 (47.5%)、起こしていないのが 64 例 (52.5%) であり、時制の一致の現れ方には大きな違いがあることがわかる。フランス語で時制の一致を起こした 119 例のルーマニア語訳の内訳は、時間関係ごとに次のようになっている。

I. 先行関係: Manea (2008) によると、書き言葉では大過去は十分広く使われているといい、調査の結果実際に会話文と地の文で現れやすさに違いがあったことを確認している。地の文に時制の一致ありは 22 例、なしが 1 例のみであり、会話文では 5 例全てが一致なしだった。この考察として、和田 (2021: 236) の、日本語の物語文がナレーター基準で物語るか、物語自体の時間に合わせて物語るかによって過去形・現在形の選択をするという研究を引き合いに、ルーマニア語でも同様の現象が起こっているのではないかとしている。

II. 同時関係: 地の文では一致ありが 28 例、一致なしが 15 例で一致ありがやや多く、会話文では時制の一致ありが 4 例、一致なしが 17 例であり、時制の一致無しが多いが、先行関係ほど一致の有無の偏りがはっきりしていない。会話文については、現在まで効力のないものが時制の一致を起こすとしているが、地の文については工藤 (2006: 108-109) の《時間的限定性》の観点から、《個別具体的な一時的現象》 では時制の一致が起き、《恒常的な特徴》においては時制の一致が起きない、という区別ができる可能性を示唆した。たとえば、「足が震えた」という事は《個別具体的な一時的現象》にあたるので、半過去になり、つまり時制の一致が起きているという一方で、「大家さんが素敵である (LF: p.59), (LR: p.53)」のような文は《恒常的な特徴》になるので、時制の一致が起きていないという。図にまとめると次の通りになる。

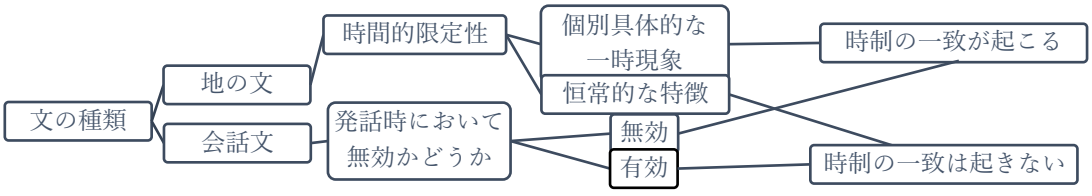


図 1: 川瀬 (2023) における同時関係の場合の時制の一致の現れ方

III. 後続関係: 一致ありは aveam să が 2 例、urma să が 1 例、一致なしは[vrea 不定詞]が 22 例、o să が 2 例であった。川瀬 (2023) は他の研究同様、後続関係は文法化の不完全なものであるとし、先行・同時関係とは違う形態的特徴を持つことなどから、深くは論じていない。

2.3. 先行研究のまとめと問題点

[6] 川瀬 (2023)で使われたのは、Agnès Martin-Lugand (2014) *Les gens heureux lisent et boivent du café* (2014 年 Pocket)、ルーマニア語訳は Agnès Martin-Lugand, *Oamenii fericiți citesc și beau cafea*, Traducere din franceza de Carmen Otilia Spînu, 2016, Editura Trei であり、本稿ではそれぞれ LF と LR と表記することにする。

鈴木 (2020) は、英語からルーマニア語への翻訳を通して、ルーマニア語の時制の一致が英語の時制の一致に引っ張られる傾向があること、ただし後続関係においてはほとんど現れないことを明らかにした。川瀬 (2023) は、物語の分析を通し会話文では時制の一致は少ないが発話時に無効であれば時制の一致が起こり、地の文では時制の一致が起きるが、時間的限定性において恒常的な特徴を表せば時制の一致は起きにくいことを明らかにした。

鈴木 (2020) や川瀬 (2023) の指摘は重要だが、どちらも一つの小説内という制約のためサンプル数を多く確保できず、個別の動詞ごとの分析はされていない。加えて、川瀬 (2023) は、先行関係では物語視点とナレーター視点の導入、同時関係では時間的限定性など、異なる種類の尺度を持ち出している。そこで本稿では、主節動詞 / 補文節動詞の種類と時制の一致に関連はあるか、時間関係ごとの別々の尺度がそれ自体で時制の一致の有無に直接的に作用するものとして妥当であるかどうかを調査する。

3. 調査方法

本稿では、Sketch Engine の EUR-Lex 2/2016 parallel – Romanian[7]で concordance>advanced search>CQL 検索で正規表現を利用し、動詞を tag[8]で文構造ごと検索、分類し、次の 3 点を観察する。観察 1: lemma から first KWIC で分類し主節動詞ごとに時制の一致に傾向があるか、観察 2: Word を last KWIC で分類し補文節内の動詞で分類し傾向があるか、観察 3: 文書の種類で時制の一致の偏りがあるか。実際に使用した式は次のようなものである。

表 3: 調査で使用した検索式一覧[9]

	式	見つかる文
検索式 1	[tag="V.p.*"][word="că"][tag!="V.*"&tag!="Pw.*"]{0,20}[tag="V...1.*|V...2.*|V...3.*"] > KWIC first word left: avea, a	[動詞複合過去 + 補文節]の文
検索式 2	[tag="V.p.*"][tag="A.*|R.*"]{0,6}[tag="N...r.*"][word="că"][tag!="V.*"]{0,20}[tag="V...1.*|V...2.*|V...3.*"]	[複合過去 + 目的語 + 補文節]の文
検索式 3	[tag="V..i.*"][word="că"][tag!="V.*"&tag!="Pw.*"]{0,20}[tag="V...1.*|V...2.*|V...3.*"]	[動詞の半過去 + 補文節]の文
検索式 4	[tag="V..i.*"][tag="A.*|R.*"]{0,6}[tag="N...r.*"][word="că"][tag!="V.*"]{0,20}[tag="V...1.*|V...2.*|V...3.*"]	[動詞の半過去 + 目的語 + 補文節]の文

なおコーパス側の tag の仕分け間違いをなるべく排除するため、filter 機能を利用し [lemma="pentru\|de"][tag="P.*"]{0,1}[tag="V..i.*"] を KWIC と KWIC の直前の 3 要素から除外した。加えて、例の少ない動詞のデータで数値が偏らないように、検索式 1 と 3 では first KWIC 続いて、last KWIC の lemma の frequency で主節動詞を分類し、30 例未満の動詞は除外した。

次に last KWIC の tag の frequency で分類し、半過去と大過去のものに絞り時制の一致だけを抽出した。一致なしと一致ありの数値をエクセルに記録し、一致の割合を調査する。

---

[7] EUR-Lex 2/2016 parallel – Romanian は欧州連合 EU の文書を集めたもので、466,143,483 トークン、336,928,068 語、39,355,543 文が存在する。文書の種類は 99 種類に分類されている。

[8] tag を複数利用すると構造で検索をすることができる。[ ] が一つで一つの語を指す。例えば検索式 3 は、

[tag="V..i.* "]	[word="că"]	[tag!="V.*"&tag!="Pw.*"]{0,20}	[tag="V...1.*|V...2.*|V...3.*"]
V & IMPF	că	[not [V & (CON & REL)]]:0~20 連続する	V & (1 & 2 & 3)

となる。

[9] 単純過去動詞での検索式 5, 6 も用意したが、単純過去の-ă で終わる 3 人称は、現在形の 3 人称と文字上区別ができない。Zafiu (2013) によると単純過去の使用は稀であるという。そこから、多くの場合、現在時制のものが誤って分類されているものと考えられるので、現在時制として扱った。

動詞の細かい意味などは、「オンラインルーマニア語明解辞典 (Dicționar Explicativ ale Limbii Române online : https://dexonline.ro/、本稿では「DEX online」) を参考にした。

4. 結果

例文を載せる際は、その例文の文書の種類と CELEX number を記載する。CELEX number は各文書に割り振られた番号である。日本語訳する際には EUR-Lex の公式サイト で同一の文書の英語版を参考にしている。EUR-Lex からの例文は、上から順にルーマニア語、逐語訳、日本語訳、そしてその下に参考にした英語版の該当箇所の順番で掲載している。表の空欄は十分なデータ数 (その分類全体で 30 以上) がないものである。なお表の中では「時制の一致」を「SOT (sequence of tenses の略)」と記し、小数点第 2 位以下は切り捨てた。検索式 1 は CP、検索式 3 は IMPF と記すことがある。

4.1. 時制の一致全体

検索式ごとに次のデータが取れた。

表 4: 検索式のヒット数

	見つかる文	全体数	SOT 数	SOT%
検索式 1	[動詞複合過去 + 補文節]	78549	17046	21.70
検索式 2	[複合過去 + 目的語 + 補文節]	8846	999	13.64
検索式 3	[動詞の半過去 + 補文節]	3777	1480	39.18
検索式 4	[動詞の半過去 + 目的語 + 補文節]	1213	392	32.31

主節動詞が半過去のもの (検索式 3, 4) は主節動詞が複合時制のもの (検索式 1, 2) よりも時制の一致の割合が高く出ており、補文節の直前が動詞単体のもの (検索式 1, 3) は、動詞 + 名詞のもの (検索式 2, 4) よりも時制の一致割合が高く出ていることも分かる。

時間関係ごとに分けた時制の一致割合は次の通りである。

表 5: 時間関係ごとの時制の一致割合[10]

	先行関係 (ANTE)			同時関係 (SIMUL)			後続関係 (POST)		
	全体数	SOT 数	SOT%	全体数	SOT 数	SOT%	全体数	SOT 数	SOT%
検索式 1	19275	1929	10.00	49155	14900	30.31	2299	104	4.52
検索式 3	748	128	17.11	2379	1352	56.83	353	96	27.19

I. 先行関係: Last KWIC tag が助動詞 avea、直後が過去分詞になっているものを「時制の一致なし」とし、Last KWIC tag が大過去になっているものを「時制の一致あり」とした。
II. 同時関係: Last KWIC tag が主動詞現在時制および単純過去に分類されているものを「時制の一致なし」、Last KWIC tag が半過去になっているものを「時制の一致あり」とした。
III. 後続関係: Last KWIC lemma が vrea で助動詞であるものと、主動詞に分類されているが動詞の不定詞が後続しているもの[11]を「時制の一致なし」、Last KWIC tag が半過去の avea / urma の 3 人称であり、直後に接続法 [să + 動詞] が続くもの、「時制の一致あり」とした。

[10] 上の表に含まれない「その他」は、検索式 1 では 7786 例、検索式 3 では 297 例あった。
[11] 未来時制は、助動詞 vrea+動詞不定詞によって作られるが、3 人称複数は主動詞の vrea「欲する」とになる。主動詞の vrea の場合、不定詞よりも動詞の接続法が現れる方が一般的とされる為、不定詞が続いているものはひとまず未来時制の vrea の tag 分類間違いとしてひとまず扱う。

この全体数を分析すると、主節動詞が半過去のものの方が複合過去時制のものよりも時制の一致が多く起こり、同時関係の時制の一致割合が、他のものよりも高いことも分かる。

4.2. 主節動詞ごとの分析

動詞 (動詞の意味 CP の時制の一致割合 (%) / IMPF の時制の一致割合 (%)) の順で記すと、aprecia (理解する 47.76 / 68.93)、considera (考える 36.88 / 42.51)、adăuga (加える 33.27 / 47.82)、preciza (主張する 28.10 / 49.35)、rezulta (生じる 26.81 / 58.58)、constata (主張する 25.89 / 50)、arăta (示す 21.42 / 42.08)、estima (見積もる 21.04 / 42.85)、menționa (言及する 20.51 / 47.91)、concluziona (結論する 19.85 / 14.83)、recunoaște (認知する 19.40 / 37.5)、indica (示す 19.02 / 44)、însemna (意味する 18.81 / 72)、reieși (生じる 18.72 / 48.19)、pretinde (主張する 18.39 / 22)、dovedi (示す 17.77 / 36.66)、presupune (推測する 17.11 / 25.67)、sublinia (強調する 16.37 / 32.81)、susține (主張する 16.22 / 36.28)、declara (宣言する 13.71 / 23.07)、afirma (肯定する 12.23 / 23.30) demonstra (示す 11.64 / 34.74)、prevedea (予見する 11.64 / 51.70)、stabili (定める 11.40 / 39.39)、preconiza (期待する 9.67 / 5.40)、sugera (提案する 8.741 / 11.66)、garanta (保証する 8.10 / 45.83) となった。やはり全体的に半過去の一致割合が高く出る傾向が見られる。一致割合は CP と IMPF で相関係数が 0.55 で、弱い相関がある。つまりそれぞれの動詞ごとに時制の一致割合の高低の若干の傾向がある。時間関係ごとの分析は次の通り。

I. 先行関係: CP では aminti (思い出させる 32.35%) の一致割合が最も高かった。aminti は主節動詞の中で唯一 SIMUL より ANTE の一致割合が高い。IMPF では意味的に近い arăta (示す 22.98%) や demonstra (示す 22.58%) が最も時制の一致の割合が高い。

II. 同時関係: CP では înțelege (理解する 66.66%)、aprecia (理解する 56.63%) の一致割合が高かった。IMPF では rezulta (生じる 86.66%)、reieși (生じる 86.48%) の一致割合が高く出た。

III. 後続関係: preconiza (期待する) などの、意味的に補文節で後続関係を多く取りやすいものは、後続関係の時制の一致表現の文法化が不完全なため、そういった動詞の時制の一致割合は低く出やすい。そもそも時制の一致ありの表現である urma / avea să は、特に公文書を分析する場合だと義務的なニュアンスを取り除き難く、分析が難しい。

4.3. 補文節動詞ごとの分析

補文節動詞の一致割合は、urma (従う 76.28 / 94.89)、face (する 42.73 / 60.60)、afla (わかる 39.62 / 56.66)、constitui (構成する 35.17 / 60)、fi (コピュラ 33.95 / 59.94)、trebui (義務・推奨 32.17 / 59.23)、putea (可能 27.42 / 66.66)、îndeplini (満たす 25.58 / 63.88)、exista (存在する 23.29 / 35.78)、reprezenta (代表する 22.79 / 26.92)、aplica (用いる 22.05 / 41.17)、avea (3.27 / 9.77) となった。相関係数は 0.86 で、強い相関がある。時間関係ごとに整理すると次の通りである。なお後続関係はサンプル数が足りず分析ができなかったため省略した。。

I. 先行関係: CP では invoca (発動する 38.23%)、începe (始める 36.03%)、înceta (止める 33.78%)、participa (参加する 32.74%) といった開始 / 終了やテリックな意味の動詞が上位に出た。

II. 同時関係: CP では、今まで見たような意味の類似したものはないように見えるが、単純に 130 単語にサンプルが割れているため発見しづらくなっているだけかもしれない。IMPF

では putea (可能 66.56%) ついで îndeplini (満たす 62.5%)、constitui (構成する 60.81%)、trebui (推奨 / 義務 59.23%) といったものが上位であった。

なおほとんど同じ文であるのに時制の一致の有無が違う 2 つの文書があり (3)、主節や補文節の動詞それらだけで時制の一致の有無が決定づけられるわけでもないようである。

(3) Curtea a amintit de asemenea că din / de la punctul 1 A primul paragraf din Liniile directoare .....
reieșea că acest impact **trebuie / trebuia** luat în considerare numai atunci când este / era măsurabil

Curtea	a	amintit	de asemenea	că	din / de la
'court'.SG.DEF	'have'.3.SG	'remind'PART	'similarly'	that	'from'

cuprinsul	punctului	1A	primul	paragraf	din
'comprehensive'.DEF	'point'.DEF.GEN	'1A'	'first'	'paragraph'	'of'

Liniile	directoare	.....
'line'.PL.DEF	'guiding'	

reieșea	că	acest	impact	**trebuie / trebuia**		luat
'emerge'.3.SG.IMPF	that	'this'	'impact'	'should'.3.SG.**PRS**	/	'take'.PART
				'should'.3.SG.**IMPF**		

în	considerare	numai	atunci când	este / era	măsurabil
'in'	'consideration'	'only'	'when'	COP.3.SG.PRS / COP.3.SG.IMPF	'measurable'

同様に、裁判所は、1998 年のガイドライン第 1 条 A の第 1 項の観点から、この影響は計測可能な限り考慮されるべきだと主張した (言及した)。

(The Court of Justice has also stated that it is apparent from the first paragraph of Section 1A ...Guidelines that that impact is to be taken into account only where this can be measured)

(Judgment 62006TJ0357 / Judgment 62006TJ0362　一部省略)

4.4. 文書の種類ごとの分析

文書の名前 (意味 CP の SOT% / IMPF の SOT%) で並べると、Judgment (判決 47.96 / 55.88)、Order (命令 35.29 / 33.33)、Advocate Generals Opinion (法務官意見 30.75 / 43.11)、Provisional data (暫定データ 28.38 / 48.27)、Judicial information (司法情報 27.42 / 34)、Decision (決定 19.00 / 35.61)、Report(報告 16.00 / 31.31)、Regulation (規則 14.70 / 14.95)、Proposal for a regulation (規則の提案 12.08 / 20.28)、Implementing regulation (実行規則 9.08 / 15.68)、Communication (伝達 8.46 / 21.25)、Consolidated text (統合文書 8.02 / 16.66)、Opinion (意見 6.24 / 7.89)、Proposal for a decision without addressee (決定の提案 4.91 / 10) となる。相関係数は CP と IMPF の間で 0.90 の強い相関がある。時間関係ごとに分けた場合も全ての時間関係で Judgment、Order、Advocate Generals Opinion、Judicial information といった一致割合の順位はおよそ固定であり、それぞれ相関係数は ANTE-SIMUL で 0.88、SIMUL-POST で 0.92、POST-ANTE で 0.96 と、全て高い相関係数が出た。つまり、文書ごとの分類では、時間関係にかかわらず同じ傾向が現れる。

5. 結論・今後の課題

本稿はルーマニア語の時制の一致についてコーパス調査を行い、次のことがわかった。①主節動詞が半過去であるもの、複合過去であるものより一致割合が高くなる傾向がある。

時間関係では同時関係のものは時制の一致割合が高く出る傾向にある。②時間関係ごとに分類すれば、主節動詞・補文節動詞は意味と時制の一致に関連を見いだせる。③時制の一致の有無が主節・補文節動詞の内容だけで時制の一致の有無が決定するわけでもない。④同じ書き言葉でありながら、文書の種類によって一致割合が異なり、時間関係ごとに分類してもその文書ごとの一致割合の傾向が強く残ったことから、時制の一致を共通の尺度で測れる可能性がある。時間関係の観点はそれぞれの主節動詞 / 補文節動詞の意味に対してのものであり、それ単体で時制の一致の有無を決定するものではない。文書ごとの時制の一致割合の傾向は動詞の意味とは別の、文脈を構成する何かの要素によって形成されるものであろう。

今後の課題として、わずかに見られたコーパス側の tag の振り間違いへの対策や Sketch Engine の仕様上踏み込んだ調査ができなかった検索式 2, 4 の運用、サンプル数のさらなる確保、内容に踏み込んだ質的調査、各動詞・時間関係の特徴の観点からの考察、そして本稿ではコーパスの性質上行えなかった話し言葉の調査が必要である。

略号一覧

1: 1 人称
3: 3 人称
ANTE: 先行関係
CL: 接語形
CON: 接続詞
COP: コピュラ動詞
CP: 複合過去
DAT: 与格
DEF: 定冠詞
IMPF: 半過去
PART: 分詞形
PL: 複数
POST: 後続関係
PRS: 現在
REL: 関係詞
SG: 単数
SIMUL: 同時関係
V: 動詞

参考文献

Comrie, Bernard (1986) Tense in indirect speech, *Folia linguistica*. 20: 265-296.(筆者未見) / 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1996)『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京: 三省堂. / 川瀬瑛美 (2023)「フランス語との対照からみたルーマニア語の間接話法における時制の一致」東京フランス語学会研究会第 57 回研究会発表資料 https://drive.google.com/file/d/13IW343YbftU9qSVTXBJF9Qumwp51_0Ui/view (最終閲覧 2023 年 7 月 9 日) / 工藤真由美 (2006)「アスペクト・テンス」小林隆 (編)『方言の文法』93-136. 東京: 岩波書店. / Manea, Dana (2008) Timpul, *Academia Română, Institutul de Lingvistică "Iorgu Iordan-Al. Rosetti", Gramatica limbii române*. 1: 394-468. Bucureşti: Editura Academiei Române./ 鈴木信吾 (2020)「ルーマニア語における「時制の一致」のあり (有標)・なし (無標) について: ―アガサ・クリスティの原文とルーマニア語訳文中で間接話法がもつ対応関係をもとに―」『研究紀要』43: 39-61. 東京: 東京音楽大学. / 和田尚明 (2021) 「日英語の三人称小説における時制形式選択とその関連現象 使用言語の三層モデルと C-牽引に基づく分析」益岡隆志 (監修) 定延利之ほか (編)『［研究プロジェクト］時間と言語 文法研究の新たな可能性を求めて』231-260. 東京: ひつじ書房. / Zafiu, Rodica (2013) Mood, tense and aspect. Gabriela Pană Dindelegan (ed) *The grammar of Romanian*. 24-65. Oxford: Oxford Univ. Press.

調査資料

鈴木 (2020)の調査資料 (筆者未見) ME: Christie, Agatha (2002) *The thirteen problems*. London: Harper Collins Publishers. / MJ: クリスティー, アガサ, 中村妙子 (訳) (2003)『火曜クラブ』東京: 早川書房. / MR: Christie, Agatha (2014) *13 [treisprezece] probleme*, trad.: Cristina Mihaela Tripon. (2014) Bucureşti: Editura RAO. / 川瀬 (2023) の調査資料 (筆者未見) Martin-Lugand, Agnès (2022) *Les gens heureux lisent et boivent du café*, Pocket, Suite du premier tirage 2022 / ルーマニア語版: Martin-Lugand, Agnès (2016) *Oamenii fericiți citesc și beau cafea*, Traducere din franceza de Carmen Otilia Spînu, Editura Trei / 本稿の調査資料 EUR-Lex 公式ホームページ: https://eur-lex.europa.eu/homepage.html (最終閲覧 2024 年 1 月 11 日) Dicționar explicativ al limbii Române: https://dexonline.ro/ (最終閲覧 2024 年 1 月 11 日) Sketch Engine: https://www.sketchengine.eu/ EUR-Lex 2/2016 parallel – Romanian (最終閲覧 2024 年 1 月 11 日)

13 世紀の中高ドイツ語における否定表現 “ne/en” “niht” の統語論的特徴

湯澤　奏音
（言語文化学部　ドイツ語専攻）

キーワード：中高ドイツ語，否定表現，統語論，コーパス調査

0. はじめに

本稿は、中高ドイツ語[1] (Mittelhochdeutsch) の否定表現の統語論的特徴について論じるものである。本文中の例文番号、表、グロス、傍線等装飾、訳は特に断りのない限り筆者によるものである。本文中に niht の異形として nicht/níet/nit 等が、ne/en の異形として ni/in/n 等が現れるが、個別の例文に対する解説部を除いて、niht と ne/en に統一する。

1. 背景知識

1.1. 中高ドイツ語の文法的特徴

橋本 (1989: 1209) によると、中高ドイツ語の統語面では、語順は新高ドイツ語に比べて制約が緩やかで、接続詞がなくとも従属関係が作られたり、性・数・格の不一致があったりすることも珍しくない。

1.2. 中高ドイツ語における否定表現

1.2.1. 否定辞 ne/en

表 1: 否定辞 ne/en の条件と例

否定辞	条件	例
ne	1．母音で終わる語に接続 2．子音終わりの語の語末子音が脱落したものに前接	1．sine (she does / is not) 2．ich ne → ine/ichn (I do / am not)
en	母音・子音の両方に接頭辞と同様に接続	ich enweiz (I do not know)

(武市 (2014: 2-3)、Oksaar (1965: 370)をもとに筆者作成)

1.2.2. 二重否定と否定語 niht

二重否定により、否定が強調されるという特徴がある。二重否定について、森本 (1983: 28) は、ゲルマン語が ni の不明確さを他の語で補おうとした結果、累積的否定構造が生まれたと考察している。しかし、後期中高ドイツ語では、ne/en が時折脱落するようになった (谷口 1956: 37)。

[1] 相良（編著）(1953: 1) によると、中高ドイツ語は、1070 年から 1520 年までの高地ドイツ語であるという。

2. 先行研究（武市 2014）

武市 (2014) は、『ザクセン宝鑑』[2](独名: “Sachsenspiegel”) の序文に見られる否定表現をまとめ、全例をレクラム版[3]と比較検証している。なお、先行研究の武市 (2014) に倣い、「副文」「従属節」は用いず、「主文」「従属文」を使うこととする。

表 2:『ザクセン宝鑑』における否定表現

一語による否定		
ne	主文	2
	接続法除外文	2
nene	主文	3
nicht	主文	3
	従属文	5
neman	主文	3
	従属文	2
kleine	主文	1
selden	主文	1
合計		22

二重否定		
ne + nicht	主文	4
	従属文	3
ne + nie	主文	1
	従属文	2
ne + nieman	主文	1
	従属文	2
ne + nene	主文	2
合計		15

(武市 (2014: 28) をもとに筆者作成)

表 3: 主文と従属文の個数

	一語による否定	二重否定	計
主文	13	8	21
従属文	9	7	16
計	22	15	37

(武市 (2014: 28) をもとに筆者作成)

3. 問題提起

武市 (2014: 28) は、数値的に見たところ主文と従属文の違いによる有意な差は見られないというように結論付けているが、そもそも文例の件数が一語による否定が計 22 文、二重否定の文が 15 文となっており、多いとはいえない。よって、本稿では、否定語 niht と否定辞 ne/en を中心により多くのデータを収集し、否定語の統語論的側面により注目して論じることを目的に、以下のことを調査する。

・niht がどこに出現しやすいか (統語論的側面)
・否定辞 ne/en が niht と共起する際、どちらが先に出現するか。出現条件に特徴はあるか
・ne/en の接頭辞化の頻度

[2] 『ザクセン宝鑑』は、1220 年から 1235 年の間にドイツ南東部ザクセン地方で成立した法書である。作者はザクセン生まれの騎士アイケ・フォン・レプゴー (1180 ころ−1233 以後) であり、各地の裁判所で参審員として活動した経験を基に、ザクセン地方の慣習法を成文化したものが『ザクセン宝鑑』である (日本大百科全書「ザクセン・シュピーゲル」の項)。

[3] ドイツの小型廉価本「レクラム百科文庫」のことであり、古典作品をはじめとして様々なジャンル、様々な言語の翻訳版などを収録している (日本大百科全書「レクラム文庫」の項)。

3 点目については、以下の例 1 のように、ne/en が動詞に接頭辞として接続する現象を、「接頭辞化」と定義したうえで調査を行う。

例 1) daz enlêrte mich mîn vater niht

daz	en-lêrte	mich	mîn	vater	niht
that	NE-teach.PST	1SG.ACC	1SG.POSS	father	NEG

私の父が私に教えなかった (こと)

(森本 1983: 29)

4. 調査方法

中高ドイツ語コーパス[4]で時代、ジャンルを指定し、ne、niht などのレーマで絞る。例えば、13 世紀の詩から、ne のレーマを含む文章を抽出する場合には、以下の通りになる。

lemma="***ne***"&meta::time=/.***13**.*/&meta::topic=/.***Poesie**.*/

調査対象は、ne/en、niht がそれぞれ単独で現れるものと、ne/en が niht と共起するものの上位 100 件である。ne/en と niht が共起するものについては、例 1 のように、en と niht の間に動詞など別の品詞が入るような文章を得るための式が作成できず、レーマに ne を設定し、niht と共起しているものを手作業で抽出した。

5. 調査結果

5.1. niht

5.1.1. 13 世紀の niht のジャンル別出現頻度

まず、『ザクセン宝鑑』が成立した 13 世紀の niht をジャンル別に以下の表にまとめる。

表 4: 13 世紀における niht のジャンル別出現頻度 (小数点第 3 位を四捨五入)

ジャンル	個数	文献数	個数／文献数
① Poesie (詩)	2948	74	39.84
② Literatur (文学)[5]	0	0	0
③ Religion (宗教)	4981	110	45.28
④ Wissen (学問・科学)	490	15	32.67
⑤ Alltag (日記)	11	3	3.66
13 世紀の niht 全体[6]	7313	150	

5.1.2. niht の分類

niht に関しては、単体で否定語として機能するもののうちで、主文か従属文か、本動詞

[4] 1050 年から 1350 年にかけての作品テクストから 200 万語が収録されている。テクストの数は計 394 あり、内訳は、散文が 188、韻文が 184、散文と韻文両方が使用されているものが 9、証書が 13 である。

[5] Literatur に関しては、コーパス全体でも 12 世紀の文献 1 件のみ収録されているため、本稿では今後直接扱わないこととする。

[6] ジャンルごとの重複分が多いため、合計数でなく、ジャンルを絞らずに検索をかけた結果を示した。なお、この時の検索式は、lemma=”niht”&meta::time=/.*13.*/である。

もしくは助動詞の前後どちらか、そして、名詞的機能か副詞的機能[7]かという 3 つの観点によって分類した。なお、名詞的な niht の数と副詞的な niht の数を対照した際により多くの結果が出たほうの数字を太字で示している。

表 5: niht の出現箇所についての分類

niht の位置	ジャンル	名詞的 niht			副詞的 niht			合計
		主文	従属文	不明[8]	主文	従属文	不明	
本動詞前	Poesie	-	-	-	**3**	**1**	**1**	5
	Religion	3	3	-	**13**	**7**	-	26
	Wissen	2	2	-	**5**	**5**	-	14
	Alltag	-	-	-	**1**	-	-	1
本動詞後	Poesie	-	-	-	-	-	-	-
	Religion	1	1	-	**2**	**2**	-	6
	Wissen	1	-	-	**8**	-	-	9
	Alltag	-	-	-	-	-	-	-
助動詞前	Poesie	-	**1**	-	-	-	-	1
	Religion	1	-	**1**	**4**	**1**	-	7
	Wissen	**1**	-	-	-	**2**	-	3
	Alltag	-	-	-	-	-	-	-
助動詞後	Poesie	-	1	-	-	1	-	2
	Religion	**1**	-	-	-	-	-	1
	Wissen	**1**	-	-	-	-	-	1
	Alltag	-	-	-	-	-	-	-
名詞、形容詞、前置詞句等に接続	Poesie	1	-	-	**2**	-	-	3
	Religion	-	-	-	**9**	**1**	**2**	12
	Wissen	1	-	-	**3**	-	**1**	5
	Alltag	-	-	-	**1**	-	-	1
合計		13	8	1	51	20	4	97[9]

表について、主文従属文ともに副詞的機能を持つものの方が多く、出現箇所については、本動詞に前置するものが多いことが分かった (表中下線部参照)。

本動詞に前置し、さらに副詞的機能を持つものについて、以下に 1 例を挙げる。

例 2)　daz er ſich iſ niht erzeigete.

daz	er	ſich	iſ	niht	erzeigete
that	he	oneself	it	NEG	show.PST

彼は見せていないということ。

これは従属文の例で、本動詞 erzeigete が文末にあり、その直前に niht が置かれている。

次は、主文で動詞の後に置かれた niht の例である。

[7] コーパスの例文の “inflection”、“inflectionClass”、“inflectionClassLemma” 欄の説明によって判別する。
[8] 従属接続詞の有無で主文と従属文を分けているが、分かりかねる場合はこちらに分類した。
[9] 全体の件数は、Alltag (日記) 11 件と、ほか 3 種類それぞれ 100 件を合わせた 311 件である。

例 3) uollen ge wir nicht deme ſwarzen raben

uollen ge[10]	wir	nicht	deme	ſwarzen	raben
follow	1PL.NOM	NEG	DAT.M.SG	black	crow.DAT

私たちは、その黒いカラスを追いかけない。

5.2. ne/en

5.2.1. 13 世紀のジャンル別出現頻度

以下の表 6 と表 7 は、13 世紀の ne/en の出現頻度と上位 100 件中の個数についてまとめたものである。ただし、表 6 の Alltag は 12 件のみであり、その内訳を表示している。

表 6: ジャンル別出現頻度

ジャンル	個数	文献数	個数/文献数
①Poesie	3561	71	50.15
②Religion	3663	102	35.91
③Wissen	714	16	44.63
④Alltag	12	2	6.00
ne/en 全体	5735	141	

表 7: 検索結果上位 100 個中の ne/en 個数

ジャンル	ne	en	合計
①Poesie	100	0	100
②Religion	81	19	100
③Wissen	82	18	100
④Alltag	1	11	12
合計	264	48	312

文献 1 つ当たりの ne/en の出現個数と ne の出現率が一番高いのは Poesie である。ne の数に関しても、Alltag を除いたほかのジャンルでは en よりも個数が多いことが分かった。

5.2.2. 接頭辞化の観点での ne/en の統辞論的特徴

以下の表は、ne/en がそれぞれ接頭辞化があるかどうか、どのような種類の動詞と接続したかをまとめた表である。太字は、表中でも多くの結果が得られた部分である。

表 8: ne/en の接頭辞化の傾向 (括弧内は文が従属文であった場合)

		Ne				en				
	動詞の特徴	P[11]	R	W	A	P	R	W	A	計
接頭辞化：有	本動詞	5 (4)	1	-	-	-	4	2	-	12 (4)
	話法の助動詞[12]	3	2	3	-	-	1	-	-	9
	その他助動詞[13]	2	3	2	-	-	-	-	-	7
	小計	10(4)	6	5	0	0	5	2	0	
接頭辞化：無	本動詞	**23 (5)**	**25 (2)**	**22**	-	-	4	3	-	77 (7)
	話法の助動詞	**16 (3)**	**7 (1)**	**13 (1)**	**- (2)**	-	1	1	-	38 (7)
	その他助動詞	**4**	**10 (1)**	**12**	**- (1)**	-	-	-	-	26 (2)
	小計	43 (8)	42 (4)	47 (1)	0 (3)	0	5	4	0	

[10] おそらく書体の影響か、v が u、w が vv もしくは uu と表記されるなど、一部の綴りに揺れがある。本稿では、コーパスに記載されている原文をそのまま使用する。
[11] P: Poesie (詩)、R: Religion (宗教)、W: Wissen (学問・科学)、A: Alltag (日記) の略である。
[12] 動詞に意志や義務などの意味を付与できる助動詞である。
[13] 時制や態を表す動詞である。コピュラも含まれる。

この調査で、主文と従属文では主文のほうが接頭辞化のないものが多く、ne/en の項目をそれぞれ比較すると、主文・従属文の別にかかわらず、ne の方が多かったことが分かった。

接頭辞化があるものの特徴として、否定辞と定動詞をセットにして考えた場合、ne＋定動詞が、接語単位で数えると、第 2 位に現れるという統辞論的特徴が見られた。この特徴に則ったうえで、ある程度自由に語や接辞の順を決めるということが挙げられる (Du-ne-ʃcheiniſ (文頭: 2SG-[NE-prove])、…[ne-wiſt]-ich (文中: but NE-know-1SG) など)。

5.3. ne/en が niht と共起する場合

ne/en と niht が共起する場合の語順の検討のため、以下の語順を想定し、コーパスで調査を行った。なお、レーマ検索を行う場合、en は ne に含まれるため、語順の表記は ne に統一する。

1A niht ne…	1B ne niht
2A niht 本動詞…ne 助動詞	2B ne 助動詞…niht 本動詞
3A niht 助動詞…ne 本動詞	3B ne 本動詞…niht 助動詞
4A niht 本動詞…ne (名・形・前置)	4B ne (名・形・前置) …niht 本動詞
5A niht (名・形・前置) …ne 本動詞	5B ne 本動詞…niht (名・形・前置)
6A niht 助動詞…ne (名・形・前置)	6B ne (名・形・前置) …niht 助動詞
7A niht (名・形・前置) …ne 助動詞	7B ne 助動詞…niht (名・形・前置)
8A niht 本動詞…ne 本動詞	8B ne 本動詞…niht 本動詞
9A niht 話法の助動詞…ne 助動詞	9B ne 助動詞…niht 話法の助動詞
10A niht 助動詞…ne 話法の助動詞	10B ne 話法の助動詞…niht 助動詞
11A niht…ne 助動詞	11B ne 助動詞…niht
12A niht…ne 本動詞	12B ne 本動詞…niht

5.3.1. 結果が得られなかった語順

まず、この 24 の語順で検索結果が得られなかったものは、1B、3A、3B、4A、4B、6A、6B、9B、10B、12A の 10 種類であった。このことから、以下の 3 点のことがいえる。

【1】ne/en は、名詞・形容詞・前置詞句に前置することはない (1A, 1B の対照から)

【2】ne/en は必ず、助動詞もしくは本動詞について否定文を構成している。すなわち ne/en は動詞などに対して接頭辞的な役割を果たしていると考えられる

【3】ne/en を使用して否定文を作ることができるのは本動詞もしくは助動詞であるという制限 (語順 4A、4B、6B 参照)

5.3.2. 実際に見られた語順について

次頁の表 9 に niht と ne の共起件数を一覧にして表示した。1 つの語順につき、上段は名詞的な niht、下段は副詞的な niht の数というように分け、検索結果が特に多かった語順のデータを太字にした。

表 9: niht と ne が共起する場合の上位 100 個

語順	Poesie				Religion				Alltag				Wissen				合計
	主		従属		主		従属		主		従属		主		従属		
	ne	en	ne	en	ne	en	ne	en	ne	en	ne	en	ne	en	ne	en	
1A	**-**	**1**	**1**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**1**	**3**
	5	**1**	**7**	**-**	**-**	**5**	**8**	**-**	**-**	**-**	**-**	**4**	**-**	**3**	**-**	**3**	**36**
2A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
2B	**3**	**-**	**-**	**-**	**3**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**8**	**1**	**-**	**-**	**15**
	25	**-**	**-**	**-**	**18**	**4**	**2**	**-**	**1**	**-**	**-**	**-**	**29**	**4**	**-**	**-**	**83**
5A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
5B	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**3**	**-**	**-**	**-**	**3**
	8	**-**	**-**	**-**	**17**	**9**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**-**	**13**	**7**	**2**	**-**	**56**
7A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	4
7B	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	4
	8	1	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	19
8A	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	8	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	11
8B	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	4
9A	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	4
	17	1	-	-	2	2	-	-	-	1	-	-	5	3	-	-	31
10A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3
11A	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
11B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	5
12B	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	1	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	11
計	85	5	10	0	68	20	12	0	1	1	0	6	70	24	2	4	308

niht と ne の共起条件について、特に多くの結果が得られたのが、語順 2B (例 4) の 98 件であり、語順2A は2件のみである。なお、語順2Bは、名詞的な nihtの結果も最多である。

例 4) ich ne wil die uurch nicht krump machen.

ich	ne	wil	die	uurch	nicht	krump	machen
1SG	NE	will	DEF.F.ACC	way	NEG	deviate	make

私はこの道 (正義の道) を曲げたくない。

主文かどうかに関しても、明確に分かれていた。語順 2B ne 助動詞…niht 本動詞 (例 4)、98 件中 96 件が主文であった。それに対して、niht と ne が逆の語順で現れる、語順 1A niht ne…に関しては、主文 15 件に対し、従属文が 24 件 (例 5) と、従属文の方が優勢であ

った。さらに、全体の件数で考えると、副詞的な niht が ne と主文で共起することが最も多いことが分かる。

例 5)	ſi	ne	mugen	mich	niht	betriegen
	3PL	NE	can	1SG.ACC	NEG	deceive
	彼らは私をだますことはできない					

6. 考察と今後の展望

先行研究では、主文と従属文では数値上での有意な差は見られなかったと結論付けられていたが、本調査では、niht、ne/en いずれも主文の方が多いことが分かった。さらに、以下のことも分かった。

・ne/en は、本動詞や助動詞について否定の意味をなし、名詞や形容詞などほかの要素につくことはない

・ne/en は、定動詞の要素が文中第二位の位置に現れるという法則に則り、接頭辞化を起こすことがある

・ne/en が niht と共起し、なおかつ本動詞、助動詞それぞれに否定語がつく場合 (語順 2B を参照)、ne/en は助動詞と、niht は本動詞と共起し、その逆は見られなかった

・主文と従属文について、文中で ne…niht…の語順で現れる場合、殆ど主文であり、niht…ne…の語順である場合、例外はあるものの、従属文である場合が多く、明確な差が見られた

一方で、文献のジャンルの違いが統語論的性質にどれほど影響するか、ne/en の接頭辞化が起きるジャンルごとの頻度はどれほどかについては、より詳細な調査の余地がある。

〈略号一覧〉 - 接語境界 / 1 一人称 / 2 二人称 / 3 三人称 / ACC 対格 / DAT 与格 / DEF 定冠詞 / M 男性 / NE 否定辞 / NEG 否定語 / NOM 主格 / PL 複数 / POSS 所有 / PST 過去 / SG 単数

〈参考文献〉 江代修「レクラム文庫」『日本大百科全書』https://kotobank.jp/word/レクラム文庫-151568. 最終アクセス日: 2023 年 9 月 26 日. / 相良守峯（編著）(1954)『中高ドイツ語文法』東京: 南江堂. / 武市修 (2014)「『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法――中高ドイツ語叙事作品との比較から――その 2 否定表現について」関西大学『独逸文学』58: 1-32. / 谷口幸男 (1956) 「Mittelhochdeutsch に於ける否定の用法について」『ドイツ文学』. / 橋本郁雄 (1989) 「ドイツ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典第 2 巻 世界言語編（中）さ-に』東京: 三省堂. / 平城照介「ザクセン・シュピーゲル」『日本大百科全書』https://kotobank.jp/word/ザクセンシュピーゲル-837547. 最終アクセス日: 2023 年 6 月 11 日. / Oksaar, Els. (1965) *Mittelhochdeutsch: Text, Kommentare, Sprachkunde, Wörterbuch.* Stockholm:Almquist & Wiksell. **〈使用コーパス〉** Krause, Thomas & Zeldes, Amir (2016): *ANNIS3: A new architecture for generic corpus query and visualization.* in: Digital Scholarship in the Humanities 2016 (31). http://dsh.oxfordjournals.org/content/31/1/118. 最終アクセス日: 2023 年 9 月 26 日. **〈使用辞書〉** Lexer. *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch von Matthias Lexer*. https://woerterbuchnetz.de. 最終アクセス日: 2023 年 12 月 10 日.

ドイツ語中間構文における動詞の制約

吉岡　亜哉
（言語文化学部　ドイツ語専攻）

キーワード：ドイツ語，中間構文，コーパス調査，インフォーマント調査

0. はじめに

ドイツ語には、能動文の形をとりながら受動文に近い意味を持つ「中間構文」と呼ばれる構文が存在する。しかし、全ての動詞が中間構文に生起できるわけではなく、文献によって中間構文に生起できるとされる動詞に違いが見られる。本稿は、コーパス調査とインフォーマント調査を行い、ドイツ語の中間構文に生起できる動詞の傾向を明らかにすることを目的とする。なお本文中の表、例文番号、グロス、日本語訳、文字飾りは特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 背景知識

1.1. ドイツ語の中間構文

ドイツ語の中間構文の例として、吉田 (2002: 135) は以下の文を挙げている。

(1) Dieses Buch verkauft **sich** **leicht**.
this.NOM book.NOM sell.PRS.3SG REFL.ACC easily
「この本はよく売れる。」 (吉田 2002: 135)

吉田 (2002: 136-138) によると、ドイツ語の中間構文には次のような特徴がある。

① 他動詞文における文法上の対格目的語が主格を付与され、主語として現れる。他方、論理的主語は抑制され、代わりに対格の再帰代名詞 sich[1]が現れる。
② 中間構文では動作主 (agent) 役割は表現されない。受動文では可能な *von* (英: by) 前置詞句による動作主の代理も許されない。
③ 他動詞、自動詞の両方から中間構文を形成できる。自動詞から中間構文を形成する場合、主語には虚辞 es (英: it) が現れる。ただし、動作主項をもたない能格型動詞は排除される。
④ 総称的に解釈され、主語の状態や属性を表す。
⑤ 多くの場合、程度・評価副詞を伴う。しかし、freiwillig (自発的に) などの動作主指向の副詞は中間構文と共起できない。
⑥ “man kann...” (= people in general can…) によるパラフレーズが可能である。

上記の特性の他に、ドイツ語の中間構文には「責任」(responsibility) と呼ばれる概念が関係している (大矢 2000: 43)。大矢 (2000: 43) によると、ドイツ語の動詞 verkaufen (売る) は中間構文を形成できるが、kaufen (買う) は中間構文を形成できない。大矢 (2000: 43) によれば、「買う」という行為を規定するのは専ら買い手である一方で、「売る」という行為においては内容、価格、デザインなどの売られる対象の属性も重要な役割を果たすという。このよ

[1] 大矢 (2008: 27) によると、ドイツ語の再帰代名詞には意味役割を持つ強形と意味役割を持たない弱形があるという。ドイツ語の中間構文で用いられる再帰代名詞は、文頭に立つことができないことや他の名詞句と並列できないこと、否定や焦点詞 sogar (英: even) の焦点にならないことから、弱形であるという (大矢 2013: 78)。

うに、動詞が表す行為の主体よりも動詞の目的語の性質が動作の成立に大きく関わっている場合、その動詞の目的語は中間構文の主語として生起できるという。

1.2. lassen 中間構文

ドイツ語の動詞 lassen (やめる、置いておく) には、本動詞としての用法の他に、助動詞として不定詞とともに用い、使役や許可、黙認の意味を表す用法がある (在間 2006: 121)。

Fagan (1992: 210) によると、ドイツ語の中間構文で助動詞の lassen が用いられると、使役や許可、黙認の意味ではなく可能の意味で解釈されるという[2]。

(2) Natürlich **läßt** es sich einfacher sagen.
naturally let.AUX.PRS.3SG it.NOM REFL.ACC more simply say.INF
「もちろんそれはもっと簡単に言うことができる。」 (Fagan 1992: 210)

lassen 中間構文は、文に現れない暗黙の動作主項が含意されている点や、可能の意味を持つ点、文が主語の性質を描写している点において、lassen を含まない通常の中間構文と共通している (Fagan 1992: 211-214)。lassen 中間構文と通常の中間構文が異なっている点として Fagan (1992: 214-216) は、lassen を含む非人称の中間構文において主語の虚辞 es (英: it) が現れない場合がある点、副詞が必須ではない点、von (英: by) 前置詞句による意味上の主語の表示が例外的に許容される場合がある点、**共起できる動詞の種類が通常の中間構文に比べ幅広い点**を挙げている。さらに、Fagan (1992: 232) は通常の中間構文と lassen 中間構文の両方を選択できる場合、lassen 中間構文のほうがより選択されやすいとしている。

2. 先行研究

次の表は、ドイツ語の lassen を含まない通常の中間構文における動詞の制約について、①Vendler (1957) の動詞のアスペクト分類[3]のうち到達タイプ (achievements) の動詞は可能か、②知覚動詞は可能か、③二重目的語をとる授与動詞が与格目的語とともに中間構文を形成することは可能か、④時制は現在のみか、の 4 点に関し、大矢 (2000)、吉田 (2002)、Fagan (1992)、Steinbach (2002) の主張をまとめたものである。

表 1: 先行研究の主張

	大矢 (2000)	吉田 (2002)	Fagan (1992)	Steinbach (2002)
①到達タイプの動詞は可能か	×	×	×	○
②知覚動詞は可能か	×	×	×	○

[2] Fagan (1992) はこの種の中間構文を *let middles* と呼んでいる。本稿では Fagan (1992) の呼び方に倣い lassen が用いられている中間構文を「lassen 中間構文」と呼称することにする。なお、lassen を含まない中間構文については、本稿では「通常の中間構文」と呼称する。

[3] Vendler (1957) は、アスペクトによって動詞を次の 4 つに分類している。
・状態 (states) : know、love など　・到達 (achievements) : find、reach など
・活動 (activities) : run、swim など　・達成 (accomplishments) : paint a picture、build a house など

③二重目的語をとる授与動詞が与格目的語とともに中間構文を形成することは可能か	○	△ (容認性は低い)	×	○
④時制は現在のみか	記述なし	○	△[4]	×

表 1 からわかるように、①から④の項目については先行研究によって主張が異なっており、どのような動詞が中間構文を形成することができるのかについては明らかでない。そこで本研究ではコーパス調査とインフォーマント調査を行い、ドイツ語の中間構文において選択可能な動詞の傾向を明らかにする。

3. 調査 1

3.1. 調査方法

初めに、Referenz- und Zeitungskorpora[5]を用いたコーパス調査を行う。

本調査では、到達タイプの動詞として treffen (会う)、vergessen (忘れる)、aus | schalten (スイッチを切る) を、知覚動詞として sehen (見える)、hören (聞こえる)、riechen (匂いがする) を、二重目的語をとる授与動詞として verkaufen (売る)、lehren (教える)、ein | flößen (流し込んで飲ませる) を扱う[6]。これらの動詞を “"動詞 #1 sich" && "sich #9 動詞"” という式[7]、または分離動詞の場合は “分離動詞 || "基礎動詞 #9 分離前綴り WITH $p=PTKVZ"” という式[8]でそれぞれ検索し、検索結果を無作為に並べ替え、上位 200 例に中間構文が含まれているかを検討する[9]。中間構文のデータが得られた場合は、時制が現在であるかについても確認し、二重目的語をとる授与動詞が中間構文を形成しているデータが得られた場合には、その中間構文に与格目的語が現れているかについても確認する。

得られたデータが中間構文であるか否かを判断するにあたっては、先行研究で挙げられていた中間構文の特徴のうち、動詞の文法上の目的語が主語として現れていること、動詞の

[4] Fagan (1992: 21-22) によると、ドイツ語の中間構文は基本的に現在時制で表されるが、文脈によっては現在時制以外で表すこともできるという。

[5] このコーパスは複数のコーパスを集約したメタコーパスであり、約 7047 万文と約 13 億語を収録している。このコーパスに収録されているテキストは 1465 年から 2018 年までのものであるが、本調査は現代ドイツ語の中間構文における動詞の制約を調べることを目的としているため、検索結果が 1900 年から 2018 年までのテキストに限定されるように予め設定しておく。

[6] これらの動詞のうち riechen は筆者が知覚動詞として選定したものであるが、その他の動詞は全て先行研究で例文とともに挙げられていたものである。

[7] このように検索すると、動詞の後に sich が来る文と、動詞の前に sich が来る文の両方のデータを得ることができる。

[8] 例えば aus | schalten の場合は、“ausschalten || "schalten #9 aus WITH $p=PTKVZ"” という式で検索することになる。このように検索すると、分離動詞が分離した形と分離していない形 (ここでは “schalten ... aus” と “ausschalten”) の両方を検索結果に表示させることができる。なお、この検索方法だと検索結果に sich が含まれない場合もあるため、Google Chrome で Web ページ内検索を行い、sich が含まれる文のみを手作業で抽出した。

[9] sehen などの動詞については、検索結果に an | sehen (見る) や um | sehen (見回す) などの分離動詞を含む文が現れることがあるが、これらは除外した上で 200 例を収集する。

文法上の主語が現れていないこと、再帰代名詞 sich が意味役割を持っていないことを重視した。中間構文が程度・評価副詞と共起していることや、可能の意味で解釈することができることなどは、吉田 (2002) や Fagan (1992) によれば例外もあるため、本調査では参考にはしたものの判断基準とはしなかった。

3.2. 調査結果

調査 1 の結果は、以下の通りである。- は例のないことを、太字は特に重要である数値を示す。紙幅の都合上、時制の表では treffen と ein | flößen の結果を省略している。

表 2: 調査 1 の結果 (到達動詞)

	treffen (会う)	vergessen (忘れる)	aus | schalten (スイッチを切る)
通常の中間構文	0/200	**8/200**	0/200
lassen 中間構文	0/200	4/200	8/200
合計	0/200	12/200	8/200

	vergessen		aus | schalten	
	通常の中間構文	lassen 中間構文	通常の中間構文	lassen 中間構文
現在時制	8/8	4/4	-	7/8
過去時制	0/8	0/4	-	1/8
未来/完了時制	0/8	0/4	-	0/8
合計	8/8	4/4	-	8/8

表 3: 調査 1 の結果 (知覚動詞)

	sehen (見える)	hören (聞こえる)	riechen (匂いがする)
通常の中間構文	0/200	**1/200**	0/200
lassen 中間構文	10/200	20/200	2/200
合計	10/200	21/200	2/200

	sehen		hören		riechen	
	通常の中間構文	lassen 中間構文	通常の中間構文	lassen 中間構文	通常の中間構文	lassen 中間構文
現在時制	-	9/10	1/1	12/20	-	1/2
過去時制	-	1/10	0/1	7/20	-	1/2
未来時制	-	0/10	0/1	1/20	-	0/2
完了時制	-	0/10	0/1	0/20	-	0/2
合計	-	0/10	1/1	20/20	-	2/2

表 4: 調査 1 の結果 (二重目的語をとる授与動詞)

	verkaufen (売る)	lehren (教える)	ein | flößen (飲ませる)
通常の中間構文	113/200	1/200	0/200
lassen 中間構文	24/200	9/200	0/200
合計	137/200	**10/200**	**0/200**

与格目的語とともに現れている例	**1 (lassen 中間構文) /137**	0/10	-

	verkaufen		lehren	
	通常の中間構文	lassen 中間構文	通常の中間構文	lassen 中間構文
現在時制	68/113	23/24	1/1	8/9
過去時制	**35/113**	1/24	0/1	1/9
未来時制	**3/113**	0/24	0/1	0/9
完了時制	**7/113**	0/24	0/1	0/9
合計	113/113	24/24	1/1	9/9

表 2、3、4 から、到達動詞や知覚動詞、verkaufen 以外の二重目的語をとる授与動詞が中間構文を形成している例はほとんど見られず、これらの動詞が中間構文を形成したとしても lassen 中間構文として現れる傾向があることがわかる。二重目的語をとる授与動詞についても、与格目的語を伴って中間構文を形成している例はほとんど見られなかった。しかし、到達動詞である vergessen や知覚動詞である hören が通常の中間構文を形成している例が得られたことや、二重目的語をとる授与動詞である lehren や einflößen の中間構文の例が与格目的語を伴っていない場合であってもほとんど得られなかったこと、二重目的語をとる授与動詞である verkaufen が与格目的語を伴って中間構文を形成している例が得られたことは注目に値する。(3) は到達動詞 vergessen が通常の中間構文を形成している例である。

(3) Jene 70 Jahre waren keine gewöhnlichen.
that.PL.NOM 70 year.PL.NOM be.PST.3PL NEG.PL.NOM ordinary.PL.NOM
Sie vergessen sich nicht so leicht.
it.PL.NOM forget.PRS.3PL REFL.ACC NEG so easily
「あの 70 年は普通のものではなかった。あの 70 年は簡単には忘れられない。」

さらに、Fagan (1992: 232) は通常の中間構文と lassen 中間構文の両方を選択できる場合、lassen 中間構文のほうがより選択されやすいとしているが、調査 1 の verkaufen の結果からはそのような傾向は見られないため、更なる調査の余地があると考える。

時制に関して、調査 1 では現在時制のデータが多く得られた。しかし、verkaufen が現在時制以外の通常の中間構文を形成している例が 45 例 (現在時制の例は 68 例) 得られたことから、Steinbach (2002) の主張の通り、現在時制以外の通常の中間構文も容認されるのではないかと考えられる。(4) は調査 1 で得られた過去時制の中間構文の例である。

(4) Ihre Platte verkaufte sich danach 120000-mal.
their.NOM record.NOM sell.PST.3SG REFL.ACC then 120000-time
「彼らのレコードは、その後 12 万枚売れた。」

4. 調査 2

4.1. 調査方法

調査 2 として、ドイツ語母語話者を対象にインフォーマント調査を行う。調査 1 で扱った 9 つの動詞それぞれについて、

① 調査 1 で得られた文や先行研究で挙げられていた文
② ①の文が lassen を含んでいない場合は lassen を用いて筆者が書き換えた文、lassen を含んでいる場合は lassen を用いずに筆者が書き換えた文
③ ①、②の文のうち lassen を含まないほうの文を “man kann...” (= people in general can…) を用いて筆者が書き換えた文

上記の 3 種類の文を用意し、①および②のような文が容認できるか、容認できる場合は③の文のような意味を持ち得るかについてインフォーマントに尋ねる。

さらに、現在以外の時制であっても中間構文を形成できるかどうかについて検証するため、中間構文を形成することのできる典型的な動詞である verkaufen (売る) について、

① 調査 1 で得られた過去時制、未来時制、完了時制の文
② ①の文を筆者が現在時制に書き換えた文
③ ①の文を lassen を用いて筆者が書き換えた文
④ ②の文を lassen を用いて筆者が書き換えた文

上記の 4 種類の文を用意し、現在時制の文と現在時制以外の文で自然さや意味に違いがあるか、lassen を含む文と含まない文で自然さや意味に違いがあるかをインフォーマントに尋ねる[10]。

インフォーマント[11]は、1967 年生まれのノルトライン＝ヴェストファーレン州出身の男性[12]である。調査は対面で、ドイツ語を媒介言語として行う。

---

[10] 調査 2 は例文を紙に印刷した上で行うが、中間構文としての例文の自然さを判断する上での基準として、Fagan (1992: 9) の挙げていた次の文を自然な中間構文の例として各ページに記載し、必要に応じてインフォーマントに参照してもらう。

(5) Dieses Buch liest sich leicht.
this.NOM book.NOM read.PRS.3SG REFL.ACC easily
「この本は読みやすい。」 (Fagan 1992: 9)

[11] 調査 2 では、1971 年生まれのハンガリー出身の女性であるインフォーマント B にも対面でドイツ語を媒介言語として調査を行った。インフォーマント B はドイツ語の母語話者ではないが、長年ドイツ語を勉強し、ドイツ語の内省も可能である。そのため、調査 2 ではインフォーマント B の回答も参考にさせていただいた。

[12] 以降、このインフォーマントを「インフォーマント A」と呼称する。

4.2. 調査結果

調査 2 の結果は、以下の表のようにまとめられる[13]。

表 5: 調査 2 の結果 (到達動詞と知覚動詞)

	treffen	vergessen	aus | schalten	sehen	hören	riechen
通常の中間構文	×	△	△	×	×	×
lassen 中間構文	△	○	○	○	○	○

表 6: 調査 2 の結果 (二重目的語をとる授与動詞)

	verkaufen	lehren	ein | flößen
通常の中間構文	○	△	×
lassen 中間構文	○	○	○
与格目的語を伴う通常の中間構文	△	△	×
与格目的語を伴う lassen 中間構文	○	○	○

表 7: 調査 2 の結果 (時制)[14]

	過去時制	未来時制	完了時制
現在時制の中間構文と同様に自然な中間構文か	○	○	×
現在時制の中間構文と意味的に同様の中間構文であるといえるか	○	○	○

インフォーマント A によると、lehren (教える) や ein | flößen (流し込んで飲ませる) という動詞においては「教える」、「流し込んで飲ませる」という行為をする主体が重要であるが、verkaufen (売る) や lesen (読む) においては「売る」、「読む」という行為の主体はさほど重要ではないため、lehren や ein | flößen を用いた中間構文は verkaufen を用いた中間構文や (5) のような lesen を用いた中間構文よりも容認性が下がるのだという。このことは、1.1 節で述べた「責任」の概念が中間構文の容認性に関係していることを示しているといえる。

さらにインフォーマント A によると、verkaufen のような通常の中間構文、lassen 中間構文をともに形成できる動詞については、話し言葉においてはより簡潔な文が好まれることから、lassen を用いない通常の中間構文のほうがより頻繁に用いられるという。

[13] 表 5、6 における○は、その動詞を用いて作成した中間構文が容認できる自然な中間構文となることを示す。表 5、6 における△は、その動詞を用いて作成した中間構文が、容認できるが不自然な中間構文となることを示す。表 5、6 における×は、その動詞を用いて作成した中間構文が容認できない文となることを示す。

[14] 表 5、6、7 はインフォーマント A に対する調査の結果を示している。インフォーマント B からも到達動詞や知覚動詞、二重目的語をとる授与動詞に関してはインフォーマント A と同様の回答が得られたが、時制に関してはインフォーマント A とインフォーマント B で回答が異なった。インフォーマント B によると、現在時制以外の中間構文は現在時制の中間構文よりも容認性が下がるという。

5. まとめと今後の課題

調査 1 と調査 2 から、到達動詞や知覚動詞からは基本的に自然な通常の中間構文を形成できないことが示され、吉田 (2002) や大矢 (2000)、Fagan (1992) の主張が裏付けられた。二重目的語をとる授与動詞については、与格目的語を伴って自然な中間構文を形成することはできないことが調査 1 と調査 2 によって示され、吉田 (2002) や Fagan (1992) の主張が裏付けられた。今回調査対象とした二重目的語をとる授与動詞のうち、lehren と ein | flößen が与格目的語を伴っていない場合でも自然な中間構文を形成できないことは、「責任」の概念から説明できることを示した。

lassen 中間構文については、Fagan (1992) が述べていたように到達動詞や知覚動詞からも容認できる lassen 中間構文を形成できることが調査 1 と調査 2 によって示された。二重目的語をとる授与動詞が与格目的語を伴って中間構文を形成する場合、lassen 中間構文のほうが容認性が高いのかどうかについては先行研究に記述がなかったが、そのような場合においても lassen 中間構文のほうが容認性が高いことが調査 2 によって示された。verkaufen のような通常の中間構文、lassen 中間構文をともに選択できる動詞の中間構文について、Fagan (1992) は lassen 中間構文のほうが選択されやすいとしていたが、本研究では特に話し言葉においては簡潔さの点から通常の中間構文のほうが頻繁に用いられることを示した。

時制については、完了時制の中間構文は他の時制の中間構文よりも自然さがやや劣るものの、過去時制や未来時制の中間構文は現在時制の中間構文と自然さや意味が同じであるとするインフォーマントがいる一方で、現在時制以外の中間構文は現在時制の中間構文よりも容認性が下がるとしたインフォーマントもおり、更なる調査の必要があることが示された。

調査 2 においては、一部の動詞において筆者の意図しないところで不自然な表現となっている例文を使用したため、筆者の求める回答が得られないことがあった。そのため、調査 1 で得られた他の例や、先行研究で挙げられている例を用いて再度調査をする必要がある。さらに、今回の時制に関する調査でも示されたように、中間構文の容認性の判断には個人差があると考えられるため、より多くのデータを用い、より多くの母語話者の協力を得てインフォーマント調査を再度行うことで、正確な結果が得られると考える。

〈略号一覧〉 3 三人称 / ACC 対格 / AUX 助動詞 / INF 不定詞 / NOM 主格 / PRS 現在 / REFL 再帰 / SG 単数

〈参考文献〉 大矢俊明 (2000)「認知意味論と中間構文 ドイツ語と英語の差異をめぐって」『ドイツ文學』104: 42-52. / 大矢俊明 (2008)『ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究』東京: ひつじ書房. / 大矢俊明 (2013)「中間構文と結果構文」岡本順治・吉田光演編『講座ドイツ言語学 ドイツ語の文法論』1: 23-45. 東京: ひつじ書房. / 在間進 (2006)『[改訂版] 詳解ドイツ語文法』東京: 大修館書店. / 吉田光演 (2002)「ドイツ語中間構文のアスペクトと項構造」『独文研究室報』17: 135-150. / Fagan, Sarah M.B. (1992) *The syntax and semantics of middle constructions.* Cambridge: Cambridge University Press. / Steinbach, Markus (2002) *Middle voice: A comparative study in the syntax-semantics interface of German.* Amsterdam: Benjamins. / Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. *The Philosophical Review.* 66: 143-160.

〈調査資料〉 Referenz- und Zeitungskorpora https://www.dwds.de/d/korpora/public (最終閲覧: 2023 年 9 月 22 日)

東京外国語大学記述言語学論集 **思言** 既刊号掲載論文一覧

第 1 号 (2006) ～第 19 号 (2024)

第 1 号 (2006)

論文

チベット語アムド方言の従属構文 (NI 節による) における名詞句指示……海老原　志穂 (3)
伊良部琉球語の基礎的な文法概説…… 下地　理則 (31)

修士論文　要旨

ビルマ語の動詞句の構造について……安田　哲 (69)
アムドチベット語・共和方言の完了を表す助動詞 …… 海老原　志穂 (76)
パラオ語における他動性について―いわゆる完了・非完了動詞を焦点に …… 下地　理則 (78)

卒業論文　要旨

トルコ語の bu, şu, o と日本語のコ・ソ・ア …… 梅田　光伸 (81)
チェコ語の完了体における接頭辞について …… 大嶋　聡子 (89)
フィンランド語の勧誘表現…… 坂田　晴奈 (98)
スウェーデン語における完了と過去の使い分けについて……松本　憲 (106)
平江方言概説 ……張　盛開 (114)
イタリア語直説法未来の＜命令＞＜勧誘＞について ……豊永　翠 (122)
台湾高雄県美濃鎮における客家語の音韻現象
　―音節頭子音/n/、/l/の音節について―……中山　薫 (130)
破壊を表す動詞「壊れる」の多義性について ……福田　あやの (140)
漫才のツッコミに関する一考察……桝谷　知行 (150)
アラビア語における名詞文の役割 ―テキスト分析と対照分析を通じて―……黛　友紀子 (158)
日本語オノマトペの強調形派生における有標性 ……吉田　佳世 (167)

第 2 号 (2007)

論文

チベット語アムド方言の敬語……海老原　志穂 (3)
伊良部島方言の音節構造 …… 下地　理則 (21)
福島方言における「べ」について…… 幡　早夏 (41)
ガネシ町のブルシャスキー語に関して…… 吉岡　乾 (66)

修士論文　要旨

ハワイの日系人社会における日本語の諸相 …… 酒井　幸 (77)
フィンランド語の非定形動詞における主語標示について…… 坂田　晴奈 (80)
日本語における文末形式「のではないか」の機能 ……·佐藤　雄亮 (82)
1 人称代名詞における除外と包括の対立―漢語諸方言を中心に―……·張　盛開 (84)

卒業論文　要旨

日本語縮小辞「コ」とスペイン語縮小辞「-ito」「-illo」について…… 赤枝　裕美 (89)
インドネシア語の受動文と人称動詞…… 安藤　さや香 (97)
口語ビルマ語における派生名詞としての動詞重複 ……大塚　行誠 (105)
現代の日本語 (共通語) の談話における無助詞現象 ……荻原　典子 (113)
マオリ語の前置詞 i と ki……加瀬　麻奈美 (121)
ペルシア語の bayestan について ……岸　美有紀 (129)
マンガライ語クンポ方言の所有表現
　―所有接辞と前置詞 de の使い分けについての一考察―……北田　裕子 (137)
機能動詞構造におけるドイツ語の machen と日本語の「する」の対照研究 ‥‥坂田　律子 (145)
ペルシア語の無強勢の-i について ……清水　悠史 (153)
漢字語のアクセント体系について……張　丁允 (161)
若年層の福岡方言における「-ト」の接続について ……原田　走一郎 (169)
北河内における二人称としての「自分」の使用について……松木　康 (177)
ドイツ語の平叙文における心態詞 doch の働き ……山田　容子 (185)
「バ」、「ト」、「タラ」、「ナラ」の用法について
　―日本語母語話者と日本語学習者の比較研究― ……兪　美蘭 (193)
福島小野町の文末詞 ……吉田　麻澄 (169)

第 3 号 (2007)

論文

モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」など文末形式の対照研究……ジンガン (3)
フィンランド語の疑問小辞-kO…… 坂田　晴奈 (22)
南琉球伊良部島方言の音韻論…… 下地　理則 (35)
ブルシャスキー語における特定性標示…… 吉岡　乾 (84)

修士論文　要旨

モンゴル語の一人称代名詞 MAN について……チュルーンバートル　セレンゲ (107)
福島方言の記述的研究―動詞を中心に― ……幡　早夏 (109)
日中オノマトペの対照研究―マンガを資料とした対照研究―……黄　慧 (111)
モンゴル語の終助詞に関する記述的研究 ……ジンガン (113)
可能表現における日本語と中国語の対照 ……李　京玉 (115)
新聞と週刊誌にみられる皇室敬語
　―戦後昭和と平成の事例を中心に― …… スリ　ブディ　ルスタリ (117)
ブルシャスキー語フンザ方言形態論……吉岡　乾 (119)

卒業論文　要旨

日独対照研究―身体部位名称を含む慣用句を用いて―……加藤　奈美 (123)
ロシア語動詞と日本語動詞のアスペクトの対応関係に寄せた対照研究 ……小湊　歩 (131)

ソロン語の母音調和に関する音響音声学的研究……大塚　行誠 (105)
現代の日本語 (共通語) の談話における無助詞現象 …… 佐藤　健太郎 (139)
ビルマ語の助動詞-khE.についての考察 ……高橋　麻衣 (147)
ビルマ語助動詞配列の再考察……田森　佳奈 (155)
広告キャッチフレーズにおける比喩の諸相 ……土佐　栄樹 (163)
ヒンディー語の echo formation……仲地　加奈 (171)
スペイン語における認識に関わる二動詞―*saber* と *conocer*― …… 西野　剛 (179)
広島方言の継続アスペクト…… 仁村　哲也 (187)
文章表現におけるオノマトペの使用傾向 ……増野　奈央 (195)
中国語 (北京官話) 指示代詞の統語的用法 …… 森川　太介 (203)
動物名詞を用いた拡大 Augmentativbildung についての研究 …… 柳　有紀子 (211)
アイヌ語北海道諸方言における神謡の人称 ……山田　洋平 (219)
漫才におけるおかしみの構造の言語学的分類 ……山本　貴也 (227)
擬音語・擬態語から見た日本語非外来語片仮名表記の考察…… 吉田　由佳 (235)

第 4 号 (2008)

論文

チベット語アムド方言の親族名称……海老原　志穂 (3)
伊良部島方言の文法記述の諸単位…… 下地　理則 (21)
平江城関方言の指示詞について…… 張　盛開 (57)

修士論文　要旨

モンゴル語の補助動詞構造《V- (gul) -CVB ög-》、《V- (gul) -CVB ab-》について
…… 斯欽格日楽 (73)
日本語の属格｛の｝と韓国語の属格｛의｝について …… 韓　必南 (74)

卒業論文　要旨

程度副詞「多少」類の日朝対照研究 …… 川田　紗千恵 (77)
ドイツ語における日本語由来の名詞の性について …… 北村　健一 (85)
佐賀方言における主格助詞「ノ」と「ガ」について ……佐野　舞 (93)
スペイン語の副詞節における点過去と線過去について…… 吹田　由紀子 (101)
ペルシア語の「形容詞-e＋N＋繋辞」構文の書き換えについて …… 末光　渚 (109)
日本語とトルコ語の二人称代名詞の省略について …… 高岡　望結 (117)
富山方言における主題を表す助詞としての「チャ」の用法……高瀬　衣庸 (125)
ポルトガル語の人称不定詞について……桧山　葉子 (133)
ラオス語における英語の借用語の表記…… 矢野　敦 (141)
台湾語の声調グループ形成と文法との関係に関する問題点 ……吉田　真悟 (149)
広東語三文字重畳型語について…… 林 麗嘉 (157)
ポルトガル語の受動表現 …… 渡邉 淳 (165)

第 5 号 (2009)

論文

ティディム・チン語における使役・裨益の接尾辞-*sák*……大塚　行誠 (3)
伊良部島方言における蓋然性のモダリティ …… 下地　理則 (25)
ブルシャスキー語ガネシ方言での *a* から *o* への音変化…… 吉岡　乾 (43)

修士論文　要旨

現代モンゴル語の “副動詞＋bayi-” 形について
　—各形式の表すアスペクト的意味を中心に—…… 王　琳芳 (59)
『御製日講四書論語』における満洲語の連体修飾構造について…… 鄭　景子 (61)

卒業論文　要旨

現代韓国語ソウル方言母音体系の通時的変化 …… 青井　隼人 (65)
ロシア語の人を表す接辞について—接尾辞 -ist、-ec、-nik を中心に— …… 大澤　拓 (73)
英語借用語の促音化に関する研究—促音化規則と促音の歴史的消失— …… 大滝　靖司 (81)
現代朝鮮語の名詞化接尾辞{-m}{-gi}について…… 小山内　優子 (89)
ガリシア語における弱勢代名詞の動詞に対する位置について…… 金子　亘 (97)
三重県内で使用される文末詞「ニ」について …… 工藤　彩加 (105)
現代口語ビルマ語における「-ta_/-hma_文」の機能について……熊谷　宣樹 (113)
外来語を含む複合語短縮形の通時的変化……柴垣　知香 (121)
スペイン語の非人称性の表現について—SE 構文と 3PL 構文— …… 瀬川　明子 (129)
朝鮮語現代ソウル方言における-jang-i・-jaeng-i の考察 ……竹原　彩乃 (137)

第 6 号 (2010)

論文

日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究
　—辞書の用例を用いた予備調査— ……黄　慧 (3)
引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性
　—意味分類を基に—…… 佐藤　雄亮 (25)

卒業論文　要旨

宮城方言の条件表現—青森・秋田方言との対照を中心に— …… 内海　優 (55)
現代口語ビルマ語において行為・事柄を表す複合名詞主要部の機能 …… 大西　秀幸 (63)
マンガにおける臨時的な英語オノマトペの音韻的特徴…… 小檜山　紫織 (71)
現代口語ビルマ語の助詞-kou_とゼロ助詞-φ について
　—人物目的語の-φ 標示を中心に—…… 五島　俊太朗 (79)
中国語における「点儿 (dianr)」とそれが共起する語との相関関係 …… 栄山　如 (87)
愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究—「ンダッテ」を中心に— …. 髙見　あずさ (95)

移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて
―1940 年代、1950 年代の文学作品から―……多胡　友梨恵 (103)
韓国語の複数標識-tul について……蔡　熙鏡 (111)
熊本方言における強調語使用の世代差・男女差について……豊田　瑤子 (119)
ウズベク語の補助動詞構造《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)＋ket-, qɔl-, qoy-》について
……日高　晋介 (127)
秋田方言における「(ニ) ガッテ」の用法と若年層における新方言 ……堀川　知之 (135)
高知方言のアスペクト―存在動詞を中心に―……渡邉　淳 (143)

第 7 号 (2011)

論文

韓国語の副詞 jom に関する意味的考察―jogym との対照の観点から―……安　智恵 (3)
『法華経諺解』にみる結構助詞「所」の中期朝鮮語訳について…… 小山内　優子 (17)
漢語平江方言における 2 つの 3 人称の使い分け …… 張　開盛 (31)
日本語の「する」と韓国語の「hada」による属性・状態の叙述 …… 韓　必南 (53)

修士論文　要旨

日本語と韓国語の程度副詞の統辞的考察
―程度副詞の名詞修飾及び共起する形式を中心に―…… 安　智恵 (79)
15 世紀朝鮮語における従属節内の斜格主語について…… 小山内　優子 (89)
現代口語ビルマ語における「-ta_/-hma_文」の機能について…… 熊谷　宣樹 (99)
ハイラル・ダグール語の述語複合体……山田　洋平 (109)

卒業論文　要旨

一人話芸における「おかしみの構造図」 ……岡田　萌枝 (121)
タイ語の使役表現―hay, thamhay を中心に― ……斉藤　智恵実 (129)
中国語の擬音語における子音の違いとそれが表す実態音の大小
―有気音と無気音の対立を中心に―……徐　しぇんしぇん (137)
香川方言の命令表現 ……白石　有紗 (145)
コーパスを通した bekommen, kriegen, erhalten の助動詞的用法に関する諸考察
……須田　開朗 (153)
現代中国語における英語借用語の子音音訳パターン ……田村　美樹 (161)
タイ語と日本語の受け身文の対照研究
―日本語受け身文のタイ語への翻訳から―……名倉　綾子 (169)
ベトナム語のテンス・アスペクト表現― “đa” と “rồi” の異同について―…羽賀　千紋 (177)
“VO 了” について…… 福永　海菜美 (185)
話し言葉における「じゃん」について―首都圏に暮らす 10 代の使用実態―‥松田　斉紀 (193)
フランス語とイタリア語の接続法について
―croire / credere の従属節中の法選択―…… 山田　怜央 (201)

インターネット上に見られる中国語の新表現「囧 [jǒng]」について
—「窘 [jǒng]」との比較を中心に—……渡邉　淳 (143)

第 8 号 (2012)

論文

韓国語の副詞‘aju に関する考察—書き言葉コーパスの分析から—……安　智恵 (3)
ジンポー語の動詞文標識にみられる sə-の機能 …… 大西　秀幸 (21)
中国語におけるオノマトペの述語用法—2 音節のオノマトペに焦点を当てて— …… 黄　慧 (41)
フィンランド語の E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴…… 坂田　晴奈 (65)

修士論文　要旨

宮城方言における「なら」意味領域—共時的体系と通時的変遷—…… 内海　優 (83)
ジンポー語の体系的記述 …… 大西　秀幸 (93)
ニヴフ語における時の副動詞 (temporal converbs) について ……蔡　熙鏡 (103)

卒業論文　要旨

ナポリ方言語彙使用の世代差…… 板久　梓織 (115)
ドイツ語の純粋与格と日本語の対応表現について ……鈴木　真衣 (123)
フィンランド語における属格と接格・向格の統語的・意味的機能の類似について
……髙橋　健太郎 (131)
文末の「し」の用法について……中澤　明恵 (139)
ブラジル・ポルトガル語の動詞による可能表現 —poder, conseguir, saber, dar について—
…… 安田　彩 (147)
ベトナム語の《動詞＋目的語/ (φ)＋方向動詞 lại》 …… 山本　一八 (155)
東京地方の若者世代に使用される「動詞の命令形＋シ」の意味・用法と
使用実態について ……山本　ちひろ (163)
タイ語の方向動詞が担う意味・機能－動詞と共起する場合－…… 若山　絢子 (171)

第 9 号 (2013)

論文

ラワン語ダル方言の音韻 ……大西　秀幸 (3)
日本語における「オノマトペ＋する」の名詞修飾用法…… 黄　慧 (23)
日本語「テオク」とウズベク語 -(i)b qo‘y-の対照 …… 日高　晋介 (43)

修士論文　要旨

ベトナム語の đã, đang, sẽ について—複文における意味・機能を中心に— …… 羽賀　千紋 (65)
中国語の量詞 “个” について— “V 个 O” 形式を中心に—…… 白　珍花 (75)
ウズベク語の-(i)b 副動詞の機能について …… 日高　晋介 (85)
フランス語とイタリア語の接続法について—思考動詞の従属節内の法選択— · 山田　怜央 (95)
愛知県小原方言の体系的文法記述…… 髙見　あずさ (107)

卒業論文　要旨

沖縄中南部方言における授受表現……内間　安希 (119)
イタリア語の空間を表わす前置詞 a, in, dentro
　―フランス語前置詞 à, en, dans との対照から― ……木村　泰歩 (127)
スウェーデン語の助動詞 vilja と未来時制 ……黒滝　恭平 (135)
ウズベク語の後置詞について……志村　紀幸 (143)
青森県津軽方言における「(ラ) サル」形式について……前田　賢輝 (151)
現代標準アラビア語の受動構文と第 VII 形動詞を用いた構文の違いとその特徴
　……松尾　愛 (159)
アイヌ語の被抱合名詞に関する一考察―千歳方言と樺太方言の対照から―
　……吉田　恵理佳 (167)
海口方言の変調について―完了アスペクトタイプの変調について―……林　仙云 (175)

第 10 号 (2014)

論文

アムドチベット語のロゴフォリックな代名詞……海老原　志穂 (3)
アショーチン語における所有表現と声調交替……大塚　行誠 (13)
ラワン語ダル方言の動詞句と動詞文……大西　秀幸 (25)
中国語の「オノマトペ＋地」について……黄　慧 (49)
フィンランド語における無主語の E 不定詞内格形……坂田　晴奈 (67)
A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan:
　with a special focus on alignment and case-marking……下地　理則 (81)
モンゴル語の接続詞 bögööd と mörtöö に関する一考察……ジンガン (107)
モンゴル語の補助動詞《oru-》の機能について……斯欽格日楽 (117)
平江塘坊客家方言研究……張　盛开 (131)
南琉球八重山黒島方言の動詞における “連体形” と “終止形”……原田　走一郎 (145)
格配列パタンを決める動詞的要素と名詞的要素―パキスタンの言語を対照として―
　……吉岡　乾 (159)

特集　名詞化

名詞化とその周辺に存在する諸問題―Malchukov(2006)の枠組みをもとにして―
　……吉岡　乾 (205)
ウズベク語の動作名詞について……日高　晋介 (211)
ブルシャスキー語の希求法不定詞とは何か……吉岡　乾 (223)
ラワン語における「名詞節＋コピュラ」構文―ラワン語に名詞述語はあるのか―
　……大西　秀幸 (235)
モンゴル語の形動詞接辞 -gʧ ―共時的な使用実態から―……山田　洋平 (251)
ニヴフ語の名詞化について……蔡　熙鏡 (263)

卒業論文　要旨

インドネシア語における重複語について……青木　淳実 (277)
フランス語の受動文について―日本語との対照から―……大平　綾香 (285)
青森県南部方言における「ッキャ」「ベ」について……大宮　舞 (293)
沖縄中南部方言の助動詞リーンの持つ受身の用法について……大山　恵利奈 (301)
日本語の時間を表す複文におけるテンス・アスペクト―トキ節の場合―…小幡　千陽 (309)
愛知県尾張方言における確認要求表現「コトナイ」について……河合　弘樹 (317)
岩手県気仙方言における可能表現について……菅野　幸 (325)
大分方言の可能表現について……キム　ジュンヒョン (333)
ナポリにおける敬語表現 lei / voi の使用の実態について……中尾　雄太郎 (341)
新ウイグル語の形容詞について……長瀬　太亮 (349)
ハワイ語の感情を表わす状態動詞……若林　由奈 (351)

第 11 号 (2015)

論文

ラワン語ダル方言の P の名詞句における格標示……大西　秀幸 (3)
「モンゴル語内モンゴル諸方言に見られる “否定＋=lee” 形式
―漢語の “了” との対照から―……山田　洋平 (15)
アイルランド語における「be＋過去分詞」構文について……山田　怜央 (31)

修士論文　要旨

カムチベット語ティンドゥ方言の記述的研究―助動詞を中心に―……才吉文毛 (51)
モンゴル語の移動動詞について―とくに直示移動動詞の観点から―
……ツェレンダブガ　ボヤンジャルガル (61)
Modern Standard Arabic と Egyptian Arabic の受動構文やそれに類する構文について
……松尾　愛 (71)

卒業論文　要旨

原形不定詞と共起する迂言的使役動詞 have の意味役割について
―使役行為に対する使役主被動者の意志性を中心に―……石川　真衣 (85)
「～ (さ) せていただく」表現について―話し手と聞き手の意識に着目して―
……岡垣　亮我 (93)
岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて……岡本　進 (101)
ハンガリー語の動詞派生辞について……酒井　悠里 (109)
インドネシア語の他動詞形成接尾辞-kan, -i について……瀧川　加奈絵 (117)
イタリア語とフランス語の受動構文について……内藤　星美 (125)
日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対照……中村　詩衣奈 (133)
ウズベク語における現在未来接辞-a / -y と現在進行接辞-yap の棲み分け
―動詞のアスペクト的性格の観点から―……西田　千花子 (141)

パラグアイのスペイン語における leísmo、laísmo について
―グアラニー語との言語接触の観点から― ……濱口　恵利加 (149)
内モンゴル語ホルチン方言の借用語について―漢語を中心に― ……ブヘ (157)
フランス語における未来表現―単純未来形と近接未来形― ……星野　加奈子 (165)
現代日本語の「たしかに」―「なるほど」と「たぶん」との比較から― ……望月　雪絵 (173)
島根県大田市方言における「終止形+ダデス」について ……森山　美紗子 (181)
モンゴル語の接尾辞-v, -laa/4, -jee / -čee について ……若松　元樹 (189)

第 12 号 (2016)

論文

特集：複他動詞構文(Ditransitive construction)とその周辺に存在する問題点
―Malchukov et al.(2010)の枠組みをもとにして― ……山田　洋平 (3)
複他動詞の意味地図 …… 山田　洋平・山田　怜央 (9)
ラワン語の格小辞の機能 …… 大西　秀幸 (23)
フィジー語の複他動詞と投擲動詞 …… 岡本　進 (31)

修士論文　要旨

鄂倫春語の指小指大表現について …… 渋谷　ときは (43)
ウイルタ語形動詞の修飾用法と名詞用法について …… 森貝　聡恵 (53)

卒業論文　要旨

ペルシア語の強勢を伴わない接尾辞-i について …… 石原　拓海 (65)
トルコ語における与格／奪格支配動詞 …… 岡田　唯 (73)
現代東アルメニア語の動詞不定形に対する格選択について …… 神田　浩輝 (81)
スペイン語における名詞句内の形容詞の位置 …… 小林　光揮 (89)
タガログ語の行為者焦点使役動詞について―日本語との対照から― …… 小林　由佳 (97)
韓国語の新語における日本語から入ってきた外来語について ……陳　陽淑 (105)
リトアニア語の状況可能を示す形式について ……鈴木　まどか (113)
朝鮮語における-i / -hi / -li / -ki および-cita 形受身文の統語的意味的特徴 ……鈴木　麻水 (121)
漢越語の使用率―日本語の漢語率との比較― ……田中　裕也 (129)
ベンガル語における目的格接辞-ke と目的語の定性有生性 ……東頭　拓也 (137)
朝鮮語延辺方言の話し言葉における-(i)ntey について ……白　蓮花 (145)
トルコ語対格の出現条件 ……橋本　直樹 (153)
バスク語の自動詞文における能格の出現条件について ……福井　夏来 (161)
ロシア語の移動動詞における接頭辞の付加可能性とその実態および傾向について
―接頭辞 iz- / vz-を中心に― ……堀尾　佑佳 (169)
ブラジルポルトガル語の対称詞について ……森田　響 (177)
分析的使役動詞 make に関する主語の有生性傾向について
―英語母語話者と日本人英語学習者の比較― ……大和　正浩 (185)

日本語の「A の B」型名詞句の英訳表現について……横田　桃子 (193)
閩語福州方言の名量詞について―統語的特徴を中心に―……劉　琴 (201)

第 13 号 (2017)

論文

ウズベク語の過去形動詞＋処格を用いた条件用法 ……日高　晋介 (3)
フィジー語の発言動詞の補文節について …… 岡本　進 (13)

修士論文　要旨

フィジー語の他動詞節と名詞抱合…… 岡本　進 (27)
南琉球宮古語池間方言の *nyaan* について …… 呉　唯 (37)
中国黒竜江大平村方言に関する音韻的研究 …… 陳　曦 (47)
フランス語の se voir+Vinf.構文について―受動表現を中心に― …… 星野　加奈子 (59)

卒業論文　要旨

広東語における疑問文形式の選択について …… 伊藤　健太郎 (71)
熊本方言における形容詞の連母音の融合について …… 奥村　雄太 (79)
日中同形語における二文字漢語についての一考察 ……金　丹 (87)
アメリカ英語における *must, have to, have got to* について …… 久保田　紫帆里 (95)
現代日本語書き言葉における外来語造語成分について…… 小出　万莉子 (103)
英語とイタリア語の定冠詞の対照研究……佐田　陸 (111)
アラビア語モロッコ方言における接尾辞 “fiː-” について ……谷山　ひかる (119)
スコットランド・ゲール語の名詞句内所有における譲渡不可能性について
……蓮田　涼 (127)
ウズベク語における接尾辞-di の未来を表す機能について……羽生田　真由 (135)
古典ラテン語の散文における名詞句の分離配置について……樋元　祥太郎 (143)
秋田県北部における語中・語尾に現れるカ行・タ行子音の有声化現象について
……平塚　元気 (151)
延辺朝鮮語における借用語について―語彙の借用を中心に―……朴　美花 (159)
ネット集団語における接尾辞「-み」の語基拡張 ……水野　みのり (167)
イタリア語の従属動詞を伴う場合の助動詞選択 ……宮田　麻衣 (175)
アイルランド語の形容詞述語文におけるコピュラと存在動詞の使い分けについて
……村社　香帆 (183)
小説の会話文における依頼表現の日西対照研究 ……谷地　萌 (191)
アイスランド語の関係節における与格の出現に関する通時的調査
―中動態と共起する場合―……渡邉　萌 (199)

第 14 号 (2018)

論文

Intransitive / transitive verb alternation in Vatulele Fijian:
within the framework of Nichols et al. (2004) ……岡本　進 (3)
長崎県五島宇久島野方方言における無声摩擦音の解釈:
音節末に/s/をみとめる音素配列規則の提案 …… 中村　京介 (13)
タタール語の形動詞を含む複合述語構文における主語人称標示…… 菱山　湧人 (27)
Impersonal Forms and their Paraphrases in Welsh …… 山田　怜央 (45)

卒業論文　要旨

AAVE における *done* 形とアメリカ標準英語における *have* + p.p.形との対照研究
…… 飯田　大貴 (71)
トルコ語の擬態を示す重複表現について―日本語における類似研究を元に―・池田　安奈 (79)
茨城県東南部地域におけるアクセントとイントネーションについて …… 植島　一輝 (87)
トルコ語 ki の導く補文節に先行する述語 …… 上杉　晃彬 (95)
日本語授受動詞の補助動詞用法における相互承接について…… 葛西　麻祐子 (103)
英語からの借用要素から構成された韓国の新造語について
―2012 年から 2016 年の単語を中心に―……金　高恩 (111)
タガログ語被行為者焦点動詞について……清水　一樹 (119)
南琉球宮古語池間方言における主題助詞=*gjaa* について……陶　天龍 (127)
ロシア語における不定詞の体―願望を表す名詞との結合について―……中尾　歩美 (135)
口語シンガポール英語における重複法について ……パトリシオ　バレラ　アルミロン (143)
タイ語における可能を表す助動詞 dây の出現環境について……東山　彩加 (151)
現代日本語における副詞「全然」について……武藤　紳介 (159)

第 15 号 (2019)

論文

西ゲルマン語の定冠詞の対照研究 ―the, der, de, de の使用実態を探る― ……佐田　陸 (3)
撒拉语是非疑问句中的 (r) u 与 (r) o 的传据性…… 原　明海 (49)
タタール語における「あるにはある」表現 …… 菱山　湧人 (59)
モンゴル語オラド方言の副動詞接辞-sAAr の機能について …… ホリロ (73)

修士論文　要旨

西フリジア語における完了形の助動詞 hawwe / wêze の選択に関する研究…… 佐田　陸 (91)
長崎県五島列島宇久島野方方言の動詞形態論 ……中村　京介 (101)
トルコ語の補助動詞-(y) Iver について……橋本　直樹 (111)

卒業論文　要旨

ベトナム語の動詞連続
―「付帯」表現における動詞句入れ替えの許容について―……尾崎　菜南 (123)

フランス語における quand 節の半過去について
　―コーパス調査に基づく結果から―……勝又　実紀 (131)
ハニ語における形容詞の連体修飾について……川嶋　圭 (139)
テモラウのトルコ語における対応形式の分析…… 紅林　初音 (147)
中国語の二音節動名兼類語について……シ　エン (155)
山梨県国中方言における動詞接辞「サル」について……髙橋　新 (163)
宮崎県日向市方言における「コッセン」について……髙橋　怜那 (171)
宮城県仙台市方言におけるテンス・アスペクトと体験性……高松　良弥 (179)
イタリア語の前置詞句における冠詞の有無について……遠山　綾香 (187)
ウズベク語における後置詞 bilan を用いた時を表す従属節について……内藤　遼 (195)
接尾辞「ぽい」の用法の拡大について……中村　真子 (203)
ノルウェー語における性・数の不一致について……西村　有美子 (211)
テ形補助動詞の相互承節可能性……服部　優花 (219)
サラール語における所有表現について……原　明海 (227)
主題標示「って」の許容度について……松前　美沙都 (235)
アラビア語カイロ方言の動詞 ʕirif の現在テンスにおける用法……了源　康平 (243)

第 16 号 (2020)

論文

チュヴァシ語の所有文における所有接辞について……菱山　湧人 (3)
西フリジア語の非人称受動に関する研究……佐田　陸 (17)

修士論文　要旨

現代モンゴル語の相互表現……エンフアムガラン　オノン (37)
モンゴル語ハルハ方言における接尾辞-jA の意味機能について
　―コーパスに基づく研究―……ナムダグ　ハグバジャブ (47)
パピアメント語における ta の機能について……パトリシオ　バレラ　アルミロン (57)
現代アイスランド語における叙述所有―無生物所有者の現れる例を中心に―…渡邉　萌 (67)

卒業論文　要旨

ポーランド語の非意図的状態構文―語順にみる特徴―……新井　みぎわ (79)
現代イギリス英語の HAVE と HAVE got について……市野　沙歩 (87)
ウルドゥー語における未来表現について……岩崎　航 (95)
ウズベク語における相互態を表すとされる接辞-(i)sh について……菊地　香穂 (103)
アラビア語カイロ方言における可能表現……下條　実紘 (111)
現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について……小林　紗佳 (119)
チェコ語名詞と日本語名詞の指小辞の対照研究……斉藤　弘樹 (127)
イタリア語における受動態の助動詞選択について……田村　絵里香 (135)
ポラ語における漢語借用語の声調について……張　元宗 (143)

ポーランド語の未来表現における動詞分類と体選択の相関……中村　夏樹 (151)
ケチュア語クスコ方言の動詞派生接尾辞-yku、-rqu について……早坂　圭太 (159)
文語アラビア語 1 形動詞第 2 語根の母音選択について……森本　瑠 (167)
英語とスペイン語の冠詞の対照研究……弓削　諒太 (175)
ウズベク語の名詞句従属部における属格の出現／非出現……ライ　リエイ (183)

第 17 号 (2021)

論文
モンゴル語の半母音 j で終わる語の奪格形……山田　洋平 (3)
モンゴル語オラド方言の小辞=jAA について―とりたての観点から― ……ホリロ (27)
Predicative Possession in Fijian……岡本　進 (49)
On the krije-passive in West Frisian……佐田　陸 (63)
Questions in Papiamentu ……パトリシオ　バレラ　アルミロン (81)
修士論文　要旨
サラール語の極性疑問標識に関する考察……原　明海 (111)
卒業論文　要旨
日本語の使役助動詞「せる」「させる」の活用の五段化の現状……阿部　義隆 (123)
標準ドイツ語における [werden＋(完了) 不定詞]:
　共起表現・コンテキスト・英語との対照の点から ……石井　真子 (131)
アラビア語カイロ方言における動詞の bi-接頭辞活用形の意味機能……石橋　弘太郎 (139)
イタリア語の前置詞 con, su, per と定冠詞の結合について ……小木曽　円香 (147)
ベトナム語の動詞助詞の生起順序に見られる意味的制約……小林　剛士 (155)
英語とフランス語の冠詞の対照研究……瀧島　菜央 (163)
メキシコスペイン語の指大辞について……東　紘生 (171)
デンマーク語の未来表現について……古屋　さくら (179)
ベトナム語の有声破裂音の音響音声学的研究 ……宮崎　哲雄 (187)

第 18 号 (2022)

論文
ウデヘ語文法……風間　伸次郎 (3)
パピアメント語の単純前置詞……パトリシオ　バレラ　アルミロン (43)
修士論文　要旨
数詞体系の理論的・記述的枠組みの考案……小林　剛士 (73)
ソロン語の補助動詞構造について……バイカル (83)
モンゴル語の存在文について―動詞 baj-と bij を対象に―……バスバヤル　ムンフダラム (93)
卒業論文　要旨
ポーランド語の接頭辞による結合価変化―od-、wy-、z-を例に―……池上　ひより (105)

東京方言における外来語アクセントの平板化 ……石山　容崇 (113)
ドイツ語におけるアスペクトを示す表現について―日本語との対照から― …井出　結子 (121)
肥前地方における当為表現の使用状況―ンバを中心として―……今村　実月 (129)
延辺朝鮮語の文末形式について……キン　コウキチ (137)
タイ語の変化を表す動詞について……作本　青依 (145)
日本語フィクションの英訳における役割語の取り扱われ方……菅谷　風太 (153)
インターネット上のインドネシア語テキスト談話における英語-インドネシア語コード
　スイッチングの形態 ……菅原　宜優 (161)
現代中国語における話題型重複表現について ……張　釈文 (169)
フランス語の包括書法 (L' ecriture inclusive) について
　―「分かち書き」に着目して―……林　裕人 (177)
タジク語とウズベク語の補助動詞の対照研究
　―タジク語サマルカンド方言に着目して― …… ファイズエワ　ザリナ (185)
イタリア語名詞と日本語名詞の指小辞の対照研究 …… ブリューワー　エマ (193)
チェコ語における所有の与格の統語的性質 ……松山芳瑛 (201)
日本語の許容形式「てもいい」とそれに対応する朝鮮語の表現……渡邊早穂 (209)

第 19 号 (2024)

論文

特集：言語類型論の諸問題に対する帰納的アプローチ
　―『語学研究所論集』特集データを活用して― …… 風間　伸次郎・山本　恭裕 (3)
アスペクトと動詞連続に関する類型論的考察 ……風間　伸次郎 (7)
自他交替とヴォイスの連続性についての類型論的考察…… 岡本　進 (19)
限定と極端のとりたての類型論:
　文構造の交替の類型論的記述と情報構造に基づく類型論的仮説 …… 小林　剛士 (31)
連体修飾に関する類型論的考察…… 小林　颯 (45)

修士論文　要旨

現代小説の会話文からみる日中の依頼表現の相違点 …… ショウ　シキン (57)

卒業論文　要旨

福岡方言の文末助詞バイ・タイの代替形式について …… 井上　紗良 (69)
インドネシア語における非能格動詞と非対格動詞の区別…… 角谷　茉耶 (77)
タミル語における関係節
　―斜格名詞句が関係節化する際にみられる制約について―…… 小林　颯 (85)
スペイン語前置詞句内における前置詞と冠詞の関係 …… 小股　花翠 (93)
広告キャッチフレーズにおける無助詞格 ……鈴木　教介 (101)
英語とポーランド語の運動の動詞における対照研究 ……中村　優恵 (109)
台湾語の補語 “tiòh 著” の機能と共起する動詞について ……難波　尚子 (117)

セッカクとワザワザの置き換えが可能な場合について……松山　結花 (125)
現代標準アラビア語の動詞語幹母音に観られる文法的・音響的な特徴……宮川　寛人 (133)
バスク語の動機を表す動名詞……吉成　奏慧 (141)

思言 東京外国語大学記述言語学論集　**第 20 号**

2025 年 2 月 22 日発行

編集・発行：　東京外国語大学　記述言語学研究室（風間伸次郎）
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
mail: kazamas@tufs.ac.jp

Edited and Published by　Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistic Papers

SHIGEN

vol. 20

Articles

The Donatory Verbs That Require the Instrumental Case to Express Given Objects in Mongolian .... AOKI Takahiro (3)
A Study on the Teaching Method for Finnish Locative Cases ..... ISHII (SAKATA) Haruna (19)
Differences in Usage of the Modern Mongolian Reciprocal Pronouns "neg negnee and neg n' negnee" ..... ENKH-AMGALAN Onon (37)
Burmese Loanwords in Tiddim Chin ..... OTSUKA Kousei (47)
Classifying Noun Incorporation in Vatulele Fijian .....OKAMOTO Susumu (73)
The Syllable Structure and Moraic Structure of Irabu Ryukyuan ..... SHIMOJI Michinori (87)
Construction and Application of the Full-Text Retrieval System for *The Secret History of the Mongols* in Digital Humanities .....JINGANG (117)
Indonesian as a Foreign Language: Suggestions from Educational Practice in Non-Major Language Courses ..... SRI Budi Lestari (125)
An analysis on the Performance script of Pingjiang Shadow Puppet Theater.....ZHANG Shengkai (143)
On the 3rd Person Possessive n' Following a Converb in Mongolian ..... NAMDAG Lkhavajav (163)
Evidentiality of Nominal predicates following epistemic modality -(u)n/-nun/-(u)l kes kathta in Korean ..... HAN Pilnam (177)
The Function of the Ablative Affix -dUxI in Solon ..... BAIGALA (199)
The Cases Required by Locative Nouns in Modern Mongolian and Their Meanings -Focusing on ömnö "south/front" and urd "south/front"-..... BASBAYAR Munkhdaram (213)
Two Possessive Constructions in Samarkand Tajik .....HISHIYAMA Yuto, FAYZIEVA Zarina (233)
Semantic Continuity of Clause Linkage between Temporal Succession and the Conditional in Uzbek .....HIDAKA Shinsuke (245)
Mongolian Verbal Form -xAAr -From a Perspective of Meaning and Formal Characteristics of Clause Linking- ..... YAMADA Yohei (263)
Basic Taste Vocabulary in Northern Pakistan..... YOSHIOKA Noboru (283)
A Global Typology of Triangular Relationship Markings .....KOBAYASHI Tsuyoshi (301)
Triangular Relationship Markings in Arabic Languages and Their Variation and History..... MIYAKAWA Hiroto (313)
Triangular Relationship Markings in South Asian Languages and Their Super-Genealogical Trends .....KOBAYASHI Hayato (323)
Triangular Relationship Markings in European Languages and Their Motivation .....ISHIBASHI Yudai (333)

Abstracts of the MA Theses

A Revalidation of Research Articles on Indonesian Discourse Particles: for Usage in Internet Text Communications .....SUGAWARA Takamasa (345)
The Verb System of Samarkand Tajik.....FAYZIEVA Zarina (355)
Resumption in Czech Relative Clauses .....MATSUYAMA Hanae (365)

Abstracts of the Graduation Papers

Current Status of Japanese Loanwords Used at Construction Sites in South Korea.....LEE Seoungyong (377)
Self and Address Terms in Vietnamese ..... ONISHI Nami (385)
A Contrastive Study on Conditional Expressions in Japanese and German..... OGITA Amika (393)
A Contrastive Study of Sound Symbolism in Japanese and Hindi..... SODA Nichi (401)
Verbal Co-occurrence and Alternative Structures of The Aspectual Functions of "VV 𠵾" in Cantonese ..... TSUNO Kaho (409)
A Study on Degree Expressions in Okinawan Japanese.....TERUKINA Momoko (417)
Agreement System between Finite Verb and Dual Nominal Phrases in Literary Inari Saami.. HASEGAWA Asaka (425)
The Genitive of Negation in Russian and the Silverstein's Hierarchy of Feature of Noun Phrase ..... HATTORI Takeru (433)
Slovenian Dual: Focusing on the Words "Parents" and "Twins", and the Features Observed in Slovenian Dialects ..... HARIMA Nozomi (441)
Sequence of Tenses in Romanian: A Corpus-based Quantitative Analysis ..... YAMASAKI Seita (449)
The Syntactic Features of the Negative Expressions "ne/en" and "niht" in Middle High German in the 13th Century ..... YUZAWA Kanon (457)
Verb Constraints on German Middle Constructions..... YOSHIOKA Aya (465)

Index of back issues..... (473)

2025
Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies / School of Language and Culture Studies
Tokyo University of Foreign Studies